（岡山製本）

大正四年五月廿五日印刷
大正四年五月廿八日發行

有朋堂文庫（非賣品）
石川雅望集

編輯兼發行者 三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者 平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所 凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所 有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

客人のよしあしいはず寅の頃送り出すも子わたしのさま　同　眞久

吉原を日の出ぬさきと急ぐのは昨日迎に來し木乃伊取　六樹園

子わたし―癸辛雑識に「余聞猟人云、凡虎将子渡水、虎先往則彪食子、則必先負彪以往彼岸、既而挈一子次至、則復挈彪以還、還則又挈一子往焉、最後始挈彪以去、蓋極意關防、惟恐食其子故也」と、これを遊女が客の鉢合せなきやうにする苦心に喩へたる也

木乃伊取―諺「木乃伊とりが木乃伊になる」

石川雅望集　終

曉の床に涙の雨ふれはつい居つゞけの川どめとなる　同　丸主

客をよくふる狐てふ傾城に威をやかしけん刻限のとら　おなじく

客人の早歸風そよめけば廊下掃除もふき廻るらし　彌壽丸

身の上を語る無心の種まきに客が涙のうるほひもよし　クハナ　音澄

蠟燭のたつとはいへど客人ののびるほどへる迎挑灯　おなじく

遊ぶ夜は契みじかき薄羽織襟のかへるも厭ふきぬ〴〵　桂樹園

おいらんの客の歸るも白川や夜舟をぞ漕ぐ名代新造　おなじく

時も早とらとなりては風よりも客をおこして歸す鳥が音　高サキ　本炭

宵の酒かわく廊下をふきのごふ頃しも水のほしき醉ざめ　升成

から臼の音づれせよと傾城の別れに泣いて嘘もつくらし　鹽部　友鶴

霜の朝酒も勸めてかへすめり間夫にかんきを受けさせぬ爲　文丸

思ふ主を間夫にとられて歸るさも雨にふらるゝ龍泉寺町　塵外樓

宵は待ち夜中は恨みそして又いつ來なんすのきぬ〴〵ぞ憂き　郡内　金英園

じれつたうおすとおさへし作病の癪にもはりのつよき花魁　同谷村　浦人

狐云々ー諺「虎の威を借る狐」

かんきー寒氣、勸氣

たらちね―親

七つ頃―前に引きたる地震の歌

まかせ―任せ、許せ

ぬか―額、額

たらちねの首尾を案じて歸る頃おやばからしいと止むる傾城　おなじく

新艘の言葉に今朝はつながれて起き出でかぬるきぬ〴〵の床　同　陽記

おらんだの錦の床に明ちかく横文字となる寢こき新造　おなじく

客人にひんとはねても見するなり大文字屋のおいらんの床　おなじく

振袖や著せん髮をや切らんと二道かけし客を待ちぶせ　見分

地震ほどゆすりおこすも七つ頃涙の雨をふらす傾城　盛砂

傾城にふられし客のかへり風はけしくおこる寅の一點　濱荻

客に身をまかせぬればか別にも又來るたねをはかる傾城　長、朝興

紅筆のあかつき歸る客人をとめてあやなす遊女の口　おなじく

米をつく音ひゞく頃お迎と障子をあけて茶屋がぬかづく　全亭

川竹のしげき郎下をふきのごふ形は流れを下す筏士　おなじく

茶屋迎くるわの春は朝霜の別れ惜しくもおきて去ぬらし　八王子　千里

見かへらぬ客に柳のもつれ絲ほぐさで歸すきぬ〴〵は憂し　同　五明

雪の夜は寅におこさでとめぬらし口舌もつもる川竹の床　おなじく

ふみ—文、踏み

子を捨つる藪—遊廓、前にも類例見ゆ

早歸いそぐ火鉢の酒の燗銚子の尻もすわりかねたり　おなじく

ことづてを頼む頃しも勝手にもふみ出したるから臼の音　おなじく

明ちかしとや打つて來る拍子木の七つにさわぐ坊主客あり　おなじく

爲になる客のかへりし其跡の床も格別あたゝかに見ゆ　柳馬

子を捨つる藪を離るゝとらの時千里を歩む心地こそすれ　エドサキ　元有

別れ行く足もおもたき寅の頃土手も千里とあゆむ客人　麟馬

刻限もとらとなりては川竹にまたも寄り添ふきぬ〲の床　强氣

米をつく音のする頃傾城の閨にもへりのたちし埋火　岡山　道の屋

傾城の著する羽織の紐のみか思ひを胸に結ぶきぬ〲　おなじく

傾城のふりてとけねば遺恨をも結びし儘の客のふんどし　利クラ　傳

おいらんの姿は風の柳にて氣のむすぼほるきぬ〲の床　イケダ　圭馬

傾城のまことはうその川舟やかへるといふを嫌ふきぬ〲　おなじく

塗板に名をとゞめたる武士客もうしろを見せて歸る吉原　同　一宗

客人に雪の膚を見せかけてあしをとめたるきぬ〲の床　同　長房

もの廊下鳶―遊客の酔うて廊下などを歩くこと

なく子なすしたひ來まして―萬葉集の句に取る

立待の月―陰曆十七日の月

筆つむし―きりぎりす

かしら―頭、上刻

駕のみか傾城にさへ振るゝはおあしつかはぬ罰にやあるらん　同　箕居園夫成

傾城の氣性ばかりか米つきのきねの音迄たかゝう聞ゆる　同ヒラカタ　平潟園朝雍

あけさらぬ夜も七つぞとなく子なすしたひ來まして送る傾城　道列

横雲の袖をわかちつ山形の星をおかして歸る吉原　おなじく

刻限はとらが石なる思ひにて地ばなれつらききぬ〴〵の床　園僕

うかれ女が夜ごと勤の手枕にしびれをきらすきぬ〴〵の床　賤丸

今宵しもふりぬる雪は鹽花か思へば一夜からき目を見つ　松壽園鷹人

うかれ女にそら行く雲ときらはるゝ時にや腹を立待の月　三扇亭末廣

客人の蟹と見られし腹立に樂書すれば筆つむし鳴く　綱人

とけて寢し床のわかれを惜みつゝ氷のむすぶ横雲の帶　おなじく

米をつく音に力のぬけたるは臼のへそにもあかつきの鐘　友賴

吉原は意氣とはりこの寅の時もてあそぶやう首をふるやう　貫也

拍子木でとらのかしらは打ちながら猫をばさする寢ずの番人　おなじく

川竹のもとに別れて行く水をはやしと止むる袖のしがらみ　獨樂堂

一物も無し—六祖「菩提本非樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃」との神秀大師の偈に和して悟達せり、こゝは無一文に言ひ掛く

留袖新造—振新のやゝ年たけて振袖を留めたる姉女郎に仕ふる傍客を取るに至れる

ふる里にふられて歸る客人の袖に錦の夜著のうつり香　おなじく

米をつく音に起き出てかへり客まだぬか星のとれぬ頃から　おなじく

夜の雪と共にふられたうかれ女に冷き金を捨てしくやしさ　イカホ　年重

花魁の親里迄もきくの苗其一もとをほりて歸らん　同　一樹園

傾城の花にやどりて過してき一夜は蝶の夢にぞありける　おなじく

雪ならばこゞえん物を傾城にふられてあつくなる床の内　下村　丸人

迎駕ましをねだればはりこみて遲しとあたまふる寅の刻　水垣

今しはと袖をとらへておいらんの一口腹にしむる時酒　高サキ　影法師

刻限のとら住む野邊もいとはねど末は千里の長き約束　畑持

手拂の客のかへさを米ふみて悟ればたしか一物も無し　ギフ　歌笑

持こしの酒のあたまと歸るさの足もと重き里のきぬ〴〵　おなじく

吉原の寅の時には風よりもゆすりて起す米つきの音　多餘理

名代の袂を引きし其客をふりもぎつたる留袖新造　洒落柿

吉原も同じかはいの明烏郎下蔦は何と泣くらん　エチゴシロネ　彌佐平

おす一押すに里詞のおすを掛く

据風呂の支度するころ懐をあらうて歸る客人もあり　同　松友

けだ物のとらの時ぞと別れ惜むうその皮迄金になる里　同　千柳亭

早がへり見かへる方にうしろ髪ひかるゝは風の柳なりけり　おなじく

指折れば七つの鐘にむつ言もつきせぬ内の別つらしな　紫色成

戸のあかぬ内に歸ると勘定に財布の尻もたゝく客人　トチ木　櫻露堂

刻限のとらの威をかる新造の狐も客を化しこそすれ　高サキ　松花堂

鮟鱇のつるし切にもせん氣色ふられてよほどふくれたる客　同　茂葉

打とけて猶わかれうし中々に背中合せし背がよし原　おなじく

歸らんと身づくろひする客を又流させんとや湯の支度する　同　兎卜

ふられたと思ひながらも手を出して馬鹿らしうおす傾城の癪　松成

河岸見世はみな懐中もから尻の馬を引きてぞ歸る客人　部馬

川竹の流れに住めば蟹に似ていぬてふ客を股で挾みぬ　犬馬

空もはやきぬ〴〵近く赤蔦やとむる手足のからむ傾城　おなじく

鐵漿の溝を左に曉のかねつける頃かへる客人　織方

ふすま―衾、臥す間
たつか弓―立つ、手束弓
御詫―くど〲しく言ふこと、御託宣に掛く

きぬ〲に別を惜む時酒はよほど涙にふえたつけざし　サノ　豈主

いそがしく來て新造とねに臥してとらには起きて歸る店者　桐生　志歌久

花魁の雪の肌とは里に來てふられし人もいひはやすらん　藤岡　友由

傾城の錦の床の山かづら横にたなびく客人の帶　春影

腹だつを絲瓜ともせぬ花魁はかゝとなるべき人やあるらん　砂守

見かへりの柳わがねん道中といふ名もあかで送る別路　催馬

歸らねば深うつもると知りながら雪に又寢の夢の吉原　おなじく

口舌して寢る夜は別れをし鳥のふすまはあらぬ傾城の床　ウツノミヤ　眞鶴

傾城にふられて腹もたつか弓ひきとめもせぬきぬ〲の袖　浮洲

傾城の床に來ぬ夜は通ふ神の何か御詫をあけてまします　山ガタ　志解住

待たせられ腹だつ客の枕もと齒ぎしりをして寢入る名代　仙ダイ　千路堂

きぬ〲の床を涙にうるほせば早ふきのごふ廊下板の間　同　千歌林

鳥よりはや起き出すは吉原の床の比翼の鳥がねの頃　同　直輔

空泣につゐだまされてきぬ〲の頃は迷の雲やおこらん　同　唐琴

ふり―振り、降り

やみ雲を客のおこすは傾城のふりもやうなる故にやありけん　吉井 行一康

傾城の來ぬ夜は七つうつ頃にむつとなりたる客の癇癪　且平

いそがせしゆふべの駕を夢に見て又ゆすられつ茶屋が迎に　おなじく

話しいす事があるよと抱附いて離しいせぬと止むるきぬぐ〵　おなじく

別告ぐる七つの鐘にあそび等がうそも一夜のつきじまひなり　尾、雙蝶園

ねぶさうに送る柳の絲の目に客も見かへる大門の外　信州松代 薫

白露のたまぐ〵かよふ色客は消ゆる思ひの起別せり　同 平安堂

比翼とも契りし客を見おくれば鳥肌とならん朝の寒さに　同 月登

早歸よべきらせてし指よりも爪先いたき土手の雪道　同 吾窓軒登

待ちぶせを恐れてかへる刻限もとらの尾を踏む大門の口　同 大西洞眞並

別際山吹色の無心をものみこませたり煮花すゝめて　同 清志

はかなしや千里をかけてあふ夜半もとらの時とて早歸客　同 砂糖あまき

三蒲團四つにだかれて寢し耳へ聞くは七つの淺草の鐘　松唐一紅改 柏亭是美

内の首尾つまらぬ事を案じるにつまるのもうし歸り刻限　おなじく

入山の星—前出
にせ—似せ、二世

高くなる宿の敷居に天の戸もあけぬからとく歸る客人　江戸　保佳

鼻毛をばよみつくされて歸る時くさめの出づる土手の朝風　雅雄

全盛をつくしゝ夢は見果ててもまだ目のさめぬ客人の顏　おなじく

脇差は茶屋にあづけて來しかども腰の重きぬ〴〵の床　おなじく

名ごり惜む連子に見れば入る月も雲の袖をば離れかねたり　おなじく

お歸りと茶屋が迎はうしろ髪跡から引ける横雲の帶　尾、眞澄

あけ告ぐる烏もやがて鳴く頃と羽づくろひする早がへり客　同　影住

米をつく音が寢耳へ入山の星もしらけし曉のそら　おなじく

逢方ににせといはれて銀煙管明日も流しと思ふ客人　若女

吉原に聞ゆる鐘の外に又ねぶけのつきし名代新造　裏行

折あしくふられて管を巻煎餅朝がほわるく歸る客人　長女

內の首尾氣づかふ客は刻限のとらの尾を踏む思ひなるらん　甲ノ素后改　五紘樓久麿

傾城のねぐら離れてかごの中鳥肌になる早がへり客　小枝

別れうし起出てむすぶ帶よりも長き夜あかぬ傾城の床　所澤　柿禁衞門

のべ—野邊、延紙（杉原紙の小きもの）

夕顔の云々—光源氏、乳母の病を訪ひに行きて其隣家の垣に咲ける夕顔の花を折り、其家の女（夕顔）より歌書きたる扇を貰ひし事、源氏物語に出づ

御見—御見參、逢瀨

名代をとらの時とて七つ目に床をばさるの早がへり客　おなじく

ふられしと腹たつ客をあやどりて手管や横にねかす賤機　同　丈廣

ふられては心の鬼の角はえてにほん堤をもどる侘しさ　同　近道

掃除する廊下のちりは刻限のとら臥すのべの紙屑ばかり　清記改三餘亭　彷徨伊登滿

七つぞと聞いてくるわの米つきもつきはじめたる淺草の鐘　おなじく

吉原に米つく音を夕顔の花にゆかりの扇屋で聞く　クハナ　蛤丁樓

閨にかけし藥罐の湯ほど客人もぬるくなりたるきぬ〴〵の床　同　燕子樓

あちら向いて寢た花魁の揚代も尻くらひにはさせぬ吉原　おなじく

ともし火の影もかすかに七つ頃きえも入りたき里の別路　ワカ山　居鶴

色容の起請にきりし指よりもあけの別れやいたく苦しき　浦見女

わかれ路に又の御見と握る手の外にもしめる行燈の影　同　薫

鬼の住む里のわかれに客人もふどししめたる寅の刻限　山ガタ　枝折

淺草の鐘は物かは客よりもつかれて眠る名代新造　おなじく

呉竹のふし見丁なる客人の歸りはやはりとらの時頃　おなじく

ゆふき—結ふ、結城

袖の梅—藥の名

み—身、箕

傾城が別れに泣きし顏のみか廊下もふきて廻る若衆　同　員照

いろ客の寢みだれ髮をかき撫でてゆふきの羽織きする傾城　尾、雅流園

ふられつゝ拔け出た夜著も口あいて恨いひたき客人の顏　同　龜丸

酒毒けす袖の梅よりいやな客ふり出して醉さまさせてけり　氏家　文車

川竹の中に住むてふ女郎とてとらの時にも客を送れり　カジカ澤　花咲

色客を惜む別の煙草よりむせかへりぬるきぬ〴〵の床　ヌマ田　南湖

刻限のとら臥す藪の竹村にねぐらはなるゝ吉原雀　八王子　重丸

傾城にふられて胸をもやす頃勝手は風呂を焚附ける音　羽風

川竹のしげる中から一散にもどりの駕の飛ぶ寅の刻　おなじく

勝手には米をつくころ客人のふられて床のしらけたる見ゆ　クハナ　千枝丸

ふられては腹たつ浪の荒くして梶とりかぬる新造もあり　同　秀丸

見世はりし宵の鈴には引きかへてふられて歸る曉の客　同　蔭久

のみ過ぎし酒も頭痛になる頃は客の額の皺も橫雲　同　一圓窓

癇癪をおこして腹を立臼に米つく音やみをふるふなる　仙ダイ　明盆

いにしへの柳云—古へ、別れの際楊柳を結びし事をいふ
うらみ—恨み、裏

七草云々—前に註す
石尤風—石氏の女、尤郎の婦となり、夫出でて歸らざるを恨み臨終に際し大風となりて商賈の遠行を阻まんといへる故事
千里—諺「虎は千里を走る」

から臼の音する頃は夕顔のつるほどからみつきしきぬ〳〵　アハ　右大盡
いにしへの柳ばかりか別路に又のあふせとむすぶ胸紐　おなじく
抓つたりたゝかれし身の其跡のうらみ色なるきぬ〳〵の空　おなじく
待ぶせをしてとらへたる坊主客すみ染にする顔ぞをかしき　同　猿人
おいらんにふられて歸る客の顔青筋のたつ横雲の空　おなじく
米をつく音に廓を出て見れば土手に糠だつ星と提灯　アヒヅ　水莖園
豆腐屋のはや起きる頃豆ならで鼾引出す新造もあり　おなじく
あの鐘は七草なづなまだ鳥の渡らぬさきと里を出る客　同　文女
色客のわかれ惜めば刻限のとらをうしとや思ふ傾城　白川　竹盛
刻限をとらとし聞けば君留める石尤風もおこせとや思ふ　おなじく
傾城が別れの涙ふかぬ間にふきのごふなり廓下一面　同　塚原松盛
寅の刻にかへりをいそぐ客人は土手八丁を千里かと思ふ　同　算
うつり香を喜び歸る客人に又つきかゝるあかつきの鐘　同　西樹
刻限は七つと聞いてたましひも取られて歸る金性の客　同妓　理也

よね―妓、米

とらに云々―大礒の虎が曾我祐成に別れし涙變じて、雨となれりとて、五月二十八日の雨を、虎が雨、又は虎が涙雨といふ
檀特山―釋迦の六年間佛法を修行せる處也、雪山ともいふ
糠と呼ぶ星―糠星、小さき星

長樂のむかしは知らず吉原の花につきたる客人のかね　おなじく

下紐もとかねど客のそばに寢て夢はしきりにむすぶ名代　おなじく

客人のなごりを惜む頃とてや櫻も露に濡るゝ吉原　おなじく

早下に米つく音はともかくもしらけてつらききぬ〴〵の空　歌種

猫さへも通る廊下に足跡の梅ふき散らす里の朝風　おなじく

から臼の音する頃は吉原のよねも疲れてねぶりたる見ゆ　同　起乘

全盛にのぼりてあそぶ隣にはふられてのぼる癇癪の蟲　おなじく

湯の支度する頃わかれ惜みつゝ胸も互にわきかへるなり　同　小雪

刻限のとらに別るゝ花魁の袖も涙の雨に濡らしつ　同　白翁

檀特山の昔もかくや極樂の里のわかれも惜むきぬ〴〵　同　早丸

比翼ぞと腕にとめしおのが名に別るゝもうし鷄の聲　同　咲穗

糠と呼ぶ星は消えつゝつく米も座敷も共にしらむきぬ〴〵　同　九十九

きぬ〴〵のみやげにやせん夜著の袖に顏を入れたる妹が一言　同　桐下駄花雄

簪に呼ぶ松葉屋の傾城にふられて客のあたまをぞかく　同　撒連

睡を花栄の睡といふ也

よじやう—餘伊、豫譲、晋の豫譲、主の智伯の讐にして而も寛容なる義子の衣を、劔を抜いて之を撃ちし故事を採る

つとめて—勤めて、早朝

つと—褁、土産

坊主客に酒を勸めて此世からなき手を出して止むるきぬ〲　　ワカ山　太記

うるさしな又も寢耳に水々と名代おこす酔ざめの客　　江又　保住

巣ばなれはお客にさせて高みから別を告ぐるきぬ〲の鳥　　高サキ　壽女

簞笥から別れを惜しむ羽織より又引出した宵のくり言　　三友

九、

惣花をちらせし客も床の内ひゞく別れの鐘は惜みつ　　クハナ　千枝丸

又お出なんしといへばふき拭ふ郎下にもあとをつけて行く客　　仙ダイ　唐琴

朝風に吹きはらへどもうしろ髪ひかるゝやうな見かへり柳　　雅雄

八、

思はずも客の衣をさきにけり盡きぬよじやうの今朝の別に　　アハ　六々園

から臼の音のする頃骨も身も粉にくだけつゝ歸る客人　　おなじく

別れをば惜む二人の外に又目をすりてゐる寢こき新造　　おなじく

傾城につとめられたる客人もつとめておきて歸る吉原　　おなじく

田舎への咄みやげと遊ぶ客につとのみ見せて寢たる傾城　　おなじく

寅時

十五、
北方に美人と聞えし傾城のりふじん思ふ無理どめもしつ　　酒落柿

十三、
きぬ〴〵の寒さにいしたわが下著きてくんなとは又の約束　　クハナ　燕子樓
くたかけの聲にお近い内によと一つたゝいてせなを遣りつゝ　　且平

十二、
さらばへと著する羽織の襟迄もかへすはいとど辛ききぬ〴〵　　アハ　物早麿
から臼の音もろともにふみ出す足もおもたき里のきぬ〴〵　　同　猿人

十一、
大門へおくる迄にて花魁はかごとばかりのいとま乞せり　　甲、市川　眞河
海棠の花ほど睡る名代に春の心を客もうごかす　　ギフ　奇笑

十、

りふじん―理不盡、李夫人、漢武帝、延年を愛す、一日延年舞歌して曰く、「北方有佳人、絶世而獨立、一顧傾人城」云々」佳人とは李夫人を指す
くたかけ―鷄
せな―背、色客、伊勢物語「夜が明けばきつにはめなんくたかけのまだきになきてせなをやりぬる」
かごと―はんの申譯の意、駕籠
海棠云々―海棠の花の貌を睡るといひ、美人の

寅時―午前四時
まだきに―早きに
つとめて―早朝
まろ―私

寅時

枕上にひゞく鐘の音は、淺草寺のにやなどたどるほどに、例の中宿がもとなる男の、燈ともして、屏風のはざまより顏さし入れて、「御むかへにまう來つ」といふ。「まだきに急がせ給ふべしやは」と臥しながらいふ聲、いと眠げなり。「否、つとめて某どのの御館に用ありて召させ給ふなり。おそくば便なからん」といひつゝ起き出づれば、「御館に出でさせ給はんよりは、北の方の御いさめこそ恐しう思すらめ。疾くいそがせ給へ」などいふも、いと妬げなる尻目なり。とかくして、ほそどのの板敷踏みならしつゝ出でて去ぬ。「まろは、胸いたければおくり聞えず」といへば、「ゆゝしき事、湯まゐりて早うさわやぎ給へ」など、打見かへりつゝいふも、淺くはあらぬ心なるべし。

隅田川すみ侘びぬらしうかれ女のうきせながらに長ふる身は

石川雅望

新艘―新造

行灯と共に起請をかきたててあかるさ恥ぢんかはす枕に　白川　濟世

今更に歸るもうしの刻なれや宵には連に引かれ來つれど　同　曉庵

床の海これもながれの身なればや葦鹿のやうに寢入る新艘　六樹園

ほとゝぎす—時鳥は鶯の古巣に産卵し、鶯は我子と思ひて之を哺育すといふ話に取る

春日野云々—古今「春日野の飛火の野もり出て見よ今いくかありて若菜摘みてん」

みさを—操、水棹

つばめ—鍔、燕

丁固—呉の人、松腹上に生ぜしと夢みし話あり

闇の夜のうしといひつゝ早がへり跡に心ぞひかれがちなる　クリハシ　清丸

身の油へらす頃しも寢ず番がかきたてゝつぐ行灯の皿　桂樹園

五十両の夜具も出來ぬ傾城が壹分ほどきる指の先にて　盛砂

ほとゝぎす聞く傾城の親里も世を鶯の小梅あたりか　文丸

春日野にあらねど土手の早がへり飛ぶ火の見ゆる駕の提灯　奥部　友鶴

黒髪を切りてつなぐは舟ならで客にみさををたつる傾城　ヌマ田　風鈴音人

からくりの絲一筋にくる客にかはりて出づる里の名代　同　一柳亭其水

人目をも忍ぶの客の迎とて夜ぶかに來ぬる編笠の茶屋　同　清風

百両の身請の金のつばめには腰の柳もなびく傾城　八王子　市住

馬道の馬より早く店者が飛ばせて歸る吉原の駕　同　五明

宵の酒丁固は知らず醉さめて夢かと思ふ嶋臺の松　同　丸主

ふられたる床に夜の目を寢ず番の宿直申すもうしとこそ聞け　郡内　金英園

逢方のかげだに見せぬ行灯へ寢ずが油をつぎの間へ來る　同谷邑　二見浦人

新造も目をさますほどこがねをばおこせと客にねだる傾城　同　眞久

小夜ふけて女のなく音聞ゆるは化けてあがりし色容の床　南亭

傾城の指きる色の青つきり銚子にたゞよく胸のひや酒　彌壽丸

行末は手鍋さげてと小夜ふけてうまく食するうかれ女の口　賤丸

歸れとてまことの鳥の鳴く頃にふられて越える大門の關　扇丁ヤ　仙禽舍鶴村

歸れとて云々ー范成大「杜鵑終勸不如歸」に、孟嘗君の函谷關の故事を採る

行水とことわられたる客人はせなか合せに汗をながしつ　見分

早がへりしばしとねぶる客人をつき驚かす淺草の鐘　小枝

名代は尻のおもたき石地藏もてぬお客のそばに眠れり　清記改三餘亭　彷徨片天間

硯ぶた引四過ぎし座敷へもあたまの黑きねずみ番の來る　雅雄

澤蟹のめしたくわざも知らずして横に行くとはにくき傾城　おなじく

草刈のうしの時にや吹きすさぶ按摩の笛の聲の聞ゆる　おなじく

紙花を食ふ未に來た客もはや七つ目のうしにかへりつ　水垣

うしみつの襟へ冷き手を入れてびつくりさする化のかは竹　高サキ　影法師

かく計ふるとは惡きやつの時かへつて內の首尾ぞよし原　同　本炭

ふた親の首尾を案じて早歸り同じやみなる大恩寺前　クリハシ　潜

きしやう—起請、氣性

牛の刀は云々—論語「割鷄焉用牛刀」

いひかはす互のきしやう表してとうしんせうの咄までする　おなじく

寝ずの番油をつぎて廻る頃とろりともせず待つぞ苦しき　甲、市川　眞河

名代のねぶたさと客の待遠と一駄につけて見んうしの刻　同　常道

手の内へ客をもみこむえて物は床に手づまのおほき傾城　若女

寝ず番のつぐ油より客人をたらしかけたる里の傾城　裏行

寝ず番の來てつぎかへる蠟燭のしん實らしき傾城のうそ　長女

大象をとむる手管に傾城のきりては客をつなぐ髪筋　歩

刻限の牛の刀は用ひねど中をさかるゝ早鷄の聲　強氣

早がへり告げるもにくし抱いた手にしめてやりたき一番の鷄　麟馬

正眞の小判をやれば傾城のまことらしくも二世を契れり　犬馬

鳴く鳥の肌となりたる寒き夜に又あたゝめて歸す色客　呑吉

ふられては寝もせず床におき物の客の姿や撫牛の時　升成

寝ず番のつぐ油より客人はたらされてゐる傾城の床　春人

開運のうしの時なる身受沙汰ふとんに客の背を撫でてきく　道列

風になる云々―地震の諺に「九は病五七は雨に四つひでり六八ならば風と知るべし」

函谷―孟嘗君の客の函谷關の鷄鳴の故事

二朱一分―遊女の階級に伴ふ揚代の高下をいふ

まだ早うごんすと袖を引きとめし時に歸るが花のよし原　友頼

ふられたる客の新造しかるのも八つあたりとぞ思ふ刻限　繁

あたゝめし玉子の樣な客人をかへすは惜しき鳥の鳴く頃　春影

化物の出るころ客をねせつけて横にゆきたる女郎おそろし　獨樂堂

風になる地震かと思ふ八つ時分ふすまがたつく名代の床　おなじく

小夜深みけびざうすなり女郎等が客の穴をもほじりながらに　おなじく

引四もうち腹だちて歸らうといふのも古いやつの拍子木　おなじく

親の目を忍びて來る客人のむかひもむべよあみ笠の茶屋　浮洲

世をすてし人ならなくに傾城はよに出でんとて髪やきるらし　吉井　行康

ともしびに時をはかりて油鶴なく頃ついでまはる寢ず番　山形　枝折

鳥の音に里のさわぎもやゝ果てて今やかんこの太鼓さへひく　江又　保住

部屋々々へ鳥の鳴く頃函谷のせきばらひして見まふ寢ず番　おなじく

二朱一分けぢめはあれど客人をたらすは同じ八百の嘘　おなじく

無理をいふ客の機嫌をとりの聲嫌な奴ぢやと思ひながらも　仙ダイ　明益

爪に火をともす—吝嗇の喩

いも—遊女、芋

肘笠—肘を頭上に上げて雨を凌ぐこと

軒端の荻—源氏、中川の家に宿り、集へる空蝉と思ひ違へて軒端荻と契る事源氏物語「空蝉」巻に出づ

かみついて來る—十月は神無月とて、神々は皆出雲大神へ旅立つといふ

傾城の口車には客人も乗せられて寢るうし三つの頃　トチ木　高丸

爪に火をともす親仁が目をぬいて指きる迄のまことをぞ見る　同　家住

蛇つかふ氣を客人にのまれじと口舌にはりも見する傾城　同　霞紋亭舞鶴

此里のいもがめをほる心より八つがしらまで夜をふかしけり　部馬

花魁の床をばおりて又一度そら誓文に乗るもはづかし　仙ノ　千歌林

別れ路に背たゝかれて又たゝく我家の門も氣にかゝる客　同　千錦堂

賣りし身の孝も破りて切る指はふかうはまりし間夫の心中　同　直輔

傾城のかはす枕の肘笠は巫山の夢の雨もよひかも　おなじく

忍ばせし間夫を知られて花魁の胸にも釘をうつ丑の時　同　千柳亭

名代の軒端の荻も承知にて猶人がらのなつかしき客　おなじく

傾城に地面も藏もいれ髪になるほど切つてもらふ客人　松成

吉原は外とちがうて十月もかみついてくる大盡の客　桐生　志歌久

花魁の客をまよはす丑の時毛物とやみん天鵞絨の夜著　ヌマタ　南湖

あとへのみ心ひかれんあけぬ間といそぐ迎ひもうしの刻頃　江戸サキ　無人

正燈寺—紅葉に名あり

闇暗を云々—諺「暗闇から牛を引き出す」

かね言—誓言

むつかしき客の梶とる名代の今宵ばかりは舟もこがれず　おなじく

はね起きて鶏も時をぞつぐる頃口舌しられて早がへり客　藤テカ　友由

女房に何といひわけ正燈寺もみぢはくらき早がへり客　高サキ　壽女

もてて寝る床にかへりし枕より耳にはいたくきゝし鶏　同　一亭何喜人

傾城もすいたお客を歸さじとなき出す鳥の聲もとめたき　同　繁昌

大象のむかしは知らず傾城のかみを切りてぞつなぐ色客　同　兎卜

寝たふりで狸をすれば傾城の狐も床の穴へ入りつ　同　松花堂

暗闇を引出すやうに大門を心のこして歸るうし三つ　同　かる人

おいらんの座敷に残る伽羅の香の鼻を通すと見る丑の時　イカホ　年重

乗りてゐる駕の外にも傾城に起請かゝせて歸る嬉しさ　おなじく

梅ぼしのすいな女郎の手管にてつまみ咄の床のうまさよ　同　一樹園

刻限の丑の時分もいう〳〵と小袖の裾をひき歩く君　同　安丸

山吹のかね言にのみ切る指のさきにみのなきあだし心か　同　葭業

床の内小言も二つ三つ蒲團いく度も胸をなで牛の時　南菓園賓生

何方へかきて行くらん歸り駕里のあたりはまだ夜ふかきに　おなじく

名代にねぶいさかりの新造は舟こぎ出す床の海づら　織方

叶へてと客に願ひもうしの時寢かして置いてなづる傾城　おなじく

傾城の起請も假名のはしり書是に追ひつく嬉しさぞ無き　松代　薫

雲となり雨とならんといひしより客は虚空にのほる吉原　おなじく

寢ず番のまはれる頃は隣から隣へ聲をつぐ油とり　おなじく

空泣におとす涙の露よりも客をころりとさせし傾城　おなじく

傾城の誓をたつる指先もしかと結ぶのかみかけて切る　おなじく

指や髮きりし刃物は客人のさびつく事のはじめなりけり　おなじく

傾城の來るか〳〵と待つ床に出で來る物は欠なりけり　おなじく

かはゆさのあまる女郎に百倍のにくみをうけしきぬ〴〵の鷄　おなじく

早歸あとへひかるゝ衣紋坂かへり東のうしみつの頃　おなじく

毛筋ほども疑はれじと傾城の髮まで切りて見する心中　同　好魚

舟底の枕のだいに指きりて客をふかみへ欲むる傾城　秀馬

きめぐり逢瀬うれしき玉川の水」

何方へ云々—拾遺集「何方に鳴きて行くらん時鳥よどの渡りのまだ夜ふかきに」

かみ—神、紙

かはゆさの云々—諺「かはゆさ餘つてにくさ百倍」

つなぎ云々―諺「女の髪には大象も繋がれる」

雲となり云々―巫山の夢の故事前に註す

にはたづみ―潦、地上の溜り水

とり―酉の市

井出の云々―井出下帯、一度別れし男女の再びめぐり合ひて契を結ぶこと、玉葉集「ときかへし井出の下帯行

傾城の黒髪きりて紋日迄つなぎとめたる客は大象　有明

此里の按摩咄に手もありて夜半の口舌をもみ直したり　長、期興

川竹の流の身とてよる客の心を舟とうかす花魁　小田ハラ道連

きぬ〴〵を惜みて間夫と寝ながらも早く年季の明るのを待つ　素直

吉原に夢の浮橋なかば道かよるは茶屋のむかひなりけり　三帖岩國

客帳の星も稀なる色客に小袖を貸してあぐるおいらん　おなじく

夜もふけて秋葉燈籠さるほどに扨も水道尻のあかるさ　且平

雲となり雨となるとの睦言にそら言ばかりかたる傾城　おなじく

梅のその難波ではなき三つぶとん敷寝の床に指をこそきれ　ギフ歌笑

鳴く鳥のはたゝく音ともろともにはれ〴〵急ぐ早歸客　おなじく

心中にきりし所はさもなくて内の小指にとがめられぬる　二字守

朧夜の土手をさびしくにはたづみ飛々かへる地廻の唄　催馬

縫物のわざにはうとき傾城のいとはり強くもつが吉原　おなじく

時雨ぬるもみぢもとりの大一座床の山でもふりみふらずみ　おなじく

あちこちに女郎は井出のまはし客行廻り來てとくや下紐　米守

城は云々―「傾城」を捩る

越王云々―越王勾践美女の西施を呉王夫差に献じ、夫差之を愛して遂に社稷を傾くるに至る、これ勾践の計なり、こゝは西施に質紙を掛く

くらう―聞う、

善勢

善光寺参―諺「牛に引かれて善光寺参り」

城はまだ傾かねども吉原に武士もはだかとなる床の中　おなじく

つれ添はば手鍋もさげつ小料理もせんとて指を切りし傾城　圭馬

吉原のつとめもうしや丑の時客につきあふ床の睦言　同　長房

指のみか髪をきらせて今更にまけられもせぬ客の言の葉　おなじく

ふられたる身はさながらに浅草と背中合の吉原の客　多餘理

おいらんが本間に客をたらす頃油をつぎに入るねず番　おなじく

床のもやう客の心をとりだすきはたらきありと見ゆる傾城　酒落柿

越王の手だてをかりの約束にせいしをおくる客も呉服屋　おなじく

あかるしと恥らふ床に無心聞きて客がくらうはさせぬ傾城　おなじく

傾城が夜半の口舌のないじやくりしやくりし人もありし色容　おなじく

善光寺参はせねど丑の時またもひかるよ明日の約束　三友

蚊屋に入りし蚊よりも客に見出れて焼くさへつらき腕の忍名　柳馬

傾城のきりたる指は跡のため其時いたむ客のふところ　おなじく

傾城の起請書く頃聲たててなくやうそをも月の夜烏　全亭

點じて之を放ち遂に燕軍を破れり
立田山―紅葉の名所
釘を云々―丑三つの呪ひの釘を撰る
長小便―諺「牛の小便十八町」
烏も云々―前に註す
八つのかしら―八つの上刻、八頭の大蛇
綠のはやし―盜賊の異名

刻限のうしになるかは知らずして坊主の客ものせる傾城　おなじく

夜ぶかきに歸ると腹を立田山ふられて顏に紅葉する客　甲フ　素后

いつの頃又來なんすと客人に釘を打つたる丑三つの床　松蔭

時も今うしぞと待つに傾城の長小便もほどのある物　成丈

色客と二世を契るか床の內後生でおすといふ聲のする　クハナ　燕子樓

起請にも血をあやなして色客にあかき心を見する傾城　おなじく

烏もまだ渡らぬ先に早がへり今朝七草のうち急ぎつゝ　舟手樓仕安

醉ざめにはや歸るとて手叩けば水もつ月の格子よりさす　舟酒屋綱人

黒髪をきる髪そりのいなづまに落ちかゝる櫛や山の端の月　おなじく

丑三つにあはせて客も傾城も櫻も首をのべてねぶるや　猪牙也

大蛇ほどのみたる酒の醉さめて八つのかしらに水このむ客　岡山　廣孝

うしの時一足飛にはや歸る客を乘するも四つ足の駕　おなじく

燈火もほそめになれば油よりねぶけさしたるねずの番の顏　おなじく

花魁の髪は綠のはやしとて客はたましひ奪れにけり　イケ田　陽記

指喰れて―源氏物語「帚木卷」に、嫉妬深き女の夫の指に喰ひ附きたる話あり

とこよ―床、常世の長鳴鳥（鷄の異名）

岩にせかるゝ云云―崇德院「瀨を早み岩にせかるゝ瀧川のわれても末にあはんとぞ思ふ」

かけたか―「てつぺんかけたか」は時鳥の鳴聲

田單が云々―齊の田單、兵刃を牛の角に束ね、脂を灌ぎし葦を尾に束ねて火を

蛸ならで吸附けて寝る傾城と客の手足も八つの刻限　ワカ山　浦見女

ふられつゝ茶屋の迎の提灯に叉てらされし早歸客　同　薫

物怨じする傾城と口舌して指喰れていたく懲りけり　おなじく

北國のとこよにつらき別路は長鳴鳥の聲のにくさよ　おなじく

青柳の髮まできりし誓には客の心や先なびくらん　尾、　雙蝶園

世帶もつ末のかために傾城も手鍋をさぐる閨のかん酒　おなじく

ひそやかにあふや二階もとめられて岩にせかるゝ瀧川が客　おなじく

ともしびもかゝげつくして起き居れば丑になりぬる夜廻の聲　おなじく

傾城も無心の謎をかけたかとなく借金の山時鳥　クハナ　一圓窓

髮をきり指をきる頃部屋々々へつぎにまはれる油蠟燭　同　千枝丸

傾城の指ばかりかは部屋々々にきつて廻れる蠟燭のしん　同　秀丸

柳てふみどりの髮を傾城のなびくといへる誓にぞ切る　おなじく

田單がうしの時とて其尻に火のつくやうにせく早がへり　おなじく

うそをつく傾城のみかきぬ〴〵はにくいやつなる鷄の聲　同　蔭久

小夜ふけて云々—藤原實方「斯くとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思を」

長雨の云々—源氏物語「帚木卷」に雨夜品定あり

くまのの牛王云云—熊野牛王に誓ふ事、前に註す

血をわけて起請を書きし其上はあかの他人と思ふなよ君　同妓　理也

手管にてきりたる髪は客人を又引きよする綱とこそなれ　同　治

三つ蒲團の上にふられてゐる時はうしとぞ見ゆる床の置物　羽風

草木さへ睡るにねぬは傾城にのろくなりたる丑みつの頃　おなじく

名代をつゝき出して蟹にくる床にはさみの手ある傾城　形言

はげ頭しらがも床の内にては金の威光と共にひからす　氏家　文車

小夜ふけて夜半は鼾のさし艾誰も知らじとけす入黒子　唯仲

定めなき客も時雨に相床やてらすは年增ふるは新造　尾ヽ　眞澄

傾城をころすつもりで計らずも命まうけし腕のほり物　犬山　影住

噓いうて客に涎をたらさする勤もうしや丑みつの頃　おなじく

間夫と寢る夜半は咄も長雨のふりにし客の品定する　ワカ山　太記

田舍客のぶするな奴をなく鳥のあばら骨ぞと思ふ傾城　おなじく

鐘にぬるうしの時ごろ指きりて紙に迄血をぬれる傾城　おなじく

手鍋さげ水もくまのの牛王にてのくべからずと誓ふ傾城　おなじく

葭町―かげまの居りし處

葭町へかよひなんしと坊主客につい尻むけてねぬる傾城　クハナ　猿人

花魁にあきはこねども懐の淋しくなりし居つゞけの客　同　おなじく

傾城がおもひきるとの髪の毛につながる客は思ひきられず　カジカ澤　花咲

諺の金のかはりか鉛もて作つたやうな名代新造　甲フ　多理雄

灰吹をやたら叩くは吹殼と共にはたいた客にやあるらん　尾ヽ　雅流園

身の油とられてよわる客人の枕もとにもねぶる行燈　同　龜丸

宿に居る女房に角も生えぬべし傾城と寝るうしみつの時　アヒヅ　水蓬園

觀念のねんにもあらずねんの内一枚ならで七枚起請　おなじく

傾城の狂言をかきのめす時附ける廊下の拍子木の音　おなじく

數へぬる指は愚よきりかへてねんをも入れん間夫の爲には　同　文の屋高良

刻限のうしにあやかる客人はかきのめされてよだれ流しつ　八王子　秦重丸

ひかされて通ひ廓のうかれ女に牛ほどよだれ流しぬる客　濱荻

刻限のうしよりのろくなる客の家の妻には角も生ひなん　白川　竹盛

口舌してあそびも角をはやすなり此吉原の丑の時には　同　西樹

みす―簾、みす紙

老聃―老子牛に乘りて函谷關を越えし故事に掛く

地にあらば云々―唐の玄宗皇帝楊貴妃と夫婦の誓をせし故事、長恨歌「在レ天作二比翼鳥一、在レ地願爲二連理枝一」

かけろ―雞の鳴聲「斷けろ」を掛く

鳥のわたらぬ先―七種粥は、六日の夕より七菜を俎に載せて、「七くさなづな唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬ先に」といふ歌を歌ひつゝ叩きて七日の朝粥に和して食ふ也

香爐峯の雪の膚をめづるなりみすと名のある紙をかゝげて　おなじく

老聃ののるてふうしの刻限に下紐の關こゆる客人　おなじく

のつて來た駕ばかりかは寢間にてもやはり四手となれる吉原　おなじく

地にあらば木にもならうと契りたる其新造の年も十八　おなじく

鳥にまでならうと契る傾城の詞はうそと知らぬ客人　おなじく

刻限のうしの歩にあやかれど早歸をもとむる花魁　同　季彙

早歸心ひかれて傾城にはなれうしとも思ふ頃かな　同　起彙

家つ鳥かけろと鳴けば客も又かごに玉子の早がへりする　同　白翁

刻限のうしといふ頃かへるにも戀の重荷を背負ふ客人　同　小雪

よき客が明日もくるぞとねず番が油さす火に出來る丁子屋　同　歌種

内はさぞかゝが悋氣の角文字といそぎて客は歸るうし三つ　同　左大盡

七種のその若菜屋の客ぞとて鳥のわたらぬ先に歸れり　同　右大盡

つよみほど抱きしめては大盡とちよと〳〵を合す傾城　おなじく

風呂はまだわかさぬ内に背むけてすれ〳〵になる花魁の床　おなじく

しそく—紙燭、四足

羽ならべんと契る—「比翼連理の契」

ふかう—深う、不孝

ふさん—臥さんに巫山を掛く、楚の襄王、夢に巫山の神女と會したる故事を採る

香爐峯の雪—白樂天「香爐峯雪撥簾看」

くるま—來る間、車、

傾城の蚊を燒く時もうしなれや蚊屋にしそくの影の見ゆるは　　おなじく

枕込の臺屋の鍋は疾くひけてちん〱鴨の床の睦言　　雅雄

人間をおそるゝ間夫が宵のほど化けてあがりて忍ぶ丑三つ　　山形　枝折

八、

鳳凰の衣裳を著たる傾城と羽ならべんと契る客人　　アハ　六々園

ほとゝぎすたゞ一聲に月形の櫛も落ちたる花魁の部屋　　おなじく

世の人の夢むすぶころ客人の下紐といて寢たる傾城　　おなじく

蕎麥賣の風鈴のみか口舌して舌をならせる客人もあり　　おなじく

孝行に身をうりながらなぞて斯く人にはふかう契る傾城　　おなじく

傾城の柳の腰をいだきては日迄も絲となれる客人　　おなじく

傾城と一夜ふさんの夢ならで雲となり又雨となる客　　おなじく

いよ染のもすそかゝげて香爐峯の雪の膚をめづる客人　　おなじく

ころ〱と鼾をかきて花魁のくるまを客に待たす名代　　おなじく

からやまと唐犬びたひふじ額ひとつによるの閨の睦言　　おなじく

うしとみし夜ー百人一首、藤原清輔「ながらへばまだ此頃やしのばれん憂しと見し世ぞ今は戀しき」

丑時

十三、

空寝する客に煙草を吹きかけて狸をいぶす松葉屋の床　尾、雙蝶園

ふくる夜や琴ひきやめて客人の背中に爪をたつる傾城　雅雄

十二、

鳴る鐘も歌がるたとる下の句もうしとみし夜の名代の床　催馬

拜みんす後生ざんすの言の葉に蓮葉ならで乘るも極樂　高サキ 茂葉

十、

東方いまだ明けぬに歸るあわて客のさかさま衣裳笑ふ唐歌　ワカ山 太記

歸さじとすがる女郎をすかしつゝ又くる〳〵と結ぶ上帶　クハナ 音澄

まだ腹にあかぬ別か鍋燒の鳥もなくなるきぬ〴〵の空　信州松代 薫

ねず番の油をつぎに廻る頃目を皿にして居るまはし客　全亭

指はまだきらぬ口舌の床の内つみたる爪をはなせとぞいふ　獨樂堂

ひぢもち—肘を張ること
しや頭—「しや」は罵辭

つくろふ—撫す

宵より待ちつけ居れど、ふと影をだに見せず。高麗唐よりわたせる名玉の如く、我をば綿あつき衾にくゝみ置きて、とり扱ふ者もなし。惡しとも惡し。これをも忍ぶべくんば、いづれをか忍ぶべからざらん。此家の主こゝに率て來、對面していふべき事あり」と、ひぢもちいかめしくしてのゝしる。男、「怠々しき事、しばしのどめさせ給へ。おもとに聞ゆべく」といひて、立ちて行く。「おのれ何處へか迯ぐる、しや頭打割りてん」といひざま立ちかゝるほどに、あそび來て、「何事をか宣ふ、氣ののぼりて苦しければ、しばし彼處にてつくろふとて、うつぶし伏して侍り。さな腹立たせ給ひそ」といひつゝ、手を袖に入れて肩のほどいさゝか抓みたれば、さばかりたけ〴〵しくはやりたるものの、俄になえ〳〵と折れて、笑顔つくりて、額に手をあてて、「わづらひ給へる事は知らで申しゝなり、許い給へ」といふも聲ふるへて、いとあまえたる面もちなり。さて引かれて屛風のうちに入りぬ。あはれやう〳〵樣々なる心々、おろかなる筆には書きとりがたくや。

鹽屋の煙云々―新古今集「立ち昇る鹽屋の煙うら風に靡くを神の心ともがな」
山川の云々―古今集「底ひなき淵やは騷ぐ山川の淺き瀬にこそあだ波は立て」
思へどえこそ―古今「大幣のひく手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ」
誰がまことをか―古今「僞と思ふものから今更に誰が誠をか我は頼まむ」
舌だみて―言葉訛りて
むく〳〵し―氣味惡し
なにがし―拙者
かたき―相手
さぶるこ―遊女

丑時

かみしも皆しづまりぬ。雲井をわたる雁の聲も、所がらにやあはれに聞えなさるゝ。唐猫のねう〳〵と鳴くにも、誰かは起きあかすべくとぞ覺ゆる。されど猶寢もやらで夜一夜うち語らふ人もあり、或は鹽屋の煙風になびくをうらみ、又山川のあさき瀬をくねるなどとり〴〵なり。あやにくに、客人の二三人來合ひたるは、せんすべなければ、例の「妹だつ人を出して、あへしらはす。「思へどえこそ」など、惡きことをさへ言ふめり。或は熊野の神にちかひて、誓紙に血をあえて取らせつるを、誰がまことをかと喜ぶ男もあるを、たけなる髮をおし切りてやれるを、嬉しとだにも見ざるにや、鬘ながらにたえぬるも見えたる。早うより田舍にやしなはれて、舌だみてものいふ男の、夜中ともいはず、手うち叩きて、「男ども疾く來」といふ聲、いとむく〳〵し。番の男來て、かしこまれば、居丈高うなりて叫びいへるは、「なにがしこそ殿のみうちに在りても名ある弓とりなれ、然るに今宵いみじき恥見たり。まづ此かたきとするさぶるこは、いづち去にたる。

甘酒を賣る頃うまく床の内すゝり泣して見する傾城　同　平花庵

初會から打とけ語る子の時に食ひつかれしぞ身の毒となる　同　兎卜

片手では四つ兩手では九つの引に小指の無いやつを買ふ　六樹園

を出す、誓を立つる時に之の護符を飲めば其度毎に此社の烏一羽死し、後起請を違ふる時は其人血を吐きて死すと云へり

ろ―絽、繒

縫針はせぬ花魁の膝の上はりを目にもつつま戀の猫　　おなじく

吉原にこもれる鬼の腕を今按摩がつかむ羅城門川岸　　甲、シホへ　友鶴

賣れあまる女郎のみかは蛤の聲もふけ行く引四つのかね　　見分

盃のもつれし後もおいらんの癪をおさへに來る按摩取　　イカホ　柳芳

床花のその山吹の色男井出の下帶までもとかせつ　　高サキ　茂葉

九つを四つといふなる吉原は噓でかためし大門の關　　同　影法師

摩せてし按摩歸して寢んとすれば背中を向けしあそびぞ憂き　　同　本炭

まはしあるねずみの刻に傾城は客のふところ出入ぞする　　トチ木　高丸

枕もと雙六盤の名代やふられてひとりねの時の客　　栗々法師

傾城とわが子の時や羨みしよび出したる屋根の戀猫　　裏行

あひ方にひかれ廓にねの時や子の日に名ある松葉屋の客　　長女

客と寢し枕にちかく聲立てて咄の骨もくらふ飼猫　　原田　深寢父

拍子木の打つてかはつて夢とのみくらす世界のちがふ引四つ　　三、　廬山人

新造は閨の屏風にかたびらのろを引つかけて夜舟こぎ出す　　高サキ　松花堂

江戸節―大薩摩節より分れたる俗曲の一種

ひけ四つは云々―吉原の四つは世間の九つ　道哲庵―土手にありし庵寺

はぎ―脛、袴

熊野牛王の云々―熊野の早玉神社の境內に八咫烏を祀れる社ありて、其社より烏を畫ける護符

來ぬ女郎まつの內さへくるしげに一人でうなる客の江戸節　獨樂堂

甘酒を賣る聲きけば傾城も一夜にうまくなれて吉原　おなじく

おしのきく遣手が下知に仲居ども禿をすしにつけて寢かせり　おなじく

小夜ふけて廊下を步くのら猫のねずに追はるゝ引の拍子木　道列

ひけ四つは世間の時にあはぬとて道哲庵のわたりさびしき　全亭

賣聲のうまきしたぢの言の葉や首尾の夜蕎麥にのびる客人　小田ハラ　道連

座敷にて口たゝいたる歸るさにお神樂蕎麥を太鼓等も食ふ　長、　紀豐

かしましくひく鐵棒はふられたる胸に燃えたつ火の用心か　曉丸

引四の頃からさきは松ばかりあらし殘しておく臺の物　七日市　傳々樓

醉どれて床にふするの客人を女郎がはぎにつゝむねの時　岡山　廣孝

あだ口も日本堤にことさへぐからぞめき等が歸る子の時　おなじく

吉原にうそを月夜の時鳥熊野牛王の血を吐いて鳴く　イケダ　陽記

傾城の淚のごひし袖のみかおもてもしめる引四の頃　おなじく

駿河からこゝにうつしゝ吉原に三國一とひさぐ甘酒　桂樹園

天下る云々―前に註したる佛典の一小却の故事

菖蒲葺く―五月の節句也

かねまきに―金撒きに、鐘巻きに（蛇になりし清姫の故事）

同社―講中
むろ―室

三味線をかじりしまうてねの時は見世もそろ〳〵引四のかね　成丈

親の目をぬすみくるわに寢て聞けば泥坊猫のこゝに來る聲　おなじく

舟底の枕並べてこがれよる客の梶とる情あきうど　柳馬

天下る少女が癪のいはほをば里の按摩や撫でへらすらん　クリハシ 潜

賽の目の壹分ありなば雙六の京町よりはもどらじものを　砂守

くり出す連子の戸をも引四にかけ南蠻の蕎麥賣の聲　鈍々亭

中の丁俄はひけて時ぶれの廊下をまはる拍子木の音　おなじく

菖蒲葺く軒の匂ひも丁子屋のむねかけてなく初郭公　紀樂人

刻限ももはや子の日の遊女のはら〳〵引ける松葉屋の見世　トチキ 櫻露堂

女房は蛇になるとても吉原へかねまきに行く小夜中の客　高サキ 歌留人

吉原の闇をば誰も知らざりき月人といふ君のあればか　おなじく

川竹の露の情は夢なれやむすぶ間もなき井出の下紐　麟馬

灰吹と一人殘りてはしたなきあそびも見世を引く煙草盆　友穎

淺草の不二の同社は今宵しもむろにしてねん吉原の里　三友

おあし—足、錢

はり—女郎の張りに角力の張りを掛く

よしの—吉野に言ひ掛く

あらすゞし生絹の蚊帳にねの時や新造禿があふぐ扇屋　同　千歌林

けんばんの女藝者をかへす後こちらも二人くんでねの刻　おなじく

時鳥聞きつゝ國の親に似ぬよい花魁と床にねの時　おなじく

おいらんと床に口舌の小夜中にそらでなき出す初時鳥　同　繁路

刻限も鼠になれば賣れ殘る女郎も見世を引いて行くなり　同　松友

上つたり下りたりひとり屋根ふきとなる刻限は九つ梯子　同　愛雄

一盃をば八文字とは禿からおあし覺ゆる里の甘酒　同　直輔

時鳥聞いておくれと客人にそら泣をするたはれ女の床　呑吉

かうはりの強き女郎と子の時によりかゝられて客も倒しつ　犬馬

小松屋の女郎も店を引くからに初子の時といふにやあるらん　江戸サキ　元有

傾城ははやねの刻の床にきけばうつ拍子木も腹を合せつ　甲フ　虎千

ちりめんの皺のよりたる親仁客ふはりと夜具の無心にぞのる　小枝

戸の外にあそび等も皆客人の首へかひなをさしてねの時　吉井　行康

客人をよしのあしのと傾城のいはぬ色なる夜半の床花　おなじく

風よりも―「虎うそぶけば風起る」の捩り

思ひ出す噂も時のねずみなきまた爪びきにかじる新内　　升成

三味線もひけ四つ頃の忍びこま爪かきならす猫の妻乞　　おなじく

風よりもそらねをおこす川竹の里に住むなる虎猫の聲　　且平

吉原の餅つく夜半は二階迄かちん／＼とひゞく拍子木　　おなじく

諸人に猫なで聲のおいらんは目元にはりも見ゆる子の時　　アハ　咲穂

かごならで見世のしまひは親方のかつぎ物なるあぶれ傾城　　イカホ　一樹園

おそなへのやうな膚の傾城に取附いてゐる子の時の客　　同　端澄

呼ぶ口はよしや酢くなれ夏の夜にあまけを見せてひさぐ甘酒　　同　蔦蔓道

來ぬ客を待つ傾城の帶もはやときおくれたる引四つの頃　　おなじく

ものゝふの利かぬきしやうか魂の九つ過の廓通は　　同　安丸

錢なしは引四つ迄もひやかして暖まるのは土手の甘酒　　おなじく

ぬけて來る廊下の隅の鉢肴舌を出してなく猫の聲　　仙フ　千錦堂

床の内みにくき紙の出づる頃あくる侘しといふも吉原　　同　千柳亭

ひけ四つの鐘にさわぎの花ちりてみのいる事になる床の内　　同　千路堂

甲子―大黒天の祭日

一夜に出來し―富士山は一夜に出來しとの傳說を採る

鬼と思ふ客にはむねをもやす頃火の用心をふれる鐵棒　呉竹亭直成

大黒に福をいのれば花くるゝ客も折よく甲子の時　上、山子田　里遠

きの字屋が臺と濱屋が岡持に廊下の番をする引四つ　琴松堂

舟底の枕ならべて醉どれの梶もとりつゝ共にねの刻　水垣

夜櫻やこくうに散つた惣花をもらうて茶屋もねに歸るらん　催馬

全盛の花も十年の春過ぎて今日故鄕のねに歸る駕　おなじく

客人も横にころりと子の時は夜見世を引ける春の小松屋　織方

新造ののぞく額の富士見えて一夜に出來し甘酒の聲　おなじく

俄雨ふられた客の醉ざめになるほどさびし引四のかね　おなじく

玉子うり歸る客とも摩合うてもみに入り込む夜の按摩とり　秀馬

打なびく間夫の來ぬ夜の癪ならんはりを按摩にたのむ傾城　馬ヂカ　友由

此里の金にはつまるならひとてのばすもをかし引四のかね　小ハダ　繁喜

大黒をまつる子待にまつ客の思はぬかみを伴うて來る　おなじく

のびて來る客の外にも此里へ跡をひいたる蕎麥賣の聲　春道

玉藻ほどけはひて客をだませるは狐の尾なる丸つの頃　同　千枝丸
（狐の尾云々―金毛九尾の狐、玉藻前の縁語）

客をたらす廓へ來る蕎麥賣の其風鈴も舌出してゐる　おなじく

傾城を抱いて夢かと思ふらん腹に生ひたる松葉屋の客　同　秀丸
（腹に生ひたる―丁固、松樹の腹上に生ずと夢見し故事に掛く）

乳の下をさぐれる客に無心てふ玉をとらんとはかる傾城　おなじく
（乳の下を云々―玉取の傳説を振る）

年月の廻るもおそき勤の身たゞ世を宇治のお茶ひき女郎　安戸　方仕

かよふ神地がみ末社もある里はお神樂蕎麥の音もするなり　松代　吾意軒月益
（末社―幇間）

見世引けて戸をさす頃は色客をしめよせて寢る傾城もあり　同　溪流亭淸志

簪もふかせてしまふ引頃は客もうつゝをぬかす床中　おなじく

空言をいうて女郎もかける頃それより上をなく郭公　同　薫
（かける―だます、翔ける）

傾城の床の海へと身をなげて首だけはまる夜半の睦言　寶馬

盃もすむ子の時のあそびには松の大夫も床へ引かまし　群馬
（松の大夫―松の位の大夫、子日の小松引を掛く）

引込は寢て吉原に振袖のきづまも客もとらぬ新造　德馬
（引込、振袖―引込新造、振袖新造、共に前に註す）

心さへひけ四つ頃は約束の客まつ蟲の鐵棒の音　春影

引四を知らせくるわの鐵棒はくつわに同じ音ぞ聞ゆる　笠人
（くつわ―轡屋、遊女屋のこと）

火車—香車、即ち遣手

三枚の駕—三人にて舁く駕

一かた—一方、一肩

判—小判

著かざりし夜見世も引けてたちぬひのつぎ合せなる姉妹女郎　おなじく

ひけ過ぎてのり込む客に新造の夜舟こぎ出す伏見丁河岸　酒落柿

鬼の住む里の苦界に火車の責ある吉原にひける鐵棒　おなじく

按摩より一座のもめる客人は女郎のかたのはりの強きか　おなじく

勝手にはかた附ける頃傾城が二階に嘘を並べたてぬる　おなじく

三枚の駕を飛ばせて引過に一かたならず通ひ來る客　おなじく

内藝者花の外にもよろこぶは寢るひまもらふ九つのかね　タハナ　音澄

引過は蛙を友のつれ節に土手をぞ歸る地廻の唄　八王子　丸主

判の桐里にちるてふ引過は吉原町も秋の夕ぐれ　おなじく

茶屋におく脇差ならでやう〳〵と魂も此床で落附く　おなじく

月すこし蝙蝠ならぬ扇屋の客も飛び來る引四つ手駕　おなじく

正月は客もかざりの松葉屋に福引出してあそぶ引頃　おなじく

引頃は帶をも質に遣手衆にかくして間夫をあけて子の時　五明

所がら荷ひ歩きて川竹の一夜になれし甘酒を賣る　一圓窓

うつの山—宇津山の名物十團子に掛く

はり—針、梁

嫁の君—鼠の異名に掛く

二階には今拍子木をうつの山門は團子のとをさして寝ん　おなじく

花魁のよき衣のみか所がら蕎麥の夜鷹もうちかけの汁　おなじく

一二町素見する間に夏の夜は店清掻もひけ四つとなる　形言

傾城のむねから癪をもみ下げて按摩もはりの高い吉原　仙ダイ　近道

末は誰が嫁の君ぞよ傾城の子の時ごろにねず泣もする　山ガタ　枝折

琴ならで見世もいさみの鐵棒も引けや〳〵と下知の拍子木　同　松の屋繁住

蕎麥賣の聲さへほそき引頃にきれじと誓ふ床の睦言　同　榮枝

心中にあらぬさきから吉原の按摩は指をぬくやうにする　江又　水霞

鬼の住む所がらとて按摩さへ夜な〳〵人をつかんでぞ食ふ　同　御代住

遊女が門を呼び行く甘酒はこれも一夜のねかし物なり　クハナ　燕子樓

おのが目の緣になるとも知らずしてねぶる禿にざるゝ若猫　おなじく

賣物にかざれる花のあそび等は入相ならぬ引四つに散る　彙敦

拍子木もくらはす頃に吉原を手前でうつて廻る蕎麥賣　多餘理

かんざしを後光とうつす盃と宗旨ちがひの醴も賣る　おなじく

星―細見の星を掛く、呼出しは細見記に入山形に二つ星なる事前にいへる如し
よね―米、遊女
かね―鐘、金
烏の子―卵　空泣に云々―孟嘗君が客鶏の鳴聲を眞似て深夜に函谷關を開かしめし故事に掛く

花魁のしるしの星をいたゞいて雌を呼び出しに通ふ戀猫　ワカ山　太紀
雁とともに飛ばせて行くや息杖のにほん堤を引四手駕　同　居鶴
手に入れてもむ大盡を按摩とりつかみ叩くぞをかしかりける　同　薫
小夜ふけて甘酒賣の來る頃になれにしよねに暖められけり　おなじく
長廊下うつ拍子木の音のみかかねのなる木の花魁もあり　おなじく
傾城に金の無心を子の時にかじりかけたる色客もあり　おなじく
烏の子は客にくはせて空泣にあけはなしたる下紐の關　雅雄
ふられては枕も一つ秋の夜と同じ鼻毛の長き客人　尾、　尋亭員就
物日前小判の耳をさし出していつの無心も聞きわける客　おなじく
時の數も九つならん女郎のかく起請にぬけた客の魂　犬山　影住
木のやうなかたいお客もつい折れて膚の雪に寢ぬる吉原　おなじく
刻限も鼠の時となりぬれば見世を引きこむ吉原の里　おなじく
今頃は二布の幕やあくならん二階にならす拍子木の音　ギフ　歌笑
浪うちし勝手の酒の干潟には女郎も今や見世を引汐　おなじく

部屋持、壁、籬―何れも遊女屋の階級
野分―秋の暴風

はり―張り、針

引四に土手や田町の夜鷹蕎麥つかみ取する椋鳥が錢　カジカ澤　花咲
おいらんの雪のはだへの下紐もとくるは閨に花の咲く頃　羽風
西川岸の床にふられてやみ雲をおこす背中は龍のほり物　おなじく
部屋持も壁も籬も野分ほど皆ねさせたる里の引四　アハ　友之亭
大江戸の戌亥にあたる里に來てねにも歸らぬ居つゞけの客　濱荻
見世もひけ勝手もなべてねの時に三味線かじる音も聞ゆる　産者改　文庫庵鍵主
拍子木のうつ引四つに五丁町今大門をしめて九つ　おなじく
時鳥鳴く一聲の吉原やもちつと後をひけ四つの頃　八王子　重丸
數ふれば指もひとりねするはうしふられし夜半の九つの鐘　尾、　雙蝶園
引四つで氣をもむ人もある中に肩をもまんと按摩歩きつ　白川　竹盛
引四つを鬪いての後は人通されても賣れる土手の蕎麥賣　おなじく
傾城にうつゝぬかせし其頃にそとで甘いと呼ぶ醴屋　おなじく
傾城に姿かはれど按摩とり是もはりもて通る吉原　同　員照
傾城の泣くを惡しと時鳥そら鳴きわたる里のをかしさ　同　其葉

孫悟空の猿—支那小説の西遊記に詳し

かち—褐（かち色の名）は播磨國飾磨郡より染め出せり

かきたた—時鳥の異名の「てつぺんかけたか」に言ひ掛く

ねう〳〵と猫も鳴くなり傾城も鼠のやうに見世をひく頃　同　花の屋春里

よい客と爪をかくして首玉を入れて無心は猫なでの聲　同　鳩杖丸十九

ひけ四つは拍子木のみかもゝ迄も打合せたる傾城の床　同　五穀大事左大盡

口舌にも胸をもやせば吉原は火の用心と呼べる鐵棒　同　針業右大盡

吉原へ賣り來るもむべ甘酒は同じ一夜の寢かし物とて　同　おなじく

三味線は膝をおろして寢たる頃爪とぐ猫の琴をならしつ　同　猿人

もろこしの君と寢し夜を羨むか虎毛の猫もつま戀ふる聲　おなじく

鬼すだく里なればとて按摩等も客をつかみてくらふ世わたり　おなじく

孫悟空の猿にかも似し醉どれが耳にはひらぬ鐵棒の音　尾、雅流園

傾城も工面よかれと三面の大黑まつる甲子の夜半　おなじく

見世ひくと早三味線は音たえてその革になる猫ぞ鳴くなる　同　龜丸

ひそまりて客もあそびも子の日にや引けよ〳〵と告る松葉屋　甲、市川　眞河

屏風ひきていかなる事かしかま渇かちと聞きしは引の拍子木　おなじく

花魁の空泣やめば時鳥客を手管にかけたかと鳴く　同　常道

ひけ—彈けに引を掛く、夜の十二時を中びけといひ、一時を大びけといふ

四つ乳—猫の皮にて張りたる三味線の乳房の痕の四つあらはれたるをいふ

鬼の住む里—前に註す
鐵棒—夜廻り

ね—子、音

こけら—屋根板、魚の鱗に掛く

拍子木も咄の邪魔よ肌と肌ときの合ひし客と寝る夜は　アヒヅ　水莖園

三味線のねの時に寝ず酒のみて藝者にも跡をひけといふ客　おなじく

傾城の裏約束をつなぎぬる折しも高く蕎麥賣の聲　同　深根

客とりて寝るはねの日の松葉屋に引き殘されし顔あはれなり　同　文女

戀猫の聲する頃にしめ合うて四つ乳となりし客人もあり　アハ　六よ園

抱いて寝る細腰のみか吉原は賣りに來るも青柳の鮓　おなじく

十六になる新造と寝たる頃二八の蕎麥の賣聲もしつ　おなじく

吉原はげに鬼の住む里なれや時々ひゞく鐵棒の音　おなじく

梓弓ひけ四つといふ頃も猶やの字に帶をむすぶ藝者等　おなじく

方角の子といふ頃に傾城を北の方ともめづる客人　おなじく

賣りに來る甘酒のみか身請迄一夜にうまく出來し傾城　同痣藝櫻 岡雅政　百々皺連

三味線や太鼓の外に刻限のねをきかせたる引四の鐘　同　起彙

賣りに來る鮓の外にも吉原の屋根にこけらをむしる戀猫　同　早丸

麹にてつくるゆかりか客人もねさする頃に甘酒の聲　同　季彙

九つ—子の時
十三—十三絃

ひじき—海草の鹿尾菜（ヒジキ）に「曝らす」を掛く
けがれ—月經

子時

十三、
里は四つよそは九つ十三の琴の音もよき花魁の部屋　アハ　六々園

十二、
火打箱ほどな女郎の部屋々々をかち／＼打つてまはる拍子木　錢成

十、
撫牛と三つの蒲團に寢る客の鼻にかうより通す遊女　クリハシ玉のや改　鶯の宿潛

九つのよい拍子木のきも合ひて初會ながらも帶を時酒　仙ダイ　明金

蕎麥賣の聲さゆる頃床の内も二八の妹につながれし客　株戸衆敦

九、
惣菜の荒布のみかは客のなき女郎はひとり袖をひじきも　甲フ　衣紋亭

通ふ神も知らぬけがれは傾城のひの用心をさつしやりませう　淸記

八、

子時—午後十二時
欞戸—棧（サン）の落し戸
かみ—雷
欞子—菓子鉢の類
折敷—食膳
合子—今の塗椀の如くにて蓋のあるもの
高杯—足ある食器
はらとり—按腹

子時

鼓を打つ事、子午は九つとこそ延喜の式には記したれ。さるを此處もとにては、拍子木を四つぞ打つなる。此音にあはせて、格子の中なるあそびども、はら〳〵と立ちて往ぬ。此時欞戸をさし、格子の中なるへだての障子をも開くるになん。この音なひ、こなたかなた一つ時なれば、いみじく響き合ひて、かみのなるにやとさへ驚かれぬ。廚にては、欞子、折敷、合子、高坏の類、洗ひのごひて取りをさめなどす。客人せぬ女ばら、童など、皆ふしどに入りて臥す。たゞ番の男のみ一人起き居て、時々奥と口と見めぐりて、拍子木うち歩く。大路には、鐵杖のやうなる物ふり鳴しつゝ、「火あやふし」など呼びつゝ過ぎ行く。さては、はらとりの盲法師、蕎麥むぎ賣る男の聲のみ、大路の方に聞えて、行きかふ人もをさ〳〵見えずなりぬ。

ねー寝、子の時

花魁の顔のやうなと詞にもつやを見せたるむき玉子うり　同　釜足

鳴物の道具の外に金持を太鼓持等がはやす吉原　同　月花卯時

げに花の吉原なりと賣りに來る鮓も生姜の色紙短冊　同　猿人

かしましき太鼓の聲にけたれてやねよとの鐘を聞かぬ吉原　六樹園

こはだ—小鰭、肌

ひのもと、から—日の本、火の元、唐、豆腐のから

傾城の床に入る頃ぴつたりとこはだをしめし鮓賣も來つ　原田　鶴栖

客人がへらせる夜半の手水鉢又水をます玉子屋も來つ　同　深寢父

寢たふりで店をもぬけて息子等は身を空蟬の吉原通ひ　クハナ　眞澄

しめやかになる頃花をはづみ客又一さかり騷ぐ藝者等　おなじく

四つの鐘はやつけかしと禿等が待つ間もおそく鮓賣の來る　甲フ　素后

刻限のゐのしゝよりも傾城はすかぬ客をば振向もせじ　白川　算

傾城の夜食を食ふ口々に客の噂とはき出すもあり　同　西樹

舟底の枕かはして客人の心の梶をとれる傾城　同　曉庵

ゐの刻に歸らんとすれば抱附いて振向く事もさせぬうかれ女　アヒヅ　水莖園

もてたのを手柄にするや鬼こもる廓に床の山入をして　同　呉竹深根

切見世の路次を照せるひのもとへ呼れてからの鮓も賣るらん　甲シホベ　友鶴

あちらへとさそへる風に吉原の座敷の花をちらす鐘四つ　同市川　眞河

歸るてふ客の出船を蕎麥よりもつなぐ廓に玉子賣るらし　アハ　季兼

あたゝかに添寢やすらん傾城の夜食に腹も春の吉原　同　起兼

うら—浦、裏

在原・業平、古今集の序に業平を評して「心あまりありて言葉足らず」といへり

ねの日—子、正月子日の小松引を掛く

やつらかな床はまはせど花魁のはりや見すると心おかるゝ　同石マキ　錦枝園路人

まはしたる床の枕は二見潟うらの遊は又おもしろや　同　千歌林

在原の床をいそげと言の葉のたらざる客やゐなかなるらん　同　醫道業好

舟底の枕ならべし床のうら千鳥も客についてゐるの刻　水垣

儘ならぬこれも勤の九月蚊屋持せてやるも質のかりがね　升成

吉原や屛風を見ても奢れよとまきちらしたる金砂子かも　小枝

夜食にも菊燈臺をてらしつゝ禿がすゑし蝶足の膳　ウツノミヤ　眞鶴

床まはす時の鐘にはさもなくて無心の金に客のうろつく　サノ　跐主

夜食くふ禿の簪のあげおろししかる遣手のむねにつかへつ　初音

傾城の顏の肌なる玉子とて是さへ賣れてしまふ四つ時　仙ダイ　折輔

いと長く土手八丁を通り來て聲をくり出す青柳の鮓　同　近道

色容の見かへる心なきなどと臥するの時の床の睦言　イケ田　陽記

四つになれば客もねの日や松葉屋の門に引いたる鮓賣の聲　おなじく

傾城の二十日の月をめづる頃ゐなかの客は床いそぎしつ　圭馬

たてぬき—縦横、意地を立て通す

うらかた—占ひ

ゐ—藺、亥の時

ふけひのうら—更け、裏、吹飯の浦(和泉國)

ゐなか—田舍、亥中

座禪豆—黒豆を煮て甘き味をつけたるもの

まじり—中店の妓樓

大盡の錦の衾うらやまんたゞたてぬきに素見のみして　長、朝興

傾城の狐古しと笑ふらん狼もののたぬき寢入を　同　英

床に入りて聞けば連理の枝豆や比翼の鳥の玉子賣る聲　全亭

十、

簪のうらかたしつゝ客待てば時も疊のゐにぞなりぬる　文丸

八、

初夜過ぎぬ少しふけひのうらならばなどか鶴屋へ登ざるべき　おなじく

鮓は舟玉子は籠で大門へおしてくるわの夜半ぞ賑ふ　曉丸

鐘四つの亥からは跡へぞめき等のねにかへる氣の見えぬ吉原　おなじく

色客の外にもこれはちぎるらん比翼連子に枝豆を食ふ　ギフ　歌笑

君にのみ情をかうと打ち割つてきかすも軒に玉子賣る聲　持旁

まはしたる床の錦のまばゆくてゐなかの客は目をや廻さん　仙フ　千柳亭

傾城の夜食の菜は座禪豆客はあぐらで待つ床の内　同　唐琴

玉子賣鮓賣る聲のいろ〳〵とまじりの見世は夜食まかなふ　同　眞豐

局見世—部屋持女郎の見世
千兩—「千兩で大門をうつ」
兵庫—兵庫髷
から子—唐子髷

局見世路次の隈はさもなくて淺草紙ぞ四つ切りにする　おなじく
間夫と客かさなる夜半の上草履義理と人目をかね四つの頃　おなじく
按摩とる頃に名染の客の來て座敷もかたの如くもめたり　おなじく
惣花のかね四つ過の床入に太鼓末社もちりて行くらし　見分
千兩のかね四つなれや吉原の大門口は拍子木でうつ　灘丸
傾城は夜ごとにうそをつき嶋や髮は兵庫に顏は辨天　濱荻
定式の硯ぶたとや笑はれん見世にのこりし川竹もあり　盛砂
狐罠うかれて客がさわぐ内そつと夜食にぬける傾城　おなじく
睦言にいつはり多き傾城も床は本間に先とらせたり　雅雄
踊りたる座敷はひけて掛聲のやつとことつて寢さす客人　おなじく
客人に聞えぬやうにさへづるやから子の禿郎下はしりて　おなじく
水道の水にそだちて源のゐのかしらにもさわぐ吉原　塵外樓
煮花して夜食すゝむる傾城の深き色香はなじみてぞ知る　市川 常道
壁にすむ繪の鳳凰も朝夕に川竹のみを見てやめでなん　催馬

きのせき守—紀の關守の靈弓白鳥に化する話繁々野話に見ゆ
こはだ—小鰭、肌に掛く

引込禿—未だ客をとらぬ禿
切り—桐に掛く
せいじん—成人、聖人、鳳凰は聖人を侯つて出づといふによる
ゐのかしら—亥の上刻、井頭の池は水道の水源也
かたまり—胎兒

鐘四つにきのせき守が駕の客は化したる弓の鳥よりも飛ぶ　春人

指をりてかぞふる鐘はよつゆにも濡れて田甫をかよふ客人　香吉

おいらんを待つ夜の床に只ひとりこはだの寒き鮓賣の聲　笠人

格子先來る玉子屋もとりわけてのぞいてや見ん揃ふ君たち　織方

ばい從と見れど寛活大盡や夜の錦の床の惣花　催馬

鳳凰は壁にゐがけど切りに賣らぬ引込禿せいじんを待つ　おなじく

水道の水にゆかりか紫の色里もはやるのかしらなる　トチ木　櫻露堂

夜具おくる客の寢酒にくま笹を敷初もよき錦鮓賣　鈍々亭

その牙に似たりやいそぐ三谷舟堀へもちやうどゐの刻に著く　高サキ　影法師

大見世の女郎も空の月代もあがるや早き鐘四つの頃　おなじく

打寄りて夜食は食へどいさゝかもかたまりはなき傾城の腹　同　平花庵

折もよく鐵炮見世にねらひ來てゐのかしらをぞうてる時酒　同　兎卜

角はやす女房の氣もかね四つに見てのみ歸る鬼のすむ里　同　壽女

早歸かへるお客の刻限もよつゆに袖をぬらす夜櫻　獨樂堂

鐵砲の玉—鐵砲見世の妓

ゐの牙の小舟—亥、猪牙舟

鈿女命—天鈿女命

鐵砲の玉を目がけて見世先へつッかけて來る客は亥の時　七日市　銀鶴

春慶の口なし色もなさけなやまはし枕にひとりぬるとは　ヒカタ　舞鶴翁

まはしある夜半の口舌の蟹ほどに抓られながら横に出て行く　おなじく

廿日月出づる頃までまごつきてやう〳〵あがる田舍客人　安戸　方住

脇指はならぬ廓の二階へも出す枝豆は鞘もみもあり　イカホ　安麻呂

時もはやゐの牙の小舟いそげよとふりむきもせず來る客人　同　年重

傾城の樂屋を間夫に見せながら幕の内をりしたゝかに食ふ　藤チカ　友由

傾城の意氣地はかうか賣る鮓のおしにもはりをもたす吉原　同　油竹丸

とかく茶を引勝手なる新造は鈿女命に似たるおもざし　春江亭

床をまはす男も客のきませとて裏をかへして置く枕紙　板貫

玉子賣うる里に來て買はるゝは同じ名のあるきみあればこそ　タリハシ　喜代住

人の氣をうかすしかたや川竹の流の床に舟底まくら　同徒然庵改　玉の屋清丸

あちらでもこちでもなびく里なれや青柳といふ鮓賣も來る　おなじく

客をつる君ははりもつ吉原へ槊をさけ來る玉子商人　春道

あなかま—「あゝ喧し」に穴を掛く
つるべ鮓—鮓を盛る器の形より斯くいふ、元は大和吉野川の鮎を鮓につくりたる物をいへり
あさかの沼—岩代國の安積沼、花がつみの名所也
二つ星—細見に附せる星也、七夕の二星に掛く
たつか弓—立つ、手束弓

比翼蓙比翼の床に色客と食ふは連理の枝豆ぞかし　質屋うぶ著

手水にといひて立てどもあけて行く障子の尻は知らぬ傾城　鬼馬難目覺

あなかまや座敷ももめる三目ぎり三目の藝者あくかあかぬか　おなじく

井筒ほどつみあけて來るつるべ鮓箱を二階へつりあげて買ふ　桂樹園

かけ聲の雁に似ればや櫻をも見すててかへる夜の四手駕　多餘理

その心あさかの沼か傾城の床にめにたつ花がつみ染　洒落柹

おいらんが下で夜食の長食に二階で腹のふくれたる客　おなじく

一口に鬼は夜食をくひてけりかみのさわぎに氣のつかぬ内　大甕

二つ星ある花魁を見てしより七夕客も心そらなり　麟馬

すがゝきはともあれ玉の極揃お茶をひくのをいとふ新造　强氣

息杖は日本堤にたつか弓矢よりも早き亥の刻の駕　寶馬

花紅葉盡きぬながめや四つの時も鐘がさきだつ吉原の里　信、松代　薫

おゝ寒といへば寒いと客人もいだき附いたる床の山彦　同　串戲好魚

騒ぎあふ座敷はひけて初會には胸をとり合ふ相惚の床　おなじく

かたな—片名、刀
四つにわたりて—以下角力の術語に掛く
亥のかしら—亥の上刻、井頭の辨天に掛く

盃の舟の跡には鰐ならで客を引きこむ床の海中　おなじく

名染みてし客は屋敷が夜食くふ杉もかたなの見ゆる箸紙　江又 保住

刻限の四つにわたりて相撲ほどまはしをとれる傾城もあり　イセウガハラ 千代有胤

逢方を名染の客へとられては亥の時頃に立つるいかり毛　クハナ 一圓窓

睦言に比翼のちぎりなす時は外で連理の枝豆も賣る　白川 竹盛

藝者をもあぐる廓の玉子うり黄色な聲をころがして呼ぶ　同 算

時酒を飲む傾城の二つ三つ噓もつき出す里の鐘四つ　同 理也

傾城の名も春日野といふやらん鹿子の床をまはす吉原　同 治

道中で横と身をそる花魁の客の膝にもかゝる四つ頃　スマ田 南湖

傾城の口に乗る身は氣もせいて急げ時刻もはや四手駕　圓僕

辨天にまさる女郎のまかす身を待つ床入も亥のかしらなり　道列

ゐの刻のゐの日の灸も新造がすゑて遣手の部屋はけぶたし　おなじく

傾城の夜食時とて香の物拍子木なりに四つ並べたり　おなじく

時もはや四にはよほどまはりぬと廻りしまひて歸るひやかし　彌壽丸

くひな―「食ひな」に水鷄を掛く、水鷄の鳴く聲は人の門を叩くが如し
かしら―上刻、頭
京鹿子―京鹿子の蒲團
八丁の土手―吉原土手
灰ほど云々―髯黑大將の本妻發狂して夫に火取を投げつけて灰を撒きし事、源氏物語「眞木柱の卷」に出づ

傾城の目につく客の外に又腹もすいたと夜食をぞ食ふ　栗々法師
傾城の帶とく床の數ふえて遂に裸となりし客人　若女
拜みいすなどといはれて氣のつよき客も佛となりて床入　吉井　行康
客の顏猿ほどあかく醉うてけり座敷に床をまはす頃とて　クハナ　千枝丸
かしましう口たゝかすと夜食をばくひなと叱る新造の顏　おなじく
頃は亥のかしらなればや是も又とんとまはらぬ醉どれの客　同　秀丸
玉子賣來る時分には醉ひふして酒につぶれし客人もあり　同　燕子樓
刻限もゐのしゝ武者の手負客それをいけどる傾城もあり　同　蔭久
京鹿子俄に見せて大門の外へは女人出さぬ禁制　八王子　丸主
八丁の土手ほどもある長文に乘つて飛ばなん夜も四つ手駕　おなじく
夜ざくらに花を灰ほどまき杜大盡客もなづる髯黑　おなじく
待ち侘ぶる色てふ客は廿日月時も違へずあがる嬉しさ　同　五明
約束の客の來ぬ夜は夜著よりもひつかけて寢る部屋の燗酒　おなじく
酒は又下戸というても床まはす頃にせきをもとる幕の内　山形　枝折

かねごと―契の言葉
比翼連理―白樂天の長恨歌「在天作比翼鳥、在地願爲連理枝」玄宗皇帝と楊貴妃との誓の語

鐘四つのかねごと多き吉原に比翼連理の枝豆も賣る　同　浦見女

客に身をまかせて女郎の夜食には骨ばかりなる肴をも食ふ　カジカ澤　花咲

傾城の夜食に行きて來ぬ内は客の奥齒に物やはさまる　羽風

時の名のゐのしゝねらふ獵人の鐵炮見世に玉子をぞ賣る　江戸サヤ　病野無人

傾城と客と枕を二つにて四になるとや床まはすらん　おなじく

鐘四つにかへると客のくり言はむべなりけりな玉子うる聲　三友

お茶ひくは嫌ひながらも傾城にまはし上手のあるも吉原　柳馬

店者が内を四つ出のいそがれて尻おちつかぬ駕も吉原　おなじく

月雪も及ばぬ里の夜ざくらにあらしは下戸の肴のみなり　木工女

女房はふりかへりても見られぬと床へ入るもやはり亥の時　雅雄

枝豆やゆでた玉子も禿等はむかうの人と呼びて買ふらし　同、　影住

傾城の腹にも飯をつめる頃おもてにひさぐ丸づけの鮓　おなじく

腹太鼓うつ客乘する馬なりと煮豆で夜食くらふ傾城　醉樂亭

秋の夜の長きつとめの禿等やまだ九つにならぬ鐘四つ　白根　彌佐平

いれぼくろ—情夫の名などを腕にいれずみしたるもの

ねう〳〵—猫の鳴き聲に寢やうを掛く

かのこと—彼事、鹿の子染

石に云々—「漱石枕流」晋の孫楚が故事なり

篠原—齋藤眞盛白髮を染めて討死せる所、北國も其緣語、平家物語に詳也

寢待—寢待月（十九日の月）に掛く

烏にも—諺「烏」に反哺の孝あり

いれぼくろ消さぬ女郎も火箸もて燒がねあてて蒲鉾を食ふ　尾、雅流園

賣りに來るむき玉子より美しき女郎の顏にかぶりつかばや　アハ　六々園

三味線の猫は藝者に仕舞せてねう〳〵といふ客人もあり　おなじく

藝者等が三味線をひきやめば又屛風をひきに來る若者　同　拔足

床まはす其縮緬の夜具見てもかのことばかり思ふ客人　おなじく

おくり行く藝者のあとに色のつく生姜に聲の高き鮨賣　同　白翁

床まはす頃とて客と花魁の四つにわたりし鐘の聞ゆる　同　有大甚

高砂の松葉屋ぞとてせいのつく玉子をぞ買ふ年寄の客　同　歌種

石に口そゝぎはせねど川竹の流れに枕かはす傾城　ワカ山　太記

北國の名においらんの篠原にすみぞめにけり白髮親仁も　おなじく

夜食くふ女郎を月の田舍客床に寢待のいかに久しき　おなじく

烏にもおとる不孝へ花魁がくゝめて飮ます寢所の酒　おなじく

藝者等が騷の歌の途切にもつなぎをいれし蕎麥賣の聲　同　薰

傾城の夜食の菜の蓮よりも穴を見出して笑ふ客人　おなじく

鐵炮見世—前に註す、鐵炮風呂に掛く

浮寢鳥—水鳥

ゐねぶり—亥に掛く

み—巳、實

夜食云々—妊娠を俗諺に「夜食のかたまり」といふ

亥時

十五、

紅葉見と宿をば出でて吉原の錦の床の山に入る客　アヒヅ　筆文女

十二、

客こよひ小判の桐のひかりにや月見にくらき鳳凰の壁　高サキ　松花堂

十、

傾城のみになるかねは刻限の亥に來る客のちやうど七つ目　八王子　重丸

据風呂の鐵炮見世をもる人の聲も尻からまはれとぞ呼ぶ　獨樂堂

八、

川竹の流れに住める浮寢鳥まはせる床もひとつがひづつ　アヒヅ　水埜園

刻限もゐねぶりにはやみの入りし禿が顔へはじく枝豆　おなじく

はらまぬといふ花魁も新造も夜食はやはりかたまりて食ふ　同　高良

食ひこんで來りし客は部屋に起きて夜食の膳にむかふ傾城　同　文女

いたづらいね—一人寢

里をばかれず—古今集「今ぞ知る苦しき物と人待たん里をばかれず訪ふべかりけり」

思ひぐまなき人—思ひやりの無き人

心いられ—じれつたい思ひ

さだ過ぎたる女—盛りを過ぎたる女

亥時

衾は三つ五つ、綿あつらかに造りて、大きなる直垂めく物さへまうけ置きつ。いづれも紅の錦なれば、さながら龍田の山の秋にあへらん樣なり。初山踏なる客人は、一人ふせりて、今や來んずらんと、欠うちして待つめり。されど無期に來ねば、いたづらいねをなど、うめきつゝ臥し居り。とばかり過して足音すなり。そゝやと思ひて、空寢して居れば、しづかに入り來て、屛風おし開けて、「寢給ひぬるか」といふ聲はづかしげなり。猶空寢して居れば、あなたに出でて、燈火かゝげ硯とり出でて文書く。やゝ久しくためらふほど。千年を過す心地ぞするや。里をばかれずとこそ昔の人も詠みたれ、思ひぐまなき人もありけりなど思ふも、うち出でねば誰かは知らん。いでや財に代へて戀する人だに、斯う易からぬ心いられはすなり。さば思ふにかなはぬ物は世中ぞかし、あなかたはらいたしや。彼方には、さだ過ぎたる女の聲して、宵まどひの童を叱りさいなむ。格子の方はやう〳〵人少になりて、むげに若き者のみ殘り居て、長き夜を侘顏なり。

腹立ちて客のいぬてふ時も時かへさぬたまご賣りにこそ來れ　氏家　文車

藥より酒よくもりて藝者等を直す太鼓の醫者とはやりぬ　甲、市川　眞河

いすかのはした―諺「思ふこと鶍(イスカ)の嘴とくひちがふ」

あけ―紅、明け、論語「惡紫之奪朱也」の語による

大一座大工小屋よりさわがしく木葉藝者もはねつ踊りつ　同仁木　潮三鶴

約束もくひ違ふ客や恨むらんあはれいすかのはした女郎は　同寺部　祇三室

見世告げる蟲の鈴なる其後に咲く百草の花ぞなまめく　同ウメガツホ　紫三葩

折わるう月見を頼む客人に障ある夜とことわるは憂し　柳花園

茶屋のかり雲もろともにはらひけん晴れて上りし月の色容　浦道公平

吸ひつけて出す煙管のながし目に初會の客を見ぬやうに見る　清澄

兎より里の藝者のおもしろや踊りはねたる月の夜座敷　上、　頭丸人

月見れば里のならひか花魁も雲も無心にかゝる惡さよ　フクシマ　狂歌庵

見立よと夜見世に並ぶ傾城の衣は質屋の品定する　ヌマ田　南湖

正面のあけのお客もうばふ迄見立ようきく壁の紫　アハ　猿人

幕の内出せ〳〵と手をうつもあかぬあそびのよし原の里　盛砂

鳳凰の振袖著せし新造は客を迷はす媒鳥なるべし　おなじく

鳳凰の壁に孔雀の袖を見てちひさくなりてのぞく椋鳥　六樹園

追加

月のかつら―高貴の人に喩ふ

白のむくいぬ―八朔には白無垢を著る也

位―松の位

松一木けしきを添ふる臺の物月のかつらの散す惣花　おなじく

夕見世に我がたましひもぬけ出でて火燄玉屋の軒にうかるゝ　持旁

百草の露か玉屋の月見客光をちらす秋の惣花　獨樂堂

大盡のけんみやく取つて太鼓醫者直す藝者も持つたがやまひ　おなじく

盃がすむと花魁いぬの刻けしかけもせぬ宿の燭臺　トチ木　仙寵堂高丸

八朔の雪のはだへに煩惱のくるへる白のむくいぬの刻　同　櫻露堂

吉原の里のあかるくなりしのは撒散したる金の光か　錢成

二階からながむる月の目ざはりは山屋と呼べる豆腐屋の屋根　おなじく

風鈴と共につられて花魁のぶらりとまつも金になる客　由名齋板貫

瀧川が月の座敷の尾花にも女波男波を見する吉原　南北

いつ見てもあかぬながめの吉原は不斷櫻の客の惣花　悅氣

うかれ出し今宵くるわの一むれは月に飛びかふ阿房烏か　長女

おいらんの位と臺の松もまた一きは目だつ惣花の客　强氣

光り添ふけしきも今宵吉原や月にさはらぬ臺の大松　三、廬山人

大門―「千兩で大門をうつ」

いざや云々―伊勢物語「名にし負はゞいざこと問はん都鳥我が思ふ人はありやなしやと」

金もち―望（十五日）に掛く

吸ひつける煙管ばかりか花魁は首長うして茶屋に待つらん　クハナ　千枝丸

はや酒に醉うて倒れし客の目に家もくる／＼まはり燈籠　同　燕子樓

つれ／＼と客を待つ間も足音にうしろをむけるこまいぬの時　同　秀丸

十露盤のけたをはづれし里に又客を待ちぬる疊算あり　同　沙棠園早記

けづりたる髪はうりかは約束に今やと待つもすいた客人　江又　保住

軒下に時しも犬のふじ見丁尾を踏む客のきやんと言はるゝ　濱荻

大門はしらず座敷で手をうてば禿がへんじするが千兩　盛砂

ものゝふの敵よせ來よと鶴屋には翼並べて夜見世はるらし　山形　枝折

格子からいざやのぞいてみやこ鳥我思ふ君はありやなしやと　アヒツ　文迺屋高良

金銀でつらははれども田舍客つかふ詞はよこなまりなり　同　筆文女

傾城になれてくるわの大一座金もちの夜の月見賑し　長、ハギ　藤英

親の目をぬぐはじとこそなりにけれ見申した樣でおすと言はれて　全亭

あたまにも置手拭の一むれは湯屋のひけうつ頃の地まはり　春路亭柳馬

十五夜の月も初會の座敷には何やらかけたやうに覺ゆる　成丈

細見の星—前に註す

からす—「月夜のうかれ烏」に掛く

げち〳〵め一昨日來いと封のまゝひねつて投げる客のきれ文　同　一曲庵絲道

客人のふところをほる花魁の夜食の菜も金山寺味噌　同　錦屏堂折軸

通ひ來る客の欲目か見立には目うつりのしてどれが吉原　同　喜代住

中の丁うかれ藝者の三味線に引立てらるゝ生醉の客　おなじく

中の丁鶴の歩のおいらんも客には首を長うして待つ　形言

客人の歸りは今宵はやてにや又も散らせる里の惣花　氏家　文車

數多くよるはみゆれば細見の星の目あてにまよふ見世先　吉井　行康

よばれても素見は客の影法師やまたくる〳〵とまはり燈籠　犬馬

狐拳で酒を勸むる太鼓等がついをたらする猫足の膳　白川　西樹

嚢の物につむ數々の肴よりうまく藝者がつかふ聲色　同　員照

紙入をひらいて客の花ふれば藝者の聲はおはこより出る　同　弓矢早記

浮れつゝ月見の客の騷ぎては聲からすほど歌ふをかしさ　同　其葉

御祝儀に山吹の花もちはんと黄色な聲を出す太鼓持　同　曉庵

とり出す嚢の物より傾城がうそをも客にうまく食はする　同　算

桃の媚云々—古今集「見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」
邪魔に云々—月見の障を爲すとて庭の松を伐らせたる話にとる
ぬし—主、塗師
みそか男—間夫、三十日

桃の媚さくらの笑をこきまぜて夜見世ぞ里の花ざかりなる　高サキ　影法師
くるといへば心ほそくも蜘の絲丈夫ならねど間夫や待つらん　麟馬
風にちる小判の桐や初秋のしみては裏もかへす葛の葉　鈍々亭
はやすのもよし吉原の戌の刻椀久をどる客人もあり　梅・景
月今宵さわぎ座敷にやはり又邪魔にされたる島臺の松　仙ダイ　千柳亭
吉原の月の雪見の深ばまりおのれが家はつぶれさうなり　おなじく
二階にて見る傾城の櫛よりもさしこむてりは吉原の月　同　唐琴
待ちえたる客をそらさぬ顔にさへつやおしろいは見ゆる花魁　同　被唐草
質屋よりかり小袖して見る月の雪にも足はいとふ傾城　同　直輔
おいらんの客まつ茶屋が緣先にくも紙さがる朝の風鈴　同　繁路
お客だといふを會津の蠟燭が流れの里へかけられに來つ　鎌倉海老成
ぬしさんといふもむべなり金銀を蒔繪にちらす里の惣花　有明
秋こよひ仕舞も月の十五夜にみそか男の來るは無遠慮　おなじく
厚板の夜著よりおもき内の首尾二つ一つとのる三つ蒲團　仙ダイ　明盆

八朔の云々―八朔には白無垢を著れば也
三日の原―三日、三甕原（山城）
かせ山―貸せ、鹿背山（山城）
四手―四手駕
ひよくの鳥―比翼の鳥
口もさが野―口さがなき、嵯峨野

八朔の小袖の雪も夜にいりて閨の屏風の富士につもれり　高サキ　松花堂
惣花を花の廓にちらす時物いふ花も出でてもらひつ　同　平花庵
居つゞけも今日三日の原揚代に懐かろしこがねかせ山　おなじく
爐にくべるとぶ炭よりもすねし客を茶にして横にねかす花魁　同　兎卜
四手より三筋の絲に乘せられて又も飛ばする茶屋の紙花　春道
約束の客に飛び立つ花魁はひよくの鳥かよい中の町　浮洲
くむ酒とひく三味線の調子まで直しの聲にいさむ藝者等　おなじく
傾城の雪のはだへにはまりてはつめたい金も散す惣花　升成
傾城の口もさが野のをみなへし初會の客もころり落しつ　イ青木　葭成
溝の名の鐵漿のみか宵の間は鶴もよくつく大門の口　同　一樹園
猪牙で來る客にこがれて花魁ものり出でて待つ茶屋が緣ばな　影言
惣花の咲く山吹の枝おもく首をさげたる遣手若衆　和國亭歌道
さえ〴〵し月見に茶屋が酒迄もちこさせたく思ふ居つゞけ　玉村　直延
月の雪に空はうづみて細見の星のみ見ゆる江戸の北國　藤岡　友山

望月の駒—前に註す

おなじみなり—同じ身粧にお親染(ナジミ)を掛く

林—離しに掛く

きた—來た、北里

物をいはぬ—「桃李不ㇾ言、下自成ㇾ蹊」

雨宿—秦の始皇の松下に雨宿りして松を五太夫に封じたる故事

傾城に心の駒はつながれて勇む座敷にちらす惣花　　信丶　薫

月よりはどこか光のます鏡二階あかるくなりし惣花　　鐘人

約束を外へのがれん陰もなし仕舞つけたといふ月見客　　クリハシ　潛

とんとんと上る二階の階子から手をうつて來る太鼓持あり　　同　清丸

おいらんも客をむかへて京町へひく望月の駒下駄の音　　小ハタ　繁喜

流さぬと見たる初會へ名代の新造は質にとられてぞ居る　　米守

よべ來てし小袖羽織を目覺におなじみなりと告げるうら客　　おなじく

鈴の鳴る見世の出ばなに二たてや見立の客もあがる吉原　　織方

惣花の禮を家内も鳴臺に林たてたる座敷にぎはし　　おなじく

たつた今きたを床よといそぐのは夜頃や歸るかゝり宅の客　　催馬

刻限の犬ほど客に三年も名染みしやうにくるぶ新造　　春影

花魁の桃のこびたひ初會には物をいはぬも吉原の里　　おなじく

花魁の太夫の松の臺の物雨宿して濡れつゝぞ見ん　　笠人

傾城はいづれもうはの空なれば月に似寄の丸顔もあり　　紀繁人

三年—諺「犬に三年人一代、人に三年犬一代」「犬は三日の恩を三年忘れず」

ちとせ—「千歳の松」
いかのぼり—凧

三年もなじんだ客がおいらんの中の丁にて待つ戌の刻　一徳

金銀の光足らざる客人をてらすもよしや吉原の月　甲、酒部 友鶴

こねかへす月の物日はせいろうに客も團子もふかす秋の夜　且平

箸紙の出來た客には新造のつまみ食をもさせぬ傾城　玉藻

中の丁にさくら植ゑれば大見世の内へも咲かす客の惣花　栗々法師

金をまきに息子は里へいぬの時おやぢの小言わづか八百　若女

客人を化しおほせて刻限のいぬといはせぬ狐傾城　清記

竹村が菓子ならなくに拳酒や藝者の指も折づめにして　おなじく

約束の客をまつ屋の緣先にちとせのばして居る太夫職　八乙女

傾城のはりはいかにやいかのぼり引手になびく絲の清搔　道列

水道尻火の見の外に太鼓もち連れて梯子をあがる客人　彌壽丸

藝者等がかみ駒に勇み立つ客のはな毛を繋ぐ三味線の絲　下毛サノ 毘

惣花をちらせる客の手を引きて勇みて歸る駒下駄の音　水垣

茶屋の緣に腰うちかけの長さよりのびた客をば待つ中の丁　紀光人

せいろう―蒸籠、青樓

二千里の外―白樂天「三五夜中新月色、二千里外故人心」と、長恨歌の「後宮佳麗三千人」とに據る

出しものも吉原なれや秋の夜は座敷にあまる月のひろぶた　おなじく

茶屋毎のさわぎの酒と今一つまはりて來たる俄狂言　多餘理

駕どめの此吉原の道中に雲助なくて月のさやけさ　おなじく

辨天といふべかりける傾城の蛇つかふとは知らぬ客人　洒落柿

饅頭の縁にひかれて晝客も夜をふかしたるせいろうの月　八王子　重丸

四郎兵衛が關ふみならし望の夜に藝者もひける三味線の駒　甲フ　多理雄

誓にてきりし小指に引きかへて待つ夜長しとうらむ傾城　裏成

うき立つて踊る甚句に花魁のしんくもしばし忘るべらなり　郡内　金英園

明日もまた居つゞけせよと湯出玉子かへらぬ鳥を賣るも吉原　おなじく

名にめでて千夜も通はん心より鶴屋の妹を見立ててぞ買ふ　同谷邑　眞久

二千里の外よりも先三千の美女を集めし青樓の月　甲フ　衣紋亭

おくり物のきの字が臺の松迄も月にはうつてつけの枝ぶり　おなじく

鶯の一口はさむとり肴小鍋も添へて出す臺の物　ギフ　歌笑

花魁を立物にして藝者等がつとめは横に客ねかす迄　おなじく

北國と名に呼ぶ里の二階には夏もふらする雪の紙花　おなじく
狐釣はやす太鼓とひとつ穴の女郎の罠にかゝる大盡　おなじく
梅の名の豊後かたれば禿等が鶯聲でひとくほめけり　同　浦見女
望の夜にむかへられたる駒下駄の花魁の名もやはり奥州　同　薫
初會からもてる樣子は竹村の上あんばいの甘味とぞ知る　おなじく
中の丁門守るいぬの刻限は茶屋も藝者も客の尾につく　藏人
一夜だにこゝは命の洗濯や衣紋坂迄のりつける駕　おなじく
新月はかこつけものゝよ傾城の色にうかれて遊ぶ客人　岡山　廣孝
此里に鬼すだくとは拳酒に三つと打出す指にてぞ知る　尾、　龜丸
うかれ客來てかゝれとや吉原の茶屋にもさげし燈籠の綱　おなじく
格子先十かへりも來て花魁を見たてもあがる松葉屋の見世　八王子　丸主
異見聞く耳のけがれを今宵しも洗ひに來ぬる瀧川のもと　おなじく
傾城の氣は定まらぬむら雨や見立てし客をふりみふらずみ　同　五明
格子先目うつりのして新造の見立違をするたいこ醫者　見分

豊後―豊後節
ひとく―鶯の鳴聲に一句を掛く
上あんばい―上鹽に掛く
望―十五日に「望月の駒」を言掛く「望月の駒」とは、信濃國の望月の牧より京都の禁中に奉りたる駒をいふ
十かへり―十回「十かへりの松」を掛く
耳のけがれ云々―堯、許由に天下を讓らんとせしに、許由聞きて耳の汚なりとて潁川の水に耳を洗ひし故事にとる

五明が宿—扇屋

入山形—前に註す

花の中云々—古今集「春霞立つを見すてて行く雁は花なき里に住みやならへる」

ますみ—十寸見河東、即ち「河東節」に「眞澄の鏡」を言ひ掛く

から歌—漢詩

流れに云々—上巳の曲水の宴を擬る

簪の後光まばゆき國に來て歌舞の菩薩に花をふらせつ　小枝

繁昌を末ひろがりと煽ぐらん五明が宿の宵のにぎはひ　タハナ　音澄

鞠と見し月にめでては大盡もはづみてつかふ秋の吉原　桂樹園

秋のきに入山形のほしの君一夜の妻と見立ててぞ買ふ　おなじく

花の中見すつる雁はにくからじ月見る中に床いそぐ客　尾、　眞澄

ぞめき等は格子をのぞく後から顔出す月もうかれ心か　おなじく

うはの空となりて遊ぶや傾城を天人と見てのぼる二階に　犬山　影住

たいこ等に輕業させて遊ばんと階子をのぼる客人もあり　おなじく

格子から客がのぞけば新造がするを通して出す長煙管　羽風

夜ざくらに月の鏡はくもれどもますみが聲のすめる吉原　尾、　雅流園

花魁はから歌なれや聲色も絶句をしたるたいこをかしき　おなじく

吉原の揚屋の月に傾城のはりの穴まで見ゆるさやけさ　カジカエ　花咲

初會には物いはぬ花や川竹の流れにめぐる盃の宴　尾、　雙蝶園

小菊てふ紙花やれば心得て枕慈童もうたふ藝者等　ワカ山　太記

蓬が島—蓬萊、秦始皇帝方士を遣して仙藥を採らしめし故事を採る

玉川—山吹に名あり

衣を云々—月見にはきぬかつぎ（皮のまゝ茹でたる芋の子）を食ふ

城ならで云々—詩經「哲夫成᷊城、哲婦傾᷊城」

淺黄裏—江戸へ勤番せる地方の侍、淺黄裏の衣を着たる者多かりしよりいふ

こがね云々—萬葉集「すめろぎの御代榮えんと東なる陸奥山にこがね花咲く」

酒のみに來し我が肝を遊女等にさきへ呑まれし初會の客　おなじく

仙藥を採る月の夜にくる客は蓬が島の蒲團にぞよる　同　白翁

おく質をうけ出す人のあらざれば流の里と名づけたりけん　同　不言齋馱丸

虎拳のちんぶんかんで騷ぎたる客もふぬけとなりし生醉　同　有大甚

玉川といふおいらんに名染みては山吹色の花をふらせつ　同　咲穗

羊羹の羽織ぐらゐは吉原の茶屋もやつぱり茶であへしらふ　同　歌種

いろ里の妹にも衣をかづかせて月に一夜をふかす客人　同　釜足

禿等が花かんざしの薄にも露おく月のながめよし原　ツルガ　半月

城ならでかたぶく迄と大名の客も見とるゝ月の吉原　おなじく

持出した所はありがたいの物の花をばやはり花が咲かする　アヒヅ　水莖園

傾城の眼や青くなりつらん淺黄裏なる客をとる夜は　雅雄

敷初の夜具さへ山と見るばかりこがね花さくみちのくが部屋　おなじく

楊弓のあたりまばゆく盃も初會は例のかつちりといふ　文丸

引きたてて並ぶ藝者の車座に巾をくるりとまはす盃　松蔭

さゝがに―蜘蛛

渡邊のきほふ―渡邊競、きそひて行く意に掛く

南鐐―渡邊競が六波羅より取り來りて「昔は煖延（ナンレウ）今は平宗盛入道」と鐵燒せる名馬の名に掛く、此話平家物語に詳也

きの字―きの字屋

うら―浦、裏

つゞみの猿や―小鼓は猿の皮にて張る

龜―臺の物の龜

沓を云々―諺「瓜田に履を納れず」

さゝがにのいとしき客のくる宵は癪の蟲迄おりて嬉しき　信、松代　蘭薫亭薫

目もとにて客を殺すと聞きしかど顔にいけんの見えぬ花魁　全亭

馬の名と知らで夜見世に渡邊のきほふや河岸の南鐐の客　文丸

九、

盃の手じなに客がはな紙を投げれば臺の物とかはりぬ　羽風

ならうならきの字が臺の松蔭に釘づけにして見たき月影　小ハタ　繁喜

傾城を天女と三穂のうらなじみこくうに花をふらす大盡　甲フ　多理雄

法師さへ醫者とやつして小脇差さすが見立は違はざりけり　高サキ　平花庵東水

八、

酒の池肉の林に出で來るはつゞみの猿やきの字屋が龜　アハ　六々園

格子先沓をとゞめて傾城の瓜ざね顔に見とれてぞ居る　おなじく

花に名のある吉原の君とてや雲と見る鬢雪と見る肌　おなじく

傾城の雁がね額ながめつゝたましひ飛ばす客人もあり　おなじく

狐てふ女郎にいつか我くせの穴見出されし初會の客　同　起兼

酉の市—廓外にある大鷲神社の祭禮

一字が云々—「一字千金」「春宵一刻値千金」

青柳の云々—古今集「あさ緑糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か」

戌時

十五、
どつと來る客に勝手も騷ぐなり足もとに立つ酉の市とて　終和亭且平

十三、
よくお出なんしは梅にあらなくに花はじめての三會目客　尾、雙蝶園
客人の祝儀に腰のまがるのは年に不足のなき若い者　友賴
酒盛の酒はこほれて海なせば紙のしらほも出す傾城　タハナ 秀丸
惣花をちらせる色のみなかみは大盡風のいかばかり吹く　雅雄

十、
大盡の客の一字が千金にあたる今宵の里の惣花　ツルガ 北陸堂子方
仙境もかくやとばかり見とれ居て客も迷の雲に乘るらし　尾、雙蝶園
青柳の絲よりかけし約束をたまにもぬける客人ぞ憂き　攝、イケダ 陽記
大小はあづかられても金銀に腰のさびしう見えぬ大盡　ワカ山 太記

ぶなり。それはあそび等がうへに心を遣りて、萬あつかふめれば、さる名をば負せけるにや。

戌時—午後八時
洲濱—松竹等を植ゑて洲濱の形に造りたる臺
曹司—部屋
あそび—遊女
そぼれて—戯れて
まが—瞼

戌時

大きなる洲濱やうの物、うちかづきて持て來。いづこの嶺の松にかあらん、陰ともたのむばかりなるを、ひき伐りて中に据ゑたり。人の心の秋風に、うつろはせじとのいはひごとにや。樓には曹司どもあまた隔てて、つくりみがきてあり。廚子に、貝など泥して蒔繪したり。中やどりがともし火さきにたてて、客人等のぼりて來。男盃もて出でて額づく。しばしありて、醉の香高うかをりて、あそびどもかゞやき出でぬ。たゞ生きてはたらく辨才天女の、こゝにあらはれ給へるにやと、うちおどろかる。客人盃とりてあそびにさす。此間の作法いとつゝましくうるはしきは、はじめての見參なればなるべし。搔彈く女など出來て、うたひなどすべし。また入り來るより、女どものかぎり出來て、あざなにやあらん、今めかしき名を呼びたてて、笑ひそほれてうちとけ語らふは、月頃來かよふ客人にやあらん。こゝなる下男をさして、ぎうと呼びつけたるは、いかなる故にかあらん。髪はつれたる女の、まがは黑きが、端つ方に曹司しめて居るを、遣手とは呼

いぬきー往ぬ
氣、戌

駕を出て客は一とび大門のうちへいぬきか雀色時

六樹園

さゝがにの—蜘の枕詞

ふり—降、振

きみ—君、黄味

酒手をもいはぬ先からくれ六つのかねがせかする吉原の駕　上、頭丸人

さゝがにの蜘に名を呼ぶ女郎とて客まつ夜半にひける清掻　曉丸

煙草より咄にむせん格子さき今日は遣手に二階せかれて　長、道連

鐵炮の玉屋が見世の格子先あたり忍びてはなす色客　同　朝興

夕露をおきにもて來る質草は白玉さんの衣裳かと見る　有明

燈籠にあかりつけよと夕暮は目を皿にする大門の番　三千世桃丸

おいらんの御來迎とて中の丁御燈ならぬ軒の燈籠　菊酒亭藏人

雨ならぬふりをつけては濡事も俄にさわぐ傘をどり　ヌマタ　南湖

燈籠の光は玉に似ながらも客をてらさぬ里の藝子等　同　門松志馬

日は入れど出づる太夫のかんざしの後光に照す里の見世先　同　千歳堂萬々成

入相のかねにせかれて吉原の塒へいそぐとりの早駕　同　圓珠亭惠柳

ふところのさびしき客はうき秋とくるわをいく度廻燈籠　甲フ　虎千

巣ごもりのとりの刻からはる見世にきみが膚を玉子かと見る　同　素后

内證のからくりいかに美しき仕掛のきぬもあげさけにして　雅雄

たれ—垂れ、誰

すだく—集る

八百定—料理屋の名

はるの野の云々—萬葉「春の野にすみれつみにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける」

客人の來るためとて燈籠さへだましすかして見する吉原　彌壽丸

入相のかねが飛ばせし四手駕たれをあげたる大盡ぞこれ　おなじく

燈籠もいきぢに照す傾城の持前ならんはりぬきにして　木工女

見物をおしわけてひく鐵棒も鬼すだくてふ里の道中　おなじく

花心間夫をよばんと質ぞおく雨損になる末は思はで　裏行

八百定が酒に心もかはりめの燈籠ばかり見ても行かれず　若女

ちやくやと素見ぞめきはとりの刻ねぐらに迷ふ吉原雀　清記

夜見世はる知せの鈴の音もさへてかみ許多なる客も見えけり　悅氣

西瓜ほど叩いて通る格子先よく聞きなれしひやかしの聲　常乗

口舌せし夜半に折られし簪を質にもまけて間夫や呼ぶらし　塵外樓

若草の花の夜見世やはるの野のすみれは物かこゝに寢て見ん　原田　深寢父

刻限の鳥はねぐらへ歸る頃飛ばせて來る三枚の駕　川ゴエ　花人

傾城の口には客ものりうつる神いさめとや思ふ鈴の音　トチ木　櫻露堂

行燈のあかしに見世をはりま潟むかふへ通ふ禿等が聲　强記

くまで—扱まで、熊手（酉の市に賣る也）
竹村—菓子屋
蒸籠—突出しの出る日は、茶屋へ蒸籠を配りて祝ふ也
孔雀長屋—日本堤の傍にある長屋
ひる—蛭、晝
はり—玻璃、張り

いかばかり目の毒ならん八朔の雪のゆふべの素見ぞめきは　郭内　金英園

刻限は酉の町ぞと茶屋の酒くまで買はざる客人もなし　八王子　重丸

竹村が蒸籠をつむ突出に客もむれ來る雀色時　桂樹園

鳳凰の衣きし女郎を買ふ客は孔雀長屋の翼で往來す　白川　竹盛

すわりだこもある傾城は客人にたばこをもよく吸附けて出す　おなじく

吉原の此賑ひを見ましとて人もくる／＼まはり燈籠　同　算

蟲の名のひるにまされる夜見世には客に煙草も吸附けて出す　おなじく

刻限のとりは古巣へ歸る頃四手を飛ばす吉原の客　同　西樹

吸附けし煙草の煙痲藥にてしびれて立てぬ客のをかしさ　同枝　理也

燭臺の火ともし頃は夜櫻や女郎の花もかざり榮あり　岡山　廣孝

傾城の顔のよひからとり／＼に覗くぞめきも鵜の目鷹の目　おなじく

山吹の小袖質屋へやるにさへみのなる果を思ふ傾城　イケ田　陽記

六の鐘待ちえて來る客人も無心のかねは聞かぬふりなる　おなじく

家々の軒にてらしゝ燈籠にもはりを見せたる吉原の里　同　一宗

あれはたれ時—夕方「あれは誰」に掛く
裏—葛の葉の裏がへるに掛く
せんにん—千人、仙人
賀—七に掛く
椋鳥—吉原雀の浄瑠璃に「素見ぞめきは椋鳥の群れつゝきつゝ格子先」などいへり、ひやかし客の群をいふ也

衣紋坂下りつゝ行けば夕がほのほの〴〵見ゆるあれはたれ時　事業大甕
中の丁あそびが外に夕暮は汝もせはしき呼出しの非戸　おなじく
今宵よき眞葛が風のたよりにてすさめぬ客の裏をかへしつ　おなじく
あてもなく來て數の子をひやかすは目に正月を素見ぞめきか　一徳
川竹の竹のしげりをねぐらぞと客もむれ來る雀色時　上、傳々樓
せんにんのなめる口とて吸附けてくれし煙草も霞ふく樣　カナフ 右蝶
鈴の音も高間が原や通ふ神とゞまりませと夜見世はるなり　ギフ 狒々丸
傾城に客はのまれて指の外うまくくはへし吸附煙草　おなじく
吸附ける煙草にさへもいき地をばみがく煙管の張も吉原　同 歌笑
さればこそ吸附煙草の櫻ばり匂ふもむべよ花の吉原　おなじく
俄とて騷しさうに立ちながらはやしてぞ行く太鼓三味線　おなじく
八文字を踏まする里のならひとて使ふ禿を質に歩かす　おなじく
白無垢の雪見の前は紅葉見と思ふばかりにてらす燈籠　おなじく
冬がれに素見ぞめきの椋鳥もまづ江戸丁をさして一むれ　甲フ 衣紋亭

裏をかへせり—同じ妓を二度買ふこと
むつ—六つ時、陸奥
品よく云々—俗謡「竹に雀は品よくとまる」
雀色時—夕方

暮六の仕度いそがし吉原の身じまひ部屋も行燈部屋も　おなじく

野太鼓のはやしたつれば歸る氣の客も俄に足をとゞめつ　松成

初秋やたなばた客も夕風に著物の裾の裏をかへせり　二葉繁

白きはぎ荻江が歌に立ちまへば俄は秋の花とこそ見れ　秋月庵唯仲

宿の首尾からくりて來る客人にかはりて見する里の燈籠　噂影言

高尾にもまされるありと夕暮のむつから來る大盡の客　獨樂堂

吉原は夕まぐれこそたゞならね荻江の歌にさわぐ秋風　おなじく

おいらんの心のうちもからくりや夜分の體にかはる燈籠　おなじく

神棚にならして見世をあくる頃外にも賣りに來る鈴蟲　八王子　丸主

お客ぞと中の丁から知らせ來る茶屋が浴衣も蜘のすしぼり　おなじく

ぬすみぐひすなる禿がもち行くは質屋も繩をかくる代物　玉藻

川竹にこれも品よくとまらんと來るやよしはら雀色時　道列

傾城の秋の心やおどろかん夜見世告げたるすゞ風の音　おなじく

晝買と夜の客との外に又いれかへて來る傾城の質　吉井　行康

蝙蝠羽織ー僅に腰のあたりに達するほどの短き羽織

嫦娥ー月の異名、嫦の音正しくはガウなれど姑く通俗に從ふ

勝山ー丸髷の如く結ひて中を二つに分けたる髪の結ひ方

はなー花、鼻

たてー達引、縦

燈火の花ー丁子頭といひ、俗に吉事の前徴とす

鈴鳴りて夜見世をひらく扇屋のあたりにぞめく蝙蝠羽織　　春影

燈籠の見物すとてたはれ男の身の油をもへらしにぞ來る　　高サキ　繁昌

かさなりて押しつ押されつ鮓賣の聲も聞ゆる俄見物　　同　茂葉

吸ひつけて出す煙草がかなしばり不動のせなの火焔玉屋に　　仙フ　千柳亭

長柄傘さすおいらんは夜櫻の花の雲間の嫦娥かと見る　　同　直輔

質見世へ使をやるは明日も又間夫に流さす支度なるらん　　同　松友

居つゞけをせし下戸客の座敷には最中の月も出る酉の刻　　同　千歌林

今見世の出はをてらせし蠟燭のきかけに覗く玉屋松葉屋　　おなじく

夜櫻を見るおいらんの勝山にさす夕月の形も櫛がた　　同　繁路

夕月の猪牙にてかよふ客人の堀よりあがる吉原の土手　　麟馬

吸ひつけて出せば客もはなの下三尺ほどの煙管にて呑む　　呑吉

道中を仕舞うてもまた傾城は驛路の鈴に夜見世をぞはる　　浮洲

吉原のたてともしらず田舍人横にくはへし吸附煙草　　おなじく

燈火の花に知らせのほどもなく宵から見ゆる丁子屋の客　　高サキ　影法師

蟻―諺「蟻の思も天まで通る」

置く露の云々―夕顔の扇に書きて源氏に贈れる歌「心あてにそれかとぞ見る白露のひかり添へたる夕顔の花」

客人の來べき云云―古今集「我がせこが來べき宵なりさゝがにの蜘蛛の振舞かねてしるしも」

をどり―質の利の重なる事に踊を掛く

飾りおく箪笥はからか朝鮮の櫛もまじりの夜見世はるなり　二本松 月の屋丸顔

仕舞してせきこむ客は三枚の駕に酒手もくれ六つのかね　寶馬

蟻ほどに出る見物に燈籠の火影も空へとゞく吉原　タマガヘ 涼風亭岩守

置く露の玉屋扇屋たそがれにそれかとも見ん花の夕顔　梅景

客人の來べき宵なりさゝがにの絲にしらする見世のすがゝき　升成

吸ひつけて出す煙草の煙より跡へ引かるゝまらうどの袖　おなじく

並んだる夜見世のぞきて素見等がけつかうとほむる鷄の刻　織部

椀久の俄のさきへ番頭と聞いてびつくりまはる店物　おなじく

江戸子が田舍の人に吉原をあかるく見する燈籠見物　イカホ 年重

無心をばいひて機嫌をとりの時宵啼をする客人の膝　同 端澄

客人の座敷ばかりか質の利にをどりを出す藝者等もあり　安麿

川竹のさゝやき合うて禿等を質屋へ飛ばす雀色時　一樹園

頭からのほせた客へ吸ひつけて出す煙草にも煙こそ立て　山子田 里遠

あちらよりこちらへ飛びて燕ごと軒に素見のぞめく吉原　クリハシ 玉清丸

扇屋―妓樓の名
床夏の花―撫子
富士―富士淺間社

飛んで來る客はさながら夏の蟲又身をすてに燈籠の中　同　歌樂

かんざしも十二本ほどさして居る女郎はたしか扇屋の骨　尾、雙蝶園

犬の糞いそぐ田町で踏んで來て又ぐにやりする吸附煙草　盛砂

うき事もいはねの松や格子さき煙くらべの吸附煙草　田作

來る客に身をばまかする床夏の花は夜見世のすがゝきに咲く　信、松代　かをる

夜櫻は初瀨吉野の名所に肩をならぶる土手の駕舁　一喬亭秀馬

淺草の富士の裾野の吉原に散る夜櫻は雪おろしかも　催馬

子を捨てる藪に名だかき川竹にねぐらさだめつ吉原雀　おなじく

美しく並ぶ合圖の鈴よりも人もころりとなりし見世先　ヒカタ　舞鶴翁

吸ひつけて出す煙草も吉原のたてか煙は空に舞留　晴昇

をみなへし並ぶゆふべに蟲の名の鈴の音そふる轡屋の見世　錦糸亭織方

ある時は貴妃をあざむくうかれ女も質屋へおくる玉の簪　江又　保住

格子先あがりなんしの花の顏はじめてひらく傾城の口　犬馬

此里のだてにやあらんともすれば吸附煙草出す吉原　錢成

身受する客はともあれ中の丁風の手附はいとふ夜櫻　松蔭

吉原の花の波間へ乘込まんけしきは猪牙の舟に知られて　浮樂齋園僕

雨となる下地なるらし吸附けて出す煙草に雲をおこすは　小枝

傾城は見世先へ來る枝豆の其鈴なりに出でて竝びつ　多餘理

鈴鳴りて女郎も見世をはりま潟飾磨のかちや駕で來る客　おなじく

間夫の來る頃傾城も簪の二本づつみを質に飛ばせつ　酒落柿

傾城も秋の夜見世をかこつ頃なくも内所の鈴蟲の聲　おなじく

引つかけるつもりと見れば恐しや夜見世に女郎蜘のすがゝき　成丈

鈴の音に見世をばはれど爲になる客をふるべき女郎やはある　江戸サキ　無人

吉原の夜見世にならぶ數の子をひやかしに來る客もあるなり　且[illegible]卒

にぎはふは俄といふ字とりわけて我も人もと出づる吉原　おなじく

日も西に入間詞やかへるてふ客をゐる氣とさとる花魁　甲、市川　眞河

軒を竝べともす燈籠もびいどろのわれ物多き吉原の里　おなじく

鈴鳴るは馬にはあらで客のせし轡が夜の見世の花魁　氏家　文車

かち―褐、搗の濃き紺色の名、播磨國飾磨より染め出す、徒歩を言ひ掛く
内所―主人の居間に掛く
すがゝき―巣、店清掻
入間詞―物事を反對にいふ言葉

をはせがた—男茎の形、古語拾遺等に見えたる古訓也
轡—轡屋、遊女屋
貧すれば云々—諺「貧すれば鈍する」
せんなき—錢なき、詮なき

刻限の酉はさなくて二階には藝者がうたふ聲の吉原　同　蔭久
三日月の針の如くに出づる頃駕つりあぐる大門の口　おなじく
地まはりの間夫にあはんと親方の目をもくらます暮六の頃　同　音澄
をはせがたかざる轡が神棚に鈴口ふりて夜見世はらせつ　尾、雅流園
才覺のなき傾城の貧すれば緞子も繻子も質屋へぞやる　おなじく
あしのある物なればとて簪を質屋へ飛ばす里のうかれ女　龜丸
吉原をねぐらとさして飛ぶがごと客もいそげる雀色時　甲、市川　常道
むされたるやうに汗ふく人ごみは里に名に負ふ蛤長屋　見分
いにしへは乘りて通ひし馬道に今も四足の駕飛す客　おなじく
鈴鳴りて隅から隅へ毛氈の同じく順にならぶ傾城　八乙女
ためになる客をたらして我身より先受出してもらふ質草　クハナ　燕子女
晝買の客とは雁とつばくらめ日本堤で入りかはり來る　三、廬山人
蟲の音の鈴に夜見世を告ぐるより錦交りに女郎花咲く　同　軒しらめ
あがりたく思ふ物から嚢中にせんなき事をいふ素見物　道義

繩をとかせつ—質を受出してくれる

つき出し—月に掛く

かり—借り、刈り

小袖をば質屋にやりて色容とはだかになりて寢たる傾城　カジカ澤 花咲

傾城の帶をしとけば三會の客が小袖の繩をとかせつ　おなじく

花魁の質をうけ出すうれしさは禿も袖につゝみて來る　ツルガ 半月

きぬ〴〵に疎まれながら客の來る知らせ告げるも庭鳥の刻　同 北陸堂子方

燈籠の水からくりの人形迄浮沈さへはやき此里　同 弓也

格子から飛出す蝶の簪をとまりに來よと間夫にかし見世　三友

紋附のあはせ詞もいれかへに禿飛び出す蝶のかんざし　仙ダイ 明登

暮六つの鐘に廓の夜は明けてうかれ烏の騷ぐ見世先　羽風

夕汐のみちてくるわの賑ひは今宵名高きつき出しの顏　おなじく

田舍からつかんで賣りにくれがたの螢も籠の中の丁筋　犬山 影住

噓は猶あたりまへぞと夕暮に鐵砲見世もかまへこそすれ　おなじく

言の葉もかざりて情商人は噓を並べて夜見世はるらし　おなじく

三日月の鎌を背負うて質屋へと禿は金をかりに行くらん　タハナ 千枝丸

夜見世はる頃に鳴せる鈴の字も金せしめると書くぞをかしき　同 秀丸

雲となり雨となりては夜櫻のはなのあぶなき川岸見世の客　おなじく
椋鳥がもしや櫻を散らすかと鈴をならして夜見世をぞ張る　同　和琢舍
質草の重荷をつみて新艘の禿はしらす川竹の里　同　大食椀釜足
燈籠に歌舞の菩薩も御來迎くるわの中は極樂世界　おなじく
色容に首尾たのまるゝ禿等が脊中もたゝく花の夕露　ワカ山　太記
煩惱の犬をくるはす人聲のわん〳〵ひゞく里の夕暮　おなじく
盃と共に傾く夕月にいり山形の星のちらつく　薫
色容の使ばかりか質屋まで禿の耳をかしてくれ六つ　おなじく
あがめたる其神體はしらにぎて鈴を日暮にをがむ嚮屋　同　浦見女
吉原や素見ぞめきの燕軒のあたりをのぞく夕暮　おなじく
千金の價動かぬ此里や入相のかねに花は散るとも　同　旭居鶴
駕舁にかけろ〳〵とかけさせて大門へ著くにはとりの刻　アヒヅ　水莖園
夜櫻に雨ふり來なばぬるとても松の位のかげに宿らん　おなじく
夜見世はるまがきに星をつらねたり壹分の黄菊貳朱の白菊　濱荻

雲となり云々—前に註せる巫山の故事
椋鳥—田舍者
新艘—新造
いり山形—前に註せる呼出し
入相の云々—新古今「山里の春の夕暮來て見れば入あひの鐘に花ぞ散りける」
かけろ—啼けろ」に鷄の鳴聲を掛く
ぬるとても云々—拾遺集「櫻がり雨は降り來ぬ同じくば濡るとも花の陰に隱れん」
松の位は花魁の上位なる太夫

ぞめき—ひやかしの客
はな—花、鼻
むつ—六つ時、陸奥（高尾の縁語）

咲く花の雲の中にも蠟燭を星の如くにともす吉原　おなじく

節句の名のもとのあたりを賣らんとて雛の如くに並ぶ見世附　おなじく

提灯の名もあればとて櫻にもやはり蠟燭ともす吉原　六々園

日本てふ堤も過ぎて懷のからのぞめきも見ゆる暮六つ　同　起象

夜ざくらの短冊のみかぞめき迄はなに結びて見ゆる手拭　同　有大甚

燈籠の名も高尾とて國に呼ぶむつより人の通ふ吉原　おなじく

身あがりにつまり時刻のとりよりも著物を質に飛ばす傾城　同　季象

かみなりの太鼓持等が俄にはおちぬ先から臍をよらせつ　同　早膺

吸附ける煙草のひまに新造は輪を吹いてゐるおのがかんざし　おなじく

箱入の雛の如くの夜見世とてぞめきも顏をつゝみてぞ來る　同　猿人

女郎を見て目に正月をさせんとて門に立てるも松の木男　おなじく

小袖櫃の桐を出して鳳凰の著物も質に飛ばすおいらん　おなじく

吸ひつけて出す煙草の煙迄雲と見せたる花の吉原　おなじく

撫子の花の蕾の禿等におきかへさする質草の露　河上白翁

放生會—陰曆八月十五日、八幡宮の祭日捕へ置きし魚鳥を放つこと

うとの濱—有度濱、天人の羽衣を以て有名なる地、駿河國久能山下にして三保松原に連る、憂きに掛く

燈籠—盂蘭盆に飾る燈籠也

末社—幇間

酉時

十五、

たをやめが唄ふ俄の木遣歌さすが岩木も引出されけり　クリハシ　玉の屋潜

十三、

渾沌の玉子賣さへ來る頃や夜の世界のはじめなるらん　尾、　雙蝶園

放生會する望の宵に飛すらし禿が抱いて行く比翼紋　カナフ　右蝶

傾城の勤はうとの濱なれや羽衣をさへ質にとらるゝ　文丸

十、

吸ひつけてくれし煙管が始にて内のつまらぬ首尾となる客　アハ　猿人

來る駕に一つもからはなかりけり日本堤の暮六つの頃　クハナ　秀麿

懐に得もたぬ金の貳朱壹分まじり〳〵と見て歩くなり　ギフ　歌笑

うかれてはたゞ後先もなつ蟲の客も燈籠の火にこそは寄れ　三、寺郷　冬夜庵雨三餘

入、

西山に日はしづむ頃客の氣を浮して來たるたいこ末社等　アハ　六々園拔足

るなど、にぎはゝしき事いへばさらなり。

伊勢御ー伊勢守藤原繼蔭の女

せにかはり行くー伊勢が家を賣りし時の歌「飛鳥川ふちにもあらぬ我宿も瀬にかはり行くものにぞありける」遊女の質入れするをいふ也

山鳥の云々ー山鳥は雌雄峰を隔て向ひ合ひて寢ぬるといふ

二の町ー次の身分

おしこりー群り集り

すがゝきー店清播、前に註す

こゝらー許多

さうどきてー騷ぎて

酉時

たそがれの頃、童の格子の内に立ちて、さしむかひたる家の商人を呼びて物買ふとて、「むかひなる人々」と聲あげて呼ぶも美しげなり。又同じやうなる童のあかつきたる衣著て、包につゝみたる物わきばさみて走るは、何事するにか、かの伊勢御のせにかはり行くと詠みけんやうの業するにやあらん。男の格子の外にたゝずみて、内なる女と打さゝやくあり、互に山鳥の心地やすらんかし。中の間に伊勢の御神を祭れる所あり。しも男の來て鈴うち鳴らせば、あそび等は皆あるかぎり、格子の間に行きて居ならぶ。かの男は、御前の御燈を物にうつして、格子の間の油つぎにともしつく。横座に坐りたるは、やごとなきほどなるべし、壁には鳳といふ鳥をゑがきて貼したり。二の町なる女ばらは、此壁に背中おしつゝおしこり居り。籬のきはに並びたるは、それよりも劣りの方にや、此女ばらすがゝき高う彈き鳴す。大路にはこゝらの人さまよひて、格子の隙よりのぞく。燈三つ四つともしつらねて男の袖をひかへて、女ばら打交りそゝめきさうどきて入り來

さゝがに—蜘蛛
す—簾、簗

さゝがにのいとしき客もくべきぞとすを掛て待つ花魁もあり　ヌマ田　南湖

店者におさらばといふ袖さへもひるがへるなり茶屋が二階に　道義

中の丁はるのあそびもおのがじしつむ若菜屋にひける小松屋　千早八乙女

駒下駄もやすらふ君が道中はたてはてをすの茶屋が縁先　六樹園

三さけび—猿の三叫の故事に掛く、前に註す

鐵棒—道中の先に鳴らし行く鐵棒也「鬼に鐵棒」を掛く

黑髮に云々—諺「女の髮には大象も繫がれる」を採る

此けしき目によし原の申の刻水道尻もあかき夕榮　　強氣

來迎の生如來とはかんざしのあみだざしにもしるき道中　　春江亭

御託宣あげや町へと金持の客を守護してきたる江戸神　　おなじく

花魁の二日の禮の羽子板は客を虛空へ上げるためしか　　古道

八朔の小袖の雪は寒からで茶屋にもひらく拳酒の梅　　文丸

酒盛の中の丁にて聲色も三さけびばかりつかふ申時　　攝、ハツダ　深寢父

夕がほの花の咲くころ酒盛に客をのするか扇屋の君　　おなじく

八朔のしまひは誰かしら鷺の首長うしてまつ中の丁　　山ガタ　枝折

作りてし雪の達磨もよし原や尻のくされし客も見えぬる　　甲フ　素后

花もまだ初道中の申の刻今日を日よしと見ゆる突出し　　塵外樓

來る客をかく假宅の申の刻聖天町にまはす夏夜具　　松彦

鬼のすむ里にしあれば傾城の先に鐵棒ひかす吉原　　盛砂

居つゞけにあそび過せど足元のあかるい内に歸へる吉原　　柳花園

中の丁うたふ藝者の黑髮につなぐ象牙の撥鬢絲鬢　　アヒヅ　水莖園

日足ー東に掛く

けんをばけんとして云々ー論語「子夏曰、賢々易色」等に掛く

川竹の云々ー竹林の七賢人を採る

酉の町ー吉原の傍の鷲神社毎歳十一月の酉の日を祭日とせるをいふ

日足よりねうちもおちて西川岸は七つ下りのあそび女の衣　斛音成

たいこ等が狐拳する畏ならで女郎の膝にかゝる色客　千霞

かくれんぼ客が遊びの雪の日は遣手の熊も穴に隠れつ　織部

八文字ふり出す雪の白無垢を見にきた國や里の八朔　呑吉

晝見世のひけては客のつとめ迄さがる格子もみな簾なり　造花亭笑丸

酒盛のけんをばけんとして色にかへぬはふかき中の丁客　高サキ　本炭

傘に雨はほち／＼降りながらわき目はふらぬ君が道中　ヒカタ　舞鶴翁

川竹の流れの君の林には七軒人もまじる吉原　十日市　銀鶴

八朔の小袖の雪の道中にとけかゝりたる花魁の帯　高サキ　松花堂

揚つめをもらへる茶屋が口車のり地にかたる注進もあり　千英堂

うつし植ゑし櫻はなべてほめぬらん吉野初瀬と呼ぶ禿迄　トチキ　櫻籬亭家住

十二支の酉の町から歸るさの申の時よりあがる吉原　衣紋阪　和唐亭砂守

足跡のつくをいとへば大門をうたせて見たき里の雪の日　松成

旅人の宿かる頃においらんは出でてくるわの花の道中　瞬馬

七つ下り―諺「七つ下りの雨と四十過ぎての道樂は止まず」

りやん―拳の語にて兩の唐音

簾云々―白樂天「香爐峰雪撥ㇾ簾看」

富士がへり云々―本郷區神明町の富士淺間社は毎年六月朔日祭禮にて、境内にて古來麥藁細工の蛇を賣れり

通人も通を失ふ中の丁茶屋に天女のあまくだる頃　有明

初雪のうすいなじみも約束の話のつもる客を待合　數寄道連

せかれし身くるよを待ちて佇めば西日に長き土手の人かげ　魚屋田作

晝あそび七つ下りの別路にふり出す雨のやまず通はん　おなじく

連れて出る禿がとしも七つ梅茶屋の二階に客むかへ酒　六極園

七軒の茶屋に拳うつ武士の客に藝者もりやんはとりますといふ　彌壽丸

中の丁簾のもとにさわぐのは卷上げて讀む新造の文　おなじく

茶屋の門まづ水うてと夕景色ひとくみ來たる見番藝者　道列

香爐峰の雪の顏見る晝見世のひけて簾のかゝげ手もなし　響灘丸

藝者には酌をとらせて客人の舌鼓うつ茶屋の酒もり　玉藻

見てばかり歸るもつらき入相のかねがさきだつ吉原の花　形言

七つ頃來る約束も富士がへり蛇の出るやうな嘘をつく客　裾廣

中の丁雪見の客はさしあひのあとつけておく藝者幾組　見分

あわ雪のふる日もあれど中の丁つもるけしきのみえぬ酒盛　氣丸

ひるがへす—飜す、翻す
猿がう—ふざける
九郎助—九郎助稲荷、里の洒落

何もかも時のおくれし此里に六つの花をも七つにぞ見る　おなじく
團子茶屋あたりでとりし手拭も丸めて見たるそと八文字　おなじく
米つきの臼をしまひて歸る頃やはりしらけて歸る晝客　三友
吉原の雪を見すてて歸るのは冷い金の惜しくやあるらん　おなじく
くむ酒のさめずあれかし五十年榮花の夢のまん中の丁　且平
朝かへる客をばとめて道中になどひるがへすうかれ女が裾　おなじく
時も今猿がう客は新造に引つかゝれたる茶屋の緣さき　獨樂堂
中の丁お客は二階供人は酒を勝手にのめとおひやる　おなじく
酒盛も八つと六つとの中の丁藝者が拳のちゑいと出す指　淡州スマシマ　和合亭方丸
酒もりにけんをうてども此里は蓬頭突鬢なる人はなし　小枝
雪のごと白無垢を著て花魁がかゝげし裾も富士山の形　おなじく
二階から見はらす雪も吉原に九郎助迄の屋根も眞白し　素直
傾城のねぐら離れて[illegible]ながら飛ぶ吉原の雀色時　全亭
子を賣りし親の哀れはしぐれけり七つ頃なる里の夕暮　おなじく

雪の築山—清少納言の枕草紙中なる雪山の話に取る

駿河より云々—吉原はもと慶長年間に駿河國元吉原の驛より移せるもの也

時しらぬ雪—業平「時知らぬ山は富士のねいつとてかかのこまだらに雪の降るらん」

つき出し—成年の女子の買はれて遊女となり始めて店へ出づること

すがゝき—店すがゝき、遊女の張見世をする時、内藝者の三味線のすがゝきを爲すこと

花魁と雪見の里の誓には寒さにあらぬ指をおとせり　同　雛亭

妹が手を枕草紙もよし原に居つゞけて見る雪の築山　カナフ　右蝶

中の町はる花魁は三日月の出るかとそりをあはす道中　氏家　文車

色かへぬ松の内とて川竹のきかざりて出る初春の禮　一徳

駿河よりひきし廓も八朔は富士にゆかりの時しらぬ雪　吉井　行康

子の日よりさきに禿のみどりをも引き連れて出る里の松葉屋　同　芳輔

雪見する二階座敷へ雪ぞらのきいろな物の散るも吉原　仙ダイ　路喜代住

中の丁植ゑたる花に刻限のさるもさがりて見ゆる緋櫻　塵六

色容のうるほひとなる質草は誰しら露の夜半におくらん　おなじく

時の名のさる利口とて傾城にきてはよまるゝ鼻毛三本　栗々法師

中の丁すらりとはるの夕景色櫻より猶目にぞつき出し　おなじく

人々の見にとくるわの年禮は目に正月の二日なりけり　裏行

すがゝきの手はやすめどもさるの時晝見世をひく里の傾城　長女

降りし雪を見れば二階の藝者迄ころがしかけてかたる富本　清記

川竹の流れに遊ぶ盃も千鳥にとばす雪見酒もり　春影
散り初むる櫻にかへて入相に殘れる物よ見世の花ござ　年積
里なれし雀も雪にうかれ來て思はず罠にかゝる吉原　高サキ　福壽園春風
茶屋へ出て雪見る内も居つゞけの身の白銀のつもる北國　玉村　直延
來て見れば櫻の折の折もよし我も折りたき花の吉原　藤チカ　友由
櫻にはあらでながめも吉原や六の花にもいとふ駒下駄　イケダ　陽記
中の丁植ゑし櫻やおいらんのはるを待ちえて來たる大盡　同　一宗
からき世の事も忘れて砂糖はどあまぎる雪にあそぶ吉原　同　圭馬
酒くみてあからむ顏もさるの時客の好みをうたふ藝者等　同　廣孝
六の花見つゝ女郎がふともゝの雪に踏込む客人のあし　おなじく
傾城に心の手繩ゆるしつゝうま酒をくむ樓屋がもと　おなじく
此やうなお客もあらばよし原や花をぱツ〳〵と散らす春風　雙蝶園
傾城の淺き情にくらぶれば雪見の客の深き足跡　ギフ　狒々丸
此里に嫌ふ箒の客もなく掃かぬをめづる雪の吉原　おなじく

あまぎる—雨雪にて空の曇ること、甘きに掛く

江戸節—大薩摩節より分れたる俗曲の一種

つるしぎり—高尾は仙臺候につるし斬りにせられたり、吊しぎりに掛く

八文字ふむは韻字かから歌といふ花魁も茶屋へはひりつ　同　影法師

傾國はおろか日影のかたぶくも知らで樂む居つゞけの客　信、松代　蘭薫亭薫

客人の心の駒も花魁につなぎてちらす花の夕榮　小ハタ　繁喜

裲襠の縫も夕日に色さめて七つ下りの西川岸の客　米守

おいらんと凍てついたるか中の丁かへりもやらぬ雪の北國　櫻花亭金丸

夕櫻入相はまだつかねどもうなり出したる里の江戸節　仙ダイ　山路

藝者等にうかれて客も三味とりて人まねもする中の刻頃　おなじく

客は目もちらつきながら北國の六つの花をも七つにぞ見る　同　松友

金銀を惜まずつかふ吉原は礫打する雪の白かね　同　愛雄

中の丁うき世の人に煩惱の犬をぐるはす八朔の雪　同　千柳亭

吉原は夕日まばゆし見る花の外に錦もかざる傾城　同松山　松千代道

雪見酒高尾のむかし思はるゝつるしぎりなる茶屋の鮟鱇　イカホ　蒼々園葭成

北國の雪をながめの道中にそりを見せたる花魁の腰　同　安麿

客の袖に禿つながる櫻時さるのさかりの花もよし原　鈍々亭

九郎助—黒の洒落

制札—「伐二一枝一者可レ剪二一指一」の制札、前に註す

天人と心そらなる客や見ん花の雲路をかよふおいらん　山邊無人

中の丁入相ごろは櫻木の外にも散れる花ぞありける　八王子 丸主

刻限のさるにひかれておいらんの心の駒も出る中の丁　鳳山坊

花も又ゆふべ映あり酒の池肴の山の中の丁には　郡内 金英園

吉原の雪より白きけいせいの中に目立ちし九郎助稻荷　桐生 志歌久

北國の雪のはだへの道中は姿にそりを見するおいらん　高サキ 富貴亭繁昌

雪のはだふりつもりたる揚代の道がつかねば歸られぬ客　同 壽女

惡からじきぬ〳〵ならで客の來る夕ぐれ告ぐる泊烏は　同 茂葉

制札は花に見えねど傾城の指をきられし吉原の沙汰　同 白鷹軒

北國は花の雪つむ道中をそり身になりて歩むおいらん　同 兎卜

北國の雪見の客を乘せながらしるしの棹はたてぬ猪牙舟　錢成

別れ酒出す汲物に居つゞけのしたぢとなりし吉原の雪　おなじく

江戸丁のふり出しより京丁へ道中を見てあがる客人　水垣

愛敬もこぼるゝほどの左酌花の七日もさとに醉はなん　催馬

はりー張、針
てうしー銚子、調子
こもりくのー初瀨の枕詞、籠るに掛く
初瀨の一口ー伊勢「鬼はや一口にくひてけり」に取る
猪牙ー猪牙舟
きばかりー牙、氣ばかり
こしあんばいー漉餡、腰鹽梅
このみー此身、木の實

暮ちかき日あしはとまれ色酒に御機嫌なよめならぬ大盡　　おなじく

客を待つ座敷にいけし鬼薊花にもはりをもたす吉原　　紀三井寺山下　紀貫澄

咲く花の雲井のどけき中の丁天津少女にならふ雛鶴　　裏成

中の丁雪はつもるに酒はまだてうしを直す三味線の音　　羽風

他生の緣むすび給へと詣でけり行きかふ人も袖すり稻荷　　雅雄

見る人の花にのまれん此里も鬼こもりくの初瀨の一口　　江又　保住

禿にもよし野初瀨の名のあれば雪見もやはり花のよし原　　甲、市川　常道

傾城も油汗して中の丁みな盆禮にまはり燈籠　　三、　廬山人

舟は堀にのこして猪牙のきばかりが先へ乘り込む中の丁客　　婦美多餘理

竹村がひさぐ菓子より花魁のこしあんばいのうまき道中　　おなじく

晝見世をはるの日影の七つ時ながくなりたる傾城の首　　酒落柿

聲色の男藝者の三味線によび出しの手をひく中の丁　　おなじく

口々に茶屋もおいらんお早うと氣をつけ金の光りかゞゆく　　成丈

中の丁の酒と櫻の色にめでてこのみ忘るゝさるの刻限　　エドサキ　元有

に假宅を許されし所にて、聖天町は一定の大枝樓のみに特に許せる也

き―氣、木

きの字―きの字屋

つくばねの云々―羽子板の羽、二荒山嶺のこのもかのもにかげはあれど君がみかげにますかげはなし一つ振り

富貴―古來牡丹を富貴の花とせり

源氏―光源氏

駕にのり虎ほどかけて吉原へ來し刻限の申も七つ目　おなじく

さしもせぬ盃に迄手を出す申のさかりの座敷すゞしき　桂樹園

酔心雪見の景色よし原やとはいへふるはきにかゝりぬる　エチゴ白根　如鷺園彌佐平

傾城も春の禮儀は門々へ言葉をちらす花の吉原　梅枝園初音

おいらんの年禮ぞよき梅が香をとめたる袖の新造もつく　タハナ　燕子樓

此雪にどうして内へ歸られう一寸さきも見えぬ居つゞけ　おなじく

客は又きの字が臺の價迄つもるながめや雪の白かね　カジカ澤　花咲

晝見世は過ぎぬ夜見世はまだはやし中の丁なる酒もりの客　おなじく

白かねと雪をめづるも吉原や小判の形は駒下駄のあと　白川　竹盛

傾城が著かざる衣は薄けれどあつき詞をつかふ中元　同　員照

かよひ來る客の心にくらべては中々あさき里の初雪　同　其葉

つくばねの板を持たせて花魁がこのもかのもに正月の禮　ワカ山　浦見女

夕日影縫の牡丹に照り添ひて富貴の客を待つ中の丁　同　薫

源氏ほど色好むらん元服の申の刻よりきたる大盡　同　太記

折りなば云々―須磨寺の若木の櫻制札に「一枝於折盜之輩者、任天永紅葉之例伐一枝者可剪一指」

三枚の駕―三人舁の急ぎの駕

門松と云々―秦始皇の松を封じて五大夫と爲せし故事あり

三叫のさる―巫峽の猿の故事を掛く

かしこ人云々―晉の竹林の七賢人の遊を振る

十かへり―松を「十かへりの花」といふ

かり宅―吉原の燒けたる時廓外にて假に營業する事をいふ、借りたくに掛く、山の宿聖天町共

花魁のとけかゝりたる帶の上に又ふりかゝる花の白雪　同　六々園拔足

楊貴妃や小町ざくらも二階から下に見て居る花魁の顏　おなじく

吉原は鬼も住めばや褌になるてふ虎の尾ざくらも見ゆ　おなじく

吉原に若木の櫻うつし植ゑて折りなば客の指も切りたき　同　和琢舍

牡丹てふ花の姿のおいらんにみだれて遊ぶ獅子拳の曲　アハ　米露庵咲穗

中の町雪見催す座敷にも箒の名ある客はいみもの　尾、　眞澄

三枚の駕を物日に飛ばせけり今日のしまひものみこんだ客　同　影住

門松とおなじ太夫の年禮は針めのしげき縫箔の袖　ギフ　歌笑

鳶がうみし鷹の化したる鳳凰も又鷺となる里の八朔　尾、　雅流園

三叫のさるの時には中の丁茶屋も肴のはらわたを斷つ　クハナ　秀丸

かしこ人の七つ時には糸竹のはやしに遊ぶ中の丁の客　おなじく

吉原のさるの時とて傾城にまはされて居る客人もあり　吾友亭蔭久

柳腰眉つくる頃十かへりの客の花さく松葉屋がもと　梅景

かり宅も山々の宿おほかるに聖天めきし客人も來つ　濱荻

松の位―大

富士にむかひし云々―富士見西行、西行桜は京都大原野にありし名花

酒もりの中の丁なる獅子拳に牡丹もくるふ床の活花　同　猿人

ふりつみて琴の音迄もとめてけり松の位も雪のながめに　おなじく

細見のしるしの星の花魁に氣もそらとなる居つゞけの家　おなじく

北國の名も吉原の雪女そりかへるほど誰も見ほれつ　同　住の江右丞

もろこしといふ花魁もあればにや虎の尾ざくら植ゑる吉原　同　六々園

花魁の道中をする所とて植ゑたる花の雲助も見ゆ　おなじく

花魁の目もとのしほと散る花の波に心のうく中の丁　おなじく

年禮の姿は天女と見るもむべ三穂に名のある松の位は　同　有大甚

降りつめば庭の木のみか花魁の客も寢さする雪の吉原　おなじく

花魁の膚ばかりか咲く花の雪にもくるふ煩惱の犬　おなじく

犬のみか四足のある炬燵迄ふみくるはする雪の吉原　おなじく

晝見世をひく其頃は賣れ殘る女郎があくびも六つ七つ時　手枕歌種

王の名の櫻の折は君と呼ぶ松の位も花の下行く　同　物早麿

いろ／＼と上見る花の吉原や富士にむかひし西行ざくら　同　千萬

江戸ならば七つ坊主の來る頃に禿は文を拍子木にうつ　獨樂堂

九、

八文字ふむおいらんの外に又十文字ふむ醉どれの客　アハ　六々園

中の丁春はゆふべの頃からと櫻にいさむ駒下駄の音　イカホ　年重

花魁の柳のこしもこきまぜて櫻の折は錦なりけり　塵六

天人や天下りけん中の丁客はこくうに花ふらす頃　、道義

うたはせし藝者の外に客人の跡をひいたる居つゞけの酒　素直

八、

咲く花を吉野と見てや傾城のちもとをさぐる客人もあり　アハ　雲多樓

けし坊主の禿もついて見ゆるなりこれや名におふ唐土の君　おなじく

うかれ女といふもことわり四文錢の波まかせなる里の西川岸　おなじく

細見に星のしるしのあればとや花の雲間に出づる花魁　おなじく

植ゑおきし櫻ばかりか中の丁をはるには花を咲かす花魁　同　起兼

二日醉の顏はほとけの色に似て極樂といふ里の居つゞけ　おなじく

柳の云々ー「見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」

ちもとー乳元、吉野の一目千本に掛く

たび—足袋、旅

年寄の冷水—諺

あけ—開け、紅

こし—越、腰
そり—橇、反り
三筋—諺に、三筋は人に毛が三本足らぬといへり、三味線に言ひ掛く

申時

十五、
道中は日々にすれども素足にてたびとはさらにいはぬ傾城　郡内　金英園
中の丁年始の客の夕風にまきちらす紙や春の初花　道列

十三、
三味線の三下より夕暮の七つさがりに晝見世をひく　高サキ　八重疊平郡
年寄の冷水ながら玉露糖もらひし茶屋へ新造を呼ぶ　有明

十二、
日も申のさかり秋葉の燈明に水道尻もあけに見えぬる　水垣

十、
咲く花の雪にもやはり國の名のこしにそりをば見する花魁　アハ引號六々園　雲多樓紀拔足
衣がへ仕立おろしの藤色は客をまつ屋の緣にかゝりつ　三友
毛の足らぬさるの時とて中の丁藝者の三筋そふる酒盛　タハナ　千枝丸

ましー汝

あが君ざねー大事のこちの人。大和「春の野に繇には乀るさねかづら我君ざねとたのむいかにぞ」

おもとー自分の姉女郎をさす。

から聲ー嗄聲

るじあわてて、紙もてかい拭ひつゝ尻目にかけて言へるは、「ましが我に懸想して、しばし文おこせつるを、うけひかでありしを、ねたしとて斯かる事はしつるなめり。されど誠に惡しとは思はざらまし」といへば、女、「いかゞは、あが君ざねとこそたのみ奉れ」といひて笑ふ。あるじ客人にむかひて、「彼は眞實のすみかと定めて侍れど、本性のひがみて、密男をのみまうけて語らひ侍り」といへば、女ばら手打たゝきて笑ふ。かゝるに、向なる簾のうちより、童くろき足駄はきたるが、櫻の枝一本手に、うちさゝげて入り來ぬ。まらうどに添ひ居るあそびが前につい居て、「あがおもとの聞ゆなり、此一枝花もをかしう侍れば、奉るになん。今宵は櫻田なる御心しりのわたらせ給うける由、わりなう嬉しうこそ思すらめ。うらやましうこそ思う給へらるれ」といふを、客人はほの聞けど、知らず顔つくるもをかし。何事かこまやかに答して、「よく聞えてよ」といへば、童は足早に立ちて往ぬ。その隣なるは、簾おろしたればよくも見えねど、男どち並び居て、から聲にうたふ。「つね聞く鳥もわかく〳〵と」としをり上げたる、絲のしらべもほそく聞えて、かみさびぬる聲づかひも樣ありげなり。

申時―午後四時
さうぞき―著飾り
あそび―遊女
しひそし―強ひすゝめ

申時

夕日西にかたぶく頃、おのがじしさうぞきつくろひて、童ひき連れて練り出でたる、此世の人とは見えず。柳櫻山吹など折からの色あひつき〴〵しく、縫ひもの象眼など、目もかゞやくばかりにて、裾ながうひきたる上著ども、いみじうなまめいたり。こゝは大門よりの直路にて、中の町とぞ呼ぶめる。家ごとに簾かけて、軒には花色に染めたる布ひきわたしたり。妹だつ人の肩にかゝりて、簾の中なる人に物打いひて、やをら隣の方へあゆみ行く樣、いとのどかなり。こゝにある家どもは、あそびが許にかよふ人のしばしのほどの中宿とて、打やすろふ所となん。彌生の頃は、花の木ども所狹う植ゑわたしたれば、右左の樓をかけて、白雲のかゝらぬ軒なし。客人と思しきが、懷大きやかになして、端居して居り。あそび二三人、小さき童二人添ひ居たり。歌うたふ女ども四人ばかり、高やかに打笑ひ、酒しひそしそゝきさわぐ。客人、あるじに杯さしたるをいたゞき居るほど、女ひきさして瓶子取りて注ぐに、酒したゝりて膝のあたり濡れぬ。あ

一月寺―下總東葛飾郡にありし有名なる虚無僧寺、一月に掛く
針妙―裁縫女
小菊―美濃産の小形の紙
十點かけて―時鳥の異名なる「てつぺんかけたか」に掛く
飛龍天にある云云―易經乾卦「飛龍在レ天、利レ見二大人一」に據る
六阿彌陀參―春秋二度の彼岸の入りに東京の六阿彌陀に詣づること

虚無僧の天蓋かぶる内の首尾一月寺ほど居つゞけの客　筆持
針妙の居ねぶる頃に燒つぎがはいつぎ物と出す丼　おなじく
虚無僧の來るに二階のむかひ酒むかひぢ吹いて來るも吉原　巴輪亭常乘
刻限もひつじとなれば初見世に屠所の歩みと出づる傾城　風流雪
はな紙の小菊そへてやおくるらん籬ぎはなる傾城の文　郡内　金英園
宗匠の十點かけて來る里に晝も八聲をなくほとゝぎす　羽風
晝見世の軒端へつたふ春雨にぽち〳〵はなす傾城もあり　甲フ　多理雄
日ざかりに見世をひらいて傾城の晝顏みする花の色里　鹽部　友鴨
川竹のうきふししげき廓中をあなにく吹いて廻る虚無僧　ワカ山　薰
大蛇程見めよき物をすきやせん八つのかしらに呑みに來る客　太記
飛龍天にあるうらかたに大じんを見るに利ありとさとる傾城　おなじく
傾城の手管にかける文のあやの糸によるてふ客の玉の緒　得魚
物かふにむかうの人とよばひ星跡を引きたる禿等が聲　織部
六阿彌陀參にのぞく晝見世にをがみんすといふ聲の聞ゆる　六樹園

ひとよきり—一節切、一夜だけ
かち—徒歩、褐（播磨褐飾磨より染め出せり）
おもて—顔、易の表
避嫌—連歌の語にて、同じ物又は類似の語を、近接したる句と句とに重り現はれぬやうにすること
かうし—格子、孔子
行平鍋—行平と松風との三年の馴染を採る

思ふ客の辻卜にたつ虚無僧のひとよきりなる竹もうとまし　甲、市川眞河

家々にはや晝見世をはりまがたかちで來る客駕で來る客　おなじく

床花を打ちし其日のかへしにも口あたりよき煙草おくりつ　花咲庵米守

土手通り茶屋の名に呼ぶ編笠におもて隱してうらなひも來る　蝶形亭黒金

山吹のその色客がとだえしをきにしておくる露の玉章　千英堂

かきくもろそら生醉の晝遊びわるふざけせばふらんけいせい　素粂房古行

十年の苦海も長き巻紙とよく書きのめす傾城の文　松成

俳諧の連歌にさへも此里は避嫌なく花やめづらん　小・枝

子を捨てる藪とし聞けば惣菜に竹の子を煮て食はす遊女屋　おなじく

晝見世のぞめきにまじる醫者學者いづれかうしの内を覗けり　素直

ほころびも縫へじと思ふ傾城の見世はなか〳〵はり仕事なり　有明

とん〳〵といりこむ晝の中の丁太鼓を連れし巴屋の客　おなじく

われ物を抱へおほえし轡屋に茶椀鉢屋が煮てつかへとや　おなじく

三年ぞと里の年季をかぞふ頃行平鍋を出す茶椀屋　全亭

丸に井―平井權八の紋
蛇ほど云々―八頭大蛇の故事を採る
十二銅―喜捨の十二文の錢
梵論字―梵論に同じ
日文―火に掛く
山田やん人―山田屋人、用をたす商人を「向うの人」と呼べるが後には「何屋人」といふに至れり
うし―憂し、牛

口紅の眞赤な嘘を書きのせて家を卷き込むうかれ女の文　おなじく
居ならびて晝飯くひし傾城の腹の外にもはるは晝見世　一德
あの梵論は權八などとたはれ口一日丸に井つゞけの客　道義
晝見世をはるぞと小見世西川岸に花見物のついてにぎはふ　氏家 文車
蛇ほどのむ客くる晝の八つがしら人身御供にあがる新造　獨樂堂
格子から鏡へのせた十二銅ひねつて顏を見せぬ梵論字　成丈
約束をはづさせじとてうかれ女が智慧の輪出してかける長文　且平
水くさき心を客に見せじとや日文日起請おくるうかれ女　おなじく
賤が子の身は吉原に禿して物買ふにさへ山田やん人　友賴
見世先のおみき德利を引いて又一對づつに並ぶ新造　强氣
吉原にはりのあればか蓍木もて見通しといふ法印も來る　三友
種をまく文や書きけん傾城の顏にはたけも見ゆる晝見世　清澄
血の出づるかねではうしときがついて未にかへる居續けの客　彌壽丸
何時と聞く傾城にうれしがるやつさと言うて返事とゞける　みちづれ

めどぎ—目、箸木（卜の具）
ねん—年季、念
紙を肴に—紙花をいふ
おして—強ひて、捺して

うかれ來る人を手管にころさんと命とりめが並ぶ書見世　おなじく
なまぐさけなき觀音も書買の出しにはつかふ吉原通ひ　おなじく
法印のうらなひよりも傾城は人のめどぎにかゝる書見世　おなじく
茶椀屋を魚の如くにとり巻きてあみの目からも禿手を出す　玉聲亭形言
證文にねんを入れしは判人へさうでおすとぞ花魁もいふ　出雲洒落柿
傾城をうらなはんとや卦の數の八つ時ころに來ぬる法印　裏　行
時は今ひつじと聞いてとりあへず紙を肴にくれし客人　栗々法師
四手駕土手をとばする書買は其あひかたにのせられし客　若　女
書見世をはるの駒とてつながれし櫻にとまる遠乘の武士　おなじく
文をかく顔美しき傾城の硯の水もひとたらしなり　清　記
惣栄につくそのいもに傾城は鐘をかぞへて八つがしら食ふ　山川亭道足
見世先へ茶椀鉢屋の音してはかけ出して見る花魁もあり　悦　氣
年いるゝ折は餘儀なく判人におして無心をいはるゝも憂し　桂　樹　園
金のある穴を見出して狸毛の筆もて化す傾城の文　曉　丸

雁がねの云々—雁は春北へと歸れば也

留袖の新造—花魁に仕ふる傍客を取る遊女

片敷く—獨り寢を爲す、「晝」に「乾く」を掛けたり

ぼろ—梵論、虚無僧の類

うら—卜、裏

そん—損、巽

錢首—錢持首とて、領の折れたるをいふ、

雁がねのかへりし客の噂して皆晝見世をはるのうらゝか　オクフクシマ　狂歌庵

傾城の書く玉章の其文字は一字千金にあたるなるらし　同桑折　天津房御空

口ほどはまはりかねたる長文に筆のあたまもわらす新造　高サキ　本炭

晝寢して結ひおくれつや新造の未の時に髪すくもあり　おなじく

進上とおくれる鯛はむしられてあらを見出す晝見世の床　川ゴエ　花人

晝見世をはる風に名も梅が枝の香を留袖の新造も見ゆ　マヘバシ　尙雅園

太皷もちはやし立てては吉原の客に居つゞけうたす傾城　藤丘　勇

傾城の嘘書く筆は狸毛よ八疊敷もあらう長文　同　千壽樓片丸

傾城の肌もよからん越前屋内と書いたる奉書半切　仙ダイ　明益

晝見世をはるは賑ふ花の里柳の眉もつくるおいらん　同　近道

ふられては我のみ濡るゝ居つゞけに片敷く袖の晝遊せり　同　壺凊樓垣道

手の内はぼろに取らせて笠の内の顔を鏡にとれる傾城　吉井　行康

法印がうらはともあれ表には出されぬ間夫にそんの卦ぞ立つ　江戸サキ　商元有

傾城も百がぬけじとはかるらん錢首目だつ晝買の客　玉藻

はり―張り、釣針
ひつじ―未、屠所の羊
夢見草―櫻の異名
五十軒道―吉原遊廓の外の日本堤より大川への通路、五十年を掛く
目くじら―目角、油の縁の鯨に掛く
うらかた―占に出でたる象、浦潟に掛く
なんざんす―難產に掛く
正燈寺―淺草龍泉寺町にあり、紅葉に名あり
紙―羊は紙を食ふより云へる縁語

花魁の持つはりをもて客をつるゑばが蚯蚓のやうに文かく　同石マキ　繁路

見世をはる未の刻は八つ房の梅がかぶろも越後なるらん　トチキ　櫻露堂

傾城は苦海の見世へ刻限のひつじの歩みしてや出づらん　浮淵

川と見て波だつ筆や長文に書かれて客は浮きつ沈みつ　山雪樓綿人

吉原の夢見草にや晝客も驚に榮花の五十軒道　歩

客の身の油とらんと傾城の目くじら立ててうらかたによる　犬馬

證文の名まへばかりか目見えから噓までついた判人の口　イカホ　年重

客をふる噂をきけばさて惡いやつぢやとつける淺草のかね　同　一樹園

をかしさは坊主頭のうらなひが卦をたてて居る花魁の部屋　同　安丸

紋日をば客に孕ませ傾城のなんざんすとは惡い挨拶　穴住

著物さへ晝過ごろに飛道具鐵炮見世にくらひこむ客　高サキ　壽女

女房の耳にはもみぢ正燈寺豆腐に名あるよし原がよひ　同　茂葉

水あげは花にゆづりて女郎花いけ置くそばにくねる新造　同　松花堂

刻限のひつじに來てや一枚の紙に年季を入るゝ判人　同　蚫定岡

松花堂―京都にありし書家、書の巧なるをいへる也
しやち―車地、大なる轆轤
六つのはな―六つ時のはじめ、六花(雪)

よべの客つまはじきしてそしる時茶椀鉢屋の來るも此里　おなじく

封きりて見たらころりと松花堂うまみをかける傾城の文　朝寢種盛

筆の先しやちは物かは吉原に家を巻き込む傾城の文　數寄成

籬からむかうの人と呼ぶ聲ぞ菊のといへる禿なるらし　錢成

身の上をはづさずあててあげますと鐵炮見世へ入るうらなひ　おなじく

水あげもせぬ禿等が瀬戸物屋まるりいしたと持ちしわれ物　水垣

晝見世をさながらはるの櫻がり花の笑顔を見する毛氈　麟馬

晝見世をはるも小見世のうす氷とけて流しゝ西河岸の客　德馬

絲萩に墨をすらせて書く文は夜のつま戀ふ鹿のまき筆　クマガヘ 清明軒裏吉

晝飯に向うの人と松葉屋に呼べる禿はみどりとやいふ　晴昇

晝見世をはるのけしきや傾城のならびし花の顏もよし原　仙フ 唐琴

狸毛の筆で女郎の書く文は大ぎんたまの客や釣りかた　同 千柳亭

錦繪にすがたを畫けば晝見世の柱かくしとなりし花魁　おなじく

晝買はいづれしらけた物にして六つのはなには歸りてぞ行く　千錦堂

うら島—裏、浦島
なんきん—無し、南京
はる—張る、春
きさご—來、きさご彈き(遊戯)
よね—遊女
五丁—吉原五丁町

傾城のわが身のみかは置く質もやはり流れの苦は絶えぬなり　おなじく

釣針をたのしみに來る晝買の客はうら島が子か　甲フ　常雪

ひえ蒔をねだる禿もにくからず鷲の立居に田舎戀ふれば　文丸

惣菜をもる晝飯の時きけば今淺草の八つがしら　催馬

晝飯をくふ傾城の大口もお座のさめたる漬茄子の色　小ハタ　繁喜

肴屋の跡より如在なんきんのさしみ皿もてくるは商人　高サキ　影法師

裲襠の模様の鯉のはしりがき右へ流るゝ瀧川が文　臥龍園

晝の見世はるはのどけし打かけのわきて目にたつ鶴屋松葉屋　水鏡亭梅景

晝見世をはるもきさごの八つあたりねふ一ちやうの玉屋扇屋　春影

もし人は吸ひつく蟲と見もしなんよしやよし原ひる買の客　ハニフ　壽女留

よねの名も五丁にひゞく瀧川を看板にうつ土手の水賣　春江亭

ためになる客に心のうつりかへねだるも文のあやめかたびら　升成

まだ青き禿は七つ八つ房の唐がらしより辛き世わたり　上、七日市　赤松銀鶴

晝見世の長きを佗びて書く文にかたちを崩す文字の居ずまひ　タリハシ　玉の屋

判人—遊女の口入業者
夜の物—夜具
雀色時—夕方
鬼住む里—遊里
八つと七つ—二時と四時
めど—目途、めど萩めどきに言ひ掛く
さゝがに—蜘蛛

判人と呼ぶ名もむべよされば其顔ににくげははなれざりけり　おなじく
言譯はくらくなるともよし原や此面白きひるの遊びに　白川　治
床花のかへし文こそ中々にかへす〴〵もかきのめすらめ　甲フ　常道
夜の物あらたにつくる祝とて寢覺てふ名の蕎麥もくばりつ　盛砂
晝見世に敷きならべたる花ござにふはりとかをる風の裾まく　松彦
雀色時ともならば晝買の客もとまりをかけん吉原　岡山　道の屋
鹽花もきえし八つごろ傾城に床で吸ひつくひる買の客　おなじく
法印にうらなひ聞けば魂のうせ物と見る居つゞけの客　池田　長房
傾城が痩せぬといふは噓なれど細くなるほどつかふ巻紙　おなじく
春風をいとへる花の吉原へくる虛無僧も吹くは御無用　同　陽記
おいらんも茶椀鉢屋の來る頃はさら〳〵〳〵と書く數の文　利企　つたふ
晝ながら鬼住む里を見せつきや八つと七つの魔の物にして　裏成
傾城の錦みだるゝ籬さき萩のめど見るうらかたの人　松蔭
さゝがにのいとなみに張る遊女見世晝間も客の來て懸るなり　三ノガナフ　紅園右蝶

紋日—廓にての衣服を着替へなどする紋日、門柵に掛く
表—俳諧の表に掛く
みとり—見とり置、緑
かしくの針—「かしく」の假名書は釣針の形に似たれば也
引込禿—引込新造、遊女の見習をなすもの
りやん—兩の字の唐音にて二つ、拳の語
く—苦、句

紋日をばいふに及ばず身上もしまうて來よと文や書くらん　雅雄

傾城は大工たのみておく座敷表ばかりをつくる俳諧　六極園

會うた夜の詞のみかは客人を又もかきぬる傾城の文　甲、カジカ澤　秋野亭笠人

晝見世をはるの女郎の柳腰みとりにせんと客の來ぬらん　おなじく

傾城はつり出さんと書く文のかしくの針にかくる客人　タハナ　千枝丸

荷ひ來る茶椀鉢屋の外に又われ物を持つ引込禿　同　秀丸

晝あそび口さかしくも拳酒にりやんと打出す客はおやしき　同　蝶宿亭香摘

傾城に口の車をまはさせて客を引き込む花の吉原　上、ヌマタ　青晴舍南湖

おいらんのかへしにつかふ煙草箱あけて匂ひのたかき丁子屋　濱荻

文使の男のみかは客人の迎に筆をはしらせて書く　山ガタ　門盛

宗匠の高點よりもおいらんは物日ばかりをくにしてぞ居る　木工女

晝見世をはりし表におとするは客が連れたる太鼓なるらん　尾、　龜丸

虚無僧の笛おもしろく松葉屋の軒に音を出す鶴の巣ごもり　ギフ　歌笑

琴のみかくみ茶の椀もよし原に爪音させてひさぐ市人　おなじく

うらかた—占ひ
くも—苦も、蛛蜘、「我せこが來べき宵なりさゝがにのくものふこなひ今宵しるしも」
小鷹の紙—小鷹壇紙、判の小さき壇紙
三枚の駕—三人して舁かする急ぎの駕籠

色容の今宵くべきのうらかたに少しはむねのくもさがりぬる　アヒヅ　水莖園

床花の山吹色のかへしにはみになるほどの品もおくらず　甲フ　衣紋亭裏襟

客の氣はかうとつかんで傾城が小鷹の紙に書ける玉章　アハ　雲多樓

今朝駕でかへりし客へほどもなく又かきおくる傾城の文　おなじく

晝見世をはるの錦か傾城の柳の腰に花のかほばせ　おなじく

蟲の名のひる見世をはる傾城もやはり吸ひつく物にこそあれ　おなじく

けに汐のひるめし時と座敷にも帆立貝まで見ゆる吉原　おなじく

大鷹や小鷹の紙にうそ迄もとりまぜて書く傾城の文　おなじく

傾城の高笑ひする門口にふき出したる虚無僧の曲　同　長をり

床花のうつり香おくる袖の梅さくやの醉もさます吉原　氣丸

つじつまの合はぬ噓さへ花魁がかいつまみ書く文の封じ目　おなじく

二枚舌つかふと知らで三枚の駕を飛ばする晝買の客　尾、　影住

ふと股へ泥田のやうに踏み込んで口すひに來る晝買の客　クハナ　蛤丁樓

客人にうそ言ふ口へ傾城もおのれとうまく食ひし晝飯　同　南淵舍南淵

もん―門限
細見の星―前に註す
北―北里
猪牙―猪牙舟
八のかしら―八つ時の上刻、八頭
かたな―封のメの字

未時

十五、
大小も貫の木ざしの晝買はもんに限りのありて來る客　成文
晝はまだ空に見えねば細見の星を目當に北へ乘る猪牙　高サキ　兎卜

十三、
吉原の八のかしらは大蛇より酒をすごして晝買の客　池田　圭馬
傾城の雁がね額見たてけんとこよといそぐ晝買の客　古道

十、
書く文もまき直す頃もう時も細螺彈の八つとこそなれ　塵六
晝あそび時もおやつの太鼓もちおありがたやとふし拜む客　獨樂堂
ちのよふの客へ送るか封じてはかたなを記す花魁の文　イカホ　安廬
奈良漬の舟も向うと呼んで買ふはし場にちかき里の禿等　二字守

八、
晝見世をはるより春の日あしほど長々と書く傾城の文　三、　廬山人

はるく―晴るゝ
やうにする
けそう―顯證、あらはなる事
こちぐしき―無骨なる
石などり―遊戲お手玉の類
らうたがる―可愛がる
久しくも云々―「住の江のまつは苦しき物にぞ有りける」古今集
心のうらぞ云々―新勅撰集「疑ひし心のうらのまさしきは問はぬにつけて先づぞ知らるゝ」
すさめられ―忘れられ
夜の物―夜具

未時―午後二時

未時

里より女親のとぶらひ來て、泣きみ笑ひみ物語などす。げに見るかひある女子をかゝる所にはなち置きては、心の闇のはるくべき方もあらじかし。此ころはひより、あそびども格子の間に出でて並ぶ。けそうなれば垣間見する人もなし。たゞ田舍人のこちぐしきが、立ちめぐらひつゝ、目を大きになしてうかゞふ。中には石などり貝合などして遊ぶ。二つばかりのちごのをかしげなるを、膝にすゑてうつくしみ遊ばし、搔撫でつゝらうたがる。あやしきえせ法師を籬の外に呼び入れて、夢語し占かたなど問ふ。「久しくもなりにけるかな」と打誦じぬるは、此夕暮のこゝろもとなきにやあらん。又かたへに打ちしめりて、「心のうらぞまさしかりける」といふは、すさめられぬる人なるべし。外の方には、そば麥いれたる筥どもになひ續けてくばり歩く。さるは夜の物あたらしう調じたる祝ひごととて、かゝる事はするなりけり。大方衾などは、打ちしのびて取りかくし、物すべきを、もて出でてけゝしくもてなす、例にかはりたるならはしになん。

くなり」けりと詠みし事を採る
錦手―五色の模樣を染めつけたる磁器
夕立に云々―諺「夕立は馬の背をわける」降雨の範圍狹きをいふ
鳳凰―花魁の裲襠の模樣なり

吉原にひさぐ茶椀も錦手のやきをぞめづる午の上刻　イカホ　柳芳

色容の外に重荷はうまの時ひんの咄をすなる里親　甲フ　多理雄

髪ゆひもかへさにめでん一枝もつとにはさせぬ花の吉原　越前ツルガ　三日月庵弓也

夕立に背をわくるてふ午の時里親が來て袖しぼり合ふ　同　雁返舍半月

鳥影のうつる連子にいさみつゝ我も飛び立つ鳳凰の袖　六樹園

ね―聲、撥

普賢―普賢菩薩は象に乘れり

大象云々―義「女の髮には大象も繫がる」

雨乞の小町紅―雨乞小町は七小町の一、こゝは道中の化粧の小町紅の緣に用ふ

かみをすき―羊は、紙を好んで食ふ、髮を梳くに掛く

ひな―鄙、雛

たらちね―親

鬼すだく―伊勢物語に、好色の男の家に困り女の、集り來りし時、男の一口にひて荒れたる宿のうれたきはかりにも鬼のすだ

小判では張らせぬつらもおのが手にたゝき廻してつける白粉　おなじく

のら菊の其名にも呼ぶ禿等が寢くせをしかる里の髮ゆひ　おなじく

やる文の客の數々ひろ中にあかうそ書も里のすぎはひ　同　薫

部屋座敷掃除しながら口々にはうき客をばそしる新造　おなじく

花あやめ活けて禿の返事さへ郞下づたひに長きねをひく　おなじく

普賢とも見えしゆかりか傾城に象牙の撥も賣りに來るなり　アハ　雲多樓

大象はともあれ家をつながんと髮をめでたくかざる傾城　おなじく

長柄傘さゝせて出んと雨乞の小町紅にてつくる傾城　おなじく

刻限もやがて未に近しとてかみをすきぬる花魁もあり　同　有大甚

物語する里親のなまりよりひなとぞ見ゆる傾城の形　同　起象

たらちねの鞭やわすれし午の刻睡りてゆかず居つゞけぞする　畑持

月ならで日ざしも最中饅頭やあはせ鏡の身じまひの時　斛音成

似つかざる親のとひ來て咄す時鬼すだくとはしるき吉原　ギフ　三十盛

のせた客かへして今日も午の刻すね廻るありくつわ屋の見世　上、玉村　一桂庵直延

かた便宜—片鬢に掛く

入黒子—戀人の名をわが腕に黥したるもの

岩橋、かつらぎ—葛城神容貌醜きため晝は隱れ夜のみ出でて岩橋を作れり、拾遺集「岩橋の夜の契りも絶えぬべし明くるわびしきかつらぎの神」を採る

貸本屋ひるは頼みて淨瑠璃の道行ぶりにことづてる文　彌壽丸

おいらんの禿はあそぶ晝見世におみき德利ぞ對にならべる　道列

人ぞめく夜こそ物の榮はあれ花もしらけしひる中の丁　おなじく

十、

とらへなば剃りて腹いん遣る文もかた便宜なるにくき男を　ワカ山　太記

笛太鼓でさわぐ廓の掃除にもやはりふいたり又たゝいたり　アハ　雲多樓

八、

髮をゆふ女郎もあれば据風呂をしまひにかゝる三助もあり　折形改　五松館湖連雄

駿河よりひきし廓の身じまひに富士額をもつくる花魁　甲フ　常雪

大門もこれはゆるしゝ醫者の駕乘りまはすなり午の刻ごろ　口野豆人

入黒子けしてよ間夫は身の毒と灸すゑに來る傾城が母　柳花園

岩橋と呼ぶ新造もかつらぎのかみ結ふ時のあくび侘しき　おなじく

居つゞけの惡洒落のみか掃除には屏風のせをもたゝく新造　セッツ原田　氣丈堂元數寄

もちこして酒ははかねど結立の髮のかざりは小間物屋見世　ワカ山　太記

天神髷―銀杏がへしに似たる結ひ方

雁の使―文使、雁は春北へ去るより、北國の緣語

あしげ―惡しき氣、葦毛

局―部屋持の娼妓

梅干を斷つおいらんの髮かたち天神髷は粋な髮ゆひ　悦氣

湯をしまふ頃に返事の來りしは金の無心も水に成つたか　風流雪

髮結もあきれぬ口のかみそりに合はせてくれと里親の婆　筆持

書いてやる文の返事はしながらも金の無心はほぐにする客　長、素直

おいらんに手くだの智慧を貸本屋楠もあり孔明もあり　おなじく

北國と其名の立つもよし原や雁の使の返事來れば　同　豐

茶椀屋もまだ來ぬさきに里親にわつて咄すは色客の事　おなじく

待ち人をさす簪の蝶の夢むすばんとてや髮けづるらし　同　方九里若菌

居つゞけは手綱ばなれの午の刻内輪の首尾はあしげなるらし　同　期興

里親の口とりにして竹村へ菓子もはねぬる午の刻限　同　紀しれ包

川竹の流れの身にも呉服屋は貸してはまらず借金の淵　有明

肌寒を思へばつらし里の親のなきつゞきぬる衣かりがね　同　山盛

襟足も綺麗につくるおいらんは道中すべき支度なるらし　全亭

顏つくりながらも客をひき眉毛挊女房もある局見世　おなじく

めど萩—萩に似たる草にして、茎は筮と爲す
しほ—機會、潮
男めし—男郎花
うしろめたし—新續古今「女郎花手折る袖こそ匂ひぬれうしろめたしと妹や咎めん」
二つ取—一升二つ取、大ぼた餅をいふ

お見立といふはにくてし貸本の上中下迄あるまじり見世　仙ダイ　白龜園俊持

色客は誰と心のうら迄も花屋がさしてかへるめど萩　同　南龍子無漏住

傾城のしほもあはれにさしそふはうみの親との話なりけり　おなじく

おいらんの床に立てれば男めしうしろめたしと客や見るらん　千里

乃木伊取乃木伊となりし迎こそとつて歸らぬ内方の首尾　高サキ　茂葉

桐の木の箱より出す呉服屋の帶のかべにも見ゆる鳳凰　同　松花堂

彼岸櫻咲けばやくばるぼた餅の二つ取には春もよし原　おなじく

わらひ繪はよし原にしてくんなませつれ〴〵草を貸本屋さん　同　梅章

居つゞけに又も迎とせりたつる時さへ馬の耳に風なり　同　波月亭兎ト

はなし聲おや〳〵〳〵は傾城に遇ひにこし路の親にこそあれ　フクシマ　香和茂

あひ方はまだ身じまひと客も又腹をつくれる八百善のめし　若女

八百定が料理の味はうまの時はねた手ぎはを褒むる客人　裏行

のみ過ぎし客の外にも傾城に小間物出して見する商人　おなじく

部屋座敷ちやうど數よくさゝん花を生くれば晝の時も九つ　淸記

わくらばに—たまさかに
こてふ—來るといふ、胡蝶、莊子夢に胡蝶となりし故事あり
こがねほり—郭巨釜掘の俗傳
しぼりばなし—絞り染の括りたる絲を解きて其儘縮ませたるもの、親が金をしぼるに掛く
くどく—口說く、功德
くる—繰る、來る
ほし—細見に附けし星

とく部屋の掃除しまうて手がらぶり顔にほこりもつきし新造　甲、豐部　友鶴
鐵炮のたまのたよりに客よりも打ちたえしとの返事きにけり　おなじく
わくらばに今宵こてふの約束は夢ではないか色客の文　郡内　金英園
雲と見る花を花屋にいけさすは空ごと多き傾城の部屋　尾、　雙蝶園
今頃は女房や鬼になりぬらん草もつのぐむ雨の居つゞけ　おなじく
釜ほどに孝行せよと通用のこがねほりにも來ぬる里親　八王子　丸主
おいらんに如在なけれど笄のうきを見出すぞ小間物屋なる　水月庵松蔭
おいらんも繻袢の袖や濡らすらんしぼりばなしや故郷の親　おなじく
花ちらす客のまうけに活けてけり綺麗につかふ床の枝ぶり　裏成
土圭ほど廊下にくるに禿をきり〳〵しやとしかる傾城　塵六
後生さんすなどと言はれて客人もくどくなりとてのりけつきたり　おなじく
容よりの返事をとりて膝栗毛いつさんにくる午の上刻　桂樹園
引きとめし客にはかへて新造のたゝき出すや部屋々々の塵　おなじく
床のまにいけおく菊のほしの數部屋と座敷は是もかはるか　上、小野　三村芳輔

羊—羊は紙を食ふ也、羊の時を掛く
みす紙—簾中にて用ふる紙の意なるべしと俚言集覧にいへり
むげんのかね—無間の鐘、無限の金
方違—天一神（なかがみ）のある方角を避けて他の方角へ行くこと、違ふに掛く
傾國—傾城に同じ、漢書外戚傳「北方有佳人、絶世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人國」云々

花魁のもちこし酒もたずね來し親の詞にさめ〴〵と泣く　同　眞豊
掃除する頃は午にて羊さへ食はぬみす紙わる紙の屑　上、　倘雅園妙約
髪あらふ日もよし原やお互にすいた同志なる居つゞけの床　松葉亭
さしかざるあたまは足にさも似たり姿海老屋の内の身じまひ　影芳
ひるに來る客はむげんのかねに手をつかぬ物よといへる吉原　晴昇
傾城の容をころせる座敷へもりつぱにいけて見する花の師　蜀江舎織部
傾城のふれば磁石の蟲も日に尻をむけたる午の上刻　トチ木　櫻露堂
掃除する跡へまはりて花の香をもて來てちらす風もよし原　おなじく
中の丁つゝじの花は一面にひのさかりなる午の上刻　おなじく
床花のちる傾城は呉服屋へはやみをむすぶ帯の注文　古道
かねごとは方違してあそび女の客の返事に胸もふたがる　おなじく
傾國の美にならべんと花屋めが床へいけたり大白牡丹　竹窓亭和刻
のりつけし返事は客の金ぐつわ欲めたる文やくる午の時　呑吉
里なれてむねも毛筋の通りもの詞につやをいへる髪結　道秀

色容にまよひし金が敵討めぐりあふかと貸りる讀本　鈍々亭

あつらへし仕著小袖の玉ぞろひ孔雀しぼりも出す呉服屋　おなじく

格子さき首をのばして待ちうけし親に咄やながくなるらん　數寄成

子日せぬ若松屋へも小間物屋ひかせた櫛を今ぞ持て來る　塵外樓

居つゞけのあそびや晝の時酒もおはらにあまることゝのつの數　六極園

山吹の花を咲かせて傾城を床にいけたる居つゞけの客　上、山子田　里遠

傾城を辨天と見て布袋屋がのこる呉服を仲間直に賣る　イカホ　穴住

おいらんが意氣地立つれば是も又はりほどになる晝の猫の目　同　一樹園

福原の京町へ來て花魁の兵庫の髪もむすぶ髪ゆひ　仙フ　千柳亭

つとめする娘が床に馬はあれど子を思ふ親のかちにてぞ來る　おなじく

草雙紙かへり駄賃のうまの時さか手に乘せて來る貸本屋　同　愛雄

色容が金のくめんの返事にも涙の外は出すものぞ無き　同　松友

はりつよき傾城にまで髪ゆひはちとも頭をふらせざりけり　同　唐琴

來る客をまつがね香の髪じまひこよひの頃と匂はせし故　同　千綿堂

子日—正月の子日の小松引

はり—張り、針

つとめする—拾遺集「山科の木幡の里に馬はあれどかちよりぞ來る君を思へば」

まつがね香—待つに香油の名を掛く

島とかた―縞とかた、島と潟
助さん云々―俗謡「てんてつとんとん、てとすとんと餅米絲櫻、助さん小間物買りやんすか云々」
おはぐろ―鐵漿溝に掛く
かね―鐘、曲尺
梅花―油の名に掛く
はうき―遊客の常に相方を替へることと

傾城の床の海邊に置きならべ島とかたとを見する呉服屋　二字守

てんてつとんてとといふ間へ持込むは彼助さんが三味の小間物　おなじく

櫛とりも氣どりも里に物なれて人にすかるゝ女髪結　春江亭

畠にはあらぬ向のおはぐろに色よくついた茄子も買はせつ　催馬

内證で親へかう〳〵いふ客と話すは深ういひかはす譯　おなじく

呉服屋がくるわの時も九つのかねやくぢらにさして商ふ　浮淵

客人をころばさんとて傾城の顔にちらせる白粉の雪　クハナ　千枝丸

刻限の午にゆかりのくつわ屋へ乗りこんで來る晝かひの客　おなじく

生花のそればかりかは髪結の梅花もかをる身じまひの部屋　同光明館改　東亭秀丸

刻限の午といふころ吉原へ背負うて來たる呉服何疋　おなじく

はうきてふ客見ならふか新造は掃き歩くなり部屋も座敷も　同　玉人

よべ醉ひし客に引きかへ綺麗さは部屋へ出して見する小間物　おなじく

おいらんに籬新造禿菊いけたる床か花のよし原　氣丸

髪結の身はよるならで傾城の襟にはあしをつけに來る晝　羽風

午のかしら―午の上刻
くつわ屋―遊女屋の異名
かきし―だまし、昇きし
うすばた―花器の一種
咄―談を採る

朝飯のかたがつき毛といふ頃は午のかしらと見ゆるくつわ屋　成丈
よべうまくかきし客より今日は又のりてうれしく思ふ白粉　盛砂
大黒の槌屋が家へもたけ來る富貴草てふ花もよし原　小
傾城にはりをもたせて花屋までりきんで活けしうすばたの梅　尾上鐘人
はねまはる午の時とて床の間にくつわに止むる馬盥の花　麟馬
雁がねにつくる額の新造も身じまひ部屋に並ぶ一列　春影
琥珀とも見ゆる玉屋がおいらんの座敷の塵をはらふ新造　おなじく
おいらんの目にとめばやと器量より部屋の簞笥をみがく新造　霞棚亭長向
親と子の胸はあけてもまだ年のあけぬ咄のつきぬ吉原　クリハシ　泉々樓喜代住
いつ〳〵と月日かぞふる年季よりあけて嬉しき色容の文　春道
吳服屋が來るとなじみの居つゞけはおもてに嶋をよする吉原　おなじく
おしろいの雪につゝみてひる見世をはる待つ花や花魁の顏　小ハタ　繁喜
床の間へいける姿や傾城は客の背中もなでしこの花　紀樂人
居つゞけにつかひ果して刻限のうまをも連れて歸る吉原　錢成

塵—しびれのきれし時のまじなひ

すく—好く、梳く

齒ぎしり—元結を切るをいふ

呉服屋の出す小袖の袖よりもえりに氣のつく里の傾城　岡山　道の屋

居つゞけの客にしびれのきるゝとも部屋の掃除に塵は殘さじ　池田　長房

吉原へおこすは午のかしらにてたてがみむすぶ客の玉章　同五卯改　酒屋圭馬

傾城はすくとすかぬの客人の噂をいふも髮けづる頃　おなじく

吉原の眞ひるはよべの禿より客の返事の長き玉章　おなじく

呉服屋のくる日最中はおいらんも思ひ出すらんきぬぐの空　同　三十軒一棟

新造に掃除をさせしその跡の部屋にのこるは夜具のちりめん　おなじく

みな人の目の毒となる傾城は今おしろいの雪の身じまひ　利企　傳

うまの時と聞くも恐ろし遣手衆に鞭うたれたる身をし思へば　玉藻

癇癪でこはされし髷を髮結にまた齒ぎしりをさする傾城　おなじく

よべ客のおひげの塵を野太鼓がとりたる跡を新造は掃く　且平

午の時ごろに花屋がちやうど來て轡にとむる床の河骨　おなじく

午の時うまく乘せたる客人の噂をやする鞍がへ女郎　平道茂

折られたる櫛笄はさもなくてついでと頼む間夫の玉章　おなじく

午の貝—午の刻に知らせの爲に吹く貝
若松—俗謡「めでた〳〵の若松樣よ、枝も榮れば葉も繁る」云云
木乃伊とり云々—諺
燒物—伏見人形を摸る
うみ—海、生み
ふり新—振袖新造

新參の中ばたらきに午の貝ふきつといふなめでた若松　獨樂堂
日の影もひるにむかひの木乃伊とり木乃伊になりて遊ぶ居續　おなじく
ちかき内こんといひつゝひる狐おはるゝやうに歸る店者　おなじく
まゆずみに紅おしろいと身じまひも色でかためた吉原の里　中山堂山路
眉ねかく墨も袖にやつきぬらん身じまひ部屋に化粧する妹　木工女
燒物にせし傾城と見るばかり顏をつくれる伏見丁川岸　五山亭雅雄
居續の客をふぬけと見てとりて來る小間物の櫛やねだれる　おなじく
なりはひに蛇をつかうて牡丹餠をくばる彼岸に衣をぬぐ客　おなじく
芋賣の出づる簑輪の親元をあらうて來つとかたる判人　文丸
賣りに來る小町紅買ふ其人もやはり小町に似たる傾城　白川　員照
太鼓等に打ちはやされて居つゞけの狐釣する初午の時　同　西樹
川竹の流れの身とて行末をうみの親にぞ語るあはれさ　同妓女　理也
八朔にはやなれるとて傾城はふみ込んで買ふ雪の白無垢　同　波風治
ふり新のかしらおもげに掃除する埃も風にひら〳〵かんざし　山形　門盛

黒髪に云々―諺「女の髪の毛には大象も繋がる」

勝山の髷―勝つ、勝山髷、勝山髷とは丸髷の如く結ひて中を二つに分けたるもの

唐猫の目云々―猫の目にて時を知る歌「六つ丸く四八瓜實五と七と卵なりに九つは針」

おいらんじやたい―花魁、闌奢待

富士の云々―富士山凸起せしと同時に琵琶湖生じたりとの傳說あり

居つゞけと手綱をゆるす刻限もうまの時とぞなれる吉原　氏家　文車

大象のはな毛氈にくしけづる其黒髪に客やつながん　フクシマ　網代木

揚代は知らず女郎の身じまひに一兩あまりつかふ白粉　尾、　雅流園

櫛の齒をひく手あまたの全盛は里にきりやうの勝山の髷　クハナ　聽琴舍松孤

化粧するおしろいの名の八重櫻ちりてめでたき傾城の顏　同　燕子樓

末にあふ時節を待つも淚川せかるゝ客の文ばかり見て　おなじく

部屋にさす花ならなくに傾城がはりの詞もやはり根はなし　同　氣散寺應入道

はりをもつ里のならひか唐猫の目にも時知る午の上刻　同　波羅蜜庵空諦

醫師の外ならぬ廓を晝中もかごにて步く蟲うりの聲　同　四半法師

梅の名の油をつけて結上げし髮もかをれるおいらんじやたい　同　音澄

まるらせ候かしくととめて卷きかへす文も今來た虛無僧の形　濱荻

居つゞけの客のよだれも此やうとながしの枝もつかふ活花　おなじく

帳尻のあはぬ吳服のあきなひに手代の顏はうれた吉原　ギフ　獨笑園狒々丸

身じまひに額の富士の出來た頃ぬけ出し跡の風呂はみづ海　おなじく

大夫に六々—漢官儀「秦始皇上封泰山、逢疾風暴雨、樹松樹下、因封其樹為五大夫」この故事を振る
判人—口入業者
塵をとばす—歌聲の妙なるを形容して「聲梁塵を動かす」といふに取る
そばかす—雀斑
のさうじ—掃除、蝶の夢に掛く（荘子夢に胡蝶となりし故事）
うけもちの神—受持、保食神（受持神）

姉女郎妹女郎もべに筆のあかの他人と見えぬ鏡臺　友頼

化粧して顔をも玉とあざむけば嘘は遊女のおもてなりけり　クリハシ 潛

母親の無心の金の山吹に八重となりたる里の損料　千英堂

親がいふ無心は是非もながぎせる年もくはへてつとめ奉公　二字守

髪をゆひ化粧をすれば晝時のかねをもつける身じまひの部屋　浮洲

髪結の來るのはいつも晝頃とくせをつけたるおいらんのわけ　有明

此里の大夫にならん松一木かゝへて見よと判人の來る　文丸

八、

藝者等が歌の外にも部屋々々に箒で塵をとばす新造　アハ 雲多樓

傾城の氣もやすむころ花いける人はきくばりしたる部屋々々　同 有大甚

身じまひをしなのの雪や新造の顔のそばかすかくす白粉　三、 廬山人

部屋持の部屋をさうじが夢の跡飛んで蝶とも見ゆる紙くづ　アヒヅ 水埜園

傾城の口ばかりかは朝までもおなじくうそをつける白粉　おなじく

身じまひも一ぱいはるの初午はたいこも客をうけもちの神　尾、 眞澄

物まへ—物日の前、物日とは衣服を著替へる祝日なり

八文字屋—江島屋其磧の浮世草子にして、所謂「八文字屋本」也、字を道中の八文字を踏むに言ひ掛く

こがし—麥こがし

しめ—〆、注連縄

午時

十五、

哀知らぬ客の心の秋のそら月をことわる返事おこせつ　全亭

子はうきに濡らす衣裳を親がきて又もかわかす物まへの金　イカホ　穴住

十三、

道中はまだちと早し貸本の八文字屋も見る二階部屋　川越　風栗庵花人

田舍から提げてくるわのこがしより咄のうちにむせる母親　松成

新造の晝寢の小袖紅あせてかはらけ色も見ゆるをかしさ　彌壽丸

十二、

おいらんの種をかひこの禿まで並んでまゆをつくる身じまひ　羽風

十、

かよふ神守り給へば來るといふ文の返事のしめもたふとし　白川妓女　理也

八朔のはれ著仕立てる傾城のゆきの寸をもつもる呉服屋　江又　保住

かたはらいたし ―はたの見る目も笑止なり

違（たが）ふ事にこそあらめと、かたはらいたし。

午時—午前十二時
ざうし—部屋
こちたく—繁く
ふさに—澤山に
さを—眞青
しはぶき—せきばらひ
ふづくみ—憤り

午時

奧まりたる方のざうしに入り居て、おの〳〵化粧しみがきさわぐ。わかきは、衣櫃ながもちにうちたる金具などみがく。物の蓋に花の枝こちたくつみ持て來て、部屋每の花がめに插していぬるは、花賣る男なるべし。紅、しろい物、元結、櫛、扇など、いとふさに箱に入れて持て來て賣る人あり。醫師にやあらん、異樣なる色の衣きて、顏もちむべ〳〵しきが奧なる局に入り來ぬ。屛風の中には、色はさをに白く、蒼み衰へたる女の、ほそき紐して、額のあたり引結ひて臥し居り。醫師ちひさき綿に膏藥といふものを塗りつけて屛風のうちに入りて、ふたゝび出來て、「ことにもあらじ」などいひて、しはぶきうちして歸りぬ。いかなる病にかあらん、いとほしげなり。柱により居て文書く人あり、手はよしやあしや、さながら蚯蚓のうごめくやうにぞ書いなしたる。客人の許よりおこせし文にや、うちひらき讀み見て、ものしき氣色に眦ひきあげて、「何事いふぞ、をこなりやかゝる事誰かは知らん」など、聲だかにふづくみいへるは、何事とは知らねど、思ふに

紅葉袋―糠袋
どら―道樂、銅鑼
鉢―鉢坊主（托鉢坊主）に掛く
江戸へ出づる―廓の者の大門外に出づるをいふ時の通語
入山形―呼出しといひて散茶の上に位し、太夫格子滅びて後其地位に代れる者、二種あり、其に細見記に∧∧の如き形を附したればいふ
二朱―揚代晝夜にて銀二朱、鐵砲とていふ下等の遊女

山の名の高尾もはひる風呂なれば紅葉袋はつき物にして　おなじく
肴屋のちらす鱗は散りかゝる花に其まゝ化ける中の丁　大坂　櫓拍子舟丸
千金を使ひはたして今も猶里にどらうつ音も願人　濱荻
吉原や肴あつかふ臺屋にも佛の弟子の鉢々と乞ふ　見分
駕に乗りて吉原がよひする中にかつぎて來るは八百屋商人　白川　橘枝茂
新丁の商人も來る時分には太鼓も江戸へ出づる吉原　柳花園
南瓜ではござりませぬと唐茄子を大文字屋へ賣るもをかしき　風流雪
傾城にはだかとなるは居つゞけの此朝風呂がはじめなりけり　甲ノ　六時園多理雄
朝飯をおあがりなんす其口でゆふべは客をくはせ居つたか　上、山子田　里遠
とる客もまだ初文においらんの嘘迄かりに來たる新造　掃塵六
大根のからきつとめの吉原へ根びきして來る八百屋さへあり　エトサキ　元あり
裸ではそれとわからず朝風呂へ入山形も貳朱も大夫も　おなじく
居つゞけの口舌するころ髣髴とせなか合せの修行者も來ぬ　六樹園

惡玉—草草紙などの繪に、人の顏に惡の字を書きて惡人を表はせるもの、善玉に對す
ぜん—善、膳
はたけ—畑、疥

み—巳、刀

立山—越中の立山、北國(吉原)の緣語
鐵炮—鐵炮風呂

傾城の詞のみかは帳面へ又かゝれぬる客のかず〱　草の屋賤丸

容人の歸りて後も傾城に帶をとかする吉原の風呂　阿、雲多樓

刻限の辰をも過ぎて雲となり雨となりたる居つゞけの客　おなじく

傾城のうそは八百屋も合點にて實に泣かする芥子迄賣る　同　猿人

繪草紙にかく惡玉の傾城もぜんに附いたる朝飯の頃　おなじく

日の足も四つなればとて狐てふ女郎も化をあらはしゝ風呂　和琢舍綾丸

傾城とあちらこちらに肴屋が料理の時に指をおとしつ　同　遊々館長をり

年具にも塞りて賣りし女郎にや顏のはたけもつくる身じまひ　同　有大甚

晝容の來るよりさきに靑物の籠もおろせる茶屋が門口　おなじく

浪人のさす刀より刻限のみはさびしくも見ゆる吉原　おなじく

巳の時といふゆかりにや傾城も衣をぬいだる風呂のあがり場　起兼

修行者もこゝは意氣地の立山と聞いて廻れる江戸の北國　仙ダイ　千柳亭

口さきで噓をあきなふ花魁は風呂へはひるも鐵砲のきは　同　大宅眞豐

ぬり板にたび〱書かれ身代もふけば無くなるやうな客の名　十錦堂百綾

内所—内證に同じ
よつ—節、四つ時
伊勢音頭—俗謡の節の名
かぼちや—南瓜、醜女
雨や雲—前に註せる巫山の故事
下ずり—木版の下刷に掛く
心ざし—義「志は松の葉」
櫻煎—蛸をたれ味噌にて煮たる料理
願人—願人坊主

渾沌ととりちらしたる内所にも目鼻がついてやつと朝飯　自列亭南山壽

鞭になる竹のよつ頃附馬を引いてもどれる伏見丁客　彌壽丸

尺八の戀慕ながしも吹きぬらん居つゞけすなる門の虚無僧　星野下住人

内藝者さわぐ小見世の伊勢音頭長いもありと八百屋いり來る　鈍々亭

色容のあかぬ別れのうつり香も風呂にぞ消ゆる雪のはだか身　長、萩山盛

惣菜にかぼちやをつかふ折もあらん大文字屋の朝飯のころ　同　筧高益

袖引いてとめし煙草のうすけぶり雨や雲にもなれる居つゞけ　同梅守改　紀豐

錦繪にくらべて見れば花魁の下ずりばかり出來し湯あがり　同　壽老人鹿乘

大門をさして重荷の鰹うりあしをはかりにかけて行くらし　同　花咲實生

丁子屋のうちでも使ふつら物はかくれ簔輪の八百屋より來る　文窓亭有明

修行者に手の內くれん花魁の心ざしなる松葉屋の軒　おなじく

不時の花もらひし里の料理番櫻煎よしと蛸や買ふらん　全亭

ようべから蟲がかぶると巳の時に蛇をつかうて寢たる新造　筆持

客人をだます女郎と一もんの狐をあまた見する願人　おなじく

店おろし—客の陰口
せいろう—蒸籠、青樓
花見堂—灌佛會には、花見堂を作りて中に釋迦像を安置して甘茶を灌ぐ也
まらうど—客

傍輩に見せてくやしき間夫の名を据風呂で迄こすらるゝなり　盛砂
ぬり板をしらぶる時分傾城も風呂にてよべの店おろしする　六極園
歸らぬが上あんなりと四つ頃にむしかへし來るせいろうの客　おなじく
故郷を戀ふる禿に松茸を見せて八百屋がおやと言はせつ　ワカ山 太記
花見堂もてくる里の願人を茶にして禿しつたかといふ　雅雄
もて來たる八百屋がはたな大根より癪にさはらん間夫の居續　木工女
たまに來て裏をかへさぬまらうどはこれ帳面の面よごしなり　おなじく
行水と客へいつはる噂をも風呂屋に聲のたかき傾城　柳花園
惣菜に魚はなけれど朝餉時あらの見えたる傾城の顔　鳰照庵風流雪
引眉の女郎も起きて出づる頃きえてまだらな門口の鹽　五松館折形
親はなく子を賣らばやと八百屋來て轡屋の氣をはかる里芋　氣丸
はねが生えてかけてくるわへ初鰹禿匂ひもかどぬきじ燒　おなじく
見番へ四つ迄たのむ用事札かくる願ひに參る觀音　口野豆人
後生だと賴みてたゝく花魁に風呂の戸あけてをがむ開帳　おなじく

くつわ―遊女屋

もゝ―桃、百

眉毛の云々―湯にて眉毛を濡すは狐につまゝれぬまじなひ

まゝ―儘、食事

室―遊女所なる播磨國の地名に言ひ掛く

繁昌をみせてくつわが湯殿にも白水ながすかぶろ新造　塵外樓

起き出でて窓の戸ひらく傾城にかはりてねぶる朝顔の花　郡内　金英園

据風呂へ入りていよ〳〵居續の客人あつくなりやしぬらし　同　眞久

お茶ひきし新造はけさ忘八屋のおきてもつらき給仕をぞする　千里

いきはりを客の噂にとりまぜて互にみがく遊女屋の風呂　成文

中の丁花の頃とて櫻鯛あらしをいとふ肴屋も來る　池田　三十軒一宗

吉原の朝めし頃に朝ざくらうまくうごかす花の脣　同　長房

青樓にかけし土圭はくるふともくるわで朝の飯は四つ時　同　五卯

朝膳に雛の如く居ならぶもゝの媚ある數のおいらん　岡山　廣孝

客に嘘つく傾城のおしろいに湯もしらけぬと巳の時の風呂　おなじく

來る客をつまむ女郎の其身にも眉毛の濡れて見ゆる湯あがり　おなじく

花魁の腰も柳とみの時や髪に玉ぬく湯あがりの顔　利企　傳

客は皆送りしまひてわれ〳〵がまゝにせうかと言へる巳の時　原田　深寢父

今日ははや八百屋が籠で吉原へ室よりうつす獨活もをかしき　おなじく

ひる過―晝過、七下りといふに同じくはげて古き代物の意なるべし

遣手―遣手婆

朝顔の四切見世の化粧頃晝顔つくる花の口あけ　同　松花堂

うそばかり賣る傾城も四つ時に先一ぱいは食ひし朝めし　一丁目　狂言子

皆あつくしかけられては吉原の風呂にもはまる居つゞけの客　高サヤ　本炭

袖乞も扇を蝶とひらつかせ籬の内の花に寄り來る　知新亭古道

湯あみする女郎はゆでた如くにて枕だこまで赤く色づく　おなじく

南風ふいてくるわの肴屋もいとふか花の櫻鯛には　重寳舍何頼

駕にのる客の外にも初鰹かつぎて土手を飛ばす肴屋　春人

鶯のくふ若菜屋の門に來て經よみかけて貰ふ修行者　歌仙樓道秀

晝まへは里もひつそりかん〳〵と鐘をたゝいて來ぬる修行者　本歌裏行

浪人のきたる小袖はひる過や吉原はまだ四つそこらなり　若女

晝前は客のまねして戀猫の聲に呼び出す大見世の屋根　長女

ぬり板に心うつらん流しにと新造のつく湯ばひりもあり　南亭葉々廣

とけ〳〵と雪のはだへを洗ひては次第に白くなりし風呂の湯　一德

巾著の金を遣手のかぞふ頃口をくゝりし朝顔の花　甲、市川　眞河

あたらしき魚の自慢も里がらか裏をかへして見する肴屋　千英堂

花魁のおつせへすよとたより來て八百屋にたのむ文の長いも　安閑亭住成

親のため年季もいれてはこ風呂の湯よりもあつき思を思ふか　東隣亭德馬

朝ざくら見ては歸らず湯豆腐の下地はすきに居つゞけやせん　松葉亭

袖乞のなりもつゞれの錦木やあまたくるわの門に立ちぬる　犬馬

さし込はかんざし櫛はしらぬ身へ針打にゆふ禿髪ゆひ　樂聖庵光丸

內證の世話の女郎に親方のいきがかゝると見ゆる塗板　おなじく

ちやくやと噂ばなしを湯殿にて耳やかましき吉原雀　雨盛

今朝いにし客のうはさを新造の互にこする里の据風呂　松成

色氣をばあらひ落して朝飯のくひ氣には皆ならぶ傾城　おなじく

千金といはふ八百屋が芹若菜是も根引の印なるらん　秋蘭亭近道

吉原の朝めし頃にちやうど來る腹のふくれた鮟鱇の魚　且平

是も又もとは駿河の初茄子ふじのたかねに賣れる吉原　高サキ　梅章

淡島の修行者無用此さとのはりをさめてたまるものかは　同　茂楽

裏をかへして—同じ女郎を二度あぐる事に言ひ掛く

錦木—斑に彩りたる一尺ばかりの木、古へ陸奥にて男女相遇はんとする時、之を其家の戸口に立てて文を通はす代りとしたり

針打—髻の根掛に用ゐる花形の飾

內證—主人の居間

ふじのたかね—富士の高嶺、不時の高値、吉原は元遊女を駿河より移せるものなれば也

大門を籠で乘りこむ鰹賣おろすさしみも三枚にして　笠人

風呂に立つ湯氣も霞と咲き匂ふ花の中座のおいらんの客　浦女

居つゞけの客にあまえて禿らがねだり出したる竹村の菓子　おなじく

注文の通りふちやうを附木にもつけてくるわになれし肴屋　玉盛改　堪忍舍二字守

肴屋に八百屋もきみやう順禮のさんげ〳〵もきたる巳の時　影芳

すゝ拂ひ疊の外に內方はいらぬ口までたゝく吉原　上、イカホ　泉源舍端澄

人ずれし傾城よりも手のあるはやはり八百屋がひさぐ早蕨　同　柳芳

夜々の客はもとより晝も又松茸うりのはひる吉原　同　六法園穴住

北國といへば風呂場に傾城の雪のはだへの見ゆる四つ時　同　年重

へびの名の巳の刻ころは吉原へたゞ飲みたがる願人も來つ　おなじく

山出しの禿も早く里なれてあかのぬけたる湯あがりの顏　おなじく

ひき飽きし茶臼の外におきて今朝人の目かどのつらき吉原　同藤岡　青松園友由

吉原の朝飯時やけぶりとも見かへり柳たちなびくなり　仙ダイ　唐琴

百たらぬ錢のかどなみ數へつゝ鐵炮見世をあるく願人　おなじく

さんげ—三飾、懺悔

北國—吉原

ひき飽きし—む茶引女郎の朝の苦悶

ひらめ—鮃に「顔をにらむとひらめになる」芋—痘瘡に掛く

内所—内證に同じ、主人の居間

馬盥—花器の一種

うき身をも沈むる風呂は川竹の流れの中の淀にざりける　おなじく

漬物の茄子の色里朝めしにむかふの人と呼ぶも一口　臥龍園梅麿

肴屋も親不孝なる居つゞけの客に出せとやひらめ持て來る　文　麿

惣菜をくふ傾城も恥ぢぬらん素顔に芋を見する湯あがり　おなじく

車座で家内けいせい朝めしを食ふ頃まはる八百屋肴屋　フクシマ　六顆園香和義

花魁のおあとをなどと垢すりの小糠藝者もむれる風呂時　安戸　方　住

物思ふ身じまひ部屋の時も時四つ竹節の門に立つ聲　催　馬

居つゞけに活けてもらうた床の花是はみになるかねの山吹　おなじく

客をふるゆふべにかへて朝めしに内所へうしろ向ける花魁　升　成

居つゞけの袖引きとめて今日も猶わきへちらさぬ花の吉原　鴨の屋浮淵

肴屋も里で花さく櫻鯛くるわへ賣りし水あけの魚　青木春道

つけて行く花屋が花の手際にも轡の根じめ見する馬盥　春　江　亭

おのが手に身あがりをして居つゞけの客を朝湯にはめる花魁　麟　馬

廓にてこなさん物と肴賣まぐろの土手をかつぎてぞ入る　年　積

ふし見丁―伏見丁、富士見西行（西行法師の富士見の後姿）
座禪豆―前に註す

みのすぎはひ―巳の時過ぎ、身の活計
四つ竹節―兩手に四竹を鳴して歌ふこと

色見えて帳の表にうつろふは女郎を賣りし花にぞありける　おなじく

墨染の衣きて來る願人もむべ吉原にふし見丁あり　おなじく

ぬり板は玻璃の鏡や客の數を閻魔顔して帳へうつせる　同　養老舍玉人

居つゞけの尻くされよと傾城は朝飯の菜に座禪豆くふ　おなじく

吉原へ荷ひ込みては呼びありく夢にもはりをもたす肴屋　おなじく

刻限のみのすぎはひと門に來て四つ竹節をうたふ乞食　桂樹園

約束の品もたがはず時も時四日市より來たる肴屋　おなじく

巳の時のみうちばかりか朝客のあかの他人もはひる床風呂　おなじく

大門を來る浪人のさび刀さすがむかしはきれし吉原　甲フ　鵜飼川成

水菜賣京町なれどこゝもとはあづま男がかつぎ來にけり　甲、鹽部　友鶴

初茄子を小判で買ふもよし原や人は夢にも見ぬ睦月ごろ　小枝

所がら早うくるわの初鰹賣る人さへもはりのつよさよ　おなじく

起き出でてむかふ姿も朝顔のさかりはとうに過ぎし新造　小ハタ　繁喜

大門の口にあまらぬ商人に水道尻のひろさをぞ知る　クリハシ　ひそまる

頭人—頭人坊主
けして—消して、決して

山吹をちらす客には引きかへてみをもちかねし浪人も來る　江又　保住

吉原の花の浪間に願人のきたる衣は荒布とぞ見る　羽、陣場　水藤園影澄

手管をばつくす玉章書きさして朝餉を女郎先したゝむる　三、　序山人

ぬり板の客の數々何百もけして嘘をばかゝぬ本帳　白川　竹盛

針をもつ傾城の居る吉原は値もつりあげてうれる肴屋　おなじく

傾城にこれ見よがしと肴屋がきしやうに切つて見する鯉鱠　おなじく

傾城の顔はみがけど客ばかす嘘の皮をばあらはざりけり　同　楊柳臺理也

ひさげ來る鰹にはねはあらねどもとんだ直のする吉原の里　同　青柳茂留

おのが賣る鯛よりも猶おいらんの目に見ほれてはあそぶ肴屋　同　算

川竹の流れのしげき吉原に浪人も來る肴屋も來る　おなじく

傾城の其かんざしの外に又今朝荷ひこむ魚も何本　クハナ　松々亭十枝丸

傾城の風呂にいる頃青物を八百屋もやはり洗うてぞ來る　おなじく

おしろいの化をあらはす朝風呂に穴も見えたる狐傾城　おなじく

本帳へうつせば嘘の賣數も跡からはげる塗板の文字　同　秀丸

引きかへて云々—子日の小松引を摂れり
もり田屋—江戸町一丁目森田屋、文化四年より五十三年間年年非人乞丐の徒に網代笠木綿頭巾などを施與し官より賞せられし事にとる、零落して乞食となる意にいへり
あそび—遊女
達磨云々—達磨は九年面壁せり
座禪豆—黒豆を煮て甘き味をつけたる物
くふや—空也上人に言ひ掛く
山谷舟—吉原通ひの猪牙舟

居つゞけに顔も直さぬ湯あがりは朝飯まへのうまみなりけり　畑持

廊下をも掃除する頃引きかへて横にねの日や島臺の松　おなじく

一言が耳についてはロ紅のあかをも流す居つゞけの風呂　おなじく

ぬり板をけして帳へはうつせども跡から馬をつける西川岸　水上亭浮舟

惣花をむかしふらせし報にやかぶりし笠に雨のもり田屋　濱荻

四つからは岡湯も出して揚屋町の風呂屋にさへも桶伏はなし　獨樂堂

縫針にうときあそびの四つ迄は物たつ事の名立がましや　おなじく

達磨ほど九年苦界の傾城も座禪豆にてくふや朝飯　八王子 丸圭

吉原へ行く客ならで初鰹籠にて土手を飛べる肴屋　おなじく

中の町うゑたる軒に肴屋も櫻鯛賣る花のよし原　扇丁々 仙禽舍

初がつを日本橋から北向の里にさしみの時をあらそふ　羽風

扇屋の朝風呂時は夕がほの花をもたせにみがく傾城　フクシマ 網代木

咲く花の名にやおひけんさくら時鯛のあたひもよし原の里　山形 枝折

山谷舟よし原駕はむかしにて小袖ののりも落ちぶれし人　江又 千霞

目白おしー目白が互に接近して木に宿る如く押しあふこと　はしー箸、嘴

湯屋ー謡曲熊野　壁も籬もー新造も大夫も　をみなへし云々ー古今集「秋の野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花も一時」

ふるなー振る、富樓那、富樓那は辯説を以て有名なる佛弟子　いもー芋、妹　桶伏ー諸國伏せの類にて、人を桶の中に伏せ籠めること　くひなー「喰ひな」に「水鶏」を掛く、水鶏の鳴く聲は人の門を叩くが如し

朝飯にならぶ子がひの禿ども目白おしするはしのあらそひ　得魚

散る花をさすが惜むか吉原の門にも湯屋をうたふ浪人　文麿

おいらんの名は松が枝と呼ぶとても此大雪にかへるきはなし　上、茂葉

をみなへし壁も籬も打ち群れてあなかしがまし飯も一時　雅雄

傾城の紅をおとすもことわりや風呂の呂の字もやはり口々　アハ　雲多樓

八、

賣りに來し菜の葉の中へくるひ寄りて禿がおとす蝶の簪　會津　水莖園外成

おしろいの花をちらして湯あがりに素顔の雪を見する傾城　尾、眞澄

天秤を肩にふるなの肴賣口の車の海老もよし原　丸二亭三友

傾城のうそは八百屋のかごの内あのいもになり此いもになり　おなじく

朝風の手帳へつけて塗板をふきおとしたる松葉屋の客　クハナ　鈴丁樓

おのが身を風呂にみがきて四つ時のかねを湯水に使はする客　同　四斗法師

今の世に桶伏たえてその水を願人坊のかぶる寒垢離　ギフ　歌笑

大飯をくひなと洒落るたいこをば箸もてたゝくまねを新造　同　三駄

くつわが宿—轡に遊女屋を掛く
かり—貸り、雁
よね—米、遊女
顚人—顚人坊主、乞食坊主
四つ—四手駕、四つ時

巳時

十五、

客乗せた腹に馬ほど喰ふなりくつわが宿の朝のめし時　醉樂亭

肴市たつを見すてて吉原の花にも歸るかりのある客　道列

しらげよきよねにならひて惣菜のいもと女郎も朝の膳立　鈍々亭

十三、

傾城は世界の四つに朝めしやときおくれたる髪も其のまゝ　池田 寢顏

白粉のうすめにはげし傾城が乳もそこらもあらはせる風呂　尾、雅流園

顚人を見ても此身はこのやうにをさまりやすと思ふ傾城　仙臺 明益

乘物のならぬ廓へ肴屋がかごに乘せ來る蛸の入道　同石マキ 繁路

なごりさへまだ大門に待つ駕の四つでござると催促に來る　彌壽丸

けさ來たる八百屋がかごも此里にわけて根引をめづる竹の子　クハナ 燕子樓

十、

惣菜の芋にかこたん傾城も親子一所にあらぬ思ひを　扇丁ヤ 仙禽舍鶴村

おいらかに―おとなしく、すなほに
ばうぞく―無作法に卑し
しりうごと―陰言

りき。されどおいらかにもてなしあへしらひて歸しゝは、人がらのにぎはしく頼(たの)もしげなればぞかし」といひて、たかやかに笑ひて、湯(ゆ)かたびらないがしろにうち掛(か)けて、つつむべき所もおほひだにせず、立ちはしりつゝ去(い)ぬる、いとばうぞくなり。又入り來(く)るもおなじ筋なるしりうごとのみ言(い)ふめり、いとかしがまし。

巳時—午前十時
め—妻
あそび—遊女
こめいたる—おほやうなる
かたみに—互に
いぎたなかりし—貪眠
つかさのこそ—姉女郎の君、「こそ」は敬語
なめげ—無禮
わきくそ—腋臭、わきが

巳時

今ぞ家の内やう〳〵起き出でてのゝしりさわぐ。海にとりたる物山に掘りたる物、いづくより持て來たるか、になひ來てあきなふ。家あるじ、漆の板によべのまらうどの數しるしたるをとり出でて、物に書きつく。めはこなたに居て、けぶり草くゆらかしつゝ、何くれの事ども人に教へてまかなはす。からうじて、あそびどもも起き出でて、一所にこぞり居て、朝餉喰ひて、さて湯ぶねに入りひたりて、口々さへづり合へり。さる許多あるあそびどもなれば、心のおもむけも各いと異なり。物まめやかにつゝましく、こめいたるもあり、又もてひがめたることのみ言ひて、おぞましくさがなきも多かり。かたみに湯ぶねの口にかゞまり居て、垢かきながしつゝ言へることよ、「つかさのこそなん今朝はいといぎたなかりし。思ふ人にこそ會ひ給ひつらめ」といへば、「あらず、若い男なるが、よろづさしすぐいて詞多くなめげなるが惡ければ、尻さしむけて寢てあかしたりき」といらふ。「まろがもとなるは、鼻ひらめに、額はれて、わきくそさへ花やかなる老人な

櫛の歯をひく——迎ひの使のしげしげ來るをいふ、髪の縁語

のり——乘、海苔

竹村がおまん——菓子舗竹村の饅頭

うまい——甘い、縁語

新造に髪ゆはすれば宿からも櫛の歯をひく迎ひうるさし　清澄

いぎたなき新造鼻をつまゝれん肥立の來る頃までも寢て　赤貫改　桐雅雄

中の丁花のさかりは朝もよしきをかへて又汲む茶屋の酒　おなじく

別れたる客に名ごりや惜みけん涙ほど垂る花の朝露　氏家　文車

糸竹の歌の稽古の外に又尻をさらひに肥取の來る　阿、　松枝千萬

客は皆たつの刻とて駕よりもはやのりかけて見ゆる湯豆腐　同　有大甚

藝子をもあげたる客の外に又線香立ててとらす肥取　同　有歌連喜足

神仙のやうなる者と寢たる朝雪と見る花雨と見る露　同　雲多樓

花魁のすがる手先を手つだひて共に袂にかゝる花びら　おなじく

おいらんのはだへの雪をのがれ來て又雪にあふ花の木のもと　おなじく

中の丁の花も見がてら送り來て又寢にかへる里の新造　紀、ワカ山　太記

おくり來て醉ひし笑顔も朝ざくら薄くれなゐに匂ふ傾城　同　橘薫

朝ざくら跡に見すつる中の丁かへるや家の紋の雁がね　ギフ　狒々丸大夫

竹村がおまんに湯氣の立つ頃にうまいの夢もさめぬ傾城　六樹園

いくか—幾日、幾荷
附金—格子より茶屋へ贈る金
馬盥—花器の一種
くつわ—挿花の譬に遊女屋を言ひ掛く
さゝ—酒、笹
夷講—十月二十日商家にて行ふ蛭子の神の祭、蛭子が三年足立たざりし傳說によりて腰のたゝざると續けたり

肥取の來つる頃にも歸らぬはいくかもてる居つゞけの客　聞　秋

歸りての宿の首尾より待つ茶屋で腹をつくろふ湯豆腐もよし　盛　砂

ともし火のよべのしるしか丁子屋の禿が持ちて來たる附金　おなじく

聲きかば阿房烏と思ふらんとり殘されし居つゞけの客　谷川清記

馬盥に活けたる春の朝ざくらくつわにとまる居つゞけの客　栗々法師

うかれ女に腰をぬかしゝ居つゞけを阿房と笑ふ烏二三羽　長　女

みじか夜をさゝで遊んで辰の時叉とまりたるよしはら雀　悅　氣

今朝もまた夷講から廿日ほど腰のたゝざる居つゞけの客　八王子　丸　主

朝はやくかへり遲れて女房のてまへもかぶる吉原頭巾　おなじく

きよめたる門に匂ひてむさし野や今朝もくるわの肥立の人　甲、鹽部　千年友鶴

わかれ酒わかれの歌の文句にも一口つける茶屋の女房　甲、　要　末廣

花魁のふところよりも忘られぬ羽二重肌の茶屋の湯豆腐　同市川　常　道

衣裳よりも我が思ふ客のきぬ〴〵の袖縫ひとめてくれお針婆　おなじく

移し植ゑしまことの花に傾城の素足は今朝もはだしなるべし　八丁メ　狂言子

居つゞけの雨やはれんと色容をかへしの風の朝北や憂き　おなじく

又たぐひ中の丁なる湯豆腐の露さへ匂ふ花の朝風　オクフクシマ　隈川綱代木

一列に持ちて行くらん傾城の數さへ見ゆる雁の玉づさ　天馬

やしなひを頼むしるしは箸紙に旦那と書きし居つゞけの部屋　畑持

傾城の別れを思ふ酒にまた土手の雉子のほろ醉の聲　おなじく

客人の鼻毛のはしで傾城が手管の絲につなぎ置くらん　白川　竹盛

居つゞけに客の流すも理やぬしは名に負ふ川竹の君　同　紅葉西樹

中の丁花の浪をや越えかねし今日も流れて居つゞけぞする　同　其葉

傾城の詞の花に醉ひやせし家路わするゝ居つゞけの客　同　泉和久成

湯豆腐の雪にめでては歸る氣も折れてや酒に寢る竹いせ屋　千國

もちこしの酒もさめなん豆腐迄朝湯に入りし茶屋がもてなし　フクシマ　六歌園文數

下著をば七つに下げて今日も又流しさうなる川岸見世の客　年積

鶯の寢おきに見世をひらきては夜著も高きにうつる押入　仙ダイ　白雲洞愛雄

中の丁の軒にさし込む緋櫻に蝶のねぶりや今さめぬらん　同　麻中園直捕

ほろ醉―雉子の啼聲のほろ〳〵に掛く

川竹の君―遊女

七つ―質、七つ時

高きにうつる―鶯は詩經に「出自幽谷遷于喬木」といふことあるを執る

三輪—三輪の神の傳說、謠曲「三輪」に、「こはそもあさましや、契りし人の姿か、其絲の三わげ殘りしより、三輪のしるしの過ぎし世を、語るに附けて恥かしや」

あしか—恐し、蘆鹿

ねの日—寝、子日（子日の遊の小松引）

十かへり—松は百年に一度、千年に十度花を開くといふ、十度の迎に掛く

かさい—香、葛西

かへしいせん—御歸し申ませんの意の里詞

日數ふる雪の外にも居つゞけの身のしろがねの積る吉原　おなじく

傾城の別れは三輪にあらねども茶屋の印の酒ぞすぎたる　同　千代菊俊

居續と客にみこしを据ゑさせてそばから囃したつる太鼓等　長州末廣改　岩永村主

大門に駕は入れざる里になどこしを据ゑたる居つゞけの客　同　默亭

山吹のみに成らぬうち四手てふ駕いそがする花川戸道　同　窓梅守

ゑみふくむ茶屋の機嫌の朝ざくら花まき散す客をとゞめて　同　飯山盛

ぷんとくる香は肥取の桶とぢの花の邪魔なる眞中の丁　同　和氣有竹

内の首尾とてもあしかの性ならん寝た儘起きぬ居つゞけの客　同　文窓亭

屛風をも引きてねの日の小松屋へ五つ迎の十かへりも來る　おなじく

中の丁春の山屋の雪も今朝のどかに消ゆる茶屋の湯豆腐　萬氣丸

朝風に梅がかさいの肥取も匂ひをはこぶ茶屋が軒さき　友頼

湯豆腐の下地もすきの居つゞけやかへしいせんの御意も吉原　六極園

時は今雨を降らする辰なればしつぽり濡るゝ居つゞけの客　古家雨盛

下草の霜にやかれし朝もよいきの字が臺の松もさびしや　文麿

きた—來た、北里

鐵炮見世—鐵砲とて揚代晝夜銀二朱、夜四つ時より錢四百文といふ下等遊女の居りし店

はんざふ—半插盥、水を盛る器

又—轂つに掛く
轡屋—遊女屋の異名

茶屋までは別れてきたの朝ざくら見れば根のおふ居續の客　牛の屋歩

かへる氣も朝ざくら見る吉原に足をつなげる駒下駄の音　羽風

吉原の女郎のうそや鐵炮見世百も承知で居つゞけをうつ　櫻枝炭

北國の雪のあしたは熊ならで錦の夜著の穴に籠りつ　小枝

吉原や土手の蛙もかた／＼と戸をあくる音水を汲む音　峯山

ゆふべにも優るあしたの景色かな戸も半開の花のよし原　六經園

をかしさは肥取の來てやうやくに鼻へ氣のつく西川岸の客　おなじく

齒みがきは丁子屋にして松葉屋のはんざふを出す居續けの朝　道列

吉原の朝出の雨は借金を質に置いてもながす氣になる　おなじく

傾城のはれの衣裳を辰の刻お針も見ゆる松葉屋の內　花月窓彌壽丸

辰の刻使來りてやる文をなが／＼巻きて上封じする　おなじく

二日醉する客人や肥取に汲んで出したる水のまじなひ　筆持

轡屋の見世あくる頃又一度からす猫めが軒をわたれり　裾廣

朝ざくらまだ蕾なるはじめから黃金の花を散らす吉原　甲、カジカ澤　雲林舍花咲

きの字—きの字屋、臺の物を調ふる家
鷄舌樓—丁子屋
朝ざくら云々—古今集「春がすみ立つを見捨てて行く雁は花なき里に住みやならへる」
九さい—九歳、臭い

居つゞけときめれば酒は朝もよいきの字が臺の物取りにやれ　眞加世
歸るさの朝の藝者の三絃にまた引きかへす居つゞけの客　枝友
白露を口にふくむは香の名の鷄舌樓の庭の朝顏　仙フ　千柳亭
湯豆腐に散りこむ花はみよし野の山屋とおもふ里の朝風　おなじく
花はまだ植ゑしまゝなる朝ざくら見る我尻にいつか根のはる　同石卷　菊枝樓繁路
別れ酒持ち出る茶屋の妹ならで背中をたゝく見かへり柳　同石澤　千緣亭松友
大門をひとへへだつる花の雲見やぶつて出る客はあらじな　クリハシ　潛
酒は今朝おくびに出ても此里の花には手をなあてそ春風　同　筒留
咲く花を雪と見なせば中の丁又きのかはる客の居つゞけ　松成
朝ざくら捨てていづくへ歸るべき雁がねならぬ吉原雀　高サキ　茂葉
内かたの首尾はともあれ居つゞけの闇なき里におさき眞暗　おなじく
肥取が禿の年を問へばまだ九さいというて立つる線香　同　壽女
夏あさみ著かふる蟬の羽衣もさればうつくし吉原の里　同　松花堂
きぬ〴〵を惜むは花の朝景色ついをる氣にもなりし吉原　源氏樓春影

野太鼓―幇間の卑稱、稻荷祭の太鼓を言ひ掛く
朝顔のかきのめす―朝顔の蕾に似たる紅筆もて文をさら〳〵と書きくだすをいふ、朝顔に見送る花魁の顔を掛く
おぼろ―おぼろ豆腐（豆腐を桶の中にこり固まらせたる料理）に霞を掛く
のり―海苔、粋氣
北國―吉原
たのむ―賴む、田の面
名代―馴染の娼妓に差支ある時、代りに同樓中の他の妓を買ふこと

九郎助の稻荷祭に朝よりも顏なま白い野太鼓も來る　おなじく
車座にならびて茶屋のむかひ酒ゆふべの醉を引き出しけり　犬馬
見かへればまだ大門に朝顏のかきのめすとは知れど迷へり　催馬
吹くからに大戶格子もきら〳〵と霜より光る門の鹽花　おなじく
たきつける茶屋に朝餉の支度して腹をすゑたる客の出もどり　春江亭
又思ひ出しつ茶屋が湯豆腐の耳にはさみしよべの睦言　錢成
やけ酒のよべの醉をもやはらかく直す腹なる茶屋が湯豆腐　琴松堂
あきたらぬ胸と心に相談のひる迄もつひ居つゞけの客　オタ相馬 便時堂玉丸
けさ見れば茶屋の門さへ湯豆腐のおぼろに霞む春のうらゝか　おなじく
枝に枝さくやから今日居つゞけの客もちらさぬ花の吉原　上々館呑吉
もてはやす拍子と茶屋が湯豆腐にのりの見えたる客ぞ多かる　おなじく
花魁の口と夜具とにようべからくるまれて寢る居つゞけの客　春人
里の名も北國とてや朝ごとにたのむの雁の文づかひ來る　おなじく
名代の夜具の冷たさこらへきて溫まりぬる茶屋の湯豆腐　水垣

濡れにぞ云々―「濡れにぞ濡れし色は變らず」の句による

さし込む―癪の緣語

辰の下り―辰の下刻、籠の下り

編笠茶屋―前に註せり

ふし、根葉、しげる―凡て竹の緣語

居つゞけとなるべき脈の樣體へ匙加減をもする幇間醫者　同　常雪

客に尻くさらせよとて夕立の雨おこしたる辰の刻かも　尾、龜丸

手綱をもいかでゆるさん揚代もはらはぬ客のあとに附馬　濱荻

門の戸へたつの時とて打つ水に濡れにぞ濡れし居つゞけの客　おなじく

寢わすれて辰の刻ころ湯へ行けば連にまかれし客の居つゞけ　見分

賴みやる文の封じの朱肉迄あかき心を見する傾城　おなじく

藝者には口をもかけぬ朝まだき來る肥取に立つる線香　獨樂堂

口舌せし癪はさがりし跡に又朝日さし込む居つゞけの床　おなじく

川竹の手管の雨に水まして又とめらるゝ居つゞけの客　花守

吉原にむすぶ榮華の夢見草けさ目のさむる宵の惣花　上、イカホ　柳芳

刻限は辰の下りとなりにけり水をまいたる茶屋の門口　同山子田　山中庵里遠

湯豆腐であたゝまるほど引かぶる編笠茶屋の雪の朝酒　イカホ　一樹園

格子からあたる朝日も居つゞけの夜著の縞かと思ふ吉原　笠人

川竹の詞のふしを根葉にして口舌もしげる居つゞけの客　麟馬

折―菓子折に言ひ掛く
かへさ―歸るさ
はな―花、鼻

添へてやる最中の月の折もよし今日くる雁の文の使に　おなじく
厚氷はるの旦もよべのまゝ水にかへらで居つゞけの客　犬山 影住
淺草の鐘をかぞふる指までもみな寢てしまふ花魁の部屋　セッツ池田 五卯
吉原のかへさ忘るゝ湯豆腐に或はうかれつ或はしづみつ　同 長房
おいらんの額の不二に肌の雪かへる時さへ知らぬ居つゞけ　同 山根酒人
時しりて越路の雁がおなじみのかたらへやらん文使をば　おなじく
肥取も來る吉原の朝ざくらはなを霞の袖におほひつ　同利企 傳
夜あかしをせし初午のたいこ持打ちくたびれて寢る五つ頃　おなじく
胸の火の用心に今朝是よけん拍子木にせし茶屋が湯豆腐　那内 金英園
今日もまた寢て居つゞけの春雨に若草よりも鼻毛のびなん　同 眞久
ふられたる客もしぶ〳〵居つゞけのやむ事を得ぬ今朝の大雪　おなじく
お針來て直す小袖は刻限の五つかさねて仕附をぞ縫ふ　桂樹園
朝顔の水あぐるころ青すだれ軒端にさがる辰の上刻　おなじく
止められて又居つゞけの相談もまだにえきらぬ茶屋の湯豆腐　甲ノ 百々庵虎千

もどろ―しどろもどろ、戻ろ
五丁町―吉原五丁町
おなか―腹、仲
腰の物―武士の大小
にた―煮た、似た

三味線のてんとたまらぬ居つゞけに客をも繋ぐ雨の糸水　山形　枝折
うがひ水盥の湯をもとりの聲聞き流したる居つゞけの客　同　門盛
猪牙駕の沙汰やめさせて傾城の口に乘せたる居つゞけの客　江又　保住
どうぞまたお出でなんしに色まして空にうつろふ朝ざくら花　仙ダイ　明登
いふ事もしどろになれど酒醉のもどろと言はぬ居つゞけの朝　且平
櫺子から降る春雨の糸脉を見ればあがらぬ居つゞけの床　おなじく
湯豆腐の五丁町から歸り來て味噌をつけたる女房が前　クハナ　蛤丁樓馬伎
二日醉よべの口舌ともろともにおなかを直す茶屋が湯豆腐　同　燕子樓
朝ざくら花の宴ならで別れ酒又とりかはす扇屋の客　尾、　雅流園弘器
腰の物を受けとる茶屋のわかれ酒わが魂ぞ跡にのこれる　おなじく
鰯にた小鍋立して居つゞけの座敷賑ふ姉妹女郎　ギフ　歌笑
二階から下りてそののち別れをもまた暇どりし茶屋の朝酒　おなじく
拍子木に切りたる茶屋の湯豆腐も今朝の別れの幕とこそなれ　おなじく
八重ざくら奈良の都をうつし植ゑて吉原さへも花に朝起　おなじく

十日の雨—鳳凰は治平の瑞鳥、五風十雨の太平樂といふ洒落なるべし

針妙—裁縫する女

たつ—立つ、辰

金銀の腹をくだしゝ客人とあちらこちらに來る肥取　千涌樓水垣

朝櫻見ては猶更居つゞけに折りたき花のある中の町　仙ヲ　千歌林

此里の櫻が上の露の玉うそでまろめて置けるなるべし　タリハシ　酒

肥取の來る頃どうかかうかとは居つゞけくさい客の長尻　眞加世

吉原の雪の朝酒あたゝめて又引かくる居つゞけの夜著　桂樹園

鳳凰を壁に畫きし吉原は十日の雨の居つゞけもあり　尾、　雙蝶園

たちさわぐ女浪男浪を呼びよせて兎つくらす雪の居つゞけ　全亭

春雨に居つゞけしたる吉原にわらびも出づる竹村が菓子　垣本一文字

仕事より猶口も手も八丁の土手をいそぎて通ふ針妙　鈍々亭和樽

客人をかへしゝ跡は据風呂もぬるまにむすぶ傾城の夢　六極園

八、

めざましく櫻は咲きぬ吉原の朝の五つの寝入ばなにも　貫也

朝顔も酒の肴と湯豆腐にまた絡みつく居つゞけの客　瀧水亭つよき

御迎の使三度におよびてはやう／＼客の腰たつの刻　三、　廬山人

拳をうつ手と見世ひらく其頃もおなじ五つの里の朝あけ　おなじく

お針—裁縫女

つけな〳〵—跟く、漬菜
きの字屋—吉原にて臺の物を調ふる家

辰時

十五、

かへらじと羽織の紐を引ききりし頃にお針の來るもよし原　ギフ　歌笑

肥取の來るに不孝は居つゞけの尻をば親に又ものごはす　扇山堂据廣

十三、

三つぶとん添寢の夜著と内の首尾かぶる氣になる居續の朝　升成

客人のうまい話の中の町ういた所で喰はす湯豆腐　松成

植ゑ置いてひとへにめづる刻限のいつゝは開く花も吉原　桂樹園

居つゞけを足長島といふならん腰にたいこの附いて廻れば　甲フ　素后

待ちぶせの新造も居ぬ大門につけな〳〵の商人の聲　獨樂堂

家ごとによべの肴のあれこれと取り集めつゝ歩くきの字屋　盛砂

据風呂に入らぬ先から今朝も又流せ〳〵と居つゞけの客　塵外樓

十、

又いつと契る一座の約束もにてかたまらぬ茶屋の湯豆腐　曾立

辰時

ものこふ法師ばらうち連れて、はち〳〵と呼びつゝ入りもて來。むづかしげなる楠さしになひて、きたなげなる男どもの入り來るも見ゆ。物縫ふ女の、近きわたりに住めるが、つゝみひきさげて來るもあり。髮つかぬる男にや、襷ひき結ひて、いかめしき櫛笥ひきさげて、いそがしげに走り歩く。若きあそびどもは、猶よべのまゝにて、夢路にはあしもやすめぬにや、鼾はなやかにかきて、あらぬ寢言をさへいふなる。夜一夜かたらひ明して困じけるにや、今朝も猶かへらで、やがて寢ふせるまらうどもあるべし。男どもは、部屋々々はさらなり、ほそどの厨の板敷など、かい掃きのごひなどす。大門をはなれて長き堤あり、その下にいさゝかの町あるを孔雀長屋といふ、輿舁く者どもの住みどころなり。今戸の橋のあたりには、舟をさの家ども軒をならべて立てり。此わたりは、何れもよのつねの如く、このほど朝餉など炊ぐめり。

辰時－午前八時

むづかしげなる－むさくるしき

まらうど－客

ほそどの－廊

堤－日本堤（吉原土手）

三枚―駕籠を三人して舁かしむること

孔雀長屋―日本堤の傍に在りし長屋

内の首尾を思へば今朝も三枚でかけろとや鳴く鷄の聲　甲フ　六時園多理雄

傾城も空泣はせぬ色容にまことの鷄のかへれとぞ啼く　同市川　甲市亭眞河

中の町あとを見送るおいらんも無心にふむな雪のあけぼの　紀ヽヮカ山　胴膽太記

玉の緒も今やたえなん迎にと孔雀長屋の駕の來る頃　六樹園飯盛

おいかくる―老かくる、追ひかくる、古今集「露の豆にぬふてふ梅の花折りてかざさん老かくるやと」
不如歸―郭公の鳴聲より「歸るに如かず」の義に取りて郭公の異名とせり
とり〳〵―めい〳〵、鳥に掛く
はらみて―胸中に抱いて、はらむさんや、はやめ凡て俗語

宵よりも客をひねりし按摩とておあしにぎりて戻る明方　同　詩庵季彙
花魁の二枚の舌はさもなくて明の雀の舌ぞ切りたき　同　四國猿人
花にとまる客よりさきに起き出でて竹屋が軒に鳴くむら雀　八日市　雲通路
朝がへり二人並びしからかさも日本堤の雪のあけぼの　高サキ　松花堂俊經
大門を見かへり柳春風にめをこすり合ふ客の朝戸出　高砂亭松成
土手へ來て茶屋が汲み出す煎じ茶のにくゝもかをる襟の白粉　仙ダイ　一曲庵糸道
朝がへり駕とすれ合ふ時鳥これも飛ばする土手の一筋　高サキ　周左堂本炭
花さそふ風の外にも花魁は通ふ神をも送るきぬ〴〵　同　桐杏女
新造のかざしの梅も大門をおいかくるやと見かへり柳　おなじく
傾城は郭公をもにくむらん不如歸と啼いて客に聞かする　オクフタシマ　狂歌庵鹿住
水戸尻常燈明もしめるころ油とられに歸るきぬ〴〵　柳花園山形
拍子木に一つ多くて七つめの鳥をにくめる里のきぬ〴〵　おなじく
曉のとり〳〵客を見送りてまゝになる迄と友寢するらん　仙ダイ　東雲舍明益
又明日の晩をはらみてさんやまで今朝ははやめに歸る客かも　花洞有明

物著星―指の爪の白點、これが出來る時は著物が出來るとの俗說による

海老屋、松葉屋―共に名ありし妓樓

ねん―年季

細見のしるし―前に註す

にほんづつみ―二本包み、日本堤

ふりつけし客を送れば花魁の物著星まできゆる明方　馴馬園盛砂

きえ残る星のけしきもよし原や宵の小菊の花に似ねども　文　麿

明け初むる春は景色もよし原やかざり海老屋にかどの松葉屋　仙ダイ　千柳亭唐丸

仲の町彌陀の朝日もむらさきの帷に霞む春のあけぼの　おなじく

今しばし惜しき二階のわかれ酒も一つつけよ淺草の鐘　同　柳紘亭唐琴

わかれ酒飲む内にはや醉よりもまはるは朝のかへり刻限　同　千歌林山路

大門を出てゆく客の二日醉あたま重げな雪のからかさ　おなじく

きぬ〴〵に惡みし聲に引きかへて嬉しやねんの明方の鳥　サノ　良藥堂匕主

おいらんの客送る頃大門の口へさしたる横雲の紅　安戸　語得亭方住

十、

細見のしるしの外においらんも星いたゞきて送る客人　阿州　雲多樓拔足

八、

大小のにほんづつみをあけ方に歸れる客も腰がるに見ゆ　同　針業有大甚

宵のほどつかひし金はさもなくて今更惜しき曉のかね　同　寢太樓起兼

細見—妓樓と娼妓との名などを仔細に記したる小冊子、山形と星とは細見に用ひたる記號也、五五八頁呼出しの條にも註せり

おさへ—さゝんとする盃を止め重ねて飮ましむること

うしろめたく—後の方が氣がかりに

九、

細見の文月の外も山形にほしの名ごりやきぬ〳〵の頃　尾、大山　三五屋影住

八、

ゆく雁とあちらこちらに朝がへり跡に見捨てる花のよし原　おなじく

きぬ〳〵の豆腐は口に消えながら耳に殘りしかたき約束　素羅園天馬

いろ客の歸る羽織の袖だもといく度おさへて汲むわかれ酒　野、氏家　糟粕園文車

さすといふおさへんといふ朝酒の頃は櫺子に雀來て鳴く　同　便閑舍歌樂

啼きわたる鳥よりまづ羽二重の黑い袖をも濡らすきぬ〳〵　羽、山形　枝折

色客をかへす二階のわかれ酒おさへしものば癪ばかりなり　同　六階園門盛

淺草の鐘には胸もふさがりてあかぬ別れをしのゝめの空　同　碧樹園面喜

きぬ〳〵の袖にすがりて附髩の烏をなかす里のあけほの　同江又　擊壤園保住

有明の月の影てふ脊筋紋うしろめたくも見ゆるきぬ〳〵　同　旭陽園千霞

燈火の花ちる頃もあきたらでまださけ〳〵といふ客もあり　塵外樓清澄

卯の花の卯の刻過ぐる烏をも月夜なりとてとむる傾城　おなじく

あかし云々―「ほの〴〵と明石の浦の夕なぎに島がくれゆく舟をしぞ思ふ」
むきみ―向き見、ばか貝のむきみの舌を出せるに掛く
雲となり云々―巫山の故事
送り狼―人の跡をつけながら隙を窺ひて飛びかかる狼、「喰ひつけば」「引つかけて」の縁語
南鐐の一片―銀二朱
俵屋―有名なりし揚屋

吉原に一夜あかしの朝がへり猪牙のふとんも島がくれ行く　松梅亭魚人
大門の別れあなうの時の間にはしる並木のあやにくの駕　一風流貫也
浮女があとをむきみの舌出すは馬鹿と見られし客のきぬ〴〵　且　平
雲となり雨と濡れたるきぬ〴〵にまことの雨はうしや卯の刻　醉樂亭一德
喰ひつけば離れぬ客と花魁の身に引つかけて送り狼　おなじく
横雲のわかるゝ空も南鐐の一片のこる西河岸の月　甲フ　西山堂常雪
此上はからきめ見せん大門の口にてうまく捉へたる客　全亭正直
傾城の舌ばかりかは歯のあとの二枚腕に残るあかつき　おなじく
暁におくる女の駒下駄と乗りかへにする大門の客　長州　志賀海面
きぬ〴〵の袖ひき煙草吸ひつけてうそを吹出す里のたはれ女　同　草刈朝興
きぬ〴〵のわかれ鳥ほど駕までも並べて飛ばす吉原の土手　同　桐井一葉
むかへ酒太鼓の外に明六つの拍子木にきる茶屋の湯豆腐　畑　持
たそがれの客にはかへて今朝は又雀のむれる俵屋の門　おなじく
寝みだれの髪なでつくる明方に格子にもさす櫛形の月　オタ八丁メ　杜言子星影

めー芽、目
吳竹の―ふしの枕詞
すみ町―澄み、隅町
つき―突き、月
落ちかゝりたる―僧正遍照「名をめでてをりしばかりぞ女郎花我落ちにきと人に語るな」の捩り
番頭新造―略して番新、老巧の遊女にて上臈の遊女に屬し一切の取持ちをなし客接の任に當る

見かへりの柳なびかす朝風にめをこすりつゝ戻る客人　山本里住

きぬ〴〵の數はつもれど盃のおさへひかへのならぬ鳥がね　おなじく

傾城も客もわかれを惜む頃顏かたむくる有明の月　風鈴堂錢成

觀音の一寸八分もきぬ〴〵にせめてのばせや淺草の鐘　上、高サヤ　集雀亭茂葉

朝まだき雀啼くころ吳竹のふし見町から巣ばなれの客　おなじく

山吹のみにはならねどきぬ〴〵に歸れとさらに言はぬ色容　同　泉源樓壽女

ほとゝぎす鳴く音は月のすみ町と見る吉原の有明のそら　日暮丘　春駒勇

西河岸へまはらずあくる短夜は按摩の杖のつきのこりける　花前亭友賴

口舌せし床もしらけて横雲の帶するもうし里のきぬ〴〵　秋雨亭笠人

よべとめし袖の梅が香それならで袂にすがる待ちぶせ新造　松上樓房塵改　文塵園千國

中庭に雀も千代とちぎる頃うしや二階のわかれ酒盛　同高サヤ　洗心亭影法師

女郎花なまめき立てる吉原に落ちかゝりたる有明の月　同七日市　文庫人

傾城の誠をつくす吉原に夜明の烏そらなきをしつ　おなじく

色容とわかれ酒には花魁にかんをつけたる番頭新造　林秀亭年積

う―噯、卯

編笠茶屋―吉原にて遊客に燒印編笠を貸したる茶屋、大門口にありたり

狼の云々―「送り狼」といふ諺にとる

遣手―娼妓の取締を爲し、又は客の世話などする老婆

ゆかり―「ゆかりの色」は紫色の異名

かひのみつくる―べそをかく

つけざし―返杯の時更に別の杯を添へて差すこと

まつ白につもる櫻の大雪にふところ寒き朝がへり客　蝶運齋津吉

床を出て惜む別れの二階には又あたゝむる酒ぞうれしき　難波浦住

クリハシ
明の鐘ぼんとなりしは待客の夜著よりぬけて出づるなるべし　玉の屋潛

同
しばしとて取附くを突放せるはあなうの時の鐘にぞありける　衣の屋篙留

吉原をたゝきしまつて按摩針わが門の戸をさする曉　南極亭松久

夜をこめし編笠茶屋の迎には親の手前もかぶりこそすれ　おなじく

きぬ〲に大門口の別れにはまたこんといふ淺草の鐘　木本庵花守

桐生ト鯉改
飛ぶ駕に先陣かけし武士もうしろを見する今朝のわかれ路　桐風亭志歌久

花魁のかならずといふ一口は腹にうれしくしみる朝酒　栗柿枝友

狼のやうな遣手はつきもせずやさしく客をおくる花魁　おなじく

客人も里へゆかりの藤浪を裾にうたせて送るおいらん　氣儘倉立

横雲とともに二階のわかれ酒日の出に似たる客人の顔　花樂亭春人

下總ヒカタ
やう〱と起せば又もこぎ出してかひのみつくるねこき新造　舞鶴翁日和

鹽梅も又ひとしほや別れには涙に酒のふえたつけざし　おなじく

かほ〳〵—買よに掛く

つゝみ—包み、日本堤
しまつ鳥—うの枕詞、始末に掛く

功徳ぞと思ひし鐘が朝な〳〵わかれを告けて罪つくるなり　上、吉井　逍遙園行康

いつまでも心はこゝにあり明の月の入谷をかへる吉原　甲、郡内　金英園元住

歸らずにお出なんしとつねる時いたくなりぬる曉の鐘　同　壽　眞久

聞くも憂しわかれを惜む傾城にさきだちて鳴く里の小鳥　オク白川　六逸園竹盛

一つ二つ鳴きわたりてはいくばくの人を泣かする烏にくらし　同　白梅員照

だまされた客を烏も阿房ぞと告けてわたれるきぬ〴〵の頃　同　橘　其葉

おのが僞すわざかあしたの人込にもまれて歸る按摩をかしも　おなじく

錢もたでたゞかほ〳〵とあけ烏なじみの客を起すにくてさ　同　五々堂算

わかれ酒此盃で四つ五つ六つをかぎりに歸る客人　おなじく

あかつきに歸る按摩に聲そへて泣くも目のなき蚯蚓なるらん　おなじく

あけておく藝者のこゑもともし火もきえ方になる有明の月　琴　松　堂

朝露は袖のしづくよ懷手顏をつゝみの吉原歸り　琴波堂浦女

目がさめて見ればゆふべのしまつ鳥うとりとしたる朝歸り客　眞　加　世

横雲の山屋豆腐の煮加減に居つゞけ酒のあとをひきけり　春江亭梅村

とめき―衣に香を焚き籠むること

廊下鳶―妓樓に遊び醉に乘じて廊下などを步き廻ること

まらうど―客

海棠の花の廓の新造は睡りがちなる春のあけぼの　鷺毛亭筆持

春風の手にやつまれし朝がへり紫いろを見せし江戸町　仙遊樓若女

見かへりの名ある柳は横雲の袖ひく春のけぶり草かも　南松樓長女

諸羽がひしめてねぐらをきぬ〴〵の鳥にさかれて歸る吉原　雙樓亭悅氣

吉原や下戸もわかれの時酒にかさねてぞつぐきぬ〴〵の鳥　おなじく

別れ酒目さへちらつく雪ぞらに二階のふりもかはる居つゞけ　錦毛園羽風

うちかけの裾に縫ひたる竹に虎うそぶきながら送る花魁　甲フ　雪廼屋素后

大門の口さへにくきあけ烏なくのが耳について歸れば　醉松亭岡住

咲く花の横雲わけて傾城のとめきも送る春の朝風　播、原田　春眠亭深寢父

とく歸る心も知らでひとりたゞ居つゞけ顏の有明の月　六經園萬陀伎

あけぼのの烏ばかりか起されて廊下鳶まで出づる樓　おなじく

曉の鐘に歸りのまらうどをつき出すやうな大門の口　東海園蓬山改　雪齋峰山

はりつよき力はあれど別路を目ぶちおもげに送る傾城　扇波堂玉藻

そら泣の手管より今朝の歸りには悲しくなりし客のふところ　おなじく

雁がね云々—雁は春北へ去る也
ふし—節、臥し送り三重—浄瑠璃の節の名
三水に日讀酉—酒
わけ道云々—理の黒白
烏も云々—誓を立つる時、熊野の牛玉神社の護符を飲めば、社に棲める烏一羽死すといひ傳ふ
つら—顔、雁の縁なる列

仙術の通人も今朝寝過してちうを飛び行く土手の垂駕　タハナ　一圓窓文字吉

夜あけには烏ばかりか戻駕いくつも飛ばす大恩寺前　同　光明館秀丸

雁がねと聲は似れどもこれはまた南をさして歸る朝駕　おなじく

これも又ふりし物ぞふられたる客かけて行く明六つのはな　尾、　朋來庵龜丸

浄瑠璃のふしては居らず花魁もかへりの客を送り三重　ギフ　三馱軒三馱

三水に日讀酉は二階にて別れの時をつぐる明方　おなじく

鳴かば鳴け明の烏に色まさる黒羽二重の客は居つゞけ　同　詩館歌笑

花魁の送るもよしや足引の山屋豆腐でまた茶屋の酒　おなじく

待ちぶせの客をとらへてわけ道をたつるや黒い四郎兵衛が門　おなじく

吉原やかけさしのぞく半まがき晝にまじりの有明の月　おなじく

傾城の書きし起請のうそなれば烏も死なぬ曙の空　八王子　春樹園丸主

烏だにまだ告げぬ間に聲たてて駕を飛ばするあけの吉原　含笑庵道列

吉原や客も居たいが一ぱいに茶椀に受けし明の時酒　おなじく

雁がねは何大門の待ちぶせに隱しょつらを見出す新造　おなじく

四郎兵衛が關―大門の稱、大門番人は三浦屋四郎左衛門の雇人にて、必ず四郎兵衛と名づけたり

大門を云々―千兩で大門をうつといふ、あかぬといふ爲めの緣語

め―目、芽

かけろ―鷄の啼聲に「駈けろ」を掛く

うつり香に心ひかるゝ衣紋坂つくらふ宿の首尾は物かは　六極園南北

伏見町あたりを歸るひとへ帶半天ばかりしらむ曙　おなじく

有明の月と見るまで霜きえて起きわかれ路の四郎兵衛が關　みつあさ

千兩の金は物かは大門をうたせてあかぬきぬ〴〵の空　おなじく

花魁に別れて土手の若草のめだし頭巾の朝もどり客　攝、岡山　道酒屋廣孝

傾城に涙はかけて歸らねどめをふいてゐる見かへり柳　同　池田　藤棚長房

淺草の鐘に別れて家つ鳥かけろといそぐ土手の早駕　同　三鷹樓五卯

卯の時に吉原かへる猪牙舟も川瀨の浪をはしらせにけり　同　玉水軒寢顏

梅が枝に雀とび出るあけぼのは客もいぬきとなる揚屋町　同　利企　英良軒傳

うき世をば夢でくらすか吉原はまだ夜中なる春のあけぼの　尾、　雙蝶園、中雄

中の町植ゑし櫻の花のみか客もちらせる明六つのかね　クハナ　錦浦亭糸彦

金銀の自由な客も上野なる鐘にせかれて歸る吉原　同　無極樓倉積

かへり客そら涙にて引きとめん女郎は月をたのむ下地に　おなじく

傾城の眞赤な嘘をくひながらなど青ざめし朝がへり客　おなじく

ふたつ星—七夕の牽牛織女の二星
みのわ—簑、簑輪
香爐峯云々—白樂天「遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峯雪撥簾看」
羅城門河岸—吉原京町二丁目の河岸、淡木屋といふ小遊女屋の遊女標客の袂を引いて容易に放たざりしを渡邊綱の故事に附會せるなりとぞ
四つての駕—四つ時、四手駕
くだかけ—くだ、鷄
ねの日—寢、子日（古へ正月の初の子の日に野に小松を引きて千代を祝へり）

月は西へ入山形の朝ぼらけわかれ姿やふたつ星めく　松小枝
つゝむのは頭ばかりか人の目をかくれみのわの曙の空　おなじく
香爐峯ならねど雪のあけ六つに裾をかゝげて送る花魁　桂樹園家風
起きて見て客も横手をうつ蟬のぬけがらとなるねこき新造　おなじく
身の油ぬけたるやうに明の鐘つかれて歸る別路の客　おなじく
わかれ酒つもる咄をしな玉のあとに思ひの種は殘れり　おなじく
鬼ならぬあけの別れに又いつと手をとられたる羅城門河岸　おなじく
吉原をやみの四つでの駕に乘りていそぐとすれどあけの鳥越　擣衣園音成
淺草の鐘の龍頭はきぬ〴〵の涙の雲も里におこせり　六菖園裏成
親の目を忍びくるわに寢わすれて胸のどきつく曉の鐘　おなじく
傾城にのせかけられて駕にまで乘りうつりたる朝がへり客　上、イカ木　皐白園柳芳
傾城のすがたの花にわかれては客も泣く〳〵歸る雁がね　同　一樹園久澄
みじか夜に通ひくるわの客人も酒にまかするくだかけの聲　同　六行園年重
傾城は客とねの日の松よりも引いてまよはす別路の袖　同　深樹園安麻呂

北向に云々―雁は春北に去る也、古今集「春霞立つを見捨てて行く雁は花なき里に住みやならへる」
吉原雀―行々子、よしきり
時のうさぎ―卯の時、光陰
あし―足、葦
むつき―六つ時、睦月
鯨帶―黑と白との合せ帶
後の月見―陰曆九月十三夜の月見
あそび―遊女
まじなひの塵―しびれのまじなひには額に塵を附くれば也

吉原の花にあそびて大門を北向にかへる曉の雁　同　燕子樓
床花もうたず歸ればあちらから鹽花をうつあそび女が門　おなじく
朝がへり客に名ごりも口々にぎやう〳〵してふ吉原雀　同　音澄
居つゞけと思ふ心は卯の時にふつてわいたる吉原の雨　八房梅守
川竹と客の心はながみじか時のうさぎのあしやよし原　おなじく
きぬ〴〵に羽織を著せてもらふ頃大恩寺の鐘身にこたへけり　三、　廬山人
卯の時のむつきの雪に西河岸や醉はぬ客にはふれる鹽花　苑囿亭麟馬
夜と晝のわかれ惜まん横雲の鯨帶をも締むる傾城　止々堂犬馬
別れ酒飲み得ぬ下戸も引つかけてくれし羽織のうまみ忘れじ　成丈
吉原の後の月見の朝迎茶屋は七軒刻限は六つ　六桃園德若
あけ六つの中まで床に埋火のおこりかへりしすみ町の客　おなじく
蛸ずれのあそびが窓に手を出して足を出して里の朝雨　おなじく
まじなひの塵だに無くて朝がへりしびれをきらす京町の客　おなじく
いのりてし朝日の彌陀の後光より胸にさし込む別路の癪　八王子　重丸

鶏舌樓—丁子屋

七種—正月七日、六日の夕より七種の菜を俎に載せて「七くさなづな唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬ先に」と歌ひつゝ叩き、七日の朝に至りて粥に和して食ふ

ついた—撞いた、附いた

長柄傘—花魁の道中に用ふる傘

かはたれ時—明方の薄暗き時刻

天の戸をあけて女郎のそら泣は鶏舌樓のきぬ〴〵の床　クハナ　燕子樓由川

今朝も亦飲めば居る氣になりにけり昨夜の酒を呼出しの部屋　見分

七種をしまひの客は今朝鳥のわたらぬ先に歸る大門　賓市亭升成

おくり出る花の姿とあけの鐘おどろくばかりついた袖の香　聞秋

つねられし口舌しらけて紫の色にあけ行く花のよし原　上、小八タ　春草繁喜

初會からもてし廓のくひつきは肩にも紅のあかつきの鐘　森々亭畑持

入、

きぬ〴〵の櫻の露に濡れしよりうつり香ふかき花川戸道　伊勢濱荻

卯の時の別れにそゝぐ涙雨きをくさらしつ袖をしぼりつ　おなじく

つゝみたる胸のうちをも明烏ともになき立つきぬ〴〵の袖　甲、市川　甲江亭常道

きぬ〴〵にさゝやく耳に口紅と共についたる淺草の鐘　尾、　二水樓讀足

客おくる卯の時雨の長柄傘さして濡らさぬきぬ〴〵の袖　獨樂堂高盛

大門にきぬ〴〵送る朝風のかはたれ時ぞおいらんの袖　おなじく

五月雨のはれ間の星は見えながらふられて歸る土手の朝駕　同　歌宗堂眞澄

うはの空に遊びすぎしか吉原の櫻にしらむ有明の月　クハナ　百遊軒平樹

卯時

にほん堤—二本包みに日本堤(吉原土手)を言ひ掛く
猪の牙てふ舟—猪牙舟、(チヨキブネ)形細長くして疾し
しきたへの—枕の枕詞
はり—針、張り
鐵漿溝—吉原のうしろにある溝
百ました—駕賃を百文ましたる

十五、

たましひは何處へか置いて朝歸りにほん堤に武士の丸ごし　悟信亭眞加世

日の出でぬうちに歸れと傾城の首尾を案じる朝顏もよし　羽、山形　花魁園枝折

猪の牙てふ舟には乘らじ此朝け見かへりがちに歸る吉原　狂蝶子文麿

十三、

おいらんの口車にや乘せられしあとへ引かるゝ今朝の別れ路　クハナ　南松亭音澄

歸る氣は今朝すて鐘の三つぶとん二つ枕に響くあけ六つ　春の屋成丈

いつの朝もよう寢こかしにしきたへの枕はづして寢たる新造　淺治樓見分

療治して歸る按摩も吉原の所がらにやはりを持つらん　ギフ　五六三十盛

うしろから羽織を著せる煙草入わすれなんすな肯の言の葉　文龜亭催馬

ちと白く鐵漿溝も見わかりて早はげかゝるきぬ〴〵の空　調賀亭聞秋

朝がへり駕で飛ぶのは鶴に乘る仙人よりも百ました客　候和亭且平

十、

すまへど—争へど

まへど、あまたしてしたゝかに掴みかゝりぬれば、すべなくて、手まどひしつゝおめおめとなりて引かれつゝ行く。行きつきて如何にかすらん、おぼつかなし。

卯時―午前六時
あけぐれ―未明
おぼ／＼しき―おぼろげなる
はひりの口―門口
寢くたれ―寢亂れ
心のなし―思ひ成し
こゝら―許多
絲による云々―貫之「絲による物ならなくに別れ路の心ぼそくも思ほゆるかな」「物ならなくに」源氏には「物とはなしに」として引けり
たのめし人―賴みとなる樣に我に思はせし人
した待つ―心に待つ

卯時

あけぐれの空のおぼ／＼しきに、門の戸のごほ／＼と鳴るは、客人のかへるにやあらん。あそびどもは、なれたる衣の裾ひきかゝげて、あわたゞしく走り來て、はひりの口にたたずみ立ちて送す。わきて親しうせるは、ひき連れて、中宿の家にいたりて、酒汲みかはし粥すゝりなどして、さて大門のもとに到りてわかるめり。寢くたれの朝顏見るかひありなど思ふも、心のなしにやあらん。やう／＼明けゆくほど、こゝらの人ども、いろいろの衣ども著たるが、こき交ぜに出來て、いそぎ行く足もと、塒をはなるゝ鳥にも劣らず。竹輿舁く者の欠うちして、あまた並び居たる、心もとなげなり。こゝに柳ひともと立てり、見かへりの柳とぞ呼ぶなる。絲による物とはなしになどうち眺むる人もありぬべし。門の中に、女ばら五七人物にかくれて佇み居り。さるはたのめし人のよそ人にうつろひぬるを惡みて、その報せんとてした待つなりけり。男は斯うとだに知らねば、のど／＼と歩み來るを、不意にはら／＼と出來て、引きとらへて率て行く。行かじとす

吉原十二時

かりにも鬼のとは、在五の物語に記しつけたり。安達の原のくろづかにとは、兼盛の朝臣ぞ詠みたなる。大江戸の北にあたりて、さる者の集く處あり、吉原の里とは呼ぶめり。げに繋がぬ身の寄るべさだめず、あくがれ惑ふたはれ男の、枕ひきゆふわたりなりとか。いでやかゝる樂しき所にあそびては、若きどちの花心には、家路にかへらんことも忘れて、斧の柄もこゝに朽いつべし。かの御佛の住み給へる極樂の國を、かけて聞えんはかたじけなけれど、あそびがともがらにも猶九品のけぢめありて、その品さま〴〵に分れたり。さるを下品といへども足りぬべしなどいふは、よく好いたる人の詞なるべくや。

かりにも鬼の―伊勢物語「葎おひて荒れたる宿のうれたきはかりにも鬼のすだくなりけり」

安達が原云々―拾遺集「陸奥の安達の原の黒づかに鬼こもれりといふはまことか」

斧の柄も云々―晉の樵者王質、二童子の棊を見て斧の柄朽ちし故事

あそび―遊女

九品―淨土に九つの階級あり

り給はざりき、此故事を權九郎に採りたる也

奥藏の棟云々―「汗牛充棟」の語を翻案して、單に多き意に用ふ

淸行朝臣云々―三善淸行、延喜中、時弊に關する意見十二條を上れり

を、拙者命にかへて御詫申し、さまぐの御諫言良藥の苦味がきいたか、やうやう蟲のをどりが止みて、今斯くていらせ給ふ。斯様にくどく申すのも、御持病のおこらぬ用心に、少々灸をすうるなり。きゝ惡しともこらへさせ給へ。

物に堪忍あるべき事

一常に柔和謙退にて、大面をし給ふな。醉ひどれの無法ものあらば、耳をつぶしてよけ給へ。さては護摩祈禱の功力をからでも、家内安全長久ならん。このほか逐一申しつゞけば、奥藏の棟につかへ、車力も汗やかくべからん。それ故前後きりつめたる、仕著布子もふるめいたる、番頭が異見法事、淸行朝臣のやごとなきにも、その忠心はおとらじ物と、似あはぬ拙者が高慢禮節、よつて謹上恐惶謹言。

鷄鳴狗盜―孟嘗君の客の故事
助六―俠客、名技總角を配して、市川家十八番の一也、以下股ぐら、紫の鉢卷等皆此狂言の緣語也
五町―吉原の五町
智は云々―史記殷紀「知足ニ以距レ諫、言足ニ以飾レ非」
木乃伊とり―諺「木乃伊とりが木乃伊になる」
あめわかひこ―館に天稚彥神を掛く、此神天之穗日命に代りて瑞穗國を征せしが、其國主大國主神の女なる下照姫を娶りて還

うならせ給ふ。鷄鳴狗盜の食ひつぶし等におだてられ、逆上の血冠を銜いて宣へるは、われは新渡の唐本も讀めば、助六が文盲なる、我股ぐらをくゞらすべし、されば紫の鉢卷は、犢鼻褌にしてきんたまを結び、蛇の目の傘は、引破つてかも鹿を包まん、遠くは本屋の舊番頭、ちかくは出入の按摩とり、我學力を知らざらんや、よつて五町の花魁どもが、徂徠表紙のきみなら〳〵と稱す、俗物の獅子鼻へは、唐船を蹴こんでやる、髷のあひだから覗いて見やれ、明州の津が浮繪のやうに見えるなどと、馬鹿〳〵しき御見識、近日に身受して、かこはんとやらの相談にて、手つけも濟んだる樣子にて、内を外なる居つゞけなれば、疾く御隱居の耳に入つて、はじめの迎は、手代の淸十郎を遣したるに、智は諫を拒むに足れゝば、すご〳〵と歸つて來る。今度の討手は權九郎、ひきずつて來いとの御意、こいつ日中に行きたれば、木乃伊とりとや成りにけん、但子供のねぶるあめわかひこ、うまい目にやあひぬらん、四の鐘にも權九郎、ふたゝび歸り來らざれば、其時拙者罷越し、無二無三にお供して、お家へ罷りかへりたれば、御親類の相談きはまり、おはらひ箱の神風や、伊勢國へつけのぼせ、すでに御出立ときはまりし

永代橋—橋を渡れば當時の深川の遊處あり

隨身門—矢大臣門、淺草三社なる其門を出づれば新吉原の道となれば也

登樓萬里の春云云—魏の王粲の登樓賦の句にとる

木公、五明、鷄舌—松葉屋、扇屋、丁子屋

山谷通ひ—吉原通ひ

色あそび堅く禁制たる事

一遊所のあたりは鬼門なりと心得て、かならず向ひ給ふべからず。近所の葬送のついでは格別、永代橋と隨身門は、必ず越えんとおもひ給ふな。これはあまりに嚴しき掟よと仰せあるべけれど、あなたは生得女に目がなく、杖をつかねば立てぬほど、はやく腰をぬかし給ひて、おさき眞暗のお癖あれば、殊更きびしく申すなり。近所の娘藝者など、度々のさわぎはうち置きて申さず、はや五年にや成りぬらん、出入のせんき寸伯老が紹介にて、贅澤先生へ御入門、是は德行もすゝみ給ふべき事と、よろこんで居りし所に、誰か知らん此贅澤といふ先生、論語知らずの醉だふれにて、面諛をよくせる佞者なりとは、その頃平仄のあはぬ詩會にとて出で給へりしが、宿題の青樓曲をそのまゝに、贅澤先生の教導にて、すぐに登樓萬里の春、木公にやいたらん、五明にや行くべき、鷄舌の香もまた憐むべしとて、終に一層樓にのぼらせらる。寸伯が加減の匙先、蜜練のうまみあれば、それからが病みつきにて、限知れざる山谷通ひ、發熱のいきりつよく、うは言をのみ

寺はかつら―謡曲の文句
猿の皮―鼓、和訓栞に「小鼓に猿の皮を用ふるは能く人の肩にのぼる故なりといへり」と見ゆ

極樂寺高良云々―高良明神、共に石清水の麓にある末寺末社、此話「徒然草」に出づ

馬牛襟裾―學識なき者を罵る語、韓愈の符讀書城南詩「人不通古今、馬牛而襟裾」

入る事かたからん歟。一年謠の稽古なされし時、或日鼓を肩にあげて、ハアハアと手をのばす拍子に、腰元が茶を汲んで來たも知らず、寺はかつらの鼻ばしらを、ヤアといふほど引掻き給ひき。これは猿の皮をたゝきたてられし、因果の報と思はれて、その時密に笑ひたりき。いづれの藝も精次第にて、あえぎながらも務めてゆかば、たかき山にも上りなん。横ぐはへのなまうかべは、生涯麓の枝路にまごつきて、藝道の奥の院をば、まさしく拜する事あたはじ。案内なしの獨あるきは、極樂寺高良を拜みて、石淸水に參れりと思へる如く、固陋寡聞は身の損にて、切瑳琢磨ぞ第一なる。おのがおよばぬ先達をそしるは、かたへに伯樂のあるをも知らぬ、盲馬の高いなゝきにて、誰かはそれに乘る人あらん。或かたくななる長者の言葉に、町人は無藝無能がよし、秤目十露盤のみ學ぶべしといひたりし。かゝる人は落語の落に成りても、それから後はと問ひかけて、馬牛襟裾のそしりや得らん。御心につきし業あらば、一ッはみがきて成就あれ。但三味線鼓弓歌淨瑠璃、角力歌舞妓の類には、其家に上手あれば、これを聞きもし見もすべし、みづからやらかし給ふべからず。

鞠—蹴鞠

やんごとなき物—高貴な物

國字解—漢籍を假名にて通俗的に解釋せる書物

類聚雜要—類聚雜要抄、殿舍器物調度等を聚錄せる書、著者不詳

相馬公家—相馬の平將門の一門

遊藝過分ならぬやう心にかけ給ふべき事

一平生のおたのしみに、碁將棊雙六揚弓など、ひま費とは存ずれど、かるた賽ころばしの惡風俗にまさりたれば、少々は可なるべし。鞠は養生の一つともなれば、さきにお勸め申しゝかど、横ざまにのみ蹴やり給ひて、御嫌なれば論におよばず、生花茶の湯の遊藝も、大方にて有りぬべし。目きゝ自慢の古物あつかひ、たとひ正眞の故物とても、もと德ある人のもちし物かは。書畫はやんごとなき物なり、見知りたらんは殊勝にて、人がらもゆかしからん。學問し給ふとも心あるべし、此頃の人は寢所にて國字解廣げながら、見識だてをばいふなりとか。書齋の樣より器物まで、唐土ざまにつくりて、野郎頭の坐りて居んは、鉢卷をわすれし國性爺のやうにて、パアく人や笑ひぬらん。和歌を詠まんも同じかるべし。類聚雜要に形をとりて、所狹くならべたらんは、相馬公家の土用干したる如く、あるじの心ぞおしはからるゝ。劍術は商家につきぐしからず、泰平の町人には齒みがき賣ばかりにて、外にはいらぬ生兵法、なかく其身の疵なるべし。申さばお腹も立つべけれど、本性不器用にておはしませば、いづれの道を學び給ふとも、堺に

山桝太夫―又山庄太夫、俗に冷酷なる主人の例に引かるゝ人物、廣益俗說辨に見ゆ

市に云々―戰國策の「三人成虎」の語に取る

いゝ巢―巢、よい

癡ならず云々―支那の諺「不癡不聾、不作阿家翁」。大名は鷹揚なりの義

摸稜の宰相―摸稜を主義と爲せし唐の宰相蘇味道、摸稜とは事を處するに判然と可否せざるをいふ

の令なり。今の世にては主人の方から氣がねして、だまして使ふが事一なり。人づかひのわるい親方と、山桝太夫の名をたてば、お家に損こそたつべけれ。又少少の仕損じありとて、さのみ目を大きくし給はじ。手代より子どもまでが、隱れてのらやかわくらんと、乳母や下女を近づけて、見聞した事聞き給ふな。夜なべ仕事につかひたる、針を棒とも申すべく、市には出でぬ虎の尾花火、ほんといふめや見給はん。臺所の隅々に、蜘の巢がいゝところ、河岸藏の鼠の穴が、昨日より三つふえたなどと、人びつくりのきいた風は、驚く人もあるべけれど、拙者は承知つかまつらず。癡ならず聾ならざれば、阿家阿翁とならずとは、古人の詞なり。その句も承知の顏をせず、よろづ摸稜の宰相にて、おほやうにこそあらまほしけれ。

奢侈を禁ずべき事

一御新造の櫛かうがい、幅廣の二重緞子、女髮結常按摩、これらも過分にならぬやう、御心をつけ給へ。商賣に骨を折る、手代どもには麁食くはせて、自分御夫婦ばかりにて、鈴木大和田の榮耀をば、すぢなき事とや人申さん。

しらみの皮—吝嗇者の罵辭
有財餓鬼—同上
ぬけ參—密に伊勢參宮すること、神の導き給ふなりとして主も親も之を咎めざりし也
ぶりがれん—數をいふ符牒、今專ら八百屋の間に行はる、ぶりは二、がれんは五
もちな乞食—金をもちながら乞食の意
同然といふ意の罵辭
蓮臺—輦臺、板に棒二本つけたる涉川用の臺

法外至極と申すべし。茶道靈膳香花も、御みづからの役とおぼして、朝夕禮拜なし給へ。今日安樂の御暮しは、みな親御樣の身のあぶら、はかり知られぬ御恩なれば、一生わすれ給ふべからず。

吝嗇を禁ずべき事

一近所のつきあひ義理じんぎ、かゆい事をし給はず、しらみの皮といはれ給ふな。檀那寺の寄進を惜まば、有財餓鬼の罪やうらん。祭禮のあつめ錢、かけ捨ての合力無盡などあらば、太筆につかせ給へ。青道心の衣の勸進、ぬけ參の奉加帳に、駕舁の太郎兵衛が、息杖で一本つく、肴賣の團七が、ぶりがれんと名のる中に、十四五ヶ所の地主どのが、惜い〱の涙の玉銀一つぶとは何事ぞ。しはん棒を握りつめし、金の番人とは、あやつが事ぞと、必ず〱いはれ給ふな。人のわたる川をわたると申す諺の如くならば、裏借屋の者が徒歩わたりせば、あなたは蓮臺にてこし給へ。もち乞食といはれんは、人非人よと思しめせ。

めしつかひを憐み給ふべき事

一めしつかふ人は厚くめぐみて、我うみの子とあはれみ給へ。呵つてうごくは軍陣

三枚うら―裏の厚き贅澤なる草履

七ツ―午後四時
落ちても―精進おとしになまぐさを食ひても

その子はぐつと平氣なりとか。うす醬油のきすかれひにてそだち給へば、世のせちがらきは知り給はじ。人間の行路難は、三枚うらにて行くべからず。そも〱商人の家にうまるゝ輩は、商賣往來に書いたとほりを、今一算もうるさければ申さず。今日聞え奉ることは、あなたの腹の店おろし、御一生の惣勘定なり。しめて六十貫といはれぬやう、御身の分際を秤にかけて、十露盤のたましひの置所をよくつゝしみ給へ。

家業怠慢なくつとめ給ふべき事

一あしたは舂米屋と共に起出で、夕はうどん屋と共に臥し給へ。帳場は拙者があづかりなれど、一日に三度ばかりは、店に出て見張り給へ。檀那といふ心をやめて、我は天道につかはるゝ年季野郎と思しめせ。もし此事におこたらば、主人たる天道のしかりや受けんとおそれ給はゞ、此くらゐの事はつとまるべし。

年季祭日供養あるべき事

一御先祖の法事第一なり。佛書に年忌をいはずとて、世間普通の禮なれば、わろくすまして流すはわろし。しかるに伯父叔母の忌日は朝精進と定め給ひ、又母御樣の御命日に、ゆふ鯵の聲がすれば、七ツをうつたから落ちてもよからうなどとは、

大物主神云々—大國主神、其の婚し給ひしことをいふ
大げつ姫の神—大宜都比賣神、伊弉那岐神の第十七子にて素盞嗚尊に殺さる
君子は云々—論語學而篇「君子務本、本立而道生」
野中の清水—古今集「古の野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞ汲む」
柏餅を云々—端午幟の鍾馗をいふ
進士—始めは貢學の人の省試に及第したるをいひ、後には文章生をいへり
仰げば云々—論語「顏回喟然歎曰、仰之彌高、鑽之彌堅」孔子の道の高大なるをいふ

るは、捲つてはたけし所なれば、はたけとは言ふなりと、ある和學者は講じたりき。されればほどはめでたき物なり。殊に出生の門口なれば、ほどこそ人の本といふべけれ。君子は本をつとむとか、本をわすれぬ心しあらば、野中の清水ぬるきをいはず、あしたゆふべに茶湯を手向けて、額づかざらめや、あがめざらめや。

鍾馗の讃

大臣と稱すれども、隨身舍人もしたがへず、降魔の靈驗ありながら、鎭坐せる社も見えず、顏に手足に朱をそゝぎて、ぬき身を取つてふりまはす、もし生醉かと見てあれば、柏餅を引窓からのぞく。下戸歟上戸歟わくべからぬ、文武兼備の進士の垂跡、げにちはやぶるかみ幟、仰げばいよ〳〵軒にたかし。

番頭の異見法事

親旦那は伊勢人にて、七つの年に本家に來り、でつち奉公の艱苦をしのぎ、卅餘にて別宅して、終にかばかりの身體はとりたて給ひき。まことや其父母稼穡に勤勞すれども、

りたちぬる鴫―「鴫立澤の秋の夕暮」の詠に據る

其きさらぎのもちひ―望、餅「願はくば花のもとにて我死なんそのきさらぎの望月の頃」

ほど―女陰

人の身に云々―伊邪那美命と始めて縁を結び給ひし時の語、古事記を見よ

しらぬ火の―筑紫の枕詞

すがる少女―腰細き少女にて、美人の形容に用ふ

加具土神―火産靈神のこと

裂雷―裂雷なる神子を生み給ひし也、古事記は「折雷」とあり

ぬる鴫のあと弔ふばかりに、其きさらぎのもちひをそなへ、古りにし昔をとめこかしの、梅を花瓶に奉りて、抹香くゆらす富士香爐、煙を風になびかすになん。

ほどの繪

人の身になり〳〵て、なり合はざる所有り、ちはやぶる神代には、これをほどと呼びけるとぞ。しらぬ火の筑紫人は、ひなさきと呼ぶとなん。門がまへに井の字の說は、王荊公はなにとかいふらん。されど和名抄にも噂したれば、腰細のすがる少女、あがれる世よりや傳へつらん。つら〳〵いにしへを考ふるに、迦具土の神の御ほどは、闇山津見の神とあらはれ、伊弉冊の尊の御ほどには、裂雷鳴りとゞろきけるとか。かけまくもかしこけれど、天照御神の岩屋にこもり給ひし時、天鈿女命のほどうちふりて舞ひ給ひしにぞ、たやすく彼處をばあらはれ出で給ひける。みわの大物主神は、丹ぬりの矢に身をとりなし、勢夜多良姫のほどをつきて、いすゝき姫をぞ生ませ給ひし。大けつ姫の神と申すはみまかり給ひて、ほどのあたり畑となりて、おもはぬ麥が生えけるとぞ。保食御神にも、豆や小豆が生えけるを、いかなる鎌にてかき切りけん。後世畠といふな

なく、いらせ給ふを待ちとりて、書いて給へのあるじが結構、かの茶どころの宇治亞相の、唐天竺のはなしの會、今はむかしの古事を、ちよッとつまんだ雲茶集、茶碗にしるき詞の錦手、床几と共にならべ給へと、ちとくちばしの長過ぎた、藥鑵頭をふり立てて申す。

西行忌

身を富士の嶺の煙にたぐへ、吉野の山にかきこもりしより、藁沓のいたらぬ山なく、杖ひかぬ里もなし。保元平治のらうがはしきも、空吹く風と聞きなして、回國修行せられしは、前見ある人とやいふべき。上人の遁世いま十年おそかりなば、長谷部信連がふるまひならずば、六條の介の太夫が如き、あはれなる身とや成り給はまし。さるを世にほだしなき身となりて、弓馬の道を語りては、源二位を感心させ、釋門の道を說きては、文覺をさへ閉口させ給ひき。又煩惱のきづなを斷ちては、妻子をだにかへり見ず、忍辱の行をつとめては、渡守のむちに逢ひしなど、げに有りがたきおこなひ人にこそ。あはれ道心の堅固なると、歌の道にかしこかりしは、上人にます人やはある。今日なん立ち

宇治亞相の云々―源隆國宇治の閑居にて諸人の物語を聞きて今昔物語（宇治大納言物語）を著せり

錦手―五色の模樣を染めつけたる磁器

西行忌―陰曆二月十五日

らうがはしき―騷がしき、亂を指す

長谷部信連―治承の役、以仁王の宮を守りて擒となり伯耆に流さる

源二位―源賴朝

渡守の云々―西行遠江への途中天龍河の渡にて、船頭乘人多しとて先に乘れる西行を船より上らしめんと叱しけるを、聽かぬ顏して居りければ舟人血流るゝ迄頭を打つ、西行怒らず從容として舟より上れり

道集「一昔に聞く狛のわたりの瓜つくりとなりかくなる我心かな」
我を云々—催馬樂「瓜つくり、我を欲しといふ、いかにせん」
瓜田に履—「瓜田不納履」
淸少納言云々—枕草紙「美しきもの」の條
上元夫人西王母—共に支那の仙女
梁楚の云々—梁楚の境に瓜の美を爭ひしが、梁の宋就、楚瓜に水を灌がしめしより兩國和を結べる故事

なりかくなり成子村など、とりぐ〜にその名たかし。けに靑門の五色瓜、乞巧奠のそなへ物には、此一種を缺くべからず。七月瓜を食ふとは、から歌の古風にして、我を欲しといふいかにせんとは、ずつと昔の馬士唄とか。ほそぢと古事記にしるせるを思へば、はやう此國には植ゑけるならし。ばゝア瓜にはひきかへて、をとめが顏の瓜ざねには、瓜田に履のうたがひあれば、人の心を兼盛も、見てしがなとは詠みけるなるべし。曇恭が孝は此物にあらはれ、晴明が占は御感にあづかりぬ。王麗は落ちたる皮を惜み、寂蓮はむかずしてしてやりき。水くみたるはひさごなりと、曉行法師はそしれゝど、瓜に書いたる兒の顏と、淸少納言もほめしぞかし。朱陵の靈瓜七千歲、上元夫人西王母、瓜を二つのにたく〜笑、梁楚の人のなかなほりも、此畠からなりぬと聞けば、まことにめでたき例には、先この蔓を引くべき物か。

雲茶集序

文宣王のおゐどのあたりに、こしかけ茶屋のにぎはへるあり。一河のながれ一樹の陰、これも他生の緣側に、一册の草紙をおきしは、詩歌連誹給のことは、素人黑人のへだて

解せず、迦葉獨り其意を悟りて微笑したり
片岡山の云々―拾遺集「しなてるや片岡山にいひに飢えて臥せる旅人あはれ親なし」
朝妻舟―近江の琵琶湖畔なる朝妻といふ地の渡し舟、古へ此地に賣女住みたり
なみのり舟―「永き夜のとほのねむりのみな目ざめ浪乘舟の音のよき哉」初夢の寶舟にいふ廻文歌
浪錢の云々―明和の靑銅の寛永通寶は一枚四文にして、七枚は二十八文なり
甘瓜を云々―魏文帝、與吳質書「甘瓜を淸泉に浮べ、朱李を寒水に沈む云々」
狛のわたり―拾

岡山のいよぞく、あはれ親はなしや。

朝妻舟の繪今樣の體にならふ

君にあふみの琵琶の湖、ひかれていく夜かかよふなる、我あさづまのいかなれば、目元にしほのあるならん。

福祿壽の頭を大黑の剃る繪

大黑の足は剃刀とともにみじかく、福祿壽の頭は、階子とひとしく長し。されど壽福の背くらべせんには、まさりおとりは浪のり舟。其浪錢の七つの神々、あはせて廿八文の、錢もめがけぬ正直の頭に福の髮ゆひ床、さかやきを剃る音のよきかな。

瓜

いでや甘瓜を淸泉にうかべて、すゞしき風にむかはん。禮記小笠原の說はむづかしけれど、くはではいかに山城の、狛のわたりはもとよりにて、美濃の國なる眞桑の里、と

梅屋、梅溪—共に當時知名なりし人
對の上云々—紫上の造れる三種の中にて梅花(合せ香の名)最も勝れたり
花の兄—菊を花の弟といふに對す
槍梅の云々—菅公の飛梅の故事を採る
たそと云々—貫之の女の鶯宿梅の歌「勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかゞ答へん」
拈華微笑—釋迦蓮華を拈りて衆に示せども之を

して、梅とよびしは中町の、梅本の拳酒にやあらん。そはうつゝ茶の銘にはあらで、梅さく山の匂ひには、何遜が鼻をひこつかせ、三閭大夫のだまり坊も、あたまを掻いて梅みやせん。さては梅屋が詩もはえなく、梅溪が給筆もなけつべし。源氏の薫物合に、對の上の三種が中に、わきて此匂ひのはなやかなりし事は、梅枝の巻にぞ記したる。木の母を、誰がいひ初めて花の兄とは、梅たんせいが字彙には見えねど、王安石がじせつひたらば、猫の足跡も花かとやこぢつけてん。梅の花貝かひ〴〵しく、梅花を折りて頭にかざすは、梶原源太のさきの久作、田舎じみたる麥飯ばらには、色をも香をもいかで知るべき。さるを梅花心易あてずッぽうに、花のあにいの無い智慧をはたき、槍梅のやりばなしに、筑紫の梅のとんだ事のみ、筆にかきねの梅ほしおやぢ、たそと問ひなばいかが答へん、たび鶯の宿屋のあるじ、口をすくしてさへづるを、聞く人梅のほゝゑみなんかし。

蘆葉達摩

蘆の一葉の舟ゆさん、拈華微笑の臺の物、本來空の生醉に、教外別傳の歌ざみせん、片

南枝云々—朗詠梅「雜言春色従ゝ東到、露暖南枝花始開」
風の匂はす云々—源氏物語「心ありて風の匂はす園の梅にまづ鶯の訪はずやあるべき」
梅幸—俳優尾上梅幸
見附柱—本舞臺の左方にある柱
和中散—風邪の藥
袖の梅—吉原などにて宿醉を醒すに用ゐし藥
書—書經
埤雅—宋の陸佃の撰
香や云々—躬恒「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るゝ」
一枝を折らば云云—梅の制札の文句

地理志に見えたり。南枝花初開とは、梅鉢の紋つけ給へる、文時卿のから歌にて、風の匂はす園の梅とは、紅梅の右大臣の御詠なり。菅公の御書齋、梅壺の御わたりは、かしこければこゝにはいはず。げにや今を春べのさかりには、鶴が岡から杉田へとまれば、又龜戸から梅屋敷ともしやれつべし。二條院のはしかくしは、常陸の宮のざくろ鼻にかよひ、壽陽公主の野郎帽子は、梅幸が若ざかりにや似給ひけん。春の芝居の見附柱に、つくり枝の咲分もをかしく、序開は花笠をどり、一番目は梅若もまじるべく、扨二番目は梅川忠兵衛、さらずばお梅久米之助、梅の由兵衛にふたりの女房、悋氣いさかひ梅雪爭奇、驛使のはしる鹽梅梅澤、隣の宿の落梅花、梅の木村の和中散、おほもり茶漬の梅びしほ、粋に買はるゝ袖の梅、八重梅初梅その梅の、かべ新造がほたて貝あふぎて、主ちよッと鹽梅なんしとは、書の説命の詞なるべし。たまく埤雅を閲するに、江湘兩浙四五月の間、梅にみのいる五月闇、香やはかくるゝ梅の花、それさいたかと聲をあぐるは、賽の目をこふ古博打なるべし。下戸は菓子屋の梅の雪をあまんじ、上戸は樽の七つうめをひらく。一枝を折らば一指をきる、こゝも名だかき難波津に、もし梅が枝が手水鉢あらば、よき梅漬のおもしなるべし。羅浮山の下梅花村、玉雪の指五本出

みあらか—神殿
すゞしめ—神慮を清め鎮め
ほりして—欲して
こゝら—許多
いろふし—きらびやかなること

大伴卿のためし—萬葉集にて梅の宴を催したる事
好文木—梅の異名
人はいさ—古今集「人はいさ心も知らず古郷は花ぞ昔の香に匂ひける」
とめこかし—新古今「とめこかし梅さかりなる我宿をうときも人は折にこそよれ」

越後國白根諏訪明神祭禮奉納の額

かけまくもかしこき、諏訪の御神の廣前に、ざれ歌のすき人等つどひて、おそれみおそれみて申さく、今年例の御祭に、みあらかを掃きのごひ、かき清め奉りて、吹きはらふ夕風に、ひときはすゞしめ奉らまくほりして、こゝに神主が祝詞にかへて、こゝらのあざれ歌をよみあげつ。さるは詞の花山車花萬度、をどり屋臺のいろふしを盡して、兼題のねり物、當座の俄、すべて錦繡の色をかざりぬ。これがやつぱり神樂歌、手にとり物の榊葉の、しげき榮をまもり給へと、積敷の強飯あかい心に、おほみきの瓶子口から出しだい、も一つおそれみおそれみて申す。

淺草庵詠レ梅狂歌會序

淺草庵のあるじ、大伴卿のためしにならひて、友だちのかぎりつどへて、梅花のあざれ歌を詠ます。さるは好文木のみやびたる、大宮人は何といふらん、人はいさとは貫之がことば、とめこかしとは西行がすさみなり。梅が谷は鎌倉志にしるし、梅州は南宗の

し三墳を見て作れる詩
負郭二頃の田—城に近き沃潤の田二百畝也、史記蘇秦傳「使我有雒陽負郭田二頃、吾豈能佩六國相印乎」
とじ—綴蕃、刀自
深代寺—深代寺蕎麥、武藏國中野
加古川本草—忠臣藏の加古川本藏に本草を掛く
おいしイ—由良之助の女房お石に掛く
煩惱菩提—遊客と花魁

肱をまくらにふみ伸す、あしの丸屋の月のかげ、すめる心や涼しかりなん。

蕎麥屋の引札

そも〳〵蕎麥は仁明帝の御時と、ふるい話の種がのこりて、當國にては深代寺を以て、こいつは日本一と稱す。此物五臟の滓穢をのぞき、氣力を益の効ありと、加古川本草のおきてを守りて、天川屋が馳走をくひし、由良之助が女房まで、おいしイ〳〵と褒めけるとぞ。先蕎麥のめでたき例をいはゞ、棟上井戸がへ柱立、土藏のあらうち煤はらひ、引越の長屋配り、主従かための請狀にも、件の如きまうけとなす。堂建立の口びらき、みつぶとんの敷初まで、煩惱菩提ふたつながら、そばを離るゝ事はなしと、我田へ水を引かげん、これ方打方ゆで方まで、手練を得たる私めは、深代寺村の仕人にて、蕎麥一道にあかるき事、やつたやうには候はず。そのあぢはひは御好物の、知る人ぞしる汁つぎの、口々御評判あそばされ、老若男女子供衆まで、ぞろ〳〵御出をこひねがひ候。以上。

そ　ば　や　某

醉竹翁―唐衣橘洲
七尺去つて―「七尺去つて師の影を踏まず」
梶葉―之に詩歌を書きて二星を祭る
額―七つの手蹟の額湯島天神にあり
七松處士―唐の鄭薫七松を庭に植ゑて七松居士と號せり
七叟―古へ白香山會とて、詩文に巧なる七人の老人集りて詩文を作りたり
七里法華―上總七里ヶ濱附近は皆日蓮宗なり、友のつれ語
七いろは―七體いろは
梁伯鸞―家貧にして節を尚び [illegible]
[illegible]
[illegible]

むかし、醉竹翁のざれ歌をしたひて、七尺去つて師とたのみし時、七月七日の梶葉によそへて、七葉亭とぞ名づけられける。をりから四方の七梅、赤良の大人の其座にありて、お七吉三が狂言ならで、みしまに書きし筆のあとに、七星かゞやく七わだの、玉ひかる額ぞ出來にたる。おのれ七松處士の隱居なれども、もとより七叟の老ほれにて、七子のさとりもあらぬを、七里法華の友だちなりとて、しひて七種の膳を据ゑられ、せんかた七色唐がらし、三文ほどの智慧もなければ、何をたねてふ七小町、七いろはを竝べて記しつ。

ゆふがほのもとに夫婦すゞみ居る繪

粒々辛苦の玉の汗、いつしか花の露にゆづれる、ゆふがほ棚の下すゞみ、男は垢のふるてよら、くさい物にはふたのの嘆、梁伯鸞が荷持ちこぶ、陸龜蒙が鍬だこをさすりて、梁父の吟のはなうたをつゞしるなど、まさに有辛の野郎とせんや。かたへに負郭二頃の田あれば、六國の印などは三文判とや見くだすらん。おごる事なくむさぼらぬ、堀井戸の水手作の麥、帝力なんぞわれ鍋に、とじが盛出す釜の中、疎食をくらふ水のみ百姓、

むか股―左右の股
踏みさくみて―踏破して
百たらぬ―「百たらず」は元來「やそ（八十）」の枕詞なり
よざして―依托せられて
枚乘が七發―七は一種の文體の稱、文體明辨に詳也

方の國々は、島屋が馬の荷の緒結ひかため、大江戸のうちは、占正がむか股に踏みさくみて、色紙短册の紙つどへにつどへ、詠藻懐紙の紙あつめに集めて、百たらぬ六十人の判者によざして、子供あそびの丈くらべ、どつちの山がたかゝるといふ事の如く、此一巻に書きならべぬきたらはして、諸きんだちのおほ前にもち出でて、さゝげたいまつると申す事のよしを、玉光舍が手ならしゝ、古りにし鈴の音をかすめて、つまらぬごたくを述べ奉らくと申す。

七葉亭

七德の舞―秦王破陣樂、唐の三大舞の一也、七德は支那の武道の七德
七歩に詩―魏の曹植七歩にして詩を詠ぜし事
建安の七子―六朝魏の詩人
殷七々が術―唐の人、鶴林寺に於て時ならぬ花を咲かしめし等の故事あり

七葉亭のあるじ、作者七人の書を見てより、常に七敎の道を守りて、七情の慾をつゝしみ、孟子の七篇、枚乘が七發などはおろかにて、七德の舞七德の歌、七歩に詩をさへつづれゝば、かの孔門の七十子、建安の七子はさらなり、竹林の七賢にも、その才學はおとらざめり。武藝に七書の奧義をさぐれば、七道具の武藏坊、惡七兵衞が勇ありて、七本鑓もつきつべし。七面明神七觀音、七福神の守護ありて、七難卽滅うたがひなく、齡は彭祖が七百歳、殷七々が術を得て、七世の孫にも遇ひなまし。此あるじ七年あまり

あと川柳―萬葉集「霰ふり遠つあふみの踏川柳枯るれども又も生ふてふ踏川柳」

しなひ―姿よこと

くるとあくと―あけ暮れ、繰るを掛く

頭―頭顱

兼好が云々―古へは貴人之を食せざりきとて鰹を卑める語、徒然草に出づ

とほつあふみのあと川柳、あともなく枯れ果てぬれど、えらび置きたる言の葉は、今もなほ世にはびこりて、枝をつらぬく白露を、玉と見はやす人も多かり。吾友三尺庵のあるじ、さるしなひの色に心やよりけん。一筋にこれをめでつゝ、やがて垣根にさし柳、手染の絲のくるとあくと、みづから土かひ水そゝぎて、終に一本の陰とはなしつ。これをこそ枯れゝども、またも生ふてふあと川柳、今さかりなりとも言はましか。

かつをぶし宮

かつをとは堅魚の略なりとか、令義解より延喜式、さてはうつぼの物語、順が和名抄にも、だしがらをさへ記し置きたり。さるを兼好が精進口に、猫ぶしの如くやすくせるは、ちとなまりぶしのさし過ならんと、小刀學者のはゞかりながら、證文引いてちよつと書く。

玉光舍

こゝろ詞の高間が原に、とゞまりましますハ百萬の、諸君達のざれ歌を請はんとて、四

富澤町—古著市

護摩—眞言宗などにてぬるでの木を焚きて罪惡の消滅を祈禱すること

介子推云々—周の介子推母と共に棉山に隱遁す、文公歎じて彼を求めて得ず、遂に棉山を燒きて索むるに、彼は母と樹を抱いて燒死せり

藏ずまひ、親方の貧乏が、今は蝨のうへとなりて、飢ゑつかれて痩せさらぼへど、命の綱やきれざりけん、八月ばかりにからうじて、此縲絏の苦をのがれて、富澤町に日影を見し時、今こそ肉の味を見めと思ひつらんを、川端にもち行きて、丁稚が箒の先にかけて、布子の裏を掃きすつれば、おもはぬ彌生の壇の浦、一門底の水屑となりぬ。少々の殘黨餘類も、都の住居いぶせくて、田舍親仁の背にひそまり、縫目に深くかくれたりしを、兩足圍爐裡に踏みまたぎて、背腹を搔くにいたりては、猛火の中にさかさまに、落ちて忽に命をおとす、其聲護摩を修するにひとし。介子推が身の果も、かくやとばかり見るほどに、又楠が計略にならひて、熱湯を頭からあぶせかけて、みなごろしにするもあり。さらでは花山院の陰陽師にならひて、爪先で見しらすべし。とにかくに見つけらるゝと命におよぶ、汝が宿世こそつたなけれ。いかで佛印に近づきて、一身の由緣を問はざる。もし談一貫が見まじかば、長田が刑にや行はまし。蝨しらみと打呼びて、襟脊筋と尋ぬれど、はかなき卵の名殘とゞめて、いづち行きけんかたちは見えず。

川柳集序

上巳―雛の節句
かゆい所へ云々―生活難、謎に取る
しもと―笞
むねうち―威しの爲に刀背にて打つこと
大腹中―度量の廣きこと
かゆいの物―可愛き者、痒き物

るなど、これらはたがはぬ唐渡りなれど、兩國四條の見世物にも、一度も出でしためしを聞かず。彌生の頃の花見蝨、三つ指の上巳の使者の、うつむきし襟のあたり、そよそよと這ひわたるを、取次は見つけたれど、あなたのお襟に蝨がともいはれねば、尻ごみしつゝ禮をするは、こなたへうつらぬ用心にやあらん。あるは裏屋の夫婦ぐらし、かゆい所へ手の屆かぬから起りて、蝨たかりと呼びたるが、夫妻反目のはじめにて、こなたのうつした蝨ぢやとわめきかへす。火吹竹のしもと、摺木のむねうちに、鍋摺鉢のくづるゝ音は、茶椀鉢店の地震に似たり。相借屋が欠けつけて、とりさへて騷ぐ中に、「蝨一つが起りにて、女房をさつてやと、人のいはんも外聞わろし。鍋屋紐で頭くゝらうとは、お内儀も氣がみじかい。腹や背は店賃とらず、蝨どもに貸して置く、大腹中な家主の、長屋に居るやうにもない」と、こそばゆい大屋が挨拶に、隣の女房、「こちの亭主は心中もの、わたしが繻絆のしらみ狩して、汁椀の中へためたを、茶をかけて喰うてしまひました。夫婦の中にへだてはなく、亭主の蝨は女房のしらみ、互にうつしつうつらせつ、かゆいの物やな〳〵と、這ひかゝるこそむつまじけれ」と、さがない中なほりにて、夫婦はじめて吹出すを、背中の蝨や笑ふらんかし。それより如何したりけん、布子は質屋の土

うまみ―馬、味み
鳥の跡―文字
埴生の小屋―賤が屋
王猛に云々―晉の王猛虱を捫りて桓温と時事を議ぜり
嵆康―竹林七賢の一人
紀昌云々―周の紀昌射を飛衞に學ぶ、衞曰く、小を視る大なれと、昌即ち虱を牖間に懸けて望み五年にして車輪の如く、之を射るに虱の心を貫けり
丸山―長崎の遊廓地
二布―二布蒲團

みあぢはゝば、甘露の酒の酔ざましに、胡麻飯のさら〳〵茶づけ食ふごとく、人間ならぬうまみを知るべし。この仙牒の片つかたに、三青鳥のはし書加へてよと、かの眞老のをしへにまかせ、霞に霧の一ぱいきけんに、手飼の鳳の鳥の跡、とんだ詞を書きつらねつ。

虱

虱こそきたなけなる物なれ。やごとなき御前に出でざるは、身のいやしきを恥づればにや。あやしき埴生の小屋、よもぎ葎の宿のあたりは、所得て這ひもこよふよ。大あなむちの御神に捜され、王猛にひねられしを思へば、むかしより人には厭はれけらし。嵆康が家の壁をつたひ、五位がかり著の直垂にうつり行くなど、いかにむさからざらん。さはいへど、馬援が軍謀紀昌が射術は、これが功ともいふべき歟。磁石にかはつて北をむいて走り、死にのぞめる病夫にうしろむくなど、いかにしてその機を知れるにか。皮は客蟲のあだ名に呼べども、手は観音のたふときに比す。かしら虱の烏帽子をわたり、蔦虱のあやしき所に住めるなど、彼にも貴賤のへだてはあるにや。回國の犢鼻褌にたかりて、日本の靈場をめぐるあれば、賈唐人の背中に產れて、丸山の女郎の二布にうつ

五福—壽、富、康寧、德を好む事、老いて天命を終ふること、書經に出づ

南鐐—徳川時代の銀貨、二朱銀の一名

蟠桃會—長命會、前出

羽衣に云々—四十方里の石を天人が輕き羽衣にて三年毎に一度づつ撫でてその石の磨滅し盡くる時限を一小劫とす、佛典に見ゆ

鶴に云々—大十識

五岳—支那の五つの高山

斧の柄—晉の樵者王質の二童子の圍碁を見て斧の柄朽ちし故事

と思ひおこして、しぶ〳〵筆をとりぬるも、このみにあける山猿の、をこがましきわざになん有りける。

深見翁年賀集序

千秋萬歳の三河の國、桃源のふかみの翁と聞えしは、五福そなへし長者にて、仙風道骨自然にそなはり、貌さへ童べの昔におとらず。そも命ながき人をかぞへんには、言さへぐから國の彭祖、しきしまのやまと姫の命などをこそ、とり出でていはましか。されどこれらの年の數は、南鐐二朱のはした錢にて、蟠桃會の汁の實のしろにも足らざるべし。いま此おきなの壽をはかり見るに、老いゆかん末の世には、三千歳の桃をつみて、千石船に棹さすべく、羽衣に撫でし巖をとりて、火打箱のすみにや置きなまし。翁今年鄕に杖つく齢となれるを、子なりける淺くらぬし、蓬萊の山ぐち祝はでやはと、楊次公がから歌をまねびて、鶴龜にたぐへて、長年を賀せんと定めおきてけるに、相知れる人のいはひ歌ども、濱の眞砂の數そひまさりて、五岳の山とつもりぬるを、斧の柄のながく傳へてんとて、福祿壽の杖にぶらさげし、一卷のふみとはなしつ。いでや此歌どもを讀

馬蘭亭狂歌帖跋

おのれ桃源の奥にかくろへてより、十年餘りにやなりぬらん、都のてぶり忘らへにたれば、いかでつき出しの新ある事を知らん。もとより風雅にあらず洒落にあらず、せう事なしの山ごもりなれば、ほゝゑむ梅にむかひては、とめこかしとうち歎き、櫻樹のもとに休らひては、散らば散らなんとうめかずしもあらず。庭に筧のええうもせざれば、問ひ來る物の音だになく、遊敵の敬亭山さへ、さすがしゞまに堪へざるにや、霞がくれにわらひ出せば、いとゞ友なき心地せられて、ながき日あしにしびれきらして、暮し佗びぬるぞあぢきなきや。斯かるにゆくりなう、物のたよりに此一卷のふみをぞ得たる。しづの苧環くりかへしつゝ、うち廣げ見るに、昔を今の心地せられて、おもほえず袖に鯨のよる心地こそせられしか。これこそしたしき友の筆のあとなれ、あはれなきがおほくも成りにけるかなと、すゞろにうち涙ぐまるゝに、某のあるじ、これに端詞を添へよといふ。いかでおくまりたる身はとすまひぬれど、せめて許さゞればいかにせん。さばれ人見ぬかたの塗籠の壁には、をとこ女のかくし所、山水天狗もかけばかくはや

崇、金谷園に觀花の宴を開き詩を賦す、詩成らざれば罰杯を受けしむ

桃源の奥—武陵桃源の故事、卽ち俗界より遁れし事

つき出しの新—つき出し新造

とめこかし—新古今「とめこかし梅盛りなる我宿を疎きも人はをりにこそよれ」

散らば云々—古今「櫻花散らば散らなんちらずとて古鄕人の來ても見なくに」

しゞま—無言

しづの苧環云々—伊勢「古へのしづの苧環くり返し昔を今に爲すよしもがな」

なきが云々—上句「世の中にあらましかばと思ふ人」拾遺集

兼好が云々—徒然草「善き友三つあり、一には物くるゝ友、二には醫師、三には智惠ある友」
七松處士—唐の鄭薫、松子を庭に植ゑて七松居士と號せり
何遜—揚州の廳字の梅を愛し此處に文士を招じて嘯傲せり
子猷—竹を愛し寄居に竹を植ゑしめて曰く、「何可一日無此君」
目かれず—目を放たず
ちはや—かんなぎの服、白布に、山藍にて水草、蝶、鳥などの模樣をつく
河梁のわかれ云云—漢の蘇武匈奴に使して拘留

がかぞへたてて、物くるゝ友などいひける、野鄙なる心をまなぶにあらず。字義を論語の益者にとりて、月令廣義のふるきにならへり。此三の物は菅公のめで給うける物なりとて、御神を信ずる心より、これを同志の友とはすめり。さるは松に百丈の高きをしたひ、竹に千竿のすぐなるを思ひ、梅に萬斛の香をなつかしむ、あるじの風流この店を見て知るべし。あはれ入來んまらうどたち、七松處士がむかしにならひ、何遜子猷が物ずきをまねび、目かれずむかふ庭神樂、み子がちはやの模樣にあらで、さながら洲濱の作り物、目に正月をせん家の植物、これを見これをめでん人、千年の命のびざらめやは。

三陀羅法師會集

千秋庵のあるじの名は、もと一葉といひけるを、狂歌など詠まんには、ざれたるつくり名こそをかしけれとて、一葉の文字をそのまゝに、やがてちよッと一葉とは名のりたりき。其頃はおのれ葦垣の近きわたりに住まひつれば、朝夕にむつびかはして、こよなき得意にて有りけるを、一鳧かしこに去るとかいへる、河梁のわかれをなしてより、鴈の使の道だに絕えて、終に秦胡のおもひをなしぬ。これは二十年を過しぬる、古りにし

編笠茶屋—吉原の遊客に[illegible]編笠を貸せし茶屋
空也—空也上人
茶丸—茶宇縞の一種
天下茶屋—秀吉堺の政所へ往復の途次屢々立寄りし茶屋
こいちやア—こいつは、濃茶
松と竹と梅—古來之を三友といふ
長嘯子—木下長嘯子
湯島—湯島天神
八百屋の女—八百屋お七
琴詩酒—白樂天の三友

場あり。戀には忍ぶ編笠茶屋、まよへば噓も茶と知らず、さとるは空也の茶筅賣、寺に卯月の灌佛茶、かたへに設の攝待茶、朝茶に茶のこ藥には、効をゑのぐや茶調散、著用ものには茶宇茶丸、鶸茶丁子茶うぐひす茶、芝居に茶賣遊里には、茶屋に茶をいふたいこもち、おつと北野の大茶の湯、攝津の國には天下茶屋、道頓堀に芝居茶屋、どんどと絶えぬ茶のとくは、みやげに買つてこま庄が、茶の看板を目につけて、ちやツちやとお出をねがふなりと、茶屋が名茶のほめ詞、こいちやアをかしと人々の、お臍に茶をやわかすらん。

三友園

松と竹と梅と三人の友の中に入れよあなかま我もすき者

とは、長嘯子の釜を愛せるざれ歌にて、湯島に懸けし松竹梅とは、八百屋の女が額の文字なり。かけまくもかしこけれど、菅原の御神も、宣風坊の山陰亭に、此ものを植ゑさせ給ひし事、御書齋の記に見えたり。こゝに沼波法眼と聞えたるは、山鳥の尾張の人なり、その庭を三友園とぞ呼ぶなる。これ白樂天がいはゆる琴詩酒の三にはあらず、また兼好

我國に茶の名產多かれど、山烏の尾張の國、內津にこしたる茶はあらず。今や不朽堂が家にひさぐ茶は、もつとも其絕品なるをえらぶ。さるは龍團雀舌のわたり茶も、むちやになすべき上茶なり。そも茶の人に益あることは、榮西法師の喫茶養生記に記したれば、殊更にこれをいはず。宵まどひの寢ぼけ人にしるしある事は、博物志にも揭焉たり。杜牧はこれを瑞草と稱し、子倘はこれを甘露なりと褒めつ。陸羽盧仝はいふもさらなり、利休遠州のすき人たち、かぞふるに盡くべからず。むかし〳〵もろこしには、長沙國に茶陵あり、だら〳〵おりし大江戶には、お茶の水の名高きあり。稲荷にさゞぐる茶の樹あれば、佛に供ずる茶湯あり。人に茶坊主茶師茶人、ちやん〳〵坊主茶筅後家、お茶ひき女郎茶屋女、さて食物にはうちびさす、都の茶粥靑によし、奈良茶の飯にきぬぐ〳〵の、なごりの茶漬醉ざめの、鹽茶に添へし茶うけ菓子、四季にとりてはあら玉の、春をいはふ大福茶、夏は茶舟の川すゞみ、秋は甘茶の玉祭、冬の茶室の爐開に、ならべし調度の數々は、茶入に茶碗茶のひさく、茶杓に茶臼茶はうろく、茶盆茶臺にちやの袱紗、文福茶釜に消炭を、おこすは花見の茶辨當、月の前には茶たて蟲、拍子にちやぎりちやるめら笛、チヤチヤンは三味線茶つみ歌、茶番は素人の狂言にて、義太夫節にはちやり

龍團雀舌―共に舶來の茶
博物志―晉の張華の撰
揭焉―明らか
陸羽―唐の人、茶經の著あり
盧仝―唐の人
だら〳〵おりし―なだらかな坂をだら〳〵おりと云ふ、降つての意を掛く
茶舟―運送に用ある細長き川舟
ひさく―ひしやく
茶辨當―茶道具に辨當を加へて從者に擔ひ行かしむる具

龜井算—割算九九を用ひず掛算九九のみを用ふる算法
奈良茶—奈良茶
今戸云々—淺草の今戸燒
此に櫻—古今集「見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」
上巳—雛の節句
山川の酒—白酒
曲水—曲水宴
鳥合—鬪雞
母子草—雛に餅に交へ搗く草、ひきよもぎ
あさつきなます—淺葱（アサツキ）とあさりのむきみとを酢味噌にてあへたる物
帽額—簾の上に横に引く布

がために萬年の、幸とこそいふべけれ。

雛あそび

田舍に京の内裏雛、桃に櫻の錦のみかは、びいどろの菓子のきら〳〵しきなど、五人囃の裃おほえて、花やぎたるものは、上巳のいとなみになん。曲水の古きあとは、山川の酒にのこり、鳥合の儀式は、重詰の庖丁にあらそふ。羊肝饅頭の高杯には、上戸も摸稜のひし餅に、つい蛤の口もあきつべし。十にあまりぬる人はとは、右近がいさめの詞ながら、今やうは老若をいはず、女男の豆いりに、娘にまじる母子草、あさつきなますあさからず、今日の節をば祝ふこととぞ。人形は大きなるをこのみ、道具はすべて小きをよしとす。其中の間の上段に、引わたしたる簾帽額、屛風毛氈にいたるまで、去年の樟腦のなごり知られて、にほひやかなる戲れは、味淋酒のあまえがちなる、女子どちの遊なればなるべし。

不朽堂　駒庄と名のりて名古屋に店あり

三輪崎―萬葉「苦しくも降り来る雨か三輪崎佐野のわたりに家もあらなくに」

佐野云々―「駒とめて袖打拂ふ蔭もなし佐野の渡りの雪の夕暮」

ふれ〳〵小雪―古俗謠「降れ降れ粉雪、たんばの粉雪」

毛寶―毛寶嘗て白龜を助けたりしが、後戰敗して江に投ぜし時其龜に救はれたり

玄武―天の北方の神（龜蛇の象なり）北斗

きの字屋―吉原にて臺の物を調ふる家

龜の尾の山―蓬萊山

龜井―攝津國天王寺にあり、後拾遺「萬代をすめる龜井の水やさはとみの小川の流れなるらん」

覗くべく、梁園の風光は炬燵に寢てこそ見るべけれ。かゝる憂きめを三輪崎、佐野のわたりの夕暮など、したしく行きて見ん事は、向後制の詞ともすべしと、榾の焚火にあたゝまりて、稍よみがへれる心地しながら、猶懲りずまに庭うち見やりて、犢鼻褌だにせぬ股うち廣げて、ふれ〳〵小雪とうたひたるを、雪に心のあらましかば、つもらん所もはづかしくこそ。

龜

蓬萊を背に負ふあり、泥中に尾を引く有り、堯帝に洛にあへりしは黒く、毛寶が軍をたすけしは白し。もとより甲蟲三百六十の親分にて、祭に玄武の高きに居れど、蠟燭立の下から出て、くだつてきの字屋が臺となる。龜の尾の山、缺けず崩れず、龜井の水、流れ清し。龜井算の早わりに、小づかひの錢龜をかぞへ、龜井町の營には、おのれが甲の笊をつくらす。むかし〳〵海づらに、猿うら島を載せたりしは、をさない人のはなし龜にて、今に其功をば稱しぬ。たとひ奈良茶店の障子にゑがかれ、吳服屋の暖簾に染められて、今戸の土に燒かるとも、龜卜のすたれし世にあひて、生得の壽を保たんは、汝

をこづき―他人の痴を笑ひ
ろ〴〵しく―礼儀正しく
うちあがりて―上品に
しろ―氣質
鵞毛―「雪似鵞毛飛散亂、人被鶴氅立徘徊」
謝氏の云々―晉の謝安の兄子郎雪を形容して「鹽を空中に撒くや、擬すべし」といひ、道蘊「未だ柳絮の風に因りて起るに如かず」といひし故事
芝居の梅の北面云々―謠曲「鉢木」の文句をとる、芝居の雪は綿也
君を見んとは―古今「忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪踏みわけて君を見んとは」
孟宗が鍬―二十四孝の一、嚴冬筍を掘りし故事
香爐峯云々―白樂天「香爐峯雪撥簾看」

いさかひ騒ぐにくらぶれば、まじはりのゐや〳〵しく、うちあがりて見えたるは、茶のむしろにます物はあらじかし。

雪

鵞毛に似たりとは、樂天が詞、鷺の如しとは、于鱗が見立なり。鹽を空中にちらすやうなりとは、謝氏の惣領が出そこなひにて、いとよく似たる白粥とは、仲文が當座の秀歌なりき。そも新場の河豚の北向は、腹に入りて熱く、芝居の梅の北面は、綿封じて寒し。あはれ降りたる雪かなとうめきて、鶴氅ならぬ丸合羽に、跡つけまうき木履はきて、興つきて歸る薄情にはならはじ。君を見んとはと詠み給ひし、まめ男こそしのばしけれと、姨にあひたる犬の如く、ひたすら朝けの空にめでつゝ、木毎に花の咲きはしりて、いで白妙の雪女に、初雪の見參せんと呼ばはりて、立出は出でたれど、寒風肌骨に石はりして、孟宗が鍬の齒のねだにあはず。後へも先へもまゐりがたく、雪片大きさ疊にひとしく、さして行くべき道も見えず、南無しら山の觀音菩薩、此さむけさ救はせ給へと、炭團ほどなる涙おとして、からうじて宿に歸り着きぬ。げに香爐峯の景色は簾の中より

いふは、高き名古屋のみその町、春鹿樓が蕎麥にてぞありける。おのれ今年旅行のついでに、しばしとてこそと杖をたてて、菅笠の紐とく〳〵、先四五杯をぞ試みたる。いでや玉くしげ箱根を越えてより、宇都の山邊のうつゝにも、夢にもかゝる美膳にあはず。さは思ふこといはざらんは、胴巻の腹やふくれなんと、腰なる矢立の筆とり出でて、大根おろしの滅多やたらに、花鰹かきつゞけつるは、けんどん筥のふたつなき、此家の蕎麥にめづればなるべし。

茶

茶をたつるに法有り、これを飲むに式あり。此法式にうとき人は、筵につらなる事あたはず。こは三禮の書には見えざれど、定めてゆゑある禮にやあるらし。袱紗さばきとかいふ事して、なつめの蓋かいのごふ肱持、ことさらびたり。點じをはりて茶碗とりて、まらうどの方にさし置きたる、いと〳〵したりがほなりや。まらうどはあからめもせず、主の用意を守りゐたるもをかし。この事にたど〳〵しき人は、わづか一杯の茶をすゝらんに、おど〳〵しきふるまひよと、をこづき譏りいふめれど、酒友達のはて〳〵に、

しばしとてこそ―西行の「清水ながるゝ柳かげ」の歌にとる
とく〳〵―解く〳〵、解く、疾く、〳〵、この語亦西行の歌にとる
玉くしげ―筥の枕詞
宇都の山邊云々―「駿河なる宇都の山べの現にも夢にも人に遇はぬなりけり」
思ふこと云々―徒然草「思しき事いはぬは腹ふくるゝわざなれば云々」
けんどん―慳飩蕎麥
ふたつ―蓋、「二つ」
三禮―周禮、儀禮、禮記
なつめ―抹茶の茶入の一種にして、形棗の實をたてたる如し
肱持―肱を張れる樣
あからめ―わき見

あいなだのみ―空だのみ
本草―支那古代の藥用の草木を記せる書
めいよう―銘、面妖
日々にあらた―大學「湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新」
河漏―蕎麥
うちびさす―枕詞
あまさかる―枕詞
おしてるや―枕詞
開物―人の未だ知得せぬ所を開發すること

食を食はぬあいなだのみも有りぬべし。二十四文の辻君は、是に深夜の寒氣をしのぎ、四十餘人の義士たちは、これを夜うちの兵粮とせりとか。今本草を考ふるに、五臓の滓穢を消する効あり。論より證據にひくべきは、湯の盤のめいような事は、此蕎麥きりの名に負へる、垢によごれし犢鼻褌なりとも、ゆで湯をとりて洗濯せば、まことに日にあらたなるべし。さればふるひ粉のからくに人も、是を食うたらうまからう、おいしからうと言ひしより、終に河漏の名をさへ負ほせぬ。うちびさす都の歌よみは、物の名にかくして詠み興じ、あまさかる賤が子どもは、そば切素麵食ひたいなどぞ謠ふめる。おしてるや難波の津には、砂場といへる名物あり、鳥が鳴く東には、正直といふ名題有り。寺に知られしどうこ庵、社に名あるそば稻荷、一の谷には敦盛蕎麥、蓮性法師が念佛蕎麥、名も高砂の翁蕎麥、秋の長夜の寢覺蕎麥、味も吉野に聞えたる、名におふ脊山いもつなぎ、うそを月夜の名もしるき、廓に客をつるべ蕎麥、めぐりは闇の晦日蕎麥、娘の戀のしのび蕎麥、緣をつなぎのたまご蕎麥など、とりたてて言はんには、汁注の口にもあまりぬべし。是にうち方ゆで加減、水のきりやう汁あんばい、祕事口訣の傳授ある事は、天工開物の筆にも書取りがたくや。此しな〴〵の美をそなへて、かみがかみなる代物と

あまづら―甘葛、古は此蔓を煎じて砂糖に代用せり
みすゞかる―枕詞
朝日將軍―源義仲
夜具の敷初―廓の也
わたまし―引越し
くさはひ―種
あらうち―足場などの大方にかき上げたる物

春鹿樓が蕎麥をめづる詞　尾張國名古屋に店あり

蕎麥は仁明帝の御時、もはら畿內に植ゑさせ給ひしとか。されど今の世のうち方を知らざめれば、蕎麥かきとなして、あまづらつけてや食ひたりけん。此ものよ、みすゞかる信濃國に出づるをもて、尤も其絶品とはすなり。さるは朝日將軍の院參には、是をや獻じ給ひけん。行長入道が竟宴には、是にて酒をやすゝめつらん。その腹さへもうとましき、信濃坊さへ惠み給ひしは、解脫上人の手うちの御料なるべし。長袴をや著たりけんとは、隣の畠を惜まれし、澄惠僧都のざれ言なりとか。そも蕎麥は食物の用のみならず、今日渡世のうへに於ても、益ありてめでたき物なり。先千金の夜具の敷初はさらなり、三百長屋のわたましにさへ、千歲をことぶくくさはひとはすめり。和尚は檀那に箸をとらせて、堂建立の口びらきとし、奴婢は請狀の饗膳となして、主從三世の契をかたくす。棟上の大工は、色がために高きより下り、あらうちの左官は、手を洗ひて是を拜す。詩歌連誹の筵はもとよりにて、儉約の夷講にさへ、近頃これをとり出づめり。あるは新蕎麥のはしりと聞きては、小判の耳をかたむくる人も有りなん。又麵棒を隣へ貸して、夜

宰予―嘗て晝寢す、孔子、朽木糞土を以て之を警む
目連―釋尊十大弟子の一
莊子―莊周嘗に胡蝶となりし事莊子齊物論に出づ
物思ふ時―「たらちねの親の諫めしうたゝ寢は物思ふ時の業にぞありける」
老いたる云々―枕草紙に出づ
猿ねぶり―坐睡
肱を曲げて云々―論語述而篇
樗の樹云々―徒然草に出でたる話
鳳凰云々―傾城の禍福の模樣
寢るほど云々―「世の中に寢る程樂はなきものを浮世の馬鹿が起きて働く」
まかり―まく(枕とす)に由りを擬く

黄帝睡つて華胥にいたり給ひ、魯生寢ねて楚王に封ぜらる。宰予がいびき目蓮がよだれ、共に師匠に叱られぬ。莊子が胡蝶昭公の鳥、皆唐人の寢言にて、俚諺抄のかながきならずば、寢ぼけし聲だに聞きとりがたくや。物思ふ時の業なりとは、拾遺集に見えたれど、老いたる親の晝寢したるは、すさまじき物にかぞへしぞかし。そもいつゝ蒲團の狸寢入は、かならず初會の客にして、三尺去つて猿ねぶりとは、飯焚女の傳受なりとぞ。連歌師の晝寢は、月のためにすめれど、盗人の晝寢は、いかなる當の有りけるにか。肱を曲げて枕とせしは、かしこき人の例にいへど、樗の樹にうち眠りて、祭も見ざる馬鹿者も有りけり。詩書論孟の講釋はすみても、猶うつぶしにふし居るは、一定才學ある人にはあらじ。鳳凰孔雀を身にまとひて、晝見世の壁によりて、口うち明いてあふぎ居るは、まだ世ごもれる小傾城なるべし。寢るほど樂はなき物をとは、いかなる人が詠みたりけん。我また朝寢坊のあざなさへつきて、食うて寢るより外に能なし。しかるに今日此紙繪をけみして、かゝる大悟の聖たちも、睡魔に犯され給ふならずやと、此繪をおのが方人にとりて、またねの夢の肱枕、まかりすぢりし言の葉を、鼾と共にかきつゞりつ。

資朝卿云々―藤原資朝かたは者を見て感あり愛する植木を悉く掘り捨てし話徒然草に出づ
塵のひたぶる心―一途に思ふ心

ん出して、世の人にな笑はれそといふ。

いけ花

古今後撰枕草子に、櫻の花を花瓶に插せりとあるは、今の世の人の如く、自門他門の流義をいふめる、祕事傳受あるわざにはあらじ。かの馬子才が賣花の詩は、こゝに引かんもすさまじければとゞめつ。此頃插花を好む人を見るに、花を愛する心はうすくて、ひたすら生けかたの手際にのみ誇るめり。さるは葉をむしり花をこき取り、枝をたわめ幹を切りて、異なるふりをつくらんとす。資朝卿に見せましかば、かたはものを愛すとや宣はまし。まことに花を愛せんとならば、いさゝか花葉をいたむる事なく、淸き水に根ふかく插して、命ながからん事をねがふべし。されど秦代の暴政にならへる、落花微塵のひたぶる心には、かゝる說を笑ふべけれど、花神もし靈あらば、翁が詞にうなづくべくや。

四睡の圖

華陀—漢の人、養性の術に曉通す
淫の云々—遊所通ひせし事、院の御前の語呂
くわんす—觀ず、鑵子（茶の湯の釜）
からもゝの林—醫家
たふさき—犢鼻褌
ふぐり—陰囊

褌中庵

華陀が五禽のかろわざをまねびて、はりとう〳〵の針醫となれる、林杏といふやさ法師あり。俗なりし時は、覆面のさぶらひにて、淫のおまへを去りあへざりしが、浮世を夢とくわんすの蓋、自在に我身をふるまはんと、梓のま弓そりこぼちて、猶風流の奥を明らめんと、京難波にさへ行きいたり、四國を廻りてさる者の、かぐはしき名をぞ顯しける。さてぞからもゝの林生ひしげり、言の葉の道に花は咲せける。一日法師予にいひけらく、「金をひろはば家ひとつ作らまし、さるべき號をつけてよ」といふ。さらば褌中庵とや呼びなまし、こは劉伯倫がたは言に、家居をもて褌とす、人々我褌中に入れり、といひける心になん。そも褌とはたふさきの唐名なり。よし庵にふどしの名ありとて、世間の義理を缺く事なかれ。又小使に事をかゝざれ、常にからやまとの文字を書くべし。家主と成りぬとて、五人組をばかくべからず。此數々のいさめの中に、かさなかきそと言はざるは、はゞかる所あればなり。いひなばそこの頭やへこまん。褌中庵々々々、煮しめたる色を見せず、蝨一つこぼさゞれ。うき世の河のながれわたり、うかとふぐりをつ

へり、「にやし」は美しき「え」はよき意
なべて―鍋に掛く
夜よし―古今集「月夜よし夜よしと人に告げやらばこてふに似たり待たずしも非ず」
こくもち月―黒餅(紋の名)、望月
中の字のはら庭―ちうッ腹に言ひ掛く
内田三郎―巴御前と戰ひたる家吉
こなから―二合五勺、少しの酒
ふぐり―陰嚢
討死―畠山重忠に攻められて衣笠城に戰死す
佐殿―源頼朝

らば、油にまじる水の月、とり所なき心地すめりと、紺屋にあらぬあさつてと延して、あつらへ染の一つ紋、こくもち月のまろき夜に、圓居の筵をひらかれしは、あはれあるじの御心の、いたりいたらぬ隈こそなけれと、おのが勝手のはな歌まじり、ちと中の字のはら庭を見めぐらひて、蘆中の人の聲をしるべに、月の夜見世とひやかすになん。

三浦大介が繪

此翁何者にか、素袍に附きたる紋を見れば、居酒店の暖簾じるしに似たれば、もしは内田三郎にやと思へど、歳のほどを考へ見れば、三浦黨のかしらと呼ばれし、大介義明なるべくや。此おやぢ、敵なる金子十郎に、こなから奢りて飲ませしをおもへば、立引を知りたる男なるべし。七十九を一期として、越中ふどし一つになりて、いさぎよく討死せしは、ふぐり持ちたる武士のたましひ、そのかみ佐殿の御心には、金とも玉とも褒め給ひつらん。さるを今節分の宵毎に、浦島東方朔とさしならべて、百六なりと稱せるは、厄拂がそろばんちがひ歟、布袋和尚をとり出でて、福神と仰ぐ類とやいふべからん。

早の寛平法皇—早野勘平より宇多法皇に擬く　まかしよ—、物乞の一種にて寒中行衣を着け頭を白布にてかつち巻にし纏を擬て細かき輪紙をむりたるを詩きちらして歩けりといふ　婁宿は云々—兼好の徒然草「八月十五日九月二十三日は婁宿なり、此宿清明なる故に月をもてあそぶ。良夜とす」婁宿は二十八宿の一　轡屋—遊女屋もなにえ々云々—伊邪那岐、伊邪那美命、天浮橋より天降りまして、互に—あなにやしえをとこを—あなにやしえをとめ、をと唱ひて褒り給

かたの如く、とりいとなめる事になん。

九月十五夜正齋につどひて月を見る詞

天杯池とは、天下一といふ地口にやかよひぬらん、月に心をのべ鏡、お軽が髱の光ありとて、早の寛平法皇の、無雙やたらに褒め給ひしより、まかしよがちらす天神さまさへ、罪なき配所の御詩作も有りけり。今宵の月の行くへすむまでと詠みしは、世にうき事の骨にとほりし、傘屋の息子殿の、ろく〳〵寝られぬ船中のすさみなりとぞ。そも婁宿は清明なりとは、吉田の某法師も、二階から招きてぞいひけらし。歌人は二夜の月ととなへ、誹諧師は後の月と呼ぶめり。かた月見は忌むものなりとは、客に紋日の口をわる、轡屋どもか手だてなるべし。つら〳〵神代の書を考ふるに、あなにえやいとしらしい殿御ぢやといひしは、しまつ鳥浮橋がいどみ詞なりと、蝙蝠纂疏の御説には見えたり。又お月様いくつと數へたるは、子守のあまが宵惑せる、狸のすけが日記にぞ載せたる。いでや芋に團子にゆであぐる、なべて世にある人といふ人、煮湯のふたのあく計、今宵の月をめでぬやはある。しかはあれど、夜よしとだにも告げやらぬに、待たぬ臨時の客あ

て名ある妍樓いとすぢの四德ー四絃琴に四德(仁義禮智)を掛く
宜湯殿ー古へ樂器書籍等を藏めし處
流泉啄木ー共に琴の名曲
玄象牧馬ー共に古への琵琶の名器
いぬめの少將ー犬目は淚の出ぬ目

葛西太郎ー通人の遊べる向島の料理茶屋
太郎坊ー大天狗の名
長點ー秀歌につくる高點
なめ過ぎー馬鹿にし過ぎ
坂東太郎ー利根川
河太郎ー河童
太郎月ー正月
めざまし草ー松の異名、めざましに掛く

れて、二なき此道の長者なりけり。此ぬし祕曲の集册をつどらる。いはゆる流泉啄木のしらべにて、玄象牧馬の聲あり。あはれ樂天も眼をしばたゝき、いぬめの少將もはなをかみつべし。此はしつくり書けよと請はれて、めくら法師の蛇におそれず、古めいたる聲をそのまゝに、見ぬ極樂の雨したどり、ぽちく筆をはこばすになん。

狂歌太郎百首序

太郎と呼ばんもことぐしけれど、かの堀川のむかしにはあらず、そも此二卷は、太郎國經の大納言の、みやびたるすがたは勿論、將軍太郎の勇めるふりより、番太郎のいやしき體、しつぺい太郎桃太郎の、をさなき話もとりまぜて、金太郎小僧のつよき體、浦島太郎のめでたき體、葛西太郎のしやれたる體など、すべて愛宕の太郎坊、鼻に知られし長點の、きはある歌をぞ集めたりける。こゝにちとなめ過ぎたれど、太郎殿の犬判者ありて、かの又太郎忠綱にならひて、たゞ一人の下知となしつゝ、さばかり大河の坂東太郎、底の底までかいさぐりて、生捕にせし河太郎百首、太郎狐のしりをなる、玉の春てふ太郎月の、めざまし草にもなれかしと、太郎冠者がでかし顏して、太郎べい駕籠の

えんりー厭離　西方ー西方淨土　つき出しー成年の女を買入れて遊女とし始めて店に出すこと　上品上生ー淨土の九階級の一　いつゝぶとんー五布蒲團、五幅　ありがたへまー有りがたい、當麻　まんだらーまんざら、曼陀羅（淨土の寶）　せいしー誓紙、勢至　たんと手のある觀音ー千手觀音　すがゝきー店すがゝき、遊女の張見世をする時内藝者の三味線のすがゝきをする事　實相むろ云々ー實相無漏（佛教の實諦）に室を掛く、室は播磨國の遊女の居りし處　御印文ー佛家の呪ひ　松葉屋ー吉原に

妙閑信女十七回忌祭文

我おもとえんり江戸町をはなれて、西方のつき出しとなりてより、紋日物日の苦患なく、上品上生のお職と呼ばれて、いつゝぶとんの蓮臺に乘りて、無量壽佛のあげづめとは、ありがたへまに織出せし、まんだらでない果報ならずや。げにや紫雲たなびく道中には、惣花を茶屋にふらす、これ前生のうら約束から、すぐに淨土に居つゞけ馴染、お文樣やら一枚起請、せいし普賢に文珠の智慧、たんと手のある觀音をさへ、友朋輩にすがゝきの、音もたふときさゝら浪、實相むろの海邊なる、長者も及ばぬ全盛とは、見世行燈の光明にも知られき。おのれ御印文の判人めけども、君が年忌をかぞへ見て、今日靈前にむかふの人、ちよつと茶漬の祭文をくぜりつ。かの格子先の煙管にはあらで、回向にくゆらす香爐の煙、こゝろざしは松葉屋の、靑ッきり受けてくんなんしと申す。

便々館狂歌集序

おとぎき高き便々館のあるじは、いとすぢの四德そなへたる人にて、宜陽殿の一と呼ば

あらば云々―王荊公勸學文「書添二君子智一有即起二書樓一」

何だら法師の柹のたね―何だ何だと人の問ふ時に戲れて答ふる語

如是我聞―一切經の首に必ず皆ある句

烏帽子親―元服の時冠を著する人、樓の名づけ親

有磯海―有り、荒磯海

積善の餘慶―易の語

なんだ樓

武藏國青梅の里に、なんだ樓といへるたかどのあり。あるじ敷島の道ゆきぶりに、ふみの林にわけ入りつゝ、あらばすなはち書樓を建てよの、古き敎にもとづきて、はやう此樓はつくりけるとぞ。そのかみ四方赤良ぬしの、例のすがやかなる筆に物して、南陀樓とは名づけられける。人この額の文字を見て、なんだ樓〳〵、何だら法師の柹のたね、根のない事にはあらざるべしと、根問葉問のむづかしさに、あるじおのれが口まめをとりえとして、强ひて此返答をこぢつけよといふ。そも〳〵南陀は梵語なり、曾我祭の俄にいふめる、なんだ〳〵の類にあらず、如是我聞釋迦の舍弟に、難陀といへる阿羅漢有り、海龍王にもさる名あり。こゝに譯していはんには、大慶喜悅の文字にあたれり。烏帽子親なる赤良ぬしの、其おもはくは知らねども、おほかたこゝらで有磯海の、濱のまさごの子々孫々、福壽無量のよろこびは、このたかどのにつむとも盡きじ。これ積善の餘慶の仕事に、よろこばしきの記を書くを、何だらうとや人いはんかし。

人わろき—外聞惡き
とまれかくまれ—とまる、播くに兎も角もを掛く

廣丸—天野廣丸江戸の狂歌師
一斗百篇—飲中八仙歌「李白一斗詩百篇」
定家本—定家の寫本、青表紙といふ
花薄—ほに掛る縁語
みづはぐむ—いたく老ゆる
ひな詞—だみに掛る縁語
あさもよし—きの枕詞
はこりかに—鉾、誇らしく
口てづつ—口下手
敷島の道づれ—和歌に仲間

三両の質におきなば質屋めもみたびやかどん花の香の袖

これはいと人わろき言の葉なるを、腹にあまれるため小便、つゝみもあへず漏しつるかな。人やしらみの古布子、とまれかくまれかいやりてん。

酔亀亭酒百首

こゝに廣丸といふ左きゝあり、一斗百篇のすき人にて、酔ひてはうたひうたひては酔ふ。定家本の青ッきりに、盃の數つもれるを、伊勢屋が通の裏をかへして、〆て百首のくだをまき散しつ。さて明星のちろ〳〵目していへらく、「田楽の味噌ぢやアねへが、花薄ほんの事だ。みづはぐむおいらが歌には、旅人の木賃どまりや、托鉢の暁月坊主も、少々肝がつぶれべい。ひな詞だみそぢやアねへが、淵のうはばみ主が知つてだ。しまつ烏うんといひねへ」など、あさもよしきほひかゝりて、祇園祭のほこりかにぞ見えたる。おのれ口てづつの生下戸ながら、敷島の道づれにして、よそに見て過ぐべきならねば、こゝに最屓の肩をたすけて、はこばす筆の千鳥足に、此一巻をくりかへしつゝ、いよさもつともさうだらう、いゝさ〳〵と褒めながら序を書く。

徳星―道徳ある人に譬ふ、漢の陳寔等討論せし時徳星聚りし故事あり

御肴に何よけん―催馬樂「我家は、帷帳をも垂れたるを、大君來ませ聟にせん御肴には何よけん、鮑さだをか、かせよけん」

最明寺殿―平宣時を招き「小土器に味噌の少しつきたるを」肴として「心よく數献におよびて興に入られ」し事徒然草に見ゆ

あまづら―甘葛の煎汁、古は砂糖に代用せり

莖立―大根などの莖をいふ

所狹きあそび―氣のつまるやうな遊

あるじまうけ―饗應

かたゐ翁―かたゐ(乞食)は罵辭

の兩士、この櫻見んとてまゐれり。あるじ大によろこび給ひて、「あはれ徳星のかうやく、我軒に吸ひ寄せたり」とて、疾く盃とり出でて、「此せつ雛のもりこぼしならでは、御肴に何よけん、とりあへたる湯豆腐に、蕎麥よけん」などざれ宣ふ。されど、かはらけみその最明寺殿にくらぶれば、こよなううるはしき饗になん。各つねならぬ醉心地に、例のあだけたるすぢなど、うたひ交すべし。いでや三條の大行幸とか、伊勢物語に記したる、百花亭のさかりなりしは、よくも知らねど、あまづら入りし口取に、莖立つゝみ燒の御肴には過ぎざるべし。「さる泣たふれの所狹きあそびはしたはしからず、斯ううちみだれやはらぎて、一物食ふ圓居こそ、若後家の髪のたゝまく惜しけれ」といへば、あるじ笑み／＼とわらひ給ひて、「今日の半日の筵を名づけて、朝野群載にいふめる、櫻會とや呼びつけてん。此會今日にかぎるべからず、花のなごりの跡とめて、何某くれがし社をむすびて、夏にまれ秋にまれ、櫻に名ある上野の大師、輪番にあるじまうけすべし」と宣ふ。いとよかンなりなど聞えはやす。彼掛乞おそるゝかたゐ翁、よろほひつゝ櫻木のもとに寄りて、「げにつれなき命のこの花のさかりにしもあへりける、時なるかな／＼」とうちながめて、

掛乞―掛取

ひとく―人來、鶯の鳴聲を掛く

今川―今川狀、今川了俊が其子息への訓戒の語にして兒童の習字用に供せり

庭訓―庭訓往來、玄惠法師の著

眞顏―鹿津部眞顏、又、四方歌垣眞顏

定丸―紀定丸、蜀山人の甥

か、堯舜たらん事をねがはんか、夢中作左に是を問はまし。

さくら會

彌生の初の二日、掛乞の責催促、今やおし寄せ來ぬらんとおぢ居たるに、鷄の羽たゝくにおどろき惑ひて、搦手なる竹垣より遁れ出でて、人げ無き大久保のわたりを落行く。挑灯だこの影を見るだに、かの者どもの追ひ來るにやと胸さわぎぬ。此頃のはやり物とか、をぐるすの藪から棒なる、竹鑓のおそれなきにあらねば、こはぐ〵足をはやめつるに、流れある所にいたりぬ。此あたりは、穴むなぎ江戸川の上にて、花嫁の簞笥町もちかく、人の心のおくふかき、山の手の名所なり。娘こゝへと呼びたてし、谷の戸出づる鶯も、此みさかの名にぞ呼びつけぬるとか。さるはほゝほけきやうの聲は、金剛寺の御堂にひゞき、ひとくと告ぐる湯屋蕎麥屋さへ、かたみに軒をならべたり。そこに棟門のきらく〵しきは、早うより我もの學して、今川庭訓と讀みならひし、お師匠樣の住所なりけり。折柄軒ちかき櫻のひらき合ひたる、さながら越の白山の、大きな湖を跡にのこして、こゝに宿がへしつるにやと、とんだ事さへ思ひ出でらる。かゝるほどに眞顏定丸

りとか。歌よみの兼盛は、醉ひさまだれて家に歸り、武勇に名ありし文屋秋津は、べそかきてこそ飲みけらし。そも百福の會、酒でなければ初まらず、冠婚の御祝義、元三のしんどり、大饗のかいもとあるじ、めぐり水のとよのあかり、又折からの花紅葉、月雪はいふにも及ばず、初會のかつちり、馴染のつけ差、居つゞけのむかへ酒、口舌の宵の青ゥきりまで、下戸ならぬこそ男はよけれ。醉鄕氏の國、溫和の天、てんとたまらぬ又六が、杉の門こそ淨土なれ。一杯々々また一杯、お手がなるなら趙氏連城、光れる玉も酒にはしかずと、大伴卿の御意のとほり、奈良漬に醉ふ馬鹿もなく、猿にかも似たらん人は、此あぢはひを得知らじかし。

酒をいましむる詞

酒は桀紂が愛せる物にて、堯舜のきらへる物なり。孔子の門になま醉なく、二十四孝に上戸なし。咽三寸の味を愛して、五尺の軀の內損をおもはず。親はらからのなげきを知らで、おのれ一人舌うちして、是をたのしと思ふにや。いでや醉ひたる人の眼血ばしり、大聲あげて人をのるは、さながら桀紂のおもかげあり。人として桀紂たらん事を欲する

ぬきすたばらん―萬葉卷四
めれん―酒に醉ふこと
元三のしんどり―元日酒を好む者の選ばれて[illegible]齒固に候ふ者
かいもとあるじ―相伴
めぐり水のとよのあかり―曲水宴、桃の節句に禁中にて行ひし公事
つけ差―返杯の時更に別杯を添へて差すこと
下戸云々―兼好の徒然草の語
杉の門―酒店
趙氏連城云々―趙
銚子を掛く、
の惠王、和氏の璧を得たるに、秦の昭王十五城を以て易へんと請ふ、是より之を連城の璧といふ
大伴卿の御意―萬葉、大伴[illegible]讃酒歌十三首の一「夜光る玉といふとも酒のみて心を遣るに豈しかめやも」

京極黄門―藤原定家

見ぬ京の物語―諺

籬を山のたがひ―推測のあやまりをいふ喩

亭子院―宇多天皇

左きゝ―飲酒家

我醉にけり―應神天皇の御詠古事記に出づ

あかずをせ云々―神功皇后の御詠、古事記には「あさずをせ」と見ゆ

うまらに云々―日本紀卷の十五「[illegible]」―弘計王の詠也

の口上おぼえて、看板の繪にも畫きとりがたくや。主やまと歌のすき人なれば、石の据ゑざま木草さへ、さながら心あり明の、影をさまれるなごりにめでつゝ、さてぞ此軒の名にしも負ふせける物ならし。さるは京極黄門の山庄をやうつされけん、出雲の前司が物ずきも、立ちならべて見たらんには、讓狀をや書きなましと、問ひ來る人の言ぐさには、此住居こそとうらやみ言ふめり。おのれ百里の遠きに居れば、いまだ此堂にのぼり見ず、目に見ぬ京の物語、知りがほにいひたてんは、籬を山のたがひ多からめど、唐虞三代の家作りをさへ、見て來たやうに語りなす、えせ儒生の口つきにならひて、室家の美をだにうかゞひ得ぬ、人の家居のぬき柱、穴の貉の値をするになん。

贊レ酒詞

亭子院の賜酒記を見れば、我國にも猶八人の左きゝはありけり。まことや、素盞嗚尊のひが業し給へりしを、醉ひてはきあがつにこそと、天照御神はゆるさせ給ひき。我醉にけりの綸言あれば、あかずをせさゝの勅命あり。うまらにをやらふるがねとは、をけのきみのたつゝ舞にて、ぬきすたばらんと詠み給ひしは、丹生のひめみこのめれんの時な

いんつうまんまん―いんつうは銀子の唐音、お金が一杯の意
釜祓―梓巫のこと、梓弓をひき鳴して神おろしをする女巫
やんもしろ瓜―や面白より白瓜や面白と續く、や面白は祓の詞
はだたち―膚に傷つくること
こくたく―こゝだくの振、許多
路考―俳優瀬川路考
杜若―俳優岩井半四郎、女形
なり所―別莊
輞川―支那なる形勝の地、王維の別墅あり、其輞川圖最も有名也

いの仕事あり、正直の大あたまには福介がとゞまるとか、いんつうまん〳〵藏の内に神つどへにつどへ給ひ、神ばかりにはかり給ひ、遊山物見の榮耀喰、我家らくの釜祓、やんもしろ瓜茄子さゝげ、豐年繁昌なさしめ給へ。さて汗くさ〴〵の禍は勿論、蚤のはだたち、蝨のはだたち、犬の子を捨てたる罪、鼠を升におとしゝ罪、すつぽんの生剝、鰻の串ざし、こくたくの罪といふ罪は、蚊遣火の團扇をもて、うち拂ふことの如く、神はらひにはらひ給へと、欲けは微塵も内外淸淨、路考杜若が愛敬をそなへて、袖ひく娘のあちらを向かず、女郎の尻をいだく事なく、やれされほんまによし〳〵と、守らせ給へといふ事を、煮賣酒屋の蛸の足、やつのおみゝをふり立てて、一杯ちよッきりきこしめせと申す。

殘月堂記

東條氏のなり所に、殘月堂と名づけし家あり。彼輞川の竹里館のうちこもりて蚊の多かる、ふ物好にはくらぶべきにあらず。西南遙にうちひらきて、村野の景色靑みわたりて、眞柴の庵に立つ煙、並木の松の朝霞など、とり出でていひたてんには、のぞきからくり

言さへぐ―からの枕詞
ちんぷんかん―唐人
表徳―雅號
ちぬ―茅渟、黒鯛
蛭子云々―蛭子神は伊邪那岐尊の御子
浦島に云々―萬葉集巻九の長歌に出づ
いそらが崎の海士―「いそらが崎に鯛釣る海士も」、鯛釣る、鯛釣る」
あぢかたの海―詞花集「春くればあぢかたの海一方にうくてふいをの名こそ惜しけれ」
すはやり―鯛などの魚肉を細く切りて乾したる物
味噌ず―味噌ずひもの
めでたいへい―目出たい、泰平
よけい―餘慶、餘計

言さへぐちんぷんかんどもが寢言なり。此物神代の記には、赤女とめされ、又表徳をちぬとも呼びつ。仲哀帝の御時よりぞ、はじめてたひとは名乘りたる。蛭子に三年の腰をさすらせ、浦島に七日の手をたゝかす。風俗歌の神さびたるには、いそらが崎の海士とうたひ、匡房卿の博識なるも、あぢかたの海とは詠じ給ひき。そも〳〵雛店の氈に載りては、らくがんと呼ばれて紅粉をよそほひ、婚禮の席に出でては、掛鯛となつて赤縄をつなぐ。すはやりとしも言ひたるは、若狹古代の詞にて、味噌ずとばかり略せるは、めでたいへいの洒落なるべし。今や蜑の著るみのの國に、鯛亭と名づけし庵あり。あるじ濱燒のあま口ならず、味噌漬の鹽じみぬる人にしあれば、詠み出づる言の葉は、あたかも潮煮のわくが如し。こゝに鯛亭の名を呼ばんこと、海なき國のほまれならずや。あゝ鯛亭鯛亭、大抵の人にはあらず。

天王行燈

例年の地口行燈、かけまくも畏けれど、天王樣の廣前に、とぼすと申すはいかゞなれど、つき屋が杵のぬかづきて、こいつァおそれみおそれみて申さく、そも積善の家にはよけ

なるべし。さるを殊更に濱の眞砂をかぞへ、千年の杖をつくらんとするは、益なき骨折損にや侍らん。されど壽筵の酒はづれせんは、さう〴〵しき心地し侍れば、引盃の人なみに、わざとかつちりの一首をのべ侍りつ。

　食傷と腎虚をなせそよい年をしてと小供や孫がわらはん

出雲國の人々よりおこせける狂歌集のしりへに書ける詞

あらかねの土にはじまりける、三十一文字の言の葉を、お國歌舞妓の狂言にあやなし、すがすがしう詠み出でたるを、大蛇がもこよふ二十尋の巻紙に、出雲八重垣書い續けたるは、あはれつむがりのたちまさりても見ゆるかな。ゆづの爪櫛さしながら、心は簸川のふかきに劣らず、詞はとりかみの高きにまされり。げに〳〵住吉玉津島も、こゝにとつどふ大社、かの廣前の木綿ならで、おもしろしとや人の見んかし。

鯛亭記

鯛は魚の王なり、土くさき鯉をめづるは、牡丹をのみ目にふれて、櫻の花を見る事なき、

さう〴〵しき—物足らざる
あらかねの—土の枕詞
お國歌舞妓—女歌舞伎の始祖出雲のお國の興行せし歌舞伎
大蛇—簸川上の八頭大蛇の故事を援る
出雲八重垣—素盞烏命の和歌
つむがりのたち—よく切るゝ太刀、(叢雲劍)立優るに掛く
ゆづの爪櫛—齒の數多き櫛、上古は男もさしたり
とりかみ—鳥上山、今の船通山の古名
住吉云々—毎年十月日本國中の神々出雲大社に集りて男女の縁を結ぶと也

もやはふくれる」
うぬぼ―うぬぼれの略なるべし
ぶんながして―打流して
天香煎を云々―高德「天莫空勾踐」の振り
かはつるみ―香、男色

かこちて―かこつけて
蟠桃會―長命會、蟠桃は大なる桃の實にして、西王母の故事に出づ
人魚の燒物―俗に人魚を食へば長生すといふ
億萬云々―同斷

て契り物し給ひし人々の、一ぶんながして參來ぬもあれば、やみ雲に腹立たせ給ふも、げに理なる梢の花のさまなり。あるじの君料紙とり出でて、難波津でも常磐津でもと、上調子にてせめ給ふ。さてはいかにせん、かゝる櫻のもとに立ちて、矢立のちび筆とり出でんは、便なき備後の三郎めきて、かくれみの笠ほしくあれど、天香煎をむなしくせぬ、上野の山におとらざる、櫻の花のかはつるみに、人の目づらを忍びつゝ、たどあてがきに書きさしてやみぬ。

人の六十賀につかはしける文

君今年六十の春をむかへ給ひぬとか。さるは鶴龜にたぐへ、松竹にかこちて、かぎりなき壽をいはひ物せんは、大方の人のそら追從にて、昔よりためし多かれど、終に歌の德によりて、ながいきしたる物を見侍らず。しかるに萬歲に汗をかゝせ、厄拂に聲をかけさせて、あはよくば蟠桃會の百膳にすわり、人魚の燒物に箸をたて、白鳳の摘入汁をすゝらんと思ふは、蟲のよきねがひなるべし。これらの類とは事かはりて、君には過去の福をそなへ、現世に陰德をつみ給へれば、祈らずとてもたつぷりと、億萬歲はたしか

たれ籠めて—古今集「垂れ籠めて春の行衞も知らぬまに待ちし櫻も移ろひにけり」

馬に鞍—「花咲かば告げんといひし山里の使は來り馬に鞍置け」

優婆塞の宮がり云々—薫大將、宇治の山莊なる八宮を訪ひし事、源氏物語橋姫の卷に出づ

はひり—門口

彼宮—宇治の八宮、琵琶、琴に堪能なり

追風—起居につけて衣の動くによりて起る風

南—南風

中の君—宇治八宮の第二女

横川の僧都の妹君源内侍—共に源氏物語中の人物

すもゝの下の云云—藻鹽草「たれも見よすもゝの下の道せばみかぶりかたぶけ」

鶯谷のさくら會

厠ほどなる家居の所狹きに、たれ籠めて暮し侘びぬるを、思ひかけず鶯谷よりとて御消息あり、ひらき見れば、四谷の馬に鞍置けとのみあり。うれしくてそゞろに出立ちて行く。道いと遙なれば、かの優婆塞の宮がり行き給ひし、薫大將のむかしも斯くやなど思ふ、引き事さへいとこぢつけがましや。參り著きて、はひりの方をのぞけば、とのゐ人めく翁の、日和に股うち廣げて、琴かきならし居たるぞ、彼宮の樣にはかよひたる。廊めく方をのぼり行けば、えならぬ匂ひのさとかをり來るを、おのが追風にやと鼻うごめかすに、さにはあらで、勾欄の前なる櫻の咲きみだれたるが、今日の南にやゝ散り初むるなりけり。あるじの御傍にうちそばみて、長崎土產の鏡とりあげて、「これしても月の水はとるべかりけり」といふは、中の君にはあらぬ、中戸屋のばゝアなるべし。さてさま〴〵の人々入來る中に、横川の僧都の妹君、源内侍だつさだ過人も見ゆめれば、艶なる二十の若人の、うち交るべき心地もせざれば、あなたざまにゐざり寄りて、「すもゝの下の道せばみ」と打誦しぬる、後目さへ異人には似ず、うぬぼとは見ゆめり。かね

所は不老門前町
臺山の五老兵衛

蓬萊屋瀛千殿

尙左堂を送る詞

車上と吉禮は左を貴むとか、左に肩をぬぎたるは、漢に忠あるためしにて、左に敵を投げられしは、薩摩守の武勇なり。冠婚のさかづきも、かならずこれを左にとり、開帳の靈寳も、左へまはつて拜すとか。こゝに江左の一才士、歌合の卷頭に負けた事なき左きょ、左團扇の一本づかひ、作者にとりては左丘明、細工は左甚五郎、左ばらみの男の子に、尙左堂といふ風流士、今年長月末つかた、今日は日がよい左へござる、東海道人と出でたちなんとす。いでや人を送るに言を以てすと、餞別のかすりへまはる、貧乏儒者の左まへを、方人にして左の如し。

ざれ歌の神にしませば旅立ちて十月をしも留守にし給ふ

尙左堂—狂役滿

左に肩を云々—史記呂后紀に「諸呂用事擅權欲爲亂、大尉周勃入軍門行令軍中曰、爲呂氏右袒、爲劉氏左袒、軍中皆左袒爲劉氏」

左團扇—諸「左團扇に日酒を飮む」

左丘明—春秋左氏傳を著す

人を送るに云々—荀子「贈人以言、重于金石珠玉」

かすり—うはまへをはねる事

神にし云々—十月には八百萬神出雲大社へと旅立つ也

島津烏―うの枕詞

彌勒出世―釋迦入滅後、五十七俱胝六千百千歳を經たる世に現れて衆生を導くといふ佛

三千歳の桃―上卷に註せり

やしはご―玄孫

いつまで草―萬年草

王母が桃―西王母が漢の武帝に桃を獻ぜし故事

僊家請狀の事

一此先生二三百歳は慥なる人に附、拙者島津烏請人にたち、朝もよし貴殿方へ、仙人奉公に差出す所實正なり。年季は當三月三日、六十賀の誕辰より、五十六億七千萬歳、彌勒出世の曉までと相定め、仕著は二季の木の葉衣、裁ち縫はぬ衣のふどし一つ、尤給金の代として、不死不老の金丹一貝、慥に受取申候。右御藥の効にて、長病は仕らじ。但三千歳の桃に於ては、東方朔が例にならひ、取迯欠落いたすべく候。

一玄々皇帝樣御法度相守り、仙家の御作法相背かず、孫彥やしはごの末々まで邪魔にされ候を、めつたに長生いたすべく候。

一宗旨は代々上戸宗、酒に力士の金剛寺坂、但近所ながら切支丹坂にては無レ之候。

右の奉公人、ながくゐの會の年明まで、御氣にいり豆福山枡、節分の數をかさねがさね、いつまで草のいつまでも、なまなかなれぬ蓬萊の山出しながら、御奉公大切にいたすべく候。仍王母が桃ほどの判をおしたる仙家の請狀如レ件。

ん―賍罪を揮はん

夷講の賣買―上卷に註す

いきの松―生き、生松原（筑前國）

蟻のおもひもてんぽの皮―「蟻の思も天まで通る」「てんぽの皮」は出鱈目

高野六十―諺「高野六十、那智八十」高野山那智山の小姓には六十歳八十歳の老人もあッとの意

さだ過ぎ―壯年を過ぎ

尻くらひ―諺「尻くらへ」に同意

たくらんも、順朝臣のいはゆる同じことにてめづらしからず。尖のきかざる小刀細工に、千代萬代のことぶきを込めたればとて、さして長壽のたしともならじ。されどついとほりの追従にも、口には錢のいらざれば、夷講の賣買にならひて、十千萬歳もいきの松と、聲高に謠はまほしけれど、それも久しき名所にて、耳にも秋の寢覺とや人いはまし。さはいへど、物はいはひがらとやら、蟻のおもひもてんぽの皮、神明の納受あるまじきにあらず。そも〱近頃のじまの地藏尊に、子どもを假の奉公人、請狀書いて出す時は、其子息災延命なりと、或ものしりの話を聞いて、いかで我先生をも、其數にと思へども、賽の河原の株式にて、子供の外はならぬといふ。そこでおのれ智恵をふるひて、地藏からの思ひつきにて、長生の親玉といふ仙人のかくれ里へ先生を誘ひて、小姓奉公に出さんとす。さるは蓬萊の龜の尾をわけて、一番先生の尻をもつ氣なり。高野六十のためしもあり、桃源の湯島よし町に出さば、掘出物といはざらんや。御年すこしさだ過ぎ給へど、仙人の齢にくらべんには、振袖ざかりといひつべし。よしんば前髪が無いといひて、まくつた尻のわれゝばとて、其時我等尻くらひ、かまはずに居るぶんのことなり。

いな舟のあるじ、あらたに屏風一雙をつくりぬ。瑠璃雲母の類は唐めきたり、月並の十二つがひも、某の御賀めきてふさはしからず、出來あひ屏風の松に鶴、竹に雀も事古りたり、近江八景あるは又、七賢人も野暮らしからんと、さまぐ\と思ひめぐらすほど、ついさらく\と下張は出來ぬ。引きまはして見た所が、風の入るべき穴もなし。穴の無いから思ひつきて、七小町とはさだまりぬ。もとより姿の美しさは、虞氏西施にもかつしかの、翁が筆にあやなしつれば、ちつとも拔目はないく\に、心うごかす人も有りなん。もし金岡が馬にならひて、夜なく\出でて寢所の、枕邊ちかく這ひめぐらば、思ひの外のさいはひにて、主のよろこび知りぬべし。かの恐しき地獄繪や、坤元錄のいにしへは知らねど、蝶番の折にかなひ、雀形のつきぐ\しき、今樣のうつし繪には、立ちならぶべき屏風やはある。こゝに經師が煙草のひま、八枚折のあき間をかぞへて、心にのりの刷毛ついで、べつたり端をよごすになん。

七賢人―晉の嵆康が交友七人、所謂「竹林の七賢人」
穴の無い―諺「小野小町は穴が無い」
虞氏―項羽の妾なる虞姫
西施―呉王夫差の妾
かつしかの翁―勝つ、葛飾北齋
金岡―巨勢金岡
雀形―翅を廣げたる雀を圖く描きしもの
つきぐ\しき―似合しき
のり―乘り、糊

杏花園先生六十賀

先生の六十賀めでたく祝ふ心なれど、たかい唐紙にちくらをこぢつけ、雲紙に蚯蚓をの

杏花園―太田南畝(蜀山人)
ちくら―出たらめ
蚯蚓をのたくら

心いられ—もどかしさ
歌人の名所—諺「歌人は居ながら名所を知る」
紫の上の春のおとゞ—源氏六條院を四區劃して紫上を春の方として住はせ、梅櫻を植ゑたる事、源氏物語少女卷に出づ
櫻町—藤原成範櫻を愛せしより櫻町中納言と呼ばる
しをりして云々—西行「吉野山去年のしをりの道かへて未だ見ぬ方の花を尋ねん」
訪ふ人云々—此歌は、[illegible]、潮煮に言ひ掛けたる也
七小町—小町の生涯の七[illegible]說、草子洗小町、通小町、鸚鵡小町、卒都婆小町、關寺小町、清水小町、山本小町

此卷中にかきつけて給へ、勿論實地を見ぬ諸君子、股引の上から蒿蝨かくやうの、御心いられもあらんなれど、そこらは歌人の名所とやら、隨分ちやかしてやらかし給へと、あるじにかはりて此端書、やつぱりちやかしてやらかすやつよ。

鯛屋が櫻の間　尾張宮の宿にあり

西三條の百花亭、紫の上の春のおとゞ、成範卿の櫻町、室町殿の花の御所、いづれか優りいづれか劣らん。されど目に見ぬ京ものがたり、雪とも雲ともさだめ難くや。こゝに彌生の空熱田のわたりに、一本の不斷櫻あり。春より冬をかけ地の風流、屛風障子に咲出でたる、散る事知らぬ花ざかりは、ありが鯛屋が物ずきにて、五彩の筆にうつしゑは、吉野初瀨も寢ながらに、つい壁と見るしわざなるべし。かゝる櫻の記を書けよと、あるじの案内にしをりして、まだ見ぬかたの花見酒、ちよつきり口を開くになん。

訪ふ人は潮の涌くが如くなり名ある鯛屋が家ざくらとて

七小町の屛風

梅芳軒八景

瀟相八景のさしつぎには、南都八景近江八景、あるは金澤隅田川とかぞへて、屏風にうつし壁にゑがきて、ちんば腰拔の臥遊の具とはなすめり。近頃これにも新地の出來て、芝居八景吉原八景といひはやせば、おらが屋敷にも八景がある、こつちの村にも八景と、八景で目をつく世の中．所詮は年貢運上の沙汰に及ばねば、他領こしこくの差別もいはず、見わたす所に名をつけて、さる物好はするにやあらん。こゝにいまだ御めもじは致さざれど、山鳥の尾張國、島津鳥うへのの里に、なにがしのなり所ありとか。梅芳軒といふ號にて、やがてこの花のすき人とは知りき。こゝにも八景の出店あれど、世間一同出來合の、歸帆落雁晴嵐の、あるべかゝりのこぢつけにはあらず、自然天然の風景にて、四季の花鳥月雪の、折にふれたる眺なれば、一年を爰に經ざれば、その趣は知りがたからん。いかで石山に煙管くゆらし、能見堂に茶をすゝりて、めがね取出す了簡にては、かゝる奥ある佳境を知るべき。此ふみの初に八ひらの繪あり、こゝの八景かくのとほりと、話をゑがきし主の手まはし、御意にかなはゞ御勝手次第、詩歌連誹なんでもござれ、

瀟相八景―湖南省なる洞庭湖の南にあり
金澤―相模國
島津鳥―うの枕詞
なり所―別莊
あるべかゝり―よい加減

ちうの字―ちうッぱら（中腹）、怒り易きこと

うけ歌―他人の詠を己の詠歌とすること

あなぐり―探り

歌枕―詠歌の名所、こゝは只縁語として用ふ

にた山伏―にた山（まがひ物）、山伏

柳と云々―諺「柳は其日の風次第」

一文道を知らずして、歌道勝利を得ざるとき、負けをしみに腹立つべからず。

一席上溫厚柔和にて、いさみの心を出すべからず。もしちうの字をふるまふ人には、五十五貫の贖錢を出さすべし。

一他人の秀句をぬすみ、或はうけ歌をもち出でて、高慢の鼻をたかくせんとするは、なか〳〵心にくきわざなり、必ず是をつゝしむべし。

一當日禁酒勿論の事なり。但慳吝の心にあらず、きちがひ水のいきほひにのりて、惡くふざけん事を恐るればなり。

一披講の時あくびを戒しむ、放屁これまた同斷。但於二雪隱一者可レ爲二制外一。

一行脚の旅人一宿たりともゆるすべからず。名所古跡をあなぐり、堂社順禮の歌枕にはあらで、半分渡世の田舍わたらひ、頭陀袋のそこひ知られぬ、にた山伏のおほければ、めつたに油斷すべからず。

右の條々ふかく心にかくるにおよばず、勝手次第の臨機應變、諸事は柳とやらかすべし。そのため壁書如レ件。

ばかりは三味線いらず、わろきも人聞かしましからじと、二上調子のにさい心に、はやう横好の名さへとりて、けしからぬ音をぞ出したりける。かくて口よゝむ老の末にも、猶鼻歌の癖がやまねば、聲よき人のつゞしり歌は、聞いてこらへぬはやり歌、讀賣唄の上下をいはず、淺草紙にうつしとりて、こねまじへたる餅つき歌、めでた〳〵の若松に、十わりましの慾をかわきて、萬代集とはこぢつけたりき。よろづは候べく候ながら、女郎の文のもしやのするにも、晝寢の涎ながくつたはり、居つゞけの尻久しくとゞまれらば、狂歌のをかしきふりをも知りて、斯うもあらうかと言へらん人は、大空の凧を見るが如く、うならざらめや狂はざらめや。

狂歌集會式　應二名古屋繁重需一

此ところの掟といへるは、わりひざの疊蛸、いたく禮經のすぢを守れとにはあらず、しかりとて天竺流の結加趺坐、偏袒右肩も無禮なるべし。かた〳〵よらぬ中つ國、敷島の道の行くてに、筆を立場のながもち唄、尾張名古屋のしげ〳〵が、もつといふなる此會席、ちよとつまんだる制詞の條々。

にさい心―青二歲心
よゝむ―老人の言語の明かならぬこと
つゞしり歌―一口づつに歌ふ歌
上下―貴賤を掛く
めでた〳〵の若松―俗謡
結加趺坐―圓滿安坐の義にて、坐禪を組むことなるが、玆はあぐらをかく意にいへり

君を云々—佛の清盛に見參して謡ひし今様「君をはじめて見る時は、千代も經ぬべし姫小松、御前の池なる龜岡に、鶴こそむれ居て遊ぶめれ」

やくもやへ垣云云—素盞嗚尊の「八雲立つ云々」の和歌の振り

めりやす—長唄の一種

そゝり歌—狂歌

狂文吾嬬那萬俚　下

狂歌萬代集序

神樂催馬樂は、あまりに古くさければ打おきぬ。名はいまやうといふめれど、今より見れば初々しく、君をはじめて見る時の心地す。さては何をかうたはまし、あるべかゝりの三十一文字、やくもやへ垣やみ雲に、諸事出たらめとやらかしみれば、花は白雲もみぢは錦、君はちよませ〳〵の、同じ事のみいはるれば、枕くだいた兼題も、拙者貴公と同案の、骨折損とは成りにたり。さらば自分のちからを出さぬ、人の手作の田植歌、臼ひき唄も田舍めけば、ちと當世をと考へて、此幕のめりやすより、いろ深川のさわぎ歌、さまよいたこの常陸歌、越の國ぶりさま〴〵に、ひめぢをとほる雲助唄、娘の鞠歌子守歌、ねん〳〵かはらぬ盆歌に、念佛歌もとりまぜて、馬士唄舟歌きこり歌、端歌琴歌木遣歌、しめろ遣戸も四つぎりの、あやしの路次のそゝり歌さへ、すべてまなびざる所なけれど、天のなせる無器用にて、節のそろはぬ鹽から聲、革にあはぬをいかにせん。狂歌

がら、玉しける大江戸の御目うつしには、なか〳〵御輿にもなるべくや。たゞ〳〵ひとくひとくの鶯と共に、朝霞引きもきらず、御入來被二成下一候樣奉二希上一候。以上。

向島秋葉
丸屋文次

古渡を送る詞

堺町の秋狂言、吉原の俄をも見ずして、いづこをさして行かんとする。旅は憂いもの貫之も、絲によるとは詠みたるならずや。かはゆい子には旅合羽、はだかで道中すべからずとは、引込思案の出ぎらひが詞なるべし。そも〳〵人は天地の旅籠屋の逗留なれば、とゞまるも旅行くも旅、いづこかさして我ならん。さればこたびの發足を、とまらんせとも言はぬになん。

我がすがる袖をはじめて出女のいくたび引かん旅のゆふぐれ

名を名乗る鳥さへ來るをかり〳〵と嚙みつゝ往ぬる旅の乾飯

ひとく〳〵の鶯—ひとくひとく(人來人來)は鶯の鳴き聲、古今集「梅の花見にこそ來つれ鶯のひとくひとくといとひしもをる」

堺町の秋狂言—中村座

吉原の俄—八朔の九郎助稲荷の祭禮に行はる

絲による—古今集「絲によるものならなくに別れ路の心細くも思ほゆる哉」

人は天地の云々—李白「天地者萬物之逆旅」

出女—旅宿の下女

名を名乗る鳥—時鳥

かり〳〵と—嚙む音に雁を掛く

長裾を朱門に曳きて—君門に出入し仕ふること、漢書鄒陽傳に出づ

樂天東坡—白樂天、蘇東坡

東屋もまやの云云—「まや」はあづまやの略、催馬樂「あづまやのまやのあまりの雨そゝぎわれたち濡れぬ其戸開かせ」

つと頭をかゝげて見れば、信濃の御嶽越の白山、美濃のを山に伊吹山、たゞ一望の中にあり。あるじ食ひつぶしのえせ隱者ならねば、常に長裾を朱門に曳きて、湯沐のいとま毎には、ひとり欄干にそひて、興をやるめり。げに白雲のまがき碧山の屏風、儉にあらずしておのづからなりぬ。斯る勝地に常主のあるをば、樂天東坡も知らぬなるべし。おのれも行きて見まほしけれど、大井川の渡がこはく、箱根の山がむねにつかへて、いまだ品川に足を向けず。せめては見ぬもの見たやの心ゆかしに、斯うざまに筆はとれど、こよなき景色のうらやましく、魂飛んでかしこに到れば、こゝには留主居のからばかり、さるから詞もあとさきになん。

丸屋が新宅

私方舊來麁末なる御料理奉レ呈候處、御かへりみあつく、日々枉駕被レ成下レ難レ有奉レ存候。さて申上候は、年頃の東屋もまやのあまりに古りゆきて候へば、此度あらたに普請つかまつり、障子襖もけさ春と、あらた丸屋が見せびらき、わざと御披露申上候。ゐなかびたる網代屏風も、かの宇治川のむかふ島、四季をり〳〵の時方が、をちの寮めく家居な

同じき事いはぬは云々―徒然草「おぼしき事いはぬは腹ふくるるわざなれば云云」に取る
こちなき―不風流な
隣を云々―南史に「南康市宋鄰呂僧珍、僧珍問宅價、曰、一千一百萬、僧珍怪其貴、曰、百萬買宅、千萬買鄰」
世の憂き事の聞えぬ―古今集「如何ならん巖の中に住めばかは世のうき事の聞えこざらん」
としかげが女―うつぼ物語の人物
はたる―催促する
めぐり―飯のさい
もちつと―今少し

三千丸が家の記

住所はいづこをかよしとせん、山の奥は嵐はげしく、海邊は浪の聲かしましからん。市町は火のうれひあり、たとひ百兩の賣据ありとも、隣を買ふに千兩の物入ありぬべし。田舍こそ氣散じならめと思へば、代々居士の席順に、袖なし羽織の肱をはりて、合壁の境論、根ほり葉ほりのいさかひ絶えねば、薗に生ひたる筍も、たやすく抜いて食ふべきならず。さらば世の憂き事の聞えぬと詠みにし、巖の中に入りなんや。又としかげが女のやうに、朽木のうつぼに隱れんや。此二つの住家は、地代をはたる家主なければ、月の晦日はのどかなるべけれど、さりとて痔持、疝氣持は、しばしもたまらぬ住居なるべし。さては世によき住所はなしとおもへば、又別に天地の人間ならぬもありけり。我知れる三千丸ぬしの家居なん、海邊にあらず川邊にあらず、山にあらず市にあらず、いさゝか閙めく所なれば、水厄にかゝる事なし。殊に隣に遠ければ、夫婦喧嘩のさへ人に、聲をからすに及ばぬなるべし。さりとて里をへだてざれば、魚豆腐と呼びてとほれば、めぐりの物にも事を缺かじ。前は千町の田井青やかにて、見わたすに果を知らず、もち

いとなむこそ見るもうれたけれ。女子等は奢浴衣物好して拍子とりつゝ、千代の松坂など歌ひのゝしる。さるわざは此ごろ大江戸にては無きを、田舍の方には猶する事にて、ようさりよりあうて泥鰌踏む足どりもするなるべし。商人の家は、かゝる折にも猶いそがしげにて、所々せめはたりて、米代味噌代と受けとりて、帳を消すさま、とり集めたることは、盆前ぞ殊におほかる。月の芋掘るころ、團子の粉ひく頃、鮎さへさびゆくなるを、神田祭ばかりは、秋にも似ず花やかなり。夷講とて、世に知らぬ價呼びてそゝきさわぐ。手うつ樣はおなじ事ながら、顔見世はましていさまし。夜いたうくらきに挑灯ともして、夜すがら役者の門たゝき走り歩きて、なにがしの親方などのゝしりて、足を空にまどふが、曉方より見えずなりぬるこそ、初日のしるしも知られてをかしけれ。袴著帶解勿論なり、煤掃餅搗またなくめでたし。なべて折節のうつり行く樣、これを花鳥につけて數へいはんには、兼好が四季の段を、今一遍かたるに似たらん。同じき事いはぬは、下司ばりたる腹のふくれしなるべし。此頃或人の月並の言ぐさを集めて、これに言くはへよといひおこせつれど、例の物ぐさの何事をかいはん。たゞなまり聲の口びるたゝきて、こちなき四季の言わざをならべて、みづから野暮の正銘と名乘るになん。

せめはたりて—督促して　さびゆく—老いゆく　夷講とて云々—十月二十日商家にて行ふ蛭子神の祭、祭の酒肆の戯に、賓主相混じて盃盤器物に至るまで假に價を定め或は千兩或は萬兩、賣る者諾する時は必ず手をうつ　顔見世—劇場にて、其年一ヶ年間出勤する一座の役者が總出にて、見物人に始めて見ゆる儀式、十一月一日に行ふ　夜いたうくらきに—此頃の芝居は未明より開場せり、此等見て　走競—草に徴ふ　袴着—小兒の五歳になりし時の十一月十五日に祝ふ

何も〳〵めでたし。二月の初午又にぎはし。せばき長屋の隅なる稲荷さへ、おどろおどろしう鳴し立つるよ。月の末より雛たてならべて、桃の節句をしも待つめり。としま屋が白酒買ふとて、こゝら立ち込みたる、さばかり廣き大路ともおぼえず、德利さへうち割られて、泣きてかへる童も見ゆ。いかにはゝごつみなましといとほし。下女は古つゞらに盥下駄結ひつけて、月頃のなごり惜むめり。折からの涙雨には、郡内縞の袖も朽ちぬべうおもはる。初鰹を賣る聲いといさまし、さるは袷ぬぎても買はましとぞ覺ゆる。五月の幟兜をゝしくめざまし。神功皇后建内などならべ立てたる、つき〴〵しく見ゆ。戰ひ負けて死にうせける人をさへ、人形につくりて祝ひことぶくは、親さへをさなく思はるゝぞかし。水無月の富士詣に、仁田の四郎とも名乗るばかりいみじきもののふの、富士長屋とかいふなるかたへの穴めく所をくゞり入りて、北ざまに行きて、ひかり異なる女に見えぬるもありとぞ。あるは極熱の消息すとて、籠に入れたる芋、竹村がをりうづなど、うち捧げて持て來る、興なからずやは。あやしき家に土用干すとて、繩引きはへて、垢じみぬる小袖二つ三つうち懸けたる、殊更びたり。あなわづらはし、われは伊勢屋が家にあつらへて曝すなりなどいふは、大かた蟵だにつらぬ人なるべし。魂棚

としま屋—江戸第一の白酒屋

はゝご—母子草、ひきよもぎ、桃の節句に餅の中に交へ搗く、母親が怒りて抓るの洒落

下女は云々—春の出代の様

涙雨—三月十五日の雨を梅若の涙雨といふ

袷ぬぎても—袷を質に入る也

仁田の四郎—女装して五郎を捕し強者

をりうづ—折櫃

伊勢屋云々—質入をいふ

魂棚いとなむ—魂祭、盂蘭盆

据膳ー女子より男子を挑むこと

株ー膠木をゆりて濃くせたるもの、古は正月用ゐる祭祀の中に盛れり

柳の下つ御ことはー春詞

齒固ー齡を固むる意にて元日に固き物を食せること

姫始ー糄餅を食ひ始むるに行なる日、飯糅和名抄にいひめと云て、粥に非ず米に非ず之義といへり、普通のめし也

醜女の贊

外面河豚の如くなれども、いまだ据膳を人にふるまはず、内心菩薩の如くなれども、拜むといひて口說く人なし。

　惚れられたためしなければ名をたてずこれや其身にそなはれる福

年中行事

ひま白みゆく元日のあした、大神樂の笛太鼓に耳そばだつれば、雙六賣株賣の聲なども、春めいて聞ゆ。屏風のはざまにて、柳の下の御ことはと、高やかにうちあげたるもをかし。屠蘇散の藥くさき、雜煮の餅の鰹くさきも、あたらし椀の漆の香に、けたれぬるぞめでたき。曆の下段に、齒固姫始よしと書きたるもをかし。わろしとて、一日喰はであるべきかは。やゝ日たくる頃、何の兵衞、何の左衞門など名のりして、社杯いかめしう著なして、御慶申すなどいへば、供なる男の、物一つはふり入れたる、とり入れて見れば、扇の箱のから〳〵となりたるもをかし。萬歲鳥追大黑舞、すべて睦月に出來るものは、

天地間云々―「天地乃一大戲場」

談洲―談洲樓は焉馬の屋號

いざや香込に―後撰集「けふ櫻雫に我身いざ濡れん香ごめにさそふ風の來ぬ間に」

花の香云々―六帖「山風の花の香かどふ麓には春の霞ぞほだしなりける」

なが〳〵し日も―新古今「櫻咲く遠山鳥のしだり尾の長々し日もあかぬ色かな」

わかん桃李―和漢に掛く

花しなべての云云―以下凡て古歌の句を取りて文を行れり

櫻町の中納言―藤原成範

たるは、又たぐふべき色やはある。いざや香込にさそふ風の來ぬ間にと、花の香かどふ麓をよぢつゝ、木の下風をさむしとせず、引きわたしつる芝生の幕の、なが〳〵し日もあかぬ色かなといひしろひて、花の宿かる旅寢には、さゝえ重箱小盃、藥鑵頭の老人も、物思ひをも忘れつべし。此物よ、花の中の王にして、わかん桃李の及ぶべきならず。よ所の國には有りがたき、日本一の黍の餠、花より團子をこのまん人とは、氈を同じくして語るべからず。あはれ花しなべての色ならばと、家にありて鼻をたかくすれば、去年のしをりの道かへて、山路に足ひく人も有りぬべし。或は見てのみやと佇み居りて、山鳥のしもとに打たれ、花や今宵のと寢はらばひて、番人の棒に逐はるゝもありなん。嵐もしろき曙はさらなり、山里の入相をきゝても、散るを惜まぬ人やあるべき。げに大空おほふ袖ばかりは、古著の朝市にもなかりけり。かの櫻町の中納言は、いかなる佛神にいのり給ひけん、心は絲によりがたく、風のすむてふかくれ里、行きてたづねん道もなし。たゞ寢ても花さめても花、あだし草木に目もやらで、身にいたづきのいる事も、いかでしら雪白雲の、かゝるを花にめづとはいふべからん。

大名題—芝居の狂言の名題の内にて殊にきはだけさなるものの稱、此文凡て芝居の狂言に擬す
尚齒會—老人を招き宴して詩歌を作ること
武内—武内宿禰
三浦の大助
龜尾山—蓬萊山
東方朔が云々—西王母の三千歳の桃を東方朔の盗みし故事
西王母の桃—西王母の漢の武帝に三千歳の桃を獻ぜし故事
桃栗山人—著者
「桃栗三年柿八年」へもじり
桃源の舟—武陵桃源の故事
南山の崩れぬ—詩經「如南山之壽、不騫不崩」
丁靈威云々—漢人、仙術を學びて鶴と化し、遼東に歸り華表柱に止りて詠懐せり

[頭九一]いはく、このたび大名題相生長者千金の春第一番目、三千歳の桃の見立めに、のみてうなごんすみかねと名乗り、尚歯會の筵をひらき、千歳のほら貝の血しほをとり、不死の藥にあはせて飲みほし、武内三浦の大助を短命なりとそしり、それより仙術を以て千年の坂にいたり、龜尾の山によぢのぼり、東方朔が桃を盗めるは我なりとありて、億萬歳を掌ににぎらんこと、さゞれ石の巖とならんより易しとよろこび、まことは松の相生町の住人、西王母の桃栗山人なりと名乗らるゝ所、桃源の舟あたりましたく。[むだ]六十の翁ならば白髪の筈ぢやが、子供のやうに見ゆるはどうぢや。[頭九二]一番目常磐津が淨瑠璃、くめやくめつきぬ泉屋に、福祿壽の三びやうし、よくそろひたる御家の所作事、めでたいくと聲のかゝること、南山の崩れぬばかり、函谷の羽目をはづしての大入、まことにありが丁靈威、羽をのす華表の大立物、天地間の一番戯場、ながく居なりの談洲老人、角前髪のおもかげの、かはらで年のよりかけい、ながいのものやなく。

櫻をめづる詞

花ぐはし櫻ばかり、世にめでたき物はあらじ。霞わたれる彌生の空に、みねつゞき咲出で

の事に因り祈雨せし事、今昔物語、宇治拾遺物語に出づ
不破の關屋の板庇—「古里に見し面影も宿りけり不破の關屋の板ま洩る月」
雨こん〳〵—童謠
五七—地震に關する諺
時雨の亭—定家の築造せし茶亭
ますほの薄—登蓮法師の雨中渡邊の聖を訪ねてますほの薄の意義に就て教を受けし故事
朝六橋—越前國足羽郡朝六川
あふぎ巴—扇の地紙形の中に三巴を畫ける紋
赤良—四方赤良
かきがらわるく—牡蠣殼割る、書きがら惡く
うし—牛、大人

ほの薄、雨に浴し風に沐して、遠きに雨のあしをいとはず、近くは軒の雨だり拍子、やむ時もなく學びつれば、終に及時雨の宋公が如く、一百餘人の親とは成りにたり。今日なん睦月二十三日、朝六橋にはあらぬ、雨そゝぐ柳橋のほとりにて、春雨を題となして、あざれ歌のまとゐをなす。まことや號を傳へて千里を霑すとの、菅神のから歌の如く、つどひにつどふ人々は、あるは走り、あるは倒れて、新猿樂記のうち出し太鼓、音聞さへいといみじかりける。しかるに此大人のお望とござりまして、あふぎ巴を面にかざして、我師とたのめる赤良ぬしの、聲色でこぢつけんとす。雨の降る夜はひとしほゆかし、序に出ますはと名乘らんも、梢にのぼる蛇の、をこがましきわざなりかし。いでや雨落のかきがらわるく洒落て、しばし時雨の一樹の蔭に、座席をあらそふ角づきあひ、うしの聲なすやぼ人などは、此筵にはあらぬなるべし。芝居の雨の樋竹の、節のなきこそめでたけれど、春の若草めでたがりつゝ、八十評の行列の、しりにさがりし合羽笘持、辨當箱のふんぬきの飯盛といふ髮奴、すた〳〵筆をはしらせていふ。

烏亭焉馬六十賀

交野少將もどきたる、落窪少將なるべく、月畢にかゝる時は、桐油出たちの道中双六、しらすかふた川のわたり斗、たゞ一所雨ふるもをかし。濡れざらましを旅人の、雨の宮にぬかづけば、雨降山をふしをがむ、豆腐小僧はしよぼ〳〵雨、鬼を射る矢は雨あられ、お狐どののお嫁入、梅若樣のなみだ雨、龍池の柳のいろ、志賀唐崎の一松、匡廬のぼるべからず、佐野のわたりに家もなし、とてもかわける袖ならばとは、雨降つて地かたまる、夫婦喧嘩のさへ人ともいふべし。法華駈けこむ阿彌陀堂、猿も小簑をほしげなりとは、誹諧者流の詞なりとか。その猿まろが猿ぢゑも、龍宮城に雨ふりてこそ、生膽の難をば遁れけらし。四天王の夜話のはては、羅城門にて腕を斬り、十八問答の終には、指喰の女も出でたり。三味線かぢるむすめの子は、朝の雨に髮あらふとはりあげ、琵琶にめでたる醍醐の聖は、極樂の雨たりに感じ給ひき。下野武正は、法性寺殿の御感に預り、西の宮殿の大饗には、庭の拜なきを待ちつけ給ひき。此ほかの古事來歴どもは、川どめの岸に溢れ、天水桶にあまりぬれど、蛤貝のはかるべきならねば、不破の關屋の板庇、大方はもらしていはず。こゝに我友まがほの主は、雨こん〳〵の幼き頃より、五七は雨のざれ歌をこのみ、時雨の亭の風流をしたひ、喜雨亭の文を愛し、螢蓮がます

云々―宇治拾遺にも見ゆ、和泉式部が礪を借りし童の歌
ひぢがさ雨―帔雨
畢―二十八宿の一、あめふり
濡れざらましを―「言はずば濡れざらましを旅人のあとより晴るゝ野路のむら雨」
佐野のわたり―「苦しくも降り來る雨か三輪が崎佐野の渡に家もあらなくに」
法華云々―其角「夕立や云々」
猿も云々―芭蕉「初時雨云々」
十八問答云々―源氏物語、雨夜の品定の美人論
下野武正云々―古事談、宇治拾遺物語に出づ
西の宮殿云々―西宮殿の大饗に實資雨ふりて庭の拜なし書きと

商羊—一足の鳥、古童謠「天將に大に雨ふらんとす、商羊鼓舞す」
雲漢—天の河
雨と降りぬる云云—玉葉集、上の句「雲の上に響くを聞けば君が名の」
能因—「天の川苗代水にせきくだせあまくだります神ならば神」
靜觀—醍醐帝の時紫宸殿に祈雨せり
其角—「夕立や田をみめぐりの神ならば」
濡るとも云々—拾遺「櫻狩雨は降り來ぬ同じくは濡るとも花の陰に隱れん」
あをかりしより

逢ひて、廬山の草堂に足をのばし、推枕軒頭にいびきかきて、襄王の夢を結ばんは、まさに泰平の餘澤ならずや。鯇の魚は雨にあつまり、雨虎は雨に乘じて出づ。商羊は雨に先立ちて舞ひ、石燕は石を破つて飛ぶ。雨師は同名異物にて、人をもいひ蟲をもいへり。殷湯は桑林の野に禱り、皇極帝は南淵に行幸したまひき。雲漢の詩は尹吉甫が宣王をほめ奉りたるにて、雨と降りぬる音にぞ有りけるとは、俊惠が澄憲を賞せる歌なり。から國にこの類の故事あまたあれど、淵鑑類函のしり自慢は、うるさければ筆をとゞめつ。小町の長歌菅家の御作、能因靜觀其角が類、昔よりためし多し。西行法師鎌倉右府は、青天井のひ傘、さしたる祈は異なれど、感應は猶ひとしかるべし。天に雲なくして雨ふるは、天のお泣なさるなりと、五行志に見えたるを、日本紀にも往々しるし、又釋迦佛の涅槃にも、かゝる雨の降りし由は、博物志にも記したり。濡るとも花の陰にかくれんを、實方朝臣の詠なりとし、あをかりしより思ひ初めてきを、和泉式部が歌とおもふは、紀氏六帖を見ぬ人なるべし。侘びつゝも寢んと詠みたるは、戀する人の心やりにて、器に盛りてつながれしは、白河院の肝癪ならし。朝雨に笠をぬげば、ひぢがさ雨に袖をかづく。雨やどり笠やどり、やどりてまからん東屋の、その戸ひらかせとうちあげしは、

顔子—顔回、論語「賢哉回也、一箪食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回也不改其楽、賢哉回也」

積善の家—易「積善之家、必有余慶、積不善之家、必有余殃」

子路が孝—子路親の為に米を百里の外に負ひたり

子夏—其子の死を哭して明を失ふ

穀雨雨水—二十四氣の一にして、穀雨は四月二十日、雨水は二月十八日

甘露の雨—三者の徳天に至り和氣感ずれば即ち甘露松柏に降るといへり

天命

天命は是か非耶といへるは、伯夷傳の要文なるべし。菅公の筑紫に終り給ひ、屈子の汨羅にしづめるをさへ、まじり〳〵と見てござるは、福善禍淫のお職分には、御麁相とこそいふべけれ。顔子の貧乏孔子の不遇、皆積善の家なるべけれど、さる餘殃のありしはいかに。子路が孝なる横死をなし、子夏が賢なる盲となりぬ。孔明楠志を遂げず、神皇正統記の道理づくめも、北朝に團扇があがり、足利に無盡は落ちぬ。あはれ何ぞはよけくかるかや道心、宿世因果といふものならずば、天命の惣勘定、十露盤のあふ日はあらじかし。

春雨を詠めるざれ歌のはしがき

雲ゆき雨施して、品物流形すとは、易の乾の卦の詞にて、穀雨雨水は暦に記せり。太禹の御代には黄金の雨、梁武帝の御時には、玉の雨降りぬとか。粟の降りしは歴史にしるし、甘露の雨は年代記に載せたり。けに十日の雨土くれをやぶらざる、有りがたき折に

うけ歌—他人の詠歌を己の歌とすること
こゝら—許多
有司—役人
きはめ—きはめ札、鑑定書、折紙に同じ
なまくら丸—鈍刀
周公旦—聖德あり、武王を相けて紂を伐ち成王を輔けて禮を制せり
尚書—書經
虎をゑがきし—諺「虎を畫きて狗に類す」
犬つくばひ—阿諛に巧なるをいふ

ひかぶりぬる人も多かり。されば狐の出せる小豆餅は、かならず馬の糞にして、狸の設けし敷革は、やはり八疊の睾丸なりけり。お師匠樣のおつしやつた、都々平丈我の百姓よみは、村學究の上のみならず、連誹狂歌の宗匠たちにも、猶此たぐひすくなからず。ひろひ首の高名帳、うけ歌いだして判を請ふ人、俄分限の系圖がき、傾城の空涙など、猶こゝらあめれど、化されて居る人の目よりは、糞壺の中にはまりて、居風呂に入りし心地やすらん。上下つきがよければとて、これを有司といふべきや。きはめ折紙あてにはならず、こしらへばかりのなまくら丸は、いかでまさかの用にたつべき。から國の昔昔、王莽安石などいふ者有りて、周公旦のみぶり聲色をやらかしたりとか。さる時にあたりて、昏官酷吏の時を得て、きれ物顏してふるまひたりしは、げに虎よりも恐しかりけん。これらは毒とも知らできこしめして、上一人のいか物ぐひを、下萬民が相伴して、思はぬ食傷をしつるにぞ有りける。すでに尙書の皐陶謨に、人を知るにありと記されしは、このくはせ物にはまらざれとの、かしこき聖の敎なるべし。虎をゑがきし犬つくばひ、尾をよく振りてかゞむとも、かゝるくはせ物の据膳に、たやすく箸をとらざるこそ、あまいからいの世の中を、よく呑み込みたる人といふべけれ。

わかぬいびつ三郎、いかで高盛の高さに居らんや。されど鄕黨の禮儀ある、人々におしすくめられて、よん所なきむほん勝負に、重が判者の座にすわりぬ。何のたはこと今更に、破戒の僧のうしにこそと、うしろゆびをも承知にて、又駒がへりくるひ出す、鹿まつ所の狸宗匠、八疊敷にはだかり居て、さん〴〵顏も入わらへにこそ。

くはせ物

諺にくはせ物といふことあり。其語のもとづく所を問へば、味なき物をうましといひて、人を欺きけるよりいへるなりとぞ。さううまくはまるるまい、又四も五もくはぬといへる詞も、この欺をいれざるにて、一ぱいまゐつて重疊とは、大田了竹がせりふにも殘れり。世の中に、此くはせ物あまた有りて、武藝の稽古をぶつさき羽織に見せかけ、學問の心がけを、懷中の書にひけらす者すくなからず。錢はもどりの香具芝居、旅役者の市川某を初めて、神道者の祕事口訣、なまぐさ坊主の長談義、惣嫁の化粧山師の玄關、えせ歌よみの三箇の傳、藪醫者の手柄話に至るまで、皆こと〴〵くはせ物なり。朝鮮龍中銀ながしなどは、みす〳〵其とすきて見ゆれど、熊膽人參うにかうるは、買

いびつ三郎―いびつ、與三郎
むほん―無品、謀叛
駒がへり―若がへり
鹿まつ所の狸宗匠―孫よりごまかし宗匠の意に轉く
八疊敷―「狸の睾丸八疊敷」
さん〴〵顏―幕の五月ならへの三々、得意顏に掛く
ぶつさき羽織―武士の刀を帯ぶるに便したる羽織
香具芝居―やしの芝居
惣嫁―よたか
三箇の傳―三木三鳥の傳などいふ古今傳授
うにかうる―一角といふ獸

新驛狂歌會の序

湯屋で見たより大きなる、武藏野の原の片隅にかゞまりゐて、過ぎ來しかたを思ひ出づれば、げに一場の春夢婆の、腰折一つよみ出でんは、なか〳〵にかゞやかしとて、口をとぢたる葎の門に、古編笠の侍二人、誰ぞと見れば睦びかはしゝ、笹丸垣成の主たちなり。九尺二間の隱居所には、きもにつかへしまらうどながら、且せゝなげの面目とかしこまるを、「いでや此せまいこそうら山しけれ、いざ來ん春はこの庵にて、あざれ歌のまとゐせまし」などのゝしる。あるじの翁ためらひて、すがやかにいらへだにせざるを、しゞまの鉦のしやん〳〵と手うちて、各あがれて歸りさりぬ。かゝる小田原相談さへ、外郎賣の口々に傳へて、かつ〳〵御存の御方々も出來にたり。さは新宿の馬も追ひがたからんと、なまじひにさる設をぞなしたる。されどあまりに所狹しとて、浦內の乘吉といふ人たち居あつかひて、あたり近き仲成が家をかり宅となして、しひて割床の筵をひらきぬ。けふなん睦月の廿日にて、えびす歌には便宜よしとて、まづ人々の言の葉をよみあぢはふるに、げに百萬の黃金にもかへつべし。翁が例のなたつくりなるは、目口も

湯屋で云々—諺

せゝなげの面目—源氏物語「遣水のめいぼくとかしこまり喜ぶ」を捩る、貧居なればせゝなげ(溝)といひし也

あざれ歌のまとゐ—狂歌會

しゞまの鉦—物のとぢめに打鳴らす鉦

外郎賣—外郎は小田原の名物なり

割床—妓樓にて一室をしきりて床すること

えびす歌—狂歌、十月二十日の夷講に緣あれば也

なたつくり—粗造の意なるべし

孟嘗君の客夜半鷄鳴を眞似て函谷關を過ぎし故事
しんずく――新造、新宿
鬼――遊女
椎の葉――食器のこと、古へは旅中食を椎の葉に盛れり、こゝは宿場女郎、即ち旅傾城なれば斯く云へる也
滋春――在原業平の次子
鐘は上野歟――芭蕉、花の雲鐘は上野か淺草か――
ないら――内攘、馬又は猫に發する病、轉じて女郎にもいふ
三千歳の契云々――西王母の漢の武帝に桃を献ぜし故事
十二さう――十二計、十二雙
ちはやぶる――神の枕詞
ふんと匂ひの――部ぐたる意
くさまくら――臭、草枕

四谷新宿

かは竹の四谷のほとり、振袖のしんずくといへるは、鬼すだく所にて、椎の葉に杓子とる、飯盛女あまたあれば、かりそめの行きかひ路に、滋春のしげり過して、傾城に死ぬ人も有りとなん。あら玉川の春の頃は、常園寺の花の雲、鐘は上野歟天龍寺と、聞耳たつる曉に、若鮎の荷の小うた節もをかし。三光院の菫や摘まん、大久保のつゝじや咲出でたらんと、酒醉どものさわぐ中に、「これ見給へや藥種屋の、ないらの藥袖の梅」と、うたひ出たるもすさまじけなり。あるは色かへぬみさをを、千駄谷の松にたとへ、三千歳の契を、桃園の桃にやくらぶらん。閨の屏風の十二さう、寢ながらをかむ大宗寺の、閻魔にちかふ仲町もたのもし。ちはやぶる上町には、帶をだにせぬ客ありて、横鉢巻の御普請かと、聲たかううめくもあるらし。げにやそれも戀これもこひにして、色でまろめし馬の糞、ふんと匂ひのくさまくら、旅傾城と人はいふとも、よく淀橋の水飴の、はなれじと語らふ人も多かりとぞ。

九牛が云々－「九牛の一毛」の捩り
牛賣りそこなふ－諺「女さかしくして牛賣り損ふ」
鷄を云々－論語「割」鷄焉用」牛刀」に
うしと見しよの－藤原清輔「ながらへば又比頃や偲ばれん憂しと見し世ぞ今は戀しき」
牛の角文字－いの字
賽王丸－牛飼の名、徒然草に見ゆ
耳をも云々－巣許由に天下を譲らんとせしに、許由耳の汚れなりとて潁川に耳を洗ふ
丙吉が前に云々－骨の丙吉春の途上に牛の喘ぐを問ひて時氣節を失へるを憂へし故事
大理の濱床云々－徒然草に見えたる話
函谷關の云々－

やかたなき車に牝牛のそしりあるべし。墮落の僧に角の生えんは、うしと見しよの後悔やあらん。たとひ牛の御前のたすくる神ありとも、山川それこれをすてん。たゞいきうしといひてやむにはしかじと、天の河原のわたりをとゞめ、茄子に苧がらの足をしとめて、十六むさしの片隅にこそ引きこもりしか。ひたすらに主のうしの、尻尾に火のつく催促に逢ひて、今日しも思はぬ善光寺參りして、牛の華鬘の緣を結びつ。殊に十八町のながが小便、くだらぬ事を書いつけしは、牛の角文字いかめしや。時參りの釘こちぐくしと、賽王丸が鞭にやあはめど、さすがに花山車のひかぬ氣も出來て、人は耳をも洗はど洗へ、角をさしたる蜂と見なして、神農樣のつらの皮をあつくし、丙吉が前に喘ぎまどひて、樵りつむ眞柴おふけなくも、大理の濱床にかけのぼりぬ。あはれざん高繩のうしたち等、角づきあひの思ひをやめて、ことひのうしの鞍の瘡てふ、無心所著をおほめに見給ひ、函谷關の大木戸をひらき、一番はなを通してたべと、なで牛の蒲團かさねぐく、くらやみから密に名のりするを、右近の司の宿直とは見るとも、かならず鮫が橋の牛とな見まがへ給ひそといふ。

こゝぞとてうしは牛づれつどふなり麓に歌人山に天神

牛頭天皇の云々—素盞烏尊の詠み出で給ひし歌、即ち和歌、「八雲たつ出雲八重垣つまごみに八重垣つくる其八重垣を」

牡丹花—連歌の法式を定めし牡丹花肖柏

寧戚が云々—衛人なり、家貧にして人の爲に牛車を挽きて齊に行き、牛飼ひて歌ひ桓公に用ひらる

赤鶴若—丑の歳をいふ

桃林—周の武王の牛を桃林の野に放ちし故事

土牛—七十童子、大寒日の前夜、儺などを拂ふために造れり

あまくりの使—大臣大饗の時、朝廷より此二品を持ちて行く使

才牛—市川團十郎

たけき舍人云々—古今集序を採る

馬蘭亭狂歌會序

馬蘭亭の大人のすみ家は、牛天神のもとにありて、牛込の北にあたりぬ。此うし常に牛頭天皇の八重垣のふりを仰ぎ、はた牡丹花がみやびをしたふ。牧童の綱に、あたらしき趣向をひき出で、寗戚が一ふしに人を感ぜしめしこと、赤鶴若の年をつむ事ひさし。今や桃林にはなち飼せる、治まれる時に逢ひて、土牛をまつる春のいろこそ、蘇あまくりの使思ふつほなれと、名だたる大人たちを家につどへて、大原女のひなぶり歌を詠ます。そのざんしめて、一石六斗二升八合、口のまはる事は、諸葛が牛車よりはやく、うら誦しぬる聲には、才牛がせりふよりきよし。さるはたけき舍人が心をなぐさめ、目に見えぬ牛鬼をも、あはれと思はせつべし。はやうしおそうしのよどみなく、引つれあつまる駿牛給詞、牛に汗さすよみ歌の數は、物見車の袖口おほえて、錦はえある圓居とこそいふべけれ。おのれ田夫野人の山中左衞門にして、九牛が一もんに通ぜず、うしふちくらふ青蠅の身なれば、かゞやける牛佛の、道にうしはくおまへに出でんは、牛のくそ橋のくさきを恥ぢず、牛賣りそこなふ嘴の如く、似鼈甲の水牛細工、鷄を割くなまくら刀、

さては屁玉の外より飛び來たるならんといふ人あり。さらば我たまむすびせんといひて詠める。

すかし屁のぬしは誰とも知らねどもふるうてくれな下がひのつま

音成をおくる詞

あさもよし砧の音成は、もと衣手の常陸人なり。源氏物語なる常陸殿とは事かはりて、やさしくみやびたる人にぞありける。このたび古郷の人訪はんとて、あからさまに出立ちて行く。この人草枕たびぬふわざをよくせり。こゝろざしもまめやかにて、うすがきのうすからず、師の針に隨ふこと、柳の絲のすなほなりしかば、さし足袋のさしのぼりつゝ、半沓のこうあらはれて、ある鼠のちうぎ人よと、皆人もめで合へり。されば古郷にかざる花たびも、錦はえある心地やすらん。今日なん新宿のうまのはなむけすとて、又いつかへりこんのたび、ちをはくばかりなごり惜みて、

あはぬ間は短きたびもうらみつゝかゝともろとも指をこそ折れ

たまむすび—遊離せる靈魂を結び留むること、こゝは屁玉の玉むすびせんと也
下がひ—衣の下まへ
あさもよし—きの枕詞
衣手の—ひだの枕詞
常陸殿—常陸守の猥少將、性粗野なり
あからさまに—假初に
たび—旅、足袋
こう—甲、功
うまのはなむけ—旅立つ人への餞別

李笠翁―清代の小説家、十種曲は其所作の十種

ぶうぶの道―文武の道を捩る

大丈夫の世にある云々―晉書、桓温傳「男子既不能流芳百世、不足復遺臭於萬年邪」

のつたへなり。李笠翁先生の十種曲に、他人の屁はくさし、みづからの屁はかうばしとあり。屁にだに自他の差別あれば、まして才藝口腹のうへには、手前勝手もいふなるべし。から國のむかし、趙襄子厠に入りて、大きなる屁をこきけるに、屁に殺氣の音ありければ、心さわぎて踏板を覗きて、かくれたる豫讓を見つけつ。趙襄子半分しかけてとび出し、もみ屁しつゝ下知なして、終に豫讓をとらへたり。又越王勾踐は、呉王夫差のおゐどを嗅ぎて、屁とも思はぬ顔つきせしより、終に呉國は屁ごしとなりぬ。これらは共に屁の徳にて、一人は危きをまぬかれ、一人は本意を達せしならずや。嗚呼屁徳大いなるかな。或はいきみ或はすかす、一張一弛ぶうぶの道なり。なにがしが詞に、大丈夫の世にある、燒芋の芳しき名をとらずば、最期の一つ屁をひりて、臭を萬代にのこすべしとぞ。おのれ此言に感ずることありて、ヘッぴり腰をひッ立てつゝ、河童の屁といふ文を書きつ。ほむるかそしるかねからわからず、尻口で物いふ男かなとて、世の人へへへと笑ひやせん。

　此文書きはてつる頃、例のへだてなき人の入來て、物語しつゝ居るほど、思はずくさき香のしけれは、すは誰かしつらん、あな臭やなどいへど、名のりする人もなし。

百日の說法云々—諺「百日の說法も屁一つ」
增賀ひじり云々—增賀上人三條の宮に參りて糞などせし事、今昔物語、宇治拾遺物語等に出づ
屁ひりの神の紙線香—遊戲として行はる
去聲—漢字音の四聲の一
陸德明—唐の學者、經典釋文三十卷の著あり
一をひつて云々—「知其一不知其二」を捩る

されて、今に人の傳ふめるは、あやまちの高名ならんか。佛在世の御時、あまりに豆を喰ひすごして、腹をはらせし比丘のありけるが、なむぶッ〳〵とこきたれければ、外に出でてひれとなん、佛はいましめ給へりける。げに百日の說法も、此あやまちの一つより、聽衆の信もさめぬべければ、增賀ひじりの外ならんは、尻にて金鼓は鳴らすべからず。それ屁にはくさ〴〵の異名あり。はしご屁はならひあることにや、にぎり屁は惡ざれなり。いきみ屁はせずともあらなん、ころし屁は殊に罪ふかし。屁ひりの神の紙線香も、ひッた方へはつんむかで、ゆもじに黃なるぬれぎぬ著せて、あらぬ人をも泣かせつべし。ある先生の說に、屁は本音ブゥ、去聲に撥して音スゥと申されしは、陸德明も尻をまくりて、迯げぬべき音韻なるべし。おのれひそかに思へらく、屁の字唐音にてピィの音なり、ピィとはひる時の聲なるべし。我國にてへと呼べるも、又ひる時の聲ならんか。これをブゥの一音のみとするは、一をひッて二をひらざる、へッぴり儒者の管見なり。昔の人のみやびたる耳には、此聲をへッと聞きたるなり、但ブッといふも、はひふへほの通音なれど、古人はへッと聞きしにたがはじ。口より出づるをへどと呼べる、これも又その聲なり。蟬をせみ、鴉をからと名づけしなど、皆聲によりて名づけしなりと、物しり人

屁は脾胃の氣の大腸に溢れたるが、くだつて下風となるものなり。嚏おくび咳さくりと、何ぞへだつる物ならん。されど嚏さくりは、人なかでもすべく、屁をひらば我も恥ぢ、且は人も無禮なりとて、柄に手をさへかくべければ、たやすくはひり出でがたし。さはいへど、世にありとある人のかぎり、男女のけぢめなく、これをひらざる人やはある。ひり隱しをする世のならひなれば、音無川の音にたてず、踵を尻におしあてて、我名もらすなとやうけふらん。げにいつはりのなき世なりせば、人のまたくら臭からまし。順徳院の御時に、屁ひりの判官代といふ人ありて、御所にありてもひりけれど、あながち御勘當も蒙らず、ひッてひッてひり散し、宮内大輔にさへへあがりぬ。又忠家の大納言は、忍びたる女房の、思はぬ一つのおならより、出家せんと思ひきはめて、鼻をつまんで迯げ給ひぬ。本院のおとゞのうたへごと聞き給ひける時、うたへ文もち出づる男の、高々と屁をこきけるに、笑痒おはすおとゞにて、え堪へ給はで、さしも御なかうるはしからぬ、菅公にむかはせ給ひて、此うたへ聞かせ給ひねとて、手をすり涙をながして笑ひ給ひけるとなん。此おとゞはさし置き奉りて、後世あがめたふとめる、天神樣の御前にて、沈香は焚かずして、屁をひりたるは何事ぞ。されどいやしき賤の男の、やごとなき書に記

さくり—しやくり、歔欷

我名もらすな—古今「犬上のとこの山なるなとり川いさと答へよ我名もらすな」

いつはりの云々—古今「いつはりの無き世なりせばいかばかり人の言の葉嬉しからまし」

屁ひりの判官代云々—此話古今著聞集に出づ

忠家云々—藤原道長の孫、此話宇治拾遺物語巻三に出づ

本院のおとゞ云云—時平の話、大鏡に出づ

沈香は云々—諺「沈も香も焼かず屁もひらず」

飛龍云々—易經乾卦の語
さすのみこ—指す、指御子（下巡）

ちりから云々—以下凡て似て非なるものの間違を例示せる也

溫石何ぞ云々—陳渉「燕雀安知鴻鵠之志哉」

貫之云々—古歌を研究せずの義

くさ草子—臭い、草双子

たき人ぞといへる、我判斷のあたれりやいなや、翁について人問ひねかし。

巴扇堂昔語狂歌集序

みやびたるをもてやまと歌とし、あざれたるをもて狂歌と呼ぶ、たゞ詞に雅俗あるのみならず、其おもむきも大にたがへり。此さかひを知らざる人は、音樂をもてちりからに混じ、たうの芋をもて楚王に獻ぜんとす。そも明月を鍋燒となし、燒味噌に鼻緒をすげんとするは、目玉のあかざるあやまちなり。溫石何ぞ大通のたもとに入らんや、貫之躬恒がくりやを覗かず、藤六曉月が雪隱にだにのぼらで、いかで味噌と糞とのけぢめをわかたん。判者々々とおしやますが、判者が文盲でてにはに疎くて、假名も知らいですむものか。こゝに巴扇堂のあるじは、我年頃の念者にて、和漢のふみをしりこぶた、くそ高慢をうる人にあらず。此ふみにくさ草子の名をかりけるは、憤を發せる所になれり。誰かぶッともすうともいはんと、四谷の果の馬糞賢人、けすのはなしのしりへに記す。

放屁

此あと狂言長けれど、披講をだに聞きあへず、草履をさがす人もあれば、先此文はこれぎり。

狂歌玉箒集序

醉龜亭の翁は易の道にとりては、やんごとなき上手ながら、ざれ歌をさへいたく好きて、曙の烏鳴、宵啼の鷄を聞きても、歌をつゞりて詠めること、日にはいくたびうらやさん、三十一字に萬物をつくして、其變化をしもきはめぬことなく、短冊色紙の墨色を考へ、本末の句の相生相剋、當卦本卦の兼題當坐も、柑子を鼠の自在をなせれば、師なりける橘洲ぬしも、本所の方を見やりては、我道東せりとは宣ひけるとか。此翁こたび思ひたちて、めどぎの數のひとつかみに、よみ人の方角を論ぜず、ひたすら歌の吉凶をえらびて、金烏玉兎の集冊をつゞりつ。まづ春はいろある梅花心易、夏はすゞみの辻占より、秋は肩ぬく鹿の聲、冬の巨燵のあて物まで、式神の四季をはじめて、逢ふと見し夜の夢あはせ、期にのぞんで變易の、うせ物待人の戀の歌さへ、此一卷にもらすことなし。けにげに飛龍天にあり、大人を見るに利ありとは、かゝる判者をさすのみこ、世にありが

曙の鳥云々―古今集序「花に鳴く鶯、水にすむ蛙の聲を聞けば（中略）いづれか歌をよまざりける」

うらやさん―卜者

相生相剋―五行の木より火、火より土を生ずるを相生といひ、其て對に木は土に土は水に剋つを相剋といふ

橘洲―唐衣橘洲

めどぎ―易占に用ふる具、數五十本あり

我道東せり―一番の高弟門下を辭し去るごと、鄭玄馬融の故事

金烏玉兎―日月

肩ぬく鹿―古への占の一法

式神―陰陽師に使はれて怪しきわざする者

勅なれば云々―貫之女「勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はゞいかゞ答へん」

宿屋のあるじ―宿屋飯盛

だみそをあげん―駄味噌を上げん、手前味噌などいふに同じく自慢をいふ意の俗語

かがもん―香、加賀紋、加賀紋とは、うはゑにて書き、五色に色どりたる紋

一ムヽハヽヽ、勅なればいともかしこし鶯の、宿屋のあるじと知つたるは、さいぜん落せし此杓子。

ト杓子を出してきつとする。

一それを。

ト取らうとする。

一くらひつぶしのへぼ狂歌師、いつぱい喰つてつまる物か。

一今は何をかつゝむべき。汝が秀歌をめづるあまり、いかで汝をみかたにつけ、此頃はやりの大人とよばれ、毛氈の上に坐して、だみそをあげんと思ひしに、香にあらはれし花盗人、かぎつけられしが殘念〳〵。

トいひながら冠裝束をぬげば、袖なし羽織の田舍おやぢと成つて、花道の中ほどへ來て、

一狂歌の會席へ出て此儘でも歸られまい、斯うもあらうか。

借物と人や見るらん山がつの袖に似あはぬ梅がかがもん

一かさねて會はふ、さらばだ。

菅原の右大臣—道眞

大宮人云々—「大宮人は何といふらん」より、萬葉「もゝしきの大宮人はいとまあれや櫻かざして今日も暮しつ」に續く

おのが羽風—古今集「木傳へばおのが羽風に散る花を誰におほせてこゝら鳴くらん」

鍋取公家—綏（オイカケ）付きの冠を附けたる公家衆

の右大臣に任じ給はんと、難波津に都をしめ給ふ仁徳天皇の勅諚。

おこたる　シテお勅使の御尊名は。

六樹　あづまに育ちしひな人は、「色をも香をも知らぬよナ。から衣とめて北野の神ぞとは、我定紋の梅にても知れ。

おこたる　さては菅原の右大臣にてましますか、我國の梅の花とは見つれども。

六樹　大宮人はいとまあれや、梅をかざして今日こゝに。

おこたる　乞食の家ものぞかるゝ、貴人の御入の返答は、まッ此如く。

ト梅が枝を地にうちつけ、花をちらして見せる。

六樹　これは。

おこたる　おのが羽風に散る花を、などさは鳴くぞ鶯の、こなべやほしき母や戀しき。

六樹　なんと。

おこたる　くはせ物の鍋取公家、とく本名を名のるまいか。

六樹　不禮なるおこたるが一言、奏聞遂けなば違勅の罪。

兼題—豫め出し置く歌の題

釻菊の紋—菊の花形に環を添へたる紋

梅壺—古の禁中の御殿の名、凝華舍、以下凡て梅に關する洒落

うち出しぎはにたゞ一筆、矢立の墨の草枕、旅の宿屋の飯盛が、せうことなしに唯今の、おわらひぐさをちよと書いつけつ。

守信亭おこたる

詠二梅花一狂歌會序

正面三間の間一面に梅の兼題、まへうしろは人の山幕、言の葉の玉所々にかゞやきてあり。全體なにがしがたかどの、狂歌會の體、守信亭おこたるといふ濡事師、釻菊の紋つけたる裃衣裝、いかにも綺麗なる出立にて、詞の花を花いけにさして居る見え、金石のひゞきにて幕明く。

ト切幕にて勅使と呼ぶ。

おこたる 一なに勅使の御入とや。

ト又勅使と呼ぶ。さがりばにて、六樹園冠裝束にて出て來て上座へとほる。

おこたる 一思ひよらざる勅使の御入、シテ勅諚のおもむきはナ。

六樹 一汝ざれ歌の道に執心ふかきを、帝大に御感有つて、梅壺の后を賜はり、すぐさま紅梅

ありがていか—有難い、定家
ぬすびとの云々—沖津白波立田山の歌句にとる
蝸牛の角—蝸角の爭、卽ち爭ふ所の小なる喩
うし—牛、大人
にた山—まがひ物
ちくらが沖—どつちつかずにて不明の意
曉月坊—冷泉爲相の弟
聖武の紺紙金泥—聖武天皇の時の寫經を指す、
何にしやう—に掛く
たて—芝居の修羅場

だかゝる人々に、筆さしつけて無理無體、奪ひとつたる自筆の一首、手に入りしは大願成就、ありがていかの色紙にまさりて、天下一なるこの手鑑、ながく子孫のたからとせん、それよ」といひて行かんとするを、「待て」と留めたる裃出立、下座口よりをどり出で、「ぬすびとのたつたの山師いかさまし、蝸牛の角をうしとあがむる、にた山狂歌の一巻を、手かゞみなどとはことをかしや。つたない詞のうしのくそ、味噌にあぐるは擂粉木を、しやくし定規のその一巻、假字てにをはのわいだめも、ちくらが沖にしろうと鑑、うぬぼれかゞみのその手鑑、うちやり捨てん置いて去ね」と、立むかへばあざわらひ、「井の中なる蛙は荒海を知らず、さる歌よみの曉月坊が、毛のむく〳〵とよみしを知らずや。汝がみやびと稱するは、道學者流のふる頭巾、當世にあはぬ寢言にこそ。名古屋物の古てかゞみ、何に聖武の紺紙金泥、なにかなら切にせ物の、皮をかぶりし越なぎれ、疾そこのいてとほしぎも、やだあといはゞ引裂き短冊、五體の筋きれ上段下段、こよみぎれにしてやるが返答うて」ときめかへす。まけじ心にひき抜く太刀、見事なたてを見物の、諸連中が口々に、おほかたこちらは枇杷丸ならん、あなたは見なれぬ老こみ役者、定めて田舍のくはせものと、知らぬ人も多かるべし。されどあつらへの拍子にのりて、

天地を云々―古へ女子は正月に「天地を袋に縫ひて幸を入れて持たれば思ふことなし」と誦して壽言せり

養由基が弓―射を善くし、百歩にして楊葉を射る

四本がかりのあげ鞠―蹴鞠を行ふ場所をかゝりと云ひ、四隅に松　櫻　楓　柳を植う

くろごじたて―黒装束

神靈やどりて守護をせり。なにがしといへる人、柳を植ゑて宰相にいたり、又柳汁に衣を染めて、及第しける人も有りとぞ。柳の下の御ことはと、元日のあさげに祝ふは、天地を袋に縫ひてと唱へし、ふるき言忌のなごりなるべし。さるめでたき植物なれば、露の玉ちるざれ歌の、今日の筵の題には出しつ。しかるに隨堤の新堀かけずくづれず、養由基が弓ひきもきらず、つどひ集る人々の、かゞやく詞の玉のを柳、斯くいやしげりにしげりぬるは、四本がかりのあげ鞠の、けしうはあらぬよろこびになん。これに朽木のふる柳、根も葉もあらぬはし書をそふるは、力なくして先うごく、氣のかつまたの兵衛の佐と、人のわらひも恥ぢらはで、小刀細工の削りかけを、はなのあたりにぶらつかすになん。

青山集　枇杷丸藏

ぬば玉のくろごじたて、海士の刈るめばかり頭巾、菅の根のなが刀さして、紙ばりの土藏きりやぶりて、何かしら木の筥をたづさへ、あまた度おしいたゞきて、「これはこれ青山集と名づけしざれ歌の一卷、地になげうてば金石のひゞきをなす希代の寶物、世に名

し杖、これにて子無き女を打てば姙娠すといへり
倡臺―吉原
傾城云々―其角「傾城の賢なるはこの柳かな」
蓮華王院―京都の三十三間堂
お柳が故事―淨瑠璃「祇園女御九重錦」（三十三間堂平太郎縁起）を見よ
はこ柳―むはこ、蒲柳（白楊）
柳下惠が賢―柳下惠は道を直くして行ひ、三たび黜けらるゝを辱とせざりき
風新柳の云々―朗詠の句
稽叔夜―嵆康宅中に一柳あり

に柳島、倡臺ちかき五十間に、傾城の賢なるはこれと、其角が見返りの、柳はみどり花川戸、わたれば名ある梅若塚、金龍山の楊枝店には、柳屋ならぬ家もなく、花をあきなふ軒毎には、是を植ゑざる門もなし。かけんもかしこけれど、後白川の法皇は、岩田川の柳にて御頭痛をいやし給ひ、蓮華王院の御建立には、棟上のお世話まであそばしゝとか。さてなん平太郎が妻のお柳が故事は、淨瑠璃かたりのはこ柳とは成りける。あるは道風の青柳硯、蛙のつらへ道のべの、清水ながるゝ柳かげには、蝙蝠に山桝をくはす、清水の三本柳に、雀が三匹とまりに來たる、女の肌の雪に折れぬは、柳下惠が賢とぞ聞えし。風新柳の髪を結ひて、柳しぼりの浴衣がけ、柳茶の帶をしめ、柳屋の紅粉をぬりて、柳湯へ入らんとするは、柳橋あたりの藝者なるべし。もとよりほそき柳腰、やなぎの眉を見たらんには、春日路傍の情ある人は、ちとかたけれど東門の柳、晝を以て期とやすらん。續博物志を案ずるに、正月門毎に柳をさすことあり、さらば繭玉の團子などは、此流俗のまねびなるらし。高野の山の蛇柳の、ぬらくらものの歯をみがく、楊枝に口の熱を去ることとは、僧祇律にぞしるしたる。謝氏の娘は雪こん〳〵にほめられ、顧愷之にかくれんぼのをかしみあり。稽叔夜が樹陰には、呂安來りて物語し、成通卿の梢には、

清少納言がいはゆる─枕草紙「柳などいとをかしきこそ更なれ、それもまだ繭に籠りたるこそをかしけれ、廣ごりたるはにくし」
柳々州─柳宗元
折楊柳─送別の情景を敍したる詩
五柳─昔の陶淵明宅邊に五株の柳を植ゑ、自ら五柳先生といへり
繭にこもり─柳の芽ぐみたる樣をいふ
又もおふてふ─萬葉「霰降り遠つあふみの跡川の柳かれどもまた生ふてふ跡川柳」
新京朱雀の─催馬樂淺緑の句
未央─漢の高祖の未央宮
柳の名─柳はかさねの色目の名にして、表白く裏青きもの
粥杖─五月十五日に粥を煑たる木を削りて造り

柳を詠めるざれ歌のはし書

おのれ武昌西門に家居しめてより、清少納言がいはゆる、廣ごりたるはにくしと思ひとりて、川柳點のざれ言などをば、さらりと柳にやりやらひて、柳々州が書などをひねくり、折楊柳の古調をうたひて、ひたすら五柳の門をとぢ居たるに、さまで繭にこもりなんや、いやな風にもなびけといふ歌だにあるをと、柳の間の廊下づたひ、諸士のすゝめの無理じひに、逢ひて又もおふてふ跡川柳、新京朱雀のしたり顏して、かゝる筵に出口の柳とは、さるは片絲のよりのもどりたるなるべし。そも柳星は南方の七宿にて、柳谷は西方の地名なり。佛に楊柳觀音あれば、神に柳大明神あり。柳の稻荷はどぶ店の塵にまじはり、青柳寺は西の洞院に跡をのこしぬ。御柳は未央のお庭にはびこり、柳營は大將の居城を稱す。柳筥はやごとなき御調度にて、柳樽は婚禮の禮物なり。旅行く人は行李に製し、料理人は俎となす。宿老の下がさねに、柳の名をもて呼ぶことは、裝束家の說につたへ、年の初の粥杖にこの枝を用ふることは、全浙兵制にくはしく載せたり。春のにしきの都には、柳の馬場に柳の井、柳の水の名所あり。大江戸にては柳原、小柳町

燈籠に云々—秋の玉菊燈籠
彌生の節句—雛の節句
今一きは云々—徒然草「今一きは心もうきたつものは、春の景色にこそあンめれ」云々—
秋山ぞ云々—額田の女王の歌
秋好—源氏。春秋の優劣を秋好中宮と紫上とあらそひし時、中宮秋の好ましき事をいふ事、薄雲巻に出づ
紋日—物日の紋日
よき人の云々—萬葉集「よき人のよしとよく見てよしといひし吉野よく見よよき人よく見つ」

七月改　吉原細見記序

大犀山隨德寺紺忠頭陀

初禮とて仕著小袖きて、門松のそばにねり出でたると、俄のうちさうぞぎて、うち囃しつゝ前わたりすとは、いづれの方かをかしからん。又大路に咲きつゞける夜櫻のけしきと、燈籠に灯ともし連ねたるとは、いづれをかめでたしとせん。これらの物日をおきて、夷講に月見をくらべ、彌生の節句に八朔をとり出でてあらそはんに、まさり劣をさくわくべうもあらじ。兼好法師は、今一きは心もうきたつものはといひつれど、萬葉集には、秋山ぞわれはと詠ませ給ひ、光源氏の物語には、秋好と申す宮もおはしましき。されば此春秋の品定めわいだめんことは、昔の人だにかたかんなるを、まいて小車にたとへし里の紋日、春と秋との二つ輪は、いづれの方にか心ひかれん。たゞよき人のよしとよく見て、よしといひてしよしはら細見、この文にくはしき人こそ、このさかひをば知るべけれといふ。

玉の緒—命に掛く

相模女—好色女の俗稱

惣雪隱云々—大屋なれば也

跡を垂れんとす—住を定めんとす、垂れは糞の緣

ちやんが云々—もやぢは一文なしより茅場町の藥師に續けたる也

一休の犢鼻褌—汚穢なる也

千手觀音—虱

ほりす—欲す

紫磨黃金—すぐれたる黃金

南無阿彌陀といふ五文字を句の上にするゑて、例の狂語をのばへつゝ、過ぎにし人のみたまの爲に、寶永祭をやらかすになん。

なき人のむかしを繰ればあはれ世にみじかき數珠の玉の緒やこれ

紺忠新宅勸化帳序

貧道紺忠、相模女に無情をさとり、浮世を夢と神田のわたり、日本橋より西の空、寫經の金紙紺屋町に、このたび尻をかいするゑて、惣雪院の糞を目あてに、しばらく跡を垂れんとす。もとより貧地の入院なれば、什物靈寶はいふにおよばず、ちやんが一文南無藥師、かやば町を出でしより、樹下石上の宿なしと成りて、身に一休の犢鼻褌をかきて、おもはぬ千手觀音を安置しつれば、本尊には事をかゝず、こゝに十方慈悲の檀越をあてがきに、五人組のやもり店をひらき、入佛供養をせまくほりす。ちかづきの御かたぐ、紫磨黃金の一分もひかず、此道場の施主とならせ給へ。さらば來ん世の時にいたり、河童となり貉と成りて、お禮は淺間の山つなみ、隨喜の膿をこぼし申さん。よつて勸化の序文の口上、もちまへの瘡毒かくの如し。

せけるを、とりをさめ葬り物して、かたばかりのしるしを殘せるなりとぞ。あはれわりなき戀の切なるには、なにぞは露のあだものをともいひけちてん。なるはいやなりならぬはしたし、まかせぬことの積りてはとは、淨瑠璃の文句にも見えたり。さるをえせ博士だつかたくな者は、斯樣の事をいたく笑ひて、口にまかせてそしるめり。むべなりその人を見るに、顏は深山のしゝ猿の如く、化物にて見まほしきかたちぞしたる。されば妹と背のかたらひの、死ね死のうといふめにあはざれば、その心をしもさとらぬなるべし。男女の若ざかり、なさけの道のやる方なきは、四角なるふみにて論ずべからず。命のうちに添はれずば、生きてありとも何かせんと、肩にかけたる毛氈に、あかき心をあらはしつゝ、腰の樒の露よりも、消えなん事をいそぐめる、こゝろざしの哀さは、悲しといふもあまり有り。今年さる人の、百年の忌に當りぬとて、春風つかね枇杷丸など、まめ〳〵しき心より、かの塚の葎かきはらひて、うるはしく香花そなへて、追善の法事をぞ營みぬる。この磯五郎といへる人は、富士の山に瘤の出來し、寶永うまれのいろ男なりとか。百年をへだてぬれど、おのれも艶なるいろ男なれば、同氣もとむる所にや、十文錢のはしたなくも、大つぶなる涙をさへこほしぬ。さるはたゞにやむべきならねば、

しるし—標
なにぞは露の云云—古今集「命やは何ぞは露のあだものを逢ふにしかへば惜しからなくに」
博士—學者
四角なるふみ—小六ケ敷き漢籍
春風—上原春風、本居大平の門人
枇杷丸—便々館琵琶麿、狂歌師
まめ〳〵しき心—忠實なる心
瘤—寶永山
大つぶ—大なる粒銀に涙の粒を掛く

らはし、天神講の一人もあまさず、二十五日の小豆餅、うまい詞を書きつけ給へと、年にも恥ぢぬよだれくり、人形を畫く片手間に、例の蚯蚓をのたくらせつ。

狂歌買出帳

この小冊は狂歌の買出帳なり、もとでは二文もかゝらざれど、しろ物は一字千金にわたるなりとぞ。さるは奇貨おくべしの心より、まうけ出でたるこがねの言の葉、十露盤の玉の光ある歌ども、惣〆て百千あまり、二十日の賣買夷歌、江戸連中の正札つき、まけぬが店のみそ一文字、りつぱにみせを春と秋、あはせて四の時相場、戀雜神祇釋敎まで、つ御目にかけ賣つかまつらず、現銀かけねなじみのとくい、もし此ふみを讀みながら、ついとろ〳〵と鼾のかきだし、よこに寢ることなかれといふ。

はつ磯五郎が墓

某寺の墓所に二つの塚あり、こはむかし磯五郎とかいへる男、はつといへる女と契りかたらひけるが、いかなる憂きことかありけん、この御寺の門に來りて、ともに死にう

春風春水一時の興—白樂天「今日不知誰計會、春風春水一時來」
天神講—毎月二十五日に寺子屋などにて菅原道眞を祭りしこと
よだれくり—淨瑠璃「菅原傳授手習鑑」の寺子の趣にとる
奇貨おくべし—珍しき貨は時を待ちて賣る時は大利あり、故に之を買込み置くべしの義
二十日の云々—十二月二十日商家にて行ふ蛭子神の祭に酒興の戯に賓主の盃盤器物に假に高價を附して賣買せり
夷歌—狂歌、夷講に掛く
みそ一文字—三十一文字、味噌
惣
かきだし—恥をかく、勘定書

とて、垣根におふる呉竹の、根春の主のたのみにまかせ、心え田甫に鳥のあと、骨なき蚯蚓をのたくらせつ。あはれ此書ながくつたはりて、紙屑買のはかりをまぬかれ、乾物屋が袋とならず、千年の後の古筆見の、めがねにかゝる事しもあらば、それこそありが定家の色紙、ほまれにしぐれのちんぶつ茶や、狂歌を御覧じて御茶をあがれともいはましや。

草子此主狂歌帖序

なにはづあさか山のふた歌を、初登山の手本に請け得て、色紙短册のはしり書、懐紙詠草の清書に、よろしく候の褒美をとり、硯の海に玉をひろひ、詞の花を水滴にさして、たゞ此道をはげみならふ、草紙の此主といふ人あり。かつて筆のしりとる博士の軒に、同門の筆の跡、看板にかけしを見てより、思ひつくゐの置物にもと、かゝる文をば作れるなりけり。をりからの花鳥風月は更なり、春風春水一時の興、神祇釋教むしやうやたら、十二箇月の題詠より、十三の書初の、戀の歌さへあつめんとす。これを同社の人々に告げ奉る。一老新べこの差別をいはず、かの篁の歌字盡に、源平藤橘の名のりをあ

鳥のあと—文字
骨なき蚯蚓—筆蹟の拙きをいふ　常馬「力なき蛙、骨なき蚯蚓」
しぐれのちんぶつ茶や—藤原定家の茶亭なる時雨亭（シグレノチン）に掛く
なにはづ云々—古今集の序に「難波津の歌は帝のおほん始なり、淺香山の言葉は采女のたはぶれよりよみて　このふた歌は歌の父母のやうにてぞ手習ふ人の始にもしける」
神祇釋教—歌集の部類「神祇、釋教、無常」とて、題の如くなれり

すぎゆき給ひし―亡くなり給ひし

手鑑―昔の能書家の筆蹟を集めたるもの

光明皇后―聖武天皇の皇后

はんまちどり―半間(まぬけ)、濱千鳥は跡の枕詞

燕人の云々―燕石は玉に似て非なる物、宋の愚人燕石を藏して大寶となせし故事

もち―持ち、望

佐野の雪云々―謡曲鉢の木の文句にとる

三十一文字―和歌

は、いかにあらんか覺束なし。おのれ幼かりし頃、とかく蟲腹になやみければ、すぎゆき給ひし二親の、たゞ灸すゑよ〳〵と口につけて宣ひき。かく灸すうる度ごとに、これこそ庭の敎なれと思へば、めぐみ給へる慈愛のほどは、今もあつくぞ身にこたへたる。

吳竹根春が手鑑の序

世の手鑑におしたるは、光明皇后の寫經のきれはし、貫之、躬恒がやまと言の葉、さては辨慶が借用證文など、すべて實正ならぬ筆の跡ぞ多かる。さる物を寶とせんは、道風の朗詠集にはおとりて、うま〳〵いつぱいはんまちどり、跡にそしりや燕人の、石をめでたる類とこそいふべけれ。こゝに物せる一卷は、一つもの喰ふ友どちの、箸盃のかたてまに、ちよつきりちよと筆をもちの夜の、霞に月の詠をはじめ、知つた同士の涼臺、龍田の紅葉佐野の雪まで、相違あらざる自筆の帖、なにぞにとり添へ給はるとも、貰ひてもなく買ひてもあらじ。にせた所が錢にならねば、僞筆をすべき道理もなし。かの三十一文字のうたがはしき、贋か本手かわきがたき、摸稜の手鑑にくらぶべき物にあらず。されば子孫につたへんには、こよなき不朽のたからなるべし。この端書を書きね

大政入道殿の云云―平清盛の熱病にて悶死せる事をいふ、此事平家物語に詳也
うまご―孫
さしも知らじな―後拾遺、攝「斯くとだにえやは伊吹のさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを」
標茅原―新古今集「なほたのむ標茅原のさしも草われ世の中にあらんかぎりは」
ふたつ胴云々―いざ胴を眞二つに斬らば斬れとついふ身がまへ
ちりげ―ぼんのくぼ
ほけ人―老耄せる人
大壺―尿瓶
前三後七の禁忌―灸事は灸前三日灸後七日を忌む

中一面ほのほを負ひたるやうにて、「あらあつや、堪へがたし」といふ聲、大政入道殿の最後の苦患にもおとらず。かゝるにうまごなる者の走り來て、おぢいさまの灸すうる見んとて、前の方にすわりて居り。今までは手拭をかみ、眼口も一所に寄せてしのぎつるを、此をさなきものに恥ぢて、聲をしのぶも術なしや。こやつかはきりの時によくぞ來らざりしと、いよゝ聲をのみて居れば、胸にあまりて落つる涙は、灸瘡にとまうけたる團子も恥づる大きさなり。此孫が顏を見るにも、さしも知らじなとさへうちうめかる。背中はてつれば、帶ひき締めんとするを、艾猶のこりありといふに、なにと返答いぶき山、標茅原をすゑんとなるべし。覺悟をきはめて此度は、ふたつ胴いざといふ身に成りて、のけざまに打臥したるを、會釋もなくすゑかゝる。これはさしもむ類にはあらず、生ながら皮を剝ぎて、腑わりをさるゝ思にて、肛門の穴もすほみて、ちりけへのほる心地して、手足ばかりをもがく樣、さながら爼に截れるすつぽんの如し。いでや世に用なきほけ人の、さまで延年ののぞみは無けれど、生きてあらんそのあひだ、看病人にあくびをされ、大壺に鼻をつまゝせんは、くるしと思ふ心より、ころばぬさきに杖をつきて、老の坂をば下らんとすなり。しかし病まざるを治す上醫ならねば、前三後七の禁忌など

きさらぎ―二月
九寸五分―切腹に用ふる懐刀
菊川の宗行卿―「昔南陽縣菊水汲下流而延齢今東海道菊河宿西岸而失命」と宿の柱に題したる有名の故事、東鑑承久三年七月の條に出づ
本津川の重衡卿―平重衡の南都の最後をいふ
念じて―こらへて

きさらぎの二日、天氣ものどかなればとて、妻なるもの、晝すぐる頃行燈に火とぼし、艾あぶりて、いざ〳〵といふにぞ、おのれ生得灸ぎらひにて、一寸のがれに明日明後日とのばしつれど、今日ばかりはのがるべきならず。籠城のつはものの糧つきたる顏色にて、しぶ〳〵敷皮の上にゐざり出でて、いさぎよく諸肌おしぬぎつ。九寸五分にはたらじと思ふ灸箸を見やるにも、胸はがた〳〵とをどられぬ。菊川の宗行卿、木津川の重衡卿の御心も、斯くこそとおしはかるほど、襟のあたりに物ぞあたる。すはと思ふより、あつさこらへがたく、齒ぎしりしつゝ高くうめけば、妻なるもの、「あらぎやう〳〵し、灸點の墨をつけたるにて候」といひて笑ふ。「今日はいかなることにか、墨をぬるさへ熱し」などいひて居れば、「今ぞかはきりにて候」といひて、指して背のあたり押へつ。なんでふ我もますらをなり、世に灸するゑぬ人やなき、かゝる時おくれを見せんは、妻子にもあなづられて、かひなしとや笑はれんと思ひ念じて、せめて眼を閉ぢ、息をつめて居るほど、總身油の汗ながれて、たましひ消ゆる心地して、物いふべうもあらず。「これは灸にてはあらじ、まさしく錐もてもむにやあらん。心なしの大きなるを選りてやくにこそ。最初は小きを選りてものせよ、よや〳〵」と叫ぶほど、今は三つ四つ一度にすうるにや、背

腹ふくれ—富者
潯陽江に云々—白樂天「琵琶行」の起
くまたか和尙—熊鷹眼の和尙、利慾を貪る和尙
夷曲—狂歌
大恩狂歌—大恩教主の捩り

よく舞ひて、多錢よくあきなへる、腹ふくれの心にいらば、いかにお釜をおこすべき。さらずば潯陽江に舟をむやひて、ゆかりの月をや歌ふらん。又筑紫のわたりに飯を焚きて、井戸ばたに米やあらふらん。水のながれと人の行末、案じすぐしのせらるゝも、いらざる苦勞性とやいふべき。

狂歌勸進帳

くまたか和尙の本堂建立にもあらず、また新まい坊主の衣の奉加でもなし。そも此冊子は、あらゆる一切の夷曲の衆生に、一紙半錢の物いりをかけず、わづか一首の布施をこふ、大恩狂歌の勸進帳なり。あはれねがはくは、十方の諸檀越、色ある心の花講中より、胸に趣向を覺講中、一日百首の日參講中にいたるまで、金銀珠玉の詞を惜まず、俗名狂名のわかちなく、假名のいろはの文字肩衣、かいつけ給へといふことを、勸化このたびの發願人、てにはの藏人にかはりて申す。

灸

づきし荷笊をさながらなり。左に欅の段階子あり、中敷居の襖は青土佐にて、すり物所所おしてあり。分銅どうこの竈まばゆく、一坪ばかりの庭ながら、厠めく物も見えて、藥師不動にもとめたる、槇萬年青など植ゑわたして、石二つ三つすゑてあり。兄の國忠懦弱にて、常に妹の脛をかぢる。母と見えしは六十ばかり、常盤の媼がかたちしながら、念佛ぎらひのつらつきなり。すべて家内のをさめかた、娘が裁判を待ちておこなふ。今より十年のその昔は、引窓の煙綱のやうにほそく、錢車のまはり悪かりければ、煮る粥のじるいをすゝりて、唐茄子さつまいもに腹をこやしたりし、それから出世のつるが生えしを、大屋ばかりが悅ぶのみかは、檀那寺の和尚さへ、歡喜敬禮して向ひ給へば、所化もおもはぬ非時にあひて、盂蘭盆の棚經さへ、よほど長くぞ讀みあげたる。そも亡き父のありし時は、きらずとて來い、質屋へ走れ、味噌よ鹽よとつかはれつゝ、貧乏徳利手にさげて、油屋の緣の氷のうへに、すべりころげし事もありき。又饂飩屋のしるつぎを持ちて、醬油買に行きたりしなど、昨日のやうに思はれて、日かげひまゆく駒下駄の、かへらぬ年をかぞふるも、おのれが眉に恥づるなるべし。十九といひしも五年ばかり、さまではいかに此頃は、まぶた黑みてまなじりに、少々浪さへうち寄せぬ。されども長袖

青土佐—土佐國の產なる青くして厚き紙、紺土佐ともいふ

錢車—金まはりの悪きをいふ

非時—齋以外の食事

きらずとて來ひ—豆腐のからを買つて來い

日かげ云々—莊子「人生二天地之間一、若三白駒過二郤一、忽然而已」

長袖云々—韓非子に出でたる諺

六波羅云々—あちらこちらの高貴の邸に招かるゝをいふ
百川—以下凡て江戸に有名なる料理店
金華山—金、貨金華さくの歌にとる
ちりから—音色
豐後義太夫—宮古路豐後掾より出でたる淨瑠璃節
あひ—酒の相手
江市とかいふ格子—江一格子とて格子の小間の所へ竪横の桟を一つおきにこめたるもの、藝者家のつくりに多し

昨日は六波羅の御館に召され、今日は堀川の御所にまゐる。百川に三杯を獻じ、八百善に百杯を辭せず。東林をわけ川口に赴いて、武藏屋大黑屋は舟にておすべく、海老屋扇屋は駕籠にてとばすべし。玳瑁は頭にかゞやき、金華山は腰をめぐる。紫檀の竿、花櫚の胴、玉簫金管のちりからには、舟やかたの塵も飛ぶとぞおぼえし。さのみにをかしからぬ事をも、聲たかくうちわらひ、積にさはる言を聞いても、惡口ばかりとながしてすます。文句もわかぬ豐後義太夫、醉に乘じてうなり出すをば、あしらひながら彈いてもやるべし。あるは拳酒順のまひ、此盃をかう持つも、もの憂き時も有りぬべし。又無理じひの盃にあふれて、血色の羅裙しとゞに濡るなど、いかでかはつらからざらん。銚子のかはりめ、あひの又あひ、すべて獻酬のむづかしきは、故實の家にも知ることあたはじ。我家に歸るころほひは、むかふ側のつき米屋が、から臼をふむ折なれば、ごほごほといふ鼾の聲だに、一夜もやすくかゝぬなるべし。かゝる人の住家の柴折戸、わけていはんも口さがなきやうなれど、むかし物語にもさる例なからずやは。いとさゝやかなれど、三尺のはひり口、かたへに江市とかいふ格子つけて、床めいたる壁には、なにがしが朱鍾馗をかけつ。つきぐ\しからぬ繪のさまと見るは、一つ長屋のふるかね買が、か

大夫格子―遊女の格
すがゝき―店すがゝき
有心無心―有心座(和歌)無心座(連歌)を掛く
松葉屋丁子屋―吉原の名ある妓樓
廊下とんび―遊客の醉に乘じて廊下などを歩き廻ること
下村―日本橋なる有名の化粧品屋

狂歌細見記序

狂歌會の大門口、中の町の花の言の葉、ふたり一坐の判者の見立に、大夫格子とかぞへつゝ、その名を呼出し附まはし、名歌をあげてかき暖簾、ゐんり江戸町伏見町、すがゝき彈くは二の町の、新造となり部屋となる、有心無心の文の數、よんでみなせのつらね歌、つらりとまとるにお並びなされて、大よせよしはら細見記、五葉の松葉屋丁子屋の、たほにくらべて御覧ぜよと、こたびの會主のつる村さんが、おつせへすといふ言づてを、名代に出た廊下とんび、下卑藏すなるはたて貝、ちよつとつまんで申すになん。

げいしや

藝者といふものは、おのれが若かりし頃までは、をどり子とこそいひたりしを、踊らばころばん浮名をやいとひけん、いつしか今の名には呼びかへたる、羅綺の重衣を織りもとにのよしり、脂粉のけがれを下村にいましむなど、皆此いろを思へばなるべし。されば蘇州刺史の腸をなやまし、江州司馬の袖をうるほせし、むかしもさるためしありき。

普賢菩薩—畫には白象に乘りたる樣を畫く
えと—十干十二支、江戸
はなし鰻—彼岸の中日などに功德の爲に放す鰻
土場太夫—土場で語る淨瑠璃語
四目屋—兩國橋畔にて淫藥淫具などを賣りし家の名
はしづくり—端辭
おくちはんし—小倉半紙におくれなんしを掛く

普賢菩薩の乘物町、白象のはなの屋の主、例のざれ歌の筵をひらきて、今年のえとの兩國橋、團子さす柳橋のほとり、いかのぼり大のしが樓にて、疝氣なす公達あまたつどへて、大きな玉の言の葉をあつむ。さるはいくよ餅のうまみに、羽衣煎餅のかうばしきなど、おの〱とり〲なる中に、川瀨の浪の幽玄體、はし行く鑓のたけ高き體、はなし鰻の心ある體、かるわざの日傘うらゝかなる體、獨樂まはしのこまやかなる體、口まめ藏のおもしろき體、講釋師の見樣體、土場太夫のひとふしある體、うす衣かづく小娘の、鬼ひしぐ體なども見えたり。これらは皆年季野郎の腰あふぎ、實體の姿とやいふべき。此ほかにもれたるは、女太夫の艶なる體、洗垢離の聲の細くからびたる體、四目屋が賣るしろ物の、ふとく大きなる體さへ見ゆめり。すべては淡雪ひさぐ腰張の、なみ〱の歌にはあらず。しかるに會主の所望にて、おのれに代僧御名代、木でも竹でも耳學問、なんでもよりどり三十八文に、此はしづくりを書けよと有る。よつて筆をはなち龜、おくちはんしの安賣の、てうどたらはぬ智惠をはたきて、豐年もちのくろい顏して、にた山うりの口上書、巾着きりの鋏にあらで、ちよつきりこゝに記しつけつ。

ふりしん—振袖新造
お職—御職女郎、女郎のかしらの稱
自是三千の第市人—長恨歌の句にとる
八文字—花魁の道中の足の蹈み方
古今傳受三つぶとん—古今集中の言葉に、三木三鳥の傳などあり、三布蒲團に掛く
伊勢の海—催馬樂の曲名、「伊勢の海の、清き渚のしほかひに、なのりそや摘まん、貝や拾はん、玉や拾はん」
きの字屋—臺の物を調ふる家
はしがき—著、はし書

のなが歌みじか歌、歸る羽織のかくし題、猪牙に竿さす旋頭歌など、其體いと多かめるを、口てづつなるふりしんは、物まへの無心所著に、勘定あはぬ言の葉をもいふめり。こゝにこの道のお職あり、自是三千の第市人とぞ聞えし。八代集の八文字に、狂歌本歌の仲の町をふみしめ、古今傳受のみつぶとん、源氏狹衣のしつけ苧さへ、經緯にとほしつれば、ざれ歌の全盛は、この人にとゞまりたりと、兼題とりし約束客より、むすび題のまはし客まで、馴染初會のけぢめをいはず、こゝら其あたりにつどひ寄りぬ。此頃椋のはみがきのはな油、簞笥の金具光あるものを選りひろひて、ちよつとむかふのひと巻とはなしたる、これ伊勢の海と名づけつる、ふかき心の故は知らねど、小鰭の鮓のおしあてにいはゞ、雪のあしたの帆立貝、なま貝や拾はん、ふはふはの玉子やひろはんとか、なんとかかとか笄の、ひねくりたるいはれ有るならん。おのれいまだ此ふみをひやかさゞれど、某が請へるにまかせて、ついきの字屋のはしがきして返しつ。さるはふところ紙の小菊一枚、當坐の責をふさぐになん。

花の屋道頼會集

たるも見ゆ。つきがね凧の空ざまにのぼるは、道成寺のむかしもかゝりけん。釜凧の鳴高きは、吉備津宮の神祕も斯うぞなど思ひ出でらる。扇凧の空に舞ひたるは、那須の與市に射させつべく、挑灯凧のふらめきたるは、折助が手にやとらへつべき。淸玄が頭は袖をくはへてにらみ、猪のくまが頭は草褶をかみていかる。馬凧は北風にいばひ、達摩凧は西天にひいる。奴の鼻殊にひきく、般若のおとがひ更にながし。蔦だこ豆腐屋の軒に落つれば、鳳凰だこは桐の木にからむ。景淸は靑く金太郎は赤し。雲居にをどる龍の凧、風をおこす虎の凧など、とり出でて數へんには、絲卷のおよびもそこなはれつべし。かの李笠翁のつくりたる風箏誤といふ正本を考ふれば、かゝる事の物ずきは、唐國も猶ひとしきにや。あはれあがりたらんは煮て喰はまし、さがりたらんは燒きて喰はまし。あまつ神はつよし、龍田彥はよわしなど、うけひたはぶれつゝ、かなびきのいと引もきらず、凧をたよりにあげ卷の、たちはしろ樣ぞをかしきや。

狂歌伊勢海序

狂歌の趣向といふは、上手にうそをつくことなり。これを手のある傾城にたとふ、ねん

吉備津宮の神祕―備中吉備津神社の釜鳴の鈴鏡一夜に三度鳴る事ありし故事
折助―武家の僕
淸玄―淸水淸玄、凧の繪の樣をいふ
西方―西方淨土を指せり
奴―奴だこ
およひ―指
李笠翁―支那淸代の有名なる小說家
龍田彥―風の男神
かなびきのいと―文かなびきをともいふ、いちび絃の稱
あげ卷―小童
ねん―年季
續け―結ぶ年季、當時の吉原通ひの語なり

狂文吾嬬那萬俚

上

いかのぼり

いかのぼりといふものは、東の方にてはたことぞ呼ぶなる。さるはこち風のあがれる世には、師勞之と呼びてもてあそびけること、順朝臣の文にぞ記したる。この物よ、あら玉の春の頃は、若草のみどり兒はさらなり、福引のおやげなき人らも、猶これに心よせつゝ、遊びたはぶるめり。さゝやかなる物は、兒の懐にも入るべく、大きなるは、維摩の庵をもかくしつべし。これに文字を書きたるを見るに、蘭といふ字は畫たらはず、國といふ字は畫あまれり。筆法もいかりそばだちて、さながら羲之獻之の跡とも見えねど、あうんの仁王の肱もちおぼえて、いかめしくこちなげなり。又繪をかきていろどり

順朝臣の文—源順の「和名抄」
維摩の庵—維摩居士が方丈の室
あうん—あは出づる氣息の聲、うんは入る氣息の聲にして、不立文字の佛教の極致、二體の仁王は其象徴也
こちなげなり—不風流げなり

ときに文化十とせといふ年文月星まつる夜清めたる硯にむかひて

東夷庵　吉　渡　し　る　す

眞鍮の雁首、一錢のかはりをなして百貫の中にまじはり、銅のはりがね、島臺の松をたわめて一夜千兩の座敷につらなる。猫につくられし銀は西行法師にきらはれ、金賣橘次が荷になりては黃金も馬の屁をかぐ。七度燒のかんざし、うゐらうの古金、すべて似た山のみ世に多かれど、皆一つらに見なさるは、古がね買の荷なひ笊めをそなへたる人のなきにや。おのれさきに師なる六樹園のちりづかをさぐりて、ざれたる文の草稿をえたり。うはがきにあづまなまりとぞ記されたる。此なまりいかで天神の御姿と仰ぎ奉り、ながく狂文狂歌の守たらん事を望むといへども、いなとかぶりをふりにし錫のくぼみたる德利とともに、棚にあげてひさしかりしを、書肆何がし一日すゝはきの手傳に來りて是を見出し、かゝるめでたきしろものを、むなしく鍋釜いかけのかな壺に入れ置かんやはと、やがてたゝらにかけてふみひろぐる事とはなりぬ。いでやつきせぬ言葉の種がしまに、あづまなまりの玉をこめつゝ、其音たかくひゞかせんとするものは、常に大人の隨筆をねらひ居りて、はづさぬ的の只中なる衆星閣のあるじなるべし。

都手振前編一卷。我師六樹園先生所レ著也。嘗借二鈔其男清澄子一。頃日求二先生一校正一過。乃上レ梓以藏二文庫一云。文化戊辰九月。山本長祥識二于六出園一。

かなと―金門、金のくわんのきにて戸をとざすをいふ
こちなげ―不風流げ

いとなみ作る　わらぐつの　出來あへぬか
　かなとさせるか

歌さへこちなげにて、いと聞きにくしや。そもいかなる人のおちあぶれて、かゝる身とはなりにたるならん。あやしうも樣かはれる女のふるまひにぞありける。

六樹園のあるじ

石　川　雅　望

あたらしき—惜むべき
今こそ名のれ云云—歌舞伎十八番中「景清」のせりふ
わざをぎ—俳優
市川の某—市川團十郎
亥—午後十時
鶴脛—衣を短くして脛のあらはるること
のり—罵り

るゝ人だに無きぞあたらしき一聲なる。北ざまより來る男あり、聲高やかにうちあげつゝ、「今こそ名のれ、某こそ平氏のつはもの七兵衛尉景清なれ。保童の君をかしづき奉り、なき君だちの報せんと、かたちをやつし隱ろへ來しを、重忠がために見あらはされつる念なさよ。よし〳〵、さらば日を過さず軍をおこし、鎌倉へおし寄せ、敵の奴ばらみなごろしにせんず。汝重忠頭を洗ひて待ちて居れ」と、いきほひ猛に叫びいへるは、わざをぎの家に親とすなる、市川の某が聲音をまねび出でたるなりけり。門守の拍子木うちまはるは亥になれるなるべし。かの女ばら、己がじしさうぞき、帶ひき結び、もすそ鶴脛に引きからげて、かたみに名を呼びかはしつゝ、十餘人ばかり一つらになりて宿へと急ぐ。道すがら大きなる聲してうた謠ひ、聞も知らぬ物語しつゝ行くさま、つゆ女しき所ぞなき。或はいさかひ腹立ちて、人をのりつゝ歩く。蕎麥あきなふ男の荷ひたる箱に、風鈴といふ物結ひつけて、風のまに〳〵ゆり鳴しつゝ行くを呼びとめて、立ちながら食ふめり。ひともり、ふたもり、さら〳〵と食ひて、口おしのごひつゝ、いざとて手ひき合ひて、行く〳〵聲ひとしくしぼり上げて謠ふ。

我が思ふ　なにがしどのは　などおそき

心いられ—じれつたさ
ちゝの實の—父の枕詞
柞葉の—母の枕詞
かにかくに—どう斯うして見ても
せな—女より男を親みて呼ぶ語
ものもふ—物思ふ
お足參らん—足を御摩り申しましやう
あぢ、つなし—共に魚の名
しるく—明かに
橘などは云々—萬葉に「橘のかげふむ道の八ちまたに」などあるが如く、古へ市の巷に橘を植ゑし事によりていふ

とうたひつゝ行く。又一人が、

我が兄子が　いざなひ行かば　如何ならん
里へも行かな　率て行かせ　斯く知らませば
ちゝの實の　父やいさめん　柞葉の
母やなげかん　かにかくに　せんすべしらに
息つくを　せなが言へらく　朝鳥の
朝立つがごと　率て行かな　何かものもふ
しかばかり　心よわくて　よけくやはある

とうちゆがみたる聲を艶に聞かせんとて、たかくひきく紛らはしつゝ謠ふめり。市近きあたりなれば、めくら法師の笛吹き鳴らして、「お足まゐらん」などいひ歩く。あぢ、つなしなど鮓につくりたるをも賣りもて行く。また蒟蒻をゆでて味噌つけたるを、鹽梅よしやなど呼びて行くもあり。物さわがしけれど、さすがに夜に入りしけにや、川浪の音しづかに聞え、岸の柳のそよと靡くさへ、うち曇りたる夜ながら、いとしるく知らる。市の中には橘などは植ゑぬを、いづこに宿らんとか、ほとゝぎす鳴きてわたる。されど聞入

身をはふらす―身を持崩す

文珠菩薩の乘物―象

ぎう―妓夫

大どれたる聲―だらしのなき聲

虎てふ神は云々―都々逸「虎は千里の藪さへ走る障子一重がままならぬ」なるべし

つ出で行くを、人々見おくりて、「しやつ、天下の色ごのみよ。あたら男のかゝる者に身をはふらすことよ。晝ならましかば面をも見まし。あなむざん」など譏りいふ。かの男は知らず顔つくりて、耳にもかけず、いづくへかこそ〳〵と逃げて行きぬ。やがて奥まりたる方より女出來て、彼あつまれる人をものしともせず、そこに立ちゐて猶人を呼ぶ。しわがれたるが少し鼻聲なるは、病つきたる女とぞ知らるゝ。そこにある人、「あなけしからず。まみ口つきは、荒海に住む鰐のかほこそ斯かれ。されど物思やすらん、鼻さへ大空をあふぎてをり」などいへば、うしろなる人、「そやつよも女にはあらじ。文珠菩薩の乘物よ」など、さま〳〵惡げなる事いひしろふ。ぎうといへるものは、かの女ばらを率て來て、歸さの道をもともなひ行くものとぞ。あまりにかしがましきに出で來て、「斯かる業も今日の煙立つるなりはひにて侍り。いとなみの妨なし給ひそ」と制す。理にや折れけん、各とよみて右左へわかれつゝ行く。その中に大どれたる聲して、

もろこしの　虎てふ神は　千里なる
藪さへはしる　などや此の　障子ひとへの
まゝならぬ　あはれわりなの　心いられや

痩せさらぼひて—痩せ衰へて

蜘のい—蜘の巣

夜がれせず—一晩も缺かさず

はちふく—甚しく忌み嫌ふ

くは—こは

すまふ—拒む

ましがめづる—汝が愛する

かくれの方—物蔭の方

も見えず。さるは、秋ならずとも露けからましと覺ゆ。裾高くかゝげて小太刀さしたる男のにくい顔したるが、「なににか來けん、馬つからしに」とうめきて、すごく〳〵歸りいぬるは、思へる人に會はぬにやあらん。また痩せさらぼひて杖にすがりたる老法師の、わなゝく〳〵見めぐり歩く。かくても過さゞりけるよとをかし。古博打のうちほうけたるにやあらん、垢づきたる衣著て、海松のごとき帶に手拭さし挾み、木履はきたるが、女のもとに寄り來て、うちさゝやきていふ、「此頃錢といふ物ににくまれて、甑も蜘のいにとぢ、引きかぶるべき衾だになし。さるから日頃經れど來ずなりぬ。人のつてに聞けば、某殿の從者こそ夜がれせず來通ふなれ。面つきをくらべ見んに、おのれいかで彼におとらんやは。わ女、人わきして、錢ある方に心寄せて、人をはちふくこそ惡けれ」といへば、「くは何事をいふぞ、此身は草の原なる屍ぞ。烏の來てついばみ散すを、いかですまふべき」といふ。男、「さないひそ。ましがめづる戀の奴の、今しも來て、つかみかゝりなん、待ちてあれ。さこそ心もとなからめ」などいひ居り。又片つ方には、人たちこみてがや〳〵とさへづりいふ。こゝには女も無きを、いかに斯くは集ふにかと思ふに、かくれの方より、手拭に面をかくしたる男の、走り出で來て、たちこみたる人を押分けつ

古き文―本朝食鑑「夜鷹、夜鷺、宿食而捕食之、山下林樹有之、晝伏不出」
こちたく―ことごとしく
みづはぐむ―いたく老ゆるをいふ
はだら―まだら、斑
あとつけまうき―足跡つけんも物憂き
ひた〳〵と―まともにつく〳〵と

つけたる。これはさる類には様かはりて、家にしもあらず、舟にしもあらず、たゞ大路の隈々あやしき木の下などを尋ねもとめて、しばしの寝屋とは定むるになん。京難波には總嫁といひ、東の方にては夜鷹とぞ呼ぶなる。さるは、晝は臥し夜は行きて鳴くとかいへる古き文の意もて名附け初めたりけん。日入る頃より装こちたく物して、かしこへとて急ぐ。むかしは木綿の黒きを衣とし、白きを帯となして、頭をば手拭に包みていでたちしを、今様はさるまねびをもせず、常ざまの市人の女のごとく見まがへ歩く。若きは稀にて、四十より五六十ばかりの古おうなぞ多かる。みづはぐむまで老いにける身をひきかくさんとにや、額髪のぬけ落ちたるをば墨をもて染めかくし、白き髪をば黒き油したゝかにして塗りかくしつ。されどえしも隠しおほせで、白きがはだらにまじり出でたる、見ぐるしうきたなげなり。げに雪は頭につもりぬるさへ、あとつけまうき色ぞしたる。暮来てぬれば、例の所に立ちて行きかふ人を呼ぶめり。つれなく過ぎ行く人もあり、また近く寄り來て、ひた〳〵と顔をまもり見るもあり。初よりこれをむねと思ふ人は、こゝかしこ立ちも通らで、たゞちに走り來て奥ざまへ入るを、やがて女もつゞきて入る。臥所と見えし所は菰簾かけたれば、夕月夜のさだかならぬには、あらはにし

松も昔の友ならなくに」
いなごまろ—いなごに似たる蟲
はた〳〵—蜈蚸、ばつた
すさみ—慰み
唐國の某—支那の車胤窓下に螢火を以て書を照し讀みし故事をいふ
よからぬ人—賤しき人
御くるわ—御本丸
おき奉りては—外にしては
人の國—田舍の地方
まらうど—客

かぎり竝べ置きたる、やう〳〵さま〴〵にて、いくそ度見めぐらふもあかぬ心地す。又かたへに小き籠をいろどり、それにくさ〴〵の蟲を入れて賣る。いなごまろ、はた〳〵、松蟲、鈴蟲、猶こゝらの蟲あめる、ひとしく競ひ鳴く。生絹もてはれる箱に、螢あまた集めたるを見ては、「色ごのみの家のすさみも斯かりけん、唐國の某が窓やいかなりし」などいふもあり。「蟲のしや尻に火のつきて」とのゝしり通るは、よからぬ人とこそおしはからるれ。兎角するほどに日も暮れぬ。いそぎ御堂に詣でてねんごろに伏しをがみて下りつ。御くるわ近きわたりにては、この御佛をおき奉りては、藥研堀といふ所にたゝせおはす不動尊、さては白銀の町にまします觀世音、この三所ぞ參りつどふ人もおほく、また植物などあきなふ人も、共にひとしく覺ゆる。げにはるかなる野山の草木をひとつ所にあつめ見んは、人の國にてはいとも難き事なるを、何事につけても、事たらひぬる都の樣ぞかたじけなきわざにはある。

よたか

沖つ舟よるべ定めぬをうかれ女と呼び、家にありてまらうどを待つをばくゞつとぞ呼び

九日を待ちあへで云々―九月九日は重陽にて菊は其節物なり

かき數ふれば七草の花―萬葉、上の句「秋の野に咲きたる花をおよび折り」

苦丹―實物不詳

もとの心―古今集「秋萩の古枝に咲ける花見ればもとの心は忘れざりけり」

あなかしがまし―古今集「秋の野になまめき立てる女郎花あなかしがまし花も一時」

秋このむ宮―源氏物語中の秋好中宮

誰をかも云々―「誰をかも知る人にせん高砂の」

も忘れつべき心地ぞする。また夏におくれて咲き出でたるも猶おほかり。くさのかう桔梗、龍膽、紫苑、苦丹、薔薇など何れかまさりおとりやはある。されど昔より物の名にのみいひつけつゝ、その様を顯證に詠み出でぬぞ本意なき。かき數ふれば七草の花ぞことに見どころはおほき。藤袴のにほひたちあがりたるは、常ざまの花にも似ず、誰が佩物にやすらんといとゆかし。あるは古枝に咲ける秋の花、もとの心は斯うもあらまほしと思はる。また朝顔を根ごめに移して、さかり久しかれなどいはふも、とりどりにをかし。高やかに咲きみだれたる女郎花を、人々集ひつゝきそひ買ふ。あなかしがましとひとり笑ぞせらるゝ。姫百合、撫子などは、人めきたる名なるを、犬蓼、ゑのこ草としも名づけたるは、いかに思ひくたしたるにや。鳳仙花、鷄頭草などは名のみにしもあらず、形さへこの國の物とも覺えず。そも秋このむ宮の御前はいかなりけん、遍昭が庭のつくり様はいふにもたらじ。嵯峨の大井のわたりは、いまだ行きいたらざれば知らず、あたりちかき武藏野の原といふとも、げにけおされつべき秋のいろなり。うしろの方に大なる松を根こじきたるが、さかしらに高砂の松と書きて下げたり。今日しも知らぬ人に引きとられて、誰をかも知る人にとをかし。そのほか、竹、椶、柊など、常磐木の

いづこも同じ—後拾遺集、良暹法師「淋しさに宿を立ち出でて眺むればいづこも同じ秋の夕暮」
かごかなる—幽閑なる
折にあひたる—季節にふさはしき
さうぞき—裝ひ
鎖—鎖橋、日本橋區茅場町と蠣殼町との間に架す
貫之に云々—紀貫之の土佐守の任滿ちて海路京都に歸る舟中、海賊を恐れたる事、土佐日記に出づ
白波—盜賊

やくし堂

いづこも同じなどつゞけたりしは、片山寺のかごかなる所にてこそ詠みためれ。玉しける都の中は、なべて所狹う人の行きかひ賑しうて、秋とだに知らぬ人も多かり。女どちは折にあひたる色の綾薄物、己がじし好心にまかせてさうぞきつゝ、男方も今樣の一重衣うるはしう著なし、扇とりて夕暮おそしと待ちとりつゝ出でたつ。下つ方はとりあへたる儘の湯帷子に、帶しどけなげに引結び、老いたる若きうちまじりて、道さりあへぬまで押合ひつゝ行く。なにしに斯うはと思ひめぐらすに、鎖のわたり近き所におはす藥師佛をがまんと行きつどふなりけり。人ごとにいさみ立ちて、そゞろに思なげなるおももちなれば、あり煩ふ人としも見えぬを、さる御佛たのみて何事の祈するにかとをかし。こゝに海賊の橋といふあり。貫之に見せましかば、渡りも果てず逃げなましとをかし。されどしづけき御代とて、いさゝかの白波だに立ちわたらぬぞ尊きや。橋より南ざまに折れ行けば、いづこの野山よりか持て來にけん、さま〴〵の木草數知らずならべ置きてあきなふ。こゝらある中にも、九日を待ちあへで咲き出でたる菊の花、うち見るより老

うるまのいも—琉球薯
すが〳〵と—眠らずさつさと
うちはたる—催促する
大どれたる聲—たわいもない聲
けうとく—人げうとく
例は—いつもは
いづれかさして—古今集「世の中は何れかさしてわがならん行きとまるをぞ宿と定むる」
天地は云々—李白、春夜宴桃李園序「天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客、浮生若夢、爲歡幾何」

をなん忘れにたる。某の宿にていこひし時、うるまのいも各二つづつもとめて食ひたりき。そはおのれ錢を代へ置きつ。すが〳〵とおこしめせ」といふ〳〵、寝たる人をさへ起す。「明日こそ物せめ。ねむたきに」と侘ぶれど、えしも許さで、うちはたるも情なけなり。ほどなく無緣寺の鐘きこゆるは、亥の時にや、おの〳〵うちやすみたりけん、音せずなりぬ。疲れし晝のなごり、夜一夜大どれたる聲して、寝言とか互にのゝしるもけうとく、例はあなかしがましと聞きつる壁の中なるきり〴〵すさへ、けおされたるにや、音たてぬやうなり。明くれば朝餉疾くしたゝめて、己がじし心々に行きわかるめり。「けにいづれかさしてと思ふにも、旅ばかりあはれにをかしき物はまたあらじはや。唐人の詞に、天地は旅のやどりなり、行きかふ月日は旅人の如しといへり。されば生れに生れたる人、誰かはとこしなへに此やどりに留り居らん。浮生は夢に似たり、ようなき財に心をかけて、草枕旅寝の窓より浮びたる雲をのぞまんは、いとゞ愚なる心にこそ」と、その夜やどりし山伏法師のうちひそみつゝ語りたるを聞きて、ふかき心のゆゑよしは知らねど、げにと目さむる心地こそせられしか。

まり—椀
折敷—片木板を折り曲げて製りたる盆
あはせ—さい、おかず
衣手の—常陸の枕詞
なでふにもかでふにも—どうにも斯うにも

などうたふ。猶あかずや、皆立ちて舞ふ。

盆の十三日に　舞人はそろひつ
稻の穗よりも　いとよく揃ひつ

拍子とる度に、「やとせのせ」と打囃しつゝ手うつさま、鄙びたる物から、見知らぬ目にはめづらしく、興有りてをかし。こなたに並み居てゆふげ食ふ人は、信濃の國の人とか、大きなるまりに飯たかう盛りたる、さながら越の白山を折敷の上にうつし据ゑたるやうなり。あつものの汁一口にすゝりて、あはせの魚、頭も骨も殘りなく食ひつくしつ。さていへらく、「腹をそこなひて日頃になり侍る。心地あしければ、自然に飯はむも甘くもあらず。今宵たゞまりに五つばかりを食べぬ。かばかりにてはいと心細しや」とて、伏目になりていふ。かゝる人の心ゆくばかりものせば、いかばかりの飯をや食はまし。いとおそろし。隔てたる障子のあなたに居るは、衣手の常陸人なり。うちゆがみたる聲してさへづり言へるは、「今晩ないたく困じにたり。なでふにもかでふにも、脛いたくて動くべうもあらず。うちそべりて聞えん、許しめせ」とて、端ざまによりて臥しつ。とばかり有りて、つい起上りて、目を大きになして、雷の落ちかゝるばかりの聲して、「大事

あいなだのみ—空だのみ
ひきじろひて—ずる〳〵に引き延し〳〵して
ふぐり—陰嚢
すゞりもじり—體をひねくりまはして

黄金貸り出でたれど、たゞ朝霧の日にむかひたるやうに、時の間に失せにたり。返すべき期もよく知りぬれど、持たらねばいかにせん。たゞかの人の死にもやすると、はかなきあいなだのみにひきじろひて、年頃を過し來ぬ。さるを、こたび村長のあつかひ物すとて、いたくおのれを責めさいなみて、今年のほどに、此こがね殘りなく返しやりねといひおきてたるぞ理なき。此こがね、もと村長の貸し與へつるにもあらぬを、しかばかり腹立ちいふなるは如何なることにか。村長若しめぐみの心あらば、隣の人をいさめて、百年千年過ぎんまでも、なだらかに待ちてあれとこそ言ふべけれ。無き物つぐなへと責めいへるは、尼御前にむかひて、ふぐり出せといはんに異ならず」と、頭うち振りつゝつぶやく。たかどのの方に、がや〳〵と人の聲するは、越の國人なるべし。三四人つどひて酒飲みあそびて、いたく醉やすゝみけん、からき聲しほり出でてうたふ。それが中に、わかき男の立ち上り、扇とりてすゞりもじり舞ひ踊る。その歌は、かしこの國ぶりなりけり。

酒をたうべつ　五勺の酒を
一合たうべて　醉いやましぬ

こよろぎの磯云—風俗「こよろぎの、磯立ち馴らし、磯ならし、菜摘む、めざしぬらすな、ぬらすな沖に折れ、をれ波ヤ」

わかめかりあげてん—萬代集「わかめかる春や來ぬらんこゆるぎの磯のあま人浪にまじれり」

玉垂の云々—催馬樂「我家」を採る

ねぎ—願ひ

だみたる聲—訛れる聲

調度—手まはりの道具

人わろし—外聞惡し

口附の男—馬方

あし—錢

咲みまけて—にこにこ笑ひて

まぶしつべたましき男—目附の恐ろしき男

かしげなり。外の方に女どち七八人、老いたる若きうちまじりて、足ひきながら入り來ぬ。あるじ、「いづこよりぞ」と問へば、「こよろぎの磯近きわたりより」といらふ。「さらば御肴とりにわかめかりあげてん」と立つを、「さる物はねぎ侍らず。玉垂の中はかしこし。人げとほくだにあらば、菰簾中にすゑ給ひても」と、うち笑ひていふ。田舍びたれど、さすがにつゝましううちしのびて、だみたる聲人にきかせじとにや、言少にもてなしつゝ、さし出でたる盥に足さし入れて洗ふ。調度めく物はつゝみにつゝみて馬に負せつるを、從者はこれに乘りておくれ來つ。何事にかあらん、下りざまに馬ひきたる男と諍ひてのゝしり騷ぐ。わかき人はあきれて手まどひしつゝ、みな逃げて入りぬ。乳母にや、おとなしき女の出來て、從者が手をとらへて、「人わろし、物ないひそ」と制して奥ざまへ率て行く。「都人の思ひいはんもはづかし。旅の空にて、かゝる心はつかふものか。ようせずばかの男に打たれやせまし。あさまし」とて、口々從者をあはめ責む。口附の男は、あし思ふさまに得て、咲みまけて馬ひきて歸る後でもにくしや。一間なる方には、髭生ひこえて、まぶしつべたましき男、一人諸手くみ、頭うちかたむけて、壁にむかひ居り。問はず語するを聞けば、「おのれもとより家遠くして、さきに隣なる主にこゝらの

うらなし—裏をつけぬ草履

やはぎの市—催馬樂、貫河「親さくる夫は、ましてるはしも、ましかしあらば、矢矧の市に、沓買ひにかん」

まびろけれど—寬けれど、まは發語

夜の物—寢具

伊勢の濱荻云々—萬葉集「神風の伊勢の濱荻折伏せて旅ねやすらん荒き濱邊に」

鶉脛—衣をまくりて脛のあらはるゝをいふ

天さかる—鄙の枕詞

笥—入れ物

椎の葉に盛る—萬葉集「家にあれば笥に盛るいひを草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」

旅は妹こそ—風雅集「歸る雁我もことづてむ草枕旅は妹こそ戀しかりけれ」

障子にも、筆太におなじこと書きたり。簀子の下に解きすてたる藁沓、うらなしなどいくらともなく重りあるは、やはぎの市も斯うぞなど覺ゆ。あるじにや、しも男にや、町の辻にたゝずみ居りて、旅人の過ぐるを待ちつけて、「宿とり給ふや」など問ひきく。「知りたるやどり有り、かしこへ」などいへど、なほ追ひ來て、「かしこはまびろけれど、人居こみて所狹う侍り。わが家さゝやかなれど、合宿の人もなし。疊夜の物も皆きようにし置きて侍る」など、樣々にこしらへいふ。始はいなみぬる人も、すかし責めらるゝにし侘びて、しぶ／＼に彼に引かれつゝ行くもをかし。軒のはしに、菅笠たかく掛け置きたるは、おくらかしたる友を待つ目じるしとぞ見えし。これらはみな、伊勢の濱荻折りふせて、旅寢せんと出立ちし神詣の人にぞありける。湯あびんとにや、はだか鶉脛にて、三四人ひき連れて、湯屋たづねさまよふもをかし。すべて天さかる鄙人にしあれば、家に有りては、粟稗などをのみ食物とはすめり。さるを、よくしらげたる米の飯、笥に盛りて喰ふ。椎の葉に盛ると詠みしには、樣かはれる旅のやどりなり。奥まりたる方に居るは京人にや、ながき旅路にいろは黑みたれど、さすがに其きは見えて、なだらかにもてなしつゝ、日記のやうなるもの取出て讀みなどす。「旅は妹こそ」など打誦しぬるもゆ

大君は云々—萬葉集に出づ

かたみ—筐

大君は神にしませば水鳥のすだくみぬまを都となしつ

とは、あがりたる世に詠みたりけん。げに野中ふる道あらたまりて、いまぞ都とそなはれる中に、くらかけの橋の左右は、なべて人やどす家たち續きて、いと〳〵にぎはゝしき所になん。このあたり昔は海につゞける入江の沼なりとか。今はさるおもかげだに殘らず。橋より北ざまを、ばくろの町と呼べり。其かみは、古りたる寺ならびありて、さびしき草の原にして、橋の南は六本木とて、中つ世の驛路とぞ。今はこてまの三の町とぞいふなる。元祿の頃ほひまでは、人やどす家ども、この三の町に僅に十ばかりありしを、おなじ六年といへるに、信濃國なる善光寺の御佛をもて來り奉りて、本所なる回向院にて拜ませしに、世の中ゆすりて、これに詣づる人おほく、とほく田舍のうば翁まで數知らずつどひ來て、此のやどりに居あまりつゝ、夜も大路にむしろ敷きてぞあかしける。この頃より斯るなりはひする者やゝ數まさりて、遂にばくろの町のわたりまで住みわたり、營することとはなりぬ。今の人、これをはたごやと呼ぶ。そもはたごとは、まぐさ入るゝかたみ、あるは旅行く人の持てる籠などの名なりけるを、いかなる故ありて、斯うは呼びつけたるにか。家居のさま、門ごとにあるじの名を記しつけたる札をかけ、明

大君來ませ―催馬樂「我家」中の句「とみ講の市」の條に註す
われもの申す―萬葉集「いしまろに我もの申す夏痩によしといふものぞむなぎ取りめせ」
あらたま云々―すしやの看板
破れたる芭蕉を云々―いがらしを冬の風に洒落たるなるべし
つき〳〵しう―似合しう
まゝ―乳母
夢のわたりの浮橋―世の中のはかなくして渡り難き[illegible]に云ふ

の不動尊にねぎ祈るなりけり。手ごとにわらしべを持ちて川になげうつ。流るゝをよしとし、たゞよふを惡しとすとなん。こと果てぬれば、おのがじし衣著さわぐに、猶若きものは、こなたかなたうかび、かづき出でて遊ぶもいとあやふし。すべてこの橋の前うしろには、ひまもなく商人の家立ちこみて、大君來ませと呼ばへる軒には、鮑さだをかきら〳〵しう、われもの申すといひたる家には、夏痩によき鰻もありぬべし。あるは虎てふ神を木もて作りすゑ、又あらたまを障子に畫きて、外の口に立てたるもあり。いがらしと名のるものの家にさしむかひて、破れたる芭蕉を壁にゑがきたるは、つき〳〵しう見ゆれど、おぼろといへる豆腐ひさぎて、あかしと名のりたるは如何ぞや。此ほか、餅を幾世の名にことぶき、煎餅を羽衣の松になぞらふなど、取出でて數へいはんも、言の葉たるまじうぞ覺ゆる。かゝるあたりを經めぐらひて、まゝと共に遊びさまよひしも、はや四十年の昔とぞなりにたる。げに年月のながれ早きは、この川の瀬に劣らざること、夢のわたりの浮橋をわたりくらべし人は知るべきにこそ。

ばくろの町

達磨大師の坐禪のゆか
野中に立てるひともと杉
からしゝの洞の出で入り
東山の大の字
梢つたふさるまろ
餌落したるやまがら
住の江のそりはし
松に這ひたる藤波

猶こゝらあめり。さて長く引きはへたる綱の上を、傘さしてわたる。ながき紙の上をもわたるに、みな足ぶみを拍子にあはせて踊る。見る人あざみ興ぜざるはなし。事果てぬれば、したゝかに太鼓うちならして、「もと見し人はかはりね」と呼ぶ。遣戸一つあけて人出すに、押しあひて出でもやられず。ほと〳〵しりなる人に皸も踏まれつべし。むかひなる川づらには、水にひたりて十餘人ばかり、聲そろへて何事にかあらん、高らかに唱ふ。こはおもきばうざを救はんとて、垢離といふ事おこなひて、相模國なるあふり山

大の字—大文字
さるまろ—猿
住の江—山城國東成郡にあり、後には住吉と稱す
こゝら—許多
あざみ—あきれ驚き
しりなる人に云—神樂歌、早歌「あかゞり踏むなしりなる子、我も目はありさきなる子」
ばうざ—病者

なごりなう―すつかりと

半臂―束帶の時袍の下に著る袖無しやうの短き衣

竹のうら―竹の末端

手足まであまたの絲もてつけて、うたひ物に合せて、絲引きあやどり使ふを、南京のあやつりと名づけて、むかしよりこゝにて行ふ。をさなき者は皆これに心よせつゝ、つどひ寄るめり。柳の橋の方に添ひて、殊にたかやかに假家つくりたるあり。京くだり某の大夫と、いかめしく旗に書きたり。これも外の方に繪をあまた書きてかゝげ置きつ。入りて見れば、袴をばぬぎて上ばかり著たるもの三人ばかり、笛鼓うちはやす。耳もとにいさゝか鬢の髮のこして、頭なごりなう剃りすてたる翁の、おなじごと上ばかり著たるが、見る人に向ひてざればみさへづりいふ。かの大夫、頭に鉢卷といふもの後ざまにむすびて、手足みな赤き絹におしつゝみて、半臂のやうなる物著て出で來たり。見る人にむかひて、ひざまづき拜して、さて太く長き竹の三丈ばかりもやあらんと見るを中に立ててあるに、すら〱と上りて、竹のうらに身をとゞめて、扇取出てうち煽ぎたるさま、いとやすげなり。竹は右左になびきて、いまや落ちなんと、見る人心をのゝき目くれてあやぶみ思ふに、竹を膝にからみて居るさま、常の人の地に坐したらんごとし。さて或は立ち或は伏しあふぎて舞ひ、そばだちて踊る。そのさま一方ならず。これに樣々の名あり。かの翁笛鼓にあはせて指さしいふ。その曲の名は、

かたみ―筐

佐々木の家の幕じるし―四つ目の紋
長命帆ばしら―房薬、房具
だみたる―彩色したる

なうも後を見せ給ふか。馬がへされよ。をう〳〵」と呼ぶに、皆人わらふ。さてかたみなる錢かぞへ見て、「あなうれし、百ばかりあつまりて侍り。いみじき御惠になん」などいひて、缺けたる錢一つ取出て、「これ御覽ぜさせ給へ。半ばかりになりにたり。物惜みし給へる人のかゝる物取出てたびぬ。これもて歸りて鑄物師にあつらへなば、六七文の錢やつひやさん。あなやうなし」などいひて取隱しつ。「さてもますかげもなき君達の御蔭によりて、餓ゑず寒からず、世をいとなみ侍り。常も妻子なるものを敎へいさめていへらく、かならず殿ばらの御惠をあだにな思ひそ、ひとへに親とたのみ奉れとこそいひつけ侍りしか。よう思へば、おのれが親と聞え奉るからは、君だちの爲に、おのれは子にて侍り。さばかりよき子をもたせ給ひて、世のきこえ面目やおはすらん」などいへば、人また例のとよみ笑ふことかぎりなし。さてそこを出でてさまよひ歩くに、佐々木の家の幕じるしかと思ふばかりなる紋つけたる軒あり。藥ひさぐにや、長命帆ばしらなど、金字にだみたる札をかけたり。長命とは不死の藥なるべし、帆ばしらとは何ならん、もしくは風の藥をいへるなぞ〳〵にや。かゝるむづかしげなる藥さへ、その心得て買ふ人あればこそ、なりはひとなして世をわたるなめれといとをかし。又人形を頭より

木づくりの三方
ずさ―從者
らうやく―老藥か
あたはら―疝氣
あくた―胎中に生ずる蟲
むしかめ齒―むし齒
つれなしづくり―知らぬ顔をして
きたなし―卑怯なり

いがさねのやうなる物二つ重ねたる上に乘りて、この太刀をひき拔き、さまぐ＼に打振りて、とみに鞘にをさめなどす。ずさと見えたる男、これも襷ひき結ひて、これはいますこし短き刀をぬきて、ぬしと打合ふまねをす。さてかの人のいへるは、「かゝる太刀打のわざは、たゞ諸人の目をよろこばしめん業なり。まこと我家のいとなみは、藥ひさぐ業にこそあれ」とて、さゝやかなる紙つゝみ二つ取出て、此一つは返魂丹といひて、家に傳へたるらうやくなり。あたはら、あくたの病、或は尻より口よりこく病、舟やまひ、酒やまひ、いづれに用ひても頓にしるしあり。又こなたなるは、齒をみがく藥なり。此藥むしかめ齒をいやし、口の中のくさき香を除く。齒を白くせんことは、殊にすみやかなり」などいひつゝ、錢一つを彼の藥もてみがくに、十日の月の雲間をいづるがごと照りかゞやきて見ゆ。皆人おのがじしもとめつゝ去ぬ。こなたなる葭のかこひの中には、乞食の頭巾きたるが、扇を襟のあたりにさして、上中下の人のうへを面白くまねび語る。うしろの方に、わかき女三四人ならび居て、かい彈きうたふ。とばかりありて錢もとむとて、彈きさし立ちて、小さき籠を人の胸乳のあたりへ持て來てふりうごかす。つれなしづくりて、錢もやらで出でて行く人あるを、かの乞食見て、「權兵衛の尉きたなし。まさ

あざむ—驚嘆する
汝が名はいはじ—萬葉集「荒熊の住むてふ山のしはせ山責めて問ふとも汝が名はのらじ」
みそか事—密通
ゆすりて—大騒ぎして、大流行にて
あぐら—牀几
かたし—一揃の片方
ついがさね—白

て、こたび率て來て、あまねく人々に見せ奉るなり」とて、かの薄衣をとりのけつれば、げにいひしに違はず、顔より手足まで一面に黒き毛生ひ續きて、目鼻のつき所さへわかたず。熊女と名づけつるも理にこそと、人々うちまもりあざむ。斯るかたはにさへ生れたるを、かゞやかしう人あつめて見することよ。彼女いかに侘しとや思ふらん。汝が名はいはじ」とうちたはぶれて出でぬ。むかひなる家は、ことに人おほく集り居り。こゝは女子を六七人あつめて、ふこといへる今様のうたひものを歌はす。こはあだ〳〵しき男女の、みそか事せるがあらはれて、せんすべなく互に死なんと契り語らひし事などあるを、かゝる節物にあやなしゝなり。此頃世の中ゆすりてもてあそび興ずれば、さてこゝにも斯うは設け出でたるなりけり。げに世籠りたる人などの、斯うざまの事に耳馴れゆかば、自然にあだなるすさみに、心やひかれん。女子には聞かすべきものとも覺えず。又高きあぐらに上りゐて、文机のうへには拍子木のかたしを置き、ふるき世の軍物語をまねびいふ。まことにや僞にや、おのが目に見しごと語りなすもをかし。片つ方に人あまたつどひ立てる所あり、何ぞと寄りてのぞけば、くろき筥二つならべ、これにおほきなる太刀二つをかけ置きつ。わかき男の裾ひきあげて襷結ひたるが、高足駄はきて、つ

るに云々」とありて、都鳥の詠あり
大悲者―觀音
ますかげはなし―古今集「筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君がみ蔭にます蔭はなし」
もちひ―餠
家づと―家へのみやげ
むさゝび―形猫に似て、樹上の朽穴などに棲む、聲は兒啼の如し
明障子―紙張りの障子
しはぶき―咳ばらひ

らふべき所だになく、こよなう賑しきわたりになん。川面には葭を編てへだての垣とな
し、簀子だつ物あまた並べて、いこふ人ごとに茶をもてあきなふめり。又同じつらなる
假家つくりて、小弓の射場まうけて營とするものもあり。髮つかぬる家、舟貸す家、も
ちひ、くだもの、酒うる軒など、所狹きまでたち並びたり。すべて名高き商人の家々は、か
ぞへ盡すべうもあらねば、うちおきていはず。此大路の中に、菰簾かけ假家つくりて、外
の方にあやしき繪をかきてかゝげたるあり。肩ぬぎたる男の、戸口に立ちて口に手をあ
てて、聲たかく呼ひいへるは、「こは丹波の國なる奧山にて捕へつる山あらしてふ獸な
り。世に稀有の物なり。前代未聞、又たぐひあらじ。家づとによき物語のたねぞ。見た
らん後に錢おこしね」と聲かるゝばかりのゝしる樣は、むさゝびの大きなるをとらへて、
斯う誇らしげにいふなりけり。その隣も同じすぢなる假家つくりて、薄衣かづきたる女
子を高き所にすゑて、うしろには白き青き紙をへだて張りたる明障子をたてつ。添ひ居
たる男の、扇さかさまにとりて、まづしはぶきを先にたてて、見る人に向ひていへらく、
「此女子こそ、越の國なにがしの村なる狩人の子なれ。殺生の罪の子にむくい侍りて、
斯うあやしき身とは生れにたり。されば十が一つ罪障の消えうせなんよすがともなれと

樂、我家「わいへんはとばり帳をも垂れたるを、大君來ませ壻にせん、御肴には何よけん、鮑さだをかかせよけん」
西寺の鼠―催馬樂、「西寺の老鼠若鼠、御裳つんづ、袈裟つんづ〳〵、法師に申さん、師に申せ、法師に申さん、師に申せ」
うへのきぬ―袍
あし―錢
おぎのり―買入したるをいふ
在五中將―在原業平
遠くも來にけるかな―伊勢物語「猶行き〳〵て、武藏國と下總國との中に、いと大きなる河あり、それを角田河といふ、その河のほとりにむれ居て思ひやれば、限りなく遠くも來にけるかなと侘び合へ

あしいくら、黄金いくらとて、おぎのり借りつるを、八月のほどに購ひ得ざれば、さだまれる事にて、ものかす人の心にまかせて、かゝる所には賣りはたしぬることとぞ。すべて新しきにくらぶれば、古物は價いやし。されどよろしき人のこれを求め買はんやは。買ふもの、うしなひし人、共にまた侘人なれば、かゝる市のにぎはしきこそ、世に貧しき人の絶えざるしるしなれと思へば、例のもろき涙はろ〳〵とこぼれ出づるを、あしたの露にかこちなしつゝ、鳴く音かなしき千鳥の橋をうちわたりて、かしこへ急ぎぬ。

兩國の橋

大江戸より本所へわたしたる橋を兩國の橋とぞ呼ぶ。いにしへこの川よりをちは下總の國なりければ、しか名づけたりと或人いひき。在五中將の遠くも來にけるかなと侘び給ひし隅田川は、此上つ瀬にして、淺草なる大悲者もこの流れより取上げ奉りけるとぞ。富士の嶺はさらなり、ますかげはなしと詠める筑波の山も、手にとるばかり見ゆ。そこら行きかふ舟の多かるは、たゞ柳の葉をこき散したるが如し。夏の頃は殊に舟あまた集ひて、絲竹の音川波にひゞき合ひて、おそろしきまで聞ゆ。げに廣き都の中にも、なぞ

の香ぞする」
[illegible]れしきを─古今集「嬉しきを何につゝまん唐衣袂ゆたかにたてといはましを」
細布云々─袖中抄「陸奥のけふの細布ほどせばみ胸あひ難き戀もするかな」
まよひたるは─織地のよわりたるは
石川のこまうど─催馬樂「石川のこまうどに、帯をとられてからき悔する、いかなる帯ぞ、花田の帯の中は絶えたる」
空蟬─源氏物語、薄衣を脱ぎ捨てて源氏を避けし空蟬のこと
綈袍─あつぎぬの綿入
范叔むかし─[illegible]「一寒范[illegible]」
縕袍─粗末なる綿入
むこの君─催馬

細布は、もの思ふ人や著ならしけん。麻衣の肩のまよひたるは、新防人の褻の衣ならし。花田の帯のなか絶えたるは、石川のこまうどの解きすてしなごりなるべし。うすものの一重を見ては、すべり出でにし空蟬の心しらひを思ひ、綈袍のあつごえたるを見ては、寒きをあはれみし范叔がむかしもしのばる。縕袍のやぶれたるが、狐貉のかはぎぬの中にはまじはれど、とばり帳のあかつきたるには、むこの大君も逃げ目やつかふべき。法師のかくる袈裟にあまたどころ引破りしあと見ゆるは、西寺の鼠の喰ひたるやらん。琵琶の緒に腸たゆといひけんごと、うちつけに亡き人の記念にやと、あいなき衣さへまじりてあり。また今様の湯かたびらに、藍もてさまざまのかた染めたるなど、一つ一つにあけ言はんもわづらはしければもらしつ。男の禮服とすなる物の中に、うへのきぬの袖を切りて、上下と名づけたるものあり。これに次ぎて、ふみこみ、はちょ、もゝひきなどいへるもの、あがりての世人は見も知らぬ物なるべし。かゝるくさぐさの古物をあつめて、馬におはせ、船につみなどして、越の國、陸奥の果までも持て行きて鬻ぎ賣り、それより蝦夷が千島の遠き境にも行きわたることとぞ聞く。かゝるものは、もとたづきなき侘人の、あしたゆふべの煙たてかねて、せんすべなきまゝ、たくはへたる衣取出て、

都の手ぶり

とみ澤の市

藤衣｜賤夫の用ふる葛布にて製したる衣服
まどほ｜織目のあらきもの
しのぶずり｜しのぶもぢずり、忍草の莖と葉とを以てうち亂して摺りつけたるものといふ
いせをの蜑｜伊勢の漁人、潮衣の縁語
ぬしは誰｜古今集「山吹の花色衣ぬしやたれ問へど答へずくちなしにして」
こちなげにて｜無趣味な樣で
昔の袖の香｜古今集「さつき待つ花橘の香をかげば昔の人の袖

大江戸のうちに、とみ澤といへる町あり。朝市とかいひて、そこにある商人のかぎり、つとめてより起きいでて、門の戸にむしろ敷き設けて、ふるき帶なえばめる衣など、いくらともなく積みならべて商ふ。明けはなるゝ頃より、かしましきまで人つどひ來りて、おのが欲しとおもふ物はもとめつゝ去ぬ。新しげなるはふつになくて、紅のうはしらめるもの、紫の灰おくれたる類のみぞあめる。あるは解衣の亂れたる、藤衣のまどほなる、不知火の筑紫の綿、河内女の手ぞめの絲、陸奧のしのぶずり、いせをの蜑の潮衣などさへこゝら見ゆ。そも山吹の花いろ衣、ぬしは誰とも問ひ知るべき。又あさぎ色の木綿といふものに、花橘を染めつけたるもこちなげにて、ことさらに昔の袖の香なつかしとも覺えず。その中に、袂ゆたかなる唐衣は、誰がうれしきをつゝみたらん。胸あひがたき

都の手ぶりのはしがき

赤螺のはらばふ田居も都なしつゝ、こゝらの世々を經ぬるまに〳〵、其の手ぶりの移り變れる事なんさはなりける。此書は石川雅望その手ぶりを一つ二つ書いつけたるが、斯くはなれるなり。其書ける事はさとび事ながら、詞はみやび言にとりなせり。そも〳〵古と今と手ぶりのうつりもて行く如く、ことばもはた變り行くものなれば、今の事を古ぶりに書かんはいと難き事にして、石上ふりにし書らよく見わたして、我がものとせざれば、斯くはなしがたきわざぞかし。たはぶれごと書けるは、思ふ心ありてなるべし。見ん人心あらなん。此はしにいさゝか書いつけてよと、某が請ふまゝに斯くなん。

橘　千　蔭

此書五老石川子所レ著也。余嘗在二東都一時借二鈔某家一。頃日書肆東壁堂乞レ上レ梓レ之。乃校正以與レ之。

甲子孟春

尾張　朝田保清識

裏なし―裏をつけぬ草履

とて開けはつれば、いさゝかの光だに見えず、ほろ〳〵とこぼれて落つるものあり、寄りて見れば、ふるき藁屑、平足駄、足袋、裏なしなどの破れほころびたるが。こゝら入れてありけり。人々さて〳〵といひて、あざみおどろきて、あきたる口をふさぐ者もなし。この男のけしからぬ事思ひつきぬるを、早う狐の知りてにくがり、斯う化したりけるとぞ、浦の者どもはいひける。物羨せんはよしなき事にこそ。

かづきするわざ―水をくゞる業

鰹つりに鯛つりに―萬葉集、浦島の長歌に出でたる句

樣ある―何か仔細のある

なりなんとて來つるを、さてはかひなしなど思ひ居り。やをら歩みて外方に出づれば、門のあたりに水母といふものの居ていひけるは、「わぬしの膽をとりて乙姫君の御藥にすなりといふ事聞きつ」といふ。さば我を猿と思ひたがへつるなめりと、そゞろに恐しくて、いかにもして逃げて出でなまし、さもあらばあれ玉の箱といふもの盜みて取り持ち行かましと思ひて、その夜しのび入りて、からうじて玉の箱ぬすみ出しつ。さて桑土を越えて出でけるが、もとより海邊に生立ちて、かづきするわざはよく練じたりければ、浪かきわけつゝやう〳〵もとの濱邊にかへり出でたりける。浦の者ども見て、「いかで歸り來給へる。人に聞けば、鰹つりに鯛つりにとはいひ侍れど、七日まで見えたまはざれば、やすからぬ事ととり〴〵申しき。まづ手に持ち給へるものは何ぞ」と問ふ。「これ龍宮にてとり得て來たる玉の箱といふものなり。いみじき寶なり」といへば、「さぞ侍らん」とうち見て、「龍宮のものならば光かゞやきなんを、これはいと古代なる物と見えて緣なども缺け損じ、漆も所々はげ落ちて見ゆるなり。されど樣あるものにこそ」といふ。この男箱をあまたゝび押戴きて、「いで開きて人々にも拜ませてん。そこら光りかゞやくべければ、ようせずば眼くるめきなん。その心せよ」とて、結びたる紐解きて、「さは開くぞ」

しれたる男—愚しき男
したゝかなる—大きなる
こりずまに—懲りずして
いざたまへ—いざ參り給へ
まなしかたま—目無籠、目の無きまで密に編める籠
三上山—近江國甲賀郡三上村にあり、俗稱、蜈蚣山
海士が乳の下に云々—海女が龍宮の玉を奪ひて乳の下をえぐりかくせる傳說

の聞えん、烏帽子にふすま一筋かゝりて侍り」といひける。おなうたてしやな。
○丹後國にしれたる男ありけり。浦島が子の事をつたへ聞きて、我もいかで龍宮に行きて見んとて、つねに濱づらに出でてさまよひ歩きける。龜の伏し居るを見て、これや龍宮の案内かとて、甲の上に乗りつゝみけるが、肥えふとりしたゝかなる男なりければ、龜は押しにうたれてひしげ死にけるも多かりき。されどこりずまに海邊に出でてさまよひ歩きける。或日あてやかなる女出來て、「我は龍宮の使なり、いざたまへ」といへば、うれしくて、「いかにして行かまし、まなしかたまやある」と問へば、女たちまち大なる龜となりて、沖の方をさして歩むを、心得つとてやがて乗りて行きけり。さて龍宮にいたりて龍王の御前にまゐりて、「我はいみじきつはものにて侍り。三上山に住める百足なりとも、やすく射おとしてまゐらせん。また海士が乳の下にかくせる玉など取返さんことは、ことにもあらず侍り」など、さま〲誇らしきことを並べて、言よくいへども、龍王たゞむゝと笑ひてのみおはさうす。聞きしには様かはりて、めづらかなるまうけだに無ければ、すさまじと思ひて、しぞきて一間なる方に出でぬ。さて女童の過ぐるを呼びて、「乙姫君は」といへば、「此頃おもき御なやみにて、引籠らせおはしぬ」といらふ。我は蛸に

てをあれ—「を」は強勢の助辭

人わろし—きまりわるし

藁とばし—藁とは、ばしは添辭

てゝき—父君

○某の入道といふ人あり、人の許より柳のおろし枝をもらひて、これ庭にさして生ほしたてばやとて、つかひける童にいひつけて、垣のあたりに插させつ。さて、「子どもなど入來て抜きもぞする、よく守りてをあれ」といひつけ置きぬ。童その日より簀子に机もて出でて手習しつゝ、柳まもり居り。七日ばかり過して、入道庭に下り立ちて、「此柳小供や抜きなましと思ひつるを、さもせざりけり。怠らずまもりけるかひあり」とて、童をほめけり。「さるにても、夜の間に子供の入來て、ひき抜かんには、知りてとがめんやうもあらじを、かしこくも夜入り來ざりけるよ」といへば、童したりがほに袖かき合せて、「さにて侍り。夜の間に抜きとられんには、守りつるかひなしと思ひ給へて、例も初夜過ぎぬれば、引抜きて筥にをさめて、夜明けて後ぞ插し侍りつる」といふに、入道もあきれて大口ひろげ、きたなき歯むき出して笑はれけりとか。おなじ童まだ入道のもとに參り來で、父のもとにありける時、貧しくて衾だになかりければ、夜は藁を敷きて臥しける。童人の前にても、はゞからず藁に臥すことをいひければ、父ひそかに叱りて、「人わろし、藁とばしな言ひそ。衾著て寢たるふりせよ」とぞ教へける。或朝父起出でて、賓客と物語して居けるに、烏帽子に藁蘂のかゝりてありけるを、童見つけて、「てゝきにも

別當—檢非違使
風病—風邪
おれ—おのれ、汝
うしろで—後つき

らぬ非なり。別當の廳に申して憂きめ見せてん。おのれ誰ぞ、名のりせよ」といへば、翁かしこまりて、「やつがれまことは番人にては候はず、むかひなる家の門守にて侍れど、只今のほどしばし小屋のあたり心つけ見てあれと頼まれて侍り。さるを名を問はせ給ひて、怠りを責め給ひなんには、まことの番人の出來んを待ち給ひて問はせ給ひね」と申す。「さらばまことの番人はいづくにある」と問へば、「一人は風病おもきに堪へで、親の家にかへりて侍り」といふ。「されど二人と定まりたる番人なれば、いま兩人はいかで此處にはあらざる。いづくに行きたる」といへど、翁たゞおぢかしこまりたるのみにていらへせず。「いかにや、おれ知らざるやうやある、いへ〳〵」と責むれば、翁やう〳〵に頭をもたげて、「申すにつけてははゞかり候へども、せめて問はせ給へば告げ奉るなり。御供に具し給ひて、御太刀持ちたる者と大傘持ちたる男こそ、こゝの番人には候へ」と申せば、すこしをかしくなりけれど念じて、「いかにまれ、番すべき者の小屋にあらざるこそ、ゆゝしきくせごとなれ。ふたゝび斯かる事あらば廳に申さんずるぞ」といへば、太刀持、傘持と二人、額地にうちつけて、「此後さる事仕らじ、今日ばかり斯くて侍りなん」とぞいひける。うしろでをかしとはよのつねなりきと、見たる人の語り傳へけるとか。

はるけ—晴れ

鬢四間—閔子騫

したなめ—見下げ

ついゐてぬかづく—其儘坐つて叩頭する

さる廣きところなれば、さばかり髮ながき人もあらざらんやは。わぬし論語をば讀みたるべし。かの書に、顔淵髮四間とこそ見えたれ」といへば、わらは、「げに〳〵」といひて、うなづきけるとか。

○袴垂といふ盗人所々おし入り、人をころし物を盗むなりとて、都の辻々一町ごとに小屋つくりて、夜晝三人づつまもりてあれと、檢非違使の廳よりふれ知らす。なほ番のもの怠りもぞするとて、下司晝夜見めぐらひて、番人の數をあらたむべきのさだめになりける。これによりて下司に人あまた添へける中に、いみじく貧しき人召されてこの役にぞくはゝりける。大によろこびて、昨日まではしたなめ譏りける者どもに、いきほひつきたるほどをも見せましなど、心にかまへ居たり。さて見めぐり歩くには、從者三人ばかり具すべき例なるを、この人從者のなかりければ、俄に人をやとひて引連れて出でける。我家の近きあたりに番の小屋ありけるを、近寄りて、「番人やある」と呼べど、いらへするものなし。いらちて大聲に呼べば、むかひなる竹垣の門の中より老いかゞまりたる翁出で來て、ついゐてぬかづく。「おのれ番人か」といへば、「さに侍り」といらふ。「いかで小屋をあけて番せではあるぞ。おほやけの仰せごとを輕々に思ひてある、かろか

おほどかなる御もてなし—おほやうな御振舞

そばれ—ふざけ、源氏に「若き人々そばれとりくふ」

御おろし—おさがり

まゝ—おまえて乳母を呼ぶ語

學生—大學寮の學生

白髮三千丈—李白、見白髮詩「白髮三千丈、緣愁似箇長、不知明鏡裏、何處得秋霜」

おほざうの博士—大だつた學者

事かはりぬれば、萬おいらかにしづまらせ給ひ、おほどかなる御もてなしこそあらまほしけれ。たとひ菓物など人々まゐらせ奉るとも、つや／＼見入れ給はで、ほしげなる御もてなしなし給ひそ。菓物などそばれとり食ふ人は、まだ袴なども著ぬ人の上にて候ぞ」などいさめ聞ゆれば、うなづかせ給ふを、いふかひありと嬉しと見奉る。さて四五日を過して、御母君の御おろしとて、乳母一間なる所にて栗をむきてほろ／＼と食ひ居けるを、姫君見つけ給ひて、「まゝはいかで裳著のよろこびもまだせざりしや」と、たち走りおはして宣ひけり。女房たちも、おとがひをときて皆わらひけり。

○學生源廣が家に童あり、常に主につきて文讀むことを習ひけり。或時家のおとなにむかひて言ひけるは、「もろこし人は凡てあらぬいつはりごとをぞいふなる。學問の道はなか／＼世に用なし」といふ。おとな、「何事のありてさはいふぞ」と問へば、わらは、「今ほど李太白集を讀みて侍るに、白髮三千丈といへる句あり、これ限りなきそらごとならずや」といふ。おとな、「あらず、わぬしがものまなびすることの足らざれば、さる疑ひも出來るなり。いま大學に入りておほざうの博士の御まへにて學問して見よ。さるうたがひははるけなん。そも／＼かしこは我日本にはまさりて、國も四百餘州ありとか。

しこめたる—にて圍みたる

あながちに—遮二無二に

しれ〳〵しき—甚だ愚かしき

裳著—女子の裳の著初式

しと思ひて、指につきたる笛さながら打振て歩み行きける。道に竹垣しこめたる家ありて、絶え〴〵琴の音のしければ、ゆかしくて垣間見せん所もがなと、見めぐりて竹垣のすこし隙あるところを見つけて、諸手に押しわけ、頭さし入れて見れば、卯花たかやかに咲きみだれてよくも見えねど、簾すこしみじかく巻上げて、女四五人居たり。何事にかあらん打笑ひなどするを、目もはなたずのぞきてあるに、奥の方より人の出來て、何事か告げきこゆれば、簾おろして皆入りぬ。いとなごりなく入りにけるかなと、興なくて歸らましと思ひて、首引きいでんとするに抜けず。始あながちにくゞり入りて、諸手に竹を押分け居たりけるゆゑにや、繩つよくしまりて抜けず。さりともと悶えければ、いよ〳〵強くしまりて、今は喉もくびるゝばかりになりぬ。くるしさに、うゝとうめければ、主なるべし、「竹垣のもとに人の聲するはなぞ」とて、近づき寄るを見て、この侍大なる聲して、「いかにこの竹垣我に賣りたうびなん」とぞいひける。よく〳〵あわてたりけんとをかし。

○むかししれ〳〵しき姫君おはしけり。御裳著のよろこびの日とて、女房達そゞき合へり。乳母なりける人、姫君にむかひ參らせて、「御裳著初めさせ給ひては、昨日までとは

ていも寢ず、ひぢ枕して寢ねんと思へど、もしこの足駄の枕せずして明日觀世音に參りなば、御罰やかうぶりなん。如何にせまし」といひける、いと幼くいとほしかりけり。

○琵琶法師の人のもとに呼ばれて、夜いたく更けて歸り來ける道にて、ゆくりなく夕立の降り出でけるに、簑笠もなかりければ、しとゞに濡れつゝいそぐを、雨はなほ小止みなく、神さへ鳴りはためきて、わびしき事かぎりなし。手をあはせて大空を拜みつゝ、南無八大龍王、此雨しばし止めたうびなん、と打祈りつゝ行く。野中なれば、立寄るべき木蔭だになし。雨はたゞ降りに降りて、盆の水うちかたぶくるやうに降り來て、顏かしらにあたるだに痛さしのびがたし。法師衣ぬぎ、たふさきばかりになりて大地に坐し、白き眼大きに見ひらきて、空をにらみ聲あげて言ひけるは、「降れかし降れかし、たゞ降りに降れかし。めくら法師一人雨にうちころしたらん、いみじき高名ならん」とぞ呼はりける。心ひがみぬる者は、あるまじき事をも言ひけり。

○えせ侍、加茂祭の歸さに、商人の家に橫笛のありけるを取りて見つゝ、ふと人さしのおよびを口にさし入れけり。拔かんとすれど拔けず、つよく引けば指いたみて堪へがたかりければ、「この笛我買ひてん」といひて價をやり、家に歸らば笛うちくだきて取らま

神—雷
たふさき—犢鼻褌
人さしのおよび—人さし指

あうなく―深き慮もなく

人わろかりなん―人前が惡からん、人に對してきまり惡からん

かゞやかし―きまり惡し

初瀨―長谷の觀音

あらたなるしるし―あらたかなる御利益

平足駄―高足駄に對して低き足駄をいふ

りけん、いといぶかし。

○貧しき人ありけり。睦月のよろこびまうしに出で立たんとて、從者のなきまゝ人をやとひに遣りたりけるが、具して來つる者を見れば、衣やれ垢じみて、いときたなげなれば、「斯くては人わろかりなん、著かへて來」といへば、「此ほかには衣もちて候はず」といらふ。「さらば供に具せんもなか〳〵かゞやかし。今は用なし、歸りね」といへば、やとひ人、「衣の見ぐるしくて人わろしと思さば、道のほど一二町ひきさがりて御供つかうまつらんはいかに」とぞいひける。さるにても、具せざらんにはまさりなんや知らず。

○初瀨はあらたなるしるし見せ給ふとて、都鄙をいはず詣で來る人おほかり。十七八日のころ椿市のわたりは、宿かる人居込みて押しあひたり。宿のあるじ、今宵は殊にまらうど多ければ、かし參すべき枕たらはず、いかにせましと思ひけるが、きと思ひつきて、隣なる木履賣る家に行きて、平足駄など借りもて來て、枕にかへてまらうどに出しつ。おの〳〵寢しづまりて後、十ばかりなる童の枕のたふれて、目のさめければ、またとり寄せて、頭うち載せて眠りけるが、やゝ寢入りぬれば、また枕すべりて目をさましつ。かく幾度となくたふれて寢られざりければ、その父を呼びおこして、「夜一夜枕のたふれ

さうなき—類なき、無雙の

こち〳〵し—不風流なり

かしこからん云云—書經「玩人喪徳、玩物喪志」

北面—北面の武士、院の御所を守護する武士

つきもなきに—突然に

まうと—あなた様

ほこりて見せけり。乳母の夫なりけるもの、此頃田舍よりのぼり來てありけるが、とり見て、「この硯はじめもとめ給ひし時、いかばかりの價をか出し給へる」と問ふ。守、「こがね百兩もて買ひつ」といへば、舌をしゞめ、そゞろに身をふるはしつゝ、「さて〳〵おそろしきまで尊き價にも侍るかな。そのもとをたづね侍れば、これ土もて作れるものにて侍り。かうさゝやかなる物にしもこがね百兩の價ありと承り侍れば、去年もとめて我家にすゑて侍りし竈の價こそ、こよなういやしく安きものには侍りけれ」といひける。田舍人の心には、さも思ひつべし。斯うざまのことを聞きて、こち〳〵しなど譏り笑ひて、古物愛であつかふ人の、さしもかしこからん、物をもてあそびぬれば志をうしなふなりとか、古き書にも見えたるをや。

○しはすのころ、北面實持といふもの、親しき人がり行きけるに、あるじ、「いと寒し、賓客におましまゐらせよ」といへば、童心得て持て來るを見れば、熊の皮のあつらかなる敷皮なりけり。さてうち敷きて、同じさまに物語してありける時、心もなく手をもて敷皮の上を掻撫で〳〵しけるが、つきもなきに聲うちあげて、「我妻もまうとによく聞えてよと、ことづて侍りき」といひけり。何事の心にうかびて、斯うあうなく言ひ出でた

まらうど—賓客
放出—母屋より引放れて造り出したる處
越のしり中の國—越後、越中
ふゆき—冬葱、冬の頃繁茂する葱の種類
笑みこだれ—深く悦に入り
つら杖—頰杖
未央宮—漢の高祖の宮殿にして壯麗を極む
道風朝臣—書に堪能なりし小野道風

りなる男一人具して出立ちけり。かへり著きて日頃經てのち、守のいへらく、「今日の夕暮、まらうどを迎へつべし、その用意せよ」といひて、放出の簀子に花瓶を据ゑて、水仙花あまた插させおきつ。かの從者庭のあたり水うち、かい掃きなどしてありしが、花瓶を見つけて、やがて寄り來てつとうちまもり、額おしあげ、「あなあやしく〳〵」といふ。かたはらにある者の、「何事ぞ殊更びいふなるは」といへば、「我國は六郡ながら、越のしり、中の國を合せては、いと廣う侍り。をさなき頃よりさるわたり行きかよひ侍れど、いまだ斯るものを見ず。げに都こそ世に見えぬ希有のものはあなれと承りつるを、まことさにてありけり」といふ。「さるは何をかめづらしういふぞ」と問へば、「かれ見給へ人人、ふゆきに白き花の咲き出でてあり。これめづらしからで何かめづらかならん」といふいふ笑みこだれ、簀子に肱かけ、つら杖つきて、とばかりまもり居けり。家のうちのもの見て、みな笑ひとよむ。守も聞きて、まらうどに語りて笑ひけるとなん。

○伊豫守なりける人、未央宮の瓦もて作れる硯を持たり。これ道風朝臣のかたはらはなさず重寶とし給へるものにて、天下にさうなきものなりとて、常には祕め置きて出さず。水無月のころ、いさゝか風にあてんと、筥を開きつゝみを解きとり出して、人にも

すまひ—相撲取

じちに—實際に

御注—勅注

安國—孔安國

わうかん—梁の皇侃の義疏をいふ、皇は字音通「くわう」と讀めり

したりける。腹黒なる心はつかふまじき物にぞありける。

○昔かたなりといへるすまひありけり。明衡といへる博士の家に行きて、「孝經、論語のたぐひ、しばし貸したびてん」といふ。明衡おどろきて、「そこは近き頃田舍よりのぼりつれば、をさ〳〵見參にも入り侍らねば、こゝろざしも知り侍らざりしを、書借りいでて讀まんとあるこそ、都人にはまさりてありがたく覺ゆれ。世中の人うはべには志あるやうにもてなすめれど、じちにこのめる人はいと少く侍り。さて孝經論語なん注しつけたる書、まち〳〵にわかれて數おほく侍る。孝經は御注にや、安國が傳は清和の帝の仰せごとにて、こゝにはをさ〳〵用ひざれど、讀まんとならば貸しまゐらせん。論語はわうかんが疏こそをかしきものなれ。いづれをか」といへば、かたなり餘りに褒めたてられて、まばゆき心地して、搔繕りていひけるは、「書を借りまゐらするは學問のためには侍らず、うるはしき文字を見つけて、背中腕のあたりをゑり黥して、人にほこらばやと思ひ侍るなり」といへば、明衡あきれて、すさまじげなる面もちして、やがて奥ざまに入りにけり。

○越前守なりける人、任はてて都にのぼらんとしけるに、從者の少かりければ、其わた

落窪の典藥―落窪物語中の人物にて六十餘歲の好色なる老人

初こゑ聞けば云云―古今集「時鳥初聲聞けばあぢきなくぬし定らぬ戀せらるはた」

あはせ―菜、おかず、みのはものの誤か

かりて―假

の呂にもあれ、落窪の典藥にもあれ、その人をえらばん心はあらず。たゞ今にも疾く入り來て、衾かぶりてともに寢たらん人こそ戀人とはせめ」と宣ひける。乳母も侍從も目をくはせつゝ、あきれて立ち退きけるが、「初こゑ聞けばあぢきなく」など言ひしろひつゝ、廊下をはしりて、曹司々々にぞ入りける。

○田舍わたらひして絹あきなふ商人、日暮れぬれば或家の戸をたゝきて、「宿かりなん」といへば、うけひきて開けて入れけり。あるじの妻はおそろしき心もちたるものにて、この旅人のつゝみの重りかなるを見て、いかで此つゝみ忘れて行けかし、わがものにしてんと思ひて、あるじに囁きいへば、「茗荷を食ひたる人は、心ほけて物わすれするものなり」といふを聞きて、あはせのみの皆茗荷を入れて食はせつ。さて商人は、あけぐれの空に起き出でて立ちて行きぬ。妻は旅人の忘れたるもの見んと、寢たるところに入りて見れば、つや／＼もの一つなし。「食はせつる茗荷はしるしなかりけり」といへば、あるじ、「いな茗荷こそしるし有りけれ。いみじき物わすれて行きぬ」といふ。妻、「何をか忘れたる」と問へば、「我にあたふべきかりての錢忘れて去にけり」といへば、妻、「げにげに」といひて、いよ／＼腹立ちけり。人をはかりて物取らんとして、かへりておのれ損を

おいらかに—すなほに

下ゆく水の—新古今集「かくとだに思ふ心をいはせ山下行く水の草がくれつゝ」

夕霧の大將—源氏の子

天稚彦もめでつれ—狭衣、内裏の、御宴に笛を吹き、其妙音に天童天稚彦天降りて昇天を慫慂せし事、狭衣物語に出づ

薫、匂宮—共に源氏物語中の人物

交野少將—交野少將物語の主人公

在中將・在原業平

つくしの呂—「呂」ノ字原本不明、或は「けん」の假名とも見ゆ、筑紫物語中の人物、筑紫の師を指すか

かしまになしても、御心のまゝになし奉りてん。つゝまでおいらかに仰せ給へかし」と申せば、姫君すこし恥ぢらひ給ひて、「下ゆく水の」とばかり宣ひさしてうつぶし給ふを、侍従心ときものにて、なほさし寄りて、「いかなる人をか戀ひさせ給ふなる。まさしく御名をさして宣へ」と申せど、さらに御いらへし給はず。こゝろみに、「もし某の中納言どの、くれがしの宰相の君にや」など問ひ奉れど、ふつに御いらへし給はず。さは例の御物恥の御本性なれば、あらはに世の人をさして問ひまゐらせんは、なか〳〵に御いらへもあらじ、物によそへて、その人かの人とも指して見ばやと思ひて、物語の書どもこゝらとり出でて、「我が御方のあたりに住みつかせ給ふ御婿の君は、光源氏などや御心にかなひなまし」と申せば、御首うちふり給ふ。「彼はあだ〳〵しかればいとはせ給ふならん。夕霧の大將のごとき實法なるは、如何ならん」と申せど、猶おなじ樣にいらへ給はず。乳母、「狭衣の大將こそ天稚彦もめでつれ。これはいかに」ときこゆれど、物も宣はず。さて薫、匂宮より、交野少將、在中將、平仲などをさへとり出でて聞ゆれど、つやつやいらへだにし給はねば、乳母すゝみ寄りて、御耳に口さし寄せて、「さては如何なる人か御心にはかなふべからん」と申せば、姫君さゝやかなる御聲にて、「まろはつくし

おもの―御膳、朝夕の御食事
こちたく―事々しく、仰山に
とこなつの花―撫子の花、床に掛く
おもと人―侍者
曹司―女官の部屋
うちはへ―永々と
怠せ―御本復なされ

がらせ給ふところも見え給はねど、何となく御かほもつやなく痩せほそりて、おものなども、折々まゐり給はず。父君心ぐるしがり給ひて、寺々に仰せて御祈などこちたくし給へども、なほ同じ様にて月頃になりぬ。或日御手習の紙の端つかたに、

あけやすき短夜ながら置く露は誰がひとり寝のとこなつの花

と書かせ給へりけるを、侍従といへるおもと人これを取りて、御乳母の曹司に持ち行きて、さゝやきけるは、「姫君の御ありさまを見參らすれば、よのつねの御病とも見奉らず。とり申さんもかしこけれど、御年も十七におはしませば、もし人を戀ひ給ふ御心おはして、所狹き御身をなげかせ屈じ給へるにや」といひて、かの御手習とり出でて見すれば、乳母手を打ちて、「さりけり〳〵、此ことよく問ひ尋ね奉りて、殿に聞え奉らば、いかなる下﨟なりとも婿がねとなし給ひてん。猶よく姫君に問ひたてまつりて、あらはに聞え奉りてん」とて、二人打連れて御枕上ちかく參りて、「斯ううちはへ煩はせ給へる事を、父君はさらなり、つかうまつり見奉る人々まで、心憂きことやらんかたさふらはず。いかで一日もはやく怠せ給ひなんことを、神佛にいのり侍りて、みな御齋にて日を過し侍り。もし御心にかけさせ給ふことありて、いかでかくなど思ほす事おはさば、天下をさ

今参の者—新参者
とざま—外の方
手かき—字を書き

るは、「人の家にしのび入りたる時、物音のすれば、其家の者聞きつけて、かならず誰ぞやととがめなん。その時逃げずして猫の聲をなし、また鼠の聲をなすべし。しかすれば咎めつるもの、さは猫鼠のさわぐぞと思ひて、うちとけて寝ぬるものぞ。又うち入らんずとて、戸をこぼたんとするに、内にて何者ぞなどいはば、犬の聲をせよ。又蝦のからを持て行きて、喰ふ音をすべし」など、さま〴〵かしこき事ども敎へける。弟子ども敎へられつるやうに、さま〴〵の聲をまねいふ中に、一人の今參の者ありけるが「いで蝦のから喰ふことして見ん」とて、とざまに出でて、戸のもとに佇みて、からをとりて犬の喰ふやうに音たてつ。内に聞き居る弟子ども、「まさしく犬のくらふに違はず、あはれかしこくもしたるかな」とほむれば、大太郎聞きて、「聲はよく似たれど、立ちながら喰ふべきにあらず、地に伏し居てせよ」とぞいひける。盗人の道にては、この大太郎に過ぎたるかしこき者はあらざりきと、とらはれたる同類の者の語りけるとなん。
○昔やごとなき御わたりに、いつきかしづき給ふ姫君おはしけり。御かたちなべてのきはにおはしまさず。手かき歌よみ、かい彈き給ふすぢもけしうはおはさず。この姫君、卯月のはじめより御心地例にたがひて、なやみがちに臥し給へり。とりたてゝこゝぞと苦し

あざれ―さまよひ歩き
山―比叡山
よしみねの某―良峰宗貞即ち僧正遍照也、仁明帝の崩御を悲しみて剃髪せり
たかはつ―「は」文字原本紛はし、或は「み」か、高光は師輔の子、出家して横川に隠れ覺如と號せり
眞字―漢字の楷書
ある樣ある―由緒仔細のある

さわぎ惑ひなんこと、いとも〳〵愚なる心にこそ。さる無心の人の上を我はまなばじ」といひて、いよ〳〵あざれ遊び歩きけるとなん。

○もの書くすべだに知らぬしれ者ありけり。いかに世を思ひうんじにけん、山にのぼりて、出家してけり。親族なりける人たづね行きて、「などて斯うは思ひすて給ひける、あさまし」といへば、「夢まぼろしの世に、さのみ心とゞむべしやは。よしみねの某、たかはつの朝臣などの、ふかき心ばへのうらやましくて、斯くはのがれつるなり」といふ。「さらばさもあきらめてあへなん、御名をば如何にあらため給ひつる」と問へば、「西音と師のつけてたまへるなり」といふ。「いかなる文字にか」と問へば、「西は西方浄土の西にて侍り。さて音といふ文字こそ見なれざる文字にてあれ。眞字もて書きつれば、六百の文字をあはせたるやうなり。また草もて書きつれば、七百の文字を合せたるなり」とぞいひける。親族なる人をかしきを念じて、「ある樣ある文字にて侍り」といらへていとま乞ひ、山をくだりて去にけり。かゝる人の道心おこしたるは、なか〳〵堅固なるものぞと人いひき。さる事ありや知らず。

○大太郎といへる盗人ありけり。弟子どもを集めて、盗すべきやうを教ふとていひけ

桶たくみ―桶職
つや〳〵―一向
みやび―風流
おちあぶれて―零落して
こちなき人―不風流な人
あからさまに―假初に
落居て―心落ちつきて

さらば我家に商物の數まさりて、富みさかゆべきものなるはや」と手打ちたゝきて、をどり喜びけり。深きたどりある桶たくみにぞありける。

○これも同じわたりの商人、なりはひの道にはつや〳〵心を用ひず、家とぼしくなり行きて、今は喰ふべき物だになくなりぬ。妻なりけるもの、恨みいさめていひけるは、「あまりに身におはぬみやびをのみ好みて、月花にのみうかれ歩き給へば、斯くおちあぶれて侍る、みな我君のいふかひなきより起りしことぞかし。隣なるあるじを見給へ、あしたは暗きより起出で、夕は子過ぐるまで起居て、冬の空の雪氷、夏の日の照りはたゝくにも、只なりはひを大事として、立はしり勤めぬれば、年々家ゆたかになり、今日となりては、二なき福者とは成りにたり。我君も隣のあるじにならひて、今よりなりはひに心をもちひ給ひて、ふたゝび家を富し、過ぎにしむかしにかへし給へ」と、打涙ぐみていへば、男打腹立ちて、「こちなき人の上をとりなして、我がみやび心をしも便なしとうちけちなんとする、おろかなり。隣のあるじは、夜晝をいはず走り歩き、あからさまにいこふひまだに無く、一日もやすき心なし。落居てたのしめる日は、たゞ師走のつごもり一日のみなり。わづかに一日のどやかに樂まんとて、こゝらの一年の日數を苦みあへぎて

ねこま—猫

さずき—假庋、さじきに同じ

こゝら—許多

るが、ほどなく夫はいみじき位を得たりけるを、くやみつる例もぞある。すべて男の言へることを、侮りざまにもてなさば、よき事はあらじ」といふ。妻、「さらば斯かる風につけて、何條よき幸ある」といへば、夫がいはく、「風あらく吹きぬれば、砂ほこり起りて人の眼に入るぞかし。されば目を病む人おほく出來なん。これ喜びいはふべきことにこそ」といふに、妻いよ〳〵いぶかりて、「人の目を病むがいかで我身の幸とはなる」と問へば、夫、「ふかく物の心たどらざる人は、其よしをえ知らじ。目を煩ふ人おほかれば、ようせずば目つぶれてかたはと成りぬべし。然るかたはになりなば、法師とこそなるべけれ。めくら法師は、近き代に唐國よりわたしたる三絃といふもの彈きて、なりはひとすなり。さらば三絃世の中におこなはれぬべし。これ我爲によき幸の來れるなり」といへば、妻、「しか三絃の世にはやり行くとも、身の幸となるべうもなし」といふ。夫、「そも三絃は、ねこまの皮をもて作るなり。三絃のはやり行かば、世にありとしあるねこまのかぎり殺されて、たね盡きぬべし。これよき幸のまぢかく來れるなり」といふを、猶いぶかりて問へば、「ねこま死にたえなば、鼠時を得てはびこり、厨の棚さずきをいはず、こゝらの鼠ほこり騷ぎ、よろづの桶ども皆くひやぶり、或は投げ落して碎き損ひつべし。

さま―姿

ひはだ屋―檜皮葺の家

みわ―神酒

野分―秋の暴風

朱買臣―成語考に「可ν惜者買臣之妻、因ν貧求ν去、不ν思覆水難ν收」と出でたるをいふ

日本紀をだにえ讀まざれば、先達の心もちひもいたづらになりて、おけ、こをけは、水入るゝうつはぞと心得あやまりけるなり。また桶の假字は、順朝臣の書に乎計と書かれたれば、それによるべき理ながら、後の世となりては、歌の道にも立てたるその筋の家家あれば、おの〳〵師にしたがひて、教のまゝに書かんことはさもあるべし。とまれかくまれ益なき物あらがひし、さまにも似ざる鬪諍に及びぬること奇怪なり」とて、叱りて廳の外に追ひやりぬ。宮司も法師もふたゝび言ひ出でん詞もなくて、瘤のいゆるほど、五十日ばかり門をさし籠り居りけるとかや。

○都の端つかたに、桶をつくりて賣る男あり。秋のころ風はげしく吹き出でて、よろほひたる家を打ちたふし、木の枝をさへ折り裂きなどす。ひはだ屋の板のはがれたるが空に飛びかふさま、さながら峠の神に幣まゐらする心地す。桶つくり妻にむかひて、「わが家たからに富むべき時來ぬ。疾く神の御前にみわ、粿米奉りてよ」といふ。妻、「野分はげしかりとて、家の富むべき道理やはある。希有の事いふ男かな」といへば、「女はあさましきまで、ものの心をたどり知らぬものなり。むかし唐國に朱買臣といひしかしこき人、わが身いまに成り出でなんと言ひけるを、その妻の聞きも入れで、終にわかれけ

さながら―その儘にて
申文―訴状
ことわるべき―判定すべき
かけんも―口に掛けて申さんも

法師も宮司も顔頭をいはず、大なる柑子打ちつけたらんやうに腫れあがりぬ。さながらやむべきならねば、「いかにもあれ國司の御前に出でて、事のこゝろ明らめ申すべし」とて、痛さを念じて、申文もちて廳に出でぬ。守大にいかりて、「およそ宮司は淸くあかき心を持ち、いみきよまはりて神につかうまつるこそ道なれ。法師は柔和をもて人をみちびき、後の世の事など說き知らすべきを、おのれら負けじ心のつよく、いさかひ打ち合ひて、疵をさへ蒙りぬること、しづ山がつには劣りたる心なるはや。よし惡しをいはず、その職を召しはなち、遠く逐ひやらふべけれども、上の御惠ふかくおはして、罪人の出來ることを御身にかへ歎かせおはしませば、このたびの咎はゆるしつ。おのれらがいさかひの始は、桶といふ字のかんなより事おこりぬ。これ我がことわるべき事ならねど、またも訴へごとのおこらざゝなる爲に敎へ知らすなり。假字遣のこと記せる書に、おけこをけと書きたるは、木もてつくれる桶のことにはあらず。かけんもかしこけれど、顯宗天皇、仁賢天皇と聞え奉れるは、御兄弟におはしまして、兄のみこは億計、弟みこは弘計と申し奉りしこの御名、共におけ、をけにてまぎれ易ければ、かんなのこと違へじとて、弟みこを假にこをけと記しつけて、かんなづかひの書に書きとゞめ置きしを、後の人は

はしのを―伊呂波歌の順にて初の方のをの意
かんな―假名
順―源順
和名抄―和名類聚鈔、天地鬼神人倫等の部門を分ち、漢字を以て國語を類聚して、其解釋を加へ、萬葉假名にて其和名を記したるもの
かたみに―互に

り。一日法師がり行きけるに、弟子に書きてやる本に、桶といふ文字の假字がきに、はしのをにてをけと書きたるを見て、宮司あざわらひて、「御坊にはかんなのつかひざまをまだ知らせ給はぬにや。桶はおくのおを用ひ候がならひなり。但小桶といはん時のみ、はしのをを用ひて書くなる。この本に見えたるは常の桶なれば、おけとこそ書き給ふべけれ。さしも文の道心得たまへる御坊なれど、此國の事は疎々しくおはしにけり」といへば、法師はもとよりさる山寺に生立ちて、かたくなにむくつけき人なりければ、腹立ちて、「これ更にあやまりならず。わぬし順ぬしの和名抄を見ずや、まさしく乎計と書きてあり。法師はさる據證につきて書きたれば、僻事ならず。そこの宣へる、小桶の時にのみをけと書かんこそなか〳〵あやしく、しれがましき人の心地はすれ」といへば、宮司も大にいかりて、「しれがましとはわ僧の事よ。およそ上代の言葉は、某らこそわきまへたれ。とほき異國の教をまもるものの知るべきにあらず」とて、さま〴〵惡しざまなることを言ひつゞけければ、法師もをさめぬ筋にて、念珠もて宮司が面をしたゝかに打ちければ、宮司は扇をあげて、法師が頭わるゝばかりに打ちつ。さて引組みて、上下になりてをどり合ひたるを、村の長聞きつけて、引分けなだむれども、かたみに腹立ちてうけひかず、

垣下―大饗の時の相伴役
おれもの―愚者
しれ〴〵しき事―馬鹿々々しき
きさらぎのもち―二月十五日
おほよそ人―凡人

じも垣下の君達もおどろかせ給ひて、「何事ぞ」とて、子細聞かせ給ひて、みな笑はせ給ひにけり。
○左兵衛尉紀直力は世のおれものにて、しれ〴〵しき事のみ言ひつゝ、つねに人にわらはれけり。兄弟の子を持たりしが、父にひとしき痴なるものにぞありける。或時弟なるもの兄にむかひて問ひけるは、「世におほつかなき事のおほかる中に、釋迦佛の涅槃會、誕生會こそ心も得ね。きさらぎのもちにうせ給ひて、やがて卯月の八日に生れ出で給へること、いかなる子細さふらふにか」といへば、兄聞きもあへず、「しか疑ふなるは、わぬしがたらはざるなり。なべての人ならば、二月にうまれ出でて、卯月に死ぬべけれど、佛は神通おはしませば、生死のさかひも、おほよそ人とはいと異にて、先だちて死に、おくれて生れ出で給へるなり。かゝるこそ佛にてはおはしけれ」といへば、父一間なるところに聞き居りて、「太郎こそいみじき才學はありけれ。かくてはおほやけの交ひすとも末たのもしからん」とて、ほめ喜びけり。
○むかし某の國の山寺に、手をよく書く法師ありけり。あたり近き人の子どもは皆かしこに行きて、手ならふことをぞしける。おなじ所に、宮司にてえせ歌などよむ者ありけ

大饗—大臣の大饗、始めて大臣となりたる人の行ふ饗宴

ふぐり—陰嚢

くは〳〵—これこれ

とよみ—騷ぎ

○或所の大饗に、中間、牛飼等、御門のあたりに蓆打敷きて、かい睡りあくびうちして居りけるに、おもゝちきたなげなる翁の、「いで目ざましに、興あるわざして見せん」といへば、牛飼童など、いかにと立ちめぐりまもり居るに、翁虱一つとり出し、人々に見せて、「今この虱呑みて、異所より取出して見せんず」といひて、しらみを口に入れ、舌たたき齒うちならして、「見よや人々、虱ははやうのんどに入りつ、さて今のんどに入りたるを懐より出すぞ」とて、懐をさぐりて虱とりいだし見せつ。牛飼等あざみ興ずれば、また彼虱を口に入れ嚙みて、「この度は人々望まんにまかせて出してん」といふ。「さらば襟のあたりより出せ」といへば、襟をかいさぐりて取出して見せつ。さてまた呑みて、烏帽子とりのけて、髪の間よりも取出し、或は股のあたりよりも出しつゝ見せけり。かたはらなる者、「ふぐりよりも出すべしや」といへば、「などか出さゞらんとて口に入れをはりて、帶ときひろげ、ふぐりなるひげ搔きよけつゝさぐりて、「くは〳〵」とて指のさきにつけて出したるを見れば、はじめのには似ず、形ひらめなる物の一つまで動めき居り。人々、口より入れたるものにはあらざりけりとさとりて、「さても虱おほかる翁かな」と、聲あげて一度にはと笑ふ。このとよみいとなり高かりければ、奥ざままでひゞきて、ある

あだし心をわがもたば末の松山波も越えなん」

羅刹――人を食ふ赤髪黑身の鬼

一定――確に

かぶろ――髮を斬り下げて役り居ること

閻王かしら右左に打ちふりて、「やをれ醜女よ、そも幽靈といへるものは、顏きよらかに、髮ながくいろ白く、たをやかなる姿してこそ出立ため。おのれさる醜くきたなきおもちして、さるふるまひせんこと、ふさはしからず。この事かなはじ、疾くまかり退け」と宣ふ。かたはらなる羅刹、あはれとや思ひけん、女が袖をひかへて、「幽靈はかしこし、夜叉とならましと聞えなほせかし」とぞいひける。

○或人大佛殿を拜みてかへさに、あたりなる商人の家に立寄りて、家づとに餅買はむやとて見るに、いとさゝやかなりければ、「いかで此の餅よのつねにも似ず、あさましくつくりしぞ」といへば、商人、「このもちひ小からず、しか宣ふは一定大佛殿を拜み給へるなるべし。かの大なる御佛を拜し給へる目うつしには、よろづの物皆さゝやかにこそ見ゆれ」といへば、「げにさる事あるべし」とて、もちひを懷に入れて、一二町あゆみ行きける。道の傍にかぶろなるみどり兒の、人の捨てたるにや、すゞろに啼り居たるを見て、あないとほし、母に添寢の夢見るにこそと、あはれがりてかき抱きて、また四五町ばかり歩みけるが、あまりに重くて困じにたれば、しばしいこはんとて、かきおろして顏をまもり見れば、老いたる乞食の尼にてありけるとぞ。

かたみ—筐、竹にて造りたる目の細き籠

大進—皇后宮職、皇太后宮職等の判官に大進、少進の二つあり

小夜衣—新古今集「さらぬだに重きが上の小夜衣わがつまならぬつまな重ねそ」

後の事—葬送の事

よもつ國—黄泉國

松山の波—古今集「君をおきて

て給ふ。武安がしもべ柑子の入りたるかたみを持ちて行きけるが、七つの價二百兩と聞きて、心におもひけるは、六つにてもよき價のものなり、これ盗みて人に賣らましかば、よき價は得ましと思ひて、武安が道にてやすらひ居るひまをうかゞひて、彼かたみうちかたげて、いづちともなく逃げうせけり。このしれもの、いかなる價をか得たりけんいぶかし。

○大進有恒が妻は、かたち見にくゝて心もひが〳〵しく、おぞましかりけり。つねに有恒とちぎりて、「われ死にたりとも、かならず異人をなむかへ給ひそ」といひけり。有恒うるさけれど、「小夜衣はいかで」などいらへて、こしらへ賺してありける。さだまれる宿世にや、この妻かりそめに病みて身うせぬ。有恒後の事など營み、日數經にけるのち、したしき人にすゝめられて、また妻を迎へたりける。はじめのさがな者にくらぶれば、こよなうよかりければ、むつまじくなれ睦びけり。斯くてかの醜女はよもつ國にありて、此事を聞き知り、閻王の廳にまゐりて訴へて申さく、「有恒ちぎりし事を違へて、異人をむかへ侍り。この恨やらんかたなく覺えさぶらへば、今幽靈となりてかしこに至り、松山の波かゝらんとは契らざりしあだ報はまほし。しばし呵責のいとま賜びなん」と聞ゆ。

おもの―御膳、朝夕の御食物
御達―女中たち
柑子―柑子蜜柑
水無月―六月
あなぐり―探し
小野―山城國

○某の大納言の太郎君、いたくわづらはせ給ひ、おものもつや〳〵きこし召さず、御達の人々、足をうらになしてあわて惑ひ、讀經の法師、祓のかんなぎなど、かた〴〵にののしり騷ぐ。かくて日數經れどもよろしうも見えさせ給はねば、父の大納言御枕ちかく寄り給ひて、「いかに斯うものもきこしめさで、うきめをば見せ給ふ。何にまれ少しはものきこしめしてよ」と御泪にむせびて宣へば、太郎君息のしたに、「何ほしとも思ひ侍らず。されどあながちに宣ふことのわりなければ、せめて柑子一つ食べて見まし」と宣ふ。「そはうれしくあなり」とて、疾く人はしらせて求め給ひけれど、水無月の頃なりければ、都のかぎり、商人の家あなぐりもとめつれど、無しとのみ申す。大納言いらち給ひて、「千々のたからも何か惜しからん。たゞ價をつのりてもとめて來」と仰せ給ふ。秦の武安といふ者、からうじて伏見のほとりにて柑子七つもとめて來ぬ。價こがね二百兩とか聞えし。とくすゝめ奉りけれど、わづかに半をだにまゐらず。されど廿日ばかりいさゝかの物だにきこしめさゞりけるを、今日ばかり物まゐり給へる、うれしかりけりとて、武安にはおもく勸賞ありて、ほめさせ給ひけり。さて殘りたる柑子は、めづらかなる物なればとて、「小野におはす尼君の御許へまゐらすべし」とて、また武安を御使にて出し立

きえせ家司は、おほかた斯かる心をばよろづにつかひけるものとぞ。
○陪従春近といひけるもの、雪いたう降りける夜、簀子にわらふた敷き、火桶の火おこさせ、皮衣のあつこえたるを重ね著て、高き屐子はきて庭に下り、しもべ呼びて雪をあつめて、鬼のかたち、佛のかたちなどつくらせて、「そのむかし中宮の御庭に斯う雪の山つくらせ給ひしか。かゝる物はいまだためしあらじ」とて、ゑつぼに入りて興じける。しもべは綿うすきつゞれ一つ著たりければ、寒さ身にとほりて、たゞふるひにふるひ居れども、主の仰いなまんやうもなくて、下泣しつゝ立走りけるを、春近は一人よろこびて、「あらおもしろ。この雪佛の顔のをかしさよ。かばかりの興はまたあらじを」とて、猶雪にぬれつゝ庭に立ち居り。雪はいやまさりに降り、夜もいたく更けゆきけれど、いよいよ笑みまけて、「この雪たゞに見んはは（ママ）えなし。汝歌一つつかうまつれ」といへば、しもべとりもあへず、
風さゆる夜半ともいはず起きあかすあるじや犬に庭の白雪
とたかやかに言ひて、疾くおのが曹司に逃げて入りぬ。後の勘當をもおそれず、腹立たしきまゝに言ひけるなるべし。

合ひ
わらふた—圓座
屐子—足駄の類
下泣しつゝ—心に泣きつゝ
笑みまけて—笑ひ崩れて

家司—一家の雑務を總べ司る者
かくのあわ—結果、菓子の和名抄「結果、形如レ結レ緒」
祕色—燒物の名、青磁
さうざうし—寂し
ふつに—一向に
つきしろひ—互に膝などつゝき

しみのすみか物語　下

○或御館に古き家司ありけり、わかきより奉公せしものなりとて、あはれみ召しつかひ給ひけり。或時かくのあわを椋の大さにつくらせて、壺に入れてきこしめすことあり。この壺はから國よりわたしたる物にて、祕色のすぐれたるにて、口は手さし入るゝばかりせばく、そこはふくらかに作りたるものなり。雨降りさうざうしかりければ、彼家司召し出でて、物語せさせおはしけるが、彼壺を出させ給ひて、「とり出して喰へ」と宣ふ。家司おづおづ指をすぼめて壺の口にさし入れけるが、ぬかんとするにおほかた抜かれず。とかくすれども、抜き得ざりければ、殿、「よしなきものとらすとて、老人にうきめ見することゝ」と苦しがり給ふ。人々も寄りて樣々しあつかへど、ふつにぬけず。「このうへはせんすべなし。二なき寶なれども、打ちわりて出しなん」とて、鐵の如意とりてたゝき給へば、壺は三四にくだけて飛び散りぬ。人々寄りて家司が手を見れば、かくのあわ二十ばかりつかみて居り。さればこそ抜けざりつれとて、皆つきしろひ惡みあへり。腹きたな

おほざうにて―曖々しくて
よすが―便
平仲―平貞文、平安朝の有名なる好色者

心もいとほし、いかなる人にか名を聞かんと思ふも、おほざうにてかひなし。衣の色をだに見とめ置きて、後に文かよはさんよすがにもせましとて、つか〱と進み寄りて、きと見あげたれば、女の顔なりと見つるは銀の瓶子にぞありける。色ごのみのうへには、斯かる益なき心づかひもすめり。こは平仲が若き時の事なりけりといふ人あり。されどたしかに傳へたることならねば覺束なし。

艶がり―なまめかしき風を賞し

鞠―蹴鞠

簾のあたりに云云―簾中より女房達の見れば也

前わたり―前を過ぎ行くこと

ちかまさり―遠見より近見のまさること

つれなしづくりて―平氣を装ひて

思のみこそ云々―古今集「知る知らぬ何かあやなくわきていはん思のみこそしるべなりけれ」

はつかに―僅に

○いたう艶がり色好める人ありけり。いさゝかも女に見やうとまれんと、よろづにつけて心づかひしつゝ、裝束よりはじめて、持てる扇などさへみやびを盡し、何事も女におとしめられんはいみじき大事なりと思ひて、裝ひざれ歩きけり。やごとなき御わたりの鞠の御遊ありけるに、參りて立交り、物するにも簾のあたりに心をかけつゝ、足もとをさへ心づかひして、もてふるまひけり。しばし休らひなんとて、人々花のかげに居給へるに、見わたしたる簾のつま〴〵透きかけ見えて、女房たちのさゝめく聲す。さば我を見るなりけりといとゞもてしづめて、さりげなき樣にうちふるまへど、心はをどりぬ。例のわれほめの心より、出で前わたりして、ちかまさりのほども見せましと思ひて、つれなしづくりて勾欄のもと近く歩み寄りたるに、から猫の綱ながう著けたるが、簾の中より走り出でて、やがて勾欄のうへによぢ上るに、簾のそばはなやかに引開けられたるを、尻目に見れば、木丁の陰にうつぶしたる顏白き女の、つれ〴〵と我を見つゝ居り。さば我に思ひつきぬるにこそ、思のみこそしるべなれなど打思へど、まさなく見遣らんもはしたなければ、いよ〳〵知らずがほつくりて、そこらさまよひ歩きて、時々はつかに尻目に見遣れば、女は猶うちまもりて目かれせず、寄り臥せる樣なり。さばかり我を思ふ

服の衣―喪に籠る喪服、兵藤太の色黑きを誹りていふ詞

うて―討手

むざん―恥知らず

り、簀子にのぼりてうかゞへば、みそか男の聲にて、「かゝる事服の衣の知らば、はしたなき事こそ出來め」といへば、妻が聲にて、「さな思ひ侘びそ。服の衣は年たけて侍れば、とほからで死にうせなん。よしさらずとも、あべの某ほろぼすべきうての使下りなば、出立ちぬべし。さるえびすと戰ひなば、よも命いきて歸らじ。心やすかれ」といふ。兵藤太よく聞きすまして、遣戸障子蹴はなち入りて、氷のごと見ゆる太刀引拔きて、先みそか男がかしら打落しつ。妻は思ひかけぬ事なりければ、あわてまどひて逃げ出でんとしければ、さしも大なる男のはだかり立ちてあれば、逃ぐべき道もなし。たゞ手をあはせて、「あが君〳〵」と言ひてふるへわなゝきたり。兵藤太はたとにらみて、「しやむざんの女め、我空往したるを知らで、よくもみそか男ひき入れたるよ。おのれ等服の衣としも言ひたるは、我いろの黑きをあざけり言ひつるならん。惡しとも惡し。おのれ殺すべけれども、生け置きてながく憂きめ見せんず」といへば、妻疊に打伏して、「今は申すべき詞侍らず、すみやかに殺し給ひね」といへば、兵藤太眼を大になして、「我に殺されてみそか男に追ひつき、ながく黃泉の下にて相語らはんとや。かへす〲膽ふとかる女め」といひて、いよ〳〵腹立ち怒りけるとか。

乞食また門を通りければ、呼びて、「これ猶持ちていね」とてやれば、はじめの笥に入れて手に持ち、いたゞきつゝ言ひけるは、「君達、この魚とくめされつるにや」といふ。みな、「今喰ひて、そは殘なり」といへば、「さばきこしめしたるにこそ。はじめ賜ひつるもの、少々くさき香のし侍れば、ようせずば腹をそこなひなんとて、なほ喰はで置きて侍り。君達のしかきこしめしたる上、異もなくおはせば、やつがれもまかりてすなはち喰べなん」とて、立走り河原の方へ往にけり。身を大事に思へば、乞食すら惡しき香のせしを喰はざりける。この博打、乞食には劣りたるものなりけりと、心ある人は笑ひけるとか。

○相模國に兵藤太といへる武士ありけり。色くろく肥えふとり、額はれて見苦しき男なりけり。妻はみめよかりけれども、あだ〳〵しき心そひたるものにて、みそか男まうけてしのびつゝ逢ひてけり。此こと兵藤太に告ぐるものありければ、事のこゝろ能く明めて殺さんとぞ思ひける。さて日暮るゝ頃、今宵山に入りてともしせんとて、弓矢とり郎等どもひきゐて、松ともさせて出行きけり。妻よろこびて、みそか男呼びて語ひ居り。兵藤太一里あまり行きて松打消ち、ひそかに家に歸り、めぐりの竹垣をこぼちて忍び入

みそか男―密男
ともし―照射、夏火串に松明を點して鹿を寄せて射ること
松―松明

あらまし事―豫め量り置く事
さう〴〵しかるべければ―淋しかるべければ
うるせき―立派な
はくし―博、博打
あざれたり―腐りたり
あし―錢
笥―入れ物

て、「あな心よや。これいかで三年がほどたちぬべしと、あらまし事にだに定めけん。げに大なる誤なりけり。さるを六年にあらためかへて夜々飲まん事、ひとへにわ君のたま物よ」といひて、また引きつゞけ飲みて、やゝ醉ひしれ顔あからめ、眼ほそやかに爲し、手かきつゝ賓客にいひけるは、「夜のみ飲みて六年をすごさんも、心もとなくさう〴〵しかるべければ、今よりあらためて、十二年をかぎりて晝夜飲みなまし」とぞいひける。さてもうるせきちかごとにぞありける。

○むかしはく打集りて、河豚の魚を買ひて、とり〴〵喰はんとせしに、惡しき香のしければ、「こはあざれたり、この魚は人をころすこと例なきにあらず。さばうち捨てよ」などいふを、「さるにても徒にあしつひやし、おほかたに喰はでやみなんも心ゆかずある」と言ひしろひけるに、老いたる乞食のわなゝきて通りければ、こゝろみに呼びて、「此魚喰へ」とて遣れば、缺けたる笥に入れ、うちさゝげて行きぬ。とばかり過して、彼の乞食いかになれると河原に人やりて見すれば、「異もなく、物乞ひて居り」といふ。「さらば此魚喰ひたりとも惡しからじ」とて、たゞ喰ひに喰ひつ。されど猶わろき香のすれば、思ふさまにも喰はず、いさゝか喰ひあまれるを、「これ犬にや喰せまし」などいひて居る時、

ちかごと—誓言
まほに—素直に
しひそし—甚しく強ひ

べし。されども本性にあくまで好きて侍れば、ながく禁ぜんは、なか〱ちかごとやぶりなまし。今より三年がほどちかひて盃は手をだも觸れじ」といふ。「さらば申せしかひ有りてうれしからん」とて、立ちて出でぬ。妻子なるもの皆聞きて悦びけり。さて日暮れぬれば、例の酒友達入りきたりけるに、郡司いへるやう、「親族なるもののいさめ、かたがたわりなく覺え侍るまゝ、三年がほどは酒たち侍りつ」といふ。これを聞きて、「いかで年頃めで給ひける物を、すみやかに止め給ふべき。又人もまほにうけひき侍るべきにあらねば、例にならひて必ずしひそし勸め侍るべし。さればちかごとたて酒たち給ふも、なか〱詮なかるべし。されど彼の親族の御いさめもだしがたき事なれば、三年のさだめをうち延へ六年になして、夜々のみきこしめさば、友どちの交らひにもうちあひ、かの人のいさめにも違はでよかるべし」といふ。郡司目口はだけ喜びて、「げに言はれたり、三年のかぎりを六年にのばへて、夜のみたうべんこと理あれば、親族なるものも口あくべき道理なし。只今より三年のさだめを六年にのばへて、夜のみ飲むべし。さらば彼もこれも理にかなへり。いま日暮れぬれば、酒飲まんこと定めをやぶるにあらず」とて、酒あたゝめさせ、まらうどにも強ひ、我もひきつゞけ飲みて、頭うちたゝき

しづ山がつ―山里に住める賤しき者
じねん―自然
うけ歌―盗み歌
まんな書―まんなとは漢字の音を借りて和語に常用せるもの
こゝら―許多
ひなさき―陰核
荒涼―とんでもなき
しゞみ―縮み
かしこけれど―失禮なれど
すまひ―拒み

たちはさらなり、から國の聖と聞えたる人々も、猶これに心をよせめで給ひぬ。あはれ此物よ、古今のけぢめなく、しなくだれるしづ山がつまで、あながちに好みめづる事、げに天地のじねんのたまものなるべし」といへば、かたはらに、うけ歌いだして人まじらひする痴人のありけるが、打聞きて、かのまんな書、われも詠みおほせつと人に見せまほしくて、扇ひろげてうちあふぎつゝ、「さなり、家持卿のよみ歌こゝらが中に、只今見給ふる、ひなさきの歌こそ、殊に興ある物なれ」といらへつ。荒涼の歌よみにぞありける。

○ちかき世にやありけん、郡司の酒いたう好めるありけり。晝夜をいはず、盃をはなたざりけり。親族なるもののいさめ言ひけるは、「酒は二なき藥にて侍れど、そこのやうにひたすら飲みては、よき事あらじ。かつは病を得て、命もしゞみぬべし。酔しれて、公わたくしのつとめをも忘れ、人にむかひても無禮なるふるまひ多かンめり。ことに尫弱のつかはれ人など、ほしいまゝに飲みすごしなんには、後々財も盡き家をも失ひぬべし。かくとり申すもかしこけれど、親しきなからひなれば、はからず申すなり」といふ。郡司うなづきて、「かしこくも宣へり。すまひいなむべき詞だに侍らず、今よりふつに止む

いたく飲みすごしける過なりとぞ語り傳へたる。

○常陸介の北方は、なほ〳〵しきさしすぎ人にぞありける。一日まらうどの來りける時、主常則が書きたる人麿の繪とうでて、見せ居たりける。まらうど物めでする人にて、「いみじくもかきて候かな。常則ななり」といへば、北方奥なく木丁の中より、「いな常則には侍らず、人麿にて侍り」とぞいらへける。いとあさましかりき。

○宮司某は、いみじきしれ者なりけり。その子の太郎なりけるものも、親にまさりて愚にぞ生立ちける。水無月の宵闇の頃、星の上にのぼりて大空を仰ぎて、ながき竿を持ちてふり動し居り。宮司庭に涼みてありけるが、見つけて、「何事するぞ」と問へば、太郎、「大空の星をうち落すなり」といらふ。宮司うちわらひて、「あな幼や。そらは猶高かンなるを、さる短き竿の及ぶべきかは。強ひてとり得んならば、なほ竿の長きをえらびてせよ」とぞいひける。

○或上達部の許に、人々つどひて和歌の會をはりて、あるじの祕藏せる家持卿の作れる讃レ酒歌十三首を、道風の書きたるを請ひ出して、うちこぞりて見る中に、老いたる學生のありけるが、すこし退きて頭うちかたぶけつゝ、「げにまことなり。いにしへの皇神

まらうど―賓客

木丁―几帳

しれ者―痴者

水無月―六月

上達部―三位以上の人の稱

讃レ酒歌―萬葉集に出づ、但家持の父旅人の作なり

道風―小野道風

あざみ―驚き
いも寢られねば―寢入られねば
いざちて―足ずりして泣きて
もこよひて―もごもごして

ともおぼえぬ所に出でつ。そこに清げに流るゝ泉あり、のんどかわきぬれば掬びて飲むに、よく釀したる酒にたがはず。心ゆくばかり飲みけるまゝ、しきりに醉をもよほして、やがてそこに倒れふしぬ。ねぐらもとむる鳥どもの來鳴くにおどろきて目さめて、いそぎ走り歸りぬ」といふ。隣なる人も訪ひ來て、おほかたあざみ言はざる者なし。あしたになりて姥、「われも往きて彼泉汲みて飲ままし」といふ。「うべなり。とく行きね」とて、よく道を敎へて出したててやりぬ。かくて其日も暮れぬれど、姥かへり來ず、初夜も過ぎにたれど見え來ず。夜一夜いも寢られねば、鳥と共に起きて、行くへもとむとて、いそぎ行く。こゝろもとなきこと限なし。されど知りたる道なれば、朝霧のまよひもたどらず、やう〳〵かしこに至りぬ。泉のあたりを見れど人もなし。狼などにや喰はれけん。我身こそ若がへりたれ、年頃の女をうしなひてはいかにせましと、泣きいざちて倒れ伏しけるが、小さき岩ほの陰に物ありと見て、近づきて見れば、生れ出でて月ばかり經ぬると覺ゆるあか子の、さゝやかなる聲して泣き居り。よく見れば姥が著なれつる衣の中にもこよひてあれば、かき抱きて、「姥か」と問へば、泣きつゝうなづく。やがて懷に入れて宿りにかへり、乳をもらひて養ひそだてけるとぞ。あまりに泉をむさぼりて、

家司―家の雜務を總べ司る者
うちしはぶき―咳ばらひして
なゐのふりて―地震して
まうと―其方

など言ひあへるほどに、老いたる家司のうちしはぶき簀子に居て、「よべ丑二ばかりにやあらん、おほきなるなゐのふりて侍るを、女房達は知らせ給ふにや」といふ。かの局、こは我をはからんとかまへ言ふなりと思ひて、「まうとはおそろしき空言をぞ宣ふなる、よべはわらは宿直して侍り。なゐふり侍らば、おまし近き人々、いかで起さでやは候べき」といらふ。家司、「さはこゝをばよぎてなゐのふらざりしにや。夜行の者どもとりどり、めづらかに大なるなゐなりとぞ只今も申しつる」といひて立ちぬ。巳の時ばかりに、大臣の姫君の御許より御文ありて、なゐの事聞えさせたまひけるにぞ、さて此局寢たりけるよと知らせ給ひて、わらはせ給ひける。

○美濃國に老いたる夫婦ありけり、ともに七十にあまれり。日毎に山にのぼりて、薪をとりてなりはひとしける。一日翁山に行きて、日くらし歸り來ねば、姥心もとながりて門に立ちて待ちつけ居たるに、戌すぐる頃、翁薪になひて歸り來ぬ。「いかに遲かりつる」と紙燭とりてむかひ見るに、思ひかけず翁かほかたち二十計の若人になりて、髮もつややかに、昔のごとなりにたり。「さてもいかなる事ありて斯かりし」と問へば、翁いへらく、「はじめ山に入りて薪こりてある時、見なれぬ鳥を見つけて追ひもて行くに、例の山

あしかの局―あしかはよく寢る獸なれば也
けいめい―警衛
ねび人―老成せる人
大殿油―燈火
いたき人―えらい人

〇或古宮になま女房ありけり。年は五十ばかりなれど、いといぎたなくて、常に朝い過して、起出でければ、人々にくみてあしかの局といひつけてぞ笑ひける。そのころ伊豫國より、いみじき盜人の大將軍のぼりて、こなたかなた押し入りて、盜すなりとて、都の中さわがしかりければ、此宮にも、武士のかぎり弓弦ならして、夜もけいめいし歩く。女がたにもさる心してよと、仰言ありければ、ねび人のかぎり、一人づつ起きゐて、宿直したりけり。このあしかの局番にあたりて、人しづまりて後、大殿油はじかくて、書など讀みて居るに、人々はよく寢たるにや、いびきの聲かう〳〵とするに、壁の中なるきり〴〵すのみぞ友なりける。鐘の聲きこえて、宿直人の夜ごゑも、いとさびしく聞きわたさるゝに、しきりにねぶたくなりて堪へがたかりければ、よししばし睡りたりとも人も知らじと思ひて、肱枕して、しばしまどろみぬと思ふに、鷄はなやかに鳴きて、外の方に聲して、「明けぬなり」と聞ゆ。おどろき目さめて見れば、まだ人は起き出でず。手水など參りて、さりげなくもてなし居るに、やうやく人々起出でて、局が前に來りて、「おもとはさこそ疲れ給ひつらめ。ねぶたかりなん」といへば、「大勢ごとにて起き居て侍れば、さらにねぶたくも侍らざりき」といらふ。女房達、「いみじくいたき人かな」

打ちあげ―掌を打ち歌をうたひて酒を飲み
つい立ちて―急に立ちて
むじんなる事―不注意な事
よろこび―御禮
小袿―小袖に似たる女の禮服
もちの夜―十五夜

やたけなはに醉くはゝりて、をかしかりける頃、このあそびほそき聲に、屁をこき出したりけるを、かたはらに惟光とかいひける人さかし人にて、つい立ちて、「あなかしこ、殿の御前にてあらぬあやまち仕うまつりてけり。まことはよべより腹をそこなひ侍りて、かゝるむじんなる事はつかうまつりつ。あな堪へがたし、亦も〳〵」といひて、したゝかなる聲に、三四つゞけて鳴らしたりければ、はじめの音もこれがしつるなりと心得て、みな人とよみ笑ひあへりけり。夜更け人しづまりて、彼のあそび惟光を呼びて、「御とくにて、いみじき恥見ずなりぬること、返す〴〵うれしうなん。これはよろこび申すしるしなり」とて、あたらしき小袿に袴そへて與へぬ。惟光が友達によしきよとか言へるもの、これを聞きうらやみて、いつか斯かる事もあれかしと思ひ居りけるに、八月のもちの夜、おなじ御方の彼のあそびが許に入りおはして、例のごと遊び興じ給ひ、やゝ更けゆきて、物の聲も冴えわたり行くころほひ、かのあそび、とりはづして又顯證にこき出したりけるを、よしきよ打聞くまゝに、心あわてて、奥なく大聲をあげて、「いでわれもつぎてひらまし」とぞいひける、いとあいなき心地せられて、殿をはじめ、人々も皆興さめて歸りおはしけるとなん。

とくつかんやうに—富まんやうに

とみの事—突然の事

やごとなき人—高貴なる人

れてあざれ歩けば、神も佛もにくみて皆去りいましき。今はあが妹なる黒闇女こそ、汝がかたはら去らず附添ひて、もろ〳〵のいみじき憂きめをば見すなれ。されどあながちに申す事のあはれなれば、ふたゝび有徳の身となしつべけれど、こはさだめたる外のことわりなれば、ふたゝび有徳なりとも、三年のかぎり過さば命終りなん。それ苦しと思はずば、家をも富ませやりてん」と宣ふ。「今の侘しさに堪へがたきをおもへば、三年の後の命はなにか惜しく候はん。たゞとくつかんやうに守らせ給へ」と申せば、「後に悔言な申しそ」と宣ひて、御帳の中に入り給ひぬ。夜明け家に歸りけるに、昨日までむなしかりし袋に、黄金おほく入りてあり。神のし給へるにこそ、と思ひ居るほどに、風の吹きつくるやうに、樣々とくつけること出來て、なか〳〵もとよりは、たのしき長者とぞなりにける。斯くて誇らはしうのゝしりくらすほどに、三年の日數もはや明日とせまりぬ。とみの事出で來しやうにさわぎ惑ひて、明日こそ死にうせめ、こは如何にすべきとて、おぢわなゝきけるが、あるかぎりの黄金包みに包みもて負ひ、家をすてて惑ひ出でにけるとぞ。

○やごとなき人、しのびてあそびの許へおはして酒呑み興じ、打ちあげ遊び給へり。や

いたづかはしき—面倒なる

吉祥天—帝釋天の女、毘沙門天の妹

御德—御蔭

て人をたぶらかす事もなし得ざりけり。われよりわかき狐どもの、よく化けならひて、高名なるも有りければ、いで我も化けやう習ひてましとて、其術を友達に問ひきゝけり。敎へつるやうに、あたりなる池にひたりて藻をとり、かしらに打ちかぶり見るに、しと濡れて、なめらかなる物なれば、かしらにえたまらですべり落ちぬ。とりて被き見るに、またすべりて落ちぬ。幾度もおなじやうにとりつゝ打ち被きぬれど、たゞすべりにすべり落ちてたまらず。さて大にいらちて藻をとりて、岸のひたひに投げうち、「あな物狂し、斯ういたづかはしきめ見んより、のら狐といはれて世をやすく經なんこそまさらめ」といひて、こう〳〵と鳴きて草むらの中に這ひ入りけるを、釣する人のたしかに見たりけるとて、歸り來て語りけるになん。

○古博打の負け極りたるが、せんすべなくて、吉祥天の御社にまうでて祈りけるは、「斯うたよりなくて、食ふべきものさへ盡きて侍れば、今は年頃ありける所をもあくがれまかり出でなんとす。あはれ御德に、今一度家富み、なり出でんやうを計らはせ給ひね」と、うちなげきつゝ、御帳の前にうつぶしに伏したりける。夜中ばかりに、吉祥天女御帳を出でさせおはして、たへなる御聲にて、「おのれなりはひを勤めず、博打にのみ心い

されー鐵又は革などにて造り、多く集めて絲もて綴して鎧を製るもの
一定ならずー確ならず
うまいー熟睡
守殿ー長官殿
寢ぼれたる聲ー寢ぼけたる聲
信太の森ー和泉國

けり。「此太刀、いかなるさねよき鎧をも通しなんず」と、人毎に見せて誇りけり。されどいまだみづから試みざるは一定ならずとて、月のほのぐらき夜、従者二人具して河原をさして行きけり。かしこに臥せる乞児のうまいせるを見て、太刀引きぬき、ぬき足して歩み寄り、諸手に太刀振上げ、かたゐが腰をかけて眞二つに切りて、やをら逃げはしりて一町あまり來ぬ。されどそゞろに胸をどり足ふるはれけるを、よく念じて、従者にいひけるは、「胴切といふ物は、腕よくかたまらざる人は、切り得る事かたしと、守殿こそ宣ひしか。見よあの奴、いま胴ぎりにぞしたる。さてもこの燒刃のするどさよ。明日友達の人々にかたらば、ねたきまでうらやみあざみなんず」といふ。従者ども、「けしうはあらぬ御太刀にてこそさふらへ。さるにても今ひとたび行き給ひて、彼がさまをも御覧じしらせ給へ」と申す。「げによかゝなり」とて、ふたゝびかしこに至りて、近づき寄らんとする時、かたゐむく／＼と起きかへり、寢ほれたる聲して、「何者ぞ、また來りて打ちたゝかんとはするぞ」とのゝしりけり。世に我ほめする人は、おほかた斯く未練なるものぞ多かりける。

○信太の森のあたりに狐ありけり。あだし狐にも似ず、あさましく愚なりければ、化け

ちやうわん—茶碗

其のきは—其の身分の程

た大なる音にならしつ。男顔に袖おほひて、「などてさはくね〳〵しうもの疑し給ふぞ」といひける。いとをかしき妹背の語ひかな。

○陸奥にある武士、地火爐ついでといふ事すとて、具足など足らはぬ物もとむとて、市に行きける。商人の家に古きちやうわんの有りけるを見て、いみじき物なる、買はまほしと思ひて價を問ひければ、「銀五兩たまはらん」と答ふ。かの武士いぶかしげなる顔して、「こはたゞ一兩のしろにも足らぬものなるを、など五兩とはいふぞ。おのれ一定家あるじならじ。さる故にこまかなるものの價知らざンなり。疾く家ぬしを呼びて來」といふ。あき人、「やつがれ主にて候」といふを、聞きも入れで、「いかでおのれ主ならん。すみやかにまことの主出せ」と責む。商人、「某を置きてほかに此家のあるじ侍らず」といへど、「否おのれはつかひ人なめり。家の主は、そば目にも其のきは見ゆるはや」といへば、商人目尻ひきあげて、彼のちやうわんを取りて、前なる石に打ちつけ、ほろ〳〵と打碎きて、さてのゝしりけるは、「すでにちやうわんは斯くざまに爲しつ。なほ主とは思はざるにや」といひて、腹立ちければ、あさましうなりて、いさかひも止めて歸りけるとぞ。

○受領の子のさしすぎ誇りかにふるまふありけり。人にあざむかれて、太刀一振買ひて

はこ―大便

松山の波―古今集、東歌「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波も越えなん」

野中の清水―古今集「古への野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞ汲む」

そば〳〵に―よそよそしく

羽をならべ云々―白樂天の長恨歌「在ㇾ天作ㇾ比翼鳥、在ㇾ地願爲ㇾ連理枝」

あからさま―假初

此のあそび、はこのしたかりければ、厠に行かんと思ふを、とばかり念じて打語らふほどに、ふと大きなる音、高やかに鳴らしける。さすがにかたはらいたくや、男に向ひて、「只今の音聞き給ひつや」といふ。男も言はんすべなければ、「戀しき人や入りぬらん」など言ひまぎらはし居るを、女、「否とよ、すべて妹と背のかたらひは、神にちかひ佛にいのりて、松山の波をかけ、野中の清水を汲みて、かはらじ忘れじと契りかはしぬれど、人の心に秋風たちぬれば、互にやう〳〵そば〳〵になり行きて、終に手をあがれ行く物になん。そは元こゝろざしのあは〳〵しくて、假初のあだ心より逢初めぬれば、うつろふ心も亦たはやすきぞかし。まことのまめ人の心は然らじ。さる故に我身みづからの恥をすてて、君が心をこゝろみんとす。いかに只今の音にて、我を思す御心はさめ給ひぬらん。さらば御心のうすきなンなり」と、かいひそみつゝ言へば、男、「など然る事は宣ふ。羽をならべ枝をかはさんと契りしをば、いつはりとや思す。あからさまなる過ありとて、契りし事いかでか違ふべき。しかうたがひ給ふなん、なか〳〵にあいなき心地し侍る」といらふれば、女しすましぬと思ひて、「さらばかゝる過しつとて、御心にあきたしとは思さぬにや。さてもうれしき御心ばへなンなり」とて、寄添ひなんとする時、ま

つき散して—嘔き散して

内—禁裡

うけばりて—大ぴらに

舍人—牛飼又は口取などの稱

あそび—遊女

りけん、ゑう〳〵と呼びて、すゞろにつき散して其儘にたふれ臥したる。そこにありける犬ども、つき散したる物を集りて食ひをはり、また侍が口のあたりをねもごろに嘗むる時、人のするぞと思ひて、「あな尊、むげに酔ひしれてわびにて侍るを、斯ういたはり給ふ事のうれしさよ」とて、ぬかづくやうにせしが、また眠り入りてふたゝび起きざりけり。大かた酒のうへにては、かしこき人もいみじきあやまちをもすなり。狂薬とし名づけたるは、げにひが言にはあらざりけり。

○むかし某の大臣とかや、内よりまかで給へる道にて、市中に、ふるもの商ふ家あり。そこに刀の鍔の古しれたる並べありけるを、御車のうちより御覧じて、「あれもとめて來」と宣ふ。御隨身やがて商人のもとに寄り來て、「おのれが鍔めさるゝぞ、價を申せ」といふ。商人あわてかしこまりて、「あたひ二十文にてさふらふ」といらふ。隨身いへらく、「大殿の召させ給へるなり、いかで價ひきくは申すぞ。うけばりて高く申せ」といへば、あき人聲をうちあげて、「あたひ二十文にてさふらふなり」と申しければ、牛飼舍人等まで、一度にはと笑ひけるとぞ。

○色ごのみなりける男、知りたるあそびのがり行きて、添臥して物語してありけるに、

女の市女笠に薄衣を著たる裝束
まきつ—契りぬ
なほ〳〵しからぬ—並々ならぬ
やかん—狐の異名
たうめ—老狐
げしように—顯證に、あらはに
そば—衣の裾

ば、追ひつきて見るに、十六七ばかりなる女の一重めくもの著たるが、著こめたる髮もつやゝかにて、いろ白うをかしければ、とかく言ひよりて、打連れ行くに、さのみ恥ぢらふけはひもなく、ともなふ人も見えねば嬉しくて、にはかにかき抱きて、薄生ひしげりたる所に率て行きて、思ふさまにまきつ。さて袴の紐しめなどして、心に思ひけるは、かゝる野中をなほ〳〵しからぬ女の一人行くべきやうなし、此野は狐あなりとかねてもぞ言ふなる、我をはからんとて、やかんのするなめりと心づきければ、柄に手をかけて、女に向ひて、「おもとはよも女にはあらじ。たうめにてこそあらめ。さらばげしように形をあらはすべし。いかにやいかに」といへば、女うち腹立ちたるまみもてあげて、「まろいかで狐ならん。わぬしの鼻のしたゝかなると、きたなき物のいみじう長きは、わぬしぞ馬にては有りげなる」と聲あらゝかにいふ時、又いらふべき詞もなく、そばとりて足早に逃げ出でてぞ歸りける。「人をうたがひていみじき恥見たり」と、後に語りてぞ笑ひける。

○えせ侍の醉ひしれたるが、烏帽子もうちゆがめ、沓をだにはかで、なえ〳〵くたく〳〵となりて、七條の大路を夜中ばかりに、しどろもどろににじり行きけるが、堪へずやあ

まめ人—忠實なる人

むごに—いつ迄も

寢ほれたる—寢ぼけたる

つとめて—翌朝

栗栖野—山城國愛宕郡の邊にあり

つぼさうぞく—

ひけるが、もとより門はひくし、飛び越えて入らましと思ひて、身のかろらかなるまゝ、左右の柱に諸手かけて、やす〳〵と飛びこえて家に入りける。かくすること日頃になりければ、家主聞き知りていひけるは、「そこはまめ人にて、晝はあき物に心をいれて、しあるき給へば、夜ばかりこそ心ゆくまであそび歩きたまはめ、そは理に侍り。されど夜ふけて歸り給ふとて、門をとび越え給はん事、ようせずばいみじき過やし出で給はん。そは便なきことなり。今より夜中曉をいはず、我門を叩たかせ給へ。すなはち開けて入れまゐらせん」といふ。商人、「さらば嬉しかりなん」といらへて別れぬ。そののちは常にかの家の戸をたゝきてぞ入りける。或夜雪いみじう降りつもり、寒さはげしかりけるに、語らひふかして歸り來ぬ。例のごと彼家の戸をたゝけど、むごにあけず。聞きつけぬにやと猶したゝかに叩きければ、あるじ寢ほれたる聲にて、「今宵ばかりは飛び越え給へ」とたかやかに言ひて、顔ひき入れて寢ぬめり。「かゝる空には宵まどひせんもうべなりけり」と、つとめて商人の語りけるこそをかしかりしか。

○すぐれて鼻大なる男ありけり、世には大鼻の某とぞ呼びける。用の事ありて栗栖野を行きけるに、つぼさうぞくしたる女の、たゞ一人さきだちて行くあり。すき者なりけれ

をたけびて―雄雄しく猛く叫びて
まで―參り
御德にて―御蔭にて
うけばり―晴れやかにたちふるまひ
人がり―人の許へ
あいなし―都合あし

に仰せて、ひき裂きすてんず」と、怒りをたけびて立ち給ふ。窮鬼簀子のもとについ居て、おづ〳〵申しけるは、「我ともがらいかでおまし近く立寄り候べき。ましてこゝは大福長者の家に侍れば、まで來べきやうも候はず」とかしこまり申す。「さらば何とて斯う入り來れる」と問ひ給へば、「さる事侍り、この家主無雙の物惜みにて、年頃をへ侍れば、およそ天が下の寶なかばは皆こゝもとに集ひぬ。されば此ころ天下に貧しきものあまた出來たること、皆この家主の御德にて、我がともがら所得てうけばり誇らはしうのゝしり侍る。此のよろこび申さんためにすなはちまう來つるなり。あな尊、あなめでた。あが佛あが佛」と、そこら拜みめぐりて、いづこともなく出でて去にけりとぞ人の語りし。まことなりや知らず。

○五條わたりに、ひとり住の商人ありけり。それが家は奥まりたる所にて、ほそき道一筋あるに、ちひさき門立ちて、それを入りて家には往來する所なり。この門のかたへに、鍵をあづかる家主は住みて、例も亥の時には、鎖すことをせり。このあき人冬の夜つれづれに堪へで、したしうせる人がり行き、物語して、夜ふけて歸りけるに、入るべき門は疾くさしてければ、鍵あづかる家を起し開かせんもあいなし、如何にせましとたゆた

つれ〴〵と—つく〴〵と
受領—國守
くらまち—倉町、倉の續きて立てる所
うらうへ—裏表
はひり—門より玄關までの間
しとぎ—粢餅、米の粉にて卵の如き形に作りたる餅、神前に供ふ
ほぐら—祠

たふれけり。其ののちは如何になりにけんか知らず。

○大和國なる山寺にある兒、心ぼけ〳〵しく愚なりければ、僧どもも常にあざむき笑ひけり。或夜師のかたはらにありて、大空の星を見やりていへらく、「雲のうちに光りたるもの見ゆ。かれは雨をもらす穴なるにや」といへば、師もあきれて、つれ〴〵と顔をまもりて、「もろ〳〵の病は藥もてこそ癒すなれ。此のしれものが病のみ癒すべき藥なんなき」と、大息つきて言へば、彼兒、「さる藥世にあらましかば、如何たふとからまし」とぞ言ひける。この兒が行末いかに生ひ立ちにけん。

○受領より宰相まで成りのぼれる人あり、あくまで物をしみして、錢一つをも妻子にあたへず、はかりなき大事のものにぞしける。さる故に家富みて、米のくらまち、黄金のくらまちと、うらうへに建てつゞけ居たりける。冬の節分の夜、此家のはひりに、窮鬼入來て、奥ざまを見やりてうかゞひ居り。この家あるじは年頃毘沙門を信じければ、今宵もみあかし參らせ、酒しとぎなど奉りて、あがめまつりけり。斯かるに毘沙門天、ほぐらより飛びおり、はひりの方をにらまへて宣ひけるは、「この家主は財に富める長者なれば、我ともがら皆こゝに集りつどふ。さるを窮鬼などて此のあたりに近づき來し、眷屬

やらひ―逐ひはなち

五節―十一月の中の丑の日に行はれたる朝廷の節會

とはふ―實法、眞面目なること

白薄樣云々―五節の舞の時舞人をはやす語、「白薄樣、濃染紫の紙、まきあけの筆、巴書いたる、筆の軸、ヤレコトウトウ」

きんぢ―汝

さう〴〵し―寂し

ければ、告げまゐらするなり。そは皆貧報の冠者のさする業なり。彼だに逐ひやり給はば、次第になりいで給ひ、よろづ御心にまかせ給ふべし」といふ。行兼、「さるものやらひのけなんには、如何なるわざか侍る。教へ給へ」と手をすれば、「冠者は五節の夜の歌舞を惡みて侍れば、さる聲する邊には寄りも來ぬなり。家に歸り給はば、みづから行ひ給ふべし」といふ。行兼よろこびて、「いみじき御恩を蒙り候ひぬ」とあまたゝび額づきて歸りぬ。されどじはふなる學生のすぢなりければ、かの歌舞といふこと知らざりければ、人に習ひてやう〳〵に明らめける。さて家の內外淸まはりて、注連引わたし、よろづうるはしう構へて、日暮るゝを待ちつけて、母屋のまなかにありて、しわがれわなゝきたる聲を出し、伸びあがりかゞまりて、家のうちを舞ひ歩くことおよそ時ばかりす。さる間に、物の後ひし〳〵と鳴りて、おそろしき鬼出來て、「白薄樣、かうぜんしの紙」などはやしつゝ外の方へ出で行くを、行兼見つけて、「いかにや窮鬼、我が歌舞のおそろしきか」といへば、かの鬼立ちとゞまりて、「あらず、きんぢが舞の手興ありてをかしきを、一人聞かんもさう〴〵しければ、かしこへ行きて、友達のかぎり呼びあつめて來んと思ふなり」といふ。行兼聞くよりたましひ失する心地して、うゝと言ひてのけざまに後へ

が、男を枕上に呼びすゑて言ひけるは、「わぬしのあだごころ今は見果てつ。われ死にうせなば、幽靈となりて、こと人と相語ふ枕邊に立ちて、恨聞えん」といへば、男あざわらひて、「をこの事をも宣へるかな。そも幽靈といへるものは、古き物語文にも、こゝら掲焉に記しありて、裝束よりはじめ、すべて怪しうはあらず、多くは白き唐綾など引重ね、髮長きものとこそ聞け。さればおぼろげの人の出で立つべき姿とも覺えず。おもとは髮人よりはみじかく、もとよりさる衣など一つもたくはへざれば、幽靈とならんことは難しとも難きわざなり」といへば、妻、「何事いふぞとよ。髮みじかく、さる衣なしとて、出たゝじやは。母代のかたみにとて賜びぬる、白き麻の衣あなり。なへ古めきたれど、これつぼをりて、髮著こめて出立たんに、何かたらはぬ事あるべき」といひて、泣き腹立ちて怒りけるとぞ。

○文章生行兼身まづしかりければ、陰陽師安部のうらますが許に行きて歎きけるは、「今日となりては、儋石のまうけだになし。いかにせば此憂のがれなん」と、涙ぐみていふ。此行兼つねに文の道に誇りて、人ありともせずふるまひければ、うらますもかねて惡み給ひけれど、さりげなくもてなして、「とり申さんも大事に侍れど、あまりにいとほし

をこの事―愚な事
こゝら―許多
掲焉―いちじるしく
唐綾―浮織にしたる綾
おぼろげの人―並大抵の人
母代―母に代りて後見などする人
つぼをりて―長きを折り込みて著て
儋石のまうけ―僅かなる貯

まがり―杯
しゞめて―縮めて
いち女―市女、女商人
あそび―遊女

宣ひしは、これがことなり」と、人のいひたる。
○修行者、國々をめぐり歩きて、津國なる山路にかゝりけるに、酒賣る軒の柱に人をくゝりて置きたり。盗人をとらへて殺さんとするにや、出家の身のつれなく見過すべうもあらず、助けて見ばやと思ひて、酒賣る家に入りて子細を問へば、あるじ、「あのやつは旅人にて侍り。今ほど我家の酒を買ひ飲みて、味そこねて酢けありと言ひ侍り。我家いかですけある物を賣らん。然るあらぬことを言ひて、人にもふれ知らすべき者とおもひて、捕へくゝり置きて侍り」といふ。修行者、「賣物をわろしと言へるに腹だたせ給へること、道理あり。されどいみじき罪にもあらざれば、今は老法師にまけて許し給ひなん。さてその酒如何なる味かして侍りし、われこゝろみん」といへば、主まがりに汲みて出すを、修行者とりて一口飲みけるが、目も眉も一つにしゞめて、まがりを打捨て、みづからうしろざまに手をまはして、「いざ我をもくゝり給へかし」とぞいひける。すなほなる修行者にぞありける。
○ふる宮のあたりに仕ふるえせ侍ありけり。すき者にて、女とだにいへば、いち女、あそびのけぢめをいはず、かゝづらひうかれ歩きけり。一日妻心地あしとて臥し居たる

社のかぎり順禮し歩きて、こゝらの錢をこそつかはめ」といひけり。伊勢、大和の名所をあげたる書とや思ひたりけん、いとをかし。

○治部卿通俊卿のもとに、花こそといへる女童ありけり。本書きてさづけ給へれど、手習をきらひて、机によりては筆のしりくはへ、つら杖つき、あくびうちして打睡り居り。北の方常にいさめ給へども、聞入れず。或時は鬼のかほを書き、又はみゝずがきのみやくとしつゝ、すこしも心に入れて習はざりければ、北の方ちかく呼びすゑ給ひて、「物書かぬ人は鳥獸にもおとりて、人にあなづらはれ、笑はるゝぞかし。おとなになりて悔いごとせんより、今のほど心に入れてよく習ひおぼえよ。人の敎ふること、つれなくうけひかぬも事によるぞ」とて、少しひきつみなどし給へば、聲うちあげ、よゝと泣きて、簀子の方に走り出でて、しやくりあげつゝ立ちて、獨言に言ひけるは、「われにあながちに手習を敎へ給ひて、よく書きおほせなば、御親族のわたりの御文のゆきかひのたびたび、せんじがきせさせんの御心なるべし。御みづからの用にたてんとて、人にくるしき目みせ給ふよ。せんじがきの用にはわれははたゞじを」とて、はな打ちすゝりて、ふづくみ泣きいざちけり。「通俊卿秦兼方が歌を難じ給へる時、花こそとは女童の名の樣なりと

通俊卿—藤原通俊、後拾遺集の撰者
本—手本
つら杖—頬杖
みゝずがき—蚯蚓のくねりたる如き文字を書くこと

簀子—縁

せんじがき—代筆
ふづくみ—憤り
いざちけり—甚しく泣きけり
秦兼方—金葉集の作家

菅原孝標―濱松中納言の著者
げす男―下種男、身分卑しき男
御むすめ―更科日記の著者
ひねりならへかし―裁縫せよ
すさまじ―厭はし

人ども、などてすご〳〵と歸り去にたるにか」といへば、盛之いよ〳〵誇りかなるおももちして、「匙とりて額におしあて、某この匙をとりて人をころす事年頃になりぬ。強盜といふとも、いかで命をしまざらん。さればこそ斯くはかまへたれ」といふにぞ、顔うちまもられて言ふことなかりける。

○むかし菅原孝標といふ人の隣に、げす男のありけるが、女一人もたり。此女つねに孝標が家に行通ひて、なれ親みけり。或日、母にいひけるは、「隣の御かたこそ、物語書このませ給ひて、世にありとある物おほかた持たせ給はぬはなし。さばかりならずとも、われも一巻二巻はほしく侍り。いかで伊勢物語、大和物語、この二まきもとめ出でて、我に賜びてん」といへば、母、「ふびんなる事をもいふかな。隣こそ、さきの常陸介にておはせ、御むすめと聞ゆる人も、さやうの書など見あつめ給ふこと、さもあるべし。今日だにくらし侘ぶるげすの家にて、書などとりあつかはんは、にげなく人笑へなることぞ。然るひまあらば、裁縫のかたに心いれて、ひねりならへかし」と、いとすさまじと思ひて言ひければ、父聞きて、「伊勢、大和の物語をほしといふとか。そは言ふまゝにもとめても遣り給ひね。かれ男にしもあらば、今日このごろはさる國々行きめぐりて、寺

しみのすみか物語

上

袴垂―藤原保輔、此強盗の事、今昔物語、宇治拾遺物語等に出づ
はひり―門より玄關に至る間
あかり障子―今の障子
しやつ―きやつ
打物―太刀

○あざな袴垂とつきたる強盗ありけり。同類をひきゐて、醫師盛之が家の垣をこぼちて入りぬ。さて打入らんとするに、如何なるにか、足すくみて動かず、十餘人みな同じごと足はたらかざりけり。せめて歩まんとすれど足すゝまず。あるべうこそあれとて、引返して、皆出でて去にけり。しもべなる者がやく〳〵といふに、目さめて、起出でて見れば、盛之はひりに向ひたるあかり障子のうちに立ちて、藥袋なる匙を諸手にとり、頭にさゝげつゝねらひ居たり。此しもべ、「ぬすびとは疾くまかり去りぬ。何事し給ふぞ」といへば、盛之ほくそゑみて、「さこそあらめ、しやつ打入りなば、五臓六腑、こと〴〵くなますになしてん」といきまきいふ。しもべ、「かたきに向はんずるには、打物をこそ持たせ給はめ。藥あつかひ給ふやうに、匙を持ち給ふこそ心もえ侍らね。さるにてもぬす

わかき時、雨ふりあるは徒然なる頃、旅人のあつまりてさまぐ\の物語せるを聞きて、その中わらはしきかぎり選りひろひて、まんなもて書きつゞりて見しが、これは文字のすゐ處もおぼく\しくあやしければ、人にも見せで打籠め置きぬるを、このごろ反古の中より見出しつるに、蠹といふ蟲ぞところ得て住みはびこりたる。女子なるもの、これ假字に書きてたまひなんといふを、をりふしあつけに惱みてもこよひ居りければ、さらばとて筆ずさみとはなしつ。すべてはもとのまゝなる中に、少々はにはかに作りまうけて添へたる事もあり。とまれかくまれよしなしごとなれば、これもまだ人に見すべきものにもあらず、たゞ古き反古のかびくさゝを、さながらとりて書いつけつれば、蠹のすみかとや名づけてんと、筆なげすててそのまゝ臥しつ。

石川雅望

享和壬戌仲秋大郁謁書於日猗客舍

里諺鄙話之不可入文也。譬之猶隘巷僻地之不可以起美觀也。夫豫章楩楠伐于山林。工匠掄之廼楣廼梁。以構大廈宏屋者。在爽塏之地則易成功也。在湫隘之地則難矣。而大匠善成之。紫氏清氏我邦之大家文姫。而文藻之深山茂林也。良幹鉅材英艶鬱葱。以至偃蹇掘奇。無所不有焉。伐以構大廈在其人乎。五老山人。少時每聽賓旅戲談。有圓轉滑稽可解頤者。則筆之以代蹴鞠圍棊之樂。爾來十數年。爲蠹魚之食者大半。今玆長夏曝書得舊稿於簏中。悉以古文修之。如其奇古溫雅婉曲秀麗。不待余言。善度材於二書中。經營一大殿堂。其樸斲彫鏤之美。粲然溢目。隘巷僻地儼如通邑大都。心匠之巧不亦大乎。余開卷而嘆。卒卷復嘆。三嘆之餘不能已已。終援筆題其篇端。蓋山人結髮與余交矣。放舟於雪夜。賞花於春園者。既歷三紀。山人天性好學。才氣輕俊。博涉羣書。其志將繼芳躅於宇治亞相云。

は、これにますめる草紙もあらじはやと、尋幽亭載名しるしつ。

いでやあやしきは、このごろ世にとりはやす物語文よ。さるは、おのれだに知らぬみやび事をさへとりまじへ、ほゝゆがめて、あながちに口さきらとぎてのゝしるから、かの鳴く聲鵺に似かよひて、あらぬ獸の化けそこなひたらんやうに、うたてこちなき書きざまをもすめり。まして忠孝のうへをしもひときはあはれに取りなさんのこゝろむけより、いまはしくむづかしき筋をさへむねと取出でてものすれば、なか〳〵見るにけうとく、讀むに堪へざるところ〴〵ぞ多かる。これはさる類とは事たがひて、目やすくやすらかなる筆づかひもて、現世の榮に仙境のながく久しき樂しさをさへとり加へて、こよなうめでたく作りなし給へれば、げに〳〵のどけき時代には、つき〴〵しう事あひたる心地ぞする。もとより彼のにのまひめくしわざなるを痴がましとて、こゝろとものし給へらざりしを、あながちなる某がしひ言にまけて、しぶ〳〵にものし給ひぬるとか。これらをこそ宮木ひく梓の山の梓に彫りて、斧の柄のながき世につたへんには、あらまほしういたり深き文とはいふべけれ。まして生先いはふ若き人々の言忌する春のあしたなどに、うちひろげ讀み見んに

の如くにぞありける。此三人みな百歳ちかく生きのびけるが、一日天晴れたる日、紫の雲墨縄が家の庭にたなびくと見えしに、蓬萊にて逢ひつる魯班仙人あらはれ出でて、「月宮造營の御いそぎなり、いざ」とて、墨縄が手をとりて、雲居高くぞ上り行きける。山人のもとにも、同日にあまた仙人おり下りて、山人姫宮を玉の輿に乘せ、又二つの瓢をば玉の筥にをさめて、仙樂たかやかに奏して、天上へこそ昇り行きしが、其後の事は知らじと、世には語り傳へたるとなん。

かたおひ―十分に成長せぬこと

こゝら―許多

鰥寡孤獨―窮民なり、老いて妻なきを鰥といひ、老いて夫なきを寡といひ、幼にして父なきを孤といひ、老いて子なきを獨といふ

路行く人云々―成語考「道不レ拾レ遺、由三在上有二善政一」

なりとは、かたおひのみどり子まで、聞き知らぬ者もなかりけり。かくて人々は都にのぼりつきて、叡慮の忝き次第を奏し聞え奉りければ、父帝はもとよりにて、御母御息所御よろこび大方ならず、姫宮に御對面ありて、つきせぬ御物語どもこゝら多かりぬべけれど、かぎりある御わたりの事はえ書きとるべくもあらねば、こゝにはもらして言はず。棹丸松光遠平なども、とり〴〵に官爵賜はりて、その功を賞し給ひける。山人は姫宮ともろともに東に歸りつきて後、國を治めて民をあはれび、おのれを賤しくして賢をたつとび、鰥寡孤獨を扶持し、孝子の家にはみづから到りて其門に旌を立て、あるは門前に鼓を置きて、民の愁ふる所を聞き、賞を厚くし罰を輕くして、大に仁政を行ひければ、一國の中に盜賊なく、路行く人はおちたるを拾はず、百姓は田を讓りて、國民父母のごとく親みなつきて、有りがたき國の守よとめで仰ぎ稱しけり。さるはよのつねの守のごとく、任あくといふ事もなく、生ける限り爰に住みて、やん事なく榮えける。船主法師は三昧堂に籠りて、不斷念佛怠らずつとめて、尊き往生をぞ遂げたりける。さるによりて、其わたりの坂を聖の坂とは呼びならはしけるとぞ。墨縄は都にありて、その住所は隔つれど、山人姫宮とひとしく、齢高くなりぬるまで貌おとろへず、壯年の時

三昧堂—念佛三昧を行ふ堂

やすからぬ罪になん」とて、手をとりて泣き給ふ。墨縄その御手を引きはなちて、かゝるめでたき折に臨みて、言忌こそし給ふべけれ。いざや山人ぬしと諸共に、此御車にめさせ給ひなん。おのれ都を出づるほど、手づから作りし網代の車は、婚姻を賀し奉る寸志ばかりのさゝげ物なり。かの隋帝の隨意車にならひて、夫婦の人を乘せ奉らば、牛をかけずして此車おのれと動きめぐりぬべし。いざ〳〵御立あるべく」と催し立つれば、國の守介もろともに手をつかへて、「御供の人數すくなくば、途中のほど覺束なくやと用意させて候。それ〳〵」と呼はれば、郎黨はじめあまたの百姓、烏帽子白丁よそほしく入り來て、内外せましと並びたり。松光遠平棹丸も、ともに御供仕らんと、御車の前後に引添ひたり。船主法師見よろこびて、「おのれはいみじき身に候へば、御送りも仕りがたし。これより此所に一字を建て、御佛への報恩に三昧堂にこもるべし」といふ。げに此詞むなしからで、後々たふとき御寺となりて、竹芝寺と呼びたるは、此ゆゑよしとぞ傳へたる。扨も此車は、牛をもかけず人にも引かれで、おのづからめぐりつゝ、都をさして上りけるは、不思議といふもあまりあり。されば墨縄が道に巧なりし事は、千載の末の世にも、かたり傳へいひつたへて、飛騨の匠と稱し呼びて、宇宙第一の木工

えの瓢を携へて簀子のもとに座をしむれば、棹丸はしり寄りて、「思ひよらぬ親人の御歸國」と、額をつきてよろこぶ。船主いひけるは、「おのれ勢多にて人々に別れて後、猪名部ぬしの許に行きて、かう〳〵と語りつれば、姫宮の御身の上甚だおぼつかなし、わ法師疾く追ひつき奉りて、見えがくれに御守護し奉れと申されて候へば、其まゝやがて御あとを慕ひ、いそぎ下りて參りしに、さきのほど姫宮の車をさして走らせ給ふ心得ずと、あとめにつきて追ひつきて參りし所、さやまの池に到り給ひて、御身を沈め給ひなんとす。やがて抱きとゞめ參らせて、さま〴〵こしらへ奉る所に、勅使の通らせ給ふと聞きて、かたへに忍び候を、墨繩ぬし早く見つけ給ひて、ともに御車に奉りて、これまで御供し奉りつ。さても叡慮のかたじけなさは、かゝる老法師さへ骨にしみてありがたくこそ。むすめも嘸うれしかりなん」と、空を仰ぎてはら〳〵と泪をそこぼしける。げに世を捨てし人の上にも、恩愛の道ばかりは忘られ難きほだしなるべし。母は御車の轅にとりつきて、「おろかなる女の心に、つらきことのみ聞え奉りしは、にくい嫗よと思し給はん。ゆるさせ給へ」と聲をあけて、頭を轅に打附けて、手をあはせて打泣きぬ。姫宮御車よりまろび出で給ひて、「ゆめさる事な宣ひそ。老人にしかばかり憂目を見せ參らせしは、

木工の頭―木工寮の長官

榻―車の轅を載する臺

部殿の一方ならぬ御厚志と、皆々手をするばかりなり。墨縄又いひけるは、「おのれ辭退し奉れど、帝の御かへりみ厚く、初に木工の頭に任ぜられ、月頃のほどに昇進して、今は三位の中將を給はりつ。とにかくに、能ある者をすて給はぬ聖朝の御時にしも逢ひ奉れるは、不肖の身の幸なり」といふ。時に守介聲をそろへて、「山人ぬしは只今より勅使にそひ奉り、姫宮ともろともに都に上り給ひて、詔書の御受申さるべし。姫宮はいづくにおはします」と、のび上りつゝ見まはせば、人々は目を見あはせて、もし死にうせやし給ひつらんと口にいはねど、とり〴〵に又も胸をぞひやしける。墨縄すこし打ほほ笑みて、「さきのほど、思ひよらずさやまの池に身をなげ給ひし姫宮の御なきがら、人人拜し奉られよ」と、庭に下りて、門に立てたる御車の榻とりのけて、笏もて轂をうつと見えしに、此車おのれときしりて、緣のはしに到りて止りぬ。さて車の御簾おのれとさら〳〵と卷上りければ、姫宮御顔を出し給ひて、「まろがながらへたるは、みな墨縄がかす〴〵の情にかゝる命ぞ」と宣ひて、御手をあはせ給ふぞかたじけなき。いつの間に、いかにして姫宮をば御車に奉りし事と不審すれば、「其由おのれ語り申さん」と、仕丁どもの中をかきわけて立出づる人あり。見れば、勢多にて別れし船主法師、右の手にひた

すまひ爭ひて—拒み爭ひて

神人—仙人

迯げかくれて人笑へなるめを見んより、都にひかれて頸切られん」といふを、嫗は聞きもいれず、ひたすらおし出さんとするを、すまひ爭ひてある折から、表の方に車のきしる音して、勅使に引添ひて守介など入來れば、人々あわてて緣を下り、地にひれふして禮をなす。勅使はのどかに座につき給ふ。山人は殊に胸とゞろきて、頭を上げずうつぶし居り。勅使人々を見やり給ひて、「おの〳〵恙なく下りつきたる事、よろこばしさよ」と宣ふを、仰ぎ見れば、勅使とあるは猪名部墨繩なれば、人々おどろく事大方ならず。いかにも子細こそあらめと守り居れば、墨繩かさねて、「勅諚のおもむき拜聽せられよ。山人宮を誘ひ奉りし事、朝家の御掟にてはいみじき刑にも行はるべけれど、仙緣のひく所誠に宿世の契なりと墨繩がいさめ、且さいつ頃神人の御夢に告げ給ひしと符節を合せてひとしければ、御感大方ならずして、こたび姫宮を給はりて、山人が妻となして、宿緣むなしくすべからずとなり。且山人が容貌才學衆に秀でたる事、朝家にも類を見ず。よりて當國の守に任ぜらるゝとの綸言なり」と述べければ、親子三人は夢に夢見し心地して、御答さへしどろになりて、ひたすら疊に打伏して、うれし涙せきあへず。松光遠平は、緣のもとにて小躍しつゝよろこび居り。たゞ何事も猪名

すくやかに―手荒く

あらん、かしこに行きて身を投げばやと立上り給ひしが、さすがに御心や殘りけん、いくたびとなく戶の隙よりさしのぞき給ひつゝ、さて御裾をひきからげて、川下をさして走り給ひぬ。山人はとにかくに、生きてあるべき身にあらずとて、刀とりて死なんとするを、松光遠平すがりついて留むれば、心あわてて、「よくこそ留めて給ひつれ。やよ山人よく聞きてよ、海をわたり山をこえて、やんごとなき御方のはかなき東に下り給ひしは、おことならではと思ひつめ給へる、ありがたき御心ざしにて、いとほしさ忝さは、此嫗が身にとりては、聞え奉るべき詞だになし。それをつれなく押出して、すくやかにふるまひしは、わぬしが命の助けたさぞかし。かばかり思ふ嫗が心を、十が一も思ひやらば、ながらへ居てくれよ」とて袖をしぼれば、棹丸も齒をくひしばる。松光はさらなり、遠平さへ目おしのごふぞ道理なる。松光立つて切戶を明見れば、蜑宮は見えさせ給はず。いかにいづくに行き給ひけんと見やる向ひより、村長走り來りて、「思ひよらず都より御敕使下らせ給へり。守殿介殿をはじめ皆御供して此家へおはす。用意あれ」といひて引返しいぬ。「扨は山人が仕業なる事顯れて、からめて罪せさせ給ふなるべし。疾くこゝを迯げていね」と、母は心そゞろになりておし出す。山人はためらひて、此上に

あそび、くゞつ―共に遊女
心あさえたる人―不謹愼なる人
水あせて―水涸れて

きの隔こそあれ、女の道にかはりはあらじ。父母の詞をまたず、忍びて密男まうけて、あだ〳〵しきふるまひして、聞きにくき名をとりたらんは、あそび、くゞつに劣りたるえせ女とこそいふべけれ。さやうに心あさえたる人を、山人が妻とはなしがたし、疾く疾く歸らせ給へ」といひさして、見かへりもせず縁に上りぬ。姫宮いとゞ御顏をあからかになし給ひて、「理はさにこそあれ。母御息所に見え奉るとも、さこそはいさめ宣はめ。まろも早くより此事幾度か思ひかへしぬれど、心にまかせぬは、あやにくなる思ひになん。惡しつらしと思しなば、つみひねり給ひても、山人ぬしのかたはらさけず、此家にあらせてたべ」と戸にすがりて泣き給ふ。松光も遠平も、姫宮の御心をおしはかり參らせて、いとほしとは思ひながら、さしあたりたる理に云出づべき詞もなく、頭かたむけてぞ居たりける。姫宮御涙をおさへて、此家をさしのぞき給ひて、「まさしく去年の夏晝寢の夢に入來りて、物語らひし家にたがはず。其時見し瓢も、さながらかしこに懸りてあり。いかなれば見し夢とは事たがひて、現はかくぞ苦しき」とて、又うちふして泣き給ひしが、とても生きて都に歸るべき身ならねば、こゝにてともかくもなり果てんと、前なる川を見給ふに、水あせて見えければ、死恥見んはうたてかりぬべし、此下の瀬に淵や

高砂のさいさごの―催馬樂、高砂「高砂の、さいさごの、高砂の、尾上に立てる、白玉椿、玉やなぎ云々」さいさごは眞砂

たかきひくき―尊卑

の御手をとりて簀子にいざなひ奉る。山人はそれと見るより、汗を五體にながして壁に向ひ居り。姫宮はのどかに歩みて座につき給ふを、母も棹丸もたゞあきれて、口を開きて見居たり。姫宮は會釋し給ひても、恥しさに物も宣はず、扇かざしておはします。松光遠平は子細を知らねば、「高砂のさいさごの」と、謠ひのゝしりて騷ぐ。母つい立ちて姫宮の御手をとり、庭の切戸の外へつき出し、あらゝかに戸を押たてつ。姫宮おどろかせ給ひて、「まろは山人の妻なるを、などてはしたなきめをば見するぞ」と宣ふを、打見やりて、「たとひ御門の姫君にもあれ、佛神の再來にもあれ、我子の爲には惡魔とも鬼とも夜叉ともなぞらふべき人にはおはせず。さるをいかで我家に止め參らせん。いづくへなりと御心の儘に疾く立つて行き給へ」とすくやかにいひて、かけがね掛くるを、松光遠平見て、思ひしには事かはりて、すさまじきけはひかなと、爪彈して守り居り。姫宮戸を打叩かせ給ひて、女の身にて、遙なる鄙の旅路にあくがれて、わりなう苦しき憂目見つるも、契りし人に世々をかけて、添ひとげなんの心ぞや。玉敷ける家も何かせん、蓬葎に埋もるとも、戀しき人ともろともに住ひてこそ本意ならめ。たゞこゝあけて入れよかし」と打叩きて泣き給ふ。姫聞きて頭打振りて、「いでやそれは皆ひがごとにこそ。たかきひく

はふらかし〳〵流浪させ

そゞろはしく〳〵浮き〳〵と

我よく聞きつ。汝が申す所を聞くに、かならず彼姫宮を誘ひ奉りしにたがふ事あらじ。叛逆謀反の輩は、其罪一族に及ぶと聞く。我命は惜しからねど、老いたる母人をさへ殺し奉らんとする人畜生。二つには、かぎりなき帝王の御むすめ、いやしき山がつの身として、かしこくもちかづき馴れ奉りしだに膽ふときわざなるを、奪ひ奉りて下りしとは、言語にたえたる大惡人め」と、怒れる眼に涙をうけて、のゝしる詞のはし〴〵にも、孝養の心切なるを、さる兄にはひきかへて、我ながらあさましくけしからぬ行して、母兄にうきめを見せ、姫宮をさへあらぬ身にはふらかし奉りし、あはれ空おそろし、勿體なしと思へば、此身をきだ〳〵に斬り裂いても猶あきたらずと、額を疊に打著けて、よゝ〳〵とばかり泣伏しける。母も枯れたる聲の下に、「これもかれも、さきの世の約束事にはあるべけれど、世にためしなき罪人となりて、頸きられて死ぬる子を、見す〳〵いかで見てあらんや。我をさきに殺せかし」と、伏したる山人が背にとりつき、身をもだえて泣きしづむ、母の心のいとほしさ、胸にせまりて棹丸も、箒をすて地に倒れて、袖を嚙みてぞ泣きにける。かゝりとだにも知らざれば、松光を先にたてて、竹輿をしづかに舁かせて、遠平つき添ひ奉り、そゞろはしくいさみ立ちて庭先に輿をおろさせ、姫宮

入れば、母は心から悦びて、「恙なく歸り來しや。心もとなかりしを」と云ひてそゞろ涙ぐむ。さてさまぐ＼と語らひかはして後、山人いひけるは、「打つけなる申しごとながら、御聞きうけ給はるべし。よき媒の候て、今宵のうちに妻を呼びむかへんと存じて候」といへば、母驚きて、「歸り來て其まゝ俄に妻を迎へんとは、子細ある事か。いづくいかなる人の娘ぞ」と身をすり寄せて問へば、山人さすがに頭かきつゝ、口ごもりて詞を出さず。棹丸見やりて母にむかひて、「母人の御こゝろは知り候はねど、俄の妻さだめ心得ず、たやすく承引きがたし」といへば、山人手をつきて、「此事御聞入れ給はらずば、媒へつがひし詞も反古となりて、面目を失ひ候ひなん。扨は生きても世にありがたし」といへば、母、「さばかり思ひ定めたらんには、婚姻はゆるすべけれど、その娶と定むるはいづこの誰が娘ぞ」と又問へば、山人顏あからめていひ出でず。棹丸聲をあげて、「汝が妻とせんといへるは、かたじけなくも帝の御いつくしみ深しと聞えたる、女一の宮にてましまさん」といへば、山人魂消ゆるばかりになりてさしうつむく。棹丸あたりなる篭取つて、したゝかに打ちすゑていひけるは、「汝知らずと思ふにや。御門の御いつき娘を、武藏の國なる衞士が奪ひ奉り、勢多の橋をきり落し、東の方へ迯下りしとの街の風說、

おふけなき―身分不相應な
宮も藁屋も云々―上下の隔なき意、新古今「世の中はとてもかくても同じこと宮も藁屋も果てしなければ」
實法―まじめ
あいなき事―とんでもなき事

に召されしに、目代の申されしは、都にて女一の宮御行方知れずならせ給ひぬ、風のつてに聞けば、法師の連れて退きまゐらせしとも、又武藏の國なる衞士のさそひ出でたりとも、とりぐ\に申しつたへぬ、もし姫宮の當國へいらせ給はば、留め置きまゐらせ、ひそかに訴へ出でよと申されつ。いかなる事にて、やんごとなき御方の、玉の臺をしも捨てて迷ひ出で給ひつらん」といへば、母、「武藏の國の衞士とあるは、心がかりにこそあれ。されど我山人などは、さやうのおふけなき心はよもつかはじ」といへば、「宮も藁屋もへだてなきは、戀といふ曲物なり」など、打つぶやきて、村長は出でて歸りぬ。母は衞士といふ文字の胸にこたへて、思ひけるは、我子山人はみめすぐれし生れなれば、もし人に戀ひられて、心の外なる事やし出しけん、もとより心實法なれば、たやすく惡しきおこなひはせじ、されど村長がいひけんやうに、戀といふ曲物こそわりなき物なれば」あいなき事やし出しけんなど、さまぐ\と思ひわづらひつゝ、打歎きてぞ居たりける。扨又山人は、遠平にかしづかれて、日數經て此國に著きけるが、「人あまたして家に歸らんは人目いかゞなり。人々はおくれて來り給へ、我はさきだちて家に行くべし」とて、荒蘭が崎よりたゞ一人して歸り來りける。折から兄なる棹丸も來合ひて、悅びて打連れて

あをだ―便輿、臺は竹を編みて笊の如く造りたるもの、あんだに同じ

衣匂はす引馬野―萬葉集、持統天皇「引馬野に匂ふ榛原いりみだれ衣匂はせ旅のしるしに」

しはぶきして―咳ばらひして

御供仕れば、彼等にも御送の用意させて候なり。田夫山がつのあたりには、車なども候はねば、かしこけれども、あをだにめさせ奉らん」と、いひさま、庭に下りて、藁沓はきて待居たり。姫宮の御よろこびは更なり、山人も力を得て立上れば、松光は勇み立ちて、姫宮の御手をとりて、竹輿に乗せ奉る。山人松光は馬に乗れば、あるじは弓矢とりて、しりへに立ちて歩む。百姓どもは、いみじくつゝしみ警衛して歩みつれたるさま、昨日には事かはりて、いさましき旅のよそほひなり。げに故郷に歸らんには、錦著て行くといふ古事も斯くやらんと、山人はそゞろ嬉しくて、衣匂はす引馬野を、いそぎて馬をぞ打せける。

○あじろ事

竹芝が母は、山人を出立たせやりて後、棹丸が許にありけるが、墓詣に路遠しとて、此頃はもとの家に歸り居て、山人が歸り來ん日を指を折りて待ちくらしける。今日も例のごとく、山人がために影膳などまうけすゑて、都の事をのみ思ひつゞけ居たるに、村長しはぶきして入來りて、「さて〳〵希有にあやしき事を聞きつ。今ほどおのれ守殿

様といさめければ、「さらば此命のかはりには、君達の御供仕り、ともに東へ下るべし」といふ。さて百姓どもを呼寄せて何事をかさゝやけば、皆あと答へて歸り去りぬ。遠平くはしく子細を聞きて、女一の宮なる事を知りて、「かゝるいやしき山がつが家に、しばしも御足をとゞめさせ給ふ事、かたじけなやかしこや」といひて、よろこぶ事かぎりなし。「さるにても此猫をもたせ給へりしは、よく〳〵御心にかなひたる物なるべきを、あへなく打摧き候事」といへば、姫宮、「まろもながき旅路におもむけば、かゝる物もち來べしとは思ひもよらず。しかし身にもかへざる瓢一つを手にもちて出でたりしに、思はず此瓢の中に猫の入りてありたるが、今日の幸とは成りにたり。かく危きを免れぬるも、皆これ墨繩がたくみの道の奇特なり」と宣へば、「げに〳〵こよなき良工かな」と、あるじも手打叩きて感じけり。程なく夜もほの〴〵と白みゆけば、人々立出でん用意するに、表にあまたの人音すなり。何事ぞと見てあれば、宵に來りし百姓ども、あやしの竹輿舁きすゑ、馬二三匹引來て、一同に地に伏して、「御送の支度仕りて候」と申す。山人心得ずおもへば、あるじ遠平いひけるは、「此一村の者どもは大方我一族にて、曾祖の時より田をわかちていとなませつる者どもなれば、一人もそむく者候はず。今日おのれ

のしる。姫宮、山人にすがりつき給ひて、「いかに心地はたしかになり給へるや」とて、手足とりて撫でさすり給ふ。あるじ遙に飛しさり、頭を疊に打附けて云ひけるは、「さてさて思ひかけざる事にて、とも〴〵御命にも及び申すべき所に、思はず猫の機關を見て、御身のうへを知り候事よ。おのれはさきに御宿を參らせたる榛原が子に、太郎遠平と申す者にて候。其折からは遠國へ罷り候所、おのれが留守をはかり候て、女めと草飼めと語らひあはせ、父を殺さんとたくみて候を、御方々の力を以て父が命を救はれて候事、生々世々わするべく候はず。父は去月の十五日身まかりて候へども、臨終の節迄も、御方々の大恩のありがたき事を申出でて候。おのれも、いかでこの大恩、身をなきになしても謝し奉るべくと、常に心にかけて候を、其報は仕らず、剰へなやまし煩はし奉り、いみじき苦痛をさせ參らせしは、極めたる大罪にて、なくなりし父へ對して不孝此上もなく候へば、位牌への申わけ、御かた〴〵無禮の詫はかくこそ仕うまつらめ」といひさま、猫を切りたる刀とりあげ、やがて腹に突きたてんとするを、山人松光はやく取りつきて引留め、刀もぎとりて鞘にをさめて、「盜賊とうたがひ給ひつれば、さいなみ給へるも理なり。もし自害し給はんには、我々もとも〴〵生きてあるべきやうなし」と、樣

めてあざむ―賞しあきれ驚く

して、猫は二つになりて飛去りぬ。あるじかの猫のかたわれを取上げ見れば、木にて作りたる物にて、腹の中には小き車どももいくつも作りて入れてあり。「扨はまことの猫ならず、機關を以てかくばかり働くやうに作りたるは奇といふべし」といへば、百姓等もてんでにかの猫をとり見て、「世にはかゝる奇妙の細工もありけり」といひてめであざむ。あるじがいはく、「かくたくみに機關をつくる人外に聞及ばず。もし此猫は飛騨の國人なる猪名部の墨繩ぬしや作り給ひけん」といへば、姫宮耳にとめさせ給ひて、あるじが方を見やり給ひて、「汝墨繩を知れりや」と宣へば、あるじ、「さん候、かの人は去年わが家に宿り給ひて、我父の命救ひ給ひし恩人なれば、いかで名をしも忘るべき」といへば、松光むくと起上りて、「あれは墨繩どのの弟子なり。これなるは、墨繩ぬしの弟にておはす」といふに、あるじ大におどろきて、「いかにやいかに」といへば、松光、「われ去年師なる人にともなひて、草飼といふものをあざむき、榛原の翁の命助けし事ありき」といへば、あるじあわてて庭に飛下り、二人がいましめ引ときて介抱す。山人もやうやく息出でけるを、あるじ抱きて上座にするて、湯よ藥よといひてさわぐ。百姓等は子細は知らねど、俄に主がうろたへて兩人をいたはりあつかふを見て、とも〴〵立走りて騒ぎの

水くらはせて言はせよ」とて、山人松光を階子にくゝりつけて、仰向にふさせて、桶の水を口へむけて傾くるに、水目口に入りて苦しさいふべからず。姫宮かけ出で給ふを、百姓等おさへてうごかし奉らず。山人、「あまりに堪へがたければ、有のまゝにいふべし。しばしなさいなみそ」といふに、又二人を引起して、「さらばありの儘にいへ」と責むる。山人いひ出でんとせしが、まことを言はば、彼等いよ〳〵盗人なりといふべしと思ひければ、とやいはんかくやいはんと思ひめぐらして、口を開かず居れば、「口ごもるは、かどはし來つるにたがはじ。猶打て」といへば、百姓等立代りて、力にまかせて打ちすゑければ、今は山人松光も息たえ〴〵になりてうち倒れぬ。かゝるに、姫宮の居給へる筬の中より、から猫の飛出でて、あるじが前をはしり歩きて狂ひあそぶ。あるじ目をつけて、「我家にかゝる物を畜はず、不思議の猫の樣よ」と守り居れば、猫はさま〴〵狂ひて、人を飛びこえて走りありきて、あるじが肩頭に飛びつきなどすれば、主大に怒りて、「希有の猫めがふるまひかな。盗人を糺問するさまたけなり」といひて、佛壇の下より刀とり出でて、すらりと拔きて、飛ばんとする猫をはたと切れば、木をきるやうなる音

がゝめき―がやがや言ひて

網代―氷魚をとる爲に、冬川の瀬に竹又は木を編みて網の代りにするもの

ひはぎ―追剥

上臈―身分よき女の稱

太鼓をしたゝかに打叩く。山人松光も、心あわてて齒の根もあはず、そゞろにふるひ居たるに、此一村の百姓と見えて四五十人ばかり、手ごとに棒熊手など持ちて、がゝめき入り來て、「いかに盜人を捕へ給ひつるか」と、かしましくさへづりて立並びたり。あるじ、「盜人は此兩人なり。疾くくゝれ」といへば、一人すゝみ出でて、松光山人をしたゝかにくゝり上げつ。此あまたの百姓等、主をうやまふ事さながら主に仕ふる如くす。扨兩人を縁より引下して、百姓等竹をもつて手々に打叩く。あるじ兩人にむかひて、「我一村すべて盜人の入來る時は、家ごとにかく鼓をうちて合圖となす。かばかりの設ありとも知らで、網代に入りて命をうしなふは、遁れざる所の天命なり」といひてあざ笑ふ。山人、「われ〳〵は山賊ひはぎの類には候はず。ゆるさせ給へ」といへど、いかで聞くべき、たゞひたすら打ちたゝく。あるじ、「かやつ等が持來りし笈のおもかりしこそ心得ね」といひて、奥に入りて、笈の戸をひらきて見れば、思ひよらず五衣著て緋の袴めしたる、さもけだかき上臈の立ちておはしければ、驚きてうしろざまに倒れぬ。百姓等もはしり入來て、みな肝を消して、「生きてはたらく辨財天にや」とて、おどろき合へり。あるじ起上りて、「御身はいかなる人にてましますぞ」と問へば、姫宮いらへもし給はず、御袖を

我師は何人の申されて候ひき」といひて、汗おし拭ふ。あるじ、「御寺の草創はいつの代にて、誰が建立し給ひける」といへば、何人の申されて候ひき」といひて、汗おし拭ふ。あるじ、「御寺の草創はいつの代にて、

ぐらして、「すべて樹立高き所にて、日の影をうけず候ゆゑ、くらまと呼び候と、我師は申されて候ひき」といひて、汗おし拭ふ。あるじ、「御寺の草創はいつの代にて、何人のひらかれて候か」といふに、松光はたとつまりて、しばし頭かたむけて拶云ひけるは、「聖德太子守屋を亡して後御建立し給ひき。されば佛法最初の御寺にて候」といへば、あるじ打笑みつゝ、「それは四天王寺の事には候はずや」といへば、松光、「四天王寺も鞍馬寺もひとつ匠がつくりて候」といふに、あるじ興さめたる顔して、「本尊は何佛にておはすか」と又問へば、松光鞍馬の本尊を知らず。きやつよく知りてありながら、我に問ふなるべし、それにあらぬ事をいはゞ惡からんと思ひて、「本尊は〳〵」といひて口ごもるを、せめて問へば、松光やうやく答へけるは、「當寺の本尊は定りたる事なし。阿彌陀をすゑ奉る時もあり、又勢至にも仕り、又地藏にも、さま〴〵によりてすゑなほす事にて候」といへば、あるじ聞きもあへず、目を大きくなして打にらみて、「はじめより心得ぬ看經のしざまと思ひつるに、我おしはかりにたがはず、汝はまことの法師にはあらじ」といひさま、つと立ちて、松光が頭巾引きかなぐれば髻あり。「さては一定盜人ならし。法師に似せて人を欺き、物を奪はんとするならん。今見よ」といひて、入口に釣りたる

物にて候―あれで御座る

るじは庭に下りて、花折りて水にそゝぎて、位牌の前なる土の瓶にさしつ。松光立ちて佛壇の前に寄りて、あまたたび拜して居り。もとより幼時より匠の道のみならひて、一字をだに知らざれば、まして經文などといふ物は夢にだに見たる事なし。たゞあるじに怪しまれじと思ひて、口のうちにて、何事とも知れぬ事をぶつ〳〵とつぶやきいふ。山人はをかしさを念じてあるじに向ひ居たり。松光折々聲をあげて、唐國人の寢言いへらんやうなる聞きわくべうもあらぬ事をいへど、あるじはことに心もつかず、立ちて食物のまうけなどす。あるじ食膳をすゑて、「いざ聞しめせ」といへば、松光看經やめてこなたに來て、ふところより金椀とり出でて、「飯を盛りて御佛に參らせん」といひて、奥にもち行きて、笈の戸をひらき嫏宮に參らせ、たちかへりて膳につきて喰ふ。「御僧はいづくに住持し給へる」と問へば、松光口より出づるにまかせて、「鞍馬寺」と答ふ。「鞍馬はいづれの御坊にて候」と問へば、松光、「させる坊にて候はねば名も候はず」といふ。あるじ、「いかで名のなき御坊や候はん。戲れて宣ふにこそ」といふ。松光汗になりて居れば、「御山を鞍馬と呼び候は、故よしある事にて候や」といふ。松光、「鞍馬となづけ候は物にて候」といひて、答もしどろなれば、山人も手に汗をにぎりて居り。松光思ひめ

居て、松光が法師の出たちせるを見て、呼びて云ひけるは、「これよりさき二里ばかりのほどには、宿り給ふべき家もあらず。夜を犯して歩かせ給ふにや。むさきをいとひ給はずばとゞめ參らせん。入らせ給へ」といふに、うれしくて、よろこび言ひつゝ入れば、此頃つくりはてつと見えて、壁などもまだ乾かず見ゆ。二人が足洗ひ居るほど、あるじ彼の笈を奥の間にもち行くとて、みづから負ひて立上りて、「おもき笈にこそ候へ。御僧は力ある人にこそ」といひて、笈をはこびて、圍爐裏のもとにゐて、薪さしくべつゝ湯をわかす。二人は足のごひて家に入りて見るに、家はひろらかなれど、させる調度もなく、佛壇一つすゑたるのみにて、夜の物などもも見えず。あるじ火をうちて佛壇にあかしともすを見れば、内にあたらしき位牌すゑてあり。あるじ二人が前に來りていひけるは、「三月ばかりさきに家を燒きて後、此家を作りいとなみ候所、父にて候ものあとの月に病みてうせ候ひぬ。よからぬ事のみ打續きて、侘しきめをのみ見て候。かく宿し參らするも、他生の緣にて候はん。御僧にはつかれ給ひつらめど、佛前にて看經して給へ」といふ。松光化をあらはさじと、殊勝げにもてなして云ひけるは、「何事も過去の約束にて候。かく一宿の御恩蒙りぬるも、阿彌陀佛の導かせ給ふ事に候」と、鼻うごかしつゝいへば、あ

天地の神もたすけよ草枕―下句「旅行く君が家に到るまで」萬葉集

飛驒匠物語　巻之六

○から猫

かくて山人松光は、道にて旅のよそひよくしたゝめて、松光は袈裟衣打著て、法師と見せて頭巾打かぶりて、笈を背に負ひて行く。よのつねの旅だに侘しきがならひなるを、まして人につゝみて、姫宮の御供し奉れば、苦しき事数知らずおほかり。あはれ天地の神もたすけよ草枕と、ふるき歌など打誦しなどして、山を越え川を渡りて、床だになき埴生の小屋、あばらなる葎の宿などに夜をあかしつゝ、とかく忍びて行く程に、道もはかどらず、十日あまりを經て、からうじて遠江の國にぞ著きにける。日は西にかたむきて、海の上霧りわたりたる中より、蜑どもはあさりして、物かづきて行く。柴負ひたる人の、あへぎつゝ山を下り來るに、入相の鐘の耳ちかく響きたるも、げに夕暮こそわびしけれ、いづこにや宿りとらましとて、打ながめつゝ行きけるに、千歳古りたる松のもとに、あたらしう作りたる家あり。あるじと思しき男の、背高くたくましきが門に立ち

手をかきて—手まねして

此由語りて跡より下るべし。但わぬし達は、日數をふる旅の空に嫗宮の御供せば、途中人やあやしまん、此笈に入れ奉りて、人目をつゝみて下られよ」といふ。「さらば再會の時までは、すこやかにておはせよ」と、互に別を惜みつゝ、嫗宮を笈に入れ奉り、松光負ひて出立つ時、思ひもよらず松蔭より、横川の法師衞士の宗彦、刀をぬきてをどり出で、「嫗宮をわたせ」とのゝしりつゝ、山人松光に打つてかゝる。船主法師錫杖をとつて、兩人が足を打なぐれば、其まゝ横にたふれ伏す。「こやつばらは、山人ぬしに意趣あるものと覺えたり。こゝは船主に打まかせて、おの／＼は疾くいそがれよ」といひさま、法師が背におひし衣とりて松光にわたし、「在俗の人の笈を負ひたらんは、人もいぶかりやせん。これ著てとく行き給へ」と、手をかきて催せば、こゝも氣づかはしと思へども、猶追來る人もぞあると、心せかれて松光もろとも、足をはやめて勢多の方へといそぎけり。此橋をわたりける時、松光ふと心づきて、此橋を一間ばかり板をはなちて走り行きぬ。これはらし跡より人の追ひかけてや來んとの仕度なるべし。

わらはが誠をあはれび、生をかへて仙となし、蓬萊に生を托させ給ひぬ。女一の宮と山人君は、もとより宿世の仙緣にて、永世夫婦の契おはせば、塵緣盡きさせ給はんには、ふたゝび蓬萊に至り給ひぬべし、其時わらはも諸共に、箕箒をとりて仕へんとす、親人はやく此姬宮をみちびき奉り、山人君におくらせ給へ、此婚姻成就せば、わらはが爲には千萬の追福作善にまさりぬべし、と言ふかと思へば、夢さめぬ。それより京に出でて樣子を聞くに、姬宮は御母御息所の里第にうつり給ひぬ。おのれ幸春の頃、此御息所の御館にまゐりて、墨繩の作りたる毘沙門天の像をあづけ奉りつれば、これをよすがとなして此御館に行きたるに、尊敬し給ふ事かぎりなく、寢殿へ呼びいれ給ひて、樣々あつくあつかひ給ふ。ひまを見合せ、姬宮にはかりごとを告げ奉るに、もとより左樣の御心にやおはしけん、よきに計へと宣へば、宵闇をさいはひに、笈の內に忍ばせ奉り、これ迄御供しつる所に、わぬしたちに對面しつるは、これも佛神の加護なるべし」と、ふし拜みつゝ物語る。山人は此年頃むらさきが事を思ひ出でて、哀となげかぬ日もなかりしに、船主がことばを聞きて、胸ひらきぬる心地ぞしける。「さらば是より姬宮の御供して、東をさして下るべし」といへば、船主がいへらく、「おのれはこれより墨繩どのの許に到り、

したべの使云々―冥途の使なり、萬葉集、憶良が子を悲しめる歌に「若ければ道行き知らじまひはせむしたべの使負ひて通らせ」

らん」といへば、船主笈を地におろし、戸をひらきて姫宮を出し奉る。姫宮まろび出で給ひて、「まろは都より武士どもの追來るならんと思ひつるに、早くも來り給へるかな」と、山人にすがりて泣き給ふ。船主涙をはらはらとこぼして、「老朽ちたる此法師が、姫宮を奪ひて何にかせん。わ殿のもとに誘ひ奉り、夫婦となし奉らんと、扨こそかくは計らひつれ」といふに、いよいよ不審はれず。「おのれ姫宮に忍びあひ奉りし事、いかで疾く知らせ給ひつる」と問へば、船主いよいよ涙せきあへずいひけるは、「我回國修行の身となりしは、娘が追福のためなる事は、貴殿の知る所なり。されば夜となく晝となく、鉦打鳴すたびごとに、娘むらさきが佛果菩提を唱へざる時もなく、又佛號稱する度ごとに、不便の死をさせし事よと後悔せざる折もなし。今は天堂にや生れつらん、但心の迷ひにて、地獄の苦患や受くらんと、一時片時も娘が事思ひ出でぬ時はなく、したべの使道知らぬ、我子は背にも負へかしと、憶良のぬしの言の葉も、我身の闇におもひ知られぬ。けに子をしたふ燒野の雉子、梢にむせぶ夜の鶴にも、身のおろかさはまさりぬべし。かくて諸國をさまよふほど、一昨日嵯峨野の辻堂に夜をあかしつるに、眠るともおぼえぬ夢の中に、娘むらさきが姿我目のまへに顯れ出で、さもよろこばしき顏色にて、佛天

臥待の月―十九日の月

掲焉に―いちじるしく、あらはに

と問へば、中間息つきつゝ、「姫宮の今のほど見えさせ給はず、御館のさわぎ大方ならず」といひさま、又くねをくゞりて走り入りぬ。「さては今の修行者の奪ひ奉りて、笈に入れて逃げつるなるべし。さるは去ぬる月おひはらはれし横川の法師めにやあらん。引捕らへて奪返してん」と、松光もとも〴〵に、跡を追ひてぞ追ひかけける。夜もやゝ更けわたりて、臥待の月高うのぼりて、ひるかと思ふばかりあかくなりぬ。山人松光は息つきあへず走りけるが、からうじて追ひつきて、二人してやらじと組みつきつ。修行者二人をつきのけて、錫杖を頭にかざして打つてかゝる。こなたも刀ひき抜きて、互にしばし打合ひけり。笈の内には姫宮の御聲にて泣き給ふ事かぎりなし。たがひに力をつくしてたゝかひけるほど、覆面もいつか飛散り、修行者が笠も地に落ちぬ。折からもれ出づる雲間の月の掲焉に光り出でたるに、山人が打込む刀を、錫杖にてうけんとする程、きと顔を見あはせて、「汝は竹芝の山人ならずや」といふに、こなたも驚きすかし見れば、こはいかに、思ひよらぬ石濱なる船主法師なりければ、驚く事大かたならず。松光も刀をすてゝ、「さて〳〵危かりし事よ」とて、互に無事をぞよろこびける。山人先問ひけるは、「心得がたきは、何とて法師の御身にて、姫宮を奪ひて退き給はんとはし給へる。子細承

行縢—腰につけて兩の股脚に垂れ蔽るもの

生きてあるべしとも思はれねば、「さらばともかくも計らひ奉りてん。但此御所より忍び出で給はんは、まもる人ども多ければ、人目わづらはしかりぬべし。御息所の御里にわたらせ給ひて、かしこより忍び出で給はんには、心やすかるべし」といふ。斯くしめし合せ給ひて、翌日姫宮は物にかこつけて、母御息所の里第にうつらせ給ひける。山人は松光を語らひて、いかで姫宮をぬすみ出でんと、三日ばかり御息所の築土の邊をうかゞひ歩きける。或夜よくしたゝめて、山人も松光も、黑ききぬにて冠面といふ物作りて顏をかくして、かしこの御所をさして行きぬ。宵闇にてをぐらけれど、斯ゝる時には月のなきこそうれしけれとて、御庭なるくね垣のへだてに添ひてうかゞひ居たるに、思ひよらず内より此くね垣めり〳〵と押破りて出づるものあり。ちかづきて見れば、編笠著たる法師の、大なる笈を負ひて行縢はきたるが、ながき錫杖を引さげてあゆみ行きぬ。「あれは盜人にや、我々も彼が破やしと見てあれば、此修行者東をさしてあゆみ行きぬ。「あれは盜人にや、我々も彼が破りたるくね垣よりや入らん」と言ひあはせをるほど、館の中俄にさわがしく、人走りちがひて、聲々に何事をか呼びて走りあるく。しばしためらひてあれば、中間男かの破れたる垣のもとより出でて、「これよりや出で給ひつらん」といふに、近寄りて、「何事ぞ」

むちうちたりしは、法師が方人と見えたれば、法師が供して送り行け」とて、宗彦を繩もていましめさせ、あたりの繩を法師が腰にくゝりつけつ。衛士等あまた笞をあげて、「勅勘のものども、疾く御庭をしりぞけ」と打ちたつに、さる者の心にも恥かしとや思ひけん、顔をだにえあげず、よろめきつゝ歩みて出行きぬ。此法師、おのれ戒をやぶりながら、人を盗人に陷れんとはかりつるが、はやく身にむくい來て、中々かゝる恥見つるは、ひとへに佛菩薩の御罰なるべくや。後に聞けば、宵に法師が聲をたてつる時、おもと人心きゝたる人にて、山人をば外の戸口より逃しやりて、人形に袈裟衣を著せて、かくは欺きけるなりとぞ。

○せたのはし

其後日ごろ經て、帝姫宮の御かたにわたらせおはして、「いつ迄ひとりずみしておはすべきならず。まろよろしき人を見つけ置きつ、かれを男と定め給ひなん」など宣ふを聞くに、胸ひしげぬる心地し給ひて、その夜山人が忍び來る時、「しかしか父帝の宣ふなり。疾くいづかたへなりとも率て行き給へ」と宣ふ。山人が心にも、此姫宮に別れ奉りては、

こゝち—許多

し出して、「盗人にたがはず」といふ。墨縄いはく、「よも法師の妄語は宣はじ。いよ〳〵彼がみづから盗人なりと名のり候や」とおしかへして問へば、法師、宗彦口をそろへて、「盗人と名のりしに相違なし。念をいれて問ふ人かな」といへば、墨縄から〳〵と笑ひて、「これはおのれが作りて姫宮に奉りたる人偶なり。人偶の物いふべき理なし。うたがはしくばこれ見よ」とて、小き鋸とり出でて、背のあたりをすこしひきて、藁しべをひとつかみ攫み出して、法師が目さきへさしつけつ。法師はあきれて口ごもれば、雑色等もあきれまどひて、「よべよりこゝら骨を折りて、白状せよと鞭打ちつるに、物いはざるこそ道理なれ」と、顔見あはせて笑ひ出す。折から御階の御簾巻上げて、女房たち御乳母勾欄のもとに立ちて、姫宮の殊に大事とし給ふ御人形、とり出しつるのみならず、御庭に引おろし、むちうちて砕きそこなひつる者どもおひやらへとの勅諚ぞ。疾く御所をまかり出でよ」といふに、法師はもとより宗彦も、色をかへてふるひ出す。墨縄法師にうち向ひて、「此人偶に物いはせ給へるは、おのれが細工にまさりたる貴僧の法力に候へば、盗人はわ僧に給はりつ。寺につれ行きて、心まかせにはからはれよ」と、縄とり出でて、法師が背にかの人形をくゝりつけて、又宗彦をうち見て、「おのれ宵より此人偶を

馬部―馬寮の下衆
吉上―衞士の中の頭
雜色―無位の侍
あたらしき―惜むべき

らはせて白状させよ」といふ。此騷大方ならねば、ありとある人々、馬部吉上のともがらまで、走り來てのゝしりとよむ。其中に、衞士の宗彦走り寄りて見ていひけるは、「此盜人は火燒屋の衞士山人と申す者なり」といふ。「さば打するよ」とて、あまたの雜色しもとをふり上げ、力にまかせて打つ。あはれあたらしき一人の風流男、死して芝生の露とや消えぬらんと、心ある人は哀みもしつべし。法師はいみじき高名しつとて佛間に入り給ひけるが、夜あけぬれば、歸らんとして庭に來りて、「いかに盜人は白狀しつるにや」と問ふ。雜色等がいはく、「かばかり强く打ち候へども、今に白狀仕らず。しぶとき奴なり」といふ。とかくするほどに明けはなれて、烏なども飛びちがひ鳴く。猪名部墨繩は、今宵は宿所にありて臥しけるが、山人が捕へられてうきめ見るなりと聞きて、驚きて走り來て、一目見るより、雜色等にむかひて、「これ何者が生捕りし」といへば、法師したり顏に、「おのれ生捕りて候」といふ。墨繩がいはく、「此者は盜みすべき人にあらず。などて捕へ給ひし」といへば、法師せきたちて、「かれが物盜まんとするをおのれ見ふせて、盜人と聲かけて捕へつれば、彼わなゝきつゝ、貧のぬすみにて候、ゆるさせ給へと申して候へば、盜人に相違なし」といふ。衞士の宗彦も、宵より答うちて居たるが、口をさ

をとられひき出されて、もとの入口の戸よりおし出されつ。本意なげにふりかへり見れば、此戸にそひて法師一人立てり。それを内に入れて、此おもと人戸をさしかためつ。扨は最初にわれを引行きしは、後に來る法師と思ひたがへつるなりと思へば、ねたき事かぎりなし。いかで此まゝにおくべき、恥見せんと思ひければ、聲をあげて、「宿直の人人出であひ給へ。こゝに盗人法師入りぬ」と大聲にわめけば、人々太刀弓矢などたばさみて出來たり。「この戸口より今ほど盗人法師の入りて候。たしかに見て候」といふに、宿直人聲をあげて、「此戸あけ給へ」といへば、内に女房の聲にて、「何事ぞ」といひて戸を明けつ。「これに盗人の入りて候」といへば、「何條さる事の候はん」と答ふるを、法師耳にも入れず、すなはち奥をさしてはしり入りぬ。姫宮のなげしのこなたに、山人が衣著て忍び居たるを見るより、引とらへ、小脇にいだきて御階の方へかけ來りて、「盗人いけどりて候」といひさま、膝の下にひき敷きたり。宿居人等、「いみじくも仕られつ」といふ。折から弦打してまはる夜行の人々を呼びて、「是をひッくゝれ」といひて、御階より引下せば、やがて高手小手にくゝり上げつ。「先何者ぞ、つらを見よ」といへば、頭巾をぬがせて見るに、色白くよき男なり。「見知りたる者やある、いづくの者なるか。水く

ありける。思ひあまりけん、えつゝみおほせで、ある時法問の事聞ゆるついでに、几帳のひまより結びたる文をさし入れつ。姫宮あきれて投げかへし給ひける。かゝる事たびたびになりけれど、一族の筋なれば、人聞も苦しくおぼして人にも宣はぬを、此法師たのみ所に思ひて、折々御衣の裾などを引うごかす事あまたたびなれども、姫宮は知らず顏つくりておはしぬ。或夜法師、例の御持佛堂に籠りて誦經して居けるが、しきりに戀慕の心さかりになりて、今宵姫宮の御寢所にしのび入りて、おもふ事聞えばやと思ひ立ちて、御佛間を出でて御端の方にさまよひたるに、例の媒のおもと人出來て、山人ぞと思ひて、手をとりて引入れつ。法師思ひかけずうれしくて、引かれて行くに、なげしの所まで連れ行きけるが、此おもと人、入口の戶を忘れてたてざりければ、又御階のもとに歸り來つ。山人は今宵も例のごとく、法師の出立ちして忍び來けるに、此おもと人來あひて、あやしみて、「たそ」と問ふ。山人、「おのれに候」といへば、おもと人ちかよりて、顏打見てあわてて、さては今のほど引入れたる法師はあらぬ者よと、ふたゝび奧にかけ入りて見れば、さきの法師御屏風のこなたに伺ひ居たり。手をとらへて引出す。法師出でじとあらそふを、おもと人聲をたてんとするに、侘しくせんかたなくて、又手

むづかしき―穢ならしき
ほど〳〵―殆んど
くづし出でて―片端より語りて
横川―比叡山の三塔の一
このかみ―兄
つや〳〵―少も

ら、今日宗彦にうたれて、雪のやうなる手足も、土にくろみてむづかしきに、あらぬ衣をさへ著たれば、我さへはしたなき心地すれば、姫宮のいかに思すらんと氣ものぼりて、ほど〳〵堪ふべくもあらず。姫宮は、去年の御夢がたりをはじめて、月頃の御思くづし出でて宣ひつゞくるに、こなたも思ひよらぬ瓠の家に入り來りし事など聞え出でて、さては此世ならぬ緣なりけりとて、打語らふ程に鷄も鳴きぬ。例のおもと人來て、叉手を引きて、よべの戸よりおし出しつ。是を初として、かう忍びつゝ參りかよふ事日頃になりぬ。されど知る人もなかりけり。此夜居の僧と申すは、昔物語にもあまた記せる事にて、御持佛堂に信じ給ふ法師を入れて、夜すがら誦經させて、護身の御祈せさせ給ふ、これを御持僧とも申すなりとぞ。此頃參れる法師は横川のわたりの人にて、桂御息所の御このかみの宰相とかや申せる人の子にてぞありける。姫宮とは御親族にておはせば、へだてさせ給ふ御なからひならず。かつ行ひいみじき人なればとて、此法師を召して、年頃夜居の僧とはたのみ給ひける。しかるに此法師、おもてはいと殊勝なる顏づくりをして尊げに見ゆれど、心ひがみて、法師だてらいみじき色ごのみにてありけるが、おふけなくもいつしか此姫宮を思ひ初め奉りて、深くあくがれけれど、つや〳〵色にも出さで

そゝのかし—勸め誘ひ

おふなおふな—身分の程につけて

そらだき—室内にくゆらす薫物

ろしつ。人々も立ちてそゞのかし奉れば、心にもあらで、しぶしぶに奧に入り給ひぬ。山人は鬼に魂とられつる心地して、猶御簾の内をうかゞへど、名ごりなく入りぬと見えて人げもせず。おふなおふないかでと思へど、身の賤しきをかへり見れば、かたじけなくも嬉しくも、おふけなくも樣々に思ひめぐらされて、たゞ涙おちぬ。思ひめぐらすに、奧山の槇の板戸と宣ひしは、忍びて來と宣ふなぞぞにや、なににもあれ、子細こそあらめとて、猶立去らで御階のもとにうづくまり居ぬ。亥過ぐる頃にや、おもと人の聲して、「御猫の見え候はず。こゝもとに出でつるにや」といひつゝ戸を開きて、御階のもとに出でて、山人がもとに寄り來て、聲をひそめて、「そこにおはすにや。まづこれ著給へ」といひさま、たづさへたる法師の衣うち著せ、頭巾に顏かくさせて、「もし人とがめなば、夜居の僧ぞと答へ給へ」といひて、手をとりて御階にのぼり行く。山人おそろしけれど、導くまゝに入りて行くに、人々は皆寢たるにや、屛風など立てたる所をあまた過ぎて、長押ある所にのぼせて、此おもと人はあなたざまに出でぬ。山人入もやらでためらひてあれば、そらだきの薫いみじく匂へるは、姫宮の御座所なるべし。御顏さし出でて、「こなたに」と宣へば、おづおづ御衾の上に這ひのぼりぬ。山人もとより類なきみやび男なが

あからめもせで―わき見もせずして

奥山の云々―萬葉集、下句「わが開かむに入り來て寝さね」

て、御かたはらなる瓢をとり給ひて、「風になびける瓢といひしは、かゝる物にや」と宣ふ。山人のび上り見て、「これに聊たがひ候はず。たゞしこれよりは今すこし大きやかにて候。男女にくらべ候はば、これは女の瓢とも申すべくや」と申せば、打笑ませ給ひて、又かの人形とり出させて、「これ見ておれ」と宣ふ。山人よく見れば、我かたちをさながらうつし取りたる人形なれば、あやしと見ゐたるに、御かたはらの女房のいひけるは、「此人形は此衛士が顔におぼえたる所あり」といへば、女房たち山人を見て、「いかで斯かる人の衛士とはなりたらん」と、かしましくめで褒むる。山人、「此人形は飛騨の墨縄や作り候ひけん」といへば、老いたる御達の出でて、「汝墨縄を知れりや」といふ。山人、「墨縄は我兄とたのみたる者にて候」と申せば、手をうちて、「さては衛士にてあるべきならず。此由奏して、彼をば墨縄ぬしの許につかはしてん」などいふ。姫宮御さかづき賜はりて、猶ひたすらにあからめもせでうち守りおはすに、物うちいひたるけはひなど、此世の人としも覺えず。ゆかしさかぎりなくて、久しく入り給はでおはすに、人々、「日くれて候ひぬ、入らせ給ひなん。御格子まゐりなん」などいふ。姫宮山人に目をくはせ給ひて、「奥山の槙の板戸をとゞとして」と宣ふ時、御乳母立寄りて、おながちに御簾お

御達―婦人の尊稱

謫仙―天上より下界へ貶されたる仙人

ひとかへり―も一度

う御座參りて、御簾あげさせて御庭の方を見出しておはしけるに、山人は露も知らで、つぶやき〳〵泣き居たるを御覽じて、そゞろにあはれを催し給ひて、「此男の斯うひとりごつは何にかあらん。あはれにいとほしき心地ぞする。いかなる瓢のいかになびくらん、いとゆかしうこそ思はるれ。あの男こち寄れ」と召しければ、あまたの御達口々に、「御前の召させ給ふぞ。その男こち參れ」といふに、驚きてふり仰ぎて見かへれば、やごとなき女房達あまた並びてゐ給へり。其中にことにあてやかに美しく見えさせ給ふは、女一の宮にてやましますらんと見奉る。姫宮も山人と御目見あはせ給へるに、去年の夏御晝寢の夢に見給ひてより、忘るゝ間もなく戀しと思しゝ其人にまさしくたがはず。まろび下りて物いはんとまで思しけれど、人々の目をはゞからせ給ひて、しばし物も宣はで、つく〴〵と打守りておはしぬ。山人もすこしゐざり寄りて見あげ奉るに、心まよふばかりになりて、しみ〴〵と御顏を見奉る。ともに代をこそへだて給ひぬれ、契ふかき謫仙にしおはすれば、自然に心にしみて、なつかしと思しかはすなるべし。人々の、「こち來よ」とあるを幸に、御階ちかう這ひ寄れば、「いひつること今ひとかへり言ひて聞かせよ」と仰せらる。山人酒壺の事を今ひとかへり申しければ、姫宮御夢の事を思しあはせ給ひ

人の手足に疵つけて後、あやまちなりといはんに、人ゆるすべきかは。利口げにいひまはすこそ惡けれ」とて、落ちたる箒の柄にて又したゝかに打つ。烏帽子も落ち白丁もやぶれて、額のあたりより血はしり出でて、衣さへあけにそまりぬ。まろび倒れて臥しゐたる背中を、足をあげてしたゝかに蹈みにじりて、「きみよし〳〵」といひつゝ、火たき屋の方へぞ出でて行きける。山人は一時ばかり心もつかで伏し居たるが、やう〳〵心づきけれど、强く打れければ立つ事かなはず、息きれて苦しければ、御階のもとに雨だりの水のたまりたるを、ゐざり這に這ひ寄りて、手にむすびて吞むとて、水にうつれる我顏を見れば、眉間やぶれて顏も血にそまりてあり。おもへば口惜しとて、やぶれたる袖を顏にあてて、さめ〳〵と泣きゐたりけるが、思ひあまりて聲をあげて、ひとりごとに言ひけるは、「などや斯く苦しきめを見るらん。我國に七つ三つ作りすゑたる酒壺に、さしわたしたるひたえの瓢の、南風ふけば北になびき、北風ふけば南になびき、西ふけば東になびき、東ふけば西になびくを見ては、心もうきておもしろかりしに、いかなれば遠き世界にたどよひ來て、かくてあるよ。かの瓢はいかになりぬらん」など、ひとりごととしてつぶやきつゝ、又聲をあげてぞ泣きにける。此折から、女一の宮は御簾のもと近

ひたえ—一莖

類、高杯に似て縁高く、外は黒漆にて塗り内は朱塗にして螺鈿などをまける物
まさぐり物—手なぐさみ物
かた—姿

「おの瓢はいかにして得給へりし」と問へば、「姫宮の生れ出で給へりし時、御屋の棟に落ちたれば、取りをさめ給ひてより、常に御傍はなたずまさぐり物にはし給ふなり」と答ふ。扨は此姫宮凡人にはおはせざりけりと思ひて、まかり出でて後、男の仙人のかたちを其儘にうつしとりて、姫宮の許に奉りぬ。姫宮此像を見給ふに、去年の夢に、ゐなかにて語らひしと見給へる男のかたちにたがふ所なければ、大に驚かせ給ひて、墨縄を簀子に召して、「これはいかなる人のかたぞ」と尋ねさせ給ふ。墨縄がいはく、「此人形は宮に住ませ給ふ御男君にて候」と申せば、姫宮そゞろによろこばせ給ふ中に、思ひめぐらし給へるは、墨縄いかで我夢を知りたるならん、思はずなる事にこそあれとて、かへすがへすいぶかしう思しけり。扨又火たき屋に居る山人は、日々に宗彦にさいなまれて、からきめをのみぞ見ける。今日も宗彦がしりにつきて、御庭のくま〴〵箒もて掃きありきけるが、あやまちてつまづき倒れて、御階のもとなる薔薇の小枝を折りけるを、宗彦見るより立かゝりて、衣のくびをとらへて、「心なしの乞食よ。上の殊に惜ませ給へる物を、おのれ足のさきにかけて折りさきたる、叛逆の罪人なり」といひさま、拳もてしたたかに打つ。山人くるしければ、「これもあやまちなり。許させ給へ」といへば、「おのれ

おもと人―侍者
楅子―菓子鉢の

宮のかう思しつめておはせば、父帝もあながちに、御聟の君をもたづねさせ給はず。御心のあらたまりて、世づきて見え給ひなば、其折にこそせめ聞えよとて、しひても宜はざりけり。姫宮の御心には、まことは去年の晝寢の御夢に、をかしき人を見給ひてより一筋に戀しとおもひ給へども、はかなき夢のおもかげのみにて、さだかに世にある人としも定めがたし。たとひ似たる人ありとも、所せき身にはいかで逢ひ見んよすがあらん、なまなかに生きとまりて、心につかぬ夫まうけて、あぢきなき世にあらんより、尼となりてこそあらめと、ひたすらに思ひ定めてぞおはしける。帝は墨繩を愛し給へるあまり、常に御かたはらに召して物造らせて御覽ず。あまた造れる物の中に、をかしき猫の生きたる如くはたらくを、いたくめでさせ給ひて、墨繩にもたせて、姫宮の賓子近うまゐらせ給ふ。女房達此猫をとりて、姫宮に見せ參らするに、ざれ走るさままことの猫にたがはずとて、いたく興じさせ給ふ。墨繩人々の笑ひ興ずる聲のさわがしければ、何となく御簾のあひよりさしのぞき見奉れば、繪にかきたらんやうなる姫君の几帳に添ひておはします。御かたはらに、大きなる瓢の螺鈿の臺にすゑて載せてあり。目をつけて見れば、仙界にて見し瓢にたがはず。若きおもと人の、楅子に菓子もりて墨繩が前にもて來るに、

おもておこしせる—面目を施せる

おもなくや—面目なくや

ためには、まろさへおもておこしせる心地す。かゝる者を囚に籠めたるはいみじきあやまり」とて、別當を勘じ給へば、別當面目を失ひて引籠りぬ。帝御よろこびのあまり、墨縄をば直さま匠づかさに任じ給ひ、尊敬し給ふ事大方ならず。墨縄此ほどの苦に引かへて、面目を得てまかり退きぬ。山人、松光も待ちつけ居て、よろこぶ事いへば更なり。かの百濟人は、おもなくや思ひけん、行方なく跡をかくして逃げ行きぬとぞ。此百濟人を今昔物語に百濟川成と記せるは、つたへの異なる者なり。又飛驒の匠とのみ記して姓名を記さゞるは、いかなる故にかいぶかし。

○よゐの法師

更衣腹の女一の宮は、年頃佛の道をのみしたはせ給ひて、いかで思ふごとく髮をもおろし、山寺にかきこもりなんと、常の御口あそびにも宣へるを、父帝、「あるまじき事なり。わかき心にさやうにおもむけ給ふとも、後に悔い給ふ時あらん」と宣ひて、ゆるし給はぬを、中々うき事に思して、春秋の花紅葉を御覽ずるにも、たゞ世の常なきをのみ觀じ給ひて、朝夕御珠數をはなち給はず、行ひなれたる尼君のやうにて過し給ひけり。姫

り來らせ給ふ。いかにせん、とく迯出でよ」といひさま、木の葉の散るやうにはらくと外の方へ迯げて出でぬと思して、御目さめて御覧あれば、只今御枕上に佛龕ひとつすゑ奉りてあり。御心地ことにさわやがせ給ひて、「此御佛いづくより參らせし」と宣ふに、「女一の宮の御息所より」と聞え奉れば、やがて手水めして、佛龕を開かせ給ひて、「扨は夢に見しにたがはず、降魔の尊像におはす」とて、あまたたびおしいたゞかせ給ひて、「墨縄といへる者今世にありや、民部に仰せて疾く聞け」と宣ふ。其夜になりて、「猪名部の墨繩と申す者、飛驒の國の匠にて候が、今獄屋にこめて候」と申すに、帝驚かせ給ひて、「とく呼べ」と宣ふ。女一の宮も、帝の御病おこたらせ給へるを喜びて參り給ひ、彼御佛龕持來れる法師の事など聞えさせ給へば、帝御涙おとして感じ給ふ。しばしありて、つかさ人墨繩を率て階下にかしこまる。帝かの佛龕を開かせ給ひて、「これは汝が作れる御佛にや」と問はせ給ふ。墨繩、「さん候」と申せば、「さるは何者につくりて與へつる」と問はせ給ふに、墨繩答へけるは、「おのれ武藏の國に候とき、石濱なる蘆屋の船主が爲に作りてあたへ候。いかにして御門の御わたりには參りて候にか」と答へ申す。扨事の子細くはしく問はせ給ひて、「世に稀なる匠なり。まろが代にかゝる者の出來たるは、末の世の

曹司—官人の部屋

内—内裏、禁中

にのぼせて御覧ずるに、老いくちきたなげなる法師なり。「御法師が申す所床しければ召しつるぞ。帝の御病おのれいやし奉らんや」と宣へば、「必ずいやし奉るべし」と事もなげにいふ。「さらば内裏へ參りなん」とあれば、「いかでか參らん。乞食の身に候へば、かしこし」といふ。「さらば爰許にて御祈り仕まつるべくや」とあれば、「御祈り仕まつるまでも候はず」といひて、頭陀袋より小さき佛龕一つ取出でて、打捧げて申しけるは、「此御佛を守り奉りて、國々の寺に順禮して候に、道すがら病者を見れば、此本尊をひらき拜ませて候に、一人としてとみに病癒えざる者候はず、世に希有の靈佛にておはす。この御佛龕開きて、帝の御枕上にすゑさせ給はゞ、其しるし候ひなん」と申す。「いとうれしき事なり。とく此佛内に奉れ」とて、御使出でたゝす。さて、「法師をばかしこの曹司に入れて、物くはせよ」など仰せあるほど、此法師いづちいにけん、行方見えずなりぬ。人々こゝかしこもとめけれど、行方知れざりけり。扨御使は内に參りて、内侍のかみへしか〳〵と聞ゆるに、内侍此御佛龕をとりて御屛風のもとへ出づる。其時帝の御夢に、おそろしき鬼どものあまた集りてなやませ奉るを、わびしと思し入りたるに、あるかぎりの鬼ども、俄に手まどひして騒ぎふるひていひけるは、「墨繩が作り奉れる毘沙門天入

りて問注すべしとて、廳に召されぬ。墨繩思ひよらぬ事なれば、さまぐ〜あらがひけれど、此つかさ愚なる人にて、曲直をわいだめず、やがて獄に入れけり。山人、松光、此事をつたへ聞きて、うれへ歎く事大方ならねどせんすべなし。時に帝御風の心地とてうち臥させ給ひけるが、御惱日にましておもらせ給ひ、御物怪のやうにておそはれさせ給へば、有驗の高僧貴僧など、壇をつくりて黑けぶりを立てて祈り奉れど、いさゝかおこたらせ給はざれば、雲の上天の下のなげきにてぞありける。其頃女一の宮の御母御息所の里第の中門のまへに、あやしき乞食法師物乞ひて居たるに、中間ども帝の御惱しきりなる事など物語し居たるを、此乞食法師打聞きて、「我守り奉る御佛にこそ祈り候はめ」と何となく打言ひて出づるを、中間男等耳にとめて、引留めていひけるは、「御法師が守り奉る佛の、帝の御病いやし奉らんとや。諸寺諸山の驗ある法師たちの祈り給へどしるしおはさぬを、いかで乞食法師の身にて、おふけなき事をばいふぞ」といへば、此法師ふりかへりて、「住む寺の大きなると袈裟衣のうるはしければ、尊き法師と思ふにや」といひすてて出でて行く。此事傳ふる人のありければ、御息所聞かせ給ひて、「其法師召せ」とあるにぞ、侍ども五町ばかり追行きて、ひき連れて來れば、庭に入れ給ひて、簀子

心のなし―思ひなし

戸は閉ぢて西の戸は開きたり。東の戸より入らんとすれば、其戸は閉ぢて北の戸開きぬ。かくあまたたび入らんとするに、閉ぢつ開きつして入る事を得ず。ねたき事かぎりなければ、せんすべなければ、立歸らんとするに、はじめ入りたる門はとざして鎖おろしてあり。こなたに小き門のあきたるあれば、かしこよりと思ひて行くに、此小門のもとに横たはりて人臥して居り。見れば、はれ腐りてきたなき男の死したるなり。匂さへ鼻をうちて堪へがたかりけり。されど、此門より外に出づべき道もなければ、裾をかゝげて、此男をまたぎて通らんとするに、此はれくさりたる男、手をあけて百濟が裾をとらへつ。振りはなさんとすれどはなさず。くさき事はじめにまさりてこらへ難く、鼻をおさへつつ聲を立てければ、墨縄おくより出で來て、「何事ぞ」といふ。百濟がいはく、「此きたなき人のとらへて放ち候はず。くさき事たとふるに物なし」といへば、墨縄、「いかでさる事候はん」とて、此男を引きたてて見するを、よく見れば、木にて作れる物にて、いさゝか臭き香もせず。扨は我心のなしにてくさしと思ひけるよと、初めて心づきぬ。扨逃げかへりけるが、此事のねたく口惜しかりければ、人に逢ふごとに、「墨縄邪法幻術を行ひて人の目をくらます物ぞ」といひ歩きければ、其事檢非違使の廳に聞えて、墨縄召しと

むづかし―穢げなり、厭けし

あからさまに―假初に

りけり。かくて都にすまひて、この寺社の造營ある所に到りて、匠等に交りて其職をすけつかはしける。其頃百濟國より繪をよくする人來たり。此繪師、墨繩が藝に神妙なりと聞きて、ねたき事に思ひて云ひけるは、「墨繩たとひ匠の道に妙なりとも、我繪には及ぶべからず。かれをおどして見ん」と云ひて、一日墨繩を呼びにやりけるに、墨繩使と共に來りて、廊のある遣戸を引明て入らんとするに、壁に黑き脹れくさりたる男の臥し居るさまを畫きたり。扨は我をはかりて、其道にほこらんとするなりけり、かれも世に知られたる人なり、恥見せんは中々なりと思ひて、鼻に袖をあてて、「あなむづかし。たへがたし」といひて逃出でて歸りぬ。其後かの百濟人これを人にかたりて、「墨繩がたくみ、我繪には劣りぬ」とて誇りけるを、墨繩に告ぐるものありければ、墨繩笑ひて、「さらばいさゝか其報答せん」とて、百濟人のもとへ使をやりて、「あからさまにおはせ」といひやりければ、やがて來りける。使のもの小き堂のそばへ案内して、「これより入らせ給へ」といひすてて、堂のうしろの方へ入りぬ。此堂四面の戸みな明きてあり。百濟人緣にのぼりて、南の戸より入らんとすれば、其戸ははたと閉ぢぬ。おどろきめぐりて、西の戸より入らんとすれば、其戸はたと閉ぢて南の戸は明きぬ。北の戸より入らんとすれば、その

だめ候へば、定めのごとく作り出でず候はゞ、いみじき罪にや行はれんと、やすき心もなくて候。只今も病者等が藥もとめんとて、醫師のもとへ參る道にて候」といへば、墨繩がいはく、「扨は心ぐるしき事なり。同國の人々の、さやうにくるしみ給ふをよそに見ん道理なし。おのれ力をそへてとも〴〵造營つかまつらんはいかに」といへば、匠等、「さてはうれしかりなん。さらば共におはしてたすけて給へ」とて誘ひて行く。墨繩匠どもが臥し居る所に入りて見るに、病にたへでうめき居るさま目もあてられねば、先ふところより荔枝とり出でて、煎じさせて飲ます。扨内匠づかさにも其由うつたへて、翌日より墨繩、松光、造營の役所に入り給ひていとなみ作る。然るに五十人ばかりの病者ども、荔枝を煎じて飲みけるより、精神さわやぎ病をも忘れぬとて、みな打つれ來て墨繩によろこびをいふ。墨繩が修練工夫は凡人の知るべきならねど、「此たびの造營、百人の匠等が集りて、一年を經とも成就こゝろもとなし」といひあへりしに、墨繩、松光が入來てより、三十日を經ずして、此造營のこりなく出來て、しかもこまやかなる彫物なぞ、草木鳥獸のかたちまで、生けるがごとく作りなしければ、あらゆる匠どもはさらなり、匠づかささへ見驚きて、「實に凡力にあらず、神仙の下り來給へるなるべし」といひてほめ合へ

をはかぐしう爲さず。よろづ物うけにふるまふ若者かな」といひさま、つかくと寄り來て、拳をあけて打たんとするを、墨縄とゞめて、「宣ふ事ことわりなり。今日はおのれたまさかに彼をとぶらひ來れば、思はざる長物語に時をうつして候。ゆるさせ給へ」といへば、この衞士猶うちにらみて、「老いたる者をばさのみあなどりそ」などつぶやきつゝ、あなたざまへ往ぬ。山人涙をながしていひけるは、「かれは宗彦と申す衞士にて、腹あしきやつにて候。老人だてら色をこのみ候て、おのれにも樣々ふさはしからぬ事ども申して候を、うけひかざれば腹だち候て、常にかう口を絶えず罵りしかりて候」といふ。墨縄、「さる事にこそ。今しばらくの憂を忍ばゞ、ふる里に歸り給ふべければ、よろづ念じて日を過し給へ」などいひ居たるに、かの宗彦又出來て、「今宵御あそびあれば、とく木葉とりのけよと、小槻殿の申されしを知らぬか。おこたるも時によるぞ」といふに、墨縄も心ぐるしくて、とく別れて出でて歸りぬ。歸る道にて、匠等三人ばかり打連れて、むかひのかより來るをよく見れば、同じ里の者どもなり。「いかにや」といへば、此匠ども悦びて、「われく百人ばかり召されて、武樂院の造營つかうまつり候所、此頃疫病にわづらひて、五十人ばかり枕をならべて打臥して候。つかさよりはかぎりある日數のさ

念じて—忍耐して

武樂院—豐樂院の誤か、古へ朝廷の宴會を行ひし御殿

あざみ—あきれ驚き

火燒屋—衞士の終夜篝火を焚きて守る小屋

飛驒匠物語　卷之五

○ひさもんてん

猪名部の墨繩は都にのぼりつきて、山人に別れて、所々尊き所を順禮して、五畿内のあたりをも經めぐりけるに、所々に堂社の造營あれば、一日二日とゞまりて、匠等が手にあまりつる事どもを作りて、力をたすけつかはしける。常の匠どもが五十日も手間どるべき業を、一日ばかりに作りてければ、あざみ驚きてほめのゝしる者多くて、墨繩が名ますく\世に高くひゞきける。松光もさる人を師となして附添ひ居りければ、今は比類なき上手の匠とぞなりける。墨繩かく所々ありきて、半年ばかりを經けるが、山人が身の上おぼつかなければ、例の松光を具して、又都へのぼりて山人を尋ねけるに、山人は大内の火燒屋の衞士となりてありけるに、行きあひて、しばし打語らひて居けるに、年老いたる衞士の出來て、山人を見て打にらみて、「此惡者、今朝より御庭のわたり掃ききよめよと言ひつけつるに、其役はなさで人と物語して居り。常に力なきにかこつけて、物

詞もなし」とふしをがむ。松光月かげに向ひなる方を見て、「かしこに人の立ちて伺ひ居るさまなり。もし草飼めが立歸りつるならずや」と、つかくと走り行きて、後よりむずと抱きて、「汝は草飼にや」としめつくれば、此人いらへもせで手をふれば、「草飼にあらぬとならば物をいへかし」といひつゝよくく見れば、昨日墨繩がつくりつる木偶にて、主の翁のかほを其まゝにうつし彫りたるなりけり。是は松光宵に翁を閨より引出して、かはりに此木偶を入れおきしが、機關を用ひてこの木偶のおのれと步み出でんとは思はざりしとて、手をたゝきてぞ感じける。夜あけぬれば、人々立出でんとするに、翁ひたすらに留めければ、「かぎりある旅なり、又こそ」と契りて、松光に革籠荷はせて、別れて京へぞのぼりける。此翁は榛原の某とて、昔より爰に住みて、ゆゑよしある百姓なりとか。かの木偶は、其後此わたりの寺につたへて、飛驒の匠が幽靈の像とて什物となしけるが、後の世の兵火に跡もなくなりて、今は其寺の名だに知るものなし。惜むべき事なりかし。

校倉―方形の材を橫に組み上げて製りたる倉

草飼も表の方にかけ出す。此死骸手くび打振りつゝ、尙追ひて表の方へ出づれば、おそろしくて魂も身にそはぬ心地して、戶をおしあけて駈け出でぬ。女も同じく走り出づれば、草飼あわてたる中にも、ひさしの外に繫ぎたる馬ひき出し、女をもかき乘せ、我も尻に打乘りたるに、此死骸猶追來ぬる心地すれば、疾くこゝを逊げばやと、手綱をつよく引きつれば、馬は東をさしてぞかけ出しける。幽靈も追來ぬ樣子なれば、馬をしづかにやらんとすれど、此馬しばしもためらふ事なく、一文字に走る事たとふべき物なし。女は幽靈よりも此馬に魂をうしなひて、消入るばかりになりたるを、男は引きとらへつつ馬の走るにまかせけるが、天龍川といふ川に入りける時、目もくれまどひて、二人ともに水に落ちてぞ死しける。馬は川をわたりて、猶東をさして駈け行きけるとぞ。さて墨繩山人は奧より紙燭さして表に出でて見れば、案のごとく女と草飼は見えず。庇の下なる木馬もあらねば、「扨は謀の如く、草飼めは木馬におはれて走りつるならん」といへば、山人、「かならず川に陷りて命失ひぬべし。心からかはゆき事なり」といふ。松光こなたの方よりあるじの手をとり出でて、「宵にひそかに校倉へともなひて、ともに今まで忍び居たり」といふ。翁は、「まことに不思議の命ひろひ候事、よろこび聞え奉らんに

隅にまねきて、聲をひきくなして、斯う〳〵の事ありと告ぐれば、翁驚きていひけるは、「彼はおのれが妾にて候。此事われも日頃うたがひ思ひ候へども、彼等かばかりの巧せんとは思ひ候はず」とをのゝけば、「まづ知らず顔つくりてゐ給へ。おのれはからふべき事あり。かう〳〵なし給へ」と敎へければ、翁はふし拜みてあなたへ出でぬ。墨縄革籠より斧鋸など取り出でて、一時ばかりして何をか作りけん、出でて松光にさゝやきて、しか〴〵計らへと敎へければ、松光ひそかに出でて、草飼が馬ある所へ例の木馬を引き行きて、鞍手綱をも取り替へて、草飼が馬をば裏の方へ引結ひてつなぎ置きぬ。あるじの翁は、宵より閨に入りて臥しつ。墨縄は山人にさゝやきて、「今宵は寢ねたるふりして眠るべからず」といひあはせて、互にそらいびきかきて臥し居り。夜もふけて丑にやなりぬらんと思ふ頃、草飼表の方よりおき出來て、厨に臥したる女にさゝやきて、足音を忍びて主がふしどに入り、太刀引拔きてうかゞふに、よく寢ねたると見えて息だにせざれば、しすましぬと乘つかゝりて、胸のあたりをさし通せば、手足をもがくのみにて聲をだに立てず死してけり。女革籠を持來りて、死骸を入れんとして、草飼とともに死骸の腰に手をかけつれば、思ひかけず主の死骸むく〳〵と起上りければ、わッといひて女も

たいくしくしく
不行屆にして

どす。互にいくたびか思ふ事を書きかはして、見つ見せつするを、翁はさらに知らず。松光この兒と妹が振廻あやしく心得ぬことよと打守り居たり。しかるに、表にかの男の乘り來る馬をつなぎ置きたるが、俄にくるひ出でていなゝきければ、草飼も女も表の方に出でて見る。此ひまに松光ひそかに出でて、主のかたはらなる文どもとり來りて、山人に、「讀みて見給へ」といふに、開き見れば、草飼が手と見えて書きつけたるは、

折あしく旅人をとめつ。兼てのはかりごと今宵は行はれじ。

と書きてあり。又女の手にて、

旅人は別屋に臥したれば、よも知る事あらじ。今宵の內にともかくも計らひ給へ。明日とならば、翁が子の旅より歸り來べし。しかばねは海に入るべければ、人知る事あらじ。

と書きてあり。墨繩もとり見て驚きて、「扨は此男女いひあはせて、翁を殺さんとするなるべし。惡きやつかな。いかで此由翁に知らせてん」などいひ居たるに、童ゆふげもて來て人々にすゝむ。翁壁をさぐりつゝ奥に來て、「參らすべき物も候はず。折ふし子なるものの旅にまかりて候へば、萬たいぐくしく、心にまかせ候はず」といふ。墨繩翁を片

へる人のおはすとや、心ぐるしき事なり。とゞめ參らせん。疾く〳〵藁沓をとき給へ」といへば、女は腹立ちて翁をにらみて、「今宵は草飼どのも來んと宣ひしに、旅人をさへとゞむべしやは」といふ。翁耳にも入れで、奥の方を指さして、「かしこに離れたる家あり。入りていこひ給へ」とて、童にいひつけて人々をいざなはせ、又同じ童に、ゆふけのまかなひなどさすめり。人々は一間に入りて、主がこゝろざしを喜びていひはやす。松光木馬をば庇の外に繫ぎて、革籠取りて奥に入らんとする時、表の方より人入來たり。この男は大野の草飼とて、此女の兄なり。生れつき邪なる者にて、ぬすびと心ある男なり。妹を此主に遣りて後、翁が財多く、田畑などあまた持てるを見て、我物にせばやと思ひて、かねて妹と計りけるに、妹も老いたる男を厭ひて、兄とひとつに成りて、財ども奪ひて此家を遁れ出でんの心有り。扨この草飼入來て、妹とさし並びて翁に向ひて居るを、松光目をつけて見れば、さきに引馬野にて馬を走らせあらそひたる男なりけり。驚きながら知らず顔つくりて、聞耳たてて居れば、草飼女に向ひて、「奥の客はいづくよりぞ」といへば、「見も知らぬ旅人を翁のとめられしなり」といふ。草飼眉をしわめて頭をかけば、女硯を取出でて、何事をか紙に書きて見すれば、草飼も又筆とりて書きつけな

枚—夜討の時軍勢の聲を立てざらん爲に口に含む具

て候。夜中敵陣を襲ひ候に、兵士枚をふくみて音を立てざる時、かやうの馬ならざれば用ひがたし。扨もかぎりなき逸物にて候」と追從するを、ある人々のゝしり笑ふ。墨縄又松光をして、木馬に革籠負はせて、そこを出でて行くとて、松光に向ひて、「かゝる戯れは無益の事ぞ」といへば、松光、「されど今日ばかりいみじく人にほめられて、面目を得て候ひき」と笑ひつゝ行く。一里ばかり行きて、山人わらぐつに足をくはれて、術なしとてなやみければ、まだ日は高けれど、此あたりに宿りとらばやとて、打見つゝ行けば人の家あり。入りてしかぐ\といへば、妻と見えて、四十ばかりなる女の眼するどげなるが出でて、「我家人をとゞめず、外に行きて物せよ」とすげなくいふに、「足をいためたる者の候ひて、歩みなやみて候。いかで許させ給ひて、一夜明させ給ひなん」といへば、かの女大なる聲して、「心なき旅人かな。とめじといはば疾く出でて行くべきを、あながちに何をかいふ。とく出でて行きね」といひさま、人々をつき出して戸おしたてつ。人々は、扨も情知らぬ女かなと思へど、せん方なければすごぐ\出でて行くに、又戸の内より聲して、「旅人まづ待ち給へ、申すべき事あり。こち入り給へ」といふに、入りて見れば、あるじと見えて、六十ばかりの翁の眼盲ひたるがはひ出でて、「足を病み給

つと—土産

ざといひさま駈けさせたり。松光わざと二三間おくれて駈けさせつれど、つよく綱を引きつめつれば、木馬は矢を射るよりはやく、中を飛んで走りぬ。松光馬場の堺にて木馬の舌を引きければ、案の如くとゞまりぬ。ふりかへり見れば、かの男は一町餘りおくれたり。見物の人々松光をほめとよみて、かしましきまで騒ぐ。扨馬をこなたに引向けて、のどかに歩ませて、かの男にむかひて、「不思議に勝を取りて候。さしも天下に雙なき人の、いかにしておくれ給ひし」といへば、かの男手をすりて松光ををがみて、「あはれゆゆしき道の達人にておはせるかな。おのれ七つと申す歳より馬術に心をいれて、天下に敵なしと存じ候に、君のごとき人もおはしましけり」といふ。見物のもの彼をにくがりて、「契約なれば頭をわたして給へ」といへば、かの男頸をちゞめて、「頭の一つ二つ惜しとは存ぜざれど、たゞ命の惜しく候。まして田舎人の頭なれば、都のつとには見だてなく候はん。しばしわが胴に預けて給へ。そなたにては用なき物ながら、我方にありては重寶の物にて候」と、ふるひ〳〵いふ。松光笑ひて、「今日の對面の引出物に、頭はわぬしに奉るなり」といへば、此男よろこぶ事かぎりなし。扨松光が馬をつく〴〵見て、「天晴の御馬にて候。最前よりしばしが程、いさゝか嘶きだに致さゞるは、名馬のしるしに

丈六かきて—あぐらをかきて

に耕のいとまに痩馬に乗りたる分際にて、われと立並びて馬を走らせんとは、嗚呼なりとやいはん、かたはらいたき事なり。いかに見物の人々、我頭ほしと思さん人は、こゝに來つて走りくらべして見給はずや」といひて、高やかに笑ひて、むしろの上に丈六かきて居たり。松丸にくゝ思ひて、ひそかに山人にさゝやきけるは、「此男の馬をはしらす事疾しといへども、さきにおのれ師の作りたる馬に乗りて駈けさせたるには及ぶべからず。此男あまりに人もなげにほこるが惡ければ、木馬を引出でて、かれと勝負をこゝろみんと思ふなり。されど例のごとく走り過ぎなば、もと來し道にかへりなん。とゞむべき時にとゞむべき法や候」といへは、墨繩笑ひて、「木馬の舌をとらへて前にひかば、忽ちとゞまるやうに作りてあり。されど益なきあらそひなれば無用なり」といへど、松光聞入れず、馬につけたる革籠をおろし、馬の上にまたがり、手綱とりてあゆませて、かの男にいひけるは、「宣ふがごとくならば、世に未曾有の馬のりにておはすらん。いざ勝負仕りてん」といふ。墨繩山人は笑をかくして見ゐたるに、かの男は扇をつかひやみて、松光が方を見て、「腰のすゑざま大方ならぬは、習ある人と見えて候。おのれが頭を御所望に候や」とえせ笑ひつゝ、手綱とつてゆらりと打乗り、松光が馬に鼻をならべて、い

しるしにー上句「引馬野に匂ふ榛原いりみだれ」萬葉集

穆王の馬ー周の穆王八駿馬に乗りて天下を周遊せし事穆天子傳等に見えたり

あがり馬ー荒馬

るしに」と詠ませ給ひし名所にて、いとひろき大野なり。人あまた集り居れば、たゝずみて見れば、わかき男の馬にのりて走らせ居たり。見る人々ほめ物する事かぎりなし。此男馬より下りて、ほこらはしきおもゝちして、人々にむかひて言ひけるは、「馬の性はよく走る物なれど、乘る人未練なれば、良馬といへどもよく走らず。世に千里を走る馬あらば、おのれが乘らば二千里を走らすべし。むかし穆王の馬は足土を踐まず、一夜の中に萬里を行きしとか。されば馬の能はたゞ走るにあり。世にいかなるあがり馬ありとも、おのれ乘りて手綱をとらんには、たち所に乘りすゑて見せ參らせん。すべて日本のうちに、手綱の取りやうを知りたる者なく、又馬をよく走らするものなし。見物の人々の中によく馬を走らす人あらば、こゝろみにおのれと並びて、競馬の勝負を試み給へ。おのれもし負けたらんには、此頭を參らすべし」と、うなじを叩きていふさま、いとしたり顔なり。見物の中よりわかき人出でて、かれと馬をならべて走らする物あれど、けに彼がいひしにたがはず、皆半町あまり乘りおくれて及ぶものなし。此ある人々いよ〳〵感じてほめ立つれば、此男扇うち開き、臂をいからせて打あふぎつゝいひけるは、「およそ天の下に我にますべき馬のりはあらず。しかるにかゝる田舍に住める人などの、わづか

往きけるに、「そこの家、今年夫役つとむべき時にあたりぬ。疾く出立ちて京へ上るべし」といふ。是はそのかみ定れる事にて、國毎に百姓のかぎりは京にまゐりて、大内の丁となりて其職をつとむる事なり。山人いなむべきにあらねば、言うけして家に歸りけるに、墨繩、松光とく來てあれば、村長のいひつけし事を語る。母がいはく、「それはいとうれしき事なり。かゝる田舍にすまひぬれば、みやびたる事は夢にだに見ず。いたづらに草樹と共に世を終らん事のなげかしくて、いつか御ことを京にのほせやりて、やごとなき都のてぶりをも見せましと、年頃思ひわたりつるに、幸にこそあれ、まして墨繩君ものほり給へば、道のほどもおぼつかならず。我は留守の程は棹丸がもとに行きて、御身の歸りを待つべければ、心にかけずして疾く出立ちね」といふ。墨繩、松光も共によろこびて、とかくの用意す。其日となりて、棹丸も來りてねんごろに暇乞す。旅には例の木馬こそよけれとて、革籠など載せて、おの〳〵菅笠にわらぐつ履きて出立つ。棹丸は道までおくりて、母を連れて石濱へ歸りぬ。さて三人は木馬をひきて、かはる〳〵乘りて行きけるに、これを木作りなりとはさらに知る者なかりけり。扨衣は宿りあかつきは立ちて、行き〳〵て引馬野といふ所にいたりぬ。こゝは持統天皇の、「衣にほはせ旅のし

丁—古へ二十一歳より六十歳迄の男子の公役につくものの稱

てぶり—風俗

引馬野—遠江國三形原の古稱
衣にほはせ旅の

がたかたちは此人に似たる者もなく、われは此人の妻にてあらなんと思す。さて打語らひておはす程、思ひかけず父御門の御聲して、「守疾くまゐれ」と宣へば、此男さわぎて走り出づ。御みづからもいたく驚き給ひけるが、汗もしとゞになりて御目さめ給ひぬ。さるは机によりおはして、假初に見給ひし御夢にぞありける。御側にさふらひし人々、御湯など持ち參りて、「いかにおそはれさせ給ひしにか。御聲をさへあげさせ給ひき」と申す。御心のうちにも、いと日はずなる夢にこそありけれ、さるにても今ひとたびさる夢を見ばやと思して、其後殊更に机により給へど、御目もあはねば、まして夢など見させ給ふこともなく、たゞ見しおもかげの戀しくて、そゞろなる御物思と成りて、あかし暮させ給ひけり。

○都のぼり

墨縄は、船主があつらへし堂作りはてて、都に上り行くべしとて、棹丸に別れて山人が方へ來りける。山人はむらさきが死にうせしより、世中あぢきなく思ひとりて、かき籠りてのみ暮し居たりけるに、村長の許より、さしたる事あり、今來よと呼に來りければ、

やんごとなき—高貴なる
あてなる人—品格よき人
あばらなる所—荒廢したる所
むくつけき—むさくろしき
内わたり—内裏あたり

れど、琴棊書畫の道々すべてくらき事なく、上手にておはしければ、げに凡人にはおはさじなど、人々さゞやき聞えけり。或日姫宮御手ならひしさして、机によりて打眠り給ひけるに、夢見給ひけるやう、あやしき賤の家とおぼゆる所に、日頃手ならし給へる瓢の庇に釣りてありければ、おどろかせ給ひて、「是は我幼き時より、かたはら放たず持ちならしつる瓢なり、いかにして此處にはあるぞ」と宣ふに、内より人出來て、「これは我家にゆゑありて持ちつたへし瓢にて候。やんごとなき御わたりには、いかでかゝる物の候はん」といふを見給へば、鄙にはめづらしくあてなる人にて、物いひたる聲もさわやかにをかしければ、しばし打まもりておはしけるに、かたへに匠の木どもあつかひて居たるが入來ていふやう、「御前には此あるじとふかく契おはせば、女夫になり給ひなん」とて、手を取りて奥ざまへ率て行く。此家のさま荒れて、あばらなる所も見ゆれど、さすがに調度などは故ありげにて、むくつけき田舎人の様にはあらず。心ならずそこに居給へれば、匠杯取出でて、かのうつくしき人を我まへにすゑて、杯くみかはしなどす。此男を見給ふに、はじめ見しよりはちかまさりして、いみじう美しかりければ、扨もやさしき人にこそあれ、内わたりに行交ふ人々は、冠装束などこそうるはしけれ、す

陰陽師―事の吉凶を占ふ事を掌れる者
宿曜師―二十八宿、九曜などの星の行度によりて人の運命を考ふるを業とする人
驗者―修驗者
かんなぎ―神事を行ふ人。
ねびまさり云々―年長けて後も

れば、瓢のごとき形せる物なり。いかにも故ある物なるべしとて、かの瓢をとりて屋を下りて、人々に語りてけるに、希有の事なりとて皆人おどろきぬ。其由奏聞したりければ、よきさがにや悪しきさがにやとて、陰陽師宿曜師はさらなり、書の博士、諸山の高僧たちに仰ありて、占ひ申すべき由勅ありけるに、此姫宮凡人にはおはしまさず、仙佛の假にあま下りたまへるなるべしと、諸道の勘文みな同じやうに申しければ、帝もよろこびおはしまして、末たのもしくぞ思しける。此姫宮うまれ出で給ひて、泣き給ふ事かぎりなかりければ、醫師は御藥奉り、驗者かんなぎなどさま〴〵祈り奉りけれど、さらにしるし見えさせ給はず、ます〱むづかり泣き給へば、いかにせましと人々もてあつかひ聞ゆ。しかるに母御息所の宣ひけるは、「生れ出で給へる時、屋の上に落ちたる瓢こそ故あるべけれ。それを枕上にすゑて見よ」と宣ふに、とく仰のまゝに御枕上にすゑ置きてければ、さしも大きに御聲をあげてむづかり給ひけるが、たちまち止みて、すや〱と眠らせ給ひぬ。それより後、ねびまさり給ひても、此瓢は御かたはら放たず、常のまさぐり物にはし給ひける。此瓢と申すは、大きなるひさごを二つに切りわりたる形したる物にて、いやしき物の取りあつかふ柄杓のやうなる形せり。此姫宮たてゝ習ひ給はざ

更衣―後宮の女官の稱にして、女御の次

けるが、次第に聲も遠くなりて、霞にまぎれて見えずなりぬ。今にはじめぬ墨繩が機巧のほどを、人々はあゝと感ずるばかりなり。船主法師庭に下り立ちて、「我もかの鶴の如く、行くへ定めずなりぬべし」と、杖を曳きつゝ立出づる。人々も下りたちて、涙とともに門おくりして、袖をしほりて別れけるとか。

○夢のたゞち

其頃帝の御むすめに、更衣腹にて姫宮一人おはしましける。御姿美しくたをやぎて、ありがたき御かたち人におはしければ、いにしへの衣通姫など申すは斯くやありけんなど、世の人めで聞えけり。はじめ御母の更衣、里に下り給ひて御産ありけるに、古きならひにて、御屋の上に人のぼりて、甑をまろばし落す事あり。女宮生れさせ給ふには北へおとし、皇子御誕生には南へ落すとか申し傳へたる。此姫宮生れさせ給ひける日、甑取りて例の如く屋の上へ人のほりける時、大空より鞠ばかりに大きに見えたる物、光りかゞやきて棟の上に落ちぬ。此人おそれて、屋の上にはらばひて、目を閉ぢてふるひ居たり。扨何事もなかりければ、目をひらきて見るに、屋の上に物あり。おづく寄りて見

見てあれば、以前の廣岡太刀拔きかざし、濡れそぼちたる衣のうへに、たすき引結ひはしり入りて、大音にいひけるは、「水に落ちたる報答せんと、ふたゝび爰に來て見れば、松光めも來れるよ。おのれ等日頃の我うらみ、なで斬りにしてくれん」と、太刀ふりあげて打つて入るを、梓丸得たりとかいくゞり、太刀を奪ひて廣岡が襟元をつかんで膝に引きすゑて、「こやつ、おのれが罪おのれを責むるといふ事知らぬ人非人め。生けおかば世の人のうれひとならん」といひさま、刀とり上ぐるを、墨繩しばしとおしとゞめて、「こやつ極重の惡人といへども、むらさき殿の死し給ひて、いまだ葬送も遂げられず、且父君の修行の門出といひ、此の家も先人の忌日とさへ承れば、殺し給はん事、かたがたにつきて不便なり。されど斯くのごとき者、此のあたりに立ちめぐらば、いかなる仇をか仕りてん。よしよし我によきはかりごとあり」と、繩取出でて廣岡をくゝりて、作れる鶴の背におはせて、繩のあまりを鶴のくび足に結ひつけて、「かゝる不當の惡人は、日本の地には置くべからず。此儘すぐに追ひはなちて、唐高麗へながし物にせん」と、木鶴の尾をはたと打てば、不思議やこの鶴翅をひろげ、一聲鳴くと見えけるが、廣岡を負ひたるまゝ、西をさしてぞ飛び行きける。雲居には廣岡が聲して、「あはれあはれ」と呼び

降魔の像—惡魔降服の尊像

鬢且—印度

ひいらん—沖せん

雲水—行脚僧

りて、船主にむかひていへるは、「御發心のうへ諸國御修行と承はり、御暇乞のため參りて候」といひつゝ、ふところより小き佛龕とり出して、「これは拙作に候へども、降魔の像にておはしませば、途中安穩の御祈にもと奉るなり」とさし出せば、船主あまたゝび頂きて取りをさめぬ。墨繩又松光に持たせし包前にすゑさせて、又いへるは、「是はおのれ殊に心をこめて作り出せし木鶴なり。長途につかれ給はん時、此鶴に乘り給はば、ただに羽うつて飛び行かんには、天竺震旦にもいたりぬべし」と包を解けば、木作りながらさながら生けるごとくにて、げにく一度翼をひろげば、虚空にひいらん樣なりけり。棹丸とつて額にさゝげ、「道のつかれを忘れんは、これにますべき餞も候はじ」と、鶴をとつてさし出せば、船主墨繩に打向ひ、「わ君の厚意謝すべきに詞なし。されど雲水の身には、一鉢一衣にて事足りなん。邪法幻術の外道の師なりと疑はれんも心ぐるし。しかし折角の賜物なれば、棹丸に讓りあたへて、ながき代の寶とさせてん。我わかゝりし時にならひて、人を用ひて家ををさめて、山人と兄弟の親みうしなはざれ。棹丸よく心を と財をあらそひて、無益の罪をつくるべからず。いづれも堅固に世をすごされよ。さらば」とばかり言ひすてて、立出でんとする折から、表の方さわがしきを、人々おどろき

ひ、竹芝の家と不和となり、娘をさへ失ひしは、衣の裏の珠をだに、見知らぬ凡夫のあやまりなり。我はふたゝび家に歸らじ。死にうせしむすめこそ、我ための善智識なれ。今より諸國を經めぐらひ、これまでつくりし罪障消滅、且は娘が菩提のため、樹下石上を宿となし、抖擻行脚の身となりて、來世の苦患をたすからんと、疾く用意しつ。これ見てあれ」と、袋の烏帽子とり捨て、右の肩をおしぬけば、いつの間に剃りこぼちけん、まろ頭なる聖のさまにて、墨染の衣をぞ著たりける。棹丸向ひ立ちて、「理ある御發心ながら、あまり火急の御出立なり。せめて妹が七々の法事のいとなみ過して後、旅立ち給はん事おそからじ。御供にまからんずる者の、支度用意も調はじ」といへば、「世をすて果てて出づる者の、何條供を具すべき。家にかへりて法事修せよとは、理なる詞ながら、さるは親の心をしも知らぬなりけり。わかき者をさきに立てて、まめやかなる顏つくりて、いかで持佛の本尊をも見奉るべき。心の闇のたどたどしさは、かきくらして家路も知れねば、歸らん事は思ひもよらず。此まゝすぐ乞食して、遠き野山の露霜にそぼち、雨風に身をさらして、艱難辛苦したらんは、此身の咎を娘にあがなふ爲ぞ」といひさして、涙打かむもあはれなり。かゝるに墨繩さきに立ちて、松光に物もたせ、簀子にのぼ

衣の裏の珠云々―法華經五百弟子授記品に出づ
善智識―高僧
抖擻―世捨人、僧
かきくらして―暗みて
そぼち―濡れ

楚山の猿の腸—臨川の東鄭の人、山に入りて猿子を得歸る、母猿後より其家に到り、子猿の殺さるゝを見て怨み叫び自ら死す、腹を破りて見るに腸皆裂けたる事搜神後記に見ゆ
老いさらぼへるしれ者—老いて衰へる愚か者
もこよひて—世にさすらひて
いさち泣きたる—足ずりして泣きたる
こりずまに—懲りずして
うまご—孫

楚山の猿の腸も、斯るにこそと思ひ知りき。わかき娘をさきだたせ、老いさらぼへるしれ者の、世にもこよひて何かせん」と、位牌をつと身に添へて、いさち泣きたる血の涙は、秋の深山の紅葉ばを、時雨の染むるに異ならず。山人はたゞ打伏して、「かはゆの人の心や。互にあはんと契りにし、淺からぬこゝろざしも、淺草野邊の露ばかり、言もかはさで別れてき。猶こりずまに忍びつゝ、うきを宮戸の川面に、蘆分け小舟思はずも、綱手とともに玉の緒の、絶えはてしこそかなしけれ」とて、聲もそゞろに泣き居たり。老母もともに袖をしぼりて、「さる眞あるこゝろざしを、百が一つもさとりなば、又せん方もあるべかりしに、いとほしの身の果や」とて、位牌を取つて佛壇に居ゆれば、山人立つて涙ながら、金椀に水をたゝへ、香爐にくゆらす一たきの、煙の末もなつかしと、むせかへれば、母親は、「斯くみさをある娶の君に、姑よとかしづかれ、うまごを生せて見ましかば、いかばかり嬉しからましを、わらはが宿世こそつたなけれ」と、又うち伏してぞ泣きにける。棹丸涙の袖をはらひて、「妹が死せるは悔いてかへらず。山人が妻となり、香花の供養受くるうへは、彼がよろこびこれに過ぎず。此上は立歸り野邊おくりして、七々の追善讀經いとなみなん」といへば、船主頭うちふり、「うき世の欲にかゝづら

おしたちて—あながちに

の用意し候はんまゝ、吉日をえらび給ひてこなたへおくり給ひなん」といふを、船主聞きもあへず、「老の身は氣みじかく、若かりし時のごとくのどかに物を待つにたへず。只今これにて夫婦の盃とりかはさせ給はるべし」といひつゝ、懐より一つの位牌取出して、山人がそばに置きて、「此位牌の娶の君へ、疾く〳〵盃さしてたべ」といひさして、聲をあげて泣出す。山人いよ〳〵心も得ず、いかに〳〵と色をかへて問へば、棹丸かれたる聲をあげて、「妹は一昨日の夜みづから縊れて死につるはや」といふに、山人たましひ失するばかりになりて、何事のありて死したるぞと、身をふるはして棹丸が傍に寄れば、船主涙をかきのごひて、位牌を取つて打ながめいひけるは、「十四年の此年月、春の花秋の月にもかへて、手のうちの珠と思ひていつくしみ育てつるに、はかなく見はてぬ夢とはなしつ。よく思ひめぐらせば、果報つたなき生れなりけり。心ひがみし古翁が、おしたちてのゝしりしを、うらめしげなる顔もせで、すご〳〵と部屋へ入りたりしが、胸にあまりて山人に、そはれぬ事と思ひつめて、命すてつるかはゆさよ。さばかりに思ふと知らば、まげても許すべかりしを、汝が母のわれを責めて、娘が命生けてかへせと、我をのゝしるたび〳〵に、膽にこたへ骨にとほりて、五臓六腑も餡となりぬ。げに〳〵

袋の烏帽子―袋形の烏帽子

朱陳の語らひ―両家婚姻を通ずること、詳しくは近江縣物語巻之五に註せり
もどき―批難し

妹がねがひを叶へて給へ」といへば、「此券我家に返しおこせるは、そこ一人の心なるべし。養父なる船主殿の、いかで是をゆるすべき」といふに、棹丸頭をふりて、「養父が心にゆるさざるを、いかでわたくしに計らふべき。とにかくに此券をさめ給へ」と、しひて老母が懐におし入れ、おもての方にむかひて、「事なりぬ。疾く〳〵」といへば、かしこに待ち居たりと見えて、石濱が下人ども、てんでに白木の臺に衣綿など載せたるを、打さゝげ入來て緣先にならぶれば、娶の君の輿と見えて、しづかに舁來て庭にすゑたり。母も山人も心ならず、あまりに俄の娶入にと、たゞあわてて打ちまもる。時に輿の戸をひらきて立出づる人を見れば、思ひもよらぬ蘆屋の船主なり。頭に袋の烏帽子うち著て、身には布の肩衣きて、よろぼひつゝ緣にあがれば、母も山人もおどろきて、又いかなる凶事出來ぬらんと、胸とゞろきて守り居り。船主老母の方に向ひて、「我むすめ今日しひて婚姻の一條、棹丸をもつてさきに申入れたるに、うけひき給はりし由滿足しつ。山人にも今よりは、これまでの怨をのこさず、ながく朱陳の語らひしてたべ」といふに、老母すゝみ出でて、「申さば夫婦一世のいはひ事に候を、暦だに見ず、日どりをもえらばずして、俄に女夫の盃せんはかる〳〵しく、人ももどきいひなん。こなたにてもそ

うけひかざるは
—承引せざるは

のれが妹にて候むらさきと申す者、山人をふかく慕ひ、春の頃より病ひづき、命も危く候ひしに、やうやく此頃病いえがたになりて候へど、戀慕の心やむことなく、しひて山人の妻とならんとせちに思ひさだめて候。あはれ母人の御慈悲に此婚姻とゝのへ給はらば、おのれが悦びはもとよりにて、妹が本望これに過ぎず。ひたすら許させ給ひなん」と、思ひ入つてねがふにぞ、母しばし頭かたぶけてありしが、「娘心にしかばかり我子を戀ふるこゝろざし、うけひかざるは無心に似たれど、父君の代より不和なりし蘆屋が家と縁を組みなば、なき父の御心にやそむきなん。父君ながらへおはしまさば、我もともどもいさめ聞えて、此婚姻成就せんやうにあつかひ聞ゆべけれど、亡人となり給ひぬれば、せんかたもなき事ぞかし」といへば、棹丸うなづきて、「理ある仰にて候」といひつゝ、懐より封じたる一片の紙とり出し、母がまへにさし置きて、「此一品は妹が娶入のみやけの調度、目錄しるせし一通にて候。ひらいて御覽あるべし」といふに、心得ざれどひらき見れば、國司の廳にてあらそひし田畑を書きたる券なりけり。棹丸猶いひけるは、「竹芝の家と蘆屋の家爭論に及びしは、此券に記したる田畑より事おこりぬ。これを返し參らせなば、亡き父君の御魂にも、遺恨はよものこし給はじ。とく此券納め給ひ、

ましと、年月胸をくだきたりしに、こぞの春向ひが岡の花見の頃、廣岡が狼藉を見るより、顔をかくして其場に出でて、御両人を助けしも、おのれなりとはよも知り給はじ。其後廣岡めにとらへられ給ひて、かれが家におはすと聞きて、いかで取返し參らせんと、廣岡が家のあたり晝夜となく伺ひしに、おもはず松光がはからひにて、塀をこえて出で給ひぬ。見るよりうれしく背におひ參らせ、此家ちかき所まで御供はいたしながら、母人とだに呼び奉らず、其まゝ別れ參らせしおのれが心を推察あれ」と語れば、母親、「さては両度のうきめを救ひしはおことにてありけるか。今日のいま迄さは知らで、神佛の化現にや、有りがたき人もおはしけりと、口につけていひたりしが、神ならぬ身はおろかにも、みすみすおことが背におはれて、我子と知らでありけるよ。おことが孝の心とどきて、今日の危きをも遁れし上、絶えて久しき親子兄弟、對面に及びぬるは、今日の忌日の聖靈のしるべして給へるならん」と、母はさらなり山人も、持佛を拜してよろこびけり。棹丸母の前に手をつきていひけるは、「今日これへ參りしは、母人へおのれが願ふむね候。聞しめされなんや」といへば、「かく名のりあふ上からは、所存あらば何事も語らひあはせて然るべし。とく語りてあれ」といへば、棹丸涙をはらはらと流して、「お

けてよろこび泣に涙おとせば、母涙をかきはらひて、「玉川の百姓の家は跡もなく死にうせたれば、そこの行方を尋ねんに手がかりしるべもあらざれば、いかで佛神の御めぐみにて、一度はめぐり會はなんと、こがれにこがれし二十餘年、烏の鳴かぬ日はありとも、思ひ出でぬ時はなかりしを、など疾く尋ねては來らざりし。今はいづこに住みてあるぞ」と、聲ふるはしつゝ問へば、「さん候、おのれ五つにて候時、人のもとへもらひ取られ、かしこにて生ひそだち候ほど、かの玉川の百姓はわづらひて失せて候。かれ未だながらへたりし時、おのれに語り候は、わどのの父は荏原郡にて酒つくりてあき物するかしこに往きて、親子の名のりし給へと申し置きて候所に、はからず蘆屋の家の養子となり、今の名は棹丸と申して候」と語りもあへぬに、母すり寄りて、「其蘆屋殿とはいづれの人ぞ」と問へば、「さるは我父と不和なりし、石濱なる船主にて候」といふに、母も山人も又驚きていふことなし。棹丸かさねていひけるは、「おのれ物の心を知りてより、母人をとき參らせんとするに、養父船主どのの詞を聞けば、竹芝の家とは仇ありて不和なりと承りぬ。さらば船主が子と名のりては、母人對面し給はじ、とやせましかくやせ

あつかふ―介抱する

おぼ〳〵しけれど―おぼろげなれど、分明ならざれど

する汝なれば、命たすけて置きがたし」といひさま、両手に廣岡をかいつかみて、目より高くさしあげて、ゑいといひさま前なる川に投込みつ。廣岡はあッと叫びたるまゝ、水にまかれて流れ行きしは、心地よくぞ見えたりける。かの男は老母が手をとり、切戸を入りて、山人が打すゑられたるをとかく介抱して、簀子の上に抱きあげて、水など飲ませてあつかふを、母はうれしきが中にもいぶかしくて、「そもいづくの御人におはして、われ〳〵を助けて給へるぞ」と、手をあはせつゝ禮をなせば、かの男母が顔を打まもりて、ふところより疊紙とり出でて、「これ御おぼえおはすにや」とて出すを、おぼ〳〵しけれど取上げて開き見れば、式紙の半きりたるにて、讀み見れば、「なにぞこの子のことだ悲しき」と記してあり。母おどろきて、「此式紙は我つまの手跡なり。これを持ちておはすはいかなる人ぞ」と不審すれば、かの男はるかに飛びしさりて、頭をさげて言ひけるは、「おのれこそ初生の頃、玉川の百姓がもとへ遣されし、幼名はてつくり丸にて候へ」といふに、母親又おどろきて、つと側へさし寄りて、つく〴〵と顔をながめて、二十餘年はへだてぬれど、左の耳の黒痣といひ、おもざしも父君の顔に覺えたる所あり。扨はわが子のてつくりかとて、抱きつきて泣き出す。山人も、思ひよらぬ兄君の御對面と、頭をさ

の革籠なれば、盗人ござんなれと、山人飛びおりて、革籠に手をかけて引き戻す。盗人はふりきつて行かんとするを、母行くさきを立隔てて、「白晝に人の家にいる盗賊、いかでやすく通さん」といふ。盗人いらつて母をつきのくる。山人又寄りつきて、やらじと止むれば、盗人あたりなる棒おつとつて山人を打ちすゑつ。とりつく母をも同じく打ちすゑて、えせ笑ひつゝ頰かぶりとりて、「山人われを見知りたりや」といふを仰ぎ見れば、さきに獄屋に入りし廣岡なり。山人聲をあけて、「汝またも來つてわれに仇するにや」といへば、廣岡うなづきて、「國司の廳に引出され、汝等がために家をうしなひ、遂ひやらはれたる廣岡なれば、いかで汝等を恨みざらん。今日こゝに入りこみたるは、汝が蓄へ置ける衣類調度を奪ひとり、さて汝親子を殺さんために忍び居たり。死出の旅の用意せよ」といひさま、又ふりあげてしたゝかに打つ。母その手にとりつくを引捕へて、一間ばかり投げつけて、「疾く此世のいとまとらせん」とて、厨にかけ入りて、庖丁とつてをどり出づれば、母は表をさして逃出すを、追かけて切戸を出づるに、思ひかけず大なる男の切戸のそとに立ち居けるが、廣岡が持ちたる庖丁もぎとり、足をあけて蹴やりたれば、あふむけに倒れけるを、乘りかゝりてしたゝかに踏みつけて、「竹芝親子を害せんと

玉川に云々―此歌、萬葉集に出づ
てつくり―子の幼名てつくり丸に掛く
こゝだ―甚しく
さしつぎに―引續きに

なり給ひし父の殿の、ひそかにこゝろざしを見せ給ひて、忍び〳〵に語らひてけるに、本妻の聞知り給ひて、いたく腹立ち給ひければ、しばし我をば親里にかへし給ひき。其時おのれ懐姙して、ほどなく一人の男子を生みぬ。この事本妻にもれ聞えなば、いかなる事か出來なんと、藁の上より其子をば玉川なる百姓のもとに遣しつ。其時父君の筆ずさみに、

玉川に晒すてつくりさら〳〵になにぞこの子のこゝだ悲しき

と式紙に一首を記し給ひて、半より此式紙を引裂きて、下の句は産子のまもりにをさめ、上の句の方は我にあづけて置き給ひぬ。其後本妻も死に給ひければ、憚る事なくて、われを家にむかへ給ひき。さてなんさしつぎにわぬしをも生みたりし。かの玉川の百姓も死にたえたりとて、其後おとづれ通はしつれど、跡かたもなくなりて、つかはしつる子の生死をだに知らず。もし家の内にてそだちなば、わぬしのよき力草なめるを、行方だに知らぬやうになり果てしも、あぢきなき世にぞありける」と、涙をおとしつゝ語れば、山人も父のかたみの筆のあとと聞きて、あまたゝびおし頂きて、共に涙にくれにけり。かゝるに、くり屋の方より革籠を荷ひて、庭づたひに出づる者あり。よく見れば、我家

飛騨匠物語　巻之四

○よめの君

山人は、むらさきを船にて見うしなひて、川岸をかけ走りさまよひけれど、影をだに見ざれば、せんすべなく、心ならず家にかへりて、一二日過しけれど、おとづれをだに聞く事なし。思ひなやみて、食事も咽をとほらざれば、松光が許へ人をやりて、様子をも伺はゞやと、ひそかに文したゝめ居たる折から、母奥より出來て、「今日は父の殿の忌日なれば、精進物とゝのへて佛前にまゐらせんとす。おこともまかなひて給へ」といへば、山人文書きさして、佛壇の塵かきはらひ御燈ともしつゝ、ふと佛の御前を見れば、小き式紙、佛の御膝の上に載せてあり。取り見れば、墨ぐろにて、「玉川にさらすてつくりさらさらに」と書きて、下の句はなし。不審に思ひて母に向ひて、「此式紙は常に目にふれざる物にて候。いかなる人の筆にか」と問へば、母がいはく、「それこそそこの父の御かたみなれ。其子細かたりて聞せてん。おのれはもと此家の下女にてありけるに、なく

音をのみ泣きて―聲を出して泣きて

石の枕―淺茅が原の一つ家にありしといふ物

夢に見てやおはすらんなど、はかなき事のみ思ひつゞけて、音をのみ泣きて打倒れぬ。かくて夜一夜悶えこがれて、わりなく泣きしづみ居り。げに床中にたゞよふ涙には、あたりちかき隅田川の渡守も船寄せつべく、又かの淺草の里にありとかいふめる石の枕も浮きぬべくこそ。

びてあり。いかでかれに我むすめをしもおくり遣すべき。殊におのれ、親だにいまだことを打出でざるに、みづから男を選りて、かれを夫とせんなどいふ事、傍若無人とやいふべき。女のはしるは許すべからずとは賢者の詞なり。耻を知らざる者は我も子とはせじ。疾く心をあらためずば、ながく勘當して逐ひはなつべきぞ」と、いたくうち腹立ちて、つかみかゝるべき有様なれば、母制して、娘を引立てて部屋にともなひて、様々とすかしこしらへつゝ、「われ兒とかたらひて、すべきやうこそあれ」などいさむれど、娘はたゞ泣入りて答せず。老いひがみたる父がいかり罵る聲、なほ部屋にもれ聞えて、たましひも消ゆるばかりの心地しつ。かく父のおもひ定め給へば、とても山人ぬしの妻とならん事かたし、なまなかながらへ居て憂きを見たらんより、死なんこそまさらめ、但春より病づきて、心地死ぬべくこそ覺えたりしが、不思議に病おこたりて、戀しとおもふ人に我心をも見せ奉り、ほのかながらも御顔をも見奉りぬれば、せめてこれを世の思出とすべくなど、さまざま思ひみだれつゝ、葭廬かきわけて出でたりし面影さへ思ひ出でられて、わが乘りし舟の行くへなくなりぬとて、さこそ心をもまどはし給ひけめ、つがなく家にや歸り給ひけん、我かく思ふとも知り給はで、今ごろは寢やし給ひぬらん、

みそかに―密に

あいなき事―とんでもない事

るなるべし、此後逢見奉らん事もかなひ難かるべければ、生ながらへたりともかひなからんなど、さま〴〵と思ひめぐらしけるが、今一度父にみづからうれへ聞えて、事かなはずば其時にともかくもなり果てなんと、心をさだめて父の前に出でて、泣く〳〵かきくどき言ひけるは、「父母の仰を待ち奉らず、みそかに男まうけんと思ひたちしは、そらおそろしき身のとがに候へども、宿世のなす所にや、思ひかへし侘びて候。いかで此おろかなる心をあはれませ給ひて、山人君の許にわらはをおくり給ひなん。斯くつゝましさも忘れて、あいなき事聞え奉るも、日頃の御いつくしみにあまえたるにて、且はわりなき惑に候」とて、涙を瀧のごとくおとし、手をすりつゝ疊にうちふせば、母は悲しとや思ひけん、「さのみな歎きそ」といひて、夫に向ひて、「此事ゆるし給ひなん」といへば、父眼を大きくなし、頭右左に打ふりて、娘をにらみていひけるは、「おのれ幼しといへども、竹芝が家、我家とひまある事はよく知りつらん。世に人もおほかるを、彼をしも戀ひそめたりとはいかなる事ぞ。ましてかれは家貧しくなりて、今日の烟をだに立て兼ねつと聞く。さやうのものに娘をやらんは、我家の大いなる耻なり。かの山人が母我をいたくそねみて、われ横ざまに彼が田畑を所得せりなどそしり居る事、よく聞及

待つ。松光も舟のなくなりたるに膽をひやしたりしが、墨繩が詞にすこし心おち居て、川づらを目もはなたず守り居たるに、筏に棹さして來るものあり。見れば下總にてあつらへ置きしおのが材木を積みて來るなれば、呼びとめて、人々此筏に乘りて見て居たるに、川下より舟人もなき舟の水にさかひてのぼり來るあり。中を見れば、娘むらさき舟底に泣きふして居れば、人々筏を漕寄せ、舟に乘りうつりていたはる。娘は此舟のふたたび我方に歸り來るとは知らず、ひたすらに遠き方に流れゆくよと思ひて、今や身をなげんとかまへけるに、思ひよらず人々にあひて喜ぶ事かぎりなし。「不思議に娘が命たすかりぬるも、ひとへに墨繩ぬしの機關のたくみによれり」とて、いよ〳〵尊み仰ぎて、なほざりならず奔走しけり。扨家に歸れば、母親など子細を聞きておどろき、且恙なく歸り來るを悅ぶ。娘は其まゝ部屋に入りて、頭いたしとて臥しけるが、つく〴〵思へるは、さても春より死ぬばかり煩ひて、山人君を戀ひしたひて、たま〳〵淺草にて待ちつけ參らせしに、あやにくなる事出來て、御顏をだによくも見參らせずして別れぬ、今日こそいかでと思ひはかりて、目のあたりちかづき奉りしに、思ひよらず綱手繩のたちまちに絕えはてて、悲しくもほいなき別をなせし事、とかくに神佛の我を見はなち給ひぬ

なぐさみて―安心して

舟のたゞよひて海に出でなば、大波に打かへされて、たゞちに底の水屑とやならん、我あやまちにより契りてし人を殺さん事、罪のほどそら恐しとて、又かけ出して追ひ行けども、葭蘆にさへられて、はや舟のゆくへも見えざれば、たゞ身をもだえて一人岸に立ちてなげき居たり。これは扨おき船主は、かしこの岡を下りて、餌になるべき蚯蚓などあまた取りて、もとの岸に立歸り見るに舟見えず。おどろきて、こゝかしこもとむれども、跡も見えねば、さてはしばしの程に、波にひかれて舟のはしりけるにこそとて、涙をながしつゝ聲をあげて、「むらさき〳〵」と呼びて、岸のあたりを走りありく。墨繩はすこし遲れて來りけるが、船のゆくへ見えず、かつ船主が狂氣せるやうに立走り居るを見て、袖をひかへていひけるは、「さやうにさわがせ給ふな。此舟たとひ風のためにさそはれて吹かれ行きぬとも苦しからじ」といへば、船主がいはく、「たゞ一人の娘を波にしづめたらんに、いかで騷がであるべき」といふ。墨繩うちわらひて、「おのれさきに馬をつくりて、松光を見失ひたるに懲りたれば、此度つくれる船は道のかぎりを極め候て、一里の水路を走りなんには、かならず舟またこなたに向きて、歸り來たらんやうに作りおきたり。しばしこゝに守りておはせ」といふに、船主すこしなぐさみて、岸に坐して

かたみに―互に

く走り來て知すべきよし申しつれば、疾くこゝに入り給へ」といふ。此舟岸より一間ばかりしさりてあれば、乘らんにみちなし。今日はじめて下したてたれば、忘れてともづなも附けざりけり。娘ほそき帶とり出でて、舟の艫にむすびて、帶の端を山人が方へ投げやりて、「とく舟を引寄せ給へ」といふ。山人帶の端を取りて力を出して引けば、舟こなたへ寄り來るさまなり。今や父の歸り來給はんと思へば、心も心ならざれど、又逢見ん事のかたければ、ひたすら近づきて思ふ事をもいはゞやと、互に心せかるれば、胸のみをどるぞことわりなる。山人力を入れて引く儘に、此舟岸の方へ三尺ばかり寄り來たりと思ふに、此持つたる帶半よりふつと切れて、山人は葭の中へあふむけに打倒れぬ。舟は此ひやうしに四五間ばかり川中へ出でたり。山人すぐに起上りて見れば、舟は水にしたがひて流れ行く。娘はわびしさ物ぐるひの如くなりて、山人が方を見てあきれ居たり。岸なる人も物ぐるはしく、葭をわけつゝ岸づたひに歩めど、舟にちかづくべきにあらねば、果てくは聲をあげて、かたみに泣くばかりなり。此川上は名高き入間川にて、みなもとは遠き郡より出でて、流するどき水なるを、折から北風のはげしく吹き出でてければ、舟は矢のはしるごとく海の方へと流れゆきぬ。山人心に思ひけるは、かよる小き

らきて、とり〴〵に酒くみかはす、いと興あり。松光、われも釣せんとて、竿をとりて、餌の入りたる籠をとりて、誤りたるふりして川に打落しければ、水にしたがひて流れてぞ行きける。船主釣すべき餌をうしなひて、「いかにせまし、此あたりにて蚯蚓など掘らまし」といへば、しかるべしとて、墨繩立ちて、此たびは小き杭をまはしけるに、舟おのれと岸につきぬ。娘ばかりを舟にのこして、船主先に立ちて岡にあがりて、彼方此方とあされども、此あたり蚯蚓など見えず。松光かねてはかりたる事なれば、「かしこにこそあらめ」などいひて、遠き方へみちびきて行きぬ。此わたりは、岸邊にはたかき葭蘆生ひしげりてあれば、行くさきも見えず。娘はかねて契りてし事あれば、わが思ふ人はいかにと岸の方を打まもり居るに、そよ〳〵と葭の音すれば、目をつけて見遣りたるに、あなうれしや、戀ひしたへる山人、衣も露にぬれそほちつゝ、葭の中より顔さし出でたり。娘は飛立つばかりうれしくて、「さこそ待ち給ひつらめ」といへば、山人、「今朝の程より此岸につきて、舟の行くをうかゞひて、葭の中をかけ參りたれば、わびしきめ見つ」といひて、白き手を出せるが、葭蘆にさゝれて疵つきて、所々血出でたり。「われ故かばかりからきめ見給へるいとほしさよ。先疾く舟にのぼり給へ。父のおはさんには、松光疾

ならず、東海道の道筋などをも、まへしりへと誤まる事あり、古本を見たる人は知るべし。さてすみだ川といは、こゝばかりならず、出羽國紀伊國にもありて、ふるくより詠歌あり。駿河にもありと注せる書もあり。かく所々に同名あれば、古歌などをも思ひたがへて誤る事多し。萬葉集に、

まつち山夕越え行きていほ崎のすみだ河原に一人かもねん

と詠めりしは、紀伊國なる角太川なるを、爰の事ぞとおもひ誤りて、末の世には、まつち山、いほ崎などいふ名をしも、あたり近き山里の名にかうぶらせ呼ぶやうにはなりぬ。これは爰にようなき物語なれば、いひさしてとゞめつ。さて船主は此すみだ川の岸に墨繩が作れる船うかめて、人々とともに船にぞ乘りける。此舟小けれど、いさゝか屋根めく物もありてあらはならねば、女などの乘らんには便よしといふ。されど舟狹ければ、召しつかふ者などは乘せず。船主、墨繩、松光、娘と四人ばかりぞ乘つたりける。墨繩舟の舳に立ちて、いさゝか杭のごとき物をうごかしけるに、此舟おのれとうごきて、しづかに行く事人の漕ぐよりやすし。岸に居たる棹丸をはじめ下人等迄、手を叩きてこれをあざみ見る。船主釣の糸おろして、舟の行くまゝに魚を釣りてたのしむ。さゝえなどひ

さゝえ―酒を入るゝ竹筒

いざ事とはん――伊勢物語「名にしおはばいざこと問はん都鳥我が思ふ人はありやなしやと」

がら例のおもしろく作りなしつ。船主常に川に出でて釣する事を好みければ、此舟つくれるを見てよろこぶ事大かたならず。「明日は宮戸川に棹さして、釣してあそばん」といふを、松光聞きて娘にさゝやきて、斯う〳〵なし給へと敎へて、おのれも其用意をぞしける。扨翌日になりて、船主釣竿など用意して、墨繩松光を誘ひて舟に乘らんとして、舟にこゝろ得たるめしつかふ男をよびて、「汝棹させ」といへば、墨繩がいはく、「人して漕せん舟は、誰が手にても作りつべし。これは機關をまうけて候へば、人の手をからずして、舟はおのづから行くべし」といふに、聞く人興ある事にぞ思ひける。娘父に向ひて、「わらはをも率て行き給へ」といふ。父頭をふりて、「女など川逍遙すべきにあらず」といひて許さざれば、松光がいはく、「これはよのつねの舟とも違ひたれば、紫どのの所望道理あり。船中他人もあらざれば乘せ給ひなん」とすゝむるに、さらばとて引連れて出で立つ。此船主が家の前は名に高き隅田川なりけり。そもこの隅田川といへるは、古よりいと大きなる川にて、業平朝臣の、いざ事とはんと詠み給へりしは、人の知る所なり。又更科日記に、下總の國と武藏の界にてあるあすた川とぞいふ、と記されしも爰の事なり。此日記印本あまたあれど、みな誤りありて、こゝをもふとる川と記しつ。これのみ

榑—切りこなしたる木

玉の緒—命

より〳〵—時々、折々

○うきふね

墨縄は下總の國にて、さるべき榑材木など選びとりて、筏につくらせて川へ出させ、さて船主とともに立歸りけるに、かの筏もいまだこなたに至らず、むなしく日を過さんもいたづらなりとて、ひとり船主が樓にのぼりて、例の道具ども取出でて、物つくりてぞ居りける。こゝに娘むらさきは、なま中初假にあひ見てより後、いよ〳〵玉の緒も絶ゆるばかり思ひまさりて、いかで今ひとたびの逢瀨もがなと松光を責むる。松光もいかでと思へど、此家掟きびしく、みだりに女などを外に出す事なく、又家のうちも門戸のへだておごそかにて、外よりしのび入るべき隙なければ、なまなかなる媒にかゝづらひて、中々心をぞいためける。兄の棹丸も、妹が心を知りたれば、父船主により〳〵すゝめて、「山人の方へ妹をやり給へ」といへど、船主ふつに承引せざれば、打歎きてぞ日を過しける。或日墨縄樓より下り來て、あるじ船主にいひけるは、「おのれこゝろみに船ひとつ作り出でたり。内にいさゝか機關をまうけ置きたれば、乘りて試み給へ」とて、下人にいひつけて、かの舟をとり下させつ。人五人ばかり乘るべきさまにて、小さき舟な

さるを見すてて云々―古今集「春がすみ立つを見すててゆく雁は花なき里に住みやならへる」
常世―常世國、逝きて再び歸り得ぬ國土
くら〳〵―日暮頃

粧ひし玉を、山人が方をなごり惜しげに打見やる。頭ふるへば、輿より顔をさし出して、ゆら〳〵とうちゆらぐは、風に散りかふ花かとも思はる。さるを見すてて別るゝは、片羽となりし雁がねの、常世に歸る心地せられて、山人は遠くたゝずみ居て、のび上り見るばかりにて、物だにいふ事ならざれば、これもそゞろに涙ぐむ。輿かく男女どもは、「くら〳〵になりぬ。いそがばや」とて、ひたすら足早に道をいそぐ。山人は猶たゝずみて、しばし見送りてありしかど、いかにともせん方なし。折から撞出す暮六の鐘に、心ぼそさも忍びがたくて、あはれとばかり言ひさして、かへり見がちに行きなやむ。娘は輿より顔さし出して、いくたびか打見やるを、父立寄りて、「風にあたらば惡しかりなん」とて、輿の簾をさへ下しつれば、うつぶしふして泣きしづみつ。かくまでたばかり設けつるを、物だにいはせで別るゝ事、かへすぐ〳〵本意なしとなげ首して、松光も山人が方を見返りつゝ、南と北へ別れてぞ行きける。扨もあぢきなき宿世なりかし。

ひまある中――なかたがひの間がら

ひと目――目一杯

り。松光、「此酒あまりにわき過ぎたり。かしこに持行きてさまして來よ」といへば、輿の男、「さましなんには、かしこに持ち行かずとも、爰もとにてもさめ申すべく」といへば、これにつまりていふべき事なく、又頭かきて居たるに、女も湯を持て來れば、今は術計つきてせんすべなし。かゝるに、あなたより菅笠著たる人の飛ぶやうに走り來て、笠とるを見れば、娘が親の船主なり。大息つきて、「われ墨縄ぬしと下總よりたゞ今歸り來る道にて、召しつかふ男が走り行くを見て、事のさまを問へば、娘が今日觀音にまうでたるに、途中にて病おこれると聞きて、そのまゝ直にかけ來りつ。いかに心地よくなりぬや」と問ふ。松光、「俄に癪のおこり給ひて大にさわぎ候へど、今は心地しづまり給ひぬ」といらふ。船主、山人が遠くのき居たるを見やりて、「かれは竹芝が子にあらずや。我家とはひまある中なり、何とて此あたりにためらひてはあるぞ」といふに、松光ひきとりて、「思ひよらず只今こゝにて出會ひて、物語せんと存ぜしに、湯と酒と一時に參りて、疾くと物語も仕らず」といへば、「さてはわどの彼としたしうし給へるにや。我家は子細ありて、かれが家とは交を絶ちてあり」とて、女ばらに向ひて、「かやつに物ないひそ」といひて、不興げなる面もちす。さて輿を舁上れば、娘は涙をひと目浮けて、

神やらひにやらひ―追ひ拂ひ

ふづくみ―憤り

男あれば、かれに向ひて、「我わすれたり。かの酒ひとたび溫めて、それをよくさまして、再びあたゝめて持て來よといひつけてやるべきを忘れつ。汝とく追つかけていへ。但汝等もそのついでに、酒飮みて來よ」といひて、錢なげ出して遣りければ、此男も足をそらになして走り往ぬ。「さて邪魔のやつは皆神やらひにやらひぬ。山人ぬし疾く輿のもとに寄り給へ」といふに、さすが恥かしくや、ためらひて寄りも來ず。松光いらちて、「今にも湯も酒も一度にもて來らん。敵にむかはん大將軍の、さやうにおぢ憚るべきかは」といひて、手をとりて輿の戶を明けてつき入れんとす。娘ははじめより虛病つくり居たるに、松光が人を避けてはかりごとを行ふほど、笑ひをしのびてありけるが、戶を明けて山人が顏ばかりさし入れつれば、はづかしさを忘れて、しがみつかんとする時、「湯をもて參りし」と女が聲すれば、山人おどろきて疾く飛びのきつ。松光見て、「此湯猶ぬるし、今すこしあたゝめて持て來よ」といふに、女、「いかでぬるからん。たぎり湯にて候」といへど、松光頭をふりて、「ぬるし〳〵」といへば、女はふづくみつゝ、又もとの家に走りいぬ。松光、山人が手をとりて、「先輿の內に入り給へ」といひさま、しひて押入れんとする所へ、輿かく男走り來て、「酒もて參りつ」といふに、山人又輿のわきに飛出でた

ちかまさりして
―遠目より近見
の優ること

には中々ちかまさりして、うつくしき男なれば、いよ〳〵わりなき思ひなぞ添へける。並樹だちたる所に來ければ、此のわたりは物詣の人もすくなく、やゝ物さびしげなり。時に娘いかにしたりけん、竹輿の中にて、あと叫びければ、供のものどもまづ輿を地にすゑさせて、あわてあつかふ。松光驚きて、「これは月頃の病のふたゝび起りたるならん」とて、輿をのぞき見て、「正氣さらにつき給はず、此あたりさるべき醫師あらん、尋ねて來よ」といひつけやりて、又一人の女に、「かしこの家に行きて湯をわかして貰ひて來よ。たれ〳〵は、疾く家にはしり歸りて、事のよしを告げよ。我あれば此所は心やすかるべし」といひて、皆人々を走らせやりて、いかで山人を輿の内に入れて、しばしだに物語などさせんと心をくばりけるに、輿かく男二人まだ傍にあれば、松光頭かきてさまざま思ひめぐらしけれど、此上彼等を避け遠ざくべき法もなし、いかにせんといろ〳〵思ひて、俄にうゝと言ひてそりかへりぬ。山人も輿かく男も、おどろきて介抱すれば、松光たえ〴〵なる息の下に、ほそき聲にていひけるは、「われ心をつかふ時はいつも斯る病發しぬ。これには酒を飲めばたちまちに癒ゆるなり。疾く酒を買ひて來よ」といへば、輿かく男一人やがて酒うる軒をさして走り行きぬ。松光かたへを見れば、今一人輿かく

薩埵―觀音

あつかひて―介抱して

思ひ念じて―思ひこらへて

の靈場にて、參詣の男女ひきもきらず、にぎはしき事云ふも愚なり。げにこそ薩埵の御利生いみじきしるしなれと、娘も拜み入りて、御堂を下りて、こゝかしこ立ち休らひて見めぐらせど、山人を見ず。今日あひ參らせずば、いつの時にか又あひ見んと、心一つに思ひ侘びつゝ、山の紅葉をめづるにかこちて、とかく休らひ居る程、日も西にかたむきなんとす。松光も心ならず猶立ちもとほり居れど、山人が影だに見えず。供に添ひたる男女、「はや日くれに近く候へば、母君の待ちおはしますらんを、疾く歸らせ給へ」といふ。しばしこそあれ、さのみ御寺のうちに佇むべきにあらねば、あながちに竹輿に乘らんとすれば、あなたより息をきつて走り來る人あり。松光うち見るに山人なれば、さし寄りて、「などて斯くおそくは來給へる。待ちつかれて今歸らんとて、かの人ははや竹輿に乘り給ひき」といふに、山人、「今朝より母人の癪になやみ給へば、とかくあつかひて、心ならず遲くなりぬ」といふ。供の男女の目をしのべば、竹輿のあたりに寄りつくべきにあらず、何となく松光と物語するふりして、竹輿の中を見やれば、娘も本意なげに山人をうちまもり居り。月頃はへだつれど、かくあたりちかく其人を見るも夢の心地のみせられて、輿より飛び出でたき心地すれど、思ひ念じて打まもり見るに、春見初めし

わたりに舟得たる—法華經「藥王品、如子得母、如渡得船、如病得醫、如暗得燈」

らうたく—可愛らしく

やせたれど、あてに美しき姿なれば、山人にめあはせなば、よき一對の夫婦なるべし、此娘がおもひ入りたる心ねもいとほしければ、いかで此妹背のなからひ、おのれ結びととのへてんとぞ思ひける。さて娘が居たる所に入りて、口がろく物語し、又墨繩がつくれる蟹などとり出でて、走らせて見すれば、娘もよろこびて、おもしろき人に思ひけり。其日人間をうかゞひて娘がそばに寄りて、「おのれ君の心よく知りぬ。山人はもとより我したしければ、語らひあはせて後々は夫婦となしまゐらせん。まづ文をやり給へ」といへば、娘は思ひかけず、わたりに舟得たる心地して、はづかしさも忘れて、手をあはせて松光を拜みて涙をこぼす。松光いよ〳〵らうたく思ひて、扨いかにたばかりけん、山人がもとへ娘が文をつかはしけるに、山人も岩木ならねばにや、やがて返言をぞしたりける。此うれしきに添へていよ〳〵心地さわやぎにければ、「月每に淺草なる觀世音に詣でけれど、春より病みふしてければまゐり奉らず、今日かしこに參りなん」とて、母にかたらひて、竹輿に乘りて出立つ。松光其外女 男ひき添ひて出でゆきける。これはあらかじめ松光がはかりごと構へて、今日山人が方へも知らせつかはして、ひそかに逢はせてんとて、かく誘ひて出づるなりけり。さて淺草に行きつきけるに、此御寺は東國第一

垣のくね—くね
も垣のこと也

きて、しかぐ〵の由を物語しけるついでに、娘が病にかゝりて戀したへる由を山人に
かたりて、「かれを迎へて妻となし給ひなん」といへば、山人は顔あからめて、とかくの
答だにせず。松光母に逢ひて此事をかたらへば、母涙ぐみていひけるは、「かの蘆屋の家
は、我夫なる人と、もとあつく交りけるが、持ちつたへし田を論じあらそひて、國司の
廳に出でて訴へける時、我夫ふるき劵を失ひて、證據とすべき物なくて、彼にまけて面
目をうしなはれき。それより後、かれが家と交をたちて出であふ事をせず。夫年を經
ずして身まかり給ひたれば、ますく〵疎くなり行きぬ。かれは殊に家ゆたかになりて乏
しき事なし。我家は夫の頃よりやうやく衰へて、今はかく侘しきすまひしてあれば、い
かでかれが家と婚姻をとり結ぶべき。亡き人の思さん所もはかりがたければ、とにかく
に、蘆屋が娘を我嫁とはなしがたし」と、すげもなくいへば、松光もふたゝびいふべき
詞もなし。「我々かしこにしばしとゞまり居て堂つくらん程、日數へぬべし」といひて、
革籠など打かつぎて、ふたゝび蘆屋がもとに歸りけり。蘆屋が家には、娘の病よろしく
なりぬとて、人々よろこび、とぶらひに來る者たえず。娘も今日は寢所を出でて、庇の
障子明けさせて、庭の方を見出して居り。松光垣のくねより覗き見るに、此頃の病に面

理候はず」といふ。「その若き人と申すはいかなる人にて候か」と問へば、「荏原郡なる竹芝の山人と申して、世の人顔吉と呼ぶ者にて候」といふ。松光手を打ちて、「われ〳〵今日迄かの山人の許にとゞまり居て候ひき。かの山人と申すは、かたちよきばかりには候はず、心も柔和にて、學才も兼ねたる人にて候へば、たとひ古くより讎ある事候とも、まけじ心をいだきて、ねたみ怨むやうなる心をつかふ人に候はねば、此婚姻とゝのひ難しとも申しがたくや」といへば、「もし山人がうけひき候はば、おのれがよろこび是に過ぎず」といふ。扨さま〴〵の物語をはりて、各別れてふしどに入りて寝ねぬ。夜明けて起出でければ、あるじの船主、墨縄にいへるは、「おのれ宿願の事ありて、たのみたる御寺の御堂建立せばやと存じ立ちて候。わ君下らせ給ふこそさいはひなれ、しばしとどまり給ひて、此堂作りて給はりなんや」といふ。墨縄がいはく、「おのれ一先國に歸りて、都にのぼるべく存じて候へども、さやうに宣ふ上は、とゞまりて此御堂つくりて奉らん」といふに、船主よろこびて、「しからば下總の國に我親族の候。それがよき材木どももあまた持ちて候へば、かしこに行き給ひて、木ども選りとりて給へ」とて、俄に支度とゝのへて、墨縄をいざなひて、下總の國へぞ出行きける。松光は其日竹芝がもとへ行

さがなき口―不謹愼なる口
ほころびて―少し口を開きて

おもなき心地―恥しき心地

ひなん。この御藥世間の庸醫などが知る所にて候はず。おのれ我師とともに千辛萬苦して、かたじけなくも魯仙の御許にて」といひさして、急に口に手をあてて、墨縄が方を見て、「扨々我ながらさがなき口にて候。又も唖となるべき事をつい忘れて候」といへば、墨縄もほころびて笑ひ出しぬ。あるじ親子は心もつかず、二人をさまぐ饗應して、夜に入りければ、きよらかなる衾とり出でて、二人を臥さしめけり。墨縄はさきに入りて臥しけるに、松光は例の口きゝなりければ、臥しもせで棹丸に向ひ居て、墨縄が匠の奇なる事など、ほこらはしう物語して居たりけるが、物のついでに妹の病めるさまを問ひければ、棹丸がいへらく、「聞え出でんも我さへおもなき心地して候。まことは我妹にて候者、名は紫と申して、ことし十四になりて候。すがたかたち人におとり候はず、こころざしもやさしく候ところ、過ぎし春人々とともに向が岡の花見にまかりて候所、ふとわかき人を見そめて後、それより心地例ならぬやうになりて打臥して候なり」といふ。松光、「さらば病根はよく知れて候を、いかで妹君の志のごとく、其わかき人を聟とはなし給はざる」といへば、棹丸、「その事にて候。かの男の家と某が家とは、累世の讎ある中にて候へば、たとひ婚姻の事など申出でたりとも、かれが方にてうけひくべき道

の樹につなぎ置きたるを、船主見て、「馬に秣くはせよ、男ども」といへば、男ども秣を入れたる盥もて來て、馬のもとに置きていひけるは、「あやしき馬かな、物くはんともせず、動きだにせず。たゞ眼のみはたらかすは希有の畜生かな」といふを、松光をかしがりて、事の子細をかたれば、あるじ親子も驚きつゝ、墨繩が匠の凡ならざるを感じけり。奧の方には、醫師など入居て、物さわがしき樣なれば、墨繩、「いかに御家の内には病者などのおはしますにや」といへば、棹丸答へて、「おのれが妹にて候もの、春の頃より病にかゝりて打臥して居り。おのれは實は養子にて、船主が生の子にては候はず。妹は父母のうむ所にて、ひとつ子にて候へば、ことに大事となして養ひたてゝ候所、思ひかけぬ病にかゝりて、親たちも大方ならず心をくだき候」と語る。墨繩仙界にてもらひ得たる荔枝のはしを懷よりとり出でて、「これ少々煎じて用ひこゝろみ給へ」といへば、棹丸よろこびて奧の方へ持行きぬ。しばしありて船主出來て、「今のほど賜はりし御藥用ひて候へば、夢のさめたるやうにさわやぎて、苦しき事もわすれ候とて、母をはじめ皆人よろこびに堪へず。扨もいかなる御藥にて、かくすみやかに効をあらはし候にか」といひて、をどり立ちてよろこぶ。棹丸も同じことをいひて悦べば、松光したり顏に、「さも候

はひり一門より
玄關迄の間

光、「かへすぐ〳〵あつき御恩を蒙り候ひぬ」といひ居たるに、墨繩は、松光がゆくへおぼつかなくて、跡を追ひて來りけるが、此男の馬を引とゞめくれける事を聞きて、あつく謝してよろこぶ。此男、「わどの達はいづくの人々にか」と問へば、墨繩、「われ〳〵は飛驒の國なる匠なり」といへば、此男、「飛驒の國に猪名部の墨繩といふ人あり。おのれが父の得意なりとて、常に物語り給へり。そこたちは知り給はずや」といふに、「おのれこそ仰せらるゝ墨繩なれ」といへば、此男地に頭をつけて、「扨もおもはざる對面仕りて候」といひて悦ぶ。墨繩、「われ東國にては知る人たゞ一人あり。扨は蘆屋の船主殿にておはすや」といふ。此男、「さん候、船主はわが親にて、おのれは棹丸と申して、代々此石濱に住みて候。まづ我許へ入らせ給へ」といひつゝ誘ひて入る。是は家居もひろく、藏ども三四たてつゞけて、いかめしく住みなしたり。墨繩門を入れば、父もかくと聞きてや出でむかへて、「墨繩ぬしにこそ。めづらしくも下り給へるかな。おのが飛驒の國にありし時は、そこには七つばかりにておはしき。そこの父君のあつくおのれをいたはり物し給ひし事、今に忘れがたくうれしくて、常に申出でて御德を仰ぎて居り」など、さま〴〵あつき志をのべて、奧に誘ひて、酒などまうけてもてなす。馬をばはひりの方なる柳

湯ひきたる―浴みしたる

飛騨匠物語　巻之三

○いしばま

かくて松光は、膽心も失せぬるばかりにて、馬の走るにまかせて、しかと首をとらへていだき居りしが、道のほど何里ばかり走りたりけん、今は精神弱りて、いだきたる手をはなちければ、横ざまに倒れて落ちぬ。かゝるに向ひより大なる男の、たゞ今湯ひきたると見えて、湯帷子著たるが走り出でて、かの飛行く馬の手綱をとらへたり。馬はたけりて走らんとするを、横ざまに手綱を引きければ、からうじて馬はしづまりて立ちぬ。此男馬を引きて、ふしたる松光がもとによりて、水など飲ませていたはれば、やう〳〵息出で、心地もとのやうになりて、此男をあまたゝび拜して、よろこびをいふ。此男いへるは、「御身はいづこより來し人ぞ」と問ふに、松光、「おのれは旅人にて、荏原郡なる某が許にとゞまり居る者なり」といへば、かの男、「かしこより此所までは三里あまりの道あり。おのれ出でゝあはずば、此馬陸奥のあたりまで走り行くべし」とて笑ふ。松

馬は風の吹くやうに飛んで行けば、今は目もくれたましひも身にそはず、たゞ馬の行くにまかせて、うつぶしにしがみ附きて、やう〳〵をう〳〵と聲を立ててわめく。馬はただ中を飛んで、北を向いてぞはしり行きける。

あざみ驚く―あきれ驚く
諸葛孔明の云々―孔明魏と戰ふ時、木牛流馬を製りて兵粮を運ばしめし故事、三國志に詳し

「我師ながく物語なし給ひそ。扨は又啞とや成り給はん」といひて危がりけり。墨繩それより一間なる所に引籠りて、何事をかすらん、鋸斧の音のみ聞えしが、三日といふ日に出來て、「物一つ作り果てつ。見給へ」といひて、障子おし開けたれば、丈大きくたくましき馬の、さながら生けるがごとき樣して立居たり。人々見てあざみ驚く事かぎりなし。墨繩いひけるは、「これはもろこしにて諸葛孔明の作り給へる木馬に傚ひて、いさゝかたくみを用ひて候」とて、庭におろして打跨れば、此馬四足を動かしあゆみ行くさま、生ける物といさゝか違はず。松光おもしろき事に思ひて、「おのれかはりて乘りて見ん」といへば、墨繩下りて簀子に尻かけ居れば、松光馬にまたがり手綱をとりてあゆます。墨繩聲かけて、「汝手綱をつよく引く事なかれ。つよく引きなば走る事疾かるべし」といふ。松光しづかに手綱をとりて、門の外へあゆませ出でて、「扨々興ある事かな。まことの馬より乘心よし」などほめて、一町ばかり步ませて行きしが、つよく引きなば疾く走ると敎へられしが、いかばかり走るにかこゝろみんと思ひて、思ふさまにつよく綱を引きければ、此馬まことに矢を射るが如く、一とびに飛出しつ。松光あなやと叫びけれど、せんかたなく、馬の頸にしがみつきて、「此馬とめてたべ〳〵」と叫べど、誰かは知らん

神人—仙人

ばひ取らん—奪ひ取らん

かたし。おのれ又介抱して参らせざれば、外にあつかふ人もあらず。よりて母君の文かき給ふ間に、木鳶ひとつ作り出でて、こゝろみに飛ばせやりつるに、思ひしにたがはず、ひかの廳に飛行きて、ふたゝびこゝもとに歸り來りしは、是我匠の奇なるにはあらず、ひとへに神人の授け給ひし道具の靈なるによれり」と語れば、老母をはじめ人々も、あつと感じてふし拜みつ。墨繩、松光に向ひて、「汝が啞の病とみに癒えしこそうれしけれ」といへば、松光、拷木につながれし事を語りて、はじめ墨繩に別れしより、途中大壺を見ちがへてばひ取らんとせしより、廣岡が家にやどりし事までくはしく語り出でければ、墨繩をはじめ人々も、はじめて笑をぞ催しける。母墨繩をたのもしき者に思ひていひけるは、「我子いまだ年たらはず、しかるべき親族もなくて便りなく候へば、御身かれが兄となり給ひて、今より行末をうしろ見して給へ」といへば、墨繩がいはく、「かく見え参らせしも不思議の緣に候へば、今よりかたみに心あつく語らひ申すべし。しかしおのれは所を隔てて住ひ候へば、何ばかりの御力にも成りがたからん。但今四五日はとゞまり居りて、かたみとも見給ふべき一品つくり出でて參らせん。おのれあづまに下りたりしは、故ある事にて候へども、子細あれば口外に出しがたし」といへば、松光さし出でて、

かたみに―互に

給へるにやとて、守をはじめ廳の人々も、これをいぶかしくぞ思ひける。山人松光もはじめて安堵の思ひをなして、連れだちて宿へ歸りける。宿には老母病牀に臥し居るを、墨縄とかく介抱しあつかひて居たり。まづ恙なく家に歸り來し事をかたみによろこびて涙をながす。母いひけるは、「われ松光どのに命たすけられ、塀の外へ出でたりしに、思ひよらず一人の男來りて我を負ひて走りつるに、膽心もうせてありしに、此人いかなる心にか、わらはを此村の口まで負ひ來りすて置きて、いづちとも知らず走り去りぬ。此人のかう負來らずば、又廣岡にとらへられて憂きめをや見まし。かへすがへす有りがたき人も世におはしけり」とて泣く。山人いひけるは、「母人の訴文を鳥の持來れる事、守をはじめわれわれも不審はれず」と語れば、墨縄つとたちて、「其鳥これに候」とて、かたへより取出でたるを見れば、木もて作れる物なり。墨縄がいはく、「われ子細ありて異人より工匠の具どもをつたへぬ。此具を以て物を作れば、我心の欲するに從はざる事なしと異人のつたへて給ひたれど、いまだ然るやいなやを試みざりしに、今日母君の歸り來給へるに、わ君の廳に召されし事、かたがた心ぐるしかりしに、母君、廣岡がたくみの程、疾く廳にうつたへんと宣へど、かく病にかゝり給へば、御みづから出行き給はん事

無辜—冤罪

又いひけらく、「此頭はあらぬ物にて候とも、嫗を籠め置きたる樓の下にて、きやつを捕へて候時より、嫗がゆくへなくなり候へば、かれが殺したるにたがはず」といふ。松光がいはく、「我何のあだありて山人ぬしの母君を殺すべき。汝こそ彼人を殺さんといひしならずや」といへば、廣岡がいへらく、「かの母われをたのみて來るを、いとほしくて養ひ置きたり。わが殺すべき道理なし」とあらがひて果てず。折から一つの鳶飛來て廳の庭を舞ひわたりて、一通の文をおとしてあなたざまに飛去りぬ。守此文をとらせてひらき見るより、「廣岡めをくゝり上げよ」といへば、士卒はやく廣岡を繩もてくゝりあげつ。守のいへらく、「汝いぬる春向が岡にて山人に狼藉のふるまひなし、今又母を盗みて樓につなぎ置き、今宵彼を殺さんとて下人にいひつけたりし事、嫗がうつたへ文これにあり。かの嫗汝にいたくさいなまれて病に臥し居れば、廳に出づる事なりがたしと、くはしく此文に記しあり。木偶の頭を以て廳を欺かんとせし罪かろきにあらず」とて怒り給ふ。廣岡今はつゝむともかひあらじと、奸計のほどを殘さず逐一に申しければ、惡いやつとて、やがて囚にぞ入れられける。「山人松光は罪なければ家に歸るべし」と宣ふ。さるにても嫗が訴文を鳶の持來りしこそ不思議なれ。善人の無辜におちいらんを、天のたすけ

なにがし—拙者

しるし—明かなり

きて斬りつくれば、頭は二つにわれて、中より小き鈴一つころげ出でぬ。守とりあげ見れば、内は常の木なり。扨は人の頭ならずと始めてさとりて、墨縄がたくみの奇なる事をほめ感じける。「さるにても嫗が行方知れざれば、汝を放ちやりがたし。汝が申すごとくにては、廣岡めも召捕りて問ひあきらむべし」といふ。少年いひけるは、「扨は和殿は墨縄ぬしの弟子にておはしけるにや。そこの師なる墨縄ぬしは、我もとに宿り給ひて、昨日今日母の行方などとも〴〵尋ねておはせし」といへば、松光もよろこびて、「母君はおのれ助け奉りて、夜のうちにおとし参らせし」と語れば、「さては母の御命恙なくおはせしか」とて、天を拜してよろこぶ。かゝるに廣岡參りて廳にかしこまれば、守のいはく、「汝が家にて此者が嫗を殺しつる由汝うつたへ出でたれど、そはあらぬ事なるべし」といへば、廣岡、「なにがしいかで僞を申すべき。我目の前にて彼者嫗が首きり候て、山人がいひつけにて殺したる由申して候ひき」といふ。守、「さらば此頭を見よ」と投げやれば、廣岡とりあげて打かへし見れば、木にて作れる物なれば、又いふべき詞も出でず口ごもる。守、「汝人ごろしなりといひて訴へしは、そらごとなる事しるし。扨は汝恨をいだきて、山人を罪におとさんと計りたるならん」といへば、廣岡面の色かはりしが、

まが〳〵しき――忌々しき

「さらば疾く申せ」といふ。松光がいはく、「おのれ此少年ともとより知る人にて候はず。昨日思はず廣岡がもとに宿りて候ひしに、廣岡一人の媼をとらへて、いたく責めさいなみて、汝が兒なる山人が我心に從はざれば、汝をとりこと爲せしなりといへど、媼心をさだめて承引かず。よりて明日の夜は媼を殺すべしと、下人どもにいひつけて候を、ふと聞きて候へば、いとほしき事に存じ候て、夜にまぎれて樓にのぼり、媼をばおとし遣りて候なり」といふ。守頭をふりて、「いな〳〵、汝が殺しつる媼が頭現にこれにあり。いかであらがはすべき」といへば、松光、「その頭は、我師猪名部の墨繩と申すものの彫りつくれる物なり」といふ。守あざ笑ひて、「これいかで作れる物ならん。汝くるしさにまが〳〵しきそら言をいふなり」といへば、松光、「其頭とり出し給ひてよく御覽あれ」といふに、守かの頭入れたる器の蓋とりてつく〴〵見て、「此頭いかで木もて作れる物ならん」といふ。少年はやうやく息出でけるが、のび上りて此頭をうち見て、「我母にこそおはすなれ」といひて、泣く事かぎりなし。松光いはく、「我師は飛驒の國にてならびなき匠にて、およそ此人のつくれる物はこれのみならず、人の目を奪ひし事あまた候。こころみに打割りて御覽あれ」といふに、「さらば彼がいふまゝに試みん」とて、守刀をぬ

ふに、少年、「いかで左樣のあさましき事仕りなん。此男はいまだ見も知らぬ者にて候」といへば、守のいへらく、「汝が知らざる男の、いかなるあだありて母を殺すべき。これは汝がいひつけたるに違はじ」と責むるに、少年猶あらがへば、守いかりて郎黨に下知して、「彼等を栲木につなぎて打て」といへば、郎黨二人を引ぱりて栲木につなぎ寄せて、「疾くありのまゝにいへ。いはずばからきめ見せん」といひさま、栲杖をとりて打すゑければ、手足に血ながれて、ほと〳〵息も絶えなんとす。松光心に思ひけるは、おのれが命はをしむに足らず、此少年の思ひ寄らぬぬれ衣にて、責めさいなまるゝ事のいとほしさよ、廣岡が母を擒にせし事はわれこそ知りたれ、少年に告げばやとおもへど、物いはれねばせん方なし。士卒はひた打ちに打てば、少年ははや息絶えて、うしろざまに倒れぬ。われも今は命たえぬべし、いかなれば、覺えぬかたはとなりて憂きめ見る事にか、仙人といふ者通力おはさば、我にひとたび物いはせてたべと、精神をこらして祈念しけるに、眞のこゝろや通じけん、「あはれ」とばかり一聲聲をあげて叫びぬ。士卒、「扨こそこやつ唖のまねしつるが、くるしきに堪へで聲をあげつるなれ。猶したゝかに打ちすゑてん」といへば、松光聲をあげて、「まづ待ち給へ、物聞ゆべき事あり」といへば、守、

念なく—無念に

あきもの—あきなひ物

おのれが身にあづかれる事に候はねど、かれが母の逃参りて候を殺させつる事念なく存じ候。疾く彼者ども廳に召されて問注して給はりなん」と、まことしやかに述ぶる。此目代は常に廣岡に錢を借りてしたしき男なりければ、「ゆめ愁ひ給ふ事なかれ。おのれよく計らひてん」といへば、廣岡しばし語らひあはせて、おのがやどりへ歸りぬ。しばしありて、守の廳より士卒來りて、松光をひきて連れ行きぬ。松光は夢の心地して、ひかれて廳の中に入りけるに、おのれがかたはらに美しき少年のうづくまり居たり。國の守まづ松光に向ひて事のよしを問ひ給へども、答せざれば、「こやつ聞きつるごとく啞のまねすると見えたり」といひて、又少年に向ひて、「汝は酒つくりてあきものする山人といふ者なるか」と問へば、少年、「さん候」といらふ。「汝これなる男をかたらひて、母を殺さんとせる逆罪惡むべきやつなり。疾くありのまゝにいへ」と責むる。少年淚をながして、「いかでさやうの人ならぬふるまひ仕るべき。母は昨日思ひよらず行方なくなりて候間、所々さがし求めて候を、只今宣ふを承りて候へば、扨は我母は此者の殺したるにて候か」といふ。守、「かれが殺したるは、まのあたり人々見る所なり」といへば、少年聲をあげて泣出す。守又いはく、「汝此男をかたらひて母を殺させし事つゝまず申せ」とい

目代―代官

たゞ今斬りたりと見えたる女の頭いれてあり。廣岡おどろきて、猶ともし火をちかづけて見れば、山人が母の頭に似たれば、大に驚きける中にも思ひめぐらせば、われ明日の夜は嫗を殺さんと思ひたりしに、こやつが殺せしは幸なり。「さるにてもいかなる事にて殺したるぞ、軀はいづれに捨てたるぞ」といへど、松光いらへせざれば、又かの革籠をさがし見れば、一通の文あり。讀みて見れば、此者啞なりとしるしてあり。見るより廣岡又惡念きざして、にた〳〵と笑ひて、此文を引裂きすてゝ、よきはかりごとありと喜びて、「先こやつをとり逃すべからず。つよく繋ぎておけ」といひつけて、夜の明くるをぞ待ちたりける。ほどなく夜も明けければ、廣岡常にむつまじく行通ふ國の守の目代がもとに行きて、「おのれが家に凶事出來て候」といへば、目代、「何事ぞ」と問へば、廣岡がいふやう、「荏原郡に竹芝の山人と申すもの、年頃母に不幸して候ひけるに、一昨日母をいたくむちうちて殺すべくかまへ候へば、母逃出でておのれが許に來りて候ひしを、よべ人をやとひて、おのれが家に忍ばせ置きて、母を殺させて候なり。殺しつるやつをからめ置きて候處、かの者はじめは山人のいひつけにて來りつる由を申しつれど、くゝりあげて後はふつに物をいはず、啞の如きまねして、一言のいらへだに仕らず候。此事

光が方をふし拜みて走り行かんとするに、あやしき男のつと出來て、物をだにいはず嫗をひきかゝへて、いづくとも知れず飛び行きぬ。松光はこれを知らず、かの階子を引上げて、もとの管となして包に入れて、しづかに階子を下りんとする折から、あるじ廣岡目さめて、嫗が泣く聲のやみしはいぶかしとて、あゆみ來て階子にかゝれば、松光おり來て目を見合せぬ。「やおれ盜人こそ」とて、諸手にひつとらへて聲を立つれば、家の內の者皆起出で來て、とよみさわぐ。廣岡、「盜人はとらへ置きつ。繩もて來よ」とて、繩をとり寄せて、松光をしたゝかに縛りあげつ。嫗が聲せぬは不審なりとて、樓へあがりて見るに嫗あらず。「さてはこやつが迯しやりつるなり」とて、いよ〳〵松光を強く打ちすゑつ。「こやつを引入れたるは何者ぞ」といふに、「昨日溺器を持ち來る男のつれ來るなり」といへば、いよ〳〵怒りて、かの男をもとらへて責めむちうつ事大方ならず。さま〴〵と責め問へども、松光もとより物いはれねば、たゞさしうつむきて居るを、「こやつ斯くばかり責め問へども、一言をだに答へざるはおそろしき奴なり。こやつ旅人ならんには持來りつる革籠などあるべし。ひらき見よ」といへば、男ども松光が革籠をとり出で來りて、廣岡が前に置く。これも盜みつる物なるべしとて、打開き見れば、衣二つ三つ入れたる下に、

寢待の月―十九日の月

壺も不用になりぬ」といふ。松光飯したゝめ終りて、又かしこのあたりを伺ふに、あるじは寢所に入りて臥しぬ。ほどなく男女ばらも物どもとりしたゝめて、各部屋に入りて臥しぬ。松光寢もやらで一時ばかりをすぐしけるに、鐘の聲聞ゆるは子の時なるべし。皆人よく寢入りたるにや、家のうちしづまりて、庭のあたりに蟲の聲のみすなり。しづかに忍び出でて、廚をとほりて奥の方に行くに、男女みなよく寢ねて、いびきの聲のみす。しすましぬと階子に足をかくれば、女の聲にて、「盗人よ」といふに、松光驚きて、一ちゞみとなりて疊に伏し居れば、かの女の聲にて、「盗人にはあらず、我男にてありけり。こち寄り給へ」といひつゝ、大なるいびきをかくにぞ、さては寢言なりとさとりて又階子にかゝりて、音せざるやう心づかひして上り見れば、くらくて物のあやも見えず。松光窓の戸を明けつれば、寢待の月の光さし入りて、そこらあざやかに見ゆ。媼驚きてふるひ出せば、松光背を撫でさすりて、手にくゝりたる繩を解く。媼不審に思ひてまもり居れば、松光包より棗繩がつくれる管を出して、繼合せて例の階子となして窓よりさしおろし、媼が手をとりて階子のもとへやれば、扨はわれを救ふ人なりと心づきて、手をあはせて拜みつつ、かの階子を下れば、築垣の外へ出でぬ。媼はうれしくも又おそろしくて、ひたすら松

張りだましひ―負けじ魂

これによりて、おのれを斯く呼びするゝて、山人を我にあたへよと、樣々といひきかすれど、承引せざるこそにくけれ。此上いなといはゞ、たち所に命をたつべし。いかに返答せよ」と聲をあげていへば、嫗泣きしづみたる顏をあげて、「さて〳〵無慙なる痴の者かな。我子は農人の家に生れたれど、素姓をいはゞ汝等が類にはあらず。しかるをあながちに横ざまなるめを見せんとするや。母が命をとらばとれ、我子は思ふまゝにはさせじ」といへば、廣岡大にいかりて、「よし〳〵、さらば憂きめ見せてん。こやつもとの如く樓に打籠めおけ」といへば、下人等手をとりて、嫗をつれて階子をのぼり、腕を柱にくゝり置きて、ひとしく樓を下りぬ。樓には嫗が聲にて、泣きのゝしりて止まず。廣岡下男を呼びていひけるは、「彼くるしみに堪へで、明日にもならば心折れて、山人をわれに得させんとやいひもせん。若いよ〳〵今日の如く張りだましひに承引せずば、明日の夜は前なる川に沈めてん」といふ。松光打聞くより、さても不當のやつかな、いかにもして此嫗が命助けばやと思ひけれど、せんすべなければもとの所に歸り居り。道よりともなひし男膳を持來て、松光が前にするゝて、かたはらの男にさゝやきいひけるは、「かの嫗をすかし慰めんとて、われに大壺をさへ用意せよといひつけられつれど、今宵のありさまにては大

せぬうち、わたくしに他人の目にふれ候事は、貴殿の執心に感ずればなり。ゆめ見きとな宣ひそ」と、手首をうごかしつゝいふ。松光案に相違したれど、此男が殊さらに大事とおもふ様なれば、おしいたゞきて、包に引包みて返しわたせば、男あまたゝびおしいたゞきて、もとの如く背におひて、面をしかめつゝ、「さて〳〵思はざる棒の勝負に、腕も腰もいたみて堪へがたく候」といひつゝ、足もしどろに歩みて行く。松光ふところより、墨縄がわたしたる文とり出でてひらき見すれば、此男うち讀みて、「なに〳〵、此者おしの病にて、療治のため東國へ罷下り候。しかるべき所にては一宿仕るべく間、御とりあつかひ給はるべく」と讀みもはてで、此男いへるは、「袖ふりあはすも他生の縁にて候。我主人の許にともなひて宿し參らせん。いざ〳〵」といひて引連れ行く。さて行き〳〵て、棟門大なる家にいたりぬ。これなん廣岡の長者がすみかなりける。松光を小部屋に入れおきて、かの男は奥の方へ行きぬ。しばしありて、奥の方しきりに物さわがしければ、五十あまりなる嫗をとらへて、あるじ廣岡の長者怒りのゝしりて居り。かたへに隱れて聞けば、長者が云く、「おのれを爰許へおびきよせしは、さきにも語りたる如く、われ山人が容色にまよひ、たび〳〵人をもて其由いひおくりつれど、ふつに答だにせず。

まめ〳〵しく—忠實らしく

はやりかにさへづりけるは—早口に物言ひけるは

をとつて犬と人とをいはず打ちすゑて、手柄をなす事たび〳〵なれば、東國においては、吾にまさるべき棒つかひはあらじと自慢してありしに、貴殿の棒の手なか〳〵我に劣らず。扨々天晴なる御はたらきにて候。今は御名を名のり給へ、其上にてはそれがし名をあかし申しつべし」と、まめ〳〵しく聲をはなちていふ。松光心にをかしく思へど、口はたらかねばまもり居たるに、かの男、「名のり給はぬは子細こそ候はん。御心にかけて欲しとおぼさるゝ一品、大切の物ながら見せ奉らん」としづ〳〵と立ちて、かの包を手に取上げて、松光が前にすゑて、「いざ〳〵ひらきて見給へ」といふに、松光うれしく、三たびばかり打捧げ〳〵て、さてかの包のむすびめ解きて開き見るに、こはいかに、老人病者などのふしどにたくはふる、溺器と名づけし物にぞありける。松光はあきれて、大口あきてあふぎ居たり。かの男いよ〳〵はやりかにさへづりけるは、「これは都のやんごとなき人々は大壺とめされて、御厠人などの取りあつかふ物にて候。東國にては見る事まれなる品なるを、おのれが主のもとに客人の入來て候へば、此品用ふべき事ありと、主人申しつけて候へば、所々借もとめて持參る所に、貴殿此品に目をつけ給ふは、こゝろある御人と見受けたれば、大切の物ながらひそかに見せ奉るなり。いまだ主人に手わたし

み居り。松光包の中しきりにゆかしくて、打守り居たるに、かの男酒に醉ひぬるにや、頭うなだれて眠るさまなれば、しづかに側に寄りて、やをら彼包に手をかけて、我方へ引寄せんとするに、此男疾く目をさまして、「此かたるめ、又も此包を盗まんとするにや。此つゝみの内は、天の下にならぶ物なき器にて、天人仙人にあらざれば用ふる事なき重寶なり。汝此包に心をかくるは、一定盗人なるべし。たやすく汝等にぬすみ取らるべきやは」とえせ笑ひつゝ、又かの包を背におひて、思ふさまに罵りしかりつゝ門を出でてぞいにける。松光かれが仙人の持つべき寶なりといひたるを聞いて、いよ〳〵我尋ぬる瓢なるべしと思ひければ、しりにつきてひそかに追行く。かの男は心もつかず。小歌うたひつゝ行くを、後よりむずと首筋をとらへたれば、かの男手をふりあげて、うしろざまになぎければ、松光手をはなつ。かの男松光に飛びかゝらんとせしが、よく〳〵大事の物なりけん、かの包を背よりおろし、岡なる所にさし置きて、腰なる棒をとつて打つてかゝる。松光も同じく棒を以てしばし戰ひしが、互にたゝきつたゝかれつして、相共にひたよわりによわりける時、かの男聲をあげて、「しばし待せ給へ、申すべき事あり」といへば、松光も棒をとゞめて居たるに、かの男大きに息をつきて、「われ幼き時より、棒

ぬれば、「今はせん方なし。先立歸りて、夜をあかして後さがしもとむべし。いづれにもあれ、御ゆくへ知れざる事はさふらはじ」とさまぐと慰めつゝ、又もとの宿りへとぞ引返しける。

申の時―今の午後四時

〇ひろをか

松光は墨繩に別れて、一人革籠を負ひて、足にまかせて十里ばかり歩きけるが、申の時すぐる頃、酒賣る家のまへに到りぬ。咽もかわきぬれば、入りて床几に尻かけて居けるに、かたへに男一人つゝみ背におひて、酒飮みてゐたり。松光此男が包のさまを見るに、かたちまろめにて、かのうしなへる瓢のさまに似たれば、いぶかしくて、いかで見んと思へど、物いふ事ならざれば、せんかたなく彼男のうしろにまはりて、つゝみの上よりさぐり見れば、此男ふりかへりて、「こや、なでふ事をするにか。人の持ちたるつゝみに目をかくるは」といひてにらむ。松光前に來りて腰打かゞめて、「其包ひらきて見せ給へ」と、しかたにて手をうごかし見すれど、かの男心得ず。「こやつ物いはぬは啞なるべし。何事を思ふにか、聞きわきがたし」といひつゝ、かの包をおろし、これにひぢ打掛けて酒飮

松―松明

じて見て候へば、折節東風のふき出でて候へば、此瓢西になびきて音をたて候。其聲えもいはずおもしろく、心のおのづから澄みわたりて候ひき。しばしして北風ふけば、又南になびきて同じくおもしろき音をいだして候。かゝる物はもと我家になき物にて候ひつるを、いかなる人の殘し置きたるにかと存じ候へば、先とり入れて、ぬしの來らんまではと、斯う酒瓶の上にそのまゝに吊り置きて候」とかたる。墨繩がいはく、「これは人の忘れてのこし置いたる物には候はじ。わ君に天よりあたへ給へる物にこそ候らめ。大事となして疵つけで、寶となし給へ。後々御身なりのぼり、世にぬけ出で給ふべき吉瑞なるべく存じ候」といへば、少年うち笑みて、「さらばよき祥にこそ候へ」と、打語らひ居るほど、隣の家あるじ走り入り來て、「これの母君は、晝の頃大きなる男の背におひて、北をさして走り行きたるを、隣の村なる者の草かり居て、たしかに見たりと、今のほど來りて語りて候」といふ。「さてはそやつ盜人なるべし。追ひかけて捕へん」とて、心狂ふばかりにせき立ちてさわぐ。時に日も暮れぬれば、松ともし連ねて、墨繩もともども少年にひきそひて、家を出でて荻薄の中を分けて、五里あまり行きたれども、影だに見つけたる事なし。少年聲をあげて泣くことかぎりなし。携へ來たる松も燃えつくし

あからさまに——假初に

いづくへ行かせ給ひしにか見えさせ給はず。ちかきあたりは尋ね候ひつれど、ふつに御行方知りたる人もなし。君はもし御行先を知らせ給ふにや」といふに、少年大におどろきて、「母人あからさまに隣の家に到り給ふにだに、われに告げ給はでは出行き給はず。ましておのれ外に出でたるに、いかで家を出で給ふべき。さるにても心ならざる事よ」とて、頭うちかたむけて立てれば、墨繩、「さて〳〵にが〳〵しき事を承り候ものかな。見參らするに、御家に人少く見えて候。おのれ物のやくにたつべき身には候はねど、御力となりて、とも〴〵母君の御ゆくへ尋ね奉るべし」といへば、少年大によろこびて、「うれしくも宣ふ物かな」とて、墨繩に足あらはせて、簀子の上にいざなふ。墨繩打見まはせば、此家田つくる片手に、酒をもつくりて賣りひさぐと見えて、厨のあなたに大なる桶などあまた並びてあり。又我居たるかたはらに棧敷かまへて、酒入るゝ瓶などあまた並べてあり。よく見れば、おのれが失へる瓢かの壺の上に吊りてあり。扨はこゝにこそと思ひけるが、先知らず顔つくりて、少年にむかひて、「これなる瓢は古くより傳へて持たせ給ふにや」と問へば、少年がいはく、「其事にて候。これは今朝のほど早う起出でて見給へば、此酒壺の上の庇に、鎖につなぎたる瓢のかゝりて候。いかなる事にかと存

四海を池とし云云—後漢書「王者以二四海一爲レ家、以二兆民一爲レ子」
顏の匂—顏のつやゝかなること
うしろ手—後姿

人釣して居たるあり。尾花撫子などの岸にたてるも見すてがたくて、立止りて、「四海を池とし萬民を魚とす」と、何となく口ずさみければ、このわかき人墨繩が方をふりかへり見る。墨繩此人を見れば、十五六の美少年にて、顏の匂たぐひなく、女にて見まほしきすがたなり。なにとやらん見たる人のやうなれば、よく思ひめぐらすに、かの仙界にて谷よりおとし入れられし人にたがはず。少人いひけるは、「御身は旅人にや、いづくをさして行かせ給ふ」といふに、墨繩さし寄りて、「おのれは飛驒の國なる匠にて候。この武藏の國へははじめて罷りたるが、いづくに宿とるべきしるべもなく候。いかで一夜を明させたびなんや」といへば、少人、「やすき事にこそ。我許へともなひ參らせん」とて、竿をあげて、いざとて先に立ちてあゆむうしろ手、かの山中にて見たる仙にいさゝか違ふ事なければ、かならず此人こそ彼仙人の生れ出でたるならめと思ひて、つきそひて行く。程なく茅ふきたる門にいたれば、少人柴の戸おしひらきて入りぬ。こゝは竹芝坂といへる所にて、少年は彼顏よしと聞えたる山人なり。墨繩うち見まはせば、荒れたる家居のさまながら、ゆゑよし見えて住みなしたり。しかるに奧の方より女の童はしり出でて、あわてたる聲にて、「さても御歸りを今や待ちつけて候ひき。母君の晝のほどより、

も過ぎぬ。扨日暮れぬれば、やどり求めて夜をあかし居たるに、夢の中に、おびたゞしく神なりひゞきて、持來りたる瓢おのれと窓を出でて、飛行くと見たるに、驚きて枕をあげて、かの瓢を見るにある事なし。手まどひして松光をおこして、そこらともしびを照して見れど、あとかたもなし。此瓢うしなひては、吾身にいかなる祟あらんもはかりがたしと、家あるじをも呼起して、家のめぐりなど探しもとむれど、それと思しき物も見えず。これ盗人のもち行くべき物にあらず、まさしく夢中に此瓢おのれと飛出でたると見しは、もしくは僊人の告け給ひつるにて、此瓢をわたし參らする人の此あたりに住み給ふにやあらんとて、夜の明くるを待ちて、此やどりを立出でぬ。こゝは聞及びし武藏野とかや、はてもなき大野にて、蘆荻のみたかく生ひて行くさきも見えず。「かの夢に見つる瓢の東をさして飛ぶと見つれば、武藏一國の中を尋ねなんには、大方有所知れざる事あらじ。汝は左の道を行きて尋ぬべし、吾は右の道をたどりて行くべし。石濱といへる所に、蘆屋の某とて知る人あり、そこにて相會ふべし」といへば、松光例のうなづきて立別れ行きぬ。墨繩はひとりかの蘆荻をおしわけつゝ、道ある方をたどり行きけるに、流ある所に出でぬ。此流にそひて行き見るに、柴橋うちわたしたる所に、わかき

人わろし－外聞悪し

かの男に飛びかゝるを、引捉へて大地になげつけ、幕串を引抜きてつゞけうちに打ちければ、强氣の廣岡もなえ〳〵となりて倒れぬ。かの男仁王立に立居て、山人にむかひて、「母御前を負ひて疾く爰を逃げ給へ」といふに、山人は心せかれて、とく母を背に負ひて、岡を下りて逃行きける。廣岡が下部ども六七人、かの男をやらじと取卷くを、幕串をとつて縱横に打つてまはれば、寄りつく者もさらになく、皆ちり〴〵にぞ逃げうせける。かの男廣岡が伏したるそばに寄りて、「かゝるやつには恥見せんず」といひさま、帶とき衣ひきはぎて、衣をば流れに打投げて、うち笑みつゝいづくとも知らず歸り行きける。廣岡は赤裸にて臥居たるを、下部等立返りさま〴〵介抱しければ、やうやくに息は出でたれども、「赤はだかなれば、此まゝにて歸り給はんは人わろし」とて、下部が衣をぬぎて打著せて打著せけれど、猶寒しといへば、せん方なくて、ありあひたる毛氈をとりて頭より打著せて、帶にてくる〳〵とひき結べば、廣岡よろ〳〵と立上りて、赤裸なる下部が肩にかゝりてあゆみ行くさま、さながら繪にかきたる達摩大師の醉ひしれたる如くなれば、これを見る者、手打叩きて笑ひけり。これよりいよ〳〵ねたき事に思ひて、此報せんとぞ思ひたちける。さて又墨繩は、松光とともに東の方へと下りけるに、相模國を

つやつや―一向

さゝえ―竹にて製りたる酒を入るゝ器

度々文などをおくりけれど、つやつや返りごとだにせざりければ、いかにもして我物にせんとおもひて、よきついでをぞ待居たりける。春の頃向が岡といへる所の花咲きぬとて、人々遠近をいはずこゝにつどひて、終日あそびくらしける中に、山人も母をいざなひて、高き岡邊に氈うち敷きてながめ居たりける折柄、廣岡の長者も此わたりに幕うちまはして、酒飲みたのしみ居けるが、山人が母をつれて爰に來れるよしを聞きて、醉に乘じて走り來て、すなはち氈の上にのぼり、山人が手をとらへて、「われ度々消息してこころざしを告げつるを、情なき少人かな」といひて、ひたすら戲れかゝりければ、母は興さめて、山人に目くばせして、疾く爰を立ち去らんとすれば、廣岡立上りて母をつきのけ、山人を脇にはさみておのが幕の中へひき連れ行かんとす。母はおきあがりて、「こは狼藉なり」といひつゝしがみつくを、足にて踏みとばす。此さわぎに、破子さゝえなどは微塵になりて飛散りぬ。母は正氣をうしなひて、うつぶしに倒れて起もあがらず、廣岡山人をとらへて引行かんとす、あやふき事いへばさらなり。かゝるに、花の樹蔭に頰かぶりせる男の立居たるが、はしり出でて廣岡がきゝ腕とりて、もんどりうたせて三間ばかり投げつけつ。山人はうれしくて、母がもとによりて介抱すれば、廣岡起上りて、

やごとなきすぢ—高貴なる家柄

飛驒匠物語　巻之二

○たけしば

こゝに武藏國荏原郡に、竹芝の山人といふ者あり、うまれつきみやびかに、光るばかり美しかりければ、かれが姿をほむる人の、天下のかほよしとほめけるが、ならひとなりて山人とよぶ者なく、おしなべて顏吉とぞ呼びたりける、年は十五歳計にてぞありける。いにしへよしある人の此あづまに下りて、こゝに家居しめて住み給ひける其人の末なりければ、山里ながら、調度なども昔のなごりとゞめて、みやびたる物どもたくはへたりける。父の頃よりやゝ貧しくなりけれど、さるやごとなきすぢなりければ、幼き時より書などをも讀ませ教へたてけるに、さとく賢くて、讀得がたき卷々をもこともなくさとり明らめければ、師なる人もことさらに褒め物しける。すべてこの山人を見たる者は、男女をいはず、想をかけざるはなかりけり。其頃同國に廣岡の長者といふ者あり、心ひがみたる佞人にてありけるが、此山人を想ひそめて、いかで兄弟のかたらひせんと、

のち—野

革籠—外面を革にて張りたる籠

かんな文字—假名文字

かれて、泣く〳〵道をぞいそぎける。さて墨繩はとかく松光をいたはりて行くほど、覺えある松の並樹ある所にいたりぬ。さらば我住める里にちかしとて、道をいそぎけるに、老いたるものども出來て、手をうちて、「墨繩ぬし歸り來ぬ」とて、あきれたる樣して、「そこはいかにして此十五年ばかりいづくに行きて住み給ひし、などて古里には文をだにおこし給はざりし。まづ村長のもとに告げばや」などいひてさわぐ。墨繩いはく、「なくなりし父母の菩提のために、國々の寺々まるりめぐりて、さて斯く年月を過しつ」といらへて、まづ我家に到りて見るに、いたく荒れたれど、家は昔のまゝに立ちてあり。庭には草生ひしげりて、秋ののらなり。とかく掃きつくろひて入居たりける。かくて日を過すべきならず、此瓢をもち行きて、かの仙人のゆくへを尋ねてわたさばやと思ひて、旅の具などとりしたゝめて、この度は一村の者にもよくいとまごひして、松光に革籠荷はせて、東の方へぞ出立ちける。此松光をさなきより手ならひを得せず、一字をだにわきまへざりければ、唖となりてより、我思ふ事を人に知らする事かなはず、いかでかんな文字をだに知りたらばといひて、頭をかきつゝ悔みけるとぞ。

き事なし、汝ほしくば喰へ」といふに、松光破子の蓋とりて、さらさらと喰ひつくしつと思ふ程、俄に舌おのづからちゞまり行くやうに覺ゆれば、あゝと聲を立てんとすれど、物いはれず、舌はやうやうにちゞみ行きて、咽の中へ入るやうに覺ゆれば、眼をくるめかせて手足をもだえて騷ぐ。墨繩も驚きて、いかにせしと背をなでさすれど、たゞもがき足ずりのみして、指を口もとにあてて數ふるのみなり。「さては物のいはれぬにや」といへば、たゞうなづくのみなり。「耳は聞ゆるにや」といへば、又うなづく。墨繩もあわてたりしが、「つくづく思ふに、魯仙の宣ひしは、かれは口さがなきやつなり、すべき法ありと宣ひし。扨は仙界のさまを彼に語らせじとて、かれを唖とし給へるにや」といへば、松光うらめしげに山の方を見やりて、玉のやうなる涙をおとす。墨繩なぐさめていへるは、「汝心をあらため仙道に歸依し、みだりに人の短をいはざらば、仙人あはれみ給ひて、ふたゝび物いはれんやうに計らひ給ふべし。しばし忍びてあるべし」と、樣々とすかしこしらへて引立つれば、松光かの破子を取つて山の方へうちなげて、目を大きくなしてうちにらめど、ふつに聲の出でねば、口惜しげに打見かへりつゝ、墨繩に手をひ

御かへりみ—御恩顧

らびに童子等兩三人、かたはらに立ちてあり。おどろき起立ちて、昨日もらひし物など一つにつゝみて、墨繩魯仙を拜して、「有りがたき御かへりみを蒙り候事、のべ聞ゆべき方も候はず」といふ。魯仙かさねていへるは、「汝等わづかに一晝夜を過しぬれど、人間世にては十五年ばかりを過しぬ。疾くいそげ」とて、童子に命じて案内させて、魯仙中門まで送りて、「再び七十年を過しなば、汝此處に來りて、我とともに道を修すべし」といひて、わかれをなしぬ。墨繩あまたゝびふし拜みつゝ、童子を先にたてて出でて行きけるに、昨日來れる時はさばかり嶮岨なる山を越えたりしに、此たびはいさゝか左樣のけはしき所もなく、しばしの程に坂ある所にいたりぬ。童子がいはく、「此坂を下りなば汝が家ちかきにあり。われは是より歸りいなんず」とて、もとの道へ行くぞと見えけるが、早くかたちを見失ひぬ。松光見おくりて、「仙人は五穀を斷ちて喰はずと聞きしが、誠にてありけり。米の價の高くのぼりたる頃は、仙人こそうらやましけれ」とつぶやく。さて坂を下りはてて、しばしかたへの樹の根に尻かけて休む程、松光いひけるは、「昨日大きなる椎茸を喰ひてより、物ほしき心地はせざれど、今日は少々口のあたりさびしき心地し候。昨日の物たべ候はん」といひさま、仙界にてもらひ得し魚と飯と入れたる破

ふつに—絶えて

口さがなき—口惡き

へ」といへば、老仙のいへらく、「汝に何をかつゝむべき。われはから國にひととなりて、姓は公輸にて、名は班といふものなり。魯國にて生れたれば、人われを呼んで魯班と稱したりき。おのれ人間にある時、工匠のわざを好みて、大なる物は殿閣樓臺橋梁、さて小なる物は船車器皿の類をつくるに、人其巧をほめて神と稱せざる者なかりき。後に塵世をいとひて高唐雲夢の間に隱れ、終に蓬萊に到つて居をしめたり。汝が道にかしこく且志の直なるに感じて、かく呼びむかへて、此具どもを讓りつかはすなり。汝塵世に立歸りても、仙界の度を以て、ふつに人にむかひて語るべからず。又かの男女の仙にめぐりあふとも、仙人の種根なりといふ事必ず語り告ぐべからず」といふ。墨繩こゝろに思ひけるは、我は祕して語るまじけれども、松光もし人間にまうす事もやあらんと、心中に思ひめぐらしけるを、魯仙はやくさとりて、「汝が召しつれたる男口さがなきやつなれば、人にふれ知らさんは一定せり。かれは我はからふべきむねあり、汝心をつかふ事なかれ。夜も更けぬ、つかれたるべければ、疾く寢ねよ」といひて、奧ざまへ入りぬ。墨繩松光を呼びてかたはらに臥さしめ、おのれも困じけるまゝしばし眠りけるに、程もなく魯仙の聲にて、「疾く起出でて用意せよ」といふ聲す。目をひらきて見るに、魯仙な

りて、ほしいまゝに人間にいたる事をいましめたれば、たやすく行きいたる事かたし。おこと慥に彼にわたして給へ」といふ。墨繩かの瓢を包につゝみ、みづから負ひて仙人にわかれ、松光を連れて山を下りて、もとの老仙の家にぞ歸りける。あるじの翁出居に待ちつけ居りて、「汝山にいたりて、瓢を受けとりて歸り來るならん」といふに、隱すべきならねば、ありのまゝに事のさまを述べければ、あるじうなづきて、「さぞあらん。汝塵界に歸らば、たがひなく彼の人にわたし遣すべし。もしあやまりて天機にたがはゞ、大なる禍あるべし」といへば、墨繩、「いかでそむき奉らん。さて問ひ奉りたく存じ候は、今のほど上座におはせし貴き御人はいかなる御方にか」と問へば、あるじが云く、「かの貴人は玄々皇帝太上老君にておはします。汝かたじけなくも幸に拜し奉る事を得たり」と答へぬ。さて童子に仰せて、鉋鑚鑿鋸斧鎚、すべて工匠の具どもとりそろへて、墨繩が前にならべさせて、「此度の勞に汝に是をあたふるなり。此具をもつて物を作らんには、汝が手業今までに百倍して、其妙をつくすべし」といへば、墨繩よろこびに堪へず、遙にしさりてあまたゝび額づきて拜む。さて申しけるは、「かばかりありがたき神仙に逢ひ奉りぬる事、生涯のよろこび是に過ぎたること候はず。いかで御名を聞かせ給

うちしほたれて―歎きにうち沈みて
かけ路―かけ路
さり所なし―逃れ様なし

界にては大事としたまふにや」といひてあざわらひぬ。さて一里あまり行きけるに、かぎりもなき高き山にいたりぬ。こゝにて負ひたる人をおろさせけるに、若き人はうちしほたれて物をだにいはず。いかにするにかと墨縄松光も目をはなたず守り居れば、仙卒等、彼のわかき人をかけ路に率て行きて、すはと言ひさま谷の下へつきおとしぬ。いくちひろとも知れざる深谷なれば、微塵にくだけてや死しぬらんと、墨縄はいとほしとぞいひ居たりける。松光手に持ちたる瓢をさゝげて、「これはいかにし給ふぞ」といへば、仙人たち驚きて、「此瓢は彼に持たせつかはすべきを、不便なる事をしつるかな」と、おの〳〵いたく怖ぢたるさまなり。墨縄がいはく、「今のほど投げおとし給はゞよろしかるべし」といへば、人々あざ笑ひて、「かれ谷をはなるゝより早く人間に胎をやどしぬ。今はかれ凡人と成り生をかへぬれば、眞仙の道術うせぬ。此瓢投げやりたりとも、彼がもとに到る事かたし。これはわれ〳〵命令にそむきたる罪さり所なし」と、各額をあつめて悔み居れば、墨縄がいはく、「われ〳〵さいはひ凡界に住み候へば、かの人の行方を尋ねて、此瓢をわたし申さんはいかに」といへば、おの〳〵手をうちて、「是はひとへに汝にまかせてん。われ〳〵神通を以て、彼がもとに到らんはやすけれど、仙界に掟あ

其時松光、「其御瓢はおのれ持ちて參るべし」とて、手にとりて共に走る。此瓢といふは甕のかたちして、上に鎖をつなぎ置きたり。石にやあらん、其質は知りがたけれど、いとかろき物なり。松光一人の仙人に向ひて、「此瓢は何のために用ふる物にて候か」と問へば、かの仙人答へて云ひけるは、「仙界にて金丹といふ藥を錬る事あり。これは汝等がごとき凡俗にても、此藥を飲みぬればたゞちに仙となる事なり。此藥を錬るほど凡そ三百年ばかりを經ざれば、丹となる事あたはず。かの男女の仙人、此金丹を錬り作るべき役を蒙りてありながら、ひそかに戒を犯して忍び會ひけるにより、此穢にて金丹ほとばしりて、聊も鼎にのこる事なし。丹藥つゝがなく成就せば、この瓢にもりて蓄ふべきを、かの男女法を犯しぬれば、かく仙界を逐ひやるなり」とかたる。松光聞きて、「扨は大切の藥を入るゝ瓢にてこそ候へ。何とてかの男女に此瓢をあづけ給ふにか」と問へば、仙人、「扨々うるさく責めて問ふ男かな。此瓢はかれらが人間に胎をやどして、さて後ふたゝび此仙界へ歸り來らん時、つゝがなく此瓢を持來らざれば仙となる事あたはず。もし此瓢にいさゝかの疵だにつきても、もとの位の仙人とはなりがたし」といふ。松光、「我故鄕にては、かゝる瓢には炭炭團などをこそ儲へ候へ。かばかりの物をだに仙

南瞻部州―佛語、須彌山の南にある國なりとて、即ち此地球を指していふ語

魯仙―支那の魯國に生れたれば斯くいふ也

ひとつ〳〵與ふるなり。凡緣つきなん時ふたゝび持歸るべし。生れ出でん所は、南瞻部州大日本國の中にて、女は貴族の家に生るべし。男は東國の賤しき民にてあらん。疾く逐ひやれ」と宣へば、庭になみ居たる仙卒立上りて、二人の男女の手をとりて、左右にわかちて引き立て行く。女をば西の嶺の方に引行くさまなり。男をば墨繩が覗き居たる方へ引きつれて出づれば、墨繩、松光もおそろしければ、かたへの樹にそひて隱れ居ぬ。仙卒とく是を見つけて、一人走り來て、「汝等いかなることにて、膽ふとく此所には入り來つるぞ」といふ。墨繩地にひれふして、「われ〳〵はかしこに朱衣を著給へる老仙の家に、今ほどまゐり居る者なり。ゆるさせ給へ」といひつゝ、手を額にあてて拜めば、仙卒うちわらひて、「汝等此所に來れる事、我疾く魯仙の物語にて聞きたり。汝等は制外の凡俗なれば、いづかたに入り來るとも咎むる事なし」といふ。此言を聞きて墨繩松光も大に心おちつきて、かの仙人達のしりに立ちて、行きて見ばやと思ふ心出來ぬ。仙卒等は、かの美男子の左右の手をとりて、ひたすらに引き行くさま、あまりにいとほしかりければ、墨繩すゝみ出でて、「われかの若き御方を負ひ奉りて參らばや」といへば、仙卒等、「汝慈悲の心あり殊勝なり。さらば彼に負はせよ」とて、若き人を墨繩におはせつ。

塵縁―俗界の縁

業―因を縁によりて果となさしむる善悪の作行

出でて、道ある方を行くに、樹々は玉をつらねたる如く、砂はこと〴〵く金銀の色なり。踏みてあゆむもかたじけなき心地す。こなたに高き築土ありて、門あきたる所あり。やをら入りて見れば、男女の泣く聲聞ゆ。いぶかしければ、垣のすき間より見れば、貴人と思しき人の威ありてたけ〴〵しきが、簾の内に立ち給ひ、左右に官人とおぼしき人々列を正して坐し給へり。階下に男女二人をすゑ置きて、いたく罵りておはす。耳をつけて聞けば、貴人のいへらく、「汝等ひそかに夫婦となりて、仙都の掟にそむきたり。しかしながら塵縁のつきざる所いかんともすべきにあらず。今より汝等を欲界にくだして夫婦となさしめん。業つきたらんにはふたゝび此所へむかへてん」と宣へば、男女の仙人さしうつむきて答だにせず、泣きしづみ居るさまなり。墨繩ます〳〵不思議に思ひて此男女を見れば、美しくたをやかにて、あいぎやうこぼるゝ計なれば、誠に美人とはかかる人をこそいふべけれと、うち思ひ居るに、貴人頤をうごかして、かたはらの人に目くばせすれば、かたはらの人立ちて、二つの瓢をとり出でて貴人の前に置きつ。此のかたはらの人を見れば、さきに我をむかへたるあるじの翁なり。さては召ありとて出行き給ひしは、こゝに來給へるなりと思ひよりぬ。貴人又いはく、「此ふたつの瓢は汝等に

松光不興げなるおもゝちして、「仙人は物惜みするものにや、爰に來りて二時あまりになりぬれど、ひとにぎりの飯をだにあたへず。此家の作りざまを見れば、財に富める家なるべきを、わづか一椀の飯をだに惜めるは、心なしの乞食にこそあれ。吾師疾く歸り給へ」といへば、墨繩制して、「みだりに物ないひそ。まづ是を喰へ」とて、茘枝を出して與ふれば、松光手にとりて、「扨も大きなる椎茸にて候。生にて喰はゞ腹をやそこなひなん」といひつゝ、物ほしければ、むさ〳〵と喰ひをはりぬ。此茘枝咽を過ぎぬれば、今迄物のほしかりし心うせて、腹の中七八椀の飯を喰ひたらん心地となりぬ。かゝるに仙童膳をさゝげ來りて、松光が前にするて、「いざ疾くかき候へ」といふ。松光墨繩に向ひて、「此童かき候へと申すは、何事にて候やらん」と問へば、墨繩、「汝に物くへといふ事ぞ」といふ。松光眉をちゞめ頭うちふりて、「いかで物の喰はるべき、腹は鼓のやうになりてあり」といへば、仙童の云く、「此男凡俗なれば、人間の食をあたへよと主の申されて候へば、ことさらに斯くまうけ出でたるなり」といふ。松光、「さらば賜はりて、後にこそ食べ候はめ」とて、わりご取出でてかの魚と飯をうちあけつれば、仙童は膳をもちてあなたへ入りぬ。墨繩此ついでに、このあたりの景色見んとて、松光を連れて門を

玄々皇帝—仙界の皇帝太上老君、仙道にては老子を祖として太上老君と尊ぶ

のどかに—ゆつたりと

し。これは玄々皇帝命ありて、某に仰せて此度蓬萊宮の別殿をまうけ作らせ給ふなり。よく目をとゞめて人々の所作を見るべし」と教ふ。墨繩うち守り見るに、すべて人間にする所とは異にて、人力にて作らんには日頃を經べき物をも、とみに作り出せるさま、凡夫の及ぶべきにあらず。墨繩うち見るあひだに、いよ〳〵道の奥儀をぞきはめける。すべて此あまたの仙人たち、あるじの翁の敎のまゝにおこなひて、萬そむく事なく、又これを敬ふ事も甚しければ、此あるじなみ〳〵の仙人にはおはせじと思ひよりぬ。扨つれ立ちて、そこを出でてもとの小門を入りけるに、童子あわたゞしく走來て、あるじに向ひて、「火急の召あり、疾く參り給へ」といへば、あるじ巾服をあらためて出でて行かんとして、墨繩に向ひて、「思ふに汝飢ゑたるべし。仙界人間と同じからねば、食膳を設くる事なし」とて、童子に命じて、庭なる茘枝をとりて墨繩にあたへ、「我歸り來る迄こゝに在りて待つべし」といひて、のどかに歩みてぞ出行きける。墨繩此茘枝を喰ひ見るに、甘美なること類なし。松光にもこれを得させてんと思ひて、中門の方へあゆみて出づるに、松光は待ち居たるほど倦みつかれて、簀子の方によりて、肱まくらして眠り居たり。墨繩背を打ちて呼醒して、「此所人間と同じからず、無禮をすべからず」といへば、

東海の蓬萊山―列子「渤海之東有五山焉、一曰岱輿、二曰員嶠、三曰方壺、四曰瀛洲、五曰蓬萊」

んばせは二十ばかりの人のごとし。黒き冠に朱の衣を著たり。そのさま凡人とは見えざれば、墨繩そゞろに頭をさげて拜す。あるじ墨繩がそば近く坐して、「汝おそるゝ事なかれ、此所は東海の蓬萊山なり。よのつねの人は來りいたる事あたはざれど、汝仙緣あるによりて今日こゝに迎へつ」といふ。墨繩いよ〳〵おぢかしこまりて居れば、童子等酒菓物などを手ごとに携へ出でて、墨繩が前にすゑ置く。あるじ壺を指さしていへるは、「これは人間にいはゆる不死不老の仙藥なり、汝一杯を飲むべし」といふに、墨繩おそろしくも嬉しくて、盃をとれば、童子壺を傾けて注ぐ。口に寄すれば其香氣たへにして、人間の酒に異なり。飲みをはりぬれば、心神自然とさわやかになり、體かろくなりて、さながら仙となれる心地せり。あるじいへるは、「汝眞仙とならんには、今七十年すぐるを待つべし。但汝が匠の道にかしこきにめでてかく呼迎へたり。今夜を過しなば汝を歸すべし。まづこなたに來れ」といひて、墨繩を誘ひて庭におりて、小さき門をあけて一町ばかり行けば、かしこに一つの門ありて、斧の音鋸の聲かしましく聞ゆ。みちびくまゝ入りて見れば、仙人あまた集りて材木をあつかひて居り。墨繩、「是は何の料に候か」と問へば、あるじいへらく、「仙宮ははじめ作れるまゝに永世不朽にて、作りかふる事はな

一定―さだめし

出居―應接の部屋

より折れて行き給はば、たどかしこに到り給ひなん。おのれは草を刈りて後跡より參らんずれば、ともなひ往きがたし」といふ。墨繩心得ざれば、「其逢見んと宣ふ人はいかなる御方にか」と問へば、童、「まづかしこに行きて其子細を問はせ給へ」といひさして、又笛うち吹きつゝ山をこえて行きぬ。松光がいはく、「かゝる深山に人住むべき道理なし。一定仙人などいふ者なるべし」といふ。「何にもあれ、いざ行きて見ん」とて、墨繩さきに立ちて行く。所々に熊狼などゐたれど、みな耳尾を垂れてむかふ事なし。扨山をのぼり谷をこえて行くに、松柏しげりたる中に大きなる門見ゆ。ちかづきて見れば、扉は金をのべて作りて、瓦は玉を以て葺きたり。墨繩松光とともに驚き見て、「此山中にかゝる家居ありとも聞及ばず」とて、暫しながめ居たるに、扉おのづから開きて、翁のいたく老いたりと見ゆるが出來り、墨繩に向ひて、「あるじ我殿を待ち給へり。いざ」とて、みちびきて入る。何とやらおそろしき心地すれど、みちびくまゝに從ひて入れば、中門あり、其美麗なる事いふべうもあらず。松光をば、「こゝにありて待つべし」といひて墨繩ばかりをともなひて入りぬ。出居とおぼしき所に坐して居れば、奥の方より履の音して出來る人あり。頭をあげて見れば、髮髭は白銀の針をうゑたるごとく見ゆれど、か

しかるに、むかひの岸に年を經たる槇の木立てり。「かれを伐りとりたらんには、これにませる良材あらじ」と松光がいへば、墨繩、「げに我もさおもへり。いで此谷に橋うちわたしてん」とて、松光に負せたるつゝみ取りてひき解けば、中に管のやうなる物いくらともなく入れおきたり。それをつぎ合せつれば、階子のやうなる形とはなりぬ。墨繩かの階子やうの物をとりて、むかひの谷へむけて端の方を投げければ、一つの棧とはなりけり。「我につゞきてわたるべし」といへば、松光しりに立ちて行くに、大方あやふき事なし。げに山路にはかゝる物こそ用をなしけれとて、松光いよ〳〵墨繩が用意をぞ褒めける。さて打わたりて、かの槇のもとに至りけるに、あまりに疲れたれば、しばし樹の根に尻うちかけて休むほど、かなたにて笛の聲すなり。かゝる深山に何者か入來りけんとて、あやしみ見れば、草刈童の十ばかりなるが、籠を背におひて笛吹きならしつゝ來り、墨繩を見て、「そこは此國の匠と聞えたる猪名部の墨繩ぬしにおはすにや」といふ。墨繩、かかる童のいかで我名を知りたるならんと、不思議ながら、「しかにて候」といへば、童がいはく、「此奥山に住める人あり、そこを待ち給ふ事ひさし。今日こゝに入來り給はんなれば、おのれに、先行きむかひて其由しらせ奉れと宣ひき」とて、笛のしりして、「此道

うしろごと―蔭言

かるにやとおぼえけり。さて又ゆり動きてあがり行くやうに見えしが、やがて常ざまの家とひとしく成りぬ。松光かしらを疊にうちつけて、「おのれ智恵あさく、君が百が一に足らざる才を以て、これまでうしろごと申してそしり申せしは、罪のがれんに所なくおぼえ候。今よりながく御弟子と成りて、道の修行仕りたく候」といふ。墨繩うち笑ひて、「おのれ人を敎ふるばかりの才覺は候はねど、しか宣ふ上は、さとり明らめたる程の事は敎へ奉りてん」といふ。郡司武俊も、はじめは惡みて來りけるが、墨繩が業の巧なるに心折れて、まことに凡人にはあらざりけりとて、舌をまきてぞ歸りける。これより後墨繩が名いよ〳〵世にひゞきて、人知らぬ者なかりけるとぞ。

○蓬萊の山

それより松光は墨繩がもとに居りて、其道の奥ある事どもをならひて、他事なくたのみてぞ仕へける。或日墨繩良材を得んとて、松光をともなひて山に入りけるに、道にまよひて山路ふかくわけ入りけるに、切岸そばだちて、下は千仭もあらんと覺えたる谷ある所に出でぬ。むかひの岸はわづかに三間ばかり隔てたれど、わたり行くべき道もなし。

長押めく所にありしくさびを引拔きて、「さば御覽ぜよ」といふほどに、此家おのづから上ざまにあがりて、地をはなるゝ事一丈あまりになりければ、庭に植ゑたる梢どもも、目の下に見ゆるやうになりぬ。郡司はさらなり、松光も膽を消して、あきたる口をふさぐ者もなし。さてもめづらしき上手の匠かなとほめ思へり。扨、「何の料に斯くはつくり置き給ひし」と問へば、墨繩がいはく、「これは火災をのがれんとの爲にて候。おのれが家貧しくて人すくなく候へば、火災あらん時、調度衣服のたぐひ持ちはこぶべき人も候はねば、もし近き所に火出でたらん時には、此家を土の中に引入るべくつくり置きて候。かく樓のやうに、高やかに上り行くやうに作り候は、夏の頃涼とるべき爲にまうけて候。此家夜のみつくりて、わたり近き人にも、かやうの機關設けたりし事は知らせ申さず。もし人知りなば、うるさく集ひ來りて、見る人おほかるべく存じ候て、夜のみ一人して、十日ばかりに作りたてて候ひき」といふ。「扨も興ある事にこそ候へ。さらば揺り下げて見せ給へ」といふに、墨繩ひとり樓を下りて、何事をするにかあらん、しばしありて、「さば引下げて見せ奉らん」といふより、又此樓しづかにさがりもて行きて、土の中へ入る事一丈ばかりにして止まりぬ。まことに常闇にて、いにしへの穴居といふものも斯

蘭陵王—羅陵王、舞樂の曲名、支那唐の陵王が出陣の時のさまに擬したるものなりといふ

張だましひ—負けじ魂

ついたちて—つツと立ち上りて

出でて打開けば、舞樂の蘭陵王の面なり。見るよりおそろしく身の毛よだちて、郡司等ふたゝび面をむけず。墨縄うち見て、「まことによく作られたり。おのれも戯れにさきに作り置きたる物候」とて、これもきぬに包みたる物をとり出でて、紐解きて打開けたれば、たゞいま切りたらんとおぼゆる、年五十ばかりと見ゆる女の頭なり。何とやらん血くさき心地さへすれば、郡司等は見だにやらず、あなた向きて居り。松光手にとりあげ見て、「これは作れる物とは覺え候はず、まさしく女の頭に候はん、いづれより取出で給ひし。あないまく\し」といひてさし置きければ、墨縄がいはく、「もとより眞の頭にては候はず。おのれが作れる所なり。内は空にて鈴を入置きたれば、ふりて見給へ」といふに、取上げてうちふり見れば、鈴の音ころく\と鳴りければ、はじめて作れる物とは知りぬ。松光さばかり張だましひなる男なれども、此細工におどろきて、とても我此者の上に立ちがたしと思ひけり。扨いひけるは、「此家はそこ一人してつくり給へりや、ほかに助けつくれる工匠も候ひきや」と問へば、墨縄がいはく、「かばかり小さき家ひとつ作らんに、人の手をかるべくも存じ候はず。但これは樓にて、常の家には候はず」といふを、松光いぶかりて、「これを樓なりと宣ふはいかなる事ぞ」と問ふ。墨縄ついたちて、

催せば―勧むれ

杻―とつて

あざみおどろく―あきれ驚く

又いひけるは、「且は稽古のためにも候へば、ひたすら互に手並の程をくらべたく候」といふ。二人の郡司もとも〳〵催せば、墨縄せん方なくて、「さらば仰せにまかせてん、何事をなして勝負を定むべき」といへば、松光ふところより木もて作れる蟹をとり出していひけるは、「是はおのれ多年おもひを積みてこしらへ作れる物なり」といひさま、蟹の腹なる杻のごとき物をよくねぢて、疊の上におけば、此蟹足を動して走る事、さながら生きたる物のごとく、郡司等興に入りて褒むれば、松光したり顔して、「此蟹にくらぶべき物作り給はゞ見せ給へ」といふ。墨縄、「われも都人の所望によりて蟹をつくりて候。見せ參らせん」とて、箱ひとつ取出して松光が前に置きつ。松光蓋をとれば、蟹おのれと躍り出でて走る。人々目をつけて見れば、此蟹壁を這ひのぼりて、泡を吹きはさみを上げつゝ、天井をさかさまに這ひてつたひ行く。しばしありて、又壁をつたひ下りて疊の上を走る。墨縄箱を取つて蟹のまへにさしつくれば、躍りて箱のうちへ飛び入りつ。さて蓋をおほひて取納めければ、二人の郡司等あざみおどろく事大方ならず。松光まづ始のたびに負けぬれば、少赤面したりけるが、へらぬ體にていひけるは、「機關は小兒の玩具なれば、たくみなるも世に用なし。これを見給へ」とて、きぬに包みたる物をとり

きしろひ―乾り

いさゝか酒こぼれず、常の盃にたがはず。武俊墨縄にむかひて、「この盃さきに贈られし時、酒をつげばたちまち覆りて、酒をこぼしぬ。いかなる事にか」と問へば、墨縄、「いかでさる事さふらはん」と答へて、そら知らぬかほを作れば、武俊いふことなくて止みぬ。さて人々かはるぐ〜ひきうけて飲むほど、松光すゝみ出でていひけるは、「工匠のわざは家つくるを以て第一とはすなり。そこには機關をもて人の目をおどろかし給ふと聞く、いよ〳〵左様にや」といへば、墨縄うち笑ひて、「宣ふがごとく、機關は小技なり、されど家をつくらん事は甚だやすし。いかなる大厦高堂なりとも、曲尺のうへを出でざれば、未練の人もよくこれを作る。機關は小刀を以てすれども、曲尺をはなれて作りなせれば、尋常の拙工が類はなし得ること難かるべし」といふ。松光がいはく、「おのれも小刀の細工は人に負くべしともおぼえ候はず。今日こゝに參りて候は、そこと匠の道をくらべて、負けたらん方は、此後弟子となりて仕うまつるべく存じて候。いかに試みて見給はんや」といへば、墨縄がいはく、「人ときしろひ爭はんは、おのれが好む所に候はず。此儀においては許し給はるべし」といふ。松光心に思ひけるは、さてはきやつ、おのれに及ばざるをはかり知りて、謙退にかこつけて勝負をのがれんとするなりと思ひて、

わきをかきて―腕の脇を掻きて、即ち勇を誇るさまにいふ語

いまめかしく―當世風に氣のきたる様なり

かで墨繩におくれをとらせて、耻見せて給へ」といへば、松光あざわらひて、「およそ天下に、おのれにまされる工ありとも存じ候はず。その墨繩め、早く名は聞及びて候へども、いまだ對面は仕らず候。仰なくとも、出であひなば、面耻かゝせて候ひなんと、かねて存じて候へば、さいはひの折にて候」と、わきをかきていふ。さらば諸共にとて、連れだちて行く。墨繩が許にいたりて見れば、厨めく軒ははなれて作りて、別に小き家つくりて住み居り。春の事なれば、庭の樹ども花咲きて景色よし。さまで物ずきせる家居ならねど、いまめかしく作りなしたり。案内すれば、墨繩たち出でて、一禮してともなひて入りぬ。隣の郡司墨繩にむかひていひけるは、「これなるは檜前松光とて、我近きわたりに住める者なり。そこと業を同じうすれば對面にいれんとて、ともなひ來つ」といふ。墨繩、「さては同職の人にておはしけるか」とて、懇にあへしらふ。さて盃とり出でて、「寒郷何ばかりのみさかなも候はねど、一つきこしめさばや」といへば、武俊ふところより墨繩がつくりたる盃とり出でて、「これにて始められよ」とて、まへに据ゑければ、墨繩みづから銚子とりて注ぐ。武俊目もはなたずまもり居るに、常ざまの盃のごとく、異なる事もなし。飲みをはりて武俊にさすに、とり上ぐれば、墨繩たちて注ぐに、

構ふれど—工夫すれど

手斧頸—手斧の如く前かゞみなる頸

司もおどろきて、同じく取上げて酒つがするに、盃かたむきて酒は皆こぼれぬ。左右の手に持ちて酒をつがせけれど、酒を入るれば盃おのれとさかさまにかへりぬ。力を手にいれて、いかで傾けじと構ふれど、大力の人の來てひきかなぐるやうなる心地せられて、幾度もさかさまに打ちかへりければ、あるじも客もたゞあきれにあきれてぞ居たりける。郡司大に腹をたてゝ、「かやつ我を弄して、かゝる物つくりて與へつる惡さよ。いかに郎等ども、彼とらへて來」といへば、はじめの度にこりたれば、皆しりごみして行く者なし。客の郡司がいへるは、「我によきはかりごとあり。かれ機關をもてほこり居れば、こなたも又彼に敵すべきものを出して彼を試みつべし。吾郡に檜前松光といふもの候。この國にはならぶ者なき工なれば、かれを請ひて、墨縄にあはせて、其勝劣をこゝろみ給へ。墨縄負けたらんには、かれが造作の具を奪ひて、此後工の職をとゞめ給はんには、かれが爲にはかぎりなき恥に候はん」といへば、郡司よろこびて、「さらば疾く松光を誘ひて來給へ」と契りて、其日はわかれぬ。一日を過して、隣の郡司一人の男をゐて來つ。うち見れば、手斧頸にて搥槌頭なり。歯は鋸に似て、鼻は鐵槌のごとし。げに天骨を得たる道の首長とは見えたり。郡司よろこびて、「い

しやつら—憎き面、しやは罵る聲なり

出居—應接の座敷

きまきて、「我あつらへやりし盃月をふれど作り出でず、汝郡司をばいかなるものと思ひて、さやうに侮りざまにはもてなすぞ。いでおのれがしやつら打ちはりて腹をいん」とて、つかつかと寄らんとす。墨縄ふところより包みたる物とり出でて、うちさゝげて、「もとめさせ給ふ盃はこれに候。おのれに恥見せ給はゞ、盃は此所にて打破りすて候ひなん」といへば、郡司すこし顏をなほして、「さては盃は疾くつくれりとや。さらばそれ作れる料に、此一拳はゆるしつかはすなり」といひて、盃手にとりて、「かさねて我いひつけん事をなほざりにものせば、めに物を見せんずるぞ。今は用なし、疾くかへれ」といひて、墨縄をおひ出しやりて、盃をよくよく見て、「あはれかしこく作りてけり」と、手もはなたず見て居たるに、折柄となりの郡の郡司の入來りけるを、出居にとほして物語して後、かの盃とり出でて、「これは今日はじめて得たる物にて候。これにて酒ひとつ參らせん」とて、やがて酒とり出してすゝむとて、先おのれ盃手にとりて、女の童につがせけるに、いかなるにか、此盃にはかにおもくなりて、ふと手をはなちて落しければ、女の童をうちしかりつゝ、又盃を手にとりて酒つがせけるに、石などを持ちたらん心地せられて、え持つにたへで、又うちかたぶけてければ、酒ほとばしりて疊皆ぬれぬ。客なる郡

御徳に―お慈悲に

はひり―門より玄關迄の間

りつ。從者等墨繩が門の前にいたりて大聲にいひけるは、「郡司の召さるゝぞ、疾く出でよ」と聲々によばはりけれど、ふつに答へざれば、鞋のまゝ床にかけのぼりて、障子ひきあけて入らんとするに、いかにつくり置きけん、障子おしあくるとそのまゝ、從者どもがふみ居たる疊床ともにさかさまに覆りて、五人の從者どもこと〲く床の下に落入りぬ。床の下はふかく穴を掘りてありければ、上るべきやうもなし。はじめの勢にも似ず、大に恐れわなゝきて、空をあふぎていひけるは、「我々無禮をいたせしは、みな郡司のいひつけにて候。いかで命たすけ給はなん」と聲々にわめく。其時墨繩が聲にてから〱と笑ひて、階子をおろしければ、これにとりつきて上り來て、みな〱墨繩が前に手をつきて言ひけるは、「御身郡司のもとに至り給はずば、われ〱此上にいかなるめをか見候はん。あはれ御徳にかしこに至り給ひて、われ〱がうきめ見んを救はせ給へ」といへば、墨繩がいはく、「われは行かじと思へど、そこ達のいふ所心ぐるしければ、さらば行きてん」とて、さきに立ちて歩めば、從者等はよろこびて、しりに立ちて行く。郡司はひりに立ちゐて、墨繩を見て眼を大きくなし、額にすぢを出してにらむ。墨繩しづかに座につきて、「何事の候て、かく火急には召されつるぞ」といへば、郡司い

調度―手まはりの道具
ふつに―絶えて
頃にも―早速にも

やくなりて、おのれ一人ぞ住みける。此國のならひなれば、田かへし耘るいとまには、鋸鑿をとりてひたすら工匠の業をならひけるが、人にすぐれてめでたく作りなしければ、老工の輩もこと〴〵く感服して、眞の良工なりとほめのゝしりける。墨繩ます〳〵精神をこらし修練しければ、今は左右なき此道の親となりぬ。あるは鶏をつくれば、まことの鶏これを見て兩翼をひろげて飛びかゝり、鼠をつくれば、猫きたつてこれを捕りなどして、さま〴〵妙なる事どもありければ、遠近をいはず人これを慕ひて、調度玩物の具などあつらへ物する者、門前に市をなしける。されど心まがれるもの、又權勢を以てもとむる者にはふつに答へだにせず、貧人老夫などの乞へるには、やがていふまゝに作りてぞ與へける。その頃郡司にて紀の武俊といふ者あり、慈悲のこゝろなく、財を貪りて常に農民をかすめあなどりて、ほしいまゝにぞふるまひける。此武俊酒を好みて飲みければ、盃ひとつを墨繩にあつらへ作らせんとて、從者をもて言ひおこしける。墨繩常にかれが惡行をにくみ居りければ、頓にもつくらず日を過しけるに、武俊腹立ちて、この小冠者め、郡司をもはゞからず、しか侮りざまにもてなすこそ奇怪なれとて、從者どもにいひつけて、「とく搦めて來よ」といひつけて遣

庸調―賦税

貞觀の頃―淸和帝の頃

朝堂院―大極殿と小安殿との總稱

神泉苑―平安朝時代の天子の遊覽場、京都二條城の傍に今も尙其址あり

飛驒匠物語

巻之一

○すみなは

斐陀の匠とは人ひとりの名にはあらず、いにしへ飛驒國よりは庸調をたてまつらず、里ごとに匠丁十人を出して、おほやけの造營をつとめ營みしなり。貞觀の頃は、一國より百人を召されて、朝堂院神泉苑などつくらせ給へる事國史に載せたり。今こゝに記しつるは、あまたありし飛驒人の中に、すぐれて機巧に妙にして、其術神に通じて、天地造化の不可思議なるをたゞ雕鑿のうへに出し、木頭を以て鳥となし、板片を以て馬をつくりて、一世の人を驚かせしかしこき匠夫が物語なり。その時代はたしかに聞きつたへず、いづれの御時にかありけん、斐陀の國に猪名部の墨繩といふ者ありけり。父母はは

せさせ給ふ、それより山人姫宮の御許へしのび通ひてちぎり語らふまでを記す。

せたのはし

山人姫宮をぬすみ奉らんとして修行者とたゝかふ事、松光勢多の橋の板をひきはなちて迯下る事。

から猫

山人松光旅の宿にて盗人と疑はれて責めさいなまれけるを不思議に命たすかる事。

あじろ車

山人夫婦ふたゝび都にのぼり行く事、たけしば寺に船主法師おこなふ事、墨縄山人姫宮終に仙となりて去り給ふことを記す。

飛驒の匠がつくれる舟おのれと行く事、ふねの綱きれて山人むすめを見うしなふ事。

よめの君

船主山人を壻にせんといひて後に出家するまでを記す。

夢のたゞぢ

帝の御むすめ女一の宮ひろれの御夢に山人にあひ給ひてより戀ひあこがれさせ給ふ事を記す。

都のぼり

墨繩山人旅のやどりにてあるじが殺されんとするを助くる事。

びさもんてん

墨繩百濟人と藝道を試みる事、墨繩がつくれる毘沙門天帝の御惱をいやし給へる事。

よるの法師

山人ふるさとの酒がめのひさごの事をいひ出でて歎き居けるを女一の宮御覽じて物語

飛騨匠物語目録

のもとに此宮をすゑ奉りて、勢多の橋をひとまばかりこぼちて、それを飛びこえて、此宮をかきおひ奉りて、七日七夜といふに武藏國にいき著きにけり云々。いはんかたなくて、のぼりて御門に、斯くなんありつると奏しければ、いふかひなし、其のをのこをつみしても、今はこの宮をとりかへし、都にかへし奉るべきにもあらず、たけしばのをのこに、いけらん世のかぎり武藏の國をあづけとらせて、おほやけ事もなさせじ、たゞ宮にその國をあづけ奉らせ給ふよしの宣旨くだりにければ、此家を内裏の如くつくりて住ませ奉りける家を、宮などうせ給ひにければ、寺になしたるを竹芝寺といふなり云々。按ずるに、此たけしばの故事を記せる物管見にいまだ見及ばず、將門記に郡司武藏武芝といふ者あり、これがことならずや。

更科日記に云く、(菅原孝標朝臣の女の筆なり、孝標は菅原道眞公九代の孫なり。)いかなる所ぞと問へば、これは古へたけしばといふさかなり。國の人のありけるを、火たき屋の火たく衛士にさし奉りたりけるに、御前の庭をはくとて、などやくるしきめを見るらん、わが國に七つ三つ造りすゑたる酒壺にさしわたしたるひたえの瓢の、南風ふけば北になびき、北風ふけば南になびき、西ふけば東になびき、東ふけば西になびくを見でかくてあるよと、ひとりごちつぶやきけるを、其時の帝の御むすめ、いみじうかしづかれ給ふ、たゞ一人御簾のきはに立出で給ひて、柱によりかゝりて御覧ずるに、此をのこの斯くひとりごつをいとあはれに、いかなる瓢のいかになびくならんといみじうゆかしく思されければ、御簾をうちあげて、あのをのこここち寄れと召しければ、かしこまりて、勾欄のつらに參りたりければ、いひつること今ひとかへりわれにいひてきかせよ、と仰せられければ、酒壺のことを今ひとかへり申しければ、われ率ていきて見せよ、さいふやうあり、と仰せられければ、かしこくおそろしと思ひけれども、さるべきにやありけん、負ひ奉りてくだるに、論なく人追ひて來らんと思ひて、その夜勢多の橋

ことばなるべし。

六樹園

序

かゝる書つくり出でんは、おとなげなくあいなき人まねにこそとて、たび〳〵人のそゞのかしつれど、うけひかでやみにしを、此頃北齋のぬしふりはへとぶらひ來て、せちにすゝめ物せらるゝに、すまひいなまんもなか〳〵にほこらはしくやと、なまじひに筆をとりつ。此のふみむねと飛驒人のたくみがうへをいひて、且たけしばのふることをさへとり交へてつゞりなしつ。すべてあやしうよこなまれるさとび言をもて記しつけつれば、聞きにくき事こそおほからめ。そもたけしば寺のゆゑよしは、更科日記にしるしたれば、いそのかみふりにし代よりいひ傳へたる物語ならし。今おほえどの中に芝浦とよぶ所のあるは、もし此たけしばのなごりにやとさへ思はるゝは、例の僻事をのみやくとあなぐるほけ人の癖ならんかし。此さうし讀み見てのち、さてもをさなくはしたなき心ばへや、斯うざまの事にしも心をいれて、あらぬ事ども作りひがめて、かゞやかしとも思はずよとそしりをこづく人もありなん。さるはあべのに隱れてむしろ織りけん某法師がむかしをも、え知らぬ人の

六樹園の大人旅より歸りつきてのち、五卷の文とり出でて、これが淸書してよとておのれに賜びつ。持ちかへりて讀み見るに、げにをかしく興ある事どもぞおほかる。されど大人の常の筆づかひにも似ず、もはらさとびたる言の葉もてつゞけられしは、をさなき人の讀み見ん時心得やすからんためとにや。うはがきに近江縣物語としるせるは、萬葉集に見えたる靑角髮の歌を思ひて名づけ給へりけん。此物語せる翁のさまけしうはあらざりき、さだめてりふをうなどいへゞる人の、身をかへて生れ出でたるにやと大人の語られたる、いかなるゆゑありけるにか、その仔細は知らずかし。

凤興亭高行

しるす

子を名づけて近江縣物語と呼ぶことは、梅丸が任所にありて人々に語りけるを、そのままに書きつけければなるべし。

季光安世一家
頼光の館にて
親子對面
なし各功有
しを頼光
ほめよろこび
ありて一門
榮花を
きはむる
所

我しる所―我領する所

はごくみ―養育

こといみ―言葉のつゝしみ

散りあがれ―離散し

終身ねんごろに孝養怠らざるべし。乳母の右近が主にかはりて死したる、返すぐ〳〵あはれなり。西念が發心のはじめは、觀音のし給へるにて、しかも修行の堅固なりし事、尋常の法師に異なり。かれが生れ出でたる田原の郷は、さいはひ我しる所なり。かねて父新發意殿の宿志にて、一字の伽藍建立の心あれば、かしこに一寺をたてて、西念を以て住持となし、右近が亡靈を弔はしむべし。梅丸がひととなりしは、またく觀音の靈驗、しかしながら、猿丸が慈心のはごくみによれるなれば、一方ならぬ洪恩なり。かれが遺言の文をうづめて塚をきづきて、其あとを遺すべし」と、のこる方なきめぐみの詞に、人々はたゞよろこび泣きに泣きて、こといみもしあへず袖をしぼりぬ。さるは末の世にいたりて、猿丸塚、又猿丸峠など呼びつけて、田原の郷にその跡をぞのこしける。梅丸それより父の住みける白河の家を修理しつくろひて、うつり住みけるに、安世、季光がもとにありし郎等女ばらなど所々に散りあがれたりし者ども、聞きつたへて、われも〳〵と歸り來てつかへければ、むかしにはまさりてにぎはしくぞ成りける。かくて季光、安世を別室に住せ、朝暮孝養おこたらず、さていみじき子どももあまた生みつゞけて、官位ますゝ〳〵すゝみて、百年の榮花をきはめ、めでたく一期を過しけるとなん。此卷々の草

ついがされ―三方の類

洲濱の臺―洲濱の形に造りたる臺に、松竹又は蓬萊の景物などを植ゑたる物

朱陳の榮―兩家婚姻を通じて永く榮ゆること、白氏文集卷十「徐州古豐縣、有一村曰朱陳、去縣百餘里、桑麻青氛氳、（中略）一村唯兩姓、世々爲婚姻」云々

うちあげて―酒を飲みつゝ掌を打ち歌をうたふこと

あなたふと―催馬樂「あなたふと、あなたふと、今日の尊さや、いにしへも、斯くやありけん、今日の尊さ」

さき草の聲―「此殿はうべも富みけりさき草の三葉四葉に殿づくりせり」

れがあながちに承引かざりしなり」と語る。かゝるに思ひかけず、へだての障子ひらきければ、人々見てあれば、御あるじ頼光君打笑みて立ちおはす。侍臣の面々、ついがさねに土器のせて持出づるもあり、又洲濱の臺持出づるも有り、なにくれの肴などあまた持出でて、人々のまへに据ゑおく。頼光宣ひけるは、「婚姻の禮、媒にあらざれば物せずとか聞及ぶ、我なかだちとなりて、ながく朱陳の榮を見んとす」と宣ふ。人々はたゞかたじけなさの身にあまりて、頭をだに上げずうつぶし居り。頼光侍臣に仰せて、梅丸、薗生に土器とりかはさせ給ひ、御みづからうちあげて、「あなたふと、今日の尊さ」とうたひ出し給ふ。御傍の人々も、とり〴〵祝ひことぶきたるさき草の聲も、げに此殿の御かげなりけりと人々よろこぶ。酒宴こと果てて、頼光人々にのたまひけるは、「くはしき事は障子をへだてて聞きすましつ。そも假の親子の契なせしは、返りてまことの親子なりし、これ希有の因縁なり。傳へてながき世の物語ともすべかんめり。薗生が賊營にとらはれと成りて、智を以てその身を汚さず、再び夫にめぐりあひしは、女中の丈夫、まことに安世が娘といふべし。梅丸よくあはれみて、ながく老を偕にすべし。梅丸が文武に長じたるは、ひとへに師の安世がをしへの嚴なるによれり。かまへて一家に養ひて、

かつ〴〵—何事も差しおきて先づ

かはらけ—土製の酒杯

長柄—長柄の銚子

順流れ—盃の次第にめぐること

は、「いかなる事にて御ことは、今日この御館に入來て有りし」といへば、嫗目おしのごひて、「はからず盜人にとらへられて、憂きめみたるを、梅丸來りてあがなひ出し、今日まで母となしてあがめ養ひたる」とかたれば、季光手をうちて、「われも梅丸を實の子なりとは知らで、養子の契をむすびたる、其所は隔てたれど、おことも又彼を假の子となせしは、不思議といふにもあまりあり」といへば、嫗、「是みな觀音のし給へるなり」とて、手をあはせてかつ〴〵拜む。「思へば過ぎしむかし初瀨に通夜しける時、枕上に立ちおはして、やしなはれんことは安しと告げ給ひしは、今より行末の事なるべし」とて、夫婦やう〳〵に笑を含みてよろこびけり。梅丸は膝うちたゝき、天を拜してよろこぶ。薗生は老母をいたはりて、背をなでさすりてあつかひ物す。安世かはらけ取出でて、「めづらしといふにもあまりある御親子の御對面にて候へば、いざ〳〵めでたくひとつ受け給へ」とて、長柄とりて季光にすゝめ、おの〳〵順流れに酒くみ交してよろこびけり。西念いひけるは、「梅丸君と薗生君、いまだ婚姻の盃し給はず。今日此ついでに合卺の禮行ひ給ひなん」といふ。季光、「いかで今までさる事をもせざりし」といへば、嫗、「此事はさきにわらはも勸め候ひつれど、父君に知らせ奉らでわたくしに行ふべきかはとて、か

家司―一家の雜務を總べ司る者

うかゞひ居て候へば、思ひよらざる物語どもに、うれしさの胸にせまりて、おぼえず聲をあげて候なり」といひて、梅丸が許にゐざり寄りて、「他人なりと今朝までも思ひしは、我うみつる愛丸にてありけるよ」とて、とりつきて泣く。梅丸はあまりに思はずなる事にてあれば、たゞあきれて詞も出でず。季光もおなじくあきれたる樣にて、嫗にむかひて、「おことは盜人のために首きられて死にけりと、家司なる兵藤太夫が物語にて聞きたれば、此世になき人とのみ思ひてありしに、いかで命ながらへてありし」といへば、嫗、「御身の熱田に下り給ひし後、俄に盜人の入來れば、うろたへて迯出でんとせし時、愛丸が乳母なる右近がひきとゞめて、盜人はあるじなりと見候へば、いみじうせめて財のありかなど問ひ聞く物にて候、はやくその衣ぬがせ給ひて、下種女のふりして出でさせ給へとをしへしかば、理と思ひて、厨に有りし下女の衣に著かへて、あわて惑ひて迯出でぬ。かの乳母なる右近は、我ぬぎすてしひはだの衣とりて打著たりけるが、さては盜人にあひて殺されたるなんめり、あはれ我命にかはりて死失せしこそかはゆけれ」とて、又袖を顏にあててぞ泣きける。梅丸は、「さてはまことの母人にこそおはしけれ。おもはず此日頃不禮をのみ仕りき」とて、額に手をあてていふ。季光かさねて問ひける

勢弘高、巨勢家の第五代也

盲龜の浮木—法華經「佛難ㇾ得ㇾ値、如㆓優曇波羅華㆒、又如㆘一眼之龜値㆓浮木孔㆒」

優曇華—法華經に「優曇華者、云㆓此靈瑞㆒、三十年一現、現則金輪王出」

我肉身わけし子にてありけるか」とて、取附きてむせび泣く。梅丸も手をあはせつゝ、「思はずまことの親にめぐりあひ奉れる事、神明佛陀の御加護なり」と、親子互に手をとりかはして、しばし涙にぞくれにける。季光目しばだたきて、「二十年まへに死にわかれしと思ひし我子に、斯う再びめぐりあひしは、盲龜の浮木、優曇華の咲出でしよりは希有の事なり。あはれ連れそひし嫗の今日までながらへありて、かゝるうれしき筵にあらば、さぞ〳〵よろこび思はましを、盗人のために殺されて、命うしなひてし口惜しさよ」となげけば、梅丸、「一日の孝をもなさず、御顔をだに拜し奉らざりしは、いかなる宿世なりけん」とて、聲をあげて泣出す。かゝるに一間の中さわがしく、よゝ〳〵と泣く聲すれば、何者ぞとて、安世障子おしあけて見れば、袋の嫗疊にうち伏して、前後も知らず泣きさけびて、身もうきぬべくふし沈み居り。安世たち寄り、「何事有りては泣き給ふぞ」といへば、嫗頭をあげて、「季光殿なつかしや」といふ。季光又おどろきて見れば、年頃睦びかはせし我妻なり。「いかにながらへてありけるか」と聲ふるはして問ふ。梅丸、薗生もおどろきてうち守り居れば、嫗泪をおさへて、「かしこの一間にてためらひ居たれば、あやしき詞のはし〳〵聞えけるまゝ、今のほど障子のあなたに這ひ寄り來て

抖擻—世捨人、僧侶

唐花—唐花草の紋所

巨勢の廣高—巨

人の死骸の腰に物の見えて候へば、引拔きとらんといたせしに、思ひもよらず此兒のよみがへりて泣出しぬ。折柄松ともして、旅人の來るあれば、見つけられじと忍びたるに、かの旅人兒をいだき、包を負ひて行かんとす。やらじとゞめてしばしが程うちあひて候へど、きやつ强力の男にて、おのれをとつて四五間ばかりほうど投げて候へば、塚穴の中におち入りて、腰をいためて悶絶せるほど、兒と包を引さらへ、いづちに去にけん影も見えず。猶のこれる物やあると、そこらさぐりて見てあれば、小き足駄の手にあたり候まゝ、これを兩の手にもちて、ゐざり這して歸りて候。其の夜の夢に、老僧一人來り給ひて、此足駄大事として祕めおくべし、おのれ成佛すべき因緣あれば、今より行ひをあらため發心修行すべしと宣ふと見て、夢はさめぬ。それよりひたすらの道心者と成りて、抖擻修行して、斯くてさまよひ候なり。扨は其夜の旅人は、坂上の猿丸殿にて、掘出せし兒と申すは、梅丸君にてぞおはしける。吾また梅丸の君に命たすけられしを、おもへば不思議の因緣なり」とて、首にかけたる包ひらきて、ちひさき足駄とり出でて見するを、季光はやく手にとりあげて、「これこそ滿仲の君より兒がもとへ賜はりし物なれ。おもてに唐花をゑがきたるは、巨勢の廣高が筆のあとなり。さては養子と思ひし梅丸は、

赤かゝち—赤酸漿

もこよひて—放浪して

調度—手まはりの道具

づけし兒は、此梅丸にてはあらずや」といへば、季光頭うちふりて、「いなく、穴をふかく掘らせてうづめ葬りつれば、よみがへりたればとて、ふたゝび此世に出づべきにあらず」といふ。「さるにても此劣、まさしく梅丸がもとにありしこそ心得ね」とて、人人諸手くみて頭打傾けつゝ、「いぶかしく」といひ居たるに、西念うしろに居りて聲うちあげて、「南無観世音」と高らかに唱へたるを、人々驚きてふりむき見れば、西念、赤かゝちの樣なる涙を瀧のやうにおとしつゝ、すゝみ出でて云ひけるは、「さてく不思議なる事を目のまへに見て候事かな。人々に聞えんも老法師が身の恥辱と存じ、これ迄はつゝみ候へども、おのれが默し居らんには、人々の御不審のはるべき道理も候はねば、恥をすてて、過ぎにし昔物語聞え奉るなり。愚僧男にて候時は、狼冠者と人に呼ばれ、山城の國田原の鄕に住みて候ひけるが、あけくれ博奕にのみ心を入れて、放逸無慙のふるまひのみ仕り、親族一門にも見はなされ、乞丐の身となりはてて、舟岡山のわたりにもこよひて候時、康保元年やよひの頃、いみじき人のをさな子の野邊送ありて、玩物調度金銀さへ掘りうづめ給ふと聞きて、俄に例の慾心おこり、夜にまぎれてかしこに至り、人見ぬほどに掘りうがちて、調度の類は包におし入れ持歸らんと存ぜしが、幼き

いふ。安世聲あげて、「西念こなたへ」と呼べば、侍とりつぎて、西念を率て來たり。梅丸、西念が持ちたる袋物とりて封をひらけば、三重計に封じてあり、打開けて見れば一通の文あり。上書に、梅丸どのへ猿丸と書きたり。讀み見れば、

おのれはそこの實の父にて候はず、過ぎし康保元年三月十九日、山城の國舟岡の山にて不思議にひろひ取りて、育てやしなひて候なり。こゝに封じ置きし笏は、其時御身とともに拾ひ得し物なり。

と讀みあぐるに、季光のびあがりて、「何とか〳〵」と聞耳たつる。梅丸猶讀み見れば、「生長の後、まことの父母にめぐりあひ給はんしるしともなるべく添へ置きて候なり」と讀みもをはらず、梅丸悲歎の涙にくれけるが、あまたゝび笏をおしいたゞきて、「これこそまことの父母の御かたみなれ」とて、身にひし〳〵とつけて涙おとせば、季光いぶかしげなるおもゝちして、「その笏われに見せ給へ」と手に取見て、「これこそ我子愛丸が死しける時、腰にさゝせて埋めつる笏なれ。いかでその物のこゝにはある」と、目を大きになして不審すれば、安世うち聞くより、「此笏、なくなり給ひし兒の腰にさゝせて葬り給へるとあるに、猿丸が遺言をあはせて年月をかぞへ見れば、もしそこの宣ふなる愛丸と名

我本姓別に候事こころえず。くはしく語らせ給へ」といへば、安世うちわらひて、「御邊をさなき時なれば知り給はじ、かの田樂して世をわたれりし坂上の猿丸は、御身のまことの父にはあらず」といふに、梅丸驚きて、「いかに〳〵」と眉をしわめて問へば、「今より二十年ばかり昔なりき、猿丸、田樂して都にのぼりて、三つ計のみどり子をいだきて歸り來りて、これは旅にてひろひ得たりとて、乳をもらひて育てやしなひけるが、兒の生ひたつを見て、ひろひ得し子なりといはゞ、あだし心も出來ん物ぞと、ちかしき人にも口かためて、その由兒にもかたりも出でざりき。此事知りたるは我のみならず、一村の中老いたるものは皆よく知りて居り。その時のひろひ子といふは御邊にて候ふ。しかるにさきに、賴光君の姓氏を問はせたまふ時、いつはりて聞ゆべきならねば、つゝまで申しつるなり」と語る。「さらば我本姓は、誰によりて問ひあきらめ候ふべきや」といへば、安世、「われも又知り得ず。されど御身に、かたみとて殘しつる猿丸が一品こそ心にくけれ、ひらきて見給へ」といふに、梅丸、薗生にむかひて、「例の品これへ」といふ。薗生、「常にかたはら放さず持ちて候へども、只今これへ參り候とて、西念法師にあづけ置きてさむらふ」と

松のおもはん事も恥かしー上句、古今大帖、いかで由ありと知られし高砂の」すまひてー辭して

にありて、かしこより攻上りたる事は、我さへ今日はじめて知りたりき。我殿等父子の約を結びし事は、我心に符合して、斯ばかりよろこばしき事はあらず」と御よろこび大方ならず。季光つゝしんで、すのまたにて始めて逢ひしより、親子のちなみ結びける事などこまやかに語り聞えて、「かく思ひがけなく對面しつるも、偏に君の御めぐみなり」とてかしこまる。頼光かさねて、「今の程安世が物語にて聞けば、家族のともがらをも率て來れる由、こゝに呼入れてのどかに對面すべし。われは父新發意殿のもとへ此由知らせまゐらすべき文かきて奉らん」とて、立ちて奥の間へ入らせ給ひぬ。安世そゞろに悦びて娘薗生を呼入れて、季光に對面せさす。季光、薗生がかたちのすぐれたるを見て、「あはれよき嫁の君をまうけつ」とてよろこべば、梅丸、薗生に向ひて、「袋のうば君はなどて伴はざりし」といへば、薗生「かしこの一間におはすなり。伴ひまゐらせんと申し候へど、かゝる忌々しき身は、かしこき御あたりへははゞかりあり。且松のおもはん事も恥かしと宣ひてすまひて出でもやり給はねば、みづからひとり參りて候」といふ。梅丸安世にむかひていひけるは、「さきに石山にて初めて殿に見參に入り候時、わ君我姓を坂上と呼び候は、本姓にはあらぬ由聞え給ひき。此事いぶかしければ、くはしく承らまほ

大紋―布製の直垂
あざみ驚きて―あきれ驚きて
むせび―結び

みやかに御答仕りがたく候」といらふ。頼光、「さてはせん方なし、されどわ殿が如き若者ある事、老臣どもにも見せばやと思ふなり。それ〳〵」とのたまへば、めしつぎの侍につれて出でたるを見れば、大紋に立烏帽子著て腹巻したる老武者、御前に出でてかしこまる。頼光、「老人のなぐさめによき若者を見せんとて呼出しつるなり。此若武者こそ此度近江の强賊齊明を計ごとを以てうちほろぼし、未曾有の高名なしたる者なれ。よく見知りてあれ」と宣ふ。老武者すなはち頭をあげて、目をしぼりて見やりけるが、驚きあわてて、「やおれ梅丸にこそ」といふに、梅丸頭をあげて見れば、尾張にて親子の約をせし嵯峨の左衛門なりければ、あざみ驚きて、「親人いかで疾く都には上り給ひし。いかに御心地はすくやかにならせ給ひつや」と膝行り寄りて語らふ。頼光も淺ましがり給ひて、「さては疾く親子の契なせしこそ思はずなれ。我なかだちして父子のむせびさせてんと思ひしはおそかりけり」と宣ひて、御よろこび斜ならず。ふたゝび梅丸に宣ひけるは、「此者こそ我家の老臣にて、藤原の仲光が弟にて季光といへる者なれ。年頃嵯峨野にかくれ住みてありしが、父の殿にもひさしく仕へて無二の忠臣なりしかば、われも鷹狩のついであれば、立寄りてたえず訪ひおとづれし事もありき。このたび不思議に尾張の國

すまひ―辭し

ましげに並びて居り。梅丸門を入りて見れば、師なりける安世とく爰にありて、出でむかへて、凱陣のよろこびを述べ、かつ傳來の具足とりかへしつる事、ひとへにそこの功なり」と悦びいひて、「今日なん我娘老母をも率て來りて、御館の内にとゞめ置きたり。先御見参過して、人々にも逢ひ給へ」とて、うち連れだちて頼光の御前にぞ出でける。頼光朝臣疾く見給ふより、「梅丸はやくぞ歸り來つる。わ殿が功にて凶徒たひらぎぬる事、保昌朝臣の文にてつまびらかに知りぬ。今日朝廷にて近江掾に任じ給へること、今のほど聞及びつ。さこそよろこばしからめ」と宣へば、梅丸頭をさげて、「これおのれが功には候はず、ひとへに君の御威徳のかゞやける餘りに候」といらへ申す。さて御かはらけ給ひて、「われ梅丸に一つの望有り、承引くべきや」とのたまふ。梅丸かしこまりて、「御諚で候へば、いかなる事なりともいなみ奉るべきやう候はず」と申せば、「我家に譜代の老臣あり、いま六旬餘に及びぬれど嗣子なくて、明暮是を愁ひ居り。わ殿かれが子と成りて終りを見とゞけやらんには、われも又わりなきよろこびこれに過ぎたる事なからん」と宣へば、梅丸、「御諚すまひ奉らんやうは候はねど、さきに旅館にて、親子の契なせし老人の候へば、またも異人を親とし候はん事、義において安からず候へば、此事計はす

の柵やぶれて、齊明その外むねと頼みたる者ども、こと〴〵く打死しぬと聞えければ、盗人どもたまりあへず。如法貪慾の心より一旦は從ひなびきけれど、かく危急の時にのぞみては、誰かは一人も蹈止り居るべき、みな言ひあはせたる如くちり〴〵に成りて落失せぬ、今はたゞ十騎あまりぞのこりたる。袴垂思ひけるは、かくてはな〴〵しきいくさせん事かなふべからず、敵のちかづかざるほどに疾く落行くべしとて、十人の者ども皆鎧ぬぎすてて蓑笠うち著て、いづくともなく迯出でてぞ行きける。されど天命遁るゝ所なく、結句は京都において、四天王のために命をおとしけるとぞいひ傳へたる。尾張の國の軍勢は、柵ちかく攻寄せて鬨の聲をあげたれど、打出づる敵も見えず、人を入れてうかゞはせけるに、「はやう落失せて候なり」といへば、左衛門下知して、火をかけて賊營を燒きはらはせ、勝鬨つくりて都の方へとぞうたせける。さて又藤原の保昌は、近江の賊をうちたひらげて、梅丸をいざなひて其由奏聞を遂げければ、叡感殊にあさからずして、保昌をば丹後守になされ、扨梅丸が文武の才をほめさせ給ひて、近江掾にぞなされける。各〻朝恩のかたじけなきことを拜謝し奉りて退きける。それより梅丸は、保昌朝臣にひきわかれて、頼光朝臣の御館にいたりけるに、門前には尾張の國の軍勢いさ

物の具—武具

よびつぎの濱—尾張國呼續濱、尾張國にあり

○うどんげ

こゝに尾張にありける嵯峨の左衛門は、梅丸にいひつけて都へ出したてやりて後、やゝ病おこたりはてける頃、大宮司來りていひけるは、「賴光朝臣より竊に御使給はりて、國國にある源氏の御家人ばら急ぎ馳せむかひて、賊徒をうちほろぼすべき由御掟ありて、此國の武士どももその支度して候なり。御身つかへを返し給ひ隱遁の御身ながら、かゝる時は引籠りおはすべきならず。いそぎ打立ち給ひて凶徒を亡し給はなん。しかるべき物の具は所持して候へば、箙とらせ給ひて用ひさせ給へ」といふ。左衛門うなづきて、「よくこそ告げ給ひつれ。我老いたりといへども、みすく\朝敵となるやつばら見のがすべきにあらず、いそぎ罷りむかひなん」とて、それより所々の武士を催促しけるに、三百騎計ぞ集りける。陸を行かば日數かゝりぬべしとて、よびつぎの濱より船に打乘りて、たゞちに伊勢國におしわたり、いきほひ猛に打つて行く。かねてより源氏の武威のおそろしきことを聞きおぢしたる盜人共、軍勢の向ふなりと聞くより、蜘の子をちらす如く十方へ散りてぞ迯げうせける。左衛門軍勢を下知して、鈴鹿山へと向ひけるに、昨日高島

する人の冠にさす花の類、同門の名誉の義
著背長—鎧に同じ、大將の分のにいふ
へらぬ樣—臆せぬ樣子
三尺の劍の光は云々—「陸將軍賜二李都使一」の句にして和漢朗詠集「將軍」に出づ

此鎧にてあるか」といへば、いよ〳〵膽つぶれて、さては事あらはれぬと思ひて迯出でんとするを、梅丸聲をあげて、「者ども來りてからめよ」と呼ばはれば、表の方より士卒十騎ばかり入來て、常人を捕つておさへ、高手小手にくゝりあげつ。梅丸いひけるは、「我はじめより名のりて汝を捕ふべけれど、汝迯げかくるゝのみならず、此鎧いかにしなすらんと思ひはかりて、扨かくは構へたるなり」といへば、常人恐れて魂も身にそはず、されどへらぬ樣にて云ひけるは、「扨は汝俄になりのぼりて、つかさをも得たるよな。いかで薗生を吾妻となし、汝も安世もなき物にせんと思ひたりしに、その事ひとつも叶はで、鎧さへとりかへされつる口惜しさよ。夢にだもかゝりと知らば、その鎧水の底にも沈め、火にも入れて燒きてましを、吾てづからもて出でて汝に著せて返せしは、あさましきまで愚なりし」といひて、足ずりして身をふるはす。梅丸は、田樂どもが打捨て置きたる扇とりあげておしひらき、「三尺の劍の光は氷手にあり」と高やかにうたひければ、郎等ども笛鼓などてんでに取りて、「一張の弓の勢は月心にあたれり」とうたひはやして、一度にはゝと笑ひて、常人が繩をとりて、とよめき勇みて出行きける。後に聞けば、常人は公家の御沙汰として、鬼界が島へ流しつかはされけるとなん。

をこの事―愚な事

しきだい―挨拶

同じかざしの名―かざしは唐歌

ば、常人鎧の袖をひかへて、「をこの事なし給ひそ。大将軍に向ひ奉りて、下種の身の物申すべきことやはある。さては我さへいみじき罪にやあはん、疾く外へ迯出で給へ」とい ふ聲さへ齒の根あはず。「さやうに苦しがり給ふな。我よくこしらへすかして見ん」とて、常人が手をふりはらひて、のどくと歩みて出づる。常人うち見やりて、たましひも身にそはず、一定梅丸め引きくゝられて、憂きめや見るらん。さもあらばあれ、大将軍の何とて爰に入來給へると、障子の隙より覗き居たるに、梅丸表の方に出でて會釋すれば、大将軍座につき給ひ、うやくしく禮をなして、梅丸にうちむかはせ給ひ、何事か物語しておはす。常人耳をそばだてて聞くによくも聞えず。大将軍の御聲にて、「さてもさねよき具足にて候」と宣ふ御聲、ほのぐと聞ゆ。いよく心も得ずうかゞひ居たるに、大将軍又しきだいし給ひて、「かしこにて待ちつけ奉らん」とて、立上りて出でておはす。あまたの軍兵左右にならびて、いみじく警固して出でて行く。梅丸おくりまゐらせて立歸り、奥ざまに入りて見れば、常人面はさながら土のごとく成りて、口うち開きてふるひ居り。梅丸うちわらひて、「いかに常人、汝我師の教を守らず、盗人に落ちあぶれて、同じかざしの名をさへけがしつ。いかにや我師安世どのの寶とし給ふ相傳の御著背長は

塗籠―納戸

「今一手さるべからんことを」と、ひたすらに責むる。常人樂屋に入來て、「客人のいたくめでて候へば、今ひとたび興あることとして見せ給へ」といふ。梅丸、「おのれ近頃あらたにつくれる田村將軍といふ一曲さふらふ、これを舞ひて御覽に入れまゐらせん。こは後卷して出立てば、鎧かぶと貸したびなん」といふ。常人何心なく塗籠に入りて、盜みとりたる鎧かぶと持出でてわたしければ、やがて裝ひさうぞきて立出でて舞すまし、さて鈴鹿山の賊徒たひらげしことを詠につくりて、聲をかしく述べけるを、皆人おもしろがりて、耳をすましてぞ聞居たりける。かゝるに表の方俄にさわぎて、「かしがまし、何事ぞ」と聞けば、「大將軍保昌朝臣入來り給ふなり」とわめく。常人おどろきて、「いかでさる事あらん。もし門違してておはしけるにや」などいひつゝ見れば、門の外にあまたの士卒等立ちならびて、鎧の金物きらく〳〵しく光りあひて、螢などの飛びかふやうに見ゆ。大將軍馬よりおり給ひて、我家をさして入來給ふを見て、心の鬼におそろしくなりて、わなゝふるひて居り。有りとある見物の男女、みな庭の方へ迯出でて、垣おしやぶりて出づるもあり、又はたち歸りて、何事ぞとてのぞき居るものも有りけり。梅丸、常人に向ひて、「さな驚き給ひそ。おのれ出でむかひてやすく歸し出しまゐらせん」とて立上れ

さうぞきし装束を著けて
酒はがひし酒をすゝめて祝ふこと
ことざまし興を殺ぐこと

り來て、いづくへか奪ひ行きて、行くへも知らず成りて候」といふ。常人心に思ひけるは、さては我いひつけやりし奴儕に異心を生じ、薗生を奪ひておのが物とし、他國に落行きけるならん、いかにもして取返さばやなど思ひけるが、知らずがほつくりて梅丸に向ひて、「さて〳〵心苦しき事を承りて候。ひさ〳〵にて見參に入りて候へば、のどかに物語もせまほしく候へども、折節さりがたき客人の來あひて候へば、またこそ對面給はらめ」といひさま、つい立ちて入らんとす。奥の方は人あまた群れゐて、にぎはしく笛鼓ならして打はやす。梅丸、常人が袖をひかへて、「客人の御入と承ればさいはひなり。それがしが田樂の一手、ふつゝかに候へ共一かなで御覽に入れたく候なり」といへば、常人うなづきて、「これは然るべくおぼえ候。奥の間には、田樂する人々兩三人請じ置きたり。御邊の堪能なるは吾知る所なり、さらば共々立舞ひ給ひて、今日の宴席をたすけ給はれ」といひて、田樂どものならび居る樂屋の内へともなひて入りぬ。それよりさまざまの田樂こと終りて、梅丸うちさうぞき出でて、千秋萬歲の酒はがひといふ曲を、おもしろく舞ひをどりて見せければ、滿座興に入りて、「今日の田樂はこの人に盡きにたり。異人のはなか〳〵にことざましなりけり」とて、しきりに梅丸をほめのゝしりて、

鼬の無き間の貂ぼこり—「鼬の無き間の鼠」と同種の諺

おほざうなる—おほびらの

やれはらめきたる—破れてぼろぼろになりたる

たづき—方便、なりはひのよすが

ひそかに神崎の里に至りて常人が家をうかゞひ見るに、安世が家を我物となし、しもべなどあまた召しつかひて、鼬の無き間の貂ぼこりとか云ふさまにて、いと〳〵ゆたかに暮し居たり。おほかたの人ならば、かく盗人のはびこりたる世に、たやすく家居しめて、おほざうなる住居などすべきにあらねど、常人さきに彼等が社に入りて、腕にしるしをさへ黥したれば、同類の中にかぞへられて、盗人どもも手ざす事をせず。金剛が許へも黄金あまたつかはして詫びてければ、慾にふける盗人なれば、やがてうけひきて罪をゆるして、したしく睦びかはしけるとなり。梅丸二十町ばかりこなたにて、衣服ぬぎかへて、よごれ垢づきやれはらめきたる麻の衣著て、たゞ一人常人が家にぞ往きける。案内を乞ひて、「梅丸こそ參りて候へ。いまはよるべなき身となりて候へば、習ひ得たる田樂を舞ひて、今日のいとなみとなして候。いかで見參にいらばやと存じて、わざと參りて候」といはせける。常人聞きて、薗生が事も聞かまほしければ、呼入れ對面して云ひけるは、「わぬし今は田樂をもてたづきとなすとや。先聞かまほしきは薗生殿はいかになりし。わぬしの妻となし給へりなどほのかに聞きつるが、いよ〳〵さやうにや」といふ。梅丸、「辛うじて薗生をあがなひとりて、宿りまで召しつれて候ひしかど、其夜盗賊の入

梟木―梟首に用ゐる木、さらし木

とぞ構へたりける。此時齊明城中にたまり得ず、信濃路へとこゝろざし、郎等二人具して遁れ出で、やゝ十五六町落延びて城の方を見返りたれば、火さかりに燃えのぼりて、敵味方の鬨の聲矢さけびの音、おびたゞしく聞ゆ。さすがの強盜も心おくれて行きまよふ所に、待ちつけたる保昌が兵、知らせの貝を吹きたて、八十餘人集り來て、齊明を中にとりこめ、からめ捕らんとひしめきけり。齊明いまは斯うよと、死にものぐるひに薙立て、勇をふるひて戰ひけれど、梅丸が射たる矢眉間にとほり、眼くらみて遂にからめとられけり。保昌斜ならずよろこびて、明けなば都へ引くべしとて、きびしく警固させけるが、矢疵深手なりければ、明くるを待たずして死にてけり。打死せる賊等、多襄丸調伏丸、夜叉太郎、金剛二郎、皆頸を斷つて、齊明と共に梟木にぞかけたりける。此度の勝利はひとへに梅丸が軍謀によれりとて、其功を賞して、官軍みな感じあへりけり。猶かくれたる殘黨もぞあるとて、しばらく陣をひかず、ためらひてぞ日を過しける。齊明が一黨亡びうせければ、近鄕の百姓等、はじめて安堵の思ひをなし、山奥にかくれたる者ども、資財道具を運び返し、ふたゝびもとの家居に歸り住みて、ひとへに保昌朝臣の武功をぞ仰ぎたふとびける。此時梅丸は郎等拾騎ばかり引きつれて、保昌にも知らせず、

おほざうの文—おほびらに人前を憚らぬ手紙
疊紙—懐紙、鼻紙

かならず柵をかためて守り給ふべし。日あらず我うち出でて、敵のうしろを襲ふべければ、其時うち出でて戰ひ給ふべし。左右より挾みて討たんには、保昌が頭とり得ん事、袋の物を探らんより安かりなん。かく亂軍の中にて候へば、おほざうの文はまゐらせず」とて、懐より疊紙とり出でてわたせば、齊明とりて水にひたし見れば、しか〴〵の由しるして有り。まがふべくもなき保輔が手跡なれば、いよ〳〵心とけて、陣中にぞ留置きける。夜明けて梅丸所々見めぐり歩きて、あらかじめ謀をかまへたりける。その日もくれて、齊明、梅丸をまねきて酒などすゝめ、保輔が陣中の物語などせさせて、おのれも飽くまで醉ひてうち臥しける。しかるに子の時過ぐる頃、俄に陣中に火おこりぬと騒ぐ。齊明おどろき起出でて見れば、陣中四方に火燃えあがりたり。城中の者とよみさわぎて、うち消さんとするに、折ふし風あらく吹きて、炎さかんに燃上りければ、せん方なく我先にと門をひらきて迯出しぬ。保昌は四百餘騎に大手の攻口を圍ませ、手勢の中にて齊明をよく見知りたる兵八十餘人を勝りて、搦手を去る事二十町餘の間にて、こゝの田の畔、かしこの木蔭に、五人十人づつ伏せおき、一組に一人づつほら貝を腰に結ひつけ、齊明と見るならば貝を吹くべし、其時八十餘人の兵一度に寄せあひて生捕るべし

鈴鹿の御陣―伊勢國鈴鹿山なる保輔の營

五畿内諸國の大軍、今朝出陣の由其聞えあり。貴邊猛威を以て禦がるゝとも、多勢にてこれを圍まば、敗北に及ばん事一定なり。早く此寨を去つて、他邦に赴き生を全くして、後榮を計り給へ。保昌此攻口に在りといへども、叔姪のちなみ有るを以て、これを告ぐる者なり。

とぞ書きたる。齊明うち見るより、なんでふ保昌めが、我を引出さんと構へたるなり。いかで計におちいらんやとて、かの文を引さきて、同じく上差に結ひつけて射返しける。保昌見て、計ごと行はれず、いかにせんと愁ひけるを、梅丸すゝみ出でて、保昌が耳に口さしよせて、かう〳〵計らはばやといへば、保昌よろこびて、「さらば貴所に任せまゐらせん。かしこくしおほせ給へかし」と云ひかはして、ひそかに其計ごとをぞ行ひける。さて其日の暮るゝを待ちつけて、戌の刻とおぼしき頃梅丸陣中を出でて、齊明が柵に至り、門外にたゝずみて、「鈴鹿の御陣よりの御使なり。門をひらき給へ」といふ。城中疑ひてためらへば、梅丸かの燒じるしの札とり出でて、門のしきみの隙より投入れければ、さては味方なりとて、やがて門をひらきて入れぬ。梅丸、「ひそかに申せとの御使なり」といへば、齊明寢所に呼び入れて對面す。梅丸いひけるは、「保輔申して候は、

こしがらみ―腰ぬけ

いろめきて―敗け色が見えて

上差の鏑―箙に盛りたる矢の左方に差し添ふる二本の鏑箭

へて、「御軍勢にくはゝり候はんも、こしがらみの若者、なんでふ御役にか立ち候ふべき。たゞ召連れさせ給ひなば、よろこばしくこそ候はめ」といふ。保昌、梅丸を長押にいざなひ、「萬卒は得やすく、一將は得がたし。御邊我軍をたすけ給はんには、今度の合戰勝利うたがふべきにあらず」とて大きによろこびて、盃とり出でて、さまぐ\に饗應しけり。それより保昌が軍勢催促する間、爰に止り居て、日をえらみて出陣をぞしける。

○田村將軍

さても藤原保昌朝臣は、在京の武士四百餘騎を引率し、まづ齊明を討ちとらんと近江の國高島におしよせ、揉みにもうでぞ攻めたりける。賊徒は山野を家とせる命知らずのあぶれ者なれば、寄せ來る敵を物ともせず無二無三にふせぎければ、戰になれし京家の武士共も、すこしいろめきてぞ見えたりける。保昌此體を見て、今度の討手、某乞求めて罷向ひたるかひもなく、こればかりの賊徒のために數日をおくらん事こそ遺恨なれとて、計策をめぐらし、上差の鏑に一通の文を結びつけて、城中へ射入れたり。齊明ひらき見るに、その文にいはく、

待ちとり—待ち受け
牢籠して—逃げこもり居て

此頃其支度最中なり。御邊保昌朝臣に從ひて、賊徒を討取りて名を立てんとは思はずや」と宣ふ。梅丸かしこまりて申しけるは、「齊明はわたくしの敵にて候へば、いかで討取りたく存じ候を、嬉しき事を承りて候。たゞ御勢に加へ下さるべく」といへば、賴光、「我家人尾張國に住める者どもには、疾く觸流し遣したれば、彼等とりぐ〜に軍を起し攻上らんず。前後より相はさみて攻めんには、凶徒等みなごろしにせんこと日を過すべからず。われは内裏の守護にいとまなければ、今より都へ歸りなん。わ殿は保昌朝臣の營に至りて、とく軍に從ひ出陣すべし」と宣ふ。安世よろこびて、梅丸にむかひて、「我はかしこのかくれがに歸りて、薗生にも此由語り聞せて悅ばせん。めでたく凱陣の時を待ちて對面すべし」とて、いとま申して、安世はもと來し道へ引返す。梅丸は猶御前にありて、さまぐ〜軍の評定して、賜はりたる鎧うち著て馬に打乘り、保昌朝臣の館へとうたせ行きける。かしこには保昌待ちとり居て、「仔細は賴光朝臣の書簡にて承りぬ。此度の朝敵といふは、我弟保輔といふ者、ならびに剛なる齊明にて候。彼等狼藉いふばかりなければ、人民牢籠して安き事なし。これによりて某强に討手を請ひうけ罷下り候なり。よき計策おはさば御敎を蒙りたく」と、ねんごろに語らふに、梅丸も手をつか

養由基—楚の大夫、射を善くし、柳葉を去ること百歩にして之を射、百發百中すといふ
大悲者—觀世音
うつしの馬—乘替用の馬
さね—鎧の鐵の小板
高島—近江國

あやまたず、鵰は庭中にはたと落ちつ。人々、「射たり〳〵」と聲をあげてほむる。頼光殊に感じ給ひて、「飛鳥をかく射落しつるは、末代の養由基ともいひつべし。手練のほど、おそろしき迄におぼえたるはや」と宣ひて、庭に落ちたる鵰を見やり給ひて、「あはれ鳥を射させつるは、我あやまりなりけり。かゝるいみじき靈場にて、いたづらなる殺生しつる事、大悲者の御覽じ給はんもかしこし」と、御後悔の御氣色見えければ、梅丸頭をあげて、「おのれも其心つきて候へども、御諚で候へは、ぜひなく仕うまつりて候。但し死せざるやうに、いさゝか羽がひを縫ひたる計射て候へば、よも死ぬべくはおぼえ候はず」とて、走り寄りて矢を引きぬきければ、鳥は羽うちて、空ざまにのぼりて飛び行きけり。かゝる頓の事にさへ遠き慮りありけるよとて、人々こぞりて褒めのゝしりけり。頼光斜ならず感じ給ひて、うつしの馬の太くたくましきを庭に引出させ、御てづから、さねよき鎧に劍一ふり添へて、「是は當座の引出物ぞ」とて賜はりけり。さて仰せけるは、「おことが如き者、我郎等とすべきにあらず、公家へ奏聞をとげて、官爵は朝議にまかせなん。扨この度國々に蜂起せる賊等退治の宣旨蒙りたるは、我したしうせる藤原の保昌朝臣なり。日あらず打立ちて、まづ高島にこもり居る齊明を討ち取るべくと、

書―書經

詩―詩經

角のふくれ―萬葉集、卷第十六、「うましもの いづくあかぬをさかと等がつぬのふくれにしぐひあひにけん」

まゝき―眞卷弓、藤及び樺を卷きたる眞弓

雎鳩―鷲の類にして、山中の水邊に住み魚を捕りて食ふ

斯ばかりの角めきたる物ある事、聞きも及ばず」とて、梅丸が博識なるをほめ合へり。頼光かさねて、「此角につきて思ひ出でたる事あり。書の泰誓に、如崩其角といふ文あり。人に角あらばこそしか言ふべけれ。此文さとしがたし、汝説ありや」と宣ふ。梅丸こたへて、「厥は蹶と通じ候。角は詩に所謂麟之角の角なるべく、さらば額を地につくる事かと覺え候。既に文選に受化而蹶角と見え、漢書にもさる文字見えて候なり」と申せば、大きに興に入り給ひて、「年頃の疑一時にひらけぬ。角につきては猶問ふべき事あり。萬葉集に、角のふくれといふ詞あり。いかなる物ぞ」と宣ふ。「これはいまだ覺悟仕り候はず。但不淨の女を嘲りて詠みたる歌にて候へば、角のふくれは男陰のことなるべくやとも覺え候」と申せば、「さては、しぐひあひにけむといへる詞もおだやかに聞ゆ」とて、ますく梅丸が頓智をめでさせ給ひけり。さて御かはらけ數多度めぐりて、「弓は引くや」と宣へば、安世、「學問のいとまごとに、まゝきを射させて候ひき」と申せば、「ちと試みばや」とて、御傍なる弓矢とりて授け給ふ。梅丸手にとり拜して、庭に下り立ちて、「何をか仕うまつらん」といふ。折節湖水より雎鳩の羽をのして飛來るを見給ひて、「あれ射て落せ」と宣ふ。梅丸矢うちつがひ、しばしねらひかためて放ちけるに、

「にほひを風にまかせて」
召次—取次
寒温—時候の挨拶
かはらけ—土燒の酒杯
臥兒狼德—グリーンランド

やがて御前にぞ召されたりける。安世、梅丸をともなひ出でて、うや〳〵しく寒温を述べてかしこまれば、頼光、梅丸に目をつけ給ひて、「かれは何者ぞ」と宣ふ。安世答へて申しけるは、「此若者は、幼き時よりおのれが許に養ひ置きて、教へたてて候ひけるが、うまれつき賢しきものにて、文武の道よくあきらめ取りて候。君に推擧し奉り、ゆく〳〵は御家人の數にも加へさせ給はなんと、わざ〳〵今日召しつれ參りて候」と申せば、頼光ほゝ笑ませ給ひて、「器量骨柄いみじき若者なり。姓はいかに、名は何といふにか」と問はせ給ふ。安世、「かれは坂上を以て姓に呼び候へども、實は本姓にては候はず。名は梅丸とつきて候」と聞ゆれば、御かはらけ給はりて、安世とも時世の御物語どもあり。

さて御かたはらなる筥の中より、包みたる物とり出で給ひて、「これは丹波國なる山賤の持ちつたへつる物なりとて、人のあたへつるなり。鬼の角なりといひ傳へたれど、いかがあらん。汝鑒定せよ」とて、梅丸にさづけ給ふ。梅丸手にとりあげてつく〴〵見て申しけるは、「これは角にては候はず、西洋なる歐羅巴の西北に、臥兒狼德と申す所の候、そこの海中に大きなる魚の候。その魚の鰐の上に生ひたる一つの牙にて候。いと長き物にて候を、これはもとを切りとりたる物と見えて候」といらへ申せば、人々、「魚の背に

うしろめた云々—拾遺集「うしろめたいかで歸らん山櫻あかぬ

近江縣物語　巻之五

○石山寺

源の頼光朝臣と聞えけるは、清和天皇の御支流にして、御祖父六孫王經基王はじめて源氏を賜はりてより、代々朝家の御守として、忠勤おこたらせ給ふ事なし。此君武威の逞しきのみならず、和歌の道をさへ好み給ひ、下をあはれませ給ふ御心ふかくおはしければ、弓矢とるほどの者は、かゝる君も世におはしけりとて、草に風をくはふるごとくなびき從ひて、敬ひかしづき奉りけり。此頃盜賊國々に起りてさわがしければ、京都に止りおはして、四天王などいへるいみじき武士に仰せて、晝夜皇居を守らせ給ふ。此時御願望の事ありて、昨夜より石山寺にこもらせ給ひけるが、今日は客殿に入りおはして、湖水を眺望しておはします。庭のかたへに、遲れたる櫻のなごりなう咲きこぼれたるを御覽じて、「うしろめた、いかでかへらん山櫻、と詠めりしも、かゝる時なるべし」と、いたく興じ給へる折柄、召次の侍御前にまゐりて、安世まゐれる由を申せば、

そゝなかせば―
そゝのかせば

ては便なく候。但おもふ所候へば、見参に入り奉りて、賊徒誅伐の御支度などとくはしく承りたく存じ候へば、御供仕りて参り候ひなん」といふ。安世大によろこびて、「そこの親とたのまれし人も、今は世をすてて隠れ住み給へりと承れば、そこの成りいで給はんをば、よろこばしくこそ思ひ給はめ、いかでいなみうれひ給はんや。とにもかくにも御見参過して、おもひ定め給へ」といへば、薗生はさらなり、嫗も西念も共々すゝめそそなかせば、さらばとて装束著かへ、烏帽子著て出立つ。安世は具したる従者に盗人の縄とらせて、いさみ立ちてぞ打連れ行きける。

せしうへに、今日娘薗生をさへ奪ひとらんとせしは、言語に絶えたる悪人、返す〴〵不當のやつなり。よし今に思ひ知らせんず」とて、又盗人に向ひて、「おのれ此まゝ放ちかへしなば、此由常人に告知らせんに疑なし。さらばかやつ逃げかくれんも知るべからず、これによりて、しばしおのれをば繫ぎ置くぞ」とて、庭なる樹にくゝり置きて、又四方山の物語して居けるに、安世が僕はせ來りて、土に手をつきて云ひけるは、「御ありかを見失ひまゐらせて所々尋ね奉り候所、これなる門に御編笠の見えて候へば、これへ參りて候なり。知らせ給ふがごとく、「頼光朝臣にはよべより石山に籠りておはしますなり。疾く出立たせ給ひなん」と申す。安世かさねて梅丸にむかひて、「おのれ頼光朝臣とは、早くより文學の上にては師弟のちなみありて、したしく交らひてあり。昨日石山に詣で給へりけるに、おのれに語らふべき事あり、かしこにて對面せんとて、四五日さきに我かくれが迄使給はりつれば、今日出立つ道にて、思ひよらず人々に出遇ひぬ。いかにや梅丸ぬし、頼光朝臣は聞えたる武將にておはします。御邊おのれと共にかしこに至り、見參に入り給はなんや。さらば昇進し給はんよすがともなりぬべくや」といへば、梅丸しばし打案じて、「みやづかへ仕らんことは、親とたのみつる人に告げまゐらせずし

かやつ―きやつ

して顔を見れば、昨日やす川にて出であひし旅人なり。仔細ぞあらんと、猶引立てて安世を案内して宿りへともなひ、互に始終の物語して、しばし時をぞうつしける。安世盗人に向ひて、「おのれいかなる者にかたらはれて、娘をば率て行かんとはせし。つゝまず語れ。いはざらんには頸うちはなさん」と刀に手をかけて責むれば、盗人しを〳〵となりて、「何事をかつゝみ候はん。おのれは常に博奕を業として世をいとなみ候所、神崎なる常人といふ人にかたらはれて、昨日やす川に至りて、彼女人買ひとらんといたせしに、事たがひて候へば、ひそかに跡につき追行きて奪ひ來れと、常人殿安川に忍び居て下知せられて候へば、よべより此藪垣の中に隱れ居て候なり」といふ。安世又問ひけるは、「常人は、何とて神崎には歸り住みて居るぞ」といへば、「さん候、叔父なる人のたくはへ隱し置かれたる財どもを、こと〴〵く掘出して、同家にすまひて、今は左右なき長者となられて候」といふに、安世、梅丸に向ひて、「常人め、いかにして我うづめ置きつる所を知りたるにか、心得ぬ事なり。それのみならず、かれ伊賀の國なる我かくれがに入來りて、革籠ひとつ盗みて出行きたり。其中に、重代つたへたる大切の鎧一領ありき。たからどもは惜むにたらず、此鎧のみいかで取返してんと思ふなり。かやつ樣々の惡行

さよみ｜貲布、今さいみといふ

一日浮けて｜一日一杯に浮べて

り行けば、追ひつくべうもあらず、危きことといへばさらなり。斯かるに向ひなる方より、編笠きて、さよみの直衣かみしも著たる侍、のど〱とあゆみ来けるが、つか〱と寄りて、盗人が項かいつかみて動かさず。盗人、いだきたる薗生をすててふり返りて、拔打にせんとかゝるを、侍こぶしを持て胸のあたりを突きければ、たぢろぎよろほひて倒れぬ。やがて刀に巻きたる緒縄とりて、ひき括りつ。梅丸、西念もおひ〱かけ来りて、「御徳にて妻を取返しつ」とて、手をつき頭をさげてよろこべば、かの侍、「此女はわ殿の妻にてあるか」といふ。「さにて候。昨日賊営よりあがなひ得て連れかへりて候なり」といへば、侍扇のしりして、編笠もて上げてうち見て、「やゝ、そこは梅丸にてはおはさずや」といふ。「いかなる御人ぞ」といへば、「さて〱久しくて逢ひまゐらせし」といひつゝ、編笠とりたる顔を見れば、師とたのみたる橘安世なりけり。梅丸地にひれふして、「聞え奉るべき詞も候はず」とてかしこまる。薗生は、「父君にてわたらせ給ふか。なつかしうこそ」とて、取りつき泣く。安世も涙を一日浮けて、薗生が手をとりて、しばしためらひて物いはず。「さるにても、かしこくも賊営をのがれ出でて、梅丸にめぐり遇ひたる、まことに宿世の契あさからざりしよ」とてよろこぶ。梅丸盗人を引立てんと

あかちさまに―假初に

あさ木の柱―節のある木の柱

竹近く云々―後撰「竹ちかく夜どこ寢はせじ鶯の鳴く聲聞けばあさいせられず」

ふぐり―陰嚢

慾の心にては候はず」といふに、人々ます〱感じ入りぬ。さて嫗と薗生を一つ所に臥さしめ、梅丸、西念は屛風へだてて臥しける。かくいふは彌生の末なりけり。此家はまづしき山賤の住家にて、主は京にさしたる用ありとて、梅丸に後を預けて、あからさまに彼處に行きたれば、外に人もなし。かゝる草葺の荒れたる宿ながら、夜あけぬれば、春とて鶯などの庭に來て、はなやかに鳴くめり。人々は此頃のつかれに困じたれば、朝寢して起も出でず。薗生はうれしさのあまりに、え寢もやらでありけるが、疾く起きて遣戸明けて、あさ木の柱に背なかおしつゝ、荒れたる庭うちながめて、「竹近く夜床寢はせじ」など口ずさみ居たるに、藪垣のそよろと鳴れば、塒を出づる烏にやと思ひて見やりたるに、さはなくて、あやしき男の頰かぶりしたるが、藪おしわけつゝ入來て、物をもいはず薗生を抱きて行かんとす。薗生聲をあげて、「盜人こそあれ。おう〱」と叫べば、人々驚き起出でて見るに、盜人薗生を小腋にはさみて走る。西念あかはだかの儘にて追來て、盜人の腰に手をかけて、やらじと引止めつ。盜人足をあげてほうど蹴たれば、ふぐりにあたりて横ざまに倒れぬ。梅丸刀とりて追ひかけしが、一町あまりおくれぬ。薗生聲をかぎりに、「盜人のとりて行くなり。たすけ給へ〱」と呼ぶ。盜人は飛ぶ計に走

さくりもよゝと泣けば―しやくりあげて泣けば

よらず」といふ。これを聞きて嫗よゝと泣出して、「生きがひなきは我身にこそあれ。かくざまに老い行く迄子といふもののあらざれば、常に夫と語らひてさるべき人を養子となし、いかで家をもつがせばやと思ひてありしに、養子のことはさて置きて、盗人のために家をも財をもおし掠められ、且俘とさへ成りて、寄るべなく成り果てしは、又たぐひなき憂き身にこそ。わ君たち夫婦寄りあひて語り給ふを聞くにも、あはれなる身は道きどころなき心地し候」とて、さくりもよゝと泣けば、梅丸いさめて、「某かくて候ふ上は、子なしとな思ひ給ひそ。遠からずして、御親族の人々にも遇はせまゐらすべし。心づよく思されよ。さるにても今は名のり給へ」といへば、嫗、「なかなかに昔語せんも恥かしくやかしく候へば、又こそついであらば聞えめ。さきにも申せしごとく、氏もなき田夫の妻なりと思せかし」といふに、子細こそあらめとて、あながちにも問はずしてやみぬ。その夜嫗いひけるは、「今日吉日なれば、婚姻のさかづきし給へ」といへば、梅丸頭うちふりて、「此事いまだ父に知らせ聞えざれば、わたくしに取行ふべからず。殊に對面せで別れ奉りし母人のなくなり給ひて、いくばくの月日もたゝざれば、さる事は思ひも寄り候はず。薗生どのをあがなひ出せしは、師なる人の恩にむくゆるためにて、我情

母代—母に代りて後見などする人

今はあたなれ—「形見こそ今はあたなれこれなくば忘るゝ時もあらましものを」

なし給へりとや。さらば我爲にも姑の君にてこそおはせ」と居なほりて、姫を拜す。梅丸がいへるは、「この度の事母人のをしへ給はずば、いかで夫婦ふたゝび相逢ふことあらん。これひとへに母の御めぐみなり」と、頭をさげていへば、姫、「人々のしか宣ふうへは、今より後われ母代と名のりてん。いかに夫婦の人々、さりとていたく敬ひ給ふな」といへば、夫婦いよ／＼頭をさげて拜しけり。薗生腰なる包取出でて、「これはわ君よりしるしにとて賜へりしを、しばしも身をはなたず持ちてこそ候ひしか。今はあたなれと覺えし時も候ひつれど、ふたゝびめぐり遇ひまゐらするまではと、盗人等が目をさへ忍びて、かくし持ちて候ひつ」とて梅丸に見すれば、姫、薗生が賊營にありて、巴豆を用ひて病婦といつはりし次第など、くはしく語りつゞくるを聞きて、梅丸西念も感じあへりけり。さて、「父君いづくにおはす」と問へば、薗生、「さるさわぎにまぎれて迯出で給ひつれば、御ゆくへは知りまゐらせず。されどしるべあれば、もし伊賀の國にや住ませ給ふらん。あが君疾く父君に尋ねあひ給ひて、盗人共たひらぎなば、ふたゝびもとの家に歸り給ひ、父のあとをつがせ給へかし」といへば、梅丸、「否、それがしは別に父とたのみ奉れる人ありて、かしこの家を繼ぐべければ、安世どのの家相續せんことは思ひも

沖つの島に云々―古今集、藤原忠房、「君を思ひ沖つの濱に鳴くたづの尋ね來ればぞありとだに聞く」

にや沖つの島に鳴く田鶴の、尋ね來ればぞ有りどころをも知りまゐらせつ」とて、さまざまいたはりて顏うち見て、「いかにおもとは斯うあやしき病になやみ給ふぞ」と問へば、蘭生、「斯かるにつけても聞え奉るべきこと候」と云ひつゝ、かたはらなる嫗を見つけておどろきて、「いかでおとゞはこゝに來ておはせし」と云ふ。嫗こたへて、「わらははおもとより先にこゝにまゐりて候。さても斯う思はずなる所にて逢ひまゐらするも、宿世の緣とこそおぼえ候へ。さてまづ不思議におぼえ候ふは、おもとは主の君には、はじめて見參に入り給へるなるを、いかでなれ〳〵しくふるまひ給ふにか」と問へば、蘭生、梅丸をゆびさして、「さきにおとゞに物語して、別れにし夫と聞えつるは、此君にておはすなり」といへば、嫗手をうちて、「われは心もなく御上を語り出でたりけるを、なかなかにまことの契おはしける御なからひにこそ有りけれ。まことは我を母とうやまひ給ふ事のうれしければ、その報せんばかりに、おもとの節義を背かせまゐらせ、こゝに呼びむかへてんと計ひしは、やすからぬ罪なりと、かたへは心苦しくおもひてこそ候ひしか。斯くまことの夫君にめぐりあひ給ひしは、おもとの操のたゞしきを神佛の感じ給ひて、ためしなき緣をふたゝびむすび給へるなるべし」と語れば、蘭生、「さては親子の契

かたみに―互に

さるべき人二人貸したびてん」といへば、「安きことぞ」とて、士卒二人よび出でて、「汝等此袋を舁きて、かれが宿まで送り行くべし」といへば、士卒朸を袋のむすび目にさし入れて擔ひ上げつ。梅丸いさみ立ちて引添ひて行く。西念はしおほせつる事嫗に知らせんとて、先に立ちてはしり歸りける、これや妹背の山ぐちの、わりなき中の初なるべき。嫗は門の外に待ちつけ居けるに、西念があへぎまどひてかけ來るを見て、「いかにや、ともなひ來たまへりや」と問へば、西念聲あげて、「嫁の君やがておはすなり」といふ。嫗、「あなめでた、歩行にてやおはす輿にてやおはす」と問へば、「いな、袋にのりておはす」といひさして、かたみに吹出してわらひあへり。程もなく梅丸袋をになはせ入來て、まづ二人の士卒に錢とらせて返しやりて、疾く袋の口うちひらきて、然るや然らずや見んとて、むすび目に手をかけて解かんとするに、あやにくに結びめ解けず。心せけば袋のまへに寄りて、「いかに袋の中におはします人、御身は近江國神崎里なる安世どのの御むすめにや」と問へば、袋の中より、「しか宣ふなるは梅丸の君にておはすや」といふ聲、まさしく違ふべくもあらねば、手の舞ひ足のふみどをおぼえず。西念寄りてむすびめを解きはなちて袋をひらけば、薗生まろび出でて梅丸が袖をとらへて、うれし泣に泣きしづむ。梅丸も、「け

かたひきて―贔屓して

すさまじ氣なる顏―不興氣なる顏

ふづくみて―憤りて

刀をさめさせて手こまぬきて、しばしうち案じて、「よきはかりごとを思ひ得たり。汝等あらそふ事なかれ。かゝる時ひたすらかたひきて言ふべきならず、我にうるはしき法あり」といふ。皆々、「いかなる御掟に候」と問へば、彼男いひけるは、「此袋麻ぎぬをもて作りたれば、外より内は見えざれど、内にありてすかし見れば、外はよく見えわたるなり。今汝等三人ならびて立ちて居よ。袋の中なる女に見せてえらばせてん。誰にもあれえらびにあたりたる者は、「此女をつれて歸るべし」といへば、皆々、「これは理ある御おきてなり」と、三人ともかたへに並びて立ち居り。かの男聲をあげて、「いかに袋の中なる女人に物聞えん。此ならびたる男どもの中、わ君が心にかなひたらん人をさして教へ給へ」といへば、袋のうちよりやさしげなる聲にて、「我は右の方に立ちたる青き衣きたる人こそ」といふ聲あてやかに美しげなり。梅丸聞くより、「我をさしていへり」とて、をどり立ちてよろこぶを、二人の男はすさまじ氣なる顏して物をもいはず、頭かきて佇み居り。梅丸おもひけるは、こゝにて袋をひらきて出しなば、此二人の者共いよ〱うらやみふづくみて、横ざまなる事などいひ出づべくと心づきて、懐より銀取出でて紙につゝみて、盗人等がまへに置きていひけるは、「此袋このまゝ擔はせてまかりたく存じ候。

のあらそふを見て、われこそ買はめと思ひけれど、先よくこゝろみんとて、袋の後にいたりてさぐり見れば、嫗がいひしにたがはず、腰に物をさして居れば、嬉しくてをどり出でて、「此袋よそ人には買はせじ。おのれ二十貫にもとめ候はん。賣りてたべ」と手をすれば、盗人うち見まはして頭かきて、「三人の買主ありて、代物はたゞ一つあり。いづれに賣りてよからん」といへば、三人とも聲をそろへて、「たゞ我に賣りてたべ〳〵」と、かしましくいひて爭ふ。一人の盗人頭かたむけて、「袋ひとつを十貫文と定めたれば、今更つのりて錢を増したる者に賣らんもいかゞなるべし。とにかくに木戸を先にくゞりたる男に賣渡しやるべきなり」といへば、かの男よろこびて、袋にゆびさして二人に向ひて、「此女人我手に入りぬ。さこそ羨ましからめ」といふに、梅丸身をもだえて、「いかで汝にわたすべき。もし我に讓りあたへずば、おのれ其儘におかんやは」とて、せき立ちければ、盗人腹だちて、「こやつ尾籠なり、われ〳〵が前にて無禮なるふるまひすなり。此頃ひさしく人をころさざれば、手のかゆき心地する。おのれ二つになしてくれん」と、刀ひき拔きてかゝる。梅丸うなじを伸べて騒がずして居れば、かたはらの盗人感じけるにや、刀ぬきたる手をとらへて、「彼はいみじき若者なり。殺さんはなか〳〵心なし」とて、

釘ぬき一括

等がもとにて、かの美人とねんごろに語らひし事をいへば、梅丸また云ひけるは、「たとひさやうの人ありとも、袋の中に籠めあれば、いづれを其人とさして買取らん。又もあやまりて異人をたづさへ來らば、人笑へなる事ならん」といへば、嫗、「それにこそ目じるし候へ。かの美人常に尺ばかりなる物を大事として、腰のあたりにさしておはせば、よくさぐりて見給はんには、おのづから誤ること候はじ」といふに、梅丸驚きて、「何と宣ふ、かの女は腰に尺計の物さして居りとや。さらば我心にも思ひあたれる事候へば、たゞ是よりやす川へ行きて買取りてまかりなん」とせきたつ樣に、西念、「おのれも御供仕りてん。袋こそには晝寢して待ち給へ」と、共々そゝぎさわぎて、裾ひきかゝげ、やす川をさしてぞいそぎける。さてかしこに至りて釘ぬきの外に西念をまたせ置き、梅丸一人入りて見れば、旅人二人ならび居て、女を買はんといふ也。盗人等一つの袋を荷ひ出でて、「代物は賣りつくしつ、今日はたゞ此袋たゞ一つあり。しかるに三人の買人あり。此袋三つにきりて賣らましや」といひて笑へば、一人の男すゝみ出でて、「おのれは最初に門を入り候へば、おのれに賣渡し給ひてん」といふ。今一人の男、「かれが十貫文に買はんとならば、おのれは十五貫に買ふべければ、おのれに賣らせ給へ」といふ。梅丸人々

よすが―寄り頼む人、妻

といへば、嫗驚きたる顔に笑をふくみて、手をあはせて、「さても思ひかけぬ事を宣ふ物かな」とて泪をながす。梅丸、「これ戯れごとにはあらず、今日より母人と呼び奉らん」とて、手をとりて坐を譲り、頭をさげて禮をなしければ、嫗、「あなかたじけなや、いかで」ととゞむれば、梅丸うつぶし伏してたゝず。嫗心におもひけるは、天下に斯くなさけある人こそおはしけれ、そもいかなる業して、此人の恩に報はましと思ひめぐらしけるが、ふと心づきけるは、我盗人のもとに囚となりし時、空病つくれる美しき人のありし、彼をもとめて此人の妻となしなば、聊恩をむくゆるに足りぬべくやと思ひて、梅丸にむかひて、「わ君は御妻もたせ給ふにや」と問へば、梅丸、「いまだ定れるよすがなし」と答ふ。嫗、「さらばかしこにいみじき美人の候。黄金にかへて率て來り給ひて、御妻となさせ給はなん」といふ。梅丸、「さる美人いづくに候」と問へば、嫗、「此美人かたち計には候はず、心ざしもうるはしく、およそ此大和國に又二人となき烈女にておはす。疾くやす川に行き給ひてあがなひて來り給へ。もし明日にいたらば、よそ人の手に入りなん。其時悔ゆともかひなからん」といふに、梅丸、「盗人にとらはれて、才をあらはし操を守りしとはいかなる事ぞ。語り給へ」といへば、嫗事の仔細おほかた語りて、盗人

なめげに―不躾に
おとゞ―あなた

奴婢の如くあしらはんも心苦し。いかにせまし」といへば、西念、「かゝる旅の空にて老媼一人かしづきなんこと便なくは候へども、縫物洗物などあつかはせんには、一段のことにて候へば、留め置き給ひて然るべくや」といふ。梅丸ふたゝび思ひめぐらして云ひけるは、「我親とたのみつる左衛門殿は、今鰥夫にておはしませば、此媼をまゐらせて御そばづかへとなし奉らん。御年もかの媼とは似あはしくおはしませば、老人の御なぐさめともなりなん」といへば、西念がいへるは、「かの媼老いたりといへど、うちつけに婚姻めきたる事など物語し給はゞ、俄なることにて、承引かざる事も候べく」といふ。梅丸、「然かし、先左衛門殿の御上はつゝみて、媼に語らひて見ん」とて、媼をちかづけていひけるは、「御身年ふけぬる人なるを、若輩なる我等が、なめけに呼立てん事心ぐるし。御身はいかに思すにや」といへば、媼「などてさは宣ふ、媼は心のゆかんだけみやづかへ仕うまつりて、飯をもかしぎ水をもくみ候べし。下女とおぼして使はせ給へ」といふに、梅丸頭ふりて、「我にくらぶれば、おとゞの年は一倍にやなり給ふらん。親子といひても似げなからず。おのれ幼き時より母に別れて、頼みまゐらする人もなければ、今より御身を仰ぎて、我母人となしてつかへ奉らんと思ふなり。いかに許し給ひてんや」

袋こそ―こそは人を呼びかくる時に添ふる詞

を取りて宿りへぞ歸りける。かしこには西念待ちつけて、門に立ちて居たりけるに、思ひよらず梅丸老いたる嫗を連れて歸り來ければ、驚きて、「いかなる事ぞ」と問ふ。梅丸しか〴〵の物語して、先嫗に夕餉などしたゝめさせ、能くいたはりて、さて、「いかなる人ぞ。氏はいかに、名は何と宣ふ」と問へば、嫗、「かゝる身となりて、名のり聞えんもなか〳〵に恥かしくおぼえ候。もとより筋目なき賤の家に生立ちて候へば、氏も何と申すやらん知り候はず」といふ。「さるにても御名をば名のり給へ」といへば、嫗しばしうち案じて、「盜人等が袋に入れ置きて候へば、我名をば今より袋とめされ給へかし」といふ。西念、「こは興ある御名なり」とて、その夜より嫗をさして、袋こそとぞ呼びける。かう假初に呼びつけたる名の後々世中におしうつりて、老女をあがめて御袋と呼びならへるは、此時ぞ始なりける。その夜はうち休みて、[illegible]夜あけて、梅丸ひそかに西念に云ひけるは、「かゝる不用の嫗をつれ來りて、いかにともせん方なし。但よそ人の心なき者は、盜人に欺かれしを腹立ちて、怒りを此嫗が身の上にうつして、うち罵りさいなみなどもすべかんめり。其はいとあるまじき事なり。欺きたるは盜人がたくみにて、嫗が身にあづかれる事にあらねば、いかで聊かかれを怨むべきや。たゞし彼嫗いたく年老いてあれば、

まなむすめ―愛娘
おもて歌―傑作
佛つくるあかに云々―萬葉集「佛つくるまそほたらずば水たまる池田のあそが鼻の上をほれ」
在原の朝臣―業平

乙娘、おのが詠歌は、いにしへの衣通姫の流ぞ。詠み置きたるおもて歌は、それよく〳〵、

　　梅が枝に木傳ひて鳴くほとゝぎす聲きく時ぞ秋はかなしき

如何によかンめり〳〵」といひつゝ、常人が顔を見て、「これがわが男なりとや、あたら男の色くろく、疱瘡のあとさへ多かり。佛つくるあかにたらずば、此あその鼻の上やほらまし」といひさして、うつぶし伏してよゝと泣きいだす。常人、「こやつ物狂にこそ」と逃出でんとするを、盗人等引とらへて、「女を捨て行かん者は、頭うちおとす定めぞ」と、刀に手をかけてひし〳〵とす。常人せん方なく、しぶ〳〵に女が手をとれば、「さる見惡き人を夫とすべきや」と頭ふりて引戻す。常人も持てあつかふを見て、盗人等繩を持ちきたりて、女を常人に負はせて、繩もてくる〳〵とくゝり著けて、「さは足のむきたらん方へ去ね」とて突きはなす。常人は梅丸が思はん所も恥かしく、面目なげによろ〳〵と立上れば、女はやりかに聲うちあげて、「伊勢物語の繪にこそ斯る姿をば書きたれ。それには引違へて今日の在原の朝臣こそ、こよなう鼻低くおはすなれ」といふ。常人火出づるばかり顔あかくなして、「物ないひそ」と女が足を抓みつゝ、打負ひて出でて行く。ありとある盗人ども、みな手うちたゝきて笑ひあへりけり。梅丸もせん方なくて、嫗が手

さだ過ぎたる―年ごろを過ぎたる
眼ゐすゝどく―目つきするどく

なく動きはたらきて騒がしければ、よも薗生にてはあらざるべし、右なるはのどかに静まりて見ゆれば、もし尋ぬる人にもやと思ひて、「この袋おのれ買ひとり候ひてん」といへば、腹巻せる男價をあらため、受取りて、「疾く袋をあけて出せ」といふ。梅丸、あはれ薗生にてあれかしと、心のうちに念願して、袋の口をひらきて見れば、薗生には似もつかざる、年六十にあまりて、髪は白かねの針をうゑたる如き、老いくちぬる嫗にてぞ有りける。梅丸あまりのことに詞も出でず、尻居にどうど坐してあきれ居たり。嫗うちしをれたる顔もてあげて、「わ君心をくるしめ給ふな。われも親族の人あれば、日を經ずして迎へに來りなん。さる時は、今日の身代一倍となして報ひまゐらせん」といへど、梅丸は耳にも入れず、「さてしなしたり〳〵」といひて、大息つきて居り。常人遙に見遣りて、したり顔に笑みわらひて、ふところより錢十貫とり出でて投出し、かたへの袋のもとに寄りて、「我戀人疾く出で給へ」といひて、袋の口をあけんとするに、まだ出でもやらで大きなる聲して、けら〳〵と打笑ひて、手うちたゝきてをどり出づるより早く、常人に抱きつきつ。常人おどろきて見れば、さだ過ぎたる女の丈高く痩せたるが、眼ゐすゝどく、そこら打見まはしつゝ、「我を誰とか思ふ、あやめの郡の大領がまなむすめ、

伽多—天竺の僧伽多、羅刹國に到りて鬼女に追はれし話、宇治拾遺物語にあり

今日のいとなみ—其日々々の活業

うたてげなり—厭はしげなり

外面は夜叉云々—唯識論「女人地獄使、永斷佛種子、外面似菩薩、内心如夜叉」

口は耳もとまで廣ごりて、上下の齒は水せく杭の如く、色はさながら鐵をのべたるが如し。昔僧伽多を追ひかけ來たりし羅刹女といふ物も、斯かりけんとさへ思はる。這出づるより彼男に向ひて、「わ君われを買ひとりて給へるとや。おのれは丹波の國の山かげに生出し狩人の娘にて候。思ひかけずかう賣りわたされて、所々へめぐらひて、過ぎし春の頃は、四條の河原に三十日ばかりありて、鬼女と呼ばれし者ぞかし。我を妻とし給はゞ、所々率てあるき給へ。見る人ごとに錢を投げあたふれば、今日のいとなみに足りぬべし」といひつゝ、手をとりて寄りそひたる顏つき、さながら鬼々しくうたてげなり。男は見るよりあなたを向きて、ふるひて有りけるが、「我大君の國にしも、かゝる物の住みて候かな。これは不用なる物なれば、たまはらで歸り候ひなん」といへば、腹卷したる男奥より出できて、「買ひ得たる女をすて置きて去なんものをば頸をきれと、親方の仰せなり。おのれ率て行かぬにや」とのゝしる。女いとゞあまえて、男が手をとりて、外面は夜叉なれども、内心は菩薩ぞかし。いざ人目なき所に行きて、思ふこと語らはゞや」とふるふ男の手をとりて、おのれが袖にかいくゞみて、鵞のごとき足どりして、引立ててぞ出でて行きける。梅丸は殘りたる袋に目をつけて守り居けるが、左なる袋は、はした

守り居れば—見つめて居れば

けぢめ—區別

て來れるなるべし、もし彼に率て行かれなば本意なからん、いかにもして我引連れてかへらばやと思ひ居けるに、常人も又梅丸を見つけて、彼何の望有りて女を買はんとするにやと、不審く思ひけり。されど互に知らず顔つくりて詞をだにまじへず、遙にひきへだてて坐し居たり。しかるに奥ざまより大きなる袋を荷ひ出でてならべ置きつ。心得ぬ事かなと守り居れば、商人に似せたる盗人云ひけるは、「賣りわたさん代物は、かう袋の中に籠めて置きたり。各目につきたらんを引取りて行くべし」といふ。常人も梅丸もおなじ心に思ひけるは、袋の中もし薗生にあらずば、もとめ歸りても詮なからん、さりとて買ひ得ざれば、ふたゝび逢見んてがかりもあらじ、もし宿世の契淺からずば、買ひとりたる袋の中に薗生が居らんも知るべからず、とにかくに先もとめて見んと思ひて、價を問へば、「昨日迄は人々のえらびに任せてひさぎたれば、價も尊かりしなり。今日は袋の中にこめ置きつれば、價に甲乙のけぢめなく、各袋一つにて錢十貫文に賣りわたすなり」といふ。常人が傍に居たる男つい立ちて、「おのれ此中なる袋を買ひとらん」とて、錢を出して、さて袋の口を諸手にさゝげて、こなたなる方に持てきて、むすび目ときて引出す。中より出でたる人を見れば、二十ばかりの女の、目は金椀のやうに光りて、

美悪の沙汰―美醜の品さだめ

と書きて、札立てたりければ、老若男女つどひ来て、おの〳〵錢いだして、妻子を引きつれてぞ歸りける。およそ三日ばかりのほどに、やす川にて賣出しつる女ばら六百人ばかり、おほかた皆賣りつくしけるとぞ聞えし。しかるに、何方よりもさして買はんといふ事なき女四五人ぞ殘りたりける。多褰丸いひけるは、「此女ばらながく養ひ置きなば、おほくの米をくらひ費しなん。さりとて打捨ててんには、軍令を破るに似たり。いかにせばよからん」といへば、一人の盗人云ひけるは、「かゝる者、たれかは錢にかへて引連れ歸り候べき。それがし只今思ひより候は、兵粮をたくはへ候袋どもの、むなしきがあまた候。その中へ彼女ばらを一人づつうち籠めおき、顔かたちを見せず賣りわたし候はんはいかに」といへば、「げにいはれたり。さらんには美悪の沙汰に及ばず、買ひとりて行くべければ、明日より此おきてに定むべし」とぞ議定しける。こゝに梅丸は都をはなれて、石山のあたりに來りけるが、盗人どもの女ばらをひさぎ賣る由を聞きて、蘭生もし其中にありもやせんと、西念法師をば宿りにとゞめて、たゞ一人やす川をさしてぞ來りける。釘ぬきの中に入りて見るに、吾よりさきに來りて、買ひもとめんといふ者二人うづくまり居り。目をつけて見れば、一人は常人なり。かれ一定蘭生を買ひとらんと

鏡山—近江國蒲生郡にあり
釘ぬき—櫓

近江縣物語 巻之四

○ふくろのうば

こゝに多衰丸といふ盗人は、鏡山のあたりに陣屋をまうけ、めぐりには釘ぬきしわたし、堅固にかためてぞ守り居たりける。此陣にては、擄とせる女ばらを一つに籠め置きて、身の代を出さん者には賣りわたしやるべきさだめなりけり。されど盗人の住めるあたりは、おそろしがりて人も寄り來ざりければ、やす川のほとりに假の小屋つくりて、盗人等常ざまの商人のごとく出立ちて、かの擄へつる女ばらをこゝにて賣りひさぎける。小屋のまへに札を立てて書きつけ置きけるは、

このたび行方なくなり給ひしうば娘たち、いとほしき事におぼえ候へば、おのれ親方の人々より乞ひうけて賜りて、やしなひ置きて候。ほしと思さん人々は、身の代の錢もて來て贖ひ給へ。すなはち返しわたしまゐらすべし。あふみの國のあきびと某。

て、歸り來て其由を告げければ、常人おもひけるは、今かく盗賊どもはびこりたる世に、安世いかに武術に練じたればとて、まさにやすく通り行きなんや、さだめて盗人に殺されぬべし、これは我爲にいみじき幸なりとて、一人よろこびてぞ暮し居たりける。

わきくそ―狐臭、わきが

あやしき音―屁

あぶれ者―無頼漢

ん」とて、手をやりてさぐり見るに、無かりければ、「芋がしらは如何にしつるぞ。さてはわぬし早う喰ひつくしけるにこそ」といふ。女、「いかゞは、籠に入れて、數二十ゆで持て來つるなり。おのれたゞ七喰ひたり」といふ。男、「われは三つこそ喰ひたれ、さては十ばかり鼠のもて去にけるならし。くゞつをさへ持ていにたるは、なみ〳〵の鼠にはあらじ」といふ。さて二人ともに帶ときて赤裸になる時、わきくそにや、あやしき匂のそこら立ちわたりて、顏に吹きつくるやうなれば、常人たまらず、「あな臭」といへば、女も男もおどろきて、「あ許し給へ〳〵」といひつゝ、脱ぎたる衣とりて迯出づるものか、ころび倒れて、あやしき音をさへ後の方にて高くならしつゝ、足をそらになしてぞ走り出行きける。常人おもはず聲うちあげ、笑ひて、さて鎧かきいだきて、神崎をさしてぞ急ぎける。かしこに至りて見るに、さいはひに家はもとのまゝにて立ちてあり。心あてに掘りうがちて見れば、案のごとく財どもあまたあり。それより崩れたる所など修理しつくろひて、おのれ家主と成りて住まひけり。さるにても、伊賀の國なる安世が歸り來らば、むづかしかりぬべければ、いかにもして安世をうしなはゞやと思ひて、あぶれ者を語らひて伊賀の國へつかはしけるに、安世は妻をのこして何方へか出行きけると聞き

むくつけく—醜く
くゞつ—竹籠
あいだれたる聲—あまえた聲
松山に云々—古今集「契りきなかたみに袖をしぼりつゝ末の松山波越さじとは」
ひゞらかし—動かし

の方に入りて、寝はらばひて居たり。子の刻計にやと思ふ頃、表に人の足音すなり。われを追ひきたるにやと、片陰のくらき方にそひて覗き居たるに、さはなくて、男女手ひきあひて入來たり。これは此あたりに住める山賤の子の、親などの目を忍びてひそかに語はんとて、つれだちて來るなりけり。入口の方は星明にて、いさゝかあざやかなり。常人目をつけて見れば、我にはおとりたる見にくき男の、みじかき衣きて居り。女もむくつけく平めなる顔に見ゆ。何にかあらん、くゞつに盛りたる物互にうち喰ひて、女あいだれたる聲して、「わぬしは我を思はじ」などいへば、男、「あな冥加、鎭守の神をかけてかはりはせじ。松山に波うちて、ほら貝の天上するとても、わぬしをおきて外心つかはんや。これ見給へ。わぬしの手づから織りておこしつる布をば褌となして、身をばはなさずかきて居り」などいふ。常人をかしさを念じて聞居けるが、われも物のほしかりければ、やをら這ひ寄りて、かれが持ち來るくゞつの端を、およびて引寄せて見れば、芋頭をゆでて持て來たるなりけり。男も女もかたみに物いひかはして、口びるひゞらかし居ればこれを知らず。常人が芋くらふ音の高く聞えければ、男心づきて、「此家には鼠あンなり」といふ。常人鼠啼をして見すれば、「さは鼠なり。持てきたる物かれに取られな

しやつら―他人の顔を罵りていふ語

るや。人のふところに物のあり無しをさとり知らで、盗人のなりはひ出來なんや。とく出して見せよ」といふ。しぶ〳〵に懐をさぐりて、黄金つゝみたる袋とり出でて、始終を語り聞せけれど、耳にもいれで、こぶしもて常人がしやつらを強く打ちて、「おのれわれに隱さうとする志のにくければ、此黄金おのれにはやらぬ」とて、おのが懐へおし入れ、「さらば疾くあゆめ」と、道をいそぎて走り行きける。拐陣につきて、常人心におもひけるは、盗人といふ者は、聞きしにまさりて恐しき物なり、われにしたゝか辛きめ見せて、たからは己一人してとりつ、かゝる所に長居せんは無益なり、神崎には數の財ども埋め置きたりと、叔母なる人語られき、かしこに行きて掘出して、のこりなく我物にせばや、但し今日革籠に入れて奪ひ來し叔父人の鎧は、なみ〳〵の物にはあらじ、彼ぬすみて出でて行かばやと思ひて、心をくばりて居けるに、金剛はさらに心つかず。調伏丸がもとに行きて、夜ふくる迄酒飲み居て歸り來ず。よきひまぞと思ひて、小盗人等が眠り居るを幸に、革籠打ひらきて鎧とり出し、包に入れて背に負ひて、跡をも見ずしてはしり行きける。凡そ三里ばかり來りけるが、息きれて術なければ、しば〳〵憩はんとてそこら見まはせば、麥などつみ置きたる穀倉あり、戸ざしも無ければ、引明けて奥

出でて行きけり。道すがら思ひけるは、此黄金百兩ばかりもあるべし、いかで蘭生を尋ねいだし、あがなひ得て我妻となし、のこりの黄金をもて東の方へ下らばやなど、又も横ざまなる心をおこして、ひとり笑してあゆみける。凡そ道のほど二里あまり來りぬと思ふに、しげりたる森の中にて、「常人々々」とよぶ聲す。入りて見れば、金剛二郎か、の革籠をかたはらに置きて、打休みて居り。たがひに無事をよろこびて、「扨いかで此革籠、ふたゝび取持ちて來給ひし」といへば、「汝をくゝりて責めさいなむ間、革籠は庭のかたへにありしを、まぎれ入りて盜みつるなり。かばかり振舞はざれば、よき盜人とはいひがたし」といふに、身の毛さへ立ちて恐しかりける。さて革籠の蓋ひらきて見るに、いみじき鎧一領、ほかに樣々の財ども多く入れてあり。常人いひけるは、「この鎧は我叔父の先祖よりつたへたる物とて、殊に大事にせる物なり。よきたからを取り得給へり」といふ。それより革籠をば常人に負はせ、そこを出でて四五町あゆみ行きけるに、金剛ふりかへりて常人をつく〴〵と見て、「おのれが懐のおもげに見ゆるぞ。黄金もちて來るにや」といふ。「いかでさやうの物もちて候はん。辛うじて命一つひろひて歸り候物を」といへば、金剛眼を大きになして、「おのれ金剛ほどのものを、たばかりいつはらんとす

御かうじ—御勘當

て候。此後盗人のまじらひを絶ち候うて、一向に心をはげまし行ひをあらため候はんず」といふ。「さては本心になり給へるならん。うれしき事なり」など、翁も喜びてそゞろに涙ぐむ。安世が妻、袋につゝみたる黄金持出でて、常人が前にすゑ置きて、「これをもて世のたづきすべき料となし給へ。知らせ給ふごとく、むすめ薗生も今に行方知れず。さだめて盗人共の中にとらへられて有るなるべし。御身こがねもて彼を償ひ出し、ふたゝび連れ來り給はば、安世殿のよろこびはさらなり、たれ〳〵もうれしき事、これにましたる事もあらじ。さては御身の勘當もゆるさせ給ふべき事あきらかなり。盗人共ほろび失せなば、一家うちそろひて、再びめでたく本の近江に歸り住むべし。財共は穴をうがちて入置きたれば、よも盗人どものさとり知るべき道理あらじ。とにかくに御身の行ひによりて、ゆくすゑも安かりぬべし」といへば、翁も、「よくこそ思ひより給ひたれ。薗生の君の御上しおほせ給ひて、率ておはさば、翁とりもちて、御かうじは許させ給はんやうに計らふべし」といへば、常人うなづきて、「とにもかくにも叔父君の御前、よきにつくろひ給はるべし。薗生どのの事は、命にかけて取りかへし參るべし」とて、黄金取りてふところに押入れ、「明けはなれなば人もぞ見る。御いとま給はりなん」と立上りて

湯ひかせ—浴みさせ

のどめて—こらへて

べし口して—べそかきて

に、我眼に違はざりけり」といへば、あるじの翁走り來て、「さては甥の殿にておはしけるにや、知りまゐらせぬ事とて、無禮をいたし候」とて、いそぎ繩とかせて、泥にまみれし衣著せかへさせなどするを、安世制して、「さなし給ひそ。彼めはうまれつき不當の奴なり、生けおくべき者にあらず。いかにおのれ思ひ知りたりや」と云ひてにらむ。安世が妻も聞き知りてまどひ來て、ひたすら安世をなだめて、伴ひて入りぬ。あるじの翁常人をいざなひて庇に連れゆき、飯など食はせ湯ひかせなどして、樣々とあつかふ。安世ふたゝび常人を呼びすゑて云ひけるは、「おのれ生けおくべきならねど、人々の樣々といさめ物し給へば、しばし我怒をのどめて、ながく勘當して追ひはなちやるなり。今より心をはげまし行ひをあらため、人並に成りたらんには、ふたゝび對面する期も有りぬべし。さらずば叔姪のちなみも今日をかぎりと思へ」と云ひすてて、障子引立てて入りぬ。翁常人にむかひて、「叔父君の腹立たせ給へること道理あり。此後心をあらため給ひて、御勘當許りんやうに計らひ給へ」と、さま〴〵と言ひ聞かす。常人はべし口して居たりけるが、暫くありて頭をあげて、「人々の思さん所面目もなく覺え候。今日迄あらぬ事ども仕りつれど、叔父君の御いかり、人々のいさめを承りて、まことに夢のさめつる心地し

柴漬—魚を捕る爲に柴を束ねて川などに漬け置くを柴漬といふより、其の如くぐるぐる巻にして水中に沈むるをいふ
そゝや—すはや
しはぶき—咳ばらひ
あざみ—あきれ驚き
たづき—業

人は堀に落ちたり。「引出せ」とて、熊手などてんでに持來りて、ゐい聲を出して引上げつ。やがて引きくゝりて、はひりに立ちたる柳の樹にしばりつけつ。さは一定殺されぬべし、さても詮なき盗人に組して憂きめ見る事よと後悔して、おめおめとなりて居たるに、主とおぼしき翁いできて、つくづく見て、「こやつ盗人には臆めたる奴なり。革籠をとりかへせし上は放ちて追ひやれ」といへば、若者ども、「いかで盗人をとらへて、たすくべき道理候はん。夜あけば柴漬となして、底ふかき川にしづめてん」などいふ。いよいよ心よわりて、頭うなだれてあるに、番せる男ども俄に、「そゝや」などさゝやきて膝うちなほし、うつぶして居れば、あなたにしはぶきの聲して、のどかに歩み來る人あり。男ども皆頭もたげず居れば、常人おもひけるは、これは此所の長などにや、我を殺しに來るなるべしと、わなわなとふるひて居るに、此人まぢかく來りて、紙燭とりてつくづくと打守り見るを、目も合せずうつむき居たるに、此人聲をあげて、「おのれは常人にてはあらぬか」といふ。驚きて見上げたれば、叔父なりける橘安世なり。あざみ且よろこびて聲あげて、「たすけ給へたすけ給へ」といふ。安世にがにがしき氣色して云ひけるは、「おのれたづきなきまゝに盗賊に組しけるなるべし。年頃うしろめたき者に思ひたりし

丈六かきて―あぐらをかきて
如法闇夜―まつくら闇
松―たいまつ

やう人心地つきぬ。「我にしたがひて來れ、ゆめ聲な立てそ」とて、さきに立ちて母屋と思しき所にいたりて、何事するにかしばし探り物すれば、よく固めたるとざし安らかにあきぬ。「おのれはこゝに待ちて居れ」とて、常人をば簀子に置きて、たゞ一人奧をさして入りぬ。しばし有りて大きなる革籠を持出でて、常人がかたはらに置きて、又奧へ入りて、此たびは酒肴など持來りて、簀子の上に丈六かきて、常人にも飲み食はせ、さて革籠を常人に負はせて、堀には板をわたし置きつれば心やすしとて、又先に立歩み行きて、門おしひらかんとするに、錠さしてあり。金剛腰なる鐵杖とりて打ちたゝく。此音に目さまして、門のかたへなる家の翁おき出でて、窓より覗き見れば、あやしき者の革籠かたげて出づるなり。盗人にこそと思ひて、拍子木とりて打ちたつれば、奧の方にてもこれに合せて、拍子木うちたてて騒ぐ。金剛門の戸をおしあけて、「し損じつ。疾く迯げよ」とて、鳥の飛ぶやうに走り出でて行きぬ。常人はおもき革籠は負ひつ、不案内ではあり、板橋かけたる所はいづくなるかとすかし見れど、如法闇夜のことなりければ、あやめもわかず、心はせかれて足も定らず、たぢ〳〵として堀の中へずぶりと落入りぬ。家の内には數十人の若者ども走り出でて、松うち振りてのゝしりけるが、走り來て、「盗

竹のうら—竹の先

なえ／＼くたくた—勢の抜けたる貌

なる由、かねて聞及びて候。かしこへ行かせ給はなん。おのれも其所をよく存じ候はざれど、かしこに至りて、晝のほど尋ね歩き候はば、知り得ざる事候ふまじくや」といへば、金剛聞きて、「それ然るべし。いざ／＼かしこへ立越えて、いみじき所得してん」とて、例のごとく常人を具して出行きけり。其夜亥過ぐる頃或一村に至りけるに、大なる門立ちて、かたはらには竹の藪垣しこめたる家あり。金剛云ひけるは、「財ありげなる家なり。入りて見ん」とて見まはしたれば、前に一丈ばかりの堀ありて、橋引きてあれば渡るべきやうなし。金剛ふところより鉤のやうなる物にながく綱つきたるを取出でて、かの竹の上に投上ぐれば、竹のうらに鉤はからみつきぬ。金剛持ちたる綱を引寄すれば、竹はうつぶしにしなひなびくを、たぐり寄せて、竹のうらを手にひかへて、「これに取りつきて入れよ」といふ。常人いふまゝに竹のうらに取附きければ、金剛さはとて手をはなつ。ふとく大なる竹にてありければ、ゆさ／＼と動きて、俄にあなたざまに起返りぬ。常人目くるめきて、藪垣の中へほうど落入りぬ。金剛又綱をなげて竹のうらを引寄せ、これにすがりて門のうちへ入りぬ。さて竹藪の中に入りて見るに、常人はなえ／＼くたくたと成りて、打倒れて息をもせず居り。面に水吹きかけなどして引出しければ、やう

ら、降を乞ひに來りたる志のあはれなれば、とゞめ置きて板風呂の水など汲ますべし。盗人ども常人が腕をまくりて、針のさきして怪しき文字を彫り、いれずみしてさて引出でて、湯屋のまへにぞ据ゑ置きける。今は盗人のしるしさへ附きたれば、よそに行きて人まじらひすべきにあらずと思ひて、夫より日毎に風呂の水など汲みて、あさましき業していとなみ居りけるとぞ。

○いもがしら

それより常人は、盗人が陣に居りて、湯をたきて日を過し居けるに、金剛二郎といふ者、いかなる事にか常人をかはゆがりて、おのが一騎にて盗みしに出づる折々は、必ず供に具してあるきけり。金剛或時云ひけるは、「此あたりの民どもの財は、おほかた殘りなく取りつくしつ。今よりいづくへ行きて盗せまし」といへば、常人いひけるは、「我叔父なる橘安世といふ者、伊賀の國なる乳母の家に落行き候と承りぬ。彼もとより家富みたる者にて候ひつれば、よき財など今にたくはへ持ちて候はん。又かの乳母が家もゆたか

拷器—拷木、拷問すべき人をしばりつくる木

無慙—恥知らず

事、口惜しくこそ候へ」と、さも實しやかに打語りて、「これは奪ひたる品にて候」とて、二つの包調伏丸が前にさし出せば、調伏丸頭を包みたる結目引きとき、打見てにたく／＼と笑ひて、「やおれ者ども、こやつ引くゝりて拷器につなげ」といへば、ばら／＼と寄來て、「御諚であるぞ」とて常人をくゝりあげつ。「こは如何に、さるべき賞をば賜はらで、など斯くはし給ふぞ」といへば、調伏丸うち笑みて、「無慙の愚者かな。これ渡邊が士卒の頭なりや」といひて、足にて常人がまへに蹴遣るを、よく見れば女の頭なり。さては夜目に見たがへて、あらぬ頭をとりて來れるよと思へば、消えも入るべき心地して、面あかくなして口ごもれば、調伏丸かさねて、「おのれが奪ひ來れる物よく見てあれ」とて、包ひき明けて投出すを打見れば、頭なき人の軀なり。見るより膽つぶれて、例のわなゝきふるひ出す。「金剛二郎きたれ」と呼べば、むと答へて出づる人あり。見てあれば、よべ出合ひたる旅人なり。金剛二郎うち笑みつゝ、「いかに吾を忘れたるか。これ己がくれたる物ぞ」とてなげ出したるは、その時きられし我髻なり。常人魂うせて生きたる心地せず。「おのれが剛膽をはかり見んとて、かく構へたれど、かばかり臆病づきたる奴とは思はざりし」とて、一度にはと笑ふ。調伏丸いひけるは、「此奴いたくのかひなしなが

うまご―孫

切斑の矢―鷹の尾の上下黒く中白き羽にて矧ぎし矢

逸足―すばやく走ること

まさなう候―卑怯に候

呼はり候は、われ〳〵を誰とか思ふ、清和天皇の御うまご、六孫王經基の君より三代にあたりて、日本無雙の名將と呼び奉る攝津守源の賴光朝臣のみうちに、四天王と呼ばれつる渡邊の源二綱」といふを、傍なる盜人打消して、「源二綱は內裏の守護とて、夜行警衞にいとまなければ、此あたりへ來べきにあらず」といへば、常人、「物を聞きはてずして咎め給ふことやはある。その綱が叔母の家にありて、菜つみ水くみ飯かしぐ一騎當千の中間男に、茨木辛人といふ者なり。征矢一筋まゐらせんと呼はる。夜目にはしかと見え候はねど、たしかに重籐の弓に、切斑の矢つがひたると覺え候。さてきり〳〵と引きしぼり、ひやうふつと射たる矢を、某刀にて打落し、端武者にむかひて、名のるに及ばず、太刀の斬れ味うけて見よと、眞甲にかざし打つてかゝる。敵も拔きつれ斬りむすびけるが、陽炎いなづま水の月、こゝにあらはれ彼方にかくれ、飛鳥のごとく驅けめぐりて、手いたく働き候へば、かなはじとや思ひけん、逸足出して迯行くを、まさなう候辛人どの、返しあはせて勝負あれと、跡目について追ひかけつれば、さすがに恥をや思ひけん、とつて返して打つてかゝるを、やり過してちやうど斬る。灸所にや當りけん、よろめく所をのつかゝり、首搔き切りて候なり。されども三人の奴ばらを討ちもらし候

丑二つ―今の午前二時半
腹卷―腹に卷きて背に合すやうにせし鎧の一種

包背におひて、思ひけるは、人の頭をとりて來といひつけたれど、いかでさる物の手に入るべき、よし〱此頃盗人どものみだれ入りにし所には、かならず頭の二つ三つは落ち散りてやあらん、それひろひ取りて欺くべしとて、所々あるきて見まはれば、人の死骸などあまたあり。雲透にすかし見るに、頭ばかりころびてあるも見ゆ。これこそと思ひて、其まゝ包につゝみて引提げて、調伏丸が陣へと走り行きける。頃ははや明方に成りて、東の空あかくなりて烏なども鳴きつれて飛歩く。常人陣の中に入れば、盗人ども見て、「親方の疾く起出で給へり」といふ。そこにためらひて居るほど、ゆゝしげなる男の鎧脇ばさみて、奥より出來るを、「何ぞ」と問へば、「あれはそこの如くよべ降參したるが、ゆゝしき高名して、よき財に頭添へて持ちきたれば、引出物に鎧賜はりたるなり」といふ。さてはしすましぬ、われも鎧一領の主に成りてほこらばやと思ひて居るに、「今參こなたへ」といふ聲す。いそぎ入りて見れば、調伏丸鋪革のうへにねまり居て、「いかに得物はありつるか」と問ふ。「さん候、よべ仰せを承りて、かしこの松原へ行きて候ひしに、丑二つ計とおぼゆる頃ほひ、直垂に腹卷したる者四人、いかめしげに松ふりて通りて候を、聲をかけて候へば、彼等たちどまりて弓矢つがひて、まつ先なる男の高やかに

はくそ笑みて―にこ〱笑ひて

蒸物にあひて腰がらみ―抵抗力なき弱者に對し暴威を揮ふ喩

寄れば、いとゞおそろしくて舌もこはりたれど、せめて聲をあげて、「おれはひはぎなり」といふ〱ふるひて居るを、旅人見て、「何といふ、ひはぎなりとか、さもあるべし。などてさは慄ふぞ」といへば、おくれを見せじとて、「これは武者ぶるひとて、猛き人のする事ぞ」といへば、旅人ほくそ笑みて、「おのれはひはぎの初山踏ならん。殺してくれんず」とて、刀ひき抜きてふり上げたるに、膽心もうせて、のけざまに倒れてふたゝび起上らず。額に手をあてて、ふるひつゝ拜むを見て、「蒸物にあひて、腰がらみせんも無益なり」とて、引起して、「身の貧しさのせん方なさに盜みするにや」といへば、「さん候〱」といふ聲も、齒のねだにあはず、「さては哀の事なり。今よりひはざの業をやめて、入道して命つなぎてあれ」とて、常人が髻かいつかみて、刀してふつとおし切り、「此包おのれにくるゝぞ、猶同類の者もぞある」と問ふに、息きれて答すべくもあらねば、手をかきて見すれば、「さては同類の者はなしとや、さるにても、おのれさばかりのかひなしにて、ぬすみして世をわたらんと思ひ立ちぬるこそ愚なれ」といひつゝ、刀を鞘にをさめて打笑ひつゝ、松とりて彼處をさしてぞ行きける。常人うしろを見送りて、立たんとすれども腰たゝず、這ひよりて松の樹にすがりてやう〱立ちぬ。さてかの貰ひ得たる

て、己これにあり、とゞまれといひ給へ。必ずおそれて、持ちたる物など皆すてて迯げて去ぬるものぞ。それを追討にせば、頭とりて歸らんこと安かりなん」と教ふ。「さらばしおほせて後見參に入り候ひなん」とて、そこを出でて、教へられつる松原に行きて、人か松が根に尻うちかけて居る。此頃盜人の起りたちたる時なれば、誰かはとほらん、あはれ旅人がなげだにふつに見えず。若しむなしく歸らば如何なるめにあはんずらん、あなたより火のかげ見ゆ。さは人こそ來れ、お來よかしと、欠伸うちして居りけるに、あなたより火のかげ見ゆ。さは人こそ來れ、おのれいかでと刀に手をばかけつれど、そゞろに五體わなゝゝとふるひ出でて、踏みたる足だにとゞまらぬを、念じてたゝずみ居けるに、よくは見えねど、松ともせし旅人の丈高く見えたるが、ながき刀さして、裾を鶴脛にかゝげて、のどゝゝと歩みて來るさま、よのつねの人とも見えず、たくましげに見ゆ。されど其まゝに見過すべきにあらねば、ひはぎ此所にあり、と呼ばんとすれども、聲たゝず。こは口惜しとて、せめて呼はれどもふつに聲出でず。いとゝゝはかなげなる聲して、「やおれゝゝ、盜人の大將軍こゝにあり。持ちたる包我許に置いて去ね」と、ふるひゝゝいへば、かの男ちかづき來て、「何事いふにか、聲ひきくて我耳へいらぬぞ。もし旅人にておはすにや、何ぞゝゝ」といひて近

ふつに―絶えて

鶴脛―衣のたけ短くして脛の現れ出づること

ひはぎ―引剝、追剝

なり出でんも―立身せんも

言受して―承諾して

は、かの盗人の攻め來るさわぎに恐れまどひて、あわてふためき迯出でて、あたり近き大野まで走り行きけるが、たくはへたる物一つもなく、いづくへ行かんにも不便なり、いかゞせんとつく〴〵と思ひめぐらしけるが、今かく盗人どものはびこりて國々にみちたれば、我ごときもの如何にともせん方なし、今降を乞ひて、かれが手下となりなば、後後なり出でんも安かるべし、と思ひ定めて、盗人どもの集り居る所に行きて、「いかで御軍勢の内にくはへ給はなん。いかなる奉公なりとも仕りてん」といへば、盗人ども、「いみじく申したり。さらば親方のもとに率て行かん」とて引連れて、幕引まはしたる陣のうちへ伴ひて入る。こゝに居るぬすびとの大將は調伏丸とて、これも袴垂が股肱とたのめる賊なり。常人を見遣りていひけるは、「我軍中に定めたる例にて、はじめて降參のものは、さるべき財を盗みとり、かつ其主の頭きりとりて持て來べき掟有り。いそぎ此二つの物とりもて來よ。さらば我軍中におきて一卒の數にくはふべし。疾くいそげ」とて追出しぬ。常人案にたがひながら、言受して立出でける。もとより臆めたる男なれば、此事を聞くより色もなくなりて、がたく〴〵とふるふを、盗人共をかしがりて、「さのみな思ひなやみそ。かしこの松原に行きて、道行く人を待ちふせて、まづ聲をあらゝかになし

かどひて―かどはかして

まめなる翁―忠直なる翁

近江縣物語　巻之三

○ひはぎのうひ山ぶみ

橘の安世は、近江の國にありて世をやすくいとなみ居けるに、おもはず盗人共數百騎にておそひ來りければ、ひとまづ免れ去らんにはしかじとて、妻が手をとりて途もなき所を踏みわけつゝ、まよひ出でたりける。さてもむすめ薗生はいかに成りし、盗人のためにとらへられしに一定せり、あはれあたら花のすがたを、むくつけき山風のかどひて連れ行きけることと思へば、ひたすらに足もすゝまず。さるは霞ならねども、これもわりなきほだしなるべし。兎まれ角まれ、さるべき住所もとめて、むすめが行くへものどかに探り知らんとて、しるべあれば伊賀の國にたち越えける。かしこに安世が乳母の夫なるもの、農夫ながら家富みて、こゝろざしまめなる翁ありければ、尋ね行きて、しか〴〵と語らひけるに、たのもしく承引きて、萬かひ〴〵しくもてなしあつかひけるにぞ、やや心やすまりて、しばしは憂をもなぐさめける。これはさておきて、安世が甥なる常人

て、大軍にて籠り居れば、たやすく討取るべきならず、いかで計策をかまへて亡ぼさばやと思ひける。さて、「御親族の人々はいかに」と問へば、「これは皆都の中に住ませ給へり。都は頼光朝臣の守らせ給へば、それにおぢて、盗人ども入り來らざれば、皆つゝがなくおはします」といふ。さて其夜はかの翁が許に宿りて、明くれば都に入りて、事の樣よく見とりつ。「此ついでに、安世君、薗生の方の御ゆくへをも尋ねさせ給へ」と西念がすゝむるに從ひて、又近江の方へと立越えけり。

簀子—縁

つとめて—翌朝

ろして出して候へば、瓶子のさきを我口にあてゝ、とく〳〵と飲みほして、息きれて術なかりしが、少しさわやぎぬと申して、馬の草食むほど、簀子に尻かけてぞ候ひし。かれが申して候は、今宵我ともがら、此わたりの左衛門とかいふなる者の家にうち入りて、寶どもうばひて今歸らんとするなり。かゝる時には、汝等がごとき貧しき物こそ、幸にまぬかるゝなれと笑ひて申す。うち聞くより胸おどろきて、我むすめの事きづかはしくて、人をころし給へりやと問ひて候へば、たゞ女一人ころしつと申す。いよ〳〵心ならず、いかなる女をころし給ひつやといへば、老いたる女なりき、わが主の齊光どのの寶のあり所責め問ひ給へば、答をだにせざるばかりか、返りて樣々のゝしりたれば、にくい奴とて、頭うちおとし給へりき、かの左衛門が妻などにや、著たる物などもけしうはあらざりきと申しすてゝ、馬ひきて出行きて候ひし。さて我妻の嫗をも起して、やすき心もなくゐて候ひしに、御館のあたりに火いできて、一時計過ぎてしづまりて候ひき。つとめて參りて見候へば、御家の人々少々あつまりて、御骸をばこゝに葬り奉りき。我むすめは如何に成りにけるやらん、其夜より行方なく成りて候」と語りもあへず、聲をあげて泣く。さては御方をころしたる盜人は齊光にてぞ有りける、かれ今は高島に柵つくり

疊紙―懐紙、鼻紙

はせ給ふはいかなる人ぞ」といふ。「おのれは左衛門殿の御うちにつかふる今参なり」といへば、「さぞ候はん、翁は、むすめなるものを彼御館に奉公に出したるゆかりにて、常にたち入りて候へば、御館の人々はよく知りて候」といふを、「よき人に出合ひたり。北の方はいかに成り給ひし」と問へば、翁しわがれたる聲して、盗人の御頭とりて持行きて候。御骸は、かしこの藪かげに葬りて候なり」と敎ふ。ともなひて入りて見るに、かたばかりの塔婆立ててあり。うち見るに先涙ぐまれて、「さても左衛門殿は、仁德そなへし人にておはすを、その御妻と聞ゆる人の、かう思はずなるめに逢ひ給ひし事、なげきてもあまりあり」とて、ひれふして涙おとせば、西念は火打とり出でて、疊紙なる香たきくゆらし、ふし拜みつゝ、ともぐ衣の袖をぞしぼりける。梅丸老人にむかひて、「此御館に入來りし盗人の名をば聞き知り給へりや」といへば、老人、「不思議にその名を知りて候。子細は、其夜翁が脊戸の方俄に物さわがしく候ひつれば、何事ぞとて出でて見候へば、鞍おきたる馬の口とりて、いかめしき男の立居りて、おのれを見て、いかに此馬に食ますべき草やあると申して候へば、おそろしさに、刈取りたる草ども取出でてつかはして候へば、又酒あらばいだせと申して候。せんかたなく、神に奉りたる瓶子をお

こうじ―困じ

いかにー呼び掛くる詞

ず。先問ひまゐらせんは、觀音の賜へる物とていたく大事にし給ふは、いかなる物にて候か」と問へば、法師水晶の玉の如き涙をはら〳〵と流して、「おのれわかき頃は、あらぬ僻業して世をわたり候ひし。思はざるに觀音の夢に入り給ひてかの一品を得てより、心をあらためて、今は隨分の修行者と成りて候。これはなが〳〵しき物語にて候へば、又こそ聞え候はめ。さぞこうじ給ひつらん。疾く休ませ給へ」とて、枕とり出でて、薄らかなる衾出してうち著せ、法師もかたはらに寄りて臥しぬ。明くれば飯疾くしたゝめて出立たんとするに、法師もとも〴〵旅よそひするを、とゞむれど聞かず。梅丸に引きそひて立出でぬ。道すがら盜人どもの居あつまれる所あれど、かの燒じるしの札出して見せつゝ、事なくとほりて都にぞ著きける。都にはいみじき武士ども、晝夜おこたらず警衞し歩きて、用心嚴重なれば、さすがに盜人共もはひり來ず。嵯峨野のあたりに行きわたりて見るに、家居は見えず。盜人ども火をはなちけるなごり、あさましき曠野と成りて、物問ふべき人だに見えず。そこら立廻らひ居たるに、夕暮のほど、七十計の翁、杖にすがりたるが來合ひたり。梅丸聲をかけて、「いかに老人、嵯峨の左衛門殿の御館の跡はいづくぞ」と問へば、老人つく〴〵と見て、「見なれまゐらせぬ人の、かの御館をと

はひり―門より玄關までの間
榾―薪に用ゐる木の切端、伐株

法師が庵これより一里ばかり候へば、具し奉りて、今宵一夜とゞめ參らせばや。いざ給へ」といふに、「さらば仰にまかせてん」とて、連立ちて行く。さて峠をつたひ山を越えて、かしこに至りて見れば、大きなる山のもとに小き庵つくりてあり。あたりは松杉などひまもなく生ひしげりたれば、外よりは庵の屋根も見えず、さすがに細き道あるをめぐりて、はひりの方に入りて、錠ひらきて伴ひ入る。法師火をうちて御燈ともし、榾くべてあたらす。さて冷えこほりたる麥の飯を椀に盛りて、蒸物にしたる菜をすゑて出しつ。梅丸、「おもひかけぬ御もてなしに預り候」とて、飯したゝめ居り。西念は首に懸けたる一品を、御佛のまへにすゑ經よみ終りて、火のほとりに來りて、「さても不思議の命たすかり候事、謝し奉るべき詞も候はず。さるにても、かく盜人のはびこり横行せる頃、いかなる事候て都には上らせ給ふ」と問へば、梅丸ありし事ども語りて、「都の有樣をも伺ひ、かつ嵯峨野のあたりへも行きて、くはしき事をも問ひ明めたくて上るなり」といへば、「さて〱感じてもあまりある御振廻かな。都ははじめて上らせ給へば、案内も知り給はじ。法師がすみかより都へは程も近く候へば、かしこの事はよく知りて候。今日の御むくいに、御供して都にのぼり候なん」といふを、梅丸、「さる事は思ひもより候は

しきだい—色代、挨拶

大德—僧の敬稱

御德にて—御陰にて

鰐の口—危地

ふにつきて、おのれこゝかしこ搜しもとめ候へど、寺々の法師ばら皆迯失せて、一人もある事なし。此法師かならず物書くべかンめれば、兩人のぬすびと目と目を見合せて、引連れてまゐらばやと存じて罷りこして候」といへば、「さては棟梁の許の人にてこそ有りけれ。さらばたゞ率ておはせ」とて、刀を納めければ、梅丸しきだいして、法師が手をとらへて引立つるに、法師はわなゝき震ひて足もたゝず。梅丸わざと荒らかにふるまひて、「疾くあゆめ」とて、法師が手を肩にかけ、引きかづきて行く。法師引かれながら、「否、盗人の書記とはならじ。たゞ殺せ〳〵」と呼ぶを、三町ばかり引行きて、「聲なてそ」といひて、法師を地にすゑて語りけるは、「おのれまことは盗人には候はず。故ありて都へのぼる者にて候。大德の危きを見たるより、御命すくひまゐらせんと、かりに同類の者と見せてたばかりて候なり。盗人よも來る事はあらじ。これよりいそぎ行かせ給へ」といへば、法師、「さては有りがたき人にこそおはしけれ。これも觀音のし給へるなるべし。さるにてもいかなる事にて、割符めく物をば持たせ給ひし」といふに、梅丸しかじかの樣子を語りて、盗人にもらひつる由をいへば、法師涙ぐみて、「御德にて鰐の口をのがれ候事、此世ばかりの事とはおぼえ候はず。おのれは西念と申す世捨人にて候。

篋―旅行用の荷物を入るゝ竹匣
旅籠―旅行の時の荷物を入るゝ器
小冠者―青二才
けやけくも―めざましくも
今參―新參者

ぐりて伺ひ見けるに、ぬすびと兩人ならび居て、一人の法師をとらへて、物うばはんとするにぞありける。梅丸松かげより覗き見れば、法師手をすりて、「御佛も照覽あれ、篋も旅籠もたくはへぬ貧しき老法師にて候。ゆるさせ給へ」といへど、盗人等承引かず、「おのれ首にかけたる物こそあやしけれ。それ出して見せよ」といふ。法師、「これは觀世音の賜びつる物にて候へば、ふかくをさめて、人にも見せでたくはへ置きたる物にて候。御覽ぜんは益なき事なり」といへば、「こやつ、惜しげにいふこそ、一定たからには極まりたれ。おのれ出さずば目に物見せん」とて、長き刀ひきぬきて、法師が目さきへつきつくるを、「たとひ命はめさるゝとも、此一品は見せまゐらせじ」といふ。「かれ命にかへて惜しといふなれば、いみじき物なるべし。息の根とめてん」とて、刀ふり上ぐるを、梅丸いとほしと思ひて、「しばし〳〵」と聲かけて、松かげよりをどり出でけるを、盗人見て、「なでふ小冠者めが、けやけくも出來りつるかな。さまたげせば、ひとつ刀にかけて此世のいとま取らせん」といへば、梅丸ふところより、燒じるし捺したる割符取出でて、盗人がまへに投げおきて云ひけるは、「おのれは袴垂の君につかうまつる今參にて候。吾君の御仰せには、我陣中物書く人なくて事たらず。さるべき法師あらば率て來れと宣ふ

うしろみ―後見

いさや―否

せ給ふ。親たちはおはしますや。男もち給へりや」と問へば、薗生涙を拭ひて、「ふたおやも侍ふ。又夫と定りたる人も候ひつれど、いまだ枕をだにかはさで行きわかれて、在所も知り候はず」といへば、「あはれの事や。そも住み給ひし所はいづくぞ」と問ふに、「神崎の里」とこたへて泣出す。嫗背をなでさすりて、「わらはとても擒の身にて、はかぐしき事は候はねども、あまりにいたはしければ、心のゆくかぎりはうしろみし參らせん。こゝろづよく思ほせ」といへば、薗生手をあはせて泣く。嫗、「さてもいかなる事にて、かゝる病にはかゝり給ひし」と問へば、「いさや、盗人の攻めくるなりと聞きて、樣々と思ひめぐらして、いかで此身を汚さずして、夫にもめぐり會はなんと思ふより、はかりごとを設けて、かう病者のかたちと成りて候」と、事の樣くはしく物語しければ、嫗手をうちて、「かしこの御はからひや。おもとの樣なる心ばへは、女にはためしあらじ」とて、嫗も又身の上を語り出でんとする折柄、盗人等戸をおしひらき來りて、「親方の仰にて、汝等をば多衰丸殿の陣へおくり遣すなり」とて、嫗をも薗生をも、引立てゝぞ出行きける。此人々の身のゆくすゑは、後々の巻に書きつくべし。扨かの梅丸は、行きくて近江の國なる大野にさしかゝりけるに、松かげにわめく聲しければ、ひそかに後の方にめ

しきなみに―頻に寄せ来る波の如く續けざまに

力山を拔き云々―項羽「力拔山兮氣蓋世、時不利兮騅不逝、騅不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何」

ほとく―殆んど

と共に向ひて云ひけるは、「我みづから、天下にならびなき英勇とほこれりしかど、たゞわづか二度ばかり瀉したるに、たちまち百年の翁とはなりにたり」といひて、大息つきて、「今はせんかたなし。我此女と縁なきなんめり、疾う〳〵彼をばさきの姫と諸共に、多襄丸が陣におくりつかはして、賣りわたすべき女ばらの中に入れおくべし。ふたゝび我前にな出しそ。あれ〳〵又しきなみに腹のいたむなる。又厠に行かんずるぞ。人々寄りてたすけよ」とて、郎等どもの肩に手をかけて、やうやくに立上りけるが、ほそき聲して、「あはれ力山を拔き、氣世を蓋ひたりしも、かゝる時はいかにせん」とて、女が方をうち見やりて、「汝をいかん、汝をいかん」といひて、なごり惜しげに打見返りつゝ、かづかれて奥の方にぞ入りける。のこりたる盗人等薗生を引立て、かの姫を籠めおきたるひとやの戸をひらきておし入れ、錠さしてぞ出行きける。薗生身のあぢきなさを思ひつづけて、さめ〴〵と泣き居たるを、姫すり寄りてなぐさめけるは、「などてさは歎き給ふ。御身ほと〳〵盗人の妻と成り給ふべきを、さいはひに免れ給ひつ。憂きが中のよろこびとは思さずや」といへば、薗生やゝ頭をあげて、「いかなる御方とは知りまゐらせねど、ねんごろに問はせ給へる、うれしうこそ」と答ふれば、姫、「おもとにはいくつにかなら

もこよひ—匍匐して

て來ん」とて、物さわがしく奧ざまへ走り入りぬ。薗生は、おそろしき中にもさすがにをかしくて、ひとへに此藥のしるし見するなりと思ひて、心のうちに佛神を念じゐたり。夜叉丸ふたゝび出來て、「いかなるにか、俄に痢病といふ病にかゝりたり。郎等ども疾う疾う醫師を呼びきたれ。一つには我此痢病をいやし、二つには此女人の腫れたる病治させなん。やおれ郎等ども」と呼べば、一人の盜人すゝみ出でて、夜叉丸が顏を見あげて驚きて、「あれ見給へ人々、我親方のかほの俄に腫れふくれて見ゆるはや」といへば、ならび居たる盜人どもうち見て、はゝと笑ひ出す。夜叉丸手をあげておのが面をさぐり、叉手をうちかへしく見て、「さてく」といひて、聲うちあげて、「手さへしたゝかに腫れわたりたり。此病人にうつるなりと、女が告げたりしは誠なりけり。早くも斯うざまに我身にうつりぬる事よ」といひさま、兩の手して腹うちたゝきて、「あら痛やく。腹のうちなる蟲の、五臟六腑をことぐく喰ひさいて、寸々になすにこそ。あな堪へがたしく。ふたゝび厠にのぼりてん」とて走り入れば、ならび居たる盜人ども、かつ笑ひ且腹だちて、「此女め、いみじき病を我親方にうつしつる。おのれいみじき罪人なり」などいふほど、夜叉丸犬のあるゝやうに、高這に這ひもこよひ出來て、はかなき聲音して、ぬすび

稲舟の—古今集、東歌「最上川のぼれば下る稲舟のいなにはあらずこの月ばかり」

いもじ—鑄工

甘露—天酒ともいふ

げなる聲して、「みづからはことなる病にかゝりて候ふ。此病近づき寄る人にうつりて、からきめ見するなり。必ずあたりへな寄り給ひそ」といへば、「なでふさる事かあらん。よしや少々うつりたらんも苦しからじ」といひて、引寄せてつと抱く。女、「あだ〳〵しき御心にだにおはさずば、稲舟の」といひて口おほへば、夜叉丸はうつし心なく、たましひ飛んで大空をかける心地しつゝ、いもじが鞴をうごかすやうなる鼻息して、「なにとかなにとか」といひてすり寄れば、薗生ふところの内よりかの巴豆を取出し、自ら密に握り居たるを、「さても此手のうつくしさよ」といひて、舌を出してかい甜りて、「あなうまや〳〵、甘露もかくこそ」などいひたはれて、猶ねんごろに甜り終りて、人めをも知らず膝の上に抱きのすれば、薗生、人こそ見れとて押しのくるやうになして、兩手に夜叉丸がつらを押へて、かの巴豆をおし塗り〳〵するを、おのれを愛すとおもひて、よろこびて云ひけるは、「今日より此女人、我妻とさだめてん。盃もて來や」など呼ばはりて、とりあげて二つ三つ飲みて、脇息により居て、ひた〳〵と薗生が顏を守りつめて居たりけるが、俄に面をしかめ腹をおさへて、「あな堪へがたし。蚘蟲の起りて腹の痛むぞ。あな痛あな痛」とて、立上りて腰をかゞめて、女に向ひて、「しばしこゝにあれ。われ廁に行き

ゆるしの色―許色(禁色に對す)、衣服の染色にて、紅、紫の淺き色

けしうはあらぬ―惡くはなき

べし」とて、引立てさせて出しぬ。扨、「此ほかに捕へたる女はなきか」といへば、「此女ばらの外に、病に煩ふわかき女一人さふらふ」といふ。此夜叉丸額はれて口おほきく、鼻の穴は空ざまに向ひて、髭がちに見ぐるしき男ながら、いみじき色好にてありければ、わかき女ありと聞くより、大によろこびて、「さる者いかで見せざりし。疾く引きいだせ」といひつけ遣る。やがて率て來る女を見れば、白き綾の衣かさねて、上著にはゆるしの色のわりなう艶かなるを著て、人がらあてなるが、袖は涙にぬれひたして、なよ〳〵として出で來たり。これなん安世がむすめ薗生にてありける。顔手足などの腫れて見ゆるは、盗人に手さゝせじの計ごとにて、すべて身のうちに巴豆をおし塗りければ、斯うあやしき病者の様とは成りにけるなり。夜叉丸うち見るより、「けしうはあらぬ容貌かな」とて、そゞろに涎ながら垂してまもり居りて、「頭をあげよ」といひて、ふり仰ぎたるを見れば、面あからかに腫れわたりて、たゆげなる様に息つき居り。「かれを病者なりといふは、かく面の腫れたるをいふなりけり。こは何ばかりのことにもあらじ、日頃經ばやがて癒えぬべし。此女人に賣りわたすべからず、とゞめ置きて、我かたはら放たず召使ひなん。先こゝに上せよ」といひて、縁にのぼせ、すり寄りて戲れかゝるを、女くるし

そぎ行きける。

○山のとね

こゝに夜叉丸といふ盗人あり、袴垂が羽翼とたのみたる者にてありける。近江國に居りて、大寺の法師ばらを追出し、みづから其所のあるじと成りてあまたの盗人をしたがへ、錦繍の茵に坐し、山海の珍味をあつめ、ほしきまゝに奢りてぞ住み居たりける。或日俘にせる女ばらを庭にすゑならべて、夜叉丸緣に出でてあらため居ける中に、老いかゞまりたる嫗あるに目をつけて、「何者ぞ」と問へば、嫗泪をながして、「みづからは山城の國の片田舍に住める者にて候。かう歳たけて候へば、命も何か惜しく候はん。疾う／＼いかにもはからはせ給ひね」といふ。夜叉丸、「おのれたくはへ持ちたるたからなどあるべし。いづくに隱し置きたるぞ」と問へば、「世をいとひさふらひて、さる山里に住み候身の、なでふ財をかたくはへ候べき」といふ。夜叉丸嫗が樣を見るに、垢しみたる布の衣著て居れば、「此嫗人がらはあてに見ゆれど、衣を見れば卑しきものと見えたり。くやつもゆかりの者ありて、たづねもぞ來る。ひとやにこめ置きて、多襄丸が陣におくりやる

あて—高貴

ひとや—囚獄

むくつけき事―けがらはしき事
むづかり給ひて―憤り給ひて

かにして失せけるにか見え候はで、日頃になりて候。ひらきて御覽じ候へ」といふに、紐の封じ目口にあてて引きはなし、とり出でて見れば、內に又一重なる物に包みてあり。猶ひらけば、げに言ひしにたがはず、薗生が詠歌の短冊どもを、唐木もてつくりたる栞にあはせて、入れおきたるなり。梅丸猶うたがひ解けず、常人が持ちきたりし梅の歌を出して見せければ、女うちわらひて、「それはこぞの春、常人のもとより梅の枝に文むすびつけて、むくつけき事を書きてまるらせしを、御方のむづかり給ひて、返しやるとて詠ませ給へるなり」といふ。「さては常人がたくみて計らひたる事にこそ。われは親とたのみつる人の仰にて、いま都へのぼるなり。道すがら師なる人、ならびに薗生がゆくへも尋ねて見ん」といへば、女、「御方は、御かたみの品を身につけて持ちておはせば、それをしるしに尋ねさせ給へ」といふ。「心得つ。かの一品を證據として尋ねて見ん。おことは今より尾張の國熱田をさして行べくし。これよりあなたには盜賊もあらざれば、心やすかるべし。疾う〳〵いそぎ物せよ」と教へて、こがね取出でて手にわたし、竹垣を押破り、女が手をとりて引出し、道を教へておとし遣りつ。「われも爰にありては、事のさまむづかしからん」とて、やがて菅笠うちかぶり、すそ引きかゝげて、都の方へとぞい

御方―薗生を指す

一定―定めし

細ひそかに語るべし」といへば、女涙を拭ひつゝいひけるは、「我君の行くへなく成り給ひにし後、御方はふかく歎き給ひて、御床に臥して起上り給はず、しかるに思ひがけなく盗人どものあまたおし來りて候へば、殿をはじめ、我人足にまかせて逃げ出でてさふらふなり。御方はいかにならせ給ひしにか、わらはが逃出でし時まで、我君の御かたみなりとて贈りたまひし袋物をば、御肌をはなさず持たせ給ひけるが、一定盗人のために捕へられ給ひつらん。わらはもこゝに居る盗人にいけどられて候なるを、かれが心に從はざるを腹立ちて、かくいましめて候なり。おそらくは御方にも斯かるめをや見給ふらんと推しはかり候へば、かなしさやらん方も候はず」といひて泣く。梅丸いぶかしければ、猶問ひけるは、「薗生は吾をうとみて、袋物に歌をそへて、常人を以て吾方へ返しおこしつ。然るにおことがいふ所大に相違せり。いかなる事ぞ」と宣へば、女、「いかでさること候ひなんや、御方には、過ぎし青海波の夜、垣間見せさせ給ひてより、御心あこがれておはしつれば、かの御袋物をば大事の物としたまひて、晝夜御身をはなさせ給はざりしはや」といふ。梅丸、「其品これにあり」とて、ふところより彼袋物とり出でたれば、女うち見て、「それは御方の書の中に挾せ給へる、栞となづけし物入れたる袋にて候。い

いも寝られねば―寝入られねば
臥待の月―二十の月

くに行きても汝に手ざす者はあらず」といへば、梅丸手に取りあげて、「かゝる時には、これにましたる御たま物もさふらはず」とて、いたゞきて懐にをさめぬ。さて酒宴も事果てて、盗人等おの〳〵臥所に入りぬ。梅丸もくりやの方に出でて寝たりけれど、いも寝られねば、起出でて庭の方に出でけるに、はるかに女の泣く聲の聞ゆれば、あやしくて何ならんとうかゞひ見るに、折柄臥待の月はなやかにさし出でて、物の隈々あざやかに見ゆれば、かの聲する方をたどりつゝ行くに、堂のうしろにあたりて樹ども生ひしげりたる所ありて、かたへは墓所なり。物すごき事いはんかたなし。入りて見れば、女の聲いよ〳〵高く聞ゆ。亡き人のしるしの石などころび倒れてあり。かなたこなた路をもとめて、聲する方をすかし見れば、二十計なる女をあかはだかに爲して、樗の樹にくゝり置きたるなりけり。「いかなる人ぞ」と問へば、女面をあげて見る。すこし覺えある面色なれば、猶ちかう寄りて見れば、安世が家につかはれしあてきといひし婢にぞ有りける。おどろきて、「いかに斯ゝるめをば見るぞ」といへば、女も聲をあげて、「梅丸君にこそおはしけれ。吾をすくはせ給へ」といふ。梅丸、「おと高し、聲な立てそ。定めて盗人に捕へられしなるべし」とて、いましめ解きて、かたへにある衣とりてうち著せて、「事の子

笑みこだれて―笑ひ崩れて

三輪の神―大和三輪の大物主神の神話は、古事記、舊事記に見ゆ、尚謠曲「三輪」參照

をだ巻―績みたる麻を手毬の如く丸く巻きたるもの

に打ちはやす。梅丸いなむべきにあらねば、扇とりて立上りて、聲をかしく謠ひけるは、

　枝さしかはす磯の松、みどりの林かげゆかし、風吹荒るゝ夕暮は、白波たかくぞ寄するなる。

と折れかへし舞ひかなでければ、ありとある盗人ども聲あげて、「あはれいみじくも舞ひてけるかな。こよなき上手にこそ」と褒めつゝ、笑みこだれて興ずめり。此舞のおもしろきにやめでけん、いたく醉ひしれたる盗人のよろほひつゝ立上りて、

　盗人と鼠は、三輪の神とおなじくて、をだ巻の絲のひとすぢに、よるをのみこそ樂しめ。

とうたひて、そゞろに舞ひける物か、はかまを燈臺に引きかけて、横ざまに倒れふしてけり。盗人どもどよと笑ひて、「さて〳〵わろき舞ぶりかな。はじめのには似もつかざりし」といひつゝ、手足とりてかき出しつ。横座の盗人、かへす〳〵梅丸をほめて言ひけるは、「汝京に上らんずるには、我ともがら所々にありて道をふさぎてあれば、やすく通り行かん事かたし。今宵の引出物に、これをつかはすなり」とて、燒きしるし押したる小き札をなげ出しつ。「これは我ともがらの割符なり。これ持ちてとほらんには、いづ

折敷―片木を折り曲げて製りたる角盆

あたらもの―惜しい者

るより、つか／＼と寄來て、太刀に手をかけて、「おのれ何者ぞ」といふ聲、撞鐘のひゞくに異ならず。さては盗人の住みどころと心づきければ、手をつきて、「おのれは尾張の國に住める田樂にて候。都に叔父なる者の候ひて、病に煩ひて候と承りて、罷りのぼらんずる所、日の暮れて候へば宿とらばやと存じ候ひて、思はず無禮を仕りて候。あはれ御ゆるしを蒙りたく存じ候」といへば、ぬす人うち守り見て、立竝み居る者共に向ひて、「かやつは田樂をわざとするとや。今宵の宴席にはこれにましたる物あらじ。めし入れて賊魁なる人に告聞えてん」といへば、「それよかンめり。まづこち來」といひて、緣の上にのぼせつ。梅丸うち見まはすに、鞘をはづしたる鉾長刀など、あまた壁にかけならべたり。盗み取りたる物と見えて、皮籠袋樣の物もあまた積み竝べてあり。おもひかけず、折敷にこは飯盛りたるをもて來て食はせつ。しばし有りて奥の方へ誘はれて入りて見れば、横座に賊魁とおぼしくて、つらつき悪げなるが茵にねまりて居り。そのほか丈高くおそろしげなる者ども左右にならびて、酒のみ居り。梅丸一禮して坐しければ、横座なる盗人うち見て、「きよげなる若者なり。田樂にはあたらものぞ」などいふ。かたへなる盗人、「いざ／＼一手、疾く／＼」といひつゝ、盗みとりたる笛鼓など取出でて、おひ／＼

かはすべき」といふに、郎等どもも、目と目を見合せたるのみにて、われ行かんといふ者もなし。梅丸すゝみ出でて、「某行きて都の樣をもうかゞひて歸りまゐらばや」といへば、左衞門、「亂軍の中存亡おぼつかなし。無用なり」と、とゞめけれど、梅丸あながちにいひけるは、「某罷り上らんには、必定つゝがなく參りつくべく候。御心やすかれ」といふ。左衞門さらばとて、黄金つゝみたる袋とり出でてあたへ、「安世殿とやらんも恩ある師なりと聞けば、つゝがなくおはすや、此ついでにありか尋ねてあれ。大方にせば知りがたからん。日頃を經とも苦しからじ、必ず尋ねあひて來よ」といふ。梅丸それより旅よそひして、夜の明けはなるゝ頃かしこを出でて、都をさしてぞ上りける。さらぬだに旅は憂きならひなるを、かく盜人どもの山野にこもりてある時なれば、往來する人もなく、さびしく物すごき事いへばさらなり。たくはへたる乾飯を水にそゝぎて食とし、夜は荒れたる社などにやどりつゝ、からうじて美濃國某の郡にぞ著きける。日すでに暮れかゝりければ、いづこに宿らましと見めぐらすに、森のかげに大なる寺見えければ、うれしくていそぎ門に入りて見るに、僧などは見えず、髭生ひ眼おそろしき男どもの、いかめしき太刀よこたへたるが、いくらとなく此處かしこにむれ居たり。梅丸を見

盗人ども、財の有所問ひ奉れるを、答へ給はざりけるにより、殺し奉りたりとおぼえ候」と語れば、「さはゆゝしき大事出來たり」と、左衛門、梅丸をはじめ、ありとある郎等どももあきれたる計なり。左衛門目しばたゝきて、「あたら命を盗人のために失ひつるいとほしさよ。されど今悔ゆともかひなし。都はいかに」と問へば、兵藤、「都も同じく盗人ども入りゐて狼藉いたし候由。しかし先此大事を告げ奉らんとていそぎ罷下り候へば、都の事はよくも承り申さず」といふ。左衛門、「われ仕をやめてより二十年に成りぬ。されどかばかりの大事よそに見ん道理なし。今より都に歸りのぼり、頼光朝臣に力を合せ、帝都を守護し奉らん。みな〳〵用意せよ」といふを、兵藤おしとゞめて、「伊勢近江に屯せる盗人ども、何萬騎といふ數も知れざれば、かけ破りて通らん事かなふべからず。よく御思慮をめぐらされ然るべう候」といふ。郎等どもも、「かく旅の空におはして、物の具をだに用意せざれば、敵に向はん事計なきに似たり。しばらく爰に止まりおはして、都の樣子をも聞せ給へ」と諫むれば、さらばとて出立をば留りぬ。かく物騷なる時なりければ、街道にも人の往來たえて、都のおとづれなど聞き知るべきやうなし。左衛門云ひけるは、「いかでさるべき人を遣して、都の樣を問ひ聞せばやと思ふなり。誰をか上せつ

ひきしろひ―延引し

つや―通夜

ひはだ―檜皮色

かくひきしろひ居るほど、つれ〴〵なりければ慰めにとて、おほえたる田樂のわざなど行ひて見すれば、左衛門輿に入りおもしろがりて、日々催しつゝ此事をなさせけり。左衛門やゝ心地さわやぎける頃、日くれてあわたゞしく門をたゝく音しければ、明けて入れて見るに、京にありし家司なる兵藤大夫にぞ有りける。左衛門聞くより、「あな氣づかはし」とて、召入れて、「いかに、何事にて下りつるぞ」と問へば、兵藤聲をあけて、「希有の珍事いできて罷下り候。まづ聞え奉らんは、奥方は盜人のために殺され給ひしはや」といひもあへずうつぶしに伏して泣くを、左衛門、「いかに、事の子細かたれ」とせき立つ。兵藤目おしぬぐひて云ひけるは、「君の下らせ給ひて後、我ともがら晝夜おこたらず御館の内を守り候所、去る十七日の夜、それがし清水の御寺につやし候あとにて、夜中過ぎ候ころ、ぬすびと共二十騎ばかりおし入り、物ども奪ひて狼藉に及び候を、若黨どもふせぎ戰ひ候へども、かなふべうもあらず、男女皆ちり〴〵に迯失せて候ひき。某夜あけて歸りつきて候ひけるに、はや御館は火をつけて燒失ひ、盜人共は行方も知らず。しかるに御館の後なる藪の中に、頭なきむくろの見え候をよく見れば、御方にておはしましき。まがふべうもあらぬ、著ならし給へるひはだの御衣著ておはしまし候。おもふに

おことーそなた

れは、かたち心ばへもおほかたならぬ有りがたき女子なるを、思ひかけず失ひつる安世夫婦の心のうち、かなしさ思ひやりぬべし。これは扨おき、坂上の梅丸は、すのまた川にて遇ひたる老人に連れだちて、道すがらねんごろに志をつくして仕へければ、左衛門も斜ならずよろこびて、よき人を得たりとて、いよ〳〵あはれみていざなひ行きける。程なく大宮司が家につきて、宮居にまうで、祈願の事など果して、明日は大宮司がもとを立ちて、あたり近き名所などを見めぐり歩きて、暮れぬればよさむの里にぞ宿りける。其夜より左衛門心地例ならずとて打臥しければ、出立ちもとゞめてこゝに逗留して、病をぞ養ひ居たりける。一日左衛門、梅丸を枕もとに呼びていひけるは、「かねて語りたるごとくおのれ嗣子なし。うちつけなる事ながら御邊我猶子と成りて、老夫が終をも見とゞけくれよ。いかなればおことに對面してより、ひたすらなつかしさ添ひて、よそ人のやうには思はれず。これも宿世の約束にこそ」とて、涙をながしつゝいへば、梅丸も共に袖をぬらして、「忝き仰を承りぬ。たのむ方なき孤獨の身にて候を、とりあげさせ給ひて、御姓をさへ穢し奉らんこと、心肝に銘じて有りがたくこそ候へ」といへば、左衛門うれしげに打笑みて、病牀に盃とり寄せて、かたみに酒汲交して、親子の契をぞなしける。

巴豆―灌木の實、形豆に似たり、仁を藥用とす

むくつけき―物く恐しき

かたは―不完分なること

ち貞をも全くなして、再び夫にめぐりあはましと思ひめぐらして、父がすて置きたる藥籠の中より巴豆といふ藥を取出でて、面より手足までひたすらにおし塗りて、そのまゝおのが部屋にうめき呼びてぞ臥し居たりける。さるほどに盗人共ひしく〳〵とおし來りて、安世が家に入りて見るに、男女一人も見えず、猶かくし置きたる財こそあらめとて、ひたぶるに奥ざまへ踏込みけるに、薗生が臥所にうめき居るを見て、あはれよき寶こそあれとて、引起して腰に繩ゆひつけて引出す。いかにするにかと泣きさけぶを、耳にも入れで引きつれ行かんとす。薗生、「われは病者なり。斯くなせそ」といへば、盗人つくづくと見て、「くやつ病者なり。歩行にて行くべからず」とて、肩にひきかけ、うちかづきてぞ走り行きける。薗生いとけなき時より深き窓に養はれ、あらましき風にだにあたらず、いつきかしづかれし身の、さるむくつけき荒えびすの俘となりて、率て行かれし心のうち、いかばかりか侘しくも恐しかりけん。されどせんすべなければ、たゞ觀音菩薩を念じ祈りつゝ、身をなきになしてうちかづかれ行きける。から國の人の詞に、むしろ泰平の犬となるとも、亂離の民となる事なかれと述べたりしは、かゝる事をやいひけらし。世中のならひにて、よからぬ娘もちたるも、親の心にはかたほとや見る。ましてこ

なか〳〵に—却て

近江縣物語 卷之二

○くさまくら

近江國なる橘の安世が家にては、梅丸が出行きし後、かなたこなた搜しもとむとて、月頃を過しけるに、或日一村俄にさわぎ立ちて、伊勢の國より盜人ども多勢にておしよせ來とて、資財道具を持ちはこび、子をいだき老いたるを負ひて、東西に迯げはしる。安世はかねてより金銀の類は、穴を掘りて深く埋め藏し、あらかじめ用意して置きつれど、俄に盜人共ひた〳〵と押しよせ來て、鬨の聲をあげてさわぎければ、おのれみなごろしにして呉れんずとて、刀に手は掛けつれど、寡は衆に敵すべからず、盜人に出合ひて、薄手おはんもなか〳〵に恥かゞやかし、ひとまづ免れ去らんにはしかじと思ひて、妻が手をとりて、裏の方より出でてぞ落行きける。薗生は此時例の閨にありけるが、かしこき心に思ひけるは、たとひ迯出でたりとも、女の足にてはかゞ〳〵しく歩む事あたはじ、必ず盜人にとらへられて、憂きめにやあはまし、いかで一つの計ごとをかまへて命をたも

あつかひ物し奉らん—御世話仕らん

そこ—其許

なま〳〵の人—凡庸の人

ゆく限りあつかひ物し奉らん」とねんごろにいへば、梅丸心におもひけるは、遠江とてたのむべきにもあらず、此人の斯くあつく物し給へば、かゝる人につき添ひて都にやのぼりなましと思ひて、手をつきて言ひけるは、「宣ふがごとく、いづくに親しき一族もさふらはねば、御ゆるしを蒙りなば御供仕りてん」といふ。かの武士大きによろこび、「さては我本意にかなひて嬉しくこそ候へ。此度は忍びて、熱田の御社にまうでんとて出でたちたるにて候。そこにもかの御社にとも〴〵詣で給ひて、さてもろともに都にのぼり給ふべし」とて、おのが居たる方に伴ひ行きて酒など飲ませ、底ひなく物語して、「今はひたすらに己をたのみ給へ。おほつかなきやうにはあらせじ」などいふに、いよ〳〵頼もしくて、涙ほろ〳〵とこぼれぬ。物のついでに、従者なるものに向ひて、「殿はいかなる御方にか」と問へば、「嵯峨野に家つくりて住み給へり。昔はいかめしき武士におはしけれど、今は世のまじはりもし給はず、しづかにかくれ住み給へり。世には嵯峨の左衞門殿と聞えたてまつるなり」といらふ。梅丸思ひけるは、いづれにもあれ、なま〳〵の人にはおはせじと、たのもしく嬉しく覺えて、それより此人につきて、尾張の國へぞ下りける。

かたみに―互に
つきじろひ―突き合ひ

直不疑が故事―直不疑は漢の人、同舍の人に金を盜めりと疑はれて辯解せざりし事大略この梅丸の仕方に同じ

とは承らず候。然るにねんごろに仰せ給ふこと、なかなか心苦しく存じさふらふ」といへば、かの男はよろこびて、もとの所に退きけるを、旅人ども梅丸がかたを見やりて、「膽こゝろもなき男かな。いひがひなしや」など、かたみにつきじろひいふめり。家あるじ疾くより此さわぎを聞きて、頭かきつゝ案じ居たりけるが、梅丸が穩便なる詞に事をさまりければ、はじめてやすく息をぞつきける。かゝるに、年の頃六十餘なる人、京家の武士と見えて供人あまた連れたるが、始終を聞きゐて、しづしづと立ちて梅丸が前に來りて、「さてさて感じ入りたる御心底にこそ候へ。若くおはす人のかばかり御心をのどかにをさめ給へること、よのつねの人とは思ひ給へられず。唐の直不疑が故事にも、をさをさ劣るまじく覺えて候。いかなる人にて、いづくへ物し給ふ旅にておはするにか。くるしからずば物語し給へ」といふ。梅丸、「おのれ近江國にて生立ち候へども、親族もなく候へば、今より遠江國に父なるもののしるべ候へば、かしこをさして罷下り候なり」といふ。「さらばみなし子にて、寄るべなくたゞよひ給ふにこそ。おのれ斯く年ふけ候まで子といふものなくて、世中たのみなく過し候なり。さして行き給ふ遠江國なる人も、さまで親しきゆかりならずば、いかにそれがしに伴ひ給ひて都にのぼり給はなん。心の

おしあて―推當

てひらき見るに、中に銀あり。おのが覺えある反古の紙にて包みてあれば、まがふ方なし。「さてはさきに旅人をうたがひて取りかへしつる袋は、あらぬ物なり」と、聲ひきくなしていふ。人々にくがりて、「おしあてに人をうたがひて盗人よといひたれば、今更わびたり共、彼人聞入るべきならず。不便なる事なり」などいふ。かの男おづ〳〵梅丸が傍にはひ來て、「さきには思ひたがへて、あらぬ事を申しかけて候ひき。おのが火打袋のよく似て候へば、ふと不思議なることを申し出して候。今うしなひつる物は見つけ出でて候へば、給はり候品は返しまゐらするなり。さるにても、いみじき雜言申して候ことかたはらいたく、のべ申すべき詞もなく候。あはれ御德にゆるさせ給はなん」と、おめ〳〵といふを、かたはらにある人々、「いさや人をさして盗人と惡名をつけてのゝしりしを、たやすく許すべきならず。その答には、かやつが面がまちゆがむばかり打ちはりて、さて怠狀かゝせて腹をい給へ」など、口々にいふを、梅丸耳にも入れで、うち笑みて、かの男に向ひて、「さてはそれがしを盗人也とおほされし、御うたがひは晴れ給ひぬとや。先々よろこばしくこそ存じ候へ。さきに奉りつる火打袋、返し給はんことうれしくこそ存じ候へ。とかく宣ひし事共は、腹立ち給へる時にはさもあるべき道理と存じ候へば、僻事

おれ—汝

う盗みて隱したるならし。いかに出さずば目に物を見せんず」と、いきまき居たけ高に成りていふ。梅丸打驚きけれど、あらそひて論じいふべきにあらずと思ひ廻らして、面をやはらげて云ひけるは、「さては御邊の物にてこそ候ひつれ。おのれも今日道にて求めて候へば、それぞと心得てかたはらに置きて候なり。内に入置き給ひしは如何なる物にて候か」と問へば、「銀一兩を紙につゝみて入れ置きつ。わぬしいかで知らざらんや」とにらみつゝいふ。梅丸ふところより小きつゝみ取出し、うち開きて銀取出でて、紙におしみて、「旅にしもあらずば、おのれさておくべきかは。此頃こゝかしこに盗人のはびこりて、物奪ふと聞く。おれもその同類にこそ」といふを、人々おしなだめ、様々すかしければ、からうじて鳴りやみぬ。梅丸は、かたはらの人のおもはん所も恥かしくて、面おかくなして壁に向ひ居り。しばし有りて、かの男ふたゝび碁うたんとて、盤にむかひけるに、石いれたる笥のふた取りて、かたむけける中より、火打袋ふたりとこぼれ出でぬ。むかひ居たる男、疾く手に取りて、「是はそこの失ひ給へる物ならずや」といへば、取り

いりもみ―揉みつくるやうに烈しく吹く風

革籠―外面を革にて張りたる籠

ちかづきて行く。侘しき事いへばさらなり。いりもみする雨風に谷山の水音たかく聞え、篁の竹はひまもなく起きふしなびく。雀烏などの濡れそほちつゝ飛びちがふ羽がひの、重たげに見ゆるもあはれなり。辛うじてすのまたといふ川べに著きけるに、此頃の雨に水嵩まさりて、渡りをとゞめたりと聞きて、せんすべなく立休ひ居けるに、こなたなる怪しの家に、人あまた聲すれば、何ならんとうかゞひ見るに、渡りをとゞめられし旅人ども、皆こゝに留り居り。「今宵のうちに水は落ちぬべく、さらば明日は疾く渡るべければ、そこにも爰に宿り給へ」と人のいふにつきて、さらばとて彼家に入りて、足あらひて一間に入りて見るに、旅人等二十人あまり所々にこぞり居たり。梅丸會釋して、かたへに蹲り居けるが、つれ〴〵なるあまり、革籠打開きて筆硯など取出し、道すがら詠じつる詩歌など、思ひ出づるまゝ筆ずさみにしつゝ居りけるに、道にてもとめたる火打袋を膝のあたりに取散し置きけるを、かたへに碁うち居たる旅人の有りけるが、つかつかと寄來て、梅丸が火打袋手にとり上げて、眼を大くなして云ひけるは、「この火打袋は、今日道にて我もとめつる物なり。いかでそこの傍に置きたるぞ」といひつゝ、中をひらき見て、いよ〳〵あやしめる氣色して、「此中に入置きつる物なし。さてははや

かしこき事なり—勿體なき事なり

さずいふ。安世うちうなづきて、「さるにても此儘にすて置くべきならず」とて、猶從者などにいひつけて、あまねく所々さがし求めさせける。薗生は其日より枕にかゝりて臥しけるが、終に病と成りて起きもあがらず。安世夫婦また是におどろきて、兎角いたはり養ひて日を過しけるとぞ。

○すのまた川

斯くて梅丸は安世が家を出でて、しるべの方に三月あまり忍び居るほど、其年も暮れて春に成りぬ。いつまで斯くてあるべきならず、今は追ひもとむる人もあらじと思ひめぐらして、父のしたしかりし田樂法師の、遠江國に住めるあれば、かしこへ行きて身のをさまりをも語らはゞやと思ひて、夜をこめてこゝを出でて、遠江をさしてぞ急ぎける。道すがら思ひけるは、年頃身にあまるばかりいつくしみ給へる師にそむき奉り、かう行方なき身と成りぬる事、おのが行末はさもあらばあれ、師なる人のさこそ腹立たせたまふらめ、かしこき事なり、あはれいつの世にか大恩にむくひ奉るべき、など思ひつゞけて、ひたすら古里の方のみ打見かへりつゝ出で行きける。この頃春雨降りつゞけば、簑笠う

驗者—修驗者

ふつに—絶えて

出づるに車なし云々—馮驩志を得ずして孟嘗君の食客たりし時其の佩ける劍を彈じて歌ひし詞

返しおこせし袋物腰にさし、夜にかくれてまどひ出でにけり。又の日梅丸が在らざる事を人々いひさわぎけれど、よもさる事あらんとは安世も心づかず、所々さがしもとめて、影をだに見ずといふを聞きて、おどろきて、こはいかなる事ならんと、夫婦は只あきれ居たり。蘭生はすゞろに胸ふたがりて、衣ひきかづきて臥し居り。女ばらは、「若まよはし神にさそはれやし給ひけん。そこの陰陽師、かしこの驗者迎へてん」などひしめきて、人々物にあたりてさわぐ。國の堺まで行きたる男ども歸り來て、「ふつに御ゆくへ知れ候はず」といへば、いよ〳〵心よわりて、せんかたなし。常人一人うちほゝゑみて居れども、諸共にあわてたる顔つきして、走り歩きける。安世乳母をちかづけて、「もし蘭生が心に梅丸をよろこばざりしや」など問ひ聞けど、「さる事も候はず」といふに、「さては彼心を高くつかひて、かゝる片田舎に一生をおくらんは、丈夫のしわざならずと思ひて去りたるにや。然るけはひなど見し人やある」といへば、常人時よしと思ひて、答へていひけるは、「たしかなる事は見とめ候はねど、常に腰刀うちたゝきて、出づるに車なし、食に魚なしなど獨言に申して候ひしを、何事ぞと咎め候へば、あだし言に紛らはして答へ候はざりき。その外に聞き知りたることも候はず」と、例のつくり事を鼻もおごめか

正身―當人、本人

如法―もとより

うちはへ―永々と

をそへて出しける。梅丸手にとりて見れば、おぼえある薗生が筆にて、吾名の梅といふにそへて、厭ひ思へるさまを述べたる歌なれば、しばしあきれて答だにせざりけるが、やゝためらひて云ひけるは、「此度の婚姻、それがし強ひて望みたる事にては候はねど、師なる人のさやうにおもむけ給へる事に候へば、かしこまり領承して候なり。しかれども、正身の本意にかなはざる事餘儀なきことにて候。其由師の許へことわり申し候はん」といへば、常人すり寄りて、「薗生が御邊をきらひつる由を告げ給ひては、彼いみじき呵責にあひぬべし。さては心ぐるしく存じ候。其事となくなだらかに事のをさまらんずるやうを計らひて給へ」といへば、梅丸如法温柔のうまれつきにてあれば、「其儀につきては御心をくるしめ給ふべからず。よく計らひてん」とて、常人を歸しやりて、ひそかに心に思ひけるは、薗生が吾をうとめるは、種根のいやしきを嫌へるなるべし、師に此事を申さば、吾身の恥のみならず、薗生がためいとほしからん、さりとてうちはへ日を過しなば、婚姻の期ちかづきぬべし、いかにせばよからんと、さま〴〵思ひめぐらしつつ四五日を過しけるが、兎に角に吾此所にありては、事の樣むづかしかりぬべし、一先こゝを立退きて、事の樣をも伺ふべく、と思ひ定めて、著がへの衣服など包につゝみ、

おぞき者―愚鈍な者
湯ひき居る―浴みし居る

ふづくみ―憤り

はちぶかれたる―寄せつけじと忌み嫌はれたる

しとてつかはすべし。さりとて、物とておくりたる袋物、盗みくれよ」といひける。此女おぞき者にて、やすく言うけして、薗生が湯ひき居る隙をうかゞひて、かの一品を盗み出でて、ふところに押入れ、ひそかに常人にわたしける。常人よろこびて、中をだにひらき見ず、紐の結び目を紙よりしてつよく引き結ひて、又の日、梅丸が許に行きて云ひけるは、「御邊近きに薗生と婚姻し給ふこと、我等がよろこび増すことなく覺え候。但にがくしき事の候を告げまゐらせ候はずば、年頃のしたしみを失ふ道理なれば、内々ひそかに告聞ゆるなり。その仔細は、伯父なる人、御邊を婿と定めて候を、薗生いかなる所存にか甚だうらみ、ふづくみ候ひて、夫婦のかたらひは親達の御心にも任すべき事かは、我にも語り給はで、さる田樂の家の妻となし給はんこと、あまりに心なき御はからひにこそ、たとひ父母のせめて宣ふとも、我は梅丸が妻とはならじとて、晝夜泣きしづみてこそ候ひしか。今朝のほどおのれを呼寄せて申し候は、此一品は、梅丸が方よりしるしとて贈りたる物にて候、見るもうたてく覺え候へば、疾く返しやりたく候なり、たしかに彼に渡して給ひねとて、取出でて渡して候。さまぐこしらへ賺して候へども、事かなはず候へば、薗生がいふまゝに御邊にまゐらするなり。よくく思慮し給へかし」とて、袋物におのがはちぶかれたる歌

さいで―布の小切の稱

むくつけ女―醜き女

こちなき心―無骨な心

どさゝやき合ひつゝ、夜ふけぬれば、格子おろしてみなく退れて、臥所に入りてぞ寢ねける。さて旦になりて、母蘭生が部屋に來りて、しかぐの由を語りきかせ、梅丸が贈りたる聘物を出して、「終身をさめ置きて大事にせよ」とぞいひ敎へける。蘭生此袋物をうけ取りて、日頃たくはへ置ける錦のさいで取出でて、縫ひて此袋物をおし入れ、紐かたくひき結ひてぞ祕め置きける。扨又ねぢけ人の常人は、さまぐ思ひめぐらして、いかで梅丸にぬれぎぬ著せんと構へける。これより一年ばかりさきに、常人蘭生に心をかけ居けるが、むくつけ女一人語らひて、艶書を梅の枝につけて贈りつかはしける。蘭生心もつかで打開き讀み見て、あさましき事におもひて、やがて艶書を其のまゝ返し遣すとて、梅にむすびつけて遣りける。

中垣の隔もわかで梅が香のなど此處にしも匂ひ來ぬらん

うたてしや。

とぞ書きたる。常人こちなき心にも、此歌の心さとらざらんやは。打見るより、さは我をいとふにこそとて、其後は絶えていひ出でもせざりける。此頃きと思ひつきて、よしよし、すべき樣こそあれとて、又彼むくつけ女語らひて、「蘭生が閨に祕めある梅丸が聘

うしろみ―後見

つれなしづくりて―平氣にもてなして
あなかま―あゝ喧し

聟がね―聟たるべき人

うちけぶりて―其れとなく現はれて

えたるは、此わたりの人にはおはせじ、あはれ女と生れたらんには、かゝる人をうしろみ添臥して世を過さば、思ふ事あらじはやなど、さま〳〵と思ひみだれつゝ、寄りふして居けるに、しばし有りて、女ばらそよめき來て、「御前にこそ御覧じ給はざりけれ。こよひ梅丸のぬしの青海波舞ひ給へるぞ、世になき見ものにて候ひし。詠などし給へる聲こそ、身にしむばかりをかしく覺えて候ひしか。物語の文に記して候色好の君達などは、物の數にも候はじ」など、褒めのゝしるを聞きて、さては今宵の舞人は、聞き及びにし梅丸のぬしにや、つねに女ばらが口辯にほめ物するこそ理なれと思へど、猶つれなしづくりて聞き居たるに、乳母の三條といへるが出來て、「あなかま、何事をか宣ふ」といひつゝ、蘭生にむかひて、「先聞え知らせ參すべき事の候ふ。父君のゆるさせ給ひて、今宵梅丸の君を御聟がねと定めおきてさせ給ひにたるを、うち〳〵に聞えまゐらせよと、母君の仰せて候」といふに、女ども手うちたゝきて、「御前こそいみじき御幸はおはしけれ。あなめでた〳〵」と口々にいひて、とよみ騷ぐ。蘭生もわりなく嬉しけれど、うち出でては何とかいはれん、たゞ口おほひてうち笑み居たるを、さし過ぎたる女ども推しはかりて、「御前にも、下にはうれしと思すらん、はや御顔のほどにうちけぶりて見え奉りたる」な

すさまじく—不興に
のり呵りて—罵り叱りて
一定—定めし
伶人—樂人

し」とて、取りをさめて人々にいひけるは、「かゝる喜ばしき事又も有るべからず。各も今宵はうちくづして、猶よろこびの酒を過してたべ」とて、殊更に杯盤まうけ出でて、夜もすがら酒飲み遊び、朗詠歌ひかはして、いたく興じ合へりけり。常人は思ふ事たがひて、恥見せんと思ひつるを、中々に彼が幸に成りぬるよと、すさまじく覺えて、物をだにいはず、召使ふ女ばら僕などをのり呵りて、おのが曹司に入りてぞ臥しける。さるにても梅丸め、いかで憂きめ見せてんと、寢もやらでさま〴〵と思ひめぐらしける、愚人の心こそ恐しかりけれ。安世が家、もとより内外のさかひ嚴にて、娘薗生が住める所は奧まりたる所なれば、弟子などいふ者にも、出合ひたる事だになし。されど女ばらがとり傳へて物語するにも、梅丸が姿すぐれて學才の道にもかしこき事など、とり〴〵にもらし聞えければ、薗生もさる人をいかで見ばやの心ありけるに、今宵舞樂の物の音におどろかされて、女の童一人連れて、何事ならんと、庭づたひ歩み出でて垣間見しけるに、紅葉の木の間きら〳〵しき火影に、みやびて光る計うつくしき男の、立ち舞ひて居るさま、似るものなくおぼえて、そゞろ寒き心地しながら、猶事果つるまで見居りて、部屋にかへりて思ひけるは、彼は何人にか、一定伶人の子にておはすらん、かたちのやんごとなく見

ぬかをつきて―頓首して

に俄なることにて、答すべき詞も出でず、ぬかをつきてかしこまり居るを、客人等、「いでやかしこき御はからひにこそ。梅丸ぬし疾く領承し給へ」とすゝむれば、梅丸かしらを上げて、「年頃の御めぐみさへ一方ならず候へば、報い奉るべき期もなく覺え候を、御愛女をさへ給はらんこと、身にとりてかたじけなく有がたき事にこそ存じ候へ。いかで背き奉るべき」といらへければ、安世夫婦斜ならず悦びて、「春を待ちて吉日をえらび、婚姻の禮をとゝのふべし。但定れる掟なれば、かたばかり聘禮のしるしを見せ給へ」といへば、梅丸しばし打案じて、懐より絹にて包みたる尺ばかりの物取出し、扇にすゑて安世が前に置きて云ひけるは、「此一品は、父にて候もの命終の時、とり出しておのれに與へて語り候は、此一品は我かたみなり、みだりに開き見るべからず、命あらんかぎりは寶として身を放つことなかれとしめし候ひき。おのれ貧窮なる事は知らせ給ふが如くなれば、奉るべき物も候はず。此一品は亡父がかたみにて、いまだ封をだに解き候はぬ物ながら、身にとりては大切の寶にて候へば、此一品聘物のしるしに奉るなり」とて、うやうやしく述べければ、安世手にうちさゝげて、「此品いかなる物とは知らねども、當座の聘物、殊に御邊の身にとりてはこよなき寶にてあれば、娘が生涯の守ともなすべ

ゑつぼに入りて—得意になりて
くやつ—きやつ
あざれ—ふざけ
博士—學者
かつ〴〵—僅に
青海波—舞樂の曲名、龍宮の曲と稱し、舞人の服に波の模樣を染めたり
入綾—舞の手の名、既に舞ひたる手を再び繰返して舞ふこと

けれぱ、少ししらけてぞ見えたりける。安世やゝ有りて、「人々の所望ももだし難し。雅俗をいはず何にまれ、興あるべきことをなせよ」といふに、梅丸辭すべき詞なくて、閑所に入りて、支度をぞなしける。常人ゑつぼに入りて、くやつ何事をかすらん、さこそあざれゆがみたる姿して出來るらめ、例のくすしき博士がほにはふさはしからじ、見て笑はましなど思ひ居ける。ほどなく樂屋にて物の音どもひゞき吹きたてたるに、かつ〴〵散り來る紅葉のなかに、梅丸かたの如く裝束し出で立ちて、青海波をぞ舞出でたりける。足ぶみおもゝち、この世の人ともおぼえず。「桂殿迎初歳」桐樓媚早年」と打詠じたる聲、清くすみわたりて、いみじと言ふもおろかなり。入綾のほど、なき手を出して舞ひかなでし樣、人々みな泪落して感じあへりけり。いかでかく迄に練じ習ひとりけるよと、安世夫婦はさらなり、ありとある客人の限り、聲うちあげて褒めざるはなし。舞ひはてて常の服に著かへて、ふたゝび緣にのぼり來るを、客人等扇ひらきて、あふぎ立てゝほむる。梅丸恥ぢらひてかしこまれば、安世聲うちあげて、「あはれ未曾有の興なりけり。藝能といひ才智といひ、御邊のごときは例あるべからず。知らるゝごとく我に娘あり、ゆるし給はゞ御邊にまゐらせん。うけひき給はなんや。いかに」といへば、梅丸あまり

長月―陰暦九月
探韻―詩を作る爲に韻字を探ること
かうざく―警策、拔群なること

語り給へ。近きほどによき日とりて、梅丸にも語らふべし」など、夫婦ひそやかに語らひ居たりけるを、常人屛風のうしろに在りて、ふと此事を聞きつけ、心に思ひけるは、梅丸こそ我爲にいみじき敵なれ。いかでさるべき事ども構へて、彼を失はばやと思ひつきける。長月の末つがた、庭の梢こと〴〵く紅葉して、さながら錦をはれるが如し。安世興にたへで、某くれがしを請じて宴席をひらき、文つくりて慰みける。弟子の中にも才學あるをば呼入れて、探韻とらせて同じく文つくらす。梅丸常人も共に其席に居りけるが、梅丸が作れる詩殊にかうざくなりとて、人々ほめのゝしる。常人は例の口おもく、一句をだにうち出でず、かたへに退きて面あかめてぞ居たりける。酒たけなはに及び、人人醉くはゝりて稍みだりがはしき頃ほひ、常人すゝみ出でていひけるは、「梅丸こそは其家にておはすれば、かゝる席にてたゞに過すべきならず。傳へたる田樂の一手所望に候。品玉、輪鼓、八玉のたぐひ、何にまれ物し給へ。さらばいみじき見物ならん」とそゝのかす。した心には、彼がいやしき種姓をあらはし、恥見せんとて構へいひ出でたるなりけり。安世はとかくの詞をまじへず、心苦しくおもひ居り。梅丸さしうつむきて答だにせず。心知らぬ客人等は、「其はよかンなり。疾く〳〵」など催すに、猶ためらひてあり

田樂—演伎の一種

しりうごと—陰言

そこ—其許、汝

さゝか怠らずはげみ學びける。此梅丸が父は、此國にかくれなき田樂の上手にて、坂上の猿丸といひし者なり。梅丸がをさなき頃は、おのが業なれば、田樂のわざを教へならはせけり。梅丸が九つといふ歲、父の猿丸病ひて身うせぬ。すこしの田畑も持ちたりけれど、幼ければ田作るべき力もなく、せんかたなげに見えけるを、安世たのもしく扱ひて、おのれが方に呼びむかへて、子の如くかしづき養ひて、かたの如く文武の道をも習はせけり。安世醫師ながら家富みて、田畑など多くたくはへて有りければ、萬はぶきたる事なく、にぎはしくぞ世を過しける。常人おのが愚なるを知らで、梅丸が學才のすゝみ行くをねたみ思ひて、常にあらぬしりうごといひて、そしり嘲りける。一日安世妻を呼びすゑて語りけるは、「甥なる常人は性鈍く無才なれば、物の用に立つべきにあらず。梅丸は才智あまり藝能もすぐれたれば、彼を娘にあはせて、婿にせばやと思ふなり。されど彼田樂の子にてあれば、人におとしめ言はれん事心苦しう思ふなり」といへば、妻うち聞くより、「わらはも兼てよりさこそ心づきて候へ。たとひうるはしき家の子なりとも、愚れたるものを何にかし候はん。年のほども娘とは似合しく候へば、かれを婿となして家をも讓り給へかし」と應ふれば、「そこにも其心にておはさば、しかぐ\娘にも

らう〳〵じ—慣れ巧なり

まが〳〵しき—曲りたる

百家の書—支那の多數の學者の書

安世といへる人ありける。祖父は此國の介にてありけるが、ゆゑありて仕をやめて、かく田舍に引籠りて、世々醫師をなしていとなみ居けり。薗生となづけし女一人もちたり。顔うつくしく姿たをやかにて、絲竹の道はさらなり、歌の道さへいたり深く、よろづらうらうじかりければ、父母二なき物に思ひて慈みやしなひけり。安世が娚に常人といふ者あり、父母もなくて乳母が家にありけるを、憐に思ひて、引取りて養ひ置きけり。常人うまれつき心ひがみ、まが〳〵しきのみならず、藝能の方も無骨なりければ、安世心のうちに、行末いかゞあらんと頼みなくおもひ居たりけり。安世博識なる上に、兵術にも達したりければ、あたり近き人の子どもは弟子と成りて、學問するも有り、又劍術弓馬の道など學ぶ者も多かりけり。此數多ある弟子の中に、坂上の梅丸といふ者ありけり。年は二十計にて、面きよく姿みやびかに、學才の方も人にたちまさりて、志もうるはしかりければ、誰々もほめ物にぞしたりける。安世も此人こそ我業を繼ぐべき物なれと思ひければ、經文の道々しき事は更なり、歷史百家の書に至るまで、發明せる說どもを悉く傳へ教へける。もとよりかしこき若者なれば、一を聞きて十をさとり知りて、今は左右なき書生とぞなれりける。學問のひま〳〵には、弓ひき太刀打のわざをも習ひて、い

いしくも―うまくも

まじくや」といへば、多衰丸といへるが曰く、「道の行くてに、富めるやつばらが家の物とらんことは、もとよりの覺悟にて候。某が存じ候は、迯げまどふ女ばら老少をいはず、引きくゝりて俘となし、陣中につなぎ置き、高札を出して、身の代を出し候者には返しつかはすべく觸れ知らせ候はば、親に離れ子に別れ候者ども、財を惜まず持來りて、贖ひとりて歸り候はんず。さらんには、陣中の人々居ながら過分の財を得候ならずや」といへば、袴垂手を打ちて、「あはれいしくも申されつるかな。此計我心にかなひたり。昨日までは顔よき女ばらをのみ奪ひて、各にわかち與へて、閨の伽となさせつれど、今日よりは老少美悪のきらひなく生捕りて、軍中に繋ぎおくべし」とて、其旨三軍に觸れ知らせ、身價に隨ひて生捕の賞あるべしと言ひわたしければ、賊勢こぞりて、「たやすき事かな、女ばらの二十人三十人からめうことは、干潟の貝を拾はうより易かりなん。繋ぎ置きて涯分の賞に預らん」とて、いさみ喜びけり。其頃袴垂は、伊勢國鈴鹿山に籠り居けるが、猶近國を惱まし財寶を集むべしとて、賊等をわかちて國々につかはしければ、伊勢、尾張、美濃、近江の百姓等、恐れまどひて、男は田かへす事を止め、女は機おる業をすてて、ひたすら戸を閉ぢてぞ守り居りける。其頃近江國神崎郡神崎の里に、橘

袴垂—此盜人の事、今昔物語、宇治拾遺物語等に出づ

婦人の仁—施すに足らざる小惠をいふ

多の賊をしたがへ、都鄙をいはず、白晝にもおし入りて人の物を奪ひけり。後々は勢つきて、五六百騎引連れて、甲冑を著弓矢鉾など携へて歩み連れたる樣、さながら武將の追討使蒙りて、よそほしく出でたち給へるに異ならず。この賊等國々におしわたり、國司を追出し官物を押しとり、民家の美女を奪ひ、或は寺社を燒きはらひなどして、狼藉いふ計なく振廻ひければ、公家より官兵をつかはし是を攻め給へども、はかぐ\しき事なく、かへりて賊徒の爲に兵器を奪はれ、あかはだかに成りて迯歸る者のみぞ多かりける。此保輔があざ名を袴垂と呼びて、其頃の人いたく怖ぢおそれけるとぞ。一日保輔盜人等を集め、酒宴していひけるは、「今はこゝろ安し。味方かく大軍に成りぬれば、齊明と牒じあはせ、不日に都に攻入りなん。但我軍中兵粮多からず、汝等兵を富ます良策ありや」といへば、調伏丸といふ者進み出でていひけるは、「こはかしこき御諚でこそ候へ。古語に、三軍いまだ動かざれど糧草まづ行くと申して候へば、餉をまうけ候事、第一の軍謀にて候。我ともがらとても盜賊の名をとり、凶殘を以て威をかゞやかし候ふうへは、姑息の愛、婦人の仁など顧み申すべきならず。調伏丸が存知には、軍勢の至るところ豪民の家に打入り、財寶牛馬、ある限り奪ひとり候ひなんには、糧に事闕くこと候ふ

しともいふ
かやうーきやつ

すぎ〳〵ー次々

天祿ー圓融天皇の御代の年號

るひつゝ、猶おとしたる物もぞあると、そこらさぐり見れど、竹にて作りたる弓鉾、又は紙にて作りたる鼓人形など、棺の底に殘りたるのみにて、錢に代ふべき物もなければ、頭かきて立上らんとするに、腰をつよく打ちをりければ、立上る事かなはず、兒が足駄の二つのこりたるを左右の手に持ちて、ゐざり這に這ひて、おのが住家をさしてぞ行きける。そも此旅人いかなる者にて、斯くあやふき所に來あひて、兒をたすけけるにか、又此兒が行末いかに生立ちぬらん。おまへ達詳しきゆゑよしを探り知らんとならば、のどかにすぎ〳〵の巻を開きて御覽じ知り給へかし。

○せいがいは

さても其後、花山院の御代にあたりて、藤原の保輔といふ者ありけり。左京大夫致忠の四男にて、保昌朝臣の弟なりけり。又右兵衞尉齊明といふ者あり、是は保昌朝臣の兄齊光が子にてぞ有りける。此兩人力つよきのみならず、横ざまなる事をほしいまゝになして、人を殺し財を奪ふ事などを常としければ、保昌朝臣、天祿の初に公家へ奏聞を經て、兩人とも勘當して追ひ逐はれけり。それより兩人語らひあはせて、盗賊の大將と成りて、數

なえ〳〵くたくた—勢の拔けたる貌

無慙—恥知らず

がごぜ—奈良の元興寺の鬼道場法師に退治られし故事より、小兒の戲に、恐しき顏して「がごぜにかまきう」と云ひて人を威す事ありし也、げごぜ、げごう

人兒をふところより出して、樹の根にすゑ置きて、さぐり寄りて乞食を捕へんとす。乞食は、ころびたる所に鍬のありけるを取りて、兒が泣く聲を目當に、樹ある方に寄り來て、旅人の頭と思ふあたりをちやうど打つ。あまりに高くふり上げて打ちければ、此鍬兒にもあたらず、いたづらに樹の片枝を裂き折りつ。旅人此音を聞くより、得たりやおうと叫びて、左の手をのべて乞食が腰かいつかみ、右の手に襟をとらへて、かいふつて投げければ、ふた〳〵と成りて彼塚穴の中へおち入りぬ。かたゐはなえ〳〵くた〳〵となりて、起上るべくもあらず。旅人は乞食をも知らず、又かの兒をふところに押入れ、包背に負ひて大聲に云ひけるは、「力業、はやわざなどきしろひ爭はんには、おのれらに負くべきかは。無慙の盜人やつめ」と、あざけり笑ひて、啼きいる兒の背うちたゝきつゝ、「がごぜ〳〵」と言ひ〳〵て、のどかに歩みてぞ過行きける。乞食は、塚穴に投げ入れられて、棺の角にて腰を打ちさきて、しばし絶入りけるが、やう〳〵人心地つきて、穴を這ひ出でて見るに、有りし包もなく、兒も旅人もいづち去にけん見えず。「さるにてもかやつ腰刀をばいかで拔かざりけん。拔きたらんにはま二つにこそせられめ。いかなれば身のかろき事飛鳥のごとく、力さへ強かりし、世には恐ろしき者こそありけれ」と、舌をふ

しやつ―きやつ
松―松明
高ばひ―尻を高くして這ふこと
あからめもせず―側見もせず

引きぬかんとするに、世には思はずなる事こそありけれ、兒が死骸ふたゝび息出でて、聲をあげて泣出しぬ。しやつ甦りけるにこそ、打殺してくれんずとて、鍬ふり上げて立ちかゝりけるに、いかにしけん傍なる石につまづきて、のけざまに轉びたふれぬ。見つこは口惜しとて、ふたゝび起上らんとする時、あなたより松ともして來る人あり。見つけられなば惡しかりなんとて、高ばひに這ひて森の中に入りて伺ひ居るに、旅人と見えて菅笠きて、太刀横たへ、脛高くかゝげたる男の、松ふりつゝ來るが、包の捨てあるを見て驚きて、頭うちかたむけて立ち居たるほど、此兒しきりに泣出しければ、又これに驚きて、松照して塚穴を覗き見て、やがて手さしのべて兒を抱き取りけるに、いよ〳〵頻に泣きければ、し侘びてふところに押しくゝみつ。乞食は、いかにするにかとあからめもせずまもり居れば、此旅人彼包を背におひて立上るにぞ、乞食大にあわてて、森をはしり出でて、包に手をかけて引きければ、旅人はのけざまにかへりぬ。此時手に持ちたる松を投げすてければ、火消えてあやめも見えず。旅人、盜人ござんなれとて、起上りけれど、暗くてさだかに見えず。乞食、兒の泣く聲をしるべにねらひ寄りて、旅人が腰かいつかみて投げんとす。旅人疾く身をひらきてければ、乞食はうつぶしに倒れぬ。旅

をさなさよ—幼さよ

心の闇—心のまよひ

て斯く命みじかきものを授けさせ給ひけるにか、諸こそ、育てんこと難かるべしと宣ひしは、あらかじめ死にうせなんことを告げ給ひつるなれ。さるを心もえず日を過しけるをさなさよ」とて、母は現心もなく泣きまどひて、絶入る事度々なり。父も、「今は人まじはりせんも物憂し。仕をかへして、心やすき山里にかき籠りてん」などいふを、親しき人々さま〴〵に諫めこしらへけれど、やらん方なき悲しさの日々にいやまさりぬるぞ、げにわりなき心の闇とは知られける。此船岡山といへるは、亡人ををさめ葬る所にて、さびしく物すごきわたりにて、晝だに人氣まれなれば、まして夜に入りては往來するものもなし。何となき木草の露さへ、異所には似ずきらめきわたり、木ぶかき松の風は、野寺の鐘に響をあらそふ。天狗こだまなどいふ物も、斯るわたりにこそ所得て住みわたるべかンめれ、いと〳〵物おそろしく、うとましげなるさかひなり。此日宵闇の小暗きに、垢つき破れたる衣に、筵まとひたる乞食の、鍬うちかたげ出來りて、そこら打見まはしつゝ、季光が子を葬りたる塚のもとに來りて、鍬とりてうがち掘る。とかくして掘りあばきて土かきよけて、棺の蓋をひらき、衣服調度など取出して、包につゝみて持行かんとせしが、をさな子の死骸の腰に、何やらん物の見ゆれば、さるべき寶にこそとて、立寄りて

船岡—山城愛宕郡

世の中を何にたとへんし　順

「世の中を何にたとへん秋の田をほのかに照す宵のいなづま」

どには、さまで其しるしもあらはれざれど、身あつく堪へがたげに見ゆ。父母あわて驚きて、醫師請じて藥をこひ、讀經祓などさま〴〵にしあつかひけれど、かひなくて、五日ばかり過して、午の時頃にはかなく成りぬ。父はあまりの事に、涙だにこぼさであきれ居たり。母はなきがらにひし〳〵と抱きつきて、かきくどきて泣く。家のうち老少となく、聲を擧げてひとつに泣合ひたり。季光しばしためらひて、目うちたゝきて云ひけるは、「今はかひなし。むなしき骸を守り居らんは、なか〳〵に胸ふたがるわざなれば、疾く葬送の用意すべし。彼が衣服玩器の類、いさゝか留め置くべからず。金銀珠玉の類なりとも、彼が手に觸れたらんかぎりは悉く棺にをさめて、葬り物せよ」といふ。妻、「今宵野邊におくらんはあまりに俄なり。明日こそ」といへど、夫頭うちふりて、「否、死にけるものよと思ひて、しばしもかたへに添ひ居らんは、腸を斷つ思ひすれば、疾く出し立てよ」といふ。家の長などかたの如く用意して、その日の暮方に、船岡のあたりに舁行きて、うづめ葬りけり。「世の中を何にたとへんと順朝臣の詠みたりしも、かゝる時にこそ」といひて、父母はさらなり、親族の人々みな一所にこぞり居て、顔におほひたる袖引きはなつ人だになし。「さるにても、初瀨の觀音の夢にさへ入り給ひて、など

うるせき心—かはゆき心
調度—身廻りの手道具
ひゝな—人形
ふりつゞみ—振りて鳴す鼓

れんことは安かりなん」と宣ふ。妻此事のいぶかしければ、猶問ひ奉らんとするほど、雲霧のはるゝやうに見えずなりたまひぬ。さて目さめて感涙とゞめあへず、山をくだりて京に歸りつきぬ。日數經るほどに、身たゞならず成りて、あたる月といふに、やすらかに子を生みつ。男子にしも有りければ、季光喜ぶことおほかたならず。親族の限りつどひ來てよろこび祝ひ、かしましき迄とよみさわぐ。この子みめ優れてよかりければ、愛丸と名づけて、夫婦手のうちなる玉のごとく思ひいつくしみ、なで養ひけり。ほどなく一年の日數たちて、愛丸誕生の日に成りぬ。季光うるせき心より、愛丸がもてあそぶ調度はもとよりにて、笏文房の具などならべ置きて、愛丸を中にすゑて、いづれをか取るとうち守り居けるに、愛丸ゐざりて、笏を取りて喜びて放さず。季光うち見て、「此兒百玩の雜器に目をかけず、笏を取りたるは、ゆくすゑ我家の榮え見すべき兆なり」とて、大きによろこびて、卽ち宴席を設けてうちあげ祝ひける。これより愛丸、片時笏を放さず、ひゝな、ふりつゞみなどは、手にだに取らず、ひたすら笏を取りてぞ遊びける。うまれつきさとく賢かりければ、乳母などもいみじき物に思ひて、もてはやしけり。其年も暮れて、愛丸三といふ年に成りけるに、思ひかけず疱瘡を病みてくるしみける。顏な

近江縣物語

巻之一

○ふなをか

今は昔村上の御時、藤原の季光といふ人ありけり。白河のほとりに家居つくりて住みけり。兄は源の滿仲朝臣につかへて、仲光とぞいひける。此季光弓馬の道にかしこく、智勇兼備へしことは、兄仲光にもおとらざりけり。常に子のなき事を愁ひ思ひけるが、妻なりけるもの思ひおこして、忍びて初瀬にまうでて歎き祈りける。願文御燈など奉りて、御佛の右の方なる局に入りて、終夜誦經して、曉の頃しばしまどろみぬと思ふほど、あたりまばゆきまで輝きわたりければ、驚きて見あげたるに、たふとき法師の幼き兒をかき抱き立ちおはして、「此みどり子賜ふなり。されど育てん事かたかるべし。養は

初瀬―大和國磯城上郡長谷の觀音

樂を舞ひ、安世が重代の貨とせる鎧を取返す事。

第十一　うどんげ

此卷は、嵯峨左衛門伊勢の國なる袴垂が陣に向ひて賊營を燒く事、賴光の館にて父子對面の事、西念法師物語の事、梅丸近江掾に成りて子孫繁昌せる事。

此卷は、常人、金剛二郎といふ盜人の案內して叔父の家に入りて、物ぬすまんとしてからめられ、さて命たすけられて金剛がもとを逃出でて、近江なる安世が家に歸りきて、財あまた掘出し、そこの主となる事を記す。

第八　袋のうば

此卷は、盜賊うばひ取りし女房を、やす川にてひさぎ賣る時、常人梅丸、ともに薗生を買取らんとて來りて、あらぬ物を求めて歸る事、又梅丸嫗がすゝめにて薗生を買ひとり、家に歸りける夜、盜人入來て、薗生連れ行かんとせし所へ、安世來合ひてとりかへし、梅丸に對面する迄を記す。

第九　石山寺

此卷は、安世梅丸をともなひて、賴光朝臣に目みえさせける時、梅丸、飛鳥を射て落す事、それより保昌のもとに行きて、盜賊退治せんとて出陣する事。

第十　田村將軍

此卷は、保昌、近江なる齊明をほろぼす、梅丸智計の事、梅丸常人が家に至りて、田

忍び居たるに、嵯峨の左衛門といふ者感じて引連れて、尾張へ下る事を記す。

第四　草まくら

此巻は、橘安世が家盗賊入来て、狼藉に及び、娘園生をうばひ行く事より、嵯峨の左衛門、梅丸を養子となし、都へ出でたゝせやる事、梅丸途中盗人の家に泊りて、安世が家の婢をたすけて、常人が悪事をはじめて知る事。

第五　山のとね

此巻は、夜叉丸といふ盗人園生を妻にせんとして、園生がはかりごとにおちいる事、梅丸法師の命をすくひ、共に都にのぼり行く事を記す。

第六　ひはぎのうひ山ぶみ

此巻は、常人盗賊に降参して、山だちとなり、盗賊共を欺きてかへりて恥辱に及び、風呂の湯をたく事迄を記す。

第七　いもがしら

近江縣物語目錄

第一　ふなをか

此卷は、藤原の季光が妻、初瀨に祈りて子を設けけるに、其子はかなくなりければ、葬送しけるに、乞食の來て墓を掘りうがちける時、其子よみがへりけるを、旅人來逢ひて乞食をなやまし、子をひろひて取り行きし事を記す。

第二　せいがいは

此卷は、藤原保輔、同齊光、强盜となりしおこりより、橘安世が弟子坂上梅丸藝能いみじかりければ、婿にせんといふを、同じ弟子なる常人といふ者ねたみて、さまざまの姦計を用ひたるにより、梅丸亡命して、遠江國に下らんとする迄を記す。

第三　すのまた川

此卷は、梅丸すのまた川に泊りけるに、盜人なりとて人に恥かしめられしを、こらへ

たはらいたく痴がましけれど、御とぎにさぶらひて、口ふたげてあらんも不用に侍るめればと言ひつゝ、柿しぶに染めたる團扇ふた〳〵と打ちつかひて、そも〳〵とわなゝかし出でたる、かれ聲にてしはぶきがちなるも古代なる物から、さすがに節々とりどころある心地すめれば、やがてふところ紙取出て、だみ言のまゝに記しつけつ。此頃某のあるじ來りて、めづらかなる物語書きつゞり與へてよと乞ふ。ことさらに筆とらんも物憂くて、此ふみとり出でて遣しつ。いかに聞きひがめたる誤ども多かりなんかし。

六　樹　園

近江縣物語序

ひとゝせ近江國にまかりて、月ごろとゞまり居りけるに、山里ながら小家たちならびて、訪ひ來る人すくなからず。折りから秋雨しめやかに降りてさう〳〵しかりければ、旅のあはれも例ならず覺え居たるに、人々入り來てうち語らふ。いづれも〳〵こちなくかたはなる事のみさへづり言ふめれば、聞き入るべうもあらぬなかに、いと〳〵神さびたる翁のあくびうちして、かたへに寄り居て、斯くいひ〳〵の果々はとうち誦したるが、何となく恥かしげなれば、翁のわたりにこそ興ある物語は侍るめれ、すこし宣はせよといへば、などてか年老いくちて侍れば、何事も皆わすれて侍り、その中に、むかし此國の縣におはしける人の、御みづから書きのこし給へる書とて、近き頃まであたり近き御寺にこそ傳へて侍りしか、此寺燒けて後は、片はしをだに聞き知れる人も侍らず、たゞ翁のみその仔細は知りて侍りといふ。打聞くよりわりなうゆかしさ添ひて、さし寄りてそゝのかせば、翁すげみたる口ひゞらかして、かの雲林院の菩提講にまゐりあへりし翁どものまねびせんも、か

吉原十二時

下

都の手ぶり

狂文吾嬬那萬俚

下

しみのすみか物語

上

石川雅望集　目錄

所あるが如きは、亦寔に止むを得ざる所也。

吉原十二時は二六時中に於ける遊客遊女の姿態を描寫せるものにして、其各時に於ける特色を概敍し、次に作者の選に係る幾多の狂歌を載せ、各卷軸に自作一首を掲げたるもの也。

德川平民文學に交渉する所最も多大なりし北里の情景を窺ふべく、最も恰當なるものの一也。

以上何れも流布の版本に據り、本文庫の一般方針に從ひて嚴密に校訂し、插畫の趣深きものをも併せ覆刻し、更に難語句に對する二三の略註を其鼇頭に加へたり。

本書の校訂と校正とは專ら椿強祐氏の力に成れり。特に記して謝意を表す。

大正四年五月　　　　　　校訂者　塚　本　哲　三

語れるまゝを記錄せるものといひ、夙高亭高行の跋文には、其名蓋し萬葉集の「青みづらよさみの原に人もあはぬかも石走る淡海縣の物語せむ」といふ歌に取れるならんといへり。文平明典雅にして愛誦すべし。

飛驒匠物語は一代の名工墨繩の技術の幾多傳奇的なる話說に配するに、仙界より人間に下生せる一少年と一姬宮との戀物語を以てせるものにして、その戀物語の材料は、自序に言へるが如く、專ら竹芝寺の緣起に取れるが如し。文の優麗なること前者に優れり。

しみのすみか物語は今昔物語の類に倣ひ、幾多の奇聞、逸話を彙集したる小話集にして、內容變化に富み、文また擬古文としての妙を極めたる物といふべし。

都のてぶりは一種の隨筆にして、江戸の人情風俗を味ふべき絕好の文字也。

吾嬬那萬俚は彼が狂文の集にして、宿屋飯盛としての雅望の技量を窺ふべきもの、その古今の故事名文等を巧に點綴せるは、彼が最も得意の壇場とする所なれども、其これあるが爲めに創作的色彩の乏しきを致し、此種の文に最も必要なるべき圓轉酒脫の妙味に缺くる

緒　言

石川雅望の述作中最も主要なるもの六種を擇び、題して『石川雅望集』といふ。

石川雅望は江戶の人、畫家石川豐信の子にして、字を子相、通稱を五郎兵衞といひ、六樹園と號せり。狂名を宿屋飯盛といふ。其始め旅館として相當に有福なりしが、後其筋の嫌疑を受けて江戶拂となり、多摩郡府中に住し、後には居を內藤新宿さては靈岸島にトして、狂歌の點者をなしつゝ、深く心を和學の硏鑽に潛め、純粹の國學者としても、源註餘滴、雅言集覽の如き、堂々たる著述少なからず。而もその最も認むべき一大特色は、甚深なる和學の造詣を戲文の上に傾倒して、巧に優雅艶麗なる擬古の文字を行り、和漢の故事名文を操縱して、當時の人情風俗を描寫し、又狂歌狂文小說等を作れる點にあり。今本書に採錄したる六書の略解題を示す事左の如し。

近江縣物語は、藤原の保輔、同齊光といへる大强盜に配するに、佳人蘭生、才子梅丸、さてはその讎仇常人を以てせる一篇の物語にして、其序文には、近江の閑居にして一老人の

石川雅望集

全